茨城県教育財団文化財調査報告第54集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(I)

柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ－1区

平成元年9月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第54集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(I)

柴崎(しばさき)遺跡Ⅰ・Ⅱ－1区

平成元年9月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人　茨城県教育財団

序

つくば市は，昭和62年４町村が合併して誕生しました。つくば市はわが国の最先端をゆく国や民間の研究機関をここに集中的に誘致し，教育・研究機関と関係ある工業団地の導入，更には，そこで働く人々の住宅団地の造成をはかり，「職･住近接」をめざして，日々整備されつつあります。その一環として，住宅・都市整備公団は，つくば市柴崎地区に工業団地の造成をすすめております。その予定地内に柴崎遺跡は所在しております。

財団法人茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び，昭和62年４月から発掘調査を実施しております。

本書は，昭和62年度に調査を行った柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ区分に関する報告書であります。この調査により，多くの遺構・遺物が検出され，つくば市の古代史を解明する上で多大の成果をあげることができました。

本書が，研究の資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深め，ひいては教育・文化向上の一助として，広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である住宅・都市整備公団，茨城県教育委員会，つくば市教育委員会はじめ，関係各機関及び関係各位の御指導・御協力に対しまして，心より感謝の意を表します。

平成元年９月30日

財団法人　茨城県教育財団

理事長　礒　田　　勇

例　言

1　本書は，住宅・都市整備公団の委託により，財団法人茨城県教育財団が昭和62年度に発掘調査を実施した茨城県つくば市（旧桜村）に所在する柴崎遺跡Ⅰ区及びⅡ－1区の調査報告書である。

2　柴崎遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		川又友三郎	～昭和63年5月
〃		礒田　勇	昭和63年6月～
副理事長		礒田　勇	～昭和63年3月
〃		小林　元	昭和63年4月～
常務理事		滑川貞雄	～平成元年3月
〃		小林　洋	平成元年4月～
事務局長		坂場庸克	～平成元年3月
〃		一木邦彦	平成元年4月～
調査課長		青木義夫	～平成元年3月
〃		石井　毅	平成元年4月～
企画管理班	班長	水飼敏夫	昭和62年4月～
	主任調査員	山本静男	～平成元年3月
	〃	小河邦男	平成元年4月～
	係長	園部昌俊	昭和63年4月～
	主任	山崎初雄	～平成元年3月
	主事	富永　明	昭和62年4月～昭和63年3月
	〃	大部　章	昭和61年4月～
	〃	吉井政明	平成元年4月～
調査第一班	班長	沼田文夫	昭和62年度
	主任調査員	柴　正	昭和62年4月～昭和63年3月調査
	〃	中根節男	昭和62年4月～昭和62年6月調査
	〃	和田雄次	昭和62年4月～昭和62年6月調査
	〃	高村　勇	昭和62年4月～昭和63年3月調査
			昭和63年4月～平成元年9月整理・執筆
整理班長		沼田文夫	昭和63年度
〃		加藤雅美	平成元年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，高村　勇が執筆・編集を担当した。

4　発掘調査に際し，茨城県立歴史館の川井正一氏に御指導をいただいた。

5　本書で使用した記号等については，第3章第1節を参照されたい。

目　次

序
例言
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査方法 …… 2
　第3節　調査経過 …… 4
第2章　位置と環境 …… 7
　第1節　地理的環境 …… 7
　第2節　歴史的環境 …… 8
第3章　柴崎遺跡Ⅰ区 …… 13
　第1節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法 …… 13
　第2節　竪穴住居跡 …… 19
　　1　古墳時代の住居跡 …… 19
　　2　奈良・平安時代の住居跡 …… 76
　　3　時期不明の住居跡 …… 220
　第3節　土坑 …… 225
　第4節　掘立柱建物跡 …… 227
　第5節　地下式坑 …… 229
　第6節　井戸 …… 233
　第7節　溝 …… 240
　第8節　まとめ …… 255
第4章　柴崎遺跡Ⅱ区 …… 285
　第1節　竪穴住居跡 …… 285
　　1　古墳時代の住居跡 …… 285
　　2　奈良・平安時代の住居跡 …… 297
　第2節　掘立柱建物跡 …… 324
　第3節　まとめ …… 326
終　章　むすび …… 329

挿　図　目　次

第１図　調査区呼称方法概念図 …… 2
第２図　桜地区遺跡位置図 …… 10
第３図　柴崎遺跡調査区 …… 11
第４図　テストピット柱状図 …… 13
第５図　柴崎遺跡Ｉ区遺構分布図 …… 18
第６図　第１号住居跡実測図 …… 20
第７図　第６号住居跡実測図 …… 21
第８図　第６号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 23
第９図　第13号住居跡実測図 …… 25
第10図　第13号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 26
第11図　第14号住居跡実測図 …… 27
第12図　第15号住居跡実測図 …… 28
第13図　第15号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 28
第14図　第18号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 29
第15図　第18号住居跡実測図 …… 30
第16図　第21号住居跡実測図 …… 31
第17図　第21号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 32
第18図　第31号住居跡実測図 …… 33
第19図　第33号住居跡実測図 …… 34
第20図　第33号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 34
第21図　第38・39号住居跡実測図 …… 35
第22図　第38号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 36
第23図　第41号住居跡実測図 …… 38
第24図　第41号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 39
第25図　第46号住居跡実測図 …… 40
第26図　第46号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 41
第27図　第51・54号住居跡実測図 …… 42
第28図　第51号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 43
第29図　第57号住居跡実測図 …… 44
第30図　第57号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 45
第31図　第58号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 46
第32図　第58・59号住居跡実測図 …… 47
第33図　第63号住居跡実測図 …… 49
第34図　第63号住居跡出土遺物
　　実測図(1) …… 50
第35図　第63号住居跡出土遺物
　　実測図(2) …… 51
第36図　第63号住居跡出土遺物
　　実測図(3) …… 52
第37図　第65号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 55
第38図　第65号住居跡実測図 …… 56
第39図　第68号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 57
第40図　第69・70号住居跡実測図 …… 58
第41図　第70号住居跡出土遺物
　　実測図 …… 59
第42図　第74号住居跡出土遺物

実測図 …… 60
第43図　第74号住居跡実測図 …… 61
第44図　第75号住居跡実測図 …… 62
第45図　第75号住居跡出土遺物
実測図 …… 63
第46図　第76号住居跡出土遺物
実測図 …… 63
第47図　第76号住居跡実測図 …… 64
第48図　第90号住居跡実測図 …… 65
第49図　第90号住居跡出土遺物
実測図 …… 66
第50図　第96号住居跡実測図 …… 67
第51図　第96号住居跡出土遺物
実測図 …… 68
第52図　第104号住居跡実測図 …… 70
第53図　第104号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 71
第54図　第104号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 72
第55図　第108号住居跡実測図 …… 74
第56図　第108号住居跡出土遺物
実測図 …… 75
第57図　第112号住居跡実測図 …… 75
第58図　第112号住居跡出土遺物
実測図 …… 76
第59図　第 2 号住居跡実測図 …… 77
第60図　第 2 号住居跡出土遺物
実測図 …… 77
第61図　第 3 号住居跡実測図 …… 78
第62図　第 3 号住居跡出土遺物
実測図 …… 79
第63図　第 4 号住居跡実測図 …… 80
第64図　第 4 号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 81
第65図　第 4 号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 82
第66図　第 5 号住居跡実測図 …… 83
第67図　第 5 号住居跡出土遺物
実測図 …… 84
第68図　第 7 号住居跡実測図 …… 85
第69図　第 7 号住居跡出土遺物
実測図 …… 86
第70図　第 8 号住居跡実測図 …… 86
第71図　第 9 号住居跡実測図 …… 88
第72図　第 9 号住居跡出土遺物
実測図 …… 89
第73図　第10号住居跡実測図 …… 91
第74図　第10号住居跡出土遺物
実測図 …… 92
第75図　第11号住居跡実測図 …… 93
第76図　第11号住居跡出土遺物
実測図 …… 94
第77図　第12号住居跡実測図 …… 95
第78図　第16号住居跡出土遺物
実測図 …… 95
第79図　第16号住居跡実測図 …… 96
第80図　第19号住居跡出土遺物
実測図 …… 97
第81図　第19号住居跡実測図 …… 98
第82図　第20号住居跡実測図 …… 99
第83図　第20号住居跡出土遺物
実測図 …… 100
第84図　第22号住居跡出土遺物
実測図 …… 101

第85図　第22号住居跡実測図 …… 101
第86図　第24号住居跡実測図 …… 102
第87図　第24号住居跡出土遺物
実測図 …… 103
第88図　第25号住居跡実測図 …… 104
第89図　第25号住居跡出土遺物
実測図 …… 104
第90図　第26号住居跡実測図 …… 105
第91図　第27号住居跡実測図 …… 106
第92図　第27号住居跡出土遺物
実測図 …… 107
第93図　第28号住居跡実測図 …… 108
第94図　第28号住居跡出土遺物
実測図 …… 108
第95図　第29号住居跡実測図 …… 109
第96図　第30号住居跡実測図 …… 110
第97図　第30号住居跡出土遺物
実測図 …… 111
第98図　第34号住居跡実測図 …… 112
第99図　第34号住居跡出土遺物
実測図 …… 113
第100図　第35号住居跡実測図 …… 114
第101図　第35号住居跡出土遺物
実測図 …… 115
第102図　第36号住居跡実測図 …… 116
第103図　第36号住居跡出土遺物
実測図 …… 117
第104図　第37号住居跡実測図 …… 117
第105図　第37号住居跡出土遺物
実測図 …… 118
第106図　第39号住居跡出土遺物
実測図 …… 119
第107図　第40号住居跡実測図 …… 120
第108図　第40号住居跡出土遺物
実測図 …… 120
第109図　第42号住居跡実測図 …… 121
第110図　第42号住居跡出土遺物
実測図 …… 122
第111図　第43号住居跡実測図 …… 123
第112図　第43号住居跡出土遺物
実測図 …… 124
第113図　第44号住居跡出土遺物
実測図 …… 126
第114図　第44号住居跡実測図 …… 127
第115図　第45号住居跡実測図 …… 128
第116図　第45号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 129
第117図　第45号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 130
第118図　第47号住居跡実測図 …… 133
第119図　第47号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 134
第120図　第47号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 135
第121図　第48・53号住居跡実測図 …… 137
第122図　第48号住居跡出土遺物
実測図 …… 138
第123図　第49号住居跡出土遺物
実測図 …… 139
第124図　第49号住居跡実測図 …… 140
第125図　第50号住居跡実測図 …… 141
第126図　第50号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 142
第127図　第50号住居跡出土遺物

実測図(2) …… 143
第128図 第52号住居跡実測図 …… 146
第129図 第52号住居跡出土遺物
実測図 …… 147
第130図 第53号住居跡出土遺物
実測図 …… 148
第131図 第54号住居跡出土遺物
実測図 …… 149
第132図 第55号住居跡実測図 …… 151
第133図 第55号住居跡出土遺物
実測図 …… 152
第134図 第56号住居跡出土遺物
実測図 …… 153
第135図 第56号住居跡実測図 …… 154
第136図 第59号住居跡出土遺物
実測図 …… 156
第137図 第60号住居跡実測図 …… 157
第138図 第61号住居跡実測図 …… 158
第139図 第61号住居跡出土遺物
実測図 …… 159
第140図 第62号住居跡実測図 …… 160
第141図 第64号住居跡実測図 …… 161
第142図 第64号住居跡遺物
実測図 …… 161
第143図 第66号住居跡実測図 …… 162
第144図 第66号住居跡出土遺物
実測図 …… 163
第145図 第67・68号住居跡実測図 …… 165
第146図 第67号住居跡出土遺物
実測図 …… 166
第147図 第71・94号住居跡実測図 …… 168
第148図 第71号住居跡出土遺物
実測図 …… 169
第149図 第72号住居跡実測図 …… 170
第150図 第72号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 171
第151図 第72号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 172
第152図 第73号住居跡実測図 …… 173
第153図 第73号住居跡出土遺物
実測図 …… 174
第154図 第77号住居跡実測図 …… 176
第155図 第77号住居跡出土遺物
実測図 …… 177
第156図 第78号住居跡実測図 …… 178
第157図 第78号住居跡出土遺物
実測図 …… 179
第158図 第79号住居跡実測図 …… 180
第159図 第79号住居跡出土遺物
実測図 …… 181
第160図 第80号住居跡実測図 …… 182
第161図 第81号住居跡実測図 …… 183
第162図 第82号住居跡実測図 …… 184
第163図 第82号住居跡出土遺物
実測図 …… 184
第164図 第83・84号住居跡実測図 …… 186
第165図 第83号住居跡出土遺物
実測図 …… 187
第166図 第84号住居跡出土遺物
実測図 …… 188
第167図 第85号住居跡実測図 …… 189
第168図 第86号住居跡実測図 …… 190
第169図 第87号住居跡実測図 …… 191
第170図 第88号住居跡実測図 …… 192

第171図 第88号住居跡出土遺物
実測図 …… 192
第172図 第89号住居跡実測図 …… 193
第173図 第89号住居跡出土遺物
実測図 …… 193
第174図 第91号住居跡実測図 …… 194
第175図 第91号住居跡出土遺物
実測図 …… 195
第176図 第92号住居跡出土遺物
拓影図 …… 196
第177図 第92号住居跡実測図 …… 196
第178図 第95号住居跡実測図 …… 197
第179図 第95号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 198
第180図 第95号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 199
第181図 第97号住居跡実測図 …… 201
第182図 第98号住居跡実測図 …… 202
第183図 第99号住居跡実測図 …… 203
第184図 第99号住居跡出土遺物
実測図 …… 204
第185図 第100号住居跡実測図 …… 206
第186図 第100号住居跡出土遺物
実測図 …… 207
第187図 第101号住居跡実測図 …… 208
第188図 第101号住居跡出土遺物
実測図 …… 209
第189図 第102号住居跡実測図 …… 211
第190図 第102号住居跡出土遺物
実測図 …… 212
第191図 第103号住居跡実測図 …… 214
第192図 第103号住居跡出土遺物
実測図 …… 214
第193図 第106号住居跡実測図 …… 215
第194図 第106号住居跡出土遺物
実測図 …… 215
第195図 第107号住居跡実測図 …… 216
第196図 第110号住居跡実測図 …… 217
第197図 第110号住居跡出土遺物
実測図 …… 218
第198図 第111号住居跡実測図 …… 219
第199図 第17号住居跡実測図 …… 220
第200図 第23号住居跡実測図 …… 221
第201図 第32号住居跡実測図 …… 222
第202図 第93号住居跡実測図 …… 223
第203図 第94号住居跡出土遺物
実測図 …… 224
第204図 第105号住居跡実測図 …… 224
第205図 第109号住居跡実測図 …… 225
第206図 第10号土坑出土遺物実測図 … 226
第207図 第1号掘立柱建物跡出土
遺物実測図 …… 227
第208図 第1・2・4・5・10号土坑
実測図 …… 228
第209図 第1号掘立柱建物跡実測図 … 230
第210図 第1・2・3・4号地下式坑
実測図 …… 231
第211図 第1号井戸出土遺物実測図 … 233
第212図 第5号井戸出土遺物実測図 … 235
第213図 第1・2・3・4・5号井戸
実測図 …… 236
第214図 第6・7・8号井戸実測図 …… 237
第215図 第6号井戸出土遺物実測図 … 239
第216図 第1号溝実測図 …… 241

第217図 第２号溝出土遺物実測図 …… 243
第218図 第２号溝実測図 …… 246
第219図 第３号溝出土遺物実測図 …… 246
第220図 第６号溝出土遺物実測図 …… 247
第221図 第３号溝実測図 …… 248
第222図 第４号溝実測図 …… 249
第223図 第５号溝実測図 …… 251
第224図 第６号溝実測図 …… 252
第225図 第８号溝実測図 …… 253
第226図 第９号溝実測図 …… 254
第227図 Ⅰ期遺構実測図 …… 255
第228図 Ⅰ期住居跡床面積 …… 256
第229図 Ⅰ期住居跡主軸方向 …… 256
第230図 Ⅰ期出土遺物 …… 256
第231図 Ⅱ・Ⅲ期遺構配置図 …… 257
第232図 Ⅱ・Ⅲ期住居跡床面積 …… 258
第233図 Ⅱ・Ⅲ期住居跡主軸方向 …… 258
第234図 Ⅱ期出土遺物 …… 258
第235図 Ⅲ期住居跡主軸方向 …… 259
第236図 Ⅲ期出土遺物 …… 259
第237図 Ⅳ期遺構配置図 …… 260
第238図 Ⅳ期住居跡床面積 …… 261
第239図 Ⅳ期住居跡主軸方向 …… 261
第240図 Ⅳ期出土遺物 …… 262
第241図 Ⅴ期遺構配置図 …… 263
第242図 Ⅴ期住居跡床面積 …… 264
第243図 Ⅴ期出土遺物主軸方向 …… 264
第244図 Ⅴ期出土遺物 …… 264
第245図 柴崎遺跡Ⅱ区遺構分布図 …… 284
第246図 第10号住居跡実測図 …… 286
第247図 第10号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 288
第248図 第10号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 289
第249図 第12号住居跡実測図 …… 290
第250図 第12号住居跡出土遺物
実測図 …… 290
第251図 第15号住居跡実測図 …… 291
第252図 第15号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 293
第253図 第15号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 294
第254図 第16号住居跡出土遺物
実測図 …… 295
第255図 第16号住居跡実測図 …… 296
第256図 第１号住居跡実測図 …… 297
第257図 第１号住居跡出土遺物
実測図 …… 298
第258図 第２号住居跡実測図 …… 299
第259図 第２号住居跡出土遺物
実測図 …… 300
第260図 第４号住居跡実測図 …… 301
第261図 第４号住居跡出土遺物
実測図 …… 302
第262図 第５号住居跡実測図 …… 304
第263図 第５号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 305
第264図 第５号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 306
第265図 第５号住居跡出土遺物
実測図(3) …… 307
第266図 第６号住居跡実測図 …… 309
第267図 第６号住居跡出土遺物
実測図(1) …… 310

第268図 第 6 号住居跡出土遺物
実測図(2) …… 311
第269図 第 7 号住居跡実測図 …… 313
第270図 第 7 号住居跡出土遺物
実測図 …… 314
第271図 第 8 号住居跡実測図 …… 316
第272図 第 8 号住居跡出土遺物
実測図 …… 316
第273図 第 9 号住居跡実測図 …… 317
第274図 第 9 号住居跡出土遺物
実測図 …… 318
第275図 第 3 号住居跡実測図 …… 319
第276図 第11号住居跡実測図 …… 320
第272図 第11号住居跡出土遺物
実測図 …… 321
第278図 第13号住居跡・出土遺物
実測図 …… 322
第279図 第17号住居跡カマド実測図 … 323
第280図 第17号住居跡実測図 …… 323
第281図 第 1 号掘立柱建物跡実測図 … 324
第282図 第 2 号掘立柱建物跡実測図 … 325

写真図版目次（Ⅰ区）

ＰＬ１　発掘前全景，遺構確認状況

ＰＬ２　テストピット土層断面，第１号住居跡，第２・３号住居跡

ＰＬ３　第４号住居跡，第４号住居跡遺物出土状況，第５号住居跡

ＰＬ４　第６号住居跡，第６号住居跡遺物出土状況，第７号住居跡第１号土坑

ＰＬ５　第８号住居跡，第９号住居跡遺物出土状況，第12号住居跡

ＰＬ６　第13号住居跡，第13号住居跡カマド第14号住居跡

ＰＬ７　第18・19号住居跡，第20号住居跡第２号井戸

ＰＬ８　第21・22号住居跡，第21号住居跡遺物出土状況，第22号住居跡第３号井戸

ＰＬ９　第22号住居跡遺物出土状況，第23号住居跡，第24号住居跡の貼り床状況

ＰＬ10　第25号住居跡，第26号住居跡第４号土坑，第27号住居跡

ＰＬ11　第28号住居跡，第28号住居跡遺物出土状況，第29号住居跡

ＰＬ12　第29・30・33号住居跡

ＰＬ13　第35号住居跡，第35号住居跡遺物出土状況，第36号住居跡

ＰＬ14　第37・40・41号住居跡

ＰＬ15　第42～44号住居跡

ＰＬ16　第45・49号住居跡，第46・47号住居跡

ＰＬ17　第47号住居跡遺物出土状況，第48・49号住居跡

ＰＬ18　第50号住居跡，第51・54号住居跡，第52号住居跡

ＰＬ19　第53・55・56号住居跡

ＰＬ20　第57号住居跡，第57号住居跡カマド，第58号住居跡

ＰＬ21　第58号住居跡カマド，第59・60号住居跡

ＰＬ22　第60・62・63号住居跡

ＰＬ23　第63号住居跡遺物出土状況，第63号住居跡カマド，第64・65号住居跡

ＰＬ24　第65号住居跡カマド，第66・67号住居跡

ＰＬ25　第68～70号住居跡

ＰＬ26　第71・72号住居跡，第72号住居跡遺物出土状況

ＰＬ27　第73・74号住居跡，第74号住居跡カマド

ＰＬ28　第75号住居跡，第75号住居跡遺物出土状況，第76号住居跡

ＰＬ29　第77・78号住居跡，第78号住居跡遺物出土状況

ＰＬ30　第79号住居跡，第79号住居跡遺物出土状況，第80号住居跡

ＰＬ31　第81～84号住居跡

ＰＬ32　第85～87号住居跡

ＰＬ33　第88・89・91号住居跡

ＰＬ34　第92号住居跡，第92号住居跡遺物出土状況，第93号住居跡

ＰＬ35　第94～96号住居跡

ＰＬ36　第96号住居跡遺物出土状況，第97号住居跡，第97号住居跡遺物出土状況
ＰＬ37　第98号住居跡，第98号住居跡遺物出土状況，第99号住居跡
ＰＬ38　第100・101・103号住居跡
ＰＬ39　第105～107号住居跡
ＰＬ40　第108号住居跡，第２号土坑，第３号土坑
ＰＬ41　第４～６号土坑
ＰＬ42　第７～９号土坑
ＰＬ43　第10号土坑，第10号土坑遺物出土状況，第１号溝
ＰＬ44　第１号溝土層断面，第２号溝
ＰＬ45　第２～４号溝
ＰＬ46　第５・８号溝
ＰＬ47　第９号，第１号井戸
ＰＬ48　第２～４号井戸
ＰＬ49　第５～７号井戸
ＰＬ50　第１号掘立柱建物跡，第１号掘立柱建物跡遺物出土状況，作業風景
ＰＬ51　作業風景，休息風景
ＰＬ52　出土遺物(1)
ＰＬ53　出土遺物(2)
ＰＬ54　出土遺物(3)
ＰＬ55　出土遺物(4)
ＰＬ56　出土遺物(5)
ＰＬ57　出土遺物(6)
ＰＬ58　出土遺物(7)
ＰＬ59　出土遺物(8)
ＰＬ60　出土遺物(9)
ＰＬ61　出土遺物(10)
ＰＬ62　出土遺物(11)
ＰＬ63　出土遺物(12)
ＰＬ64　出土遺物(13)
ＰＬ65　出土遺物(14)
ＰＬ66　出土遺物(15)
ＰＬ67　出土遺物(16)
ＰＬ68　出土遺物(17)
ＰＬ69　出土遺物(18)
ＰＬ70　出土遺物(19)
ＰＬ71　出土遺物(20)
ＰＬ72　出土遺物(21)
ＰＬ73　出土遺物(22)
ＰＬ74　出土遺物(23)
ＰＬ75　出土遺物(24)

写真図版（II区）

ＰＬ１　第１号住居跡，第1・2号住居跡，第２号住居跡

ＰＬ２　第３号住居跡，第４号住居跡，第５号住居跡

ＰＬ３　第５号住居跡遺物出土状況，第５号住居跡遺物出土状況，第６号住居跡

ＰＬ４　第７号住居跡，第８号住居跡

ＰＬ５　第９号住居跡，第10号住居跡，第11号住居跡

ＰＬ６　第12号住居跡，第12号住居跡遺物出土状況，第13号住居跡

ＰＬ７　第14号住居跡，第15号住居跡，第15号住居跡遺物出土状況

ＰＬ８　第15号住居跡遺物出土状況，第16号住居跡

ＰＬ９　第17号住居跡，第１号掘立柱建物跡，第２号掘立柱建物跡

ＰＬ10　作業風景

ＰＬ11　出土遺物(1)

ＰＬ12　出土遺物(2)

ＰＬ13　出土遺物(3)

ＰＬ14　出土遺物(4)

ＰＬ15　出土遺物(5)

ＰＬ16　出土遺物(6)

ＰＬ17　出土遺物(7)

ＰＬ18　出土遺物(8)

ＰＬ19　出土遺物(9)

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

茨城県つくば市付近は，筑波研究学園都市建設以前は平地林と水田・畑が散在する農村地帯であった。この緑豊かな田園地帯に「研究学園都市」の建設が昭和30年代に計画された。40年代初めから建設工事が進められ，現在は研究・教育機関を核とする高層ビルが林立し，それに関連する工業団地が操業を開始し，そこで働く人々の住宅団地も造成され国際的頭脳都市として生まれ変わろうとしている。

つくば市は，昭和62年11月，筑波郡谷田部町・大穂町・豊里町，新治郡桜村の４町村が合併して誕生した市で，昭和63年１月には筑波郡筑波町が合併し，県南最大の都市として生まれ変わり，近い将来稲敷郡茎崎町の合併も考えられている。

柴崎遺跡は，つくば市の東部，桜地区に所在している。桜村（旧）当局は，昭和50年３月柴崎地区における工業団地造成計画をまとめ，昭和56年８月計画を茨城県に提出した。翌57年，桜村教育委員会は将来の開発に備えて，開発予定地内における埋蔵文化財の分布調査を筑波大学に依頼し実施した。同年11月，村当局は，住宅・都市整備公団に工業団地造成について協力を依頼した。これを受けて公団は，昭和59年４月，茨城県教育委員会に開発予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。茨城県教育委員会は，同年５月に独自に分布調査を実施し，その結果，埋蔵文化財の存在することを確認し，その旨，住宅・都市整備公団に回答した。開発計画が具体化した昭和61年12月，住宅・都市整備公団から茨城県教育委員会に，開発エリア内における埋蔵文化財包蔵地の広がり等についての調査依頼があった。茨城県教育委員会は，直ちに試掘調査を実施し遺跡の範囲を確認し，住宅・都市整備公団に回答した。

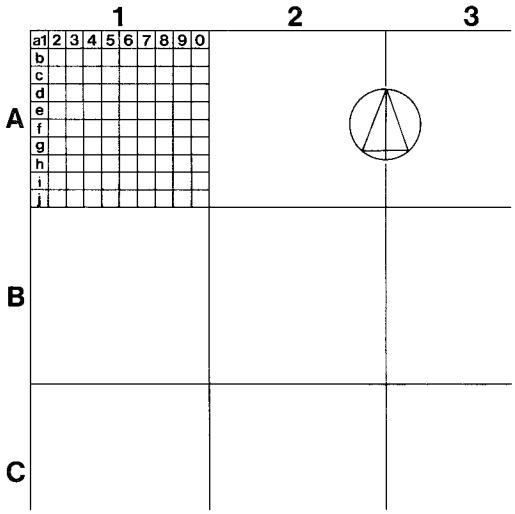
茨城県教育委員会，桜村教育委員会，住宅・都市整備公団の三者で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果，現状保存が困難なため記録保存の処置をとることで一致した。62年２月，茨城県教育委員会は，住宅・都市整備公団に，埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介し，３月，住宅・都市整備公団から茨城県教育財団に，柴崎遺跡の発掘調査の依頼があった。茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団と柴崎遺跡発掘調査について打ち合わせを行い，昭和62年４月１日，柴崎遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び，同年４月から発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査方法

１　調査区設定

発掘調査を実施するにあたり，遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。調査区は日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し，当遺跡においてはＸ軸（南北）11,920m，Ｙ軸（東西）25,360mの交点を基準とし，この基準点から東西・南北にそれぞれ40m平行移動して一辺40mの大調査区を設定した。更にこの大調査区を東西・南北に各々10等分し，４ｍ方眼の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，北から南へ「A」・「B」・「C」……，西から東へ「1」・「2」・「3」……とし，「A1区」・「B2区」と表記した。小調査区も同様に北から南へ「a」・「b」・「c」……「j」，西から東へ「1」・「2」・「3」…「0」とし，位置を表示する場合は大調査区と合せて，「Alb_2」・「$C2e_2$」のように表記した。



第１図　調査区呼称方法概念図

２　遺構確認

遺構確認は，調査面積の８分の１にあたる小調査区を発掘する方法により，遺構の確認を試みた。その結果，土師器や須恵器の破片とともに，住居跡や溝と思われる落ち込みが確認された。また，表土の厚さは30～60cmであることも判明した。この試掘結果をふまえ，遺跡全面の表土除

去をすることにした。表土除去には重機を利用したが，遺跡が２地区に分れていること，遺跡内にまだ耕作している畑が残っていることなどを考え，２回に分けて実施した。重機で除去したあとを追うように，人力による遺構確認を行い，住居跡や溝，井戸等を確認した。遺跡の中央部はやや高く，周辺部は低くなるが，この低い部分はローム層がほとんどなく，粘土質の褐色土が堆積していた。

3　遺構調査

住居跡の調査は，土層観察用ベルトを十文字に設定して掘り込む四分割法を原則とした。分割した地区の表記は，北東部を１区とし，以下時計回りに２・３・４区とした。なお，平面プランが明確でないものや，覆土がほとんどなくベルト設定が困難な住居跡については，南北あるいは東西に二分割した。この場合は，北側あるいは東側を１区とし，残りを２区とした。土坑については，長軸方向で二分割し，地区名は住居跡の表記に準じた。掘立柱建物跡については，柱痕跡あるいは柱掘方が一直線に連続するようなラインを設定し，このラインに沿って二分割して掘り込んだ。井戸及び地下式坑については，土坑のそれに準じた。溝については掘り込まれている方向が様々であるため，適宜土層観察用ベルトを設定して掘り込みを実施した。

土層については，色調・含有物・締まり具合・粘性等を観察し分類した。色調の決定にあたっては，「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄著　日本色研事業株式会社）を使用した。遺物の取り上げは，出土位置・遺物番号・レベルを図面あるいは台帳に記録した。遺構の観察は，埋土の堆積状況・床面・壁・柱穴・カマド等について留意した。遺構の実測については，平面図は水糸を１ｍ方眼に地張りして計測し，土層及び遺構断面図は水糸を適度なレベルに水平に張り，計測した。遺構番号は，調査した順に番号を付した。

第３節　調査経過

柴崎遺跡の調査は，昭和62年４月１日から63年３月31日までの１年間であった。以下，調査経過の概要について記述する。

（昭和62年）

４月　発掘調査を開始するための諸準備を行う。現場事務所や倉庫の設置，進入路や駐車場の確保，作業員募集等を実施した。

５月　６日に作業を開始し，翌７日には発掘調査の円滑な推進と安全を願い，鍬入式を挙行した。式典には，公団や村当局の関係者及び地元作業員等が参加した。その後，遺跡内の山林の伐開作業を開始した。伐開作業は下旬までかかったが，中旬から試掘調査を並行して進めることにした。なお，試掘は，遺跡面積の16分の１に相当する４ｍ方眼の小グリッドを掘り下げた。

６月　前月に引き続き，試掘調査を実施した。地表面には土器片等は少なかったが，試掘の結果，土師器や須恵器の破片，住居跡や溝と考えられる落ち込みが確認できたため，中旬より重機を導入して表土除去を実施することにした。ただ，遺跡内には，麦やたばこを耕作している畑があるため，除去可能な地域を先行し，残りは収穫を待って行うことにした。

７月　重機による表土除去を続けると同時に，遺構確認作業を開始した。地面が乾燥してしまうため，確認作業は連続して実施した。前述の作業を行いながら，中旬から住居跡の調査を開始した。調査は遺跡の南端より始め，下旬までに約10軒の調査が終了した。遺跡の南端部は粘土質のため，雨が降ると水はけが悪く，掘り込むのに大変苦労した地域である。

８月　住居跡の調査は，20番台から30番台に進んだが，炎天下のきびしい作業が続いたこともあり，作業員の出勤数が落ち込み，それを補充するため学生アルバイトを採用し調査を進めた。

９月　遺構は大部分が住居跡であるが，調査が進むに従い溝や土坑，掘立柱建物跡や井戸跡などの存在も確認された。井戸の調査は掘り込むほどに水が出てくるため，排水ポンプを使用したこともあった。下旬には，前回耕作のため表土除去のできなかった地域に重機を導入し，表土除去を開始した。９月は，主にＩ区の表土除去を行った。

10月　10月は，主にII区を中心に表土除去を実施した。60番台までの住居跡を調査しながら，II区の遺構確認作業も行った。

11月　11月に入ると寒さも厳しくなり，朝は霜柱を見ることが多くなってきた。しかし，調査にはそれほど影響はなく，80番台の住居跡まで調査を終了させた。遺跡の性格等を明確にするため，茨城県立歴史館の川井正一氏を講師として招き，班内研修会を実施した。

12月　寒さも益々厳しくなり，作業状態は非常に悪くなってきてきたが，調査は順調に進み100番台の住居跡まで終了した。悪条件の中で比較的順調に調査が進行したことのひとつに，小型

の住居跡が多く検出されたことが挙げられる。特に，炉もカマドもなく２本の柱穴を有する住居跡は一辺２～３ｍしかなく大変小型であった。調査は25日まで実施し，翌26日から１月４日までは正月休業日とした。

（昭和63年）

１月　５日から調査を再開した。住居跡の調査は110番台まで進み，中旬までにＩ区の調査はほぼ終了した。引き続きII区の遺構調査を開始したが，Ｉ区の土坑や溝が未調査のため，II区の調査と並行して調査を進めた。II区で確認されていた遺構はほとんど住居跡であり，下旬には，調査の中心はII区に移った。

２月　Ｉ区では土坑や溝，II区では住居跡を中心に調査を進めていったが，Ｉ区で土坑と考えられた遺構のうち４基が地下式坑であることがわかった。また，II区では小規模な掘立柱建物跡が２棟検出された。下旬には遺跡の航空写真撮影に備えて，Ｉ・II区全体の清掃を行った。26日に航空写真撮影が終了した。

３月　Ｉ・II区とも遺構調査はほとんど終了し，補足調査を実施した。また，これまでに作成した図面類の点検・修正，遺物の洗浄・注記等の作業を行った。５日には現地説明会を実施し，100名近い見学者があった。その後も前述の作業や，遺跡内の危険箇所（井戸等）の埋め戻しを行い，25日に関係機関等への挨拶を済ませ，一切の調査を終了した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

柴崎遺跡は，つくば市大字柴崎字反町177に所在し，常磐自動車道･桜土浦インターチェンジの北北西約７㎞の地点に位置している。当遺跡は，Ⅰ～Ⅲ区に分かれ，Ⅰ区とⅢ区の境界付近には鹿島神社がある。鹿島神社の社域は保存地域となっている。遺跡全体からみると，Ⅰ区は南側，Ⅱ区は北側，Ⅲ区は東側で，Ⅰ区は鹿島神社の西側の地域であり，昭和62年度の調査は，Ⅰ区1,7441㎡，Ⅱ区5,281㎡の計22,722㎡を実施した。

遺跡の所在するつくば市は，昭和62年11月に，谷田部町・桜村・豊里町・大穂町の４町村が合併して誕生した，茨城県で最も新しい市で，63年１月には筑波町も編入し，５町村から成るつくば市が成立した。柴崎遺跡の調査は，62年４月に開始しており，当初は旧桜村に所在していた遺跡である。こういった事情から，旧桜村を「桜地区」と呼称して記述することにする。

つくば市は茨城県の南部に位置し，東には霞ケ浦，北には紫峰筑波山を仰ぎ見る風光明媚な地域である。この付近は小貝川と桜川の間に展開する平坦な台地となっており，筑波・稲敷台地と呼ばれ，台地上は畑か平地林として利用されている。また両河川に接する低地部は水田として利用されている。自然に恵まれた土地であるため，昔から農業が中心であったが，昭和40年代から始った筑波研究学園都市の建設により，大きな変貌を遂げつつある。現在では学園都市の中心部はほぼ完成し，周辺地域の開発・整備が着々と進みつつある。

桜地区は，つくば市の南東部に位置しており，土浦市・新治村に接している。桜地区の西側部を，学園東大通りに沿うように，霞ケ浦に流入する花室川が南東に流下し，桜地区の東部新治村との境を桜川が同じく南東に向かって流下している。両河川の間には，標高20～30mの平坦な台地が北西から南東へ舌状に延びている。当遺跡は花室川の沖積地になだらかに傾斜する台地上に所在し，花室川を挟んで広大な敷地を有する筑波大学が位置している。遺跡周辺は，標高25mほどの台地になっており，桜川との比高は20m，花室川との比高は１～２mであり，桜川･花室川の沖積地は水田となっている。遺跡中央部は，平地林・芝畑・麦畑として利用されている。

参考資料

「筑波研究学園都市計画図」　住宅・都市整備公団研究学園都市開発局　昭和61年
「桜村歴史マップ」　桜村教育委員会　昭和61年

第2節　歴史的環境

桜地区には，先土器時代の遺跡は確認されず，確認されているのは縄文時代以降の遺跡である。遺跡の大部分は花室川の東側から桜川を見おろす東部の台地上にかけて集中し，他に，南部にもわずかに確認されている。桜地区の西部をほぼ南北に走る学園東大通りの西側の地域には，現在までのところ1か所も確認されていない。ここでは，確認されている主な遺跡について時代を追って述べることにする。

縄文時代の遺跡は，13か所確認されている。この中でよく知られている遺跡として，旭台貝塚(12)と下広岡遺跡(36)がある。旭台貝塚は桜地区における唯一の貝塚で，桜川右岸の台地上に位置している。発掘調査は行われていないが，桜村史によると貝層は表土下30cmのところにあり，30～40cmの厚さと推定されている。採集された貝は，アカニシ・ハマグリ・ヤマトシジミ等で，出土土器からみて後期から晩期にかけての貝塚と考えられる。下広岡遺跡は花室川右岸にあり，常磐自動車道の建設に伴い茨城県教育財団が昭和53年から54年にかけて調査を実施し，中期の住居跡が86軒検出された。遺跡からは多量の土器のほか，石器やパン状炭化物などが出土している。

弥生時代の遺跡としては，西坪遺跡(21)，古来遺跡(28)，大角豆遺跡(34)等が確認されている。これらの遺跡は，弥生式土器が採集されている程度で，調査は行われていない。柴崎遺跡(9)も弥生時代の遺跡として周知されていたが，今回の調査では該期の遺構は検出されず，しかも一片の土器も出土しなかった。

古墳時代の遺跡は，比較的多く確認されている。特に，柴崎遺跡の東方1.3kmの地点に所在する天神塚古墳(7)は，全長約80mの前方後円墳である。同規模の前方後円墳として，金田古墳がある。金田古墳は全長75m，後円部径35mの大きさで，長さ90cmの直刀や石棺の破片等が出土している。桜地区には23基の古墳が残っているが，その大部分は桜川を東に臨む台地端部に造営されている。この時期の集落跡としては，土器屋遺跡(17)，沼向遺跡(1)等が知られている。

奈良・平安時代の遺跡としては，布目瓦や礎石，蔵骨器が出土した九重廃寺跡(16)，総柱の掘立柱建物跡や焼米が出土した河っ内郡衙跡(20)，条里跡が残る本田遺跡(22)などがある。条里跡は他にも上ノ室条里があったが，現在では堙滅してしまった。

城館跡として，金田城跡(19)，上ノ室城跡(27)，花室城跡(25)等がある。これらの城館跡は小田氏と深い関連をもっており，上ノ室城跡は吉原備前守の，また花室城跡は大津長門之助貞兼のそれぞれ居城であったと言われている。

以上のように，桜地区には古代から中世にかけての多くの遺跡が所在しているが，調査例は比較的少ないことから，今回の柴崎遺跡の調査は貴重な資料のひとつとなるものと思われる。

参考資料

「桜村史　上巻」桜村教育委員会　昭和57年

「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会　昭和62年

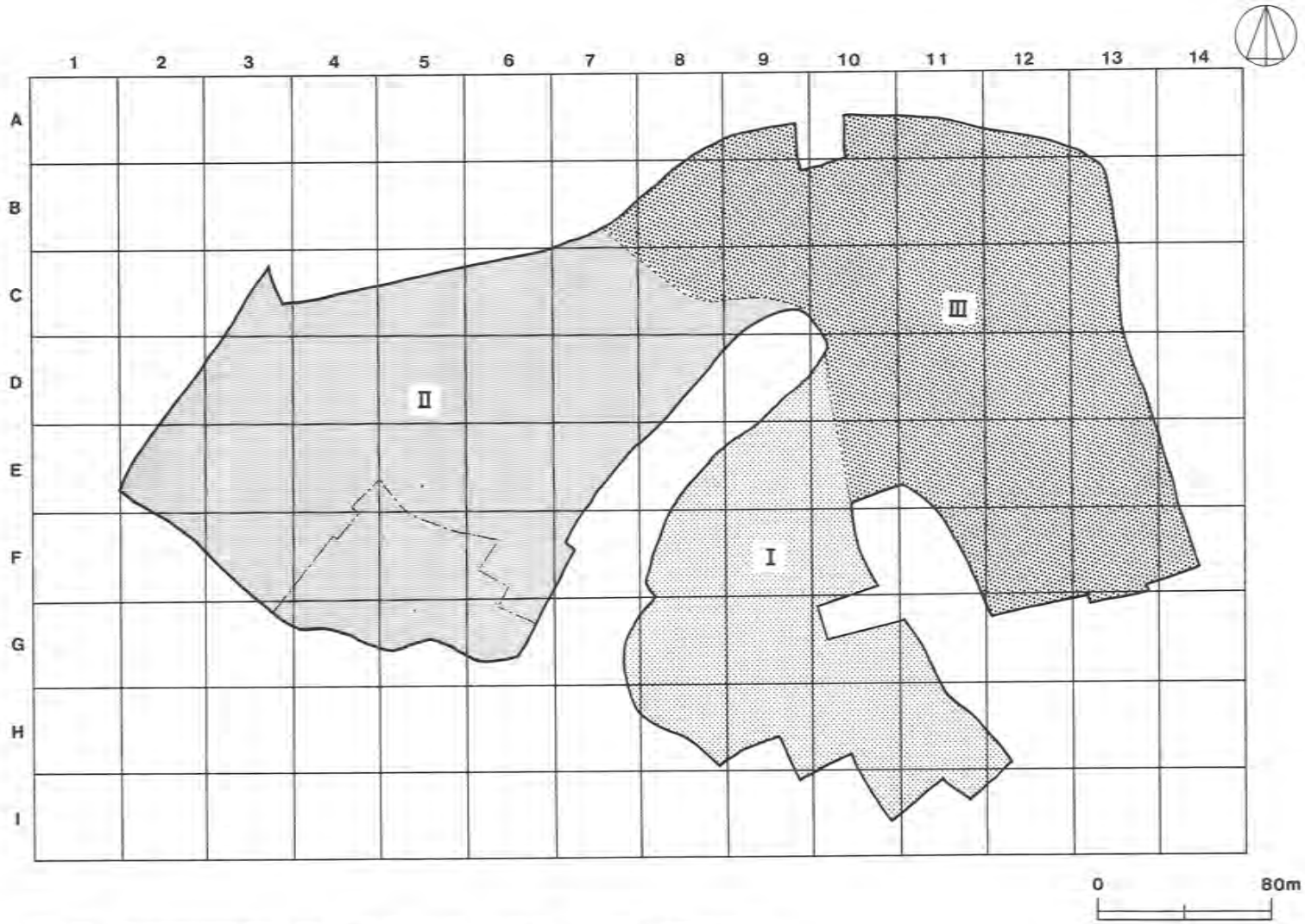
「茨城県教育財団文化財調査報告ｘ」茨城県教育財団　昭和56年

「柴崎地区埋蔵文化財分布調査報告書」桜村教育委員会　昭和62年

一覧表

図中番号	遺跡名	時代				図中番号	遺跡名	時代			
		縄文	弥生	古墳	奈･平以降			縄文	弥生	古墳	奈･平以降
1	沼向遺跡			○		19	金田城跡				○
2	古塚古墳			○		20	河内郡衙跡				○
3	才十郎遺跡	○				21	西坪遺跡		○		
4	愛宕塚古墳			○		22	本田遺跡				○
5	十日塚古墳		○			23	松塚古墳群			○	
6	大山遺跡	○		○		24	花室遺跡	○	○		
7	天神塚古墳			○		25	花室城跡				○
8	天神遺跡	○		○		26	上ノ室条里跡				○
9	柴崎遺跡	当遺跡				27	上ノ室城跡				○
10	滝の台古墳群			○		28	古来遺跡		○		
11	どんどん塚古墳		○			29	明神の門遺跡			○	
12	旭台貝塚	○				30	大日塚古墳			○	
13	中根遺跡			○		31	東古墳群			○	
14	西坪台古墳群			○		32	鹿島様古墳			○	
15	とりおい塚古墳			○		33	倉掛遺跡			○	
16	九重廃寺跡				○	34	大角豆遺跡		○		
17	土器屋遺跡			○		35	千現塚古墳			○	
18	金田古墳			○		36	下広岡遺跡	○			

第２図　桜地区遺跡位置図



第３図　柴崎遺跡調査区（Ⅰ区…62年度，Ⅱ区…63年度，Ⅲ区…平成元年度）

第3章　柴崎遺跡Ⅰ区

第1節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1　遺跡の概要

柴崎遺跡は，縄文式土器片や土師器片が散布している遺跡として周知されていた。今回の調査結果からは，奈良・平安時代の集落跡が主であることが明らかになった。縄文式土器片も出土したが，遺跡中央部から北寄りにかけてごく少量が出土したにとどまり，遺構等は検出されなかった。他に古墳時代後期の住居跡も検出されている。調査した遺構数は次のとおりである。

竪穴住居跡	112軒（古墳時代～平安時代）
土坑	5基（時期不明）
掘立柱建物跡	1棟（平安時代）
地下式坑	4基（中世）
井戸	8基（奈良・平安時代以降）
溝	8条（時期不明）

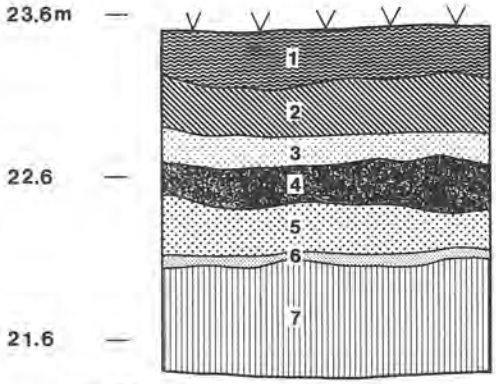
これらの遺構は，遺跡の全域に分布しているが，住居跡はエリア中央部と南東部に比較的集中する傾向がうかがえる。土坑や溝は，エリア全域に散在して確認された。遺跡の北西から南西方向の周辺部からは，遺構は検出されなかった。これはエリアの中央部と比較して0.5～1mほど低くなり，かつ，粘土層に近い土質で排水性も悪かったためかと思われる。

当遺跡からの出土遺物は，土師器・須恵器が主である。遺物の大部分は破片であるが，器種のわかるものとしては，土師器・須恵器とも坏が最も多く，他に甕，鉢，甑，皿などがある。土器以外の遺物としては，土製品（支脚・紡錘車等），鉄製品（鎌・刀子・釘等），石製品（砥石）などが出土している。

2　遺跡の基本層序

遺跡は比較的平坦であったが，中央部がやや高く，周辺部は中央部よりも0.5～1mほど低くなっており，さらに周辺部より1～2m下がった地点は水田として利用されている。

基本層序を調査したテストピットは，遺跡の中央からやや西寄りの第36号住居跡の東側の地



第4図　テストピット柱状図

点である。1・2層は後世の撹乱を受けており，炭化粒子やローム粒子が混入した層で，厚さは両層とも30～40cmである。1層は黒褐色，2層は暗褐色を呈し，ともに比較的硬く締まっている。3層は厚さ30cmで，明黄褐色を呈し，硬く締まっている。4層はやや黒味を増した黄褐色の層で，通常ブラックバンドと呼ばれている層である。4層の厚さは，30cmである。5層は明黄褐色の層で，大変硬く締まり，下部には粘土ブロックが混入している。5層の厚さは，30～35cmである。6・7層は粘土層であり，非常に硬く締まっている。6層は浅い黄灰色で6～10cm，7層は明るい青灰色を呈している。テストピットは確認面より2.2m掘り下げたが，5層と6層の境い目より出水するため，7層でとめた。したがって，7層の厚さは不明であるが，6層下部から70cmまでは確認できた。

3　遺構・遺物の記載方法

本書では，遺構・遺物の記載に際して，下記の要領で統一した。

（1）使用記号

住居跡……SI　土坑……SK　掘立柱建物跡……SB　溝……SD　井戸……SE

ピット（柱穴）……P_1・P_2～　実測土器……P　土製品……DP　拓本土器……TP

石器・石製品……Q　金属製品……M　瓦……T　木器・木製品……W

（2）遺構・遺物実測図中の表示

（3）土層の分類

当遺跡で検出された遺構の土層の観察については，「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社）を使用し，次のように分類し，記号化した。なお，各土層に含まれる含有物については繁雑化を避けるため，本文中で説明した。

番号	土色名	色相	明度／彩度
1	黄褐色	2.5Y	5/3
		10YR	5/6
	にぶい黄褐色	10YR	4/3　5/3　5/4
	明黄褐色	10YR	6/6
2	褐色	7.5YR	4/3　4/4　4/6
		10YR	4/4　4/6
	にぶい褐色	7.5YR	5/3　5/4
	明褐色	7.5YR	5/6

3	暗　褐　色	7.5YR	3/3	3/4		
		10YR	3/3	3/4		
	極暗褐色	7.5YR	2/3			
4	黒　褐　色	7.5YR	2/2	3/1	3/2	
		5YR	2/2			
		10YR	2/2	2/3	3/2	
5	赤　褐　色	2.5YR	4/6	4/8		
		5YR	4/6	4/8		
	にぶい赤褐色	5YR	4/3	4/4	5/3	
		2.5YR	4/3	4/4	5/3	5/4
	明赤褐色	5YR	5/6	5/8		
		2.5YR	5/6			
6	暗赤褐色	5YR	3/2	3/3	3/4	3/6
		2.5YR	3/2	3/3	3/4	3/6
	極暗赤褐色	5YR	2/3	2/4		
		2.5YR	2/2	2/3	2/4	
7	赤　色	10R	4/6			
	暗赤色	7.5R	3/4			
8	灰　褐　色	7.5YR	4/2			
		5YR	5/2			
9	オリーブ褐色	2.5Y	4/3	4/4	4/6	
	暗オリーブ褐色	2.5Y	3/3			
10	灰黄褐色	10YR	4/2			
11	灰オリーブ色	5Y	5/3			
12	灰　黄　色	2.5Y	6/2			
13	灰　赤　色	2.5YR	4/2	5/2		
14	黒　色	10YR	1.7/1			
		7.5YR	1.7/1	2/1		

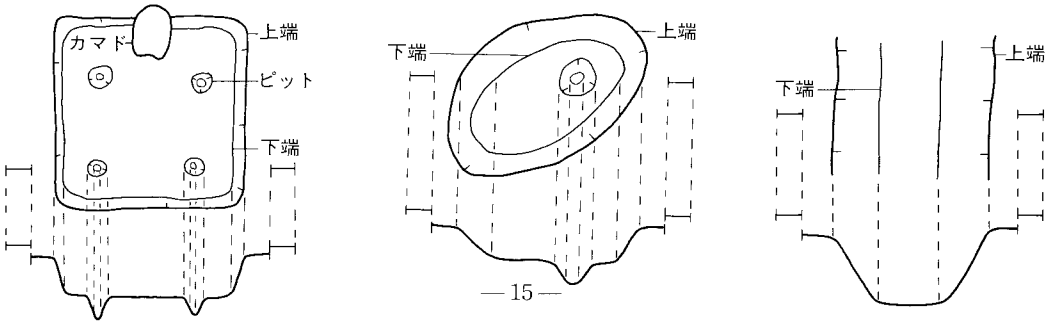
（4）遺構実測図の作成方法と掲載方法

○　各遺構の実測図は，原則として縮尺20分の1の原図を，カマドは10分の1の原図をそれぞれトレースして版組みし，さらに3分の1に縮小して掲載した。

○　溝については，縮尺50分の1の原図を，適宜縮小して掲載した。

○　水糸レベルは，同一レベルの場合に限り1か所の表示で表し，それ以外は個々に掲載した。単位はメートルである。

○　土層の観察状況については，人為的な堆積状況が認められた場合のみ，その旨を記し，自然堆積の場合は，特に記述はしなかった。



（５）遺物実測図の作成方法と掲載方法

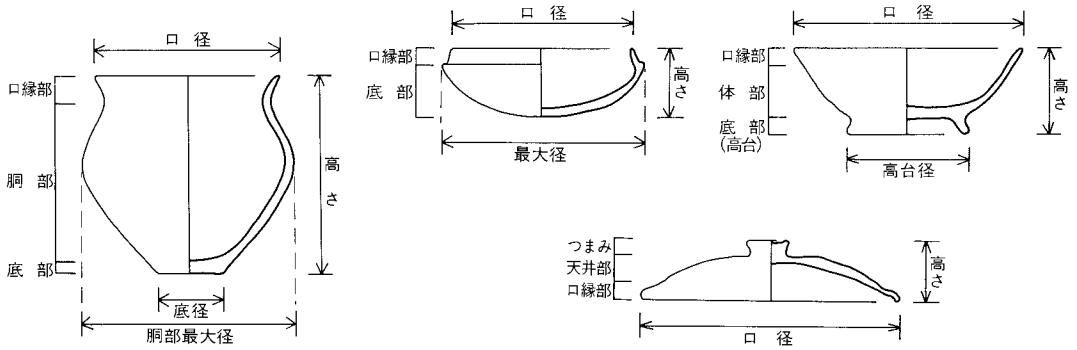
○　土器の実測図は，中心線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。

○　土器拓影図は，須恵器の叩き目と底部の調整痕を採拓し，叩き目については実測図の外面部に，底部については実測図の下側に，それぞれ図示した。

○　須恵器の断面は黒く塗りつぶし，土師器と区別した。

○　土器の内・外面を黒色処理した遺物は，黒色部分にスクリーントーンを使用した。

○　遺物は，原則として，実測図を３分の１に縮小して掲載した。しかし，遺物の種類や大きさにより，それ以外の縮尺を使用した場合もある。



（６）表の見方について

〔住居跡一覧表〕

番号	位置	主軸方向	平面形	規　　模		壁面	床	カマド	時期	備　　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					

○　位置は，グリッド名で表示し，２か所以上のグリッドにまたがる場合は，遺構の占める割合の多いグリッド名を表示した。

○　主軸方向は，座標北をＮ－0°とし，東（Ｅ）・西（Ｗ）に何度傾いているかを表示した。なお，カマドを有する住居跡ではカマドを通るラインを，カマドがなくピットのみの住居跡ではピットの並ぶラインを，それぞれ主軸とした。

○　平面形は，長軸と短軸の差が，長軸の10パーセント以内の場合は方形に，それ以上の差がある場合は長方形とした。

○　壁面は，床面からの立ち上がり角度が76°～90°を垂直，75°以下を外傾とした。

○　カマドは，造られている壁の方向を表示した。カマドがなく，床面に炭化物等の堆積が認められた場合は，「炭化物」と表示した。

○　備考には，切り合い関係や床面積，特記事項等を記入した。

〔土坑一覧表〕

番号	位　置	長径(軸)方向	平 面 形	規　　模		壁面	底面	備　　考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			(出土遺物)

○　表示については，住居跡の表に準じた。

〔出土遺物観察表〕

図版番号	器　　種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備　　考
		A 〜 E				

○　番号は，図版中の番号である。

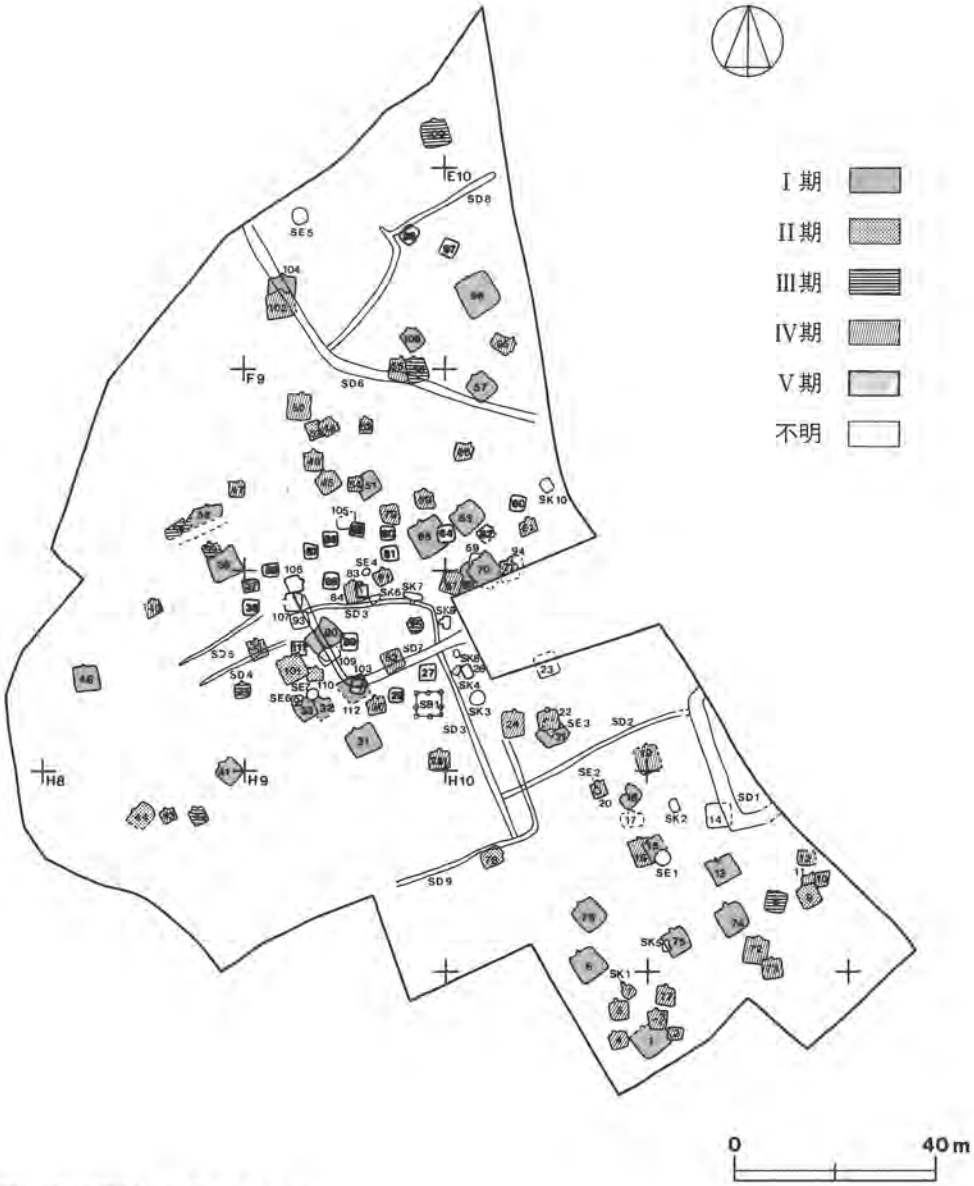
○　法量は，A－口径，B－器高，C－底径，D－高台径，E－胴部（体部）最大径とし，（　）を付した数値は，推定値又は現存値である。

○　色調については土色帳を使用し，焼成については硬く焼き締まっているものは良好，焼きがあまく器面がザラザラで剝落しているものを不良とし，その中間のものは普通とした。また，火災等で2次的な焼成にあっていると思われるものは2次と表示した。

○　備考は，残存率等を記した。

（7）その他

○　出土遺物の写真に付した番号は，遺構番号－実測図版中の番号とした。例えば，15－3の場合は，第15号住居跡出土遺物で，実測図版中の№3の遺物を表わしている。



第5図　柴崎遺跡 I 区遺構分布図

第2節　竪穴住居跡

当遺跡から検出された住居跡は112軒であるが，遺構確認面から床まで浅いものが多く，住居跡によっては床が露呈しているものもあった。したがって，遺物の出土もそれほど多くなく，図示できる遺物も少量である。住居跡の時期は，古墳時代から平安時代までであり，奈良時代以降の住居跡が多い。また，カマドや炉をもたず，柱穴が原則として2本の小型の住居跡が20軒以上検出されたのは，当遺跡の特徴といえる。

1　古墳時代の住居跡

第1号住居跡（第6図）

本跡は，I11d_1区を中心に確認された住居跡で，第2・3号住居跡と重複している。重複している2軒の住居跡は，本跡の床を切って掘り込まれており，本跡が最も古いものである。

遺構確認の段階で，壁を全て消失してしまい，詳細は不明である。確認できたのは，ピット5か所，南と西側の壁溝，火床部等である。壁溝は，上幅15～25cm，深さ2～4cmである。5か所のピットのうち，P_1・P_2・P_4・P_5は位置から判断して，主柱穴であろうと思われる。それぞれの径は38～56cm，深さは13～52cmである。本跡の位置が遺跡内でも低い地点にあるため，P_2・P_3の壁は粘土層に達している。カマドは北壁中央部に構築されていたと思われるが，火床部しか検出できなかった。火床部は，長径120cm，短径55cmの楕円形を呈し，深さ10cmである。

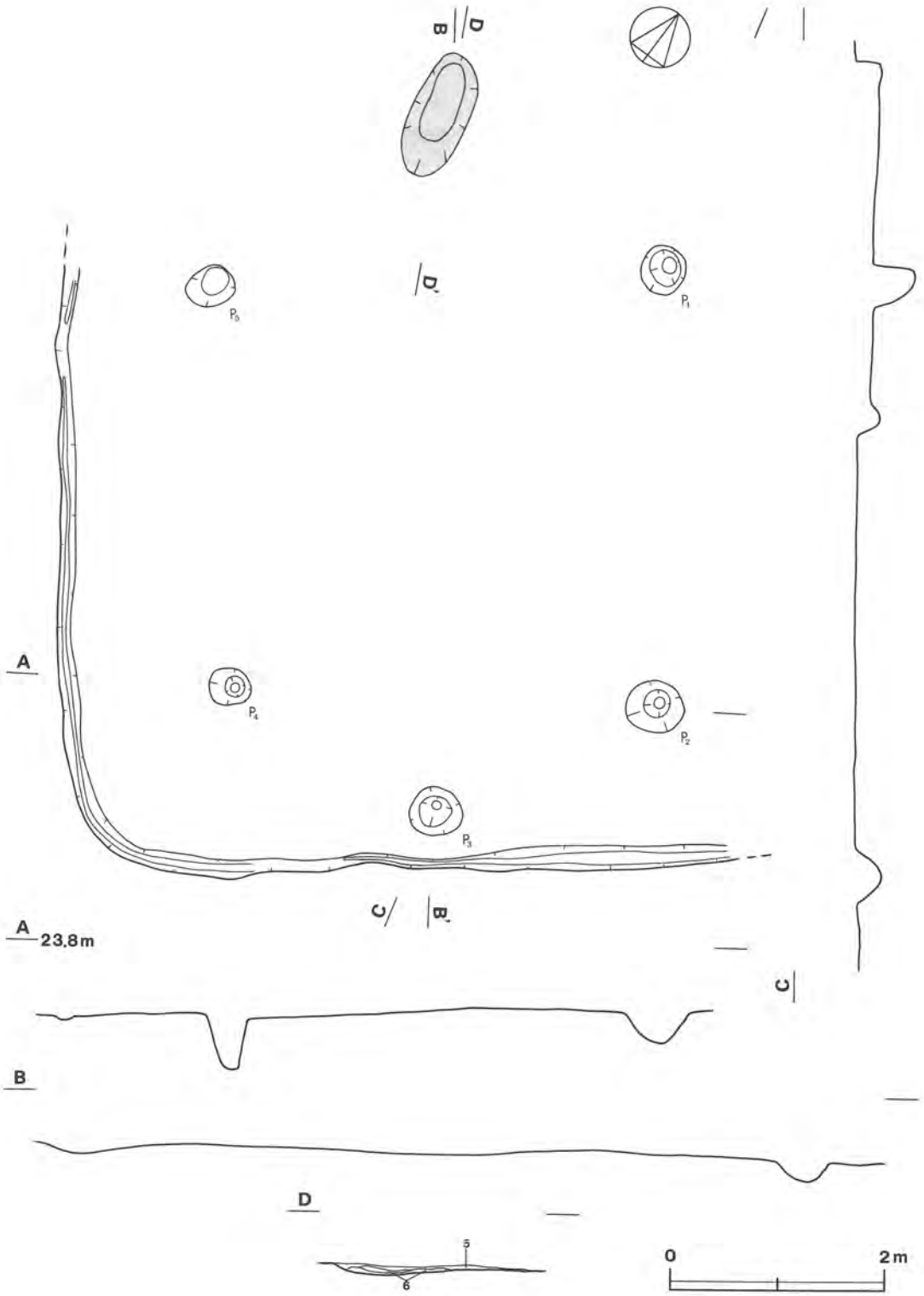
覆土は観察できなかった。

遺物は出土していない。

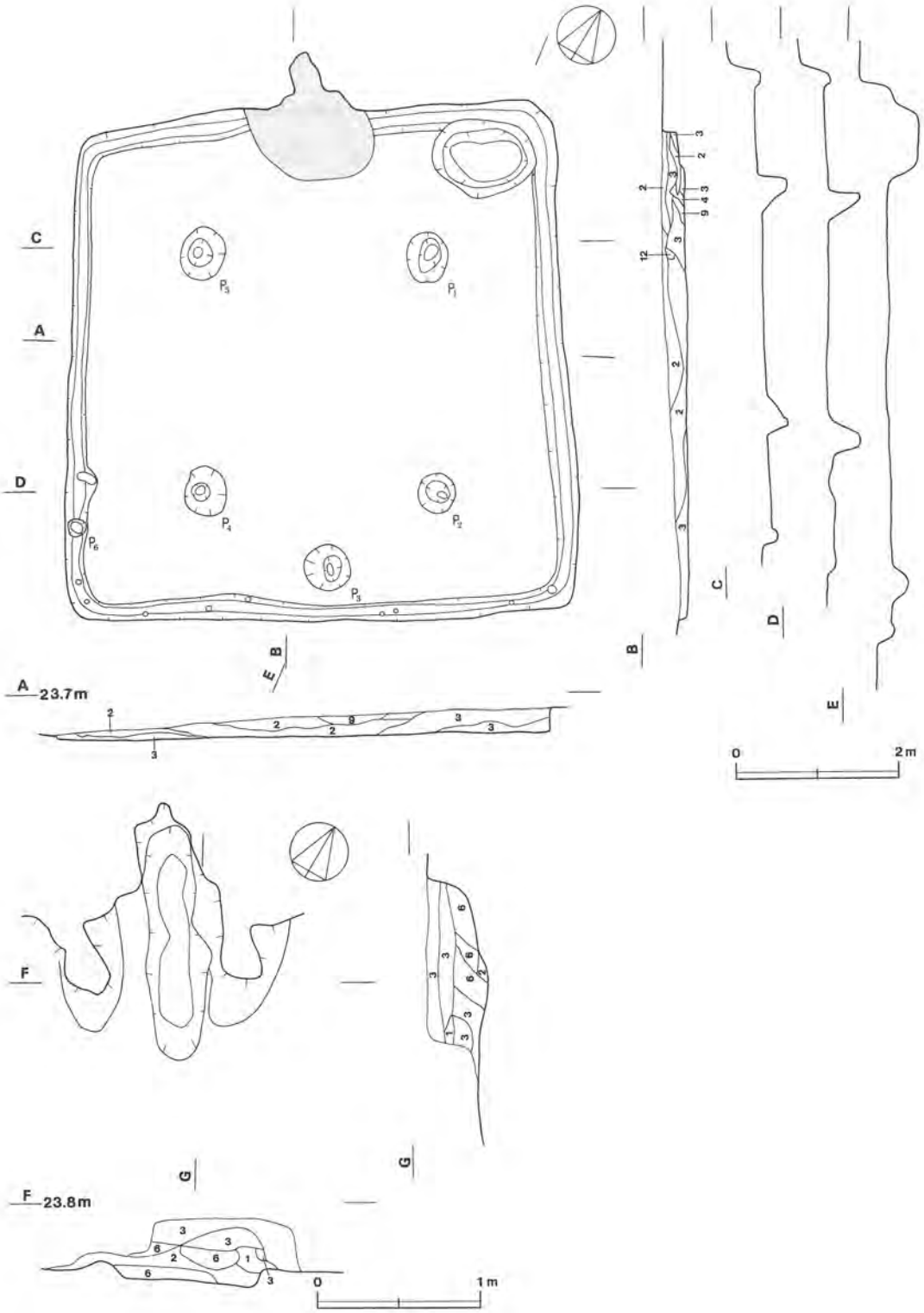
第6号住居跡（第7図）

本跡は，H10j_7区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸6.34m，短軸6.12mと比較的大型で，主軸方向は，N－32°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは14～25cmである。壁溝は全周しており，上幅15～25cm，深さ10～15cmである。南側の壁溝内には径5cm前後の小ピットが，数か所検出されている。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，5か所検出され，位置からみてP_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と思われる。主柱穴は断面がすり鉢状で，長径50～65cm，短径50～55cm，深さ31～42cmである。カマドは北壁中央部に山砂で構築され，両袖が70cmぐらい残っている。火床部は，床を10cm掘り下げてあり，煙道は，外側に50cm張り出している。北東コーナー部に，貯蔵穴が設けられている。長



第6図　第1号住居跡実測図



第７図　第６号住居跡実測図

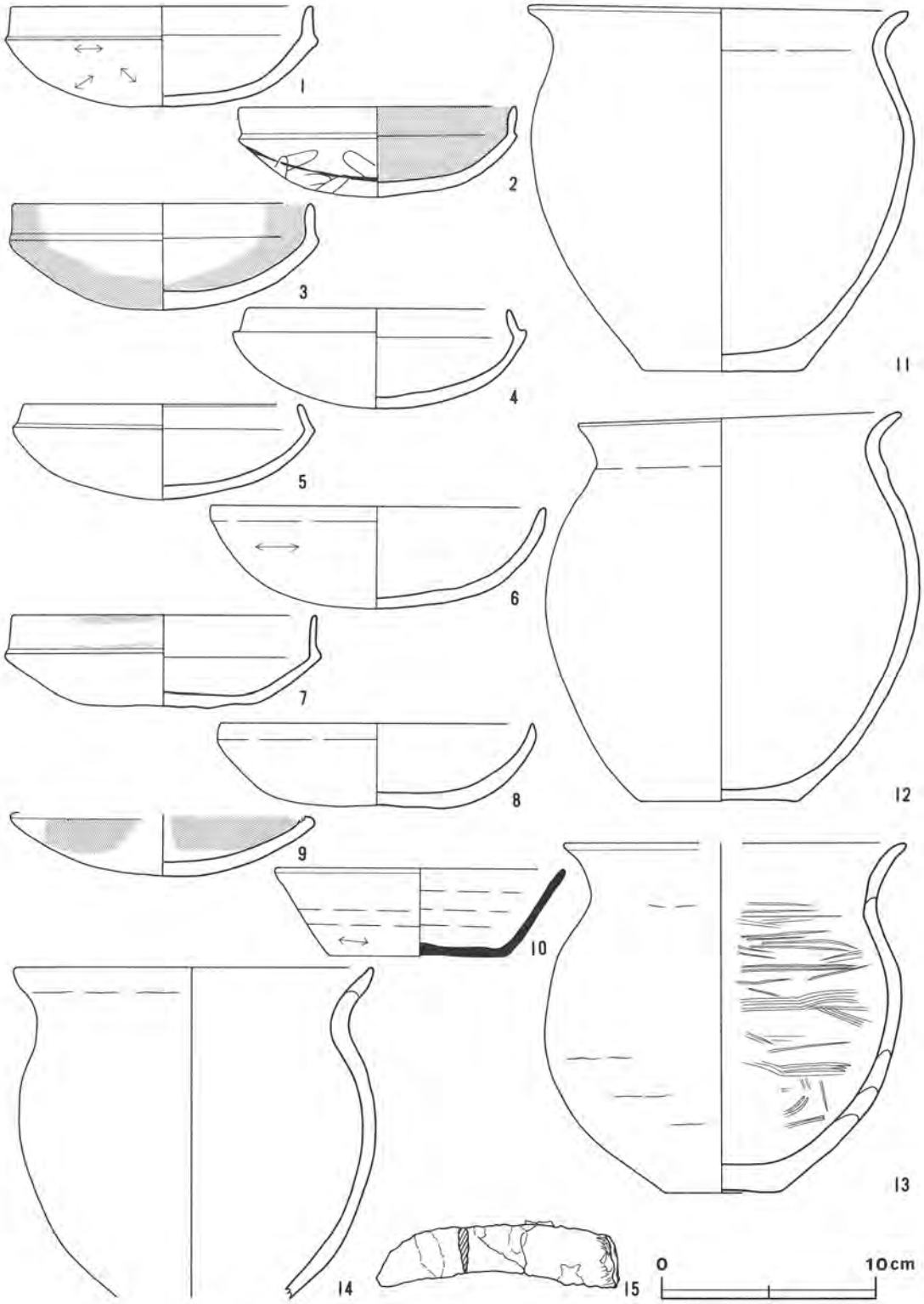
径1.3m，短径0.9m楕円形を呈し，深さは33cmである。

覆土は大きく3層に分けられる。上位2層はハードロームブロックと焼土粒子を少量含む褐色土，下層はローム粒子を少量含む暗褐色土である。3層とも硬く締まっている

遺物は，土師器の坏（1,2,3,4,5,6,7,8）8点が床面，カマド内，及び貯蔵穴内から，須恵器の坏（10）が床面からそれぞれ出土している。他に，支脚片，鉄製品，土師器・須恵器片345点が出土している。

出土遺物観察表（第8図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 14.0 B 4.7 E 14.8	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・砂粒 にぶい黄橙色 普通	100%
2	坏 土師器	A 12.9 B 4.2 E 13.1	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。底部には重ね焼きの痕跡が半円形に残る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	パミス・スコリア にぶい黄橙色 良好	100% 器内面と口縁部外面は黒色処理
3	坏 土師器	A 14.1 B 5.0 E 14.6	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	90%
4	坏 土師器	A 12.4 B 4.6 E 13.8	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・長石・石英・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	90%
5	坏 土師器	A 13.1 B 4.5 E 14.7	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・石英・砂粒・スコリア 灰褐色 普通	90%
6	坏 土師器	A 15.5 B 4.7	底部は丸底で，なだらかに口縁部に至る。口縁部は短く，直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・砂粒 にぶい黄橙色 普通	100%
7	坏 土師器	A 14.3 B 4.4 E 14.8	底部は扁平な丸底で，接地部は平坦である。底部と口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。口縁部外面に黒色処理の跡が残存する。	スコリア・石英 浅黄橙色 普通	80%
8	坏 土師器	A 14.8 B 4.0	底部は扁平な丸底で，なだらかに口縁部に至る。口縁端部は尖る。	底部はヘラ削り，器内面上位は横ナデ，下位はヘラナデ調整。	スコリア 灰褐色 普通	90%
9	坏 土師器	A 14.3 B 3.0	底部は扁平な丸底で，口縁端部は内側にかるくつまみ出されている。	底部はヘラ削り，口縁部内面は横ナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	60% 器内・外面黒色処理



第8図　第6号住居跡出土遺物実測図

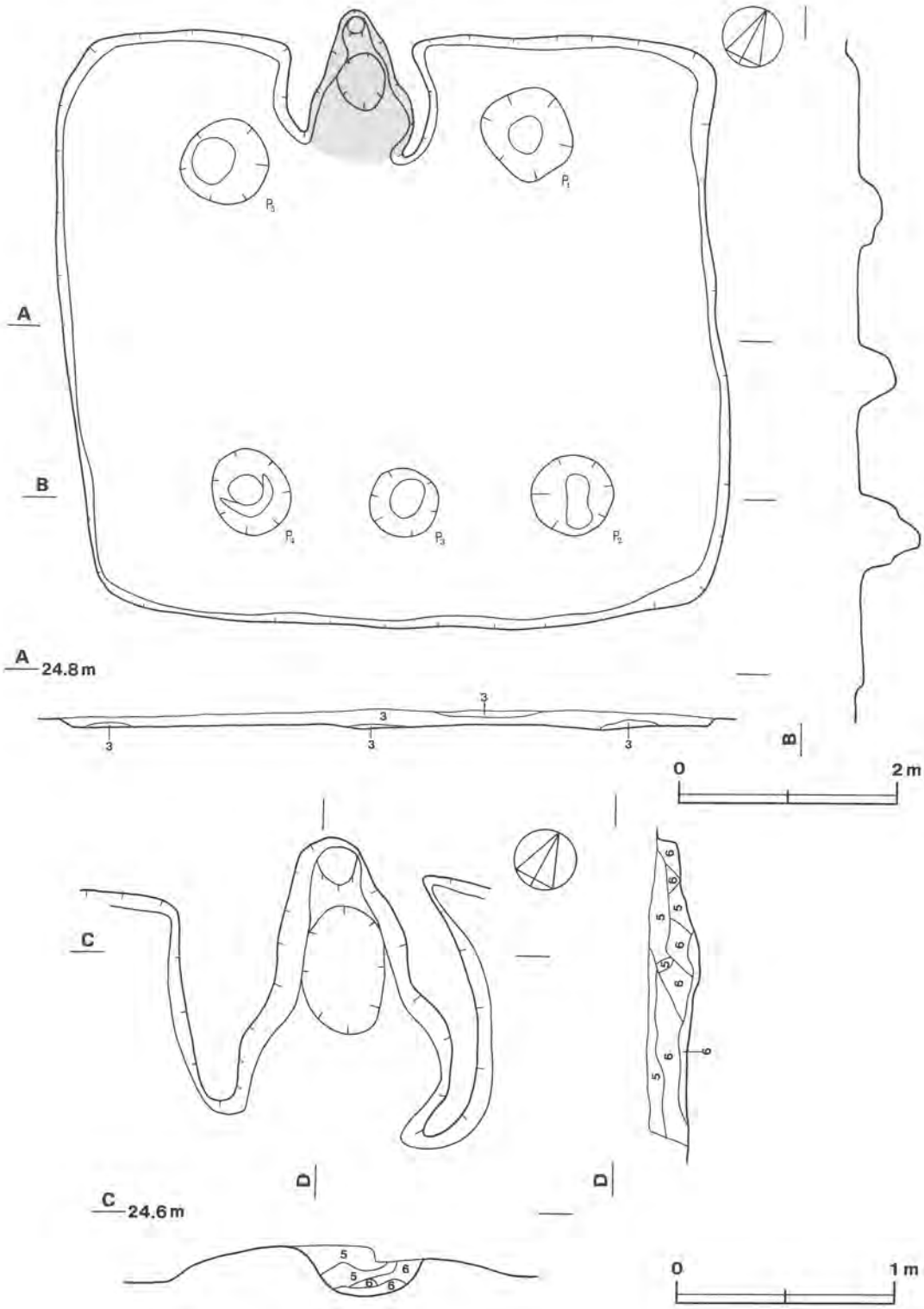
10	坏 須恵器	A 13.4 B 4.1 C 8.3	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・石英・長石 にぶい黄橙色 普通	100%
11	甕 土師器	A 17.1 B 17.6 C 7.5 E 17.8	底部は平底である。胴部は内湾ぎみに立ち上がり，上位に胴部最大径を有し，口縁部に至る。口縁部は短く，外反して立ち上がる。	口縁部外面は横ナデ調整。他は荒れがひどく調整痕不明。	砂粒・石英 橙色 普通（2次）	70%
12	甕 土師器	A 15.1 B 18.1 C 7.2 E 17.3	全体にひずみがあり，器高にも差異が認められる。底部は平底で，胴部は内湾しながら立ち上がり，中位に胴部最大径を有する。口縁部は外反し，頸部との境にあまい稜を有する。	器面が荒れており，口縁部内・外面が横ナデ調整の他は調整痕不明。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通（2次）	60%
13	甕 土師器	A (16.0) B 16.4 C 5.5	底部は平底で，胴部は球形を呈し，器壁を減じながら口縁部に至る。口縁部は軽く外反して開く。	底部及び胴部外面はヘラ削り，口縁部は横ナデ，器内面は荒いヘラ磨き調整。器表に輪積痕が残る。	スコリア・砂粒・石英 灰白色 普通	60%
14	甕 土師器	A 16.3 B (15.5) E (16.7)	胴部は内湾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がり，口縁端部は尖る。	口縁部内・外面は横ナデ調整。他は荒れていて調整痕不明	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通（2次）	40%
15	鎌 鉄製品	全長11.3 幅 2.3 重さ36.6g	完成品である。形状は三日月状を呈し，後端はかるく上方に折り返してある。柄に挟んで使用したものと思われる。			100%

第13号住居跡（第9図）

本跡は，H11e$_4$区に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸5.98m，短軸5.51mで，主軸方向は，N－31.5°－Wである。壁は，北東ヒーナー部付近は黒褐色土であるが，他はロームで，垂直に立ち上がっている。壁高は，8～16cmである。床は，硬く締まっている。ピットは5か所検出され，位置からみてP_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と思われる。P_1・P_4・P_5の径は75～85cm，深さは42～56cmであるが，P_2だけ浅く20cmである。床は全体に平坦であるが，東側はやや凹凸がある。カマドは，北壁中央部に粘土で構築されており，両袖が残っている。火床部は長径54cm，短径44cmの楕円形で，床を5cm掘り下げてあり，奥北寄りの部分から支脚が立ったまま出土した。煙道の張り出しは弱く，20cmぐらいである。

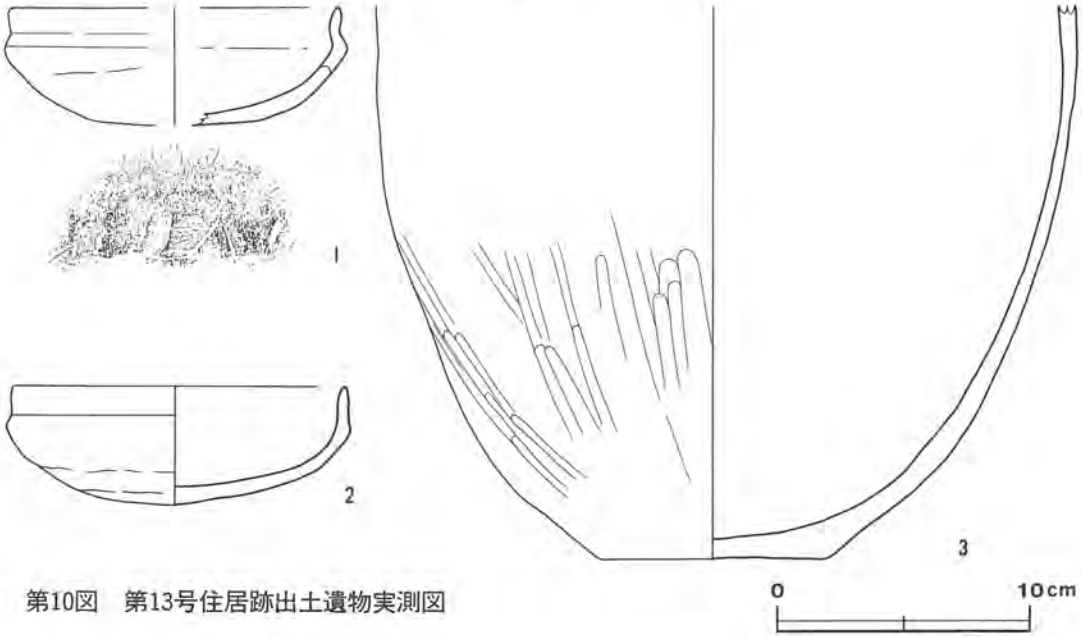
覆土は1層で，焼土粒子，炭化粒子，及びハードロームブロックを少量含む暗褐色土が堆積し



第９図　第13号住居跡実測図

ている。

遺物はすべて覆土から出土しており，土師器の坏（1，2）と甕（3）が出土している。他に支脚，土師器・須恵器片74点等が出土している。



第10図　第13号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第10図）

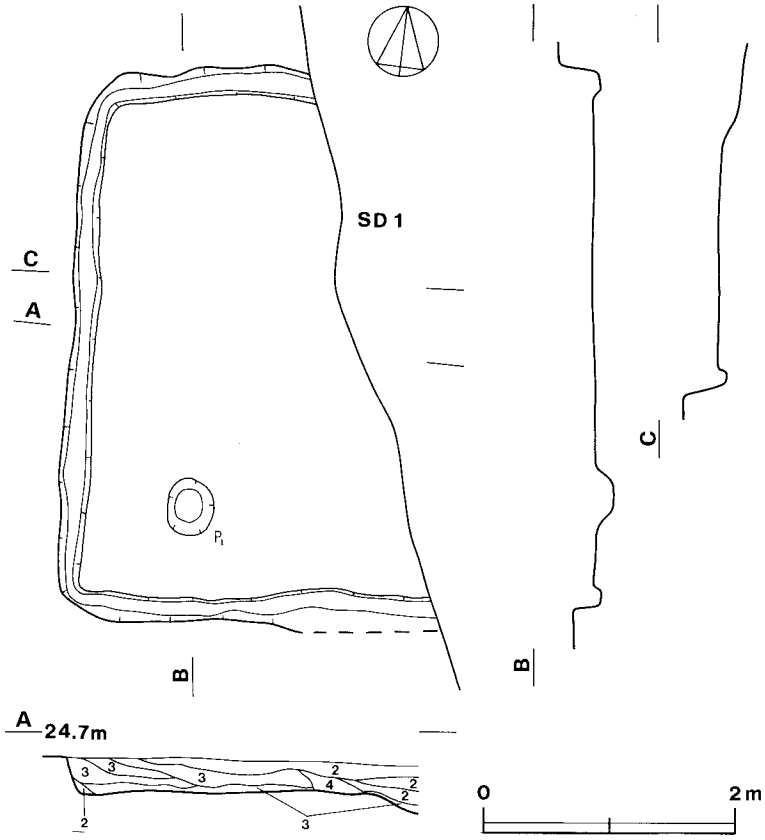
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.0) B 4.7 E (13.5)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は2段に成形されており，屈曲して立ち上がっている。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面は雑なヘラ磨き調整。底部に輪積痕が残る。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	70%
2	坏 土師器	A 13.1 B 4.7 E 13.6	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。底部に輪積痕が残る。	砂粒・スコリア にぶい橙色 良好	55%
3	甕 土師器	B (22.0) C 8.8	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は欠損。	底部はヘラナデ，胴部はヘラ磨き調整。	砂粒・雲母・石英 褐色 普通	60%

第14号住居跡（第11図）

本跡は，H11c$_4$区を中心に確認された住居跡で，第1号溝に東側3分の2を切られている。

重複のため詳細は不明であるが，南北の長さは4.33mである。壁は垂直に立ち上がり，高さは西壁で23cmである。壁溝は重複部分を除いて，全周しており，上幅15～20cm，下幅7～12cm，深さ6～10cmである。床は平坦で，硬く締まっている。他の内部施設は検出できなかった。ただ，第

1号溝との境界部分に焼土の堆積がみられ，カマドに関連する焼土の可能性がある。



覆土は，3層に分けられる。1層はローム粒子・炭化物・焼土粒子を少量含む褐色土，2層はハードブロック・炭化物を少量含む暗褐色土，3層は焼土粒子を少量含む極暗褐色土である。

遺物は極めて少量で，土師器片7点が覆土から出土している。

第11図　第14号住居跡実測図

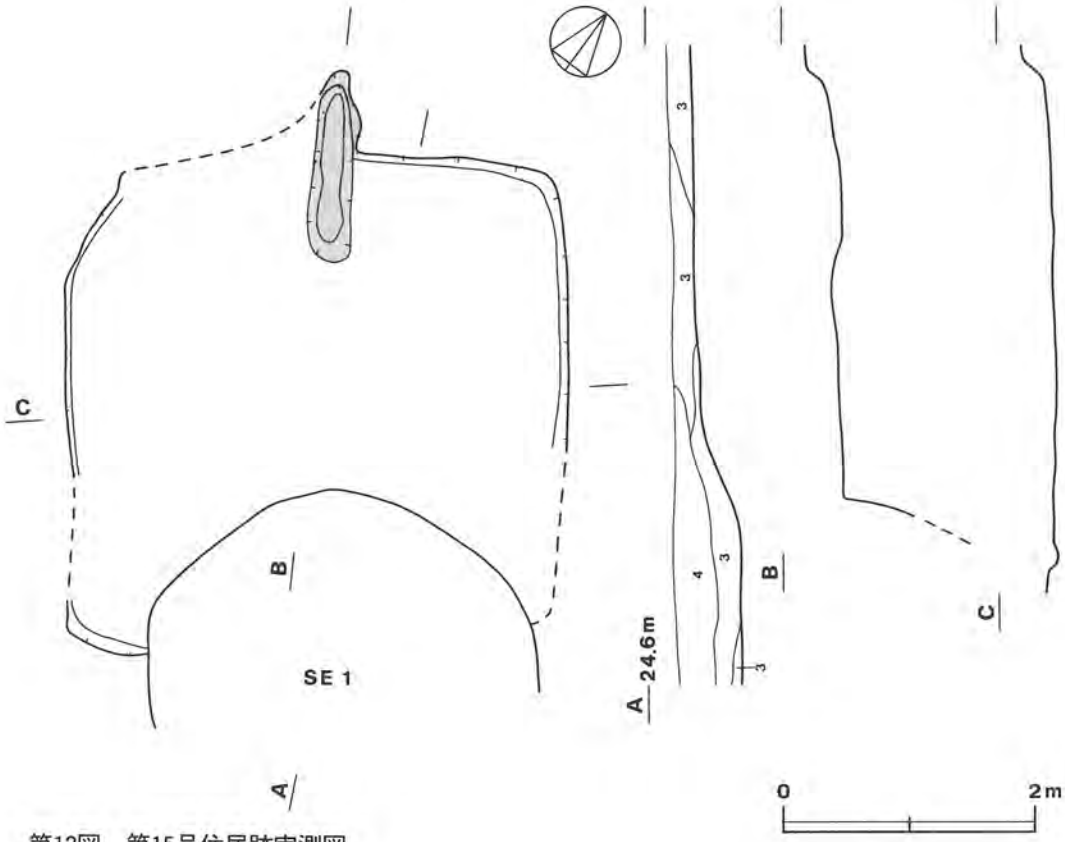
第15号住居跡（第　12図）

本跡は，H11d₁区を中心に確認された住居跡で，第16号住居跡，第1号井戸と重複している。土層や床の状況からみて，第16号住居跡が最も古く，第1号井戸がより新しい遺構である。

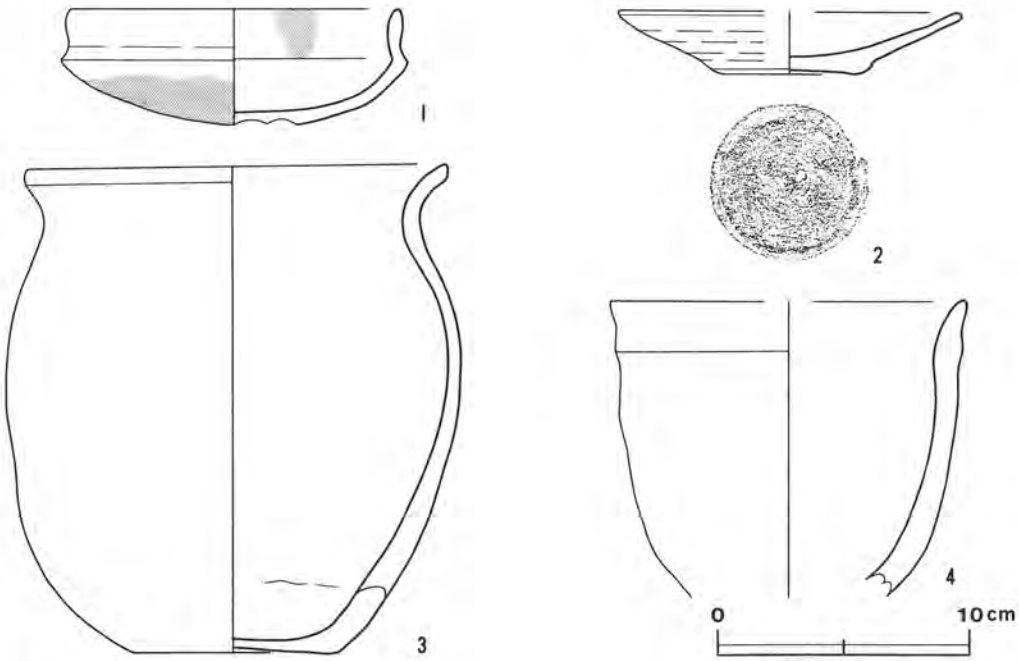
他の遺構との重複及び床まで浅いこともあり，詳細については不明な点が多いが，平面形は方形を呈していたと思われる。規模は，東西方向で4.02mである。主軸方向は，N－31.5°－Wである。壁は外傾して立ち上がり，高さは6～17cmである。床は平坦で，あまり硬くない。カマドは北壁中央部に構築されていたと思われるが，確認できたのは火床部のみである。火床部は長径1.4m，短径0.3mの長楕円形を呈しており，意図的な掘り込みは認められない。ピットは確認できなかった。

覆土は1層で，ハードロームブロック，焼土粒子を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，カマド内から土師器の甕（3，4）が2点出土している。他に，覆土から土師器の坏（1），皿（2），支脚，鉄製品，土師器・須恵器片204点が出土している。



第12図　第15号住居跡実測図



第13図　第15号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第13図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.2 B（4.6） E 13.9	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	98% 口縁部黒色処理
2	皿 土師器	A（13.6） B 2.5 C 5.6	底部は平底で，体部は外傾して開く。体部下端にあまい稜を有する。	底部は全面回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き成形。 水挽き成形。	砂粒・礫 明赤褐色 良好	50%
3	甕 土師器	A 16.8 B 19.5 C 8.0 E 18.1	底部は平底で，中央部が薄くなる。胴部は内湾ぎみに立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は短く外反する。	底部はヘラナデ，胴部上半部はナデ，下半部は縦方向のヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石・石英 スコリア にぶい赤褐色 普通（2次）	70%
4	甕 土師器	A（14.1） B（11.7）	胴部は内湾ぎみに外上方に立ち上がり，口縁部との境にあまい稜を有する。口縁部は2段に調整され，直立した後かるく外傾する。	胴部は縦方向のヘラ削り，口縁部は横ナデ調整。	スコリア・パミス 砂粒 橙色 普通（2次）	40%

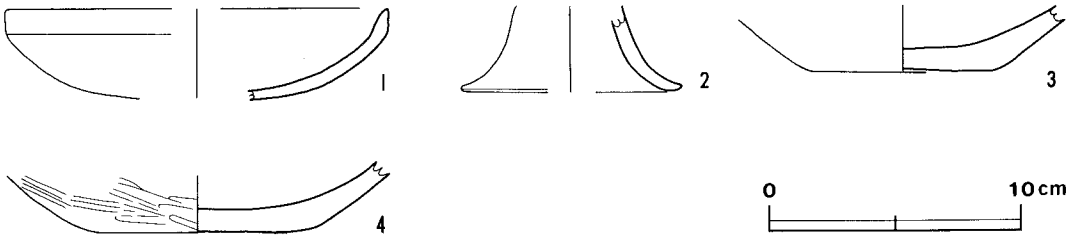
第18号住居跡（第15図）

本跡は，H10b₀区を中心に確認された住居跡で，非常に浅い住居跡である。

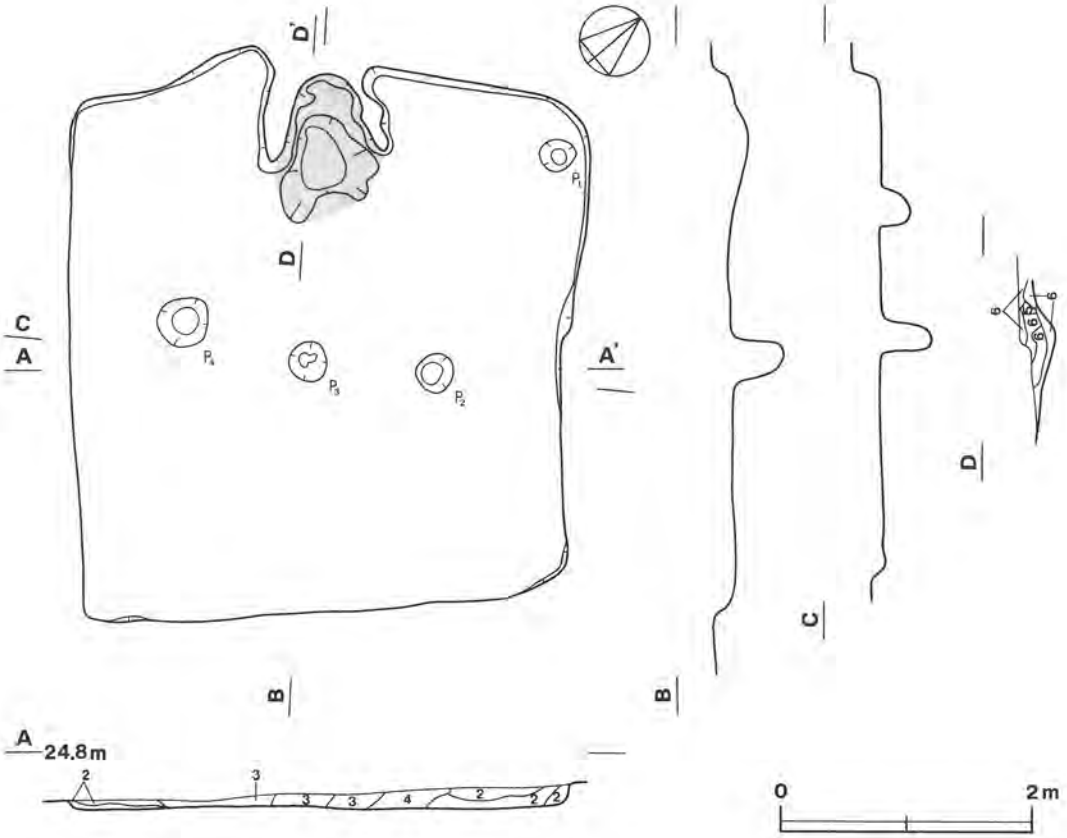
平面形は方形を呈しており，規模は長軸4.20m，短軸3.86mで，主軸方向は，N−50°−Wである。壁は，北壁と東壁の一部が残存し，垂直に立ち上がっており，高さは11～20cmである。床は硬く締まっており，平坦である。ピットは，床中央部に3か所，カマド東側に1か所検出されており，径は25～40cm，深さは8～37cmである。4か所とも柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に山砂で構築されているが，残存状況は悪く，袖部がわずかに残っていただけである。火床部は床を15cm掘り込んでいる。煙道の張り出しは認められない。

覆土は，ローム粒子を多量に含む褐色土で，中央部にだけローム粒子と焼土粒子を少量含む極暗褐色土が堆積している。

遺物は，床面及び床面直上から土師器の坏（1）と甕（3）が出土している。他に土師器・須恵器片151点が出土しており，いずれも住居跡の南側から集中して出土している。



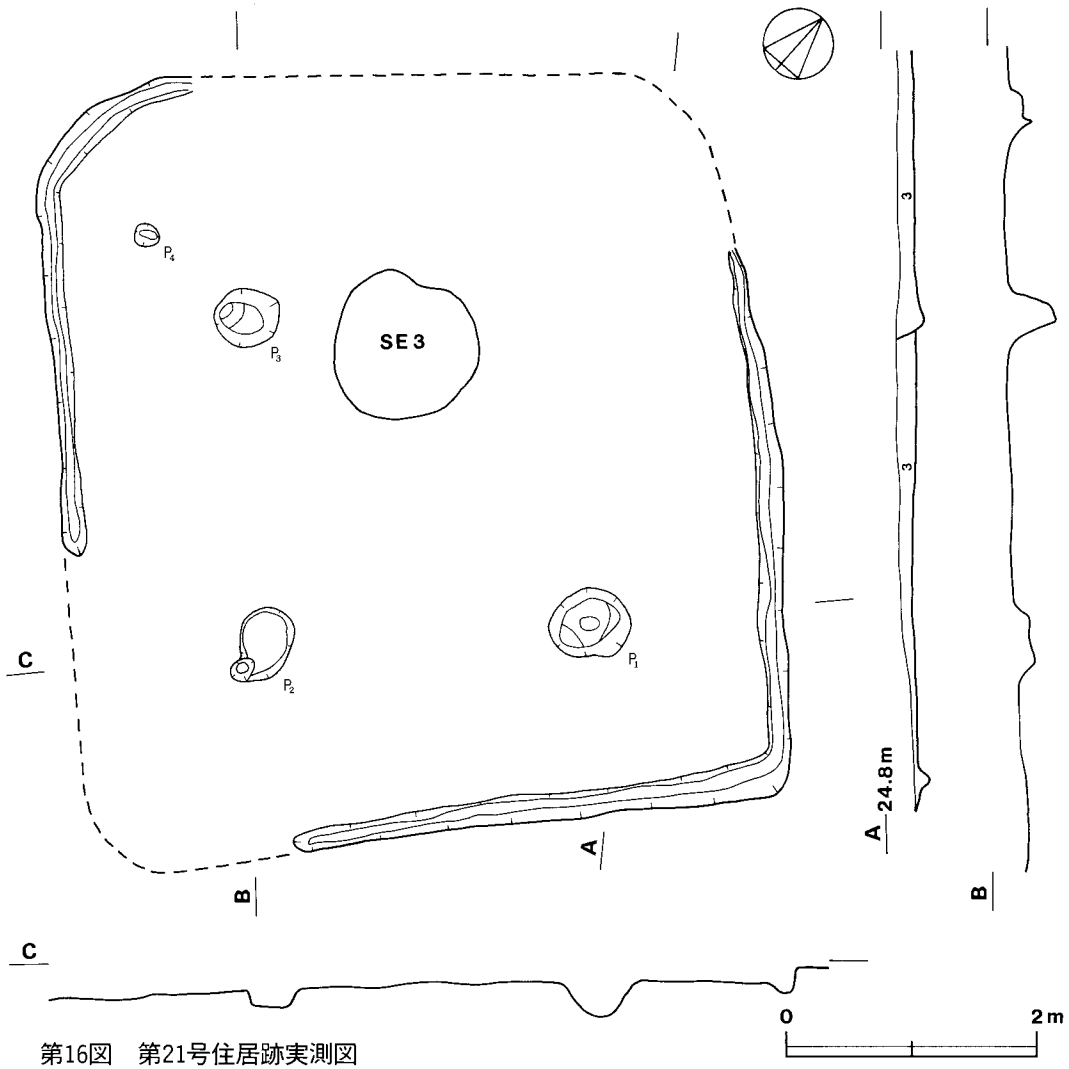
第14図　第18号住居跡出土遺物実測図



第15図　第18号住居跡実測図

出土遺物観察表（第14図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.4) B (3.6)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は短く直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・長石 褐灰色 普通	20%
2	高坏 土師器	B (3.4) C (8.7)	脚部片である。外反しながら外下方に開く。	器内・外面ともナデ調整の後，朱が塗られている。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	10%
3	甕 土師器	B (2.6) C (7.2)	底部片で，平底である。	器内・外面はナデ調整。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	10%
4	甕 土師器	B (2.4) C (7.8)	底部片で，平底である。	胴部下端はヘラ磨き調整。	石英・雲母・長石 赤褐色 普通	10%



第16図　第21号住居跡実測図

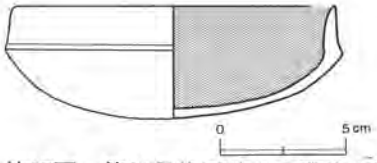
第21号住居跡（第16図）

本跡は，G10j6区を中心に確認された住居跡で，北側で第22号住居跡と，遺構中央部で第３号井戸とそれぞれ重複している。床の残存状況等から推定して，本跡が最も古いものと思われる。

遺構確認の段階で，覆土の大部分が消失してしまい，確認できた壁は東壁のみで，高さは５～10cmである。壁溝は全周していたものと思われるが，東壁から南壁にかけての部分と，北西コーナー部付近で，確認できただけで，他は確認できなかった。平面形は方形を呈していたと推定され，規模は長軸6.08m，短軸5.76mである。カマドが北壁に構築されていたと推定すると，主軸方向はN－47°－Wとなるが，断定はできない。壁溝は，上幅10～15cm，下幅４～11cm，深さ２～10cmである。床は締まりがなく，中央部を第３号井戸に切られている。ピットは，３か所検出されている。それぞれの長径は50～65cm，短径は42～54cm，深さ15～27cmである。検出された位置から，

3か所とも主柱穴と思われる。

覆土はほとんど観察できなかったが，わずかに，ハードロームブロックと炭化物を少量含む暗褐色土が認められた。



遺物は，土師器の坏が床面中央部から出土している。他に，土師器・須恵器片140点が出土している。

第17図　第21号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第17図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	坏 土師器	A 12.9 B 4.5 E 13.5	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立し，端部は尖る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・砂粒 橙色 普通（2次）	60% 内面黒色処理

第31号住居跡（第18図）

本跡は，G9i_6区を中心に確認された住居跡である。遺構確認時に床面が露呈してしまった。

平面形は東西に長い長方形を呈し，規模は長軸6.08m，短軸5.51mで，主軸方向は，N－31°－Wである。壁は南西コーナー部は消失しており，他の部分も明確には検出できなかった。残存壁高は，12cmである。床は粘土質のロームから成り，平坦である。ピットは，大小合せて15か所検出されている。全てが本跡に伴うものではなく，P_1・P_3・P_8・P_{15}の4か所が主柱穴，P_6が出入口に関するピットと思われる。主柱穴の径は40cm前後，深さ20～29cmである。カマドは北壁中央部に粘土で構築されており，袖部がわずかに残っている。火床部は長径90cm，短径21cmの長楕円形を呈し，深さは5cmと浅く，煙道の張り出しは28cmである。

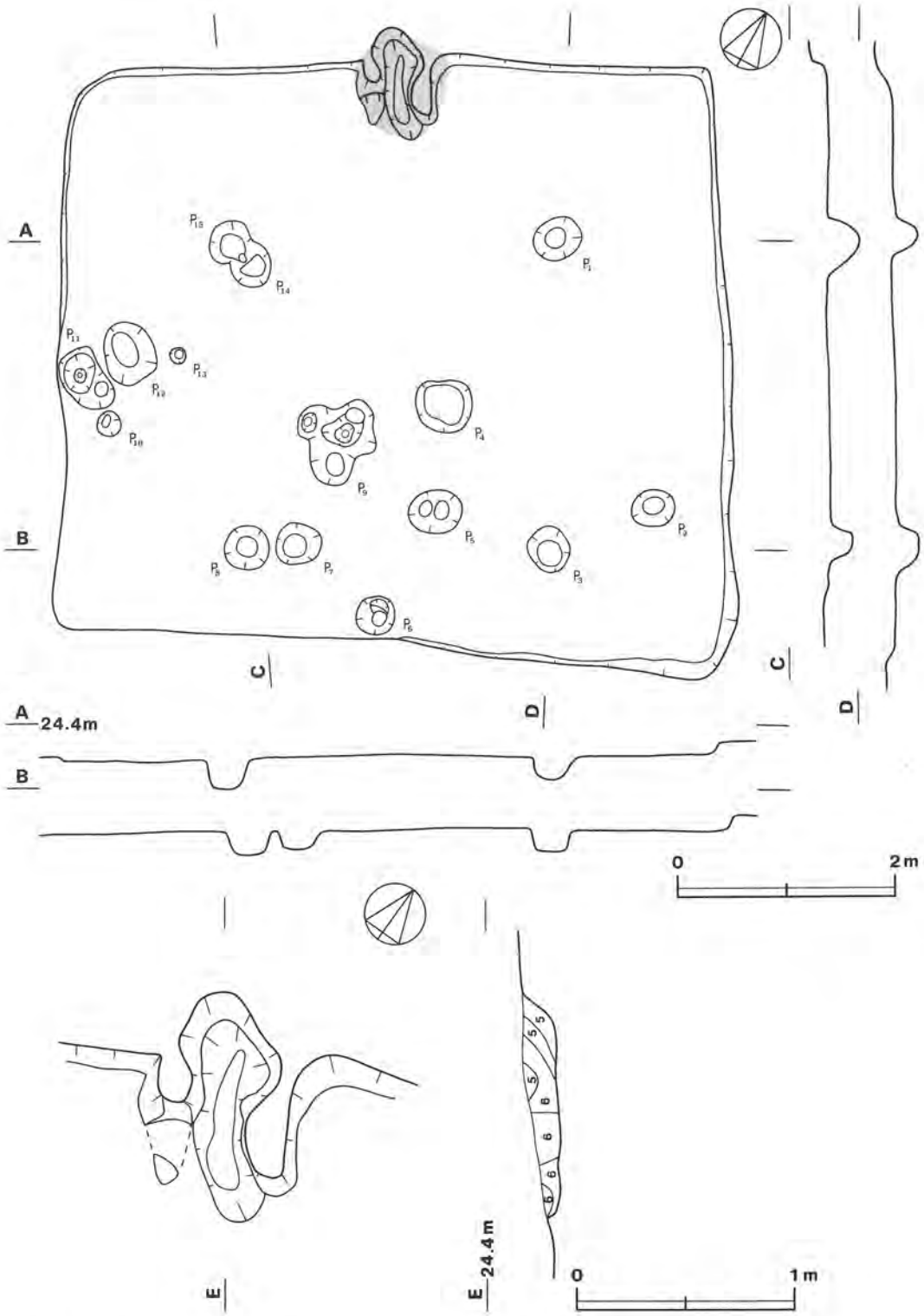
覆土は，壁際にわずかに認められただけで，観察するまでには至らなかった。

遺物は極めて少量で，土師器片5点が床面から出土したにすぎない。

第33号住居跡（第19図）

本跡は，G9g_4区を中心に確認された住居跡で，第32号住居跡，第6・7号井戸と重複している。土層の観察から，第32号住居跡より本跡の方が新しく，さらに本跡を2基の井戸が切っていることがわかる。

平面形は方形を呈し，規模は長軸4.29m，短軸4.11mである。カマドが確認できないため，主軸方向は不明である。壁は浅く，垂直に立ち上がり，高さは8～16cmである。床は平坦で，硬く締っている。南壁近くに，ピットが2か所検出されている。P_1は，長径42cm，短径37cm，深さ19

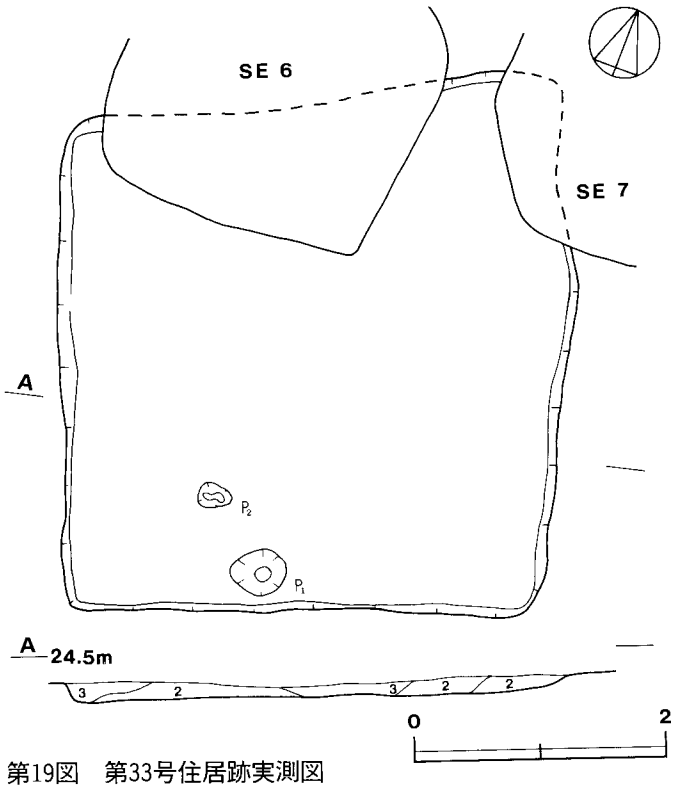


第18図　第31号住居跡実測図

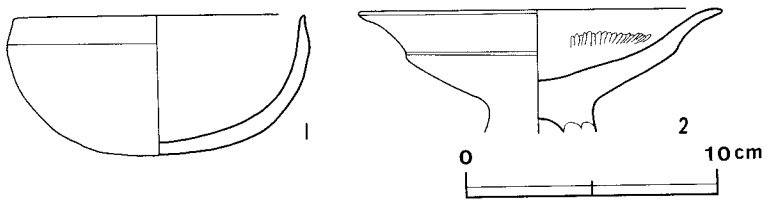
cmで，P_2はさらに小規模である。

覆土は，層位的な観察はできなかった。遺構内には，暗褐色土，褐色土，極暗褐色土などがブロック状に認められ，ローム粒子や炭化粒子を含有している。

遺物は，土師器の坏（1）と高坏（2）が床面から出土している。他に，土師器片19点が出土している。



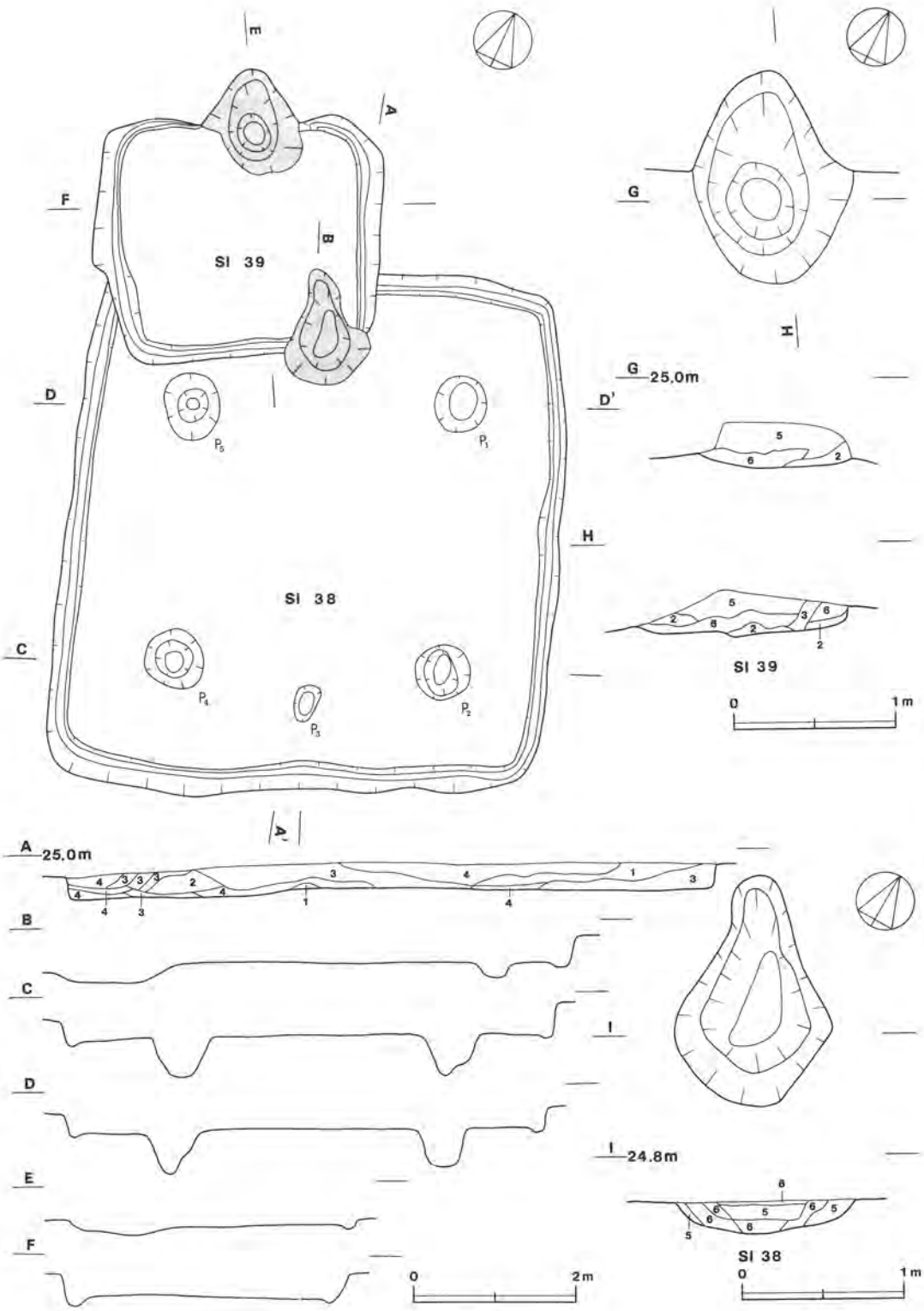
第19図　第33号住居跡実測図



第20図　第33号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第20図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A11.5 B 5.5 E12.0	底部は半球形を呈し，口縁部との境にあまい稜を有する。口縁部はわずかに内傾し，端部は尖る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石・石英 明赤褐色 普通	90%
2	高坏 土師器	A14.6 B(4.8)	脚部欠損。坏部だけが残り，体部は外傾して立ち上がり，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反して立ち上がる。	体部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・石英・長石 浅黄橙色 普通	60%



第21図　第38・39号住居跡実測図

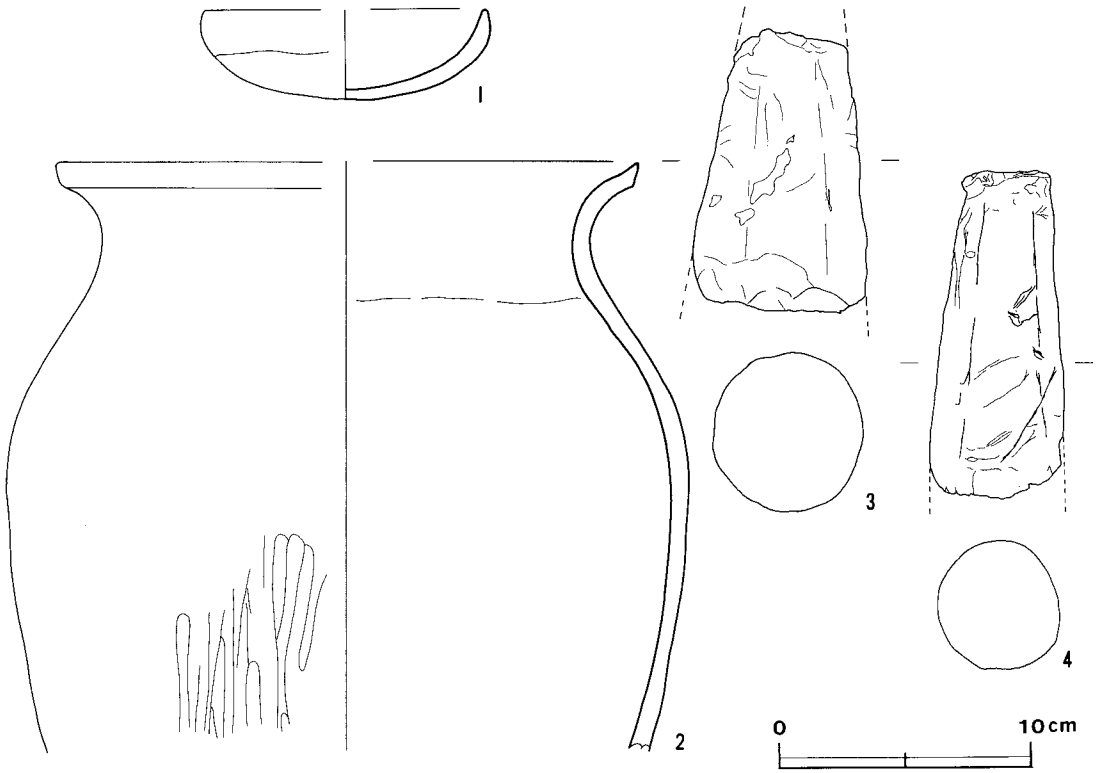
第38号住居跡（第21図）

本跡は，F8j_9区を中心に確認された住居跡で，第39号住居跡と北西コーナー部で重複している。新旧関係は，本跡が第39号住居跡に切られていることから，本跡の方が古いことがわかる。

平面形は方形を呈し，規模は長軸6.36m，短軸6.04mで，主軸方向は，N－21°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは22～39cmである。カマド西側の壁は，消失している。壁溝は，重複部分を除き全周しており，上幅10～14cm，下幅５～９cm，深さ６～10cmである。床は極めて平坦で，床周辺部まで硬く締まっている。ピットは，５か所検出されている。検出位置からみて，P_3を除く４か所が主柱穴と思われる。主柱穴の径は70～83cm，深さは48～55cmである。カマドは，北壁中央部に構築されていたが，そのほとんどは第39号住居跡の掘り込み時に消失し，火床部が確認できただけである。火床部は，床を長径93cm，短径52cmの楕円形に20cm掘り下げている。

覆土は，３層に大別される。１層は，焼土粒子・ローム粒子中量，炭化物少量を含む黒褐色土，２層はロームブロック多量を含むにぶい黄褐色土，３層はローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量を含む暗褐色土である。

遺物は，支脚がカマド東側から，土師器の坏（１）と甕（２）が覆土からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片127点と鉄製品が出土している。



第22図　第38号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第22図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (11.2) B (3.6)	底部は丸底で，なだらかに立ち上がり，口縁端部でわずかに内湾する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	スコリア・砂粒 灰褐色 普通	40%
2	甕 土師器	A (23.4) B (23.4) E (27.1)	胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は外反し，端部は外上方につまみ出されている。	胴部は縦方向のヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	40%
3	支脚 土製品	全長(11.3) 径 (5.9)	両端部を欠損している。			
4	支脚 土製品	全長(12.9) 径 (5.1)	基部を欠損している。			

第41号住居跡（第23図）

本跡は，H8a$_9$区を中心に確認された住居跡である。

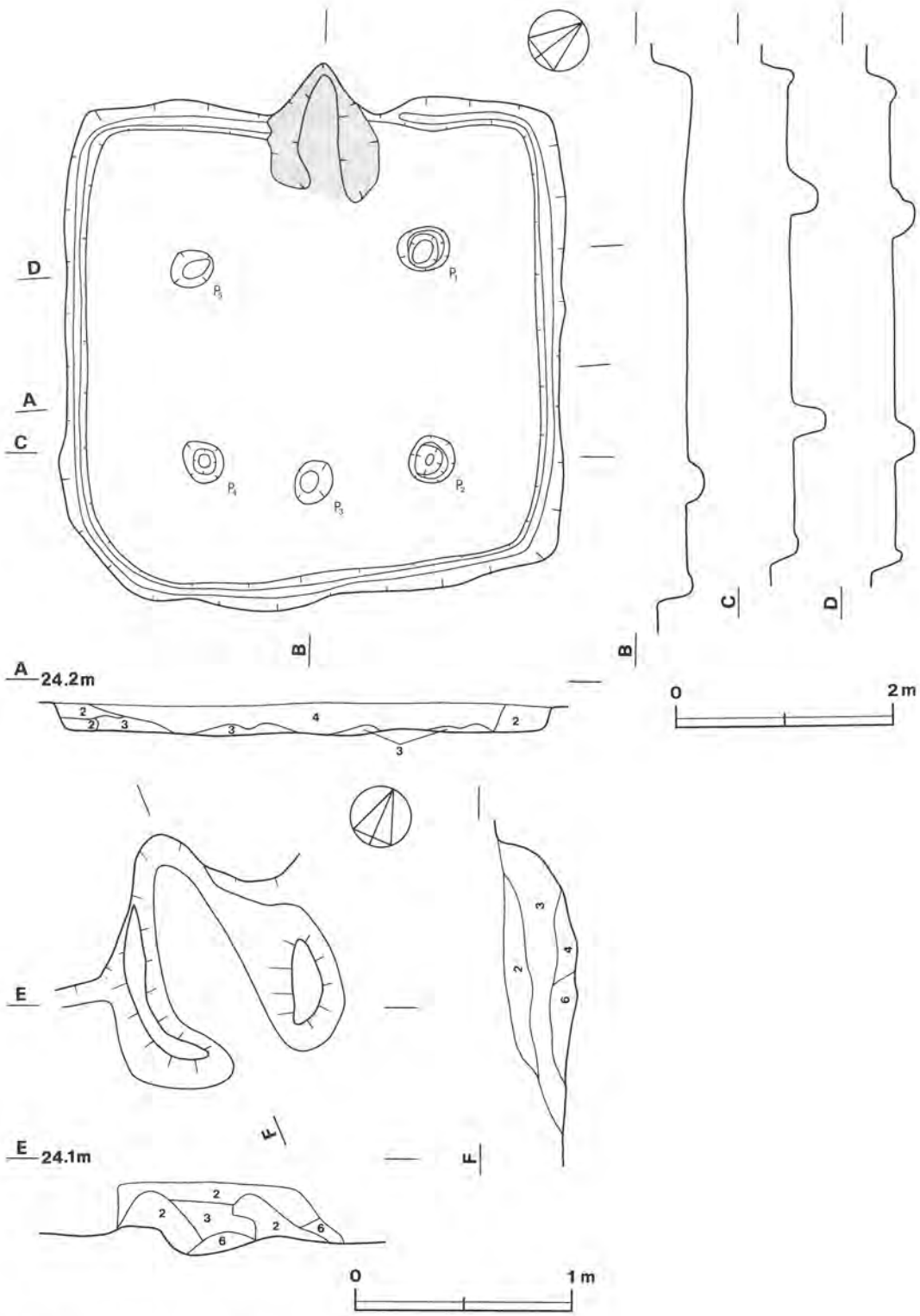
平面形は方形を呈し，規模は長軸4.55m，短軸4.54mで，主軸方向は，N－48°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは28cmである。壁溝は全周しており，上幅15cm，下幅5～10cm，深さ4～6cmである。床は平坦で，硬く締まっている。南壁近くの床は，青灰色の粘土で，乾くと非常に硬くなる。ピットは5か所検出され，P$_3$を除く4か所が主柱穴である。主柱穴の径は40～45cm，深さは20～30cmである。カマドは北壁中央部に山砂で構築されており，袖部が低く残っている。火床部は意図的な掘り込みは認められず，煙道に向って3cm低くなるだけである。煙道は，壁外に45cm張り出している。

覆土は1層で，ローム粒子を中量含む黒褐色土である。

遺物は，土師器の甕（3，4，5）3点，埦（1，2）2点が遺構中央部の覆土から出土している。他に，土師器片141点が出土している。

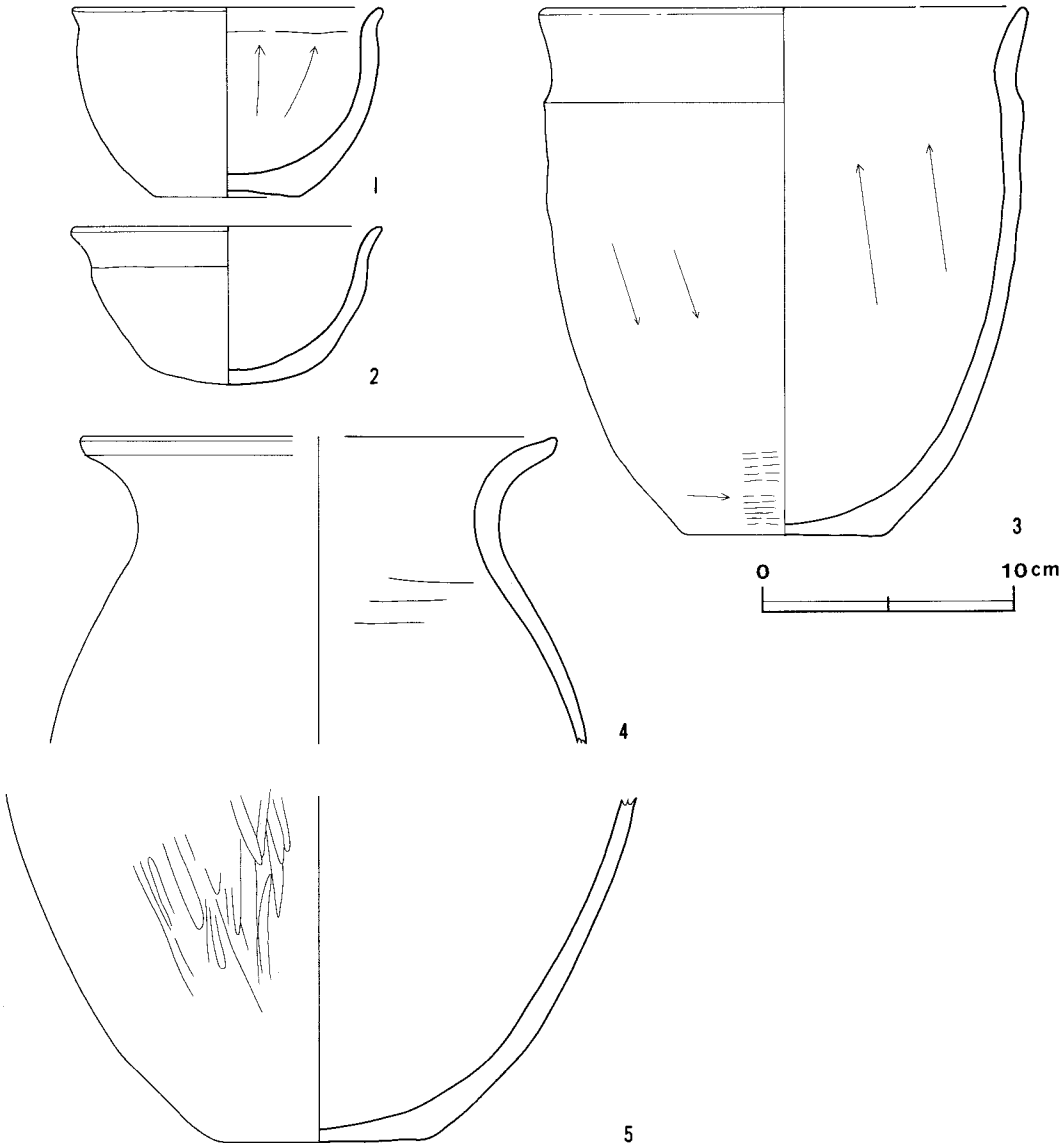
出土遺物観察表（第24図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	埦 土師器	A 12.2 B 7.5 C 5.8	底部は上げ底状を呈し，体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部は短く外反する。	底部はヘラ削り，体部外面はヘラ削り後ナデ，内面は放射状のヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。	パミス・砂粒 橙色 良好	100%
2	埦 土師器	A 12.4 B 6.3	底部は丸底で，体部との境にあまい稜を有する。体部は外傾して立ち上がり，口縁部でかるく外反する。	体～底部はヘラ削り，口縁部内・外面はナデ調整。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	95%



第23図　第41号住居跡実測図

3	甕 土師器	A 19.2 B 21.0 C 7.8	底部は平底で，胴部はやや内湾ぎみに立ち上がり，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は外反して立ち上がる。	胴～底部はヘラ削り，器内面は雑なヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	55%
4	甕 土師器	A (18.4) B (12.3)	胴部は器壁を増しながら内傾し，口縁部は大きく外反する。	胴部は内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	20%
5	甕 土師器	B (13.8) C 8.7	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部はヘラ削り，胴部外面はヘラナデ，内面はナデ調整。	石英・長石・雲母・礫 明赤褐色 普通(2次)	20%



第24図　第41号住居跡出土遺物実測図

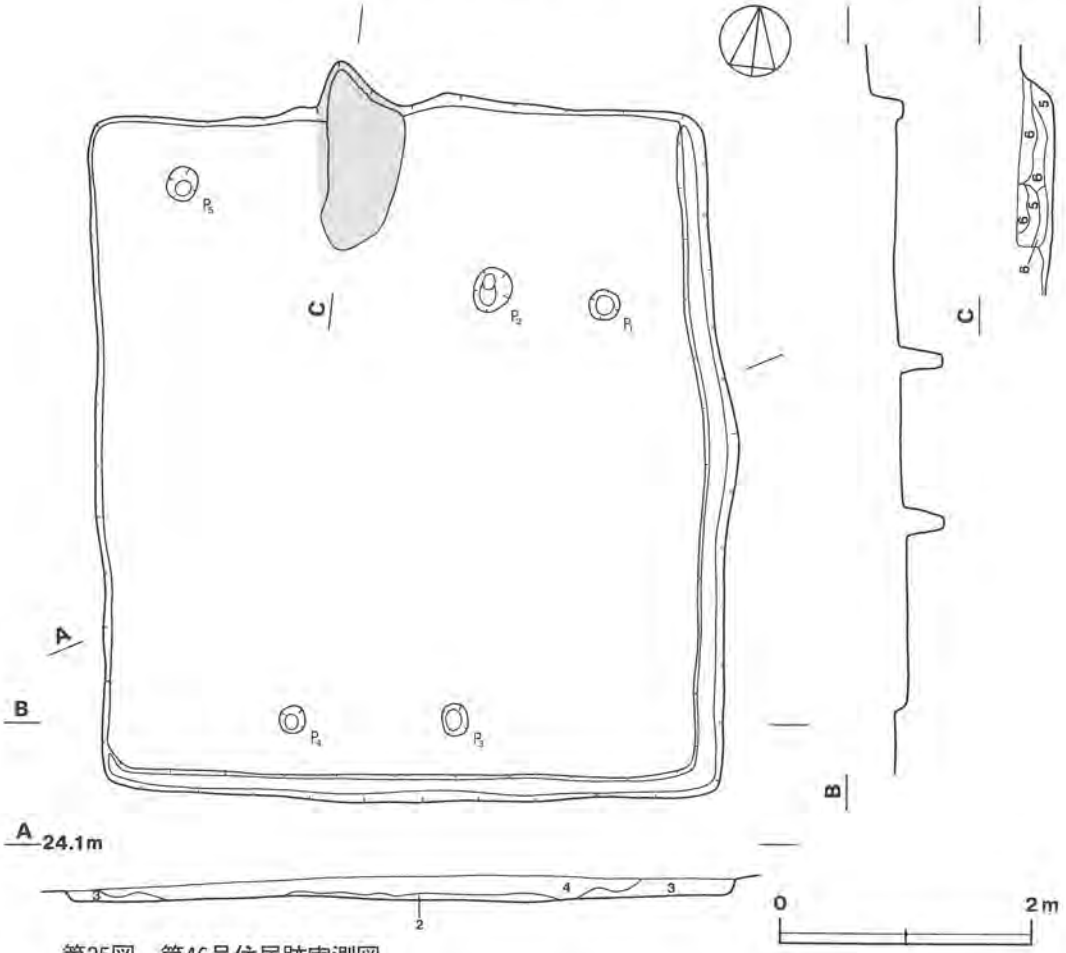
第46号住居跡（第25図）

本跡は，G8f₃区を中心に確認された住居跡で，遺跡内の西側に位置している。

平面形は長方形を呈し，規模は長軸5.61m，短軸5.09mで，主軸方向は，N－7°－Wである。壁は明確には検出できなかったが，暗褐色土から成り，垂直に立ち上がっている。東壁と南壁は他の壁より残存状況がよく、壁高は16～23cmである。壁溝は，東壁と南壁の部分に検出され，上幅15～20cm，下幅13～15cm，深さ６～10cmである。床は粘土質のロームで，全体的に締まりがなく，平坦である。ピットは，５か所検出されている。P_2は，径36cm，深さ35cmで，他のピットはそれよりも小型であり，径22～25cm，深さ22～34cmである。カマドは，北壁中央部に構築されているが，痕跡だけの確認であり，火床部の掘り込みもない。煙道は，35cm壁外に張り出している。

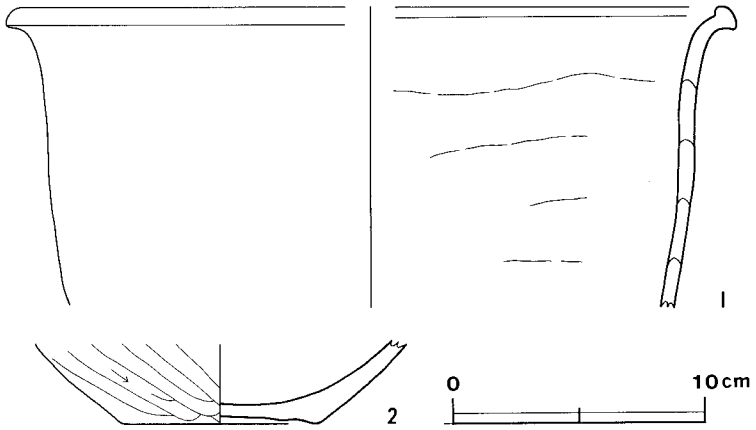
覆土は２層で，１層は焼土粒子と炭化物を少量含む黒褐色土，２層は粘土質の褐色土である。なお，壁近くにはローム粒子を少量含む暗褐色が堆積している。

遺物の大部分は覆土から出土しており，土師器の甕（１，２）２点の他に，土師器・須恵器片



第25図　第46号住居跡実測図

46点が出土している。



第26図　第46号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第26図）

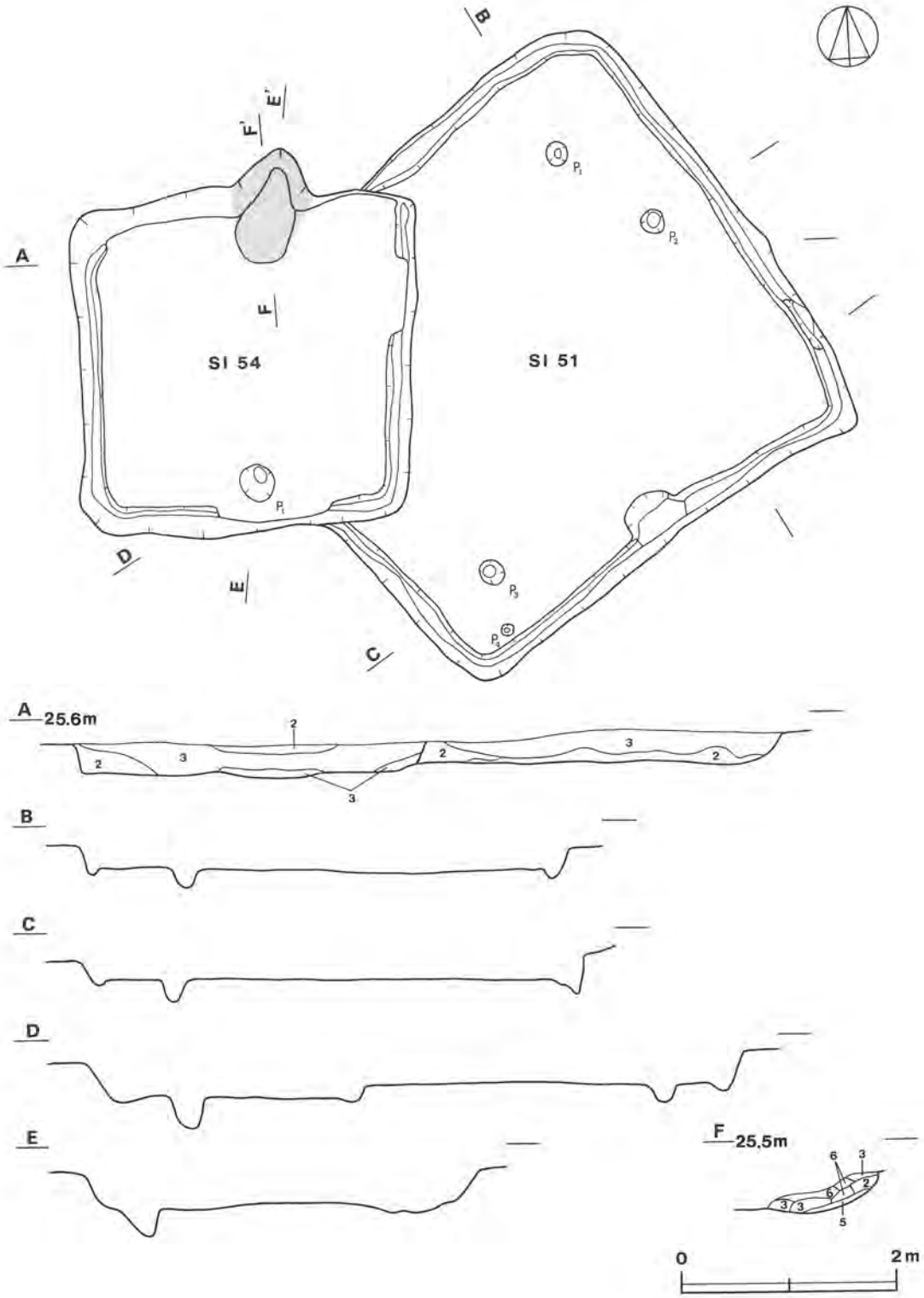
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	甕 土師器	A (28.0) B (11.9)	胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は短く外反する。	器面は荒れているが，口縁部内・外面は横ナデ調整と思われる。器内面には輪積痕が残る。	石英・長石・雲母 明褐灰色 普通	20%
2	甕 土師器	B (3.3) C　7.6	底部は中央部がやや凹み，胴部は外傾して立ち上がる。	底部は一部ヘラ磨き，胴部外面はヘラ磨き，内面はナデ調整。	砂粒・石英・長石・雲母 明褐色 普通	20%

第51号住居跡（第27図）

本跡は，E9e$_7$区を中心に確認された住居跡で，　第54号住居跡と重複している。土層の観察から，第54号住居跡が，本跡を切って掘り込んでいることがわかる。

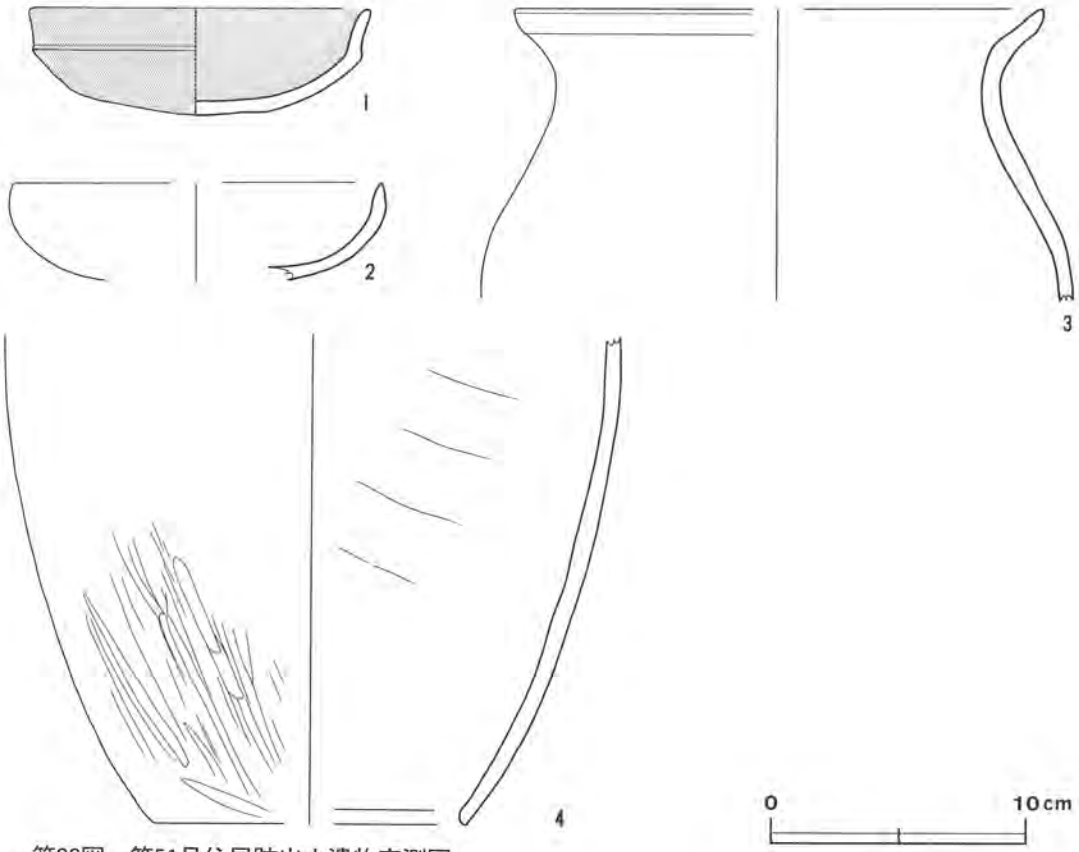
平面形は方形を呈し，規模は長軸4.78m，短軸4.48mで，主軸方向は，N－32°－Wである。壁は重複している北西コーナー部付近は残存しないが，他は垂直に立ち上がり，高さは24cmである。壁溝も，重複部分以外は全周しており，上幅10～17cm，下幅4～13cm，深さ8～10cmである。床は平坦で，傾斜もない。ピットは4か所認められるが，いずれも小規模なもので，柱穴とは断定しがたい。それぞれの径12～25cm，深さ16～22cmである。なお，南壁中央部下端で，壁溝がピット状に広がりをみせる部分が認められる。これは，入口の施設と関連するのではないかと考えられる。カマドは，検出されていない。しかし，北壁中央部がわずかに外に張り出し，ここに粘土質が付着していたことから，元来はこの部分にカマドが構築されていたものと思われる。

覆土は，2層に大別される。1層は焼土粒子及び炭化物を少量含む暗褐色土，2層はローム粒子中量，ハードロームブロック少量を含む褐色土である。



第27図　第51・54号住居跡実測図

遺物は，土師器の坏（1，2）2点・甕が2層から，同じく土師器の甕（3）が床面中央部からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片109点が出土している。



第28図　第51号住居跡出土遺物実測図

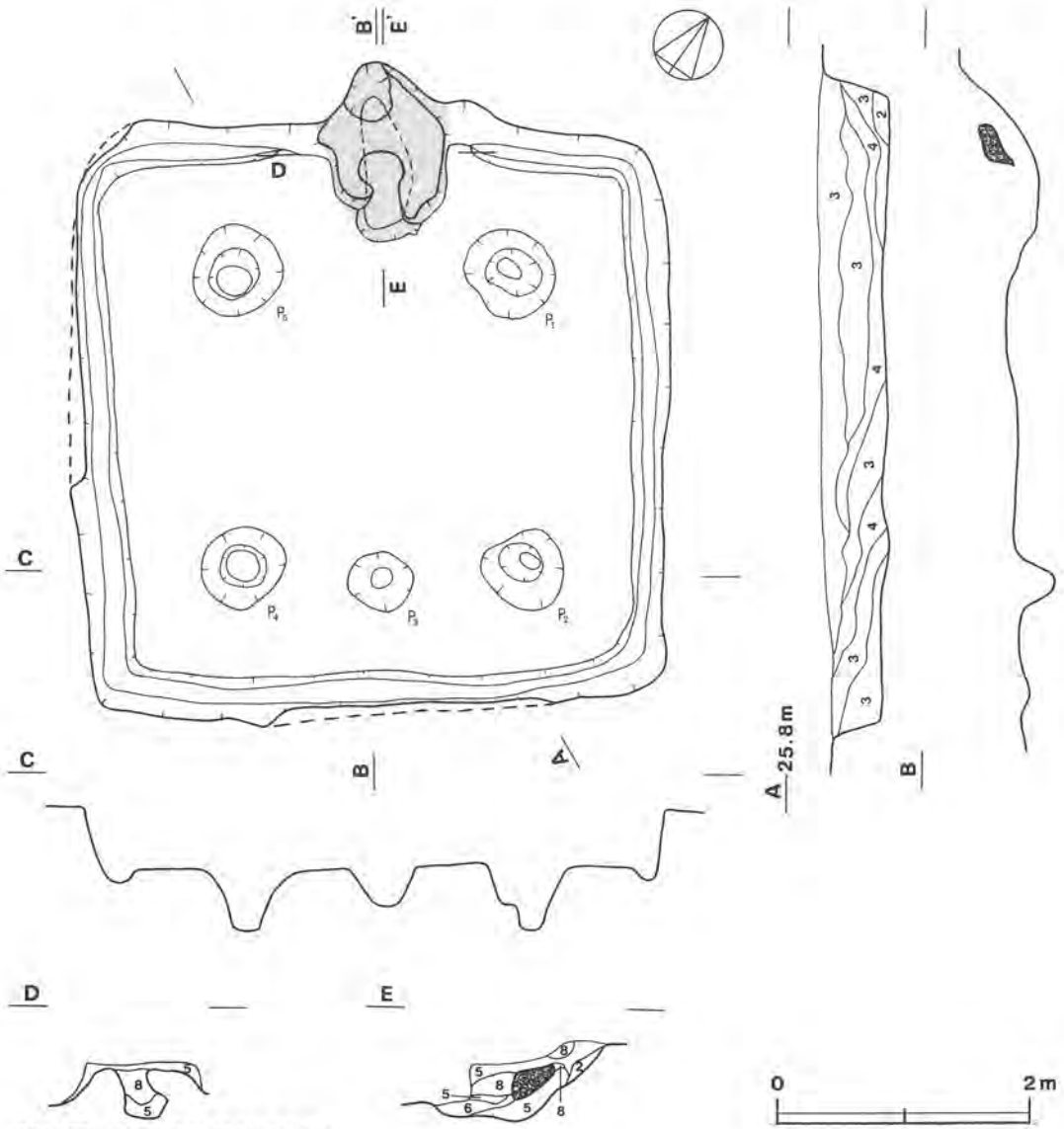
出土遺物観察表（第28図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.5 B 4.3	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はわずかに外傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	スコリア・パミス・長石・雲母 黒褐色 普通	50% 内面黒色処理
2	坏 土師器	A (14.6) B (3.9) E (14.8)	底部は丸底で，なだらかに口縁部に至る。口縁端部は尖る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・パミス・スコリア 橙色 普通	10%
3	甕 土師器	A (20.9) B (11.5)	口縁部片。胴部は内傾して，口縁部に至る。口縁部はゆるやかに外反する。	胴部は内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・礫 にぶい褐色 普通	10%
4	甑 土師器	B (19.3) C (12.3) E (24.3)	胴部はかるく内湾しながら，外傾して立ち上がる。底面は全面が開孔している。	胴部外面は斜位のヘラ磨き，内面はヘラナデ調整。	雲母・砂粒 にぶい褐色 普通	20%

第57号住居跡（第29図）

本跡は，F10a₂区を中心に確認された住居跡で，カマド西側から南壁にかけて第６号溝と重複している。溝は本跡を切って，掘り込まれている。

平面形は方形を呈し，規模は長軸4.79m，短軸4.73mで，主軸方向は，N－40°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは57cmである。壁高が50cmを越える住居跡は，当調査区においては４軒しかなく，本跡は最も深い住居跡に属する。壁溝は全周しており，上幅20～25cm，下幅８～17cm，深さ10cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは５か所検出され，位置からみてP_3は入口に関するピット，P_1・P_2・P_4・P_5は主柱穴である。主柱穴は2.3mの等間隔で掘り込まれて

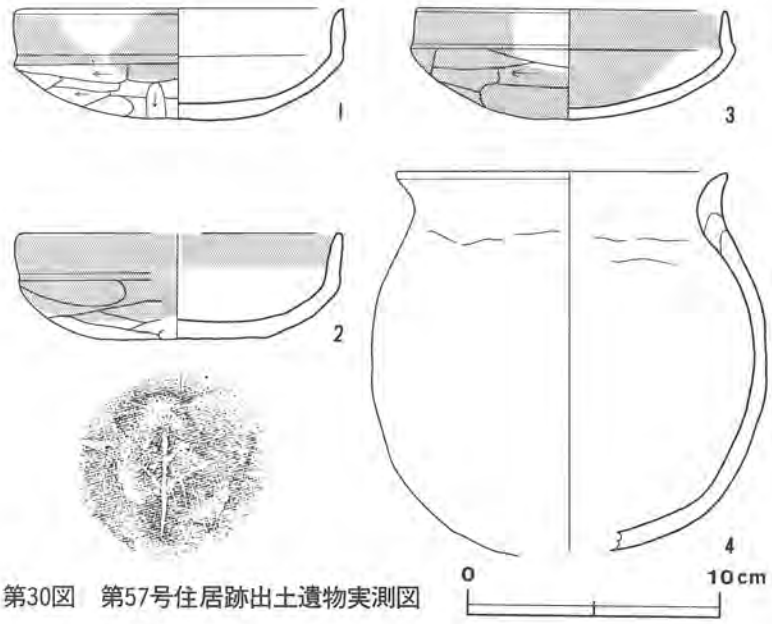


第29図　第57号住居跡実測図

おり，径は65～70cm，深さは51～54cmである。カマドは北壁中央部に粘土で構築されており，比較的良好な状態で検出されている。カマド全体に，砂まじりの粘土が使用されており，全長145cm，最大幅105cmである。火床部は長径117cm，短径38cmの長楕円形で20cm掘り下げてあり，煙道はゆるやかに立ち上がり，屋外に45cm張り出している。東側の袖部から小型の甕が口縁部を下にして出土した。これはカマドを補強する目的で袖部に埋め込まれたものと思われる。

覆土は，３層に大別される。１・２層は，ロームブロック中量，焼土粒子少量を含む暗褐色土，３層はローム粒子を中量含む黒褐色土である。

遺物は，土師器の坏（１，２，３）３点が３層から，同じく土師器の甕（４）がカマド東側の袖部からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片103点が出土している。



第30図　第57号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第30図）

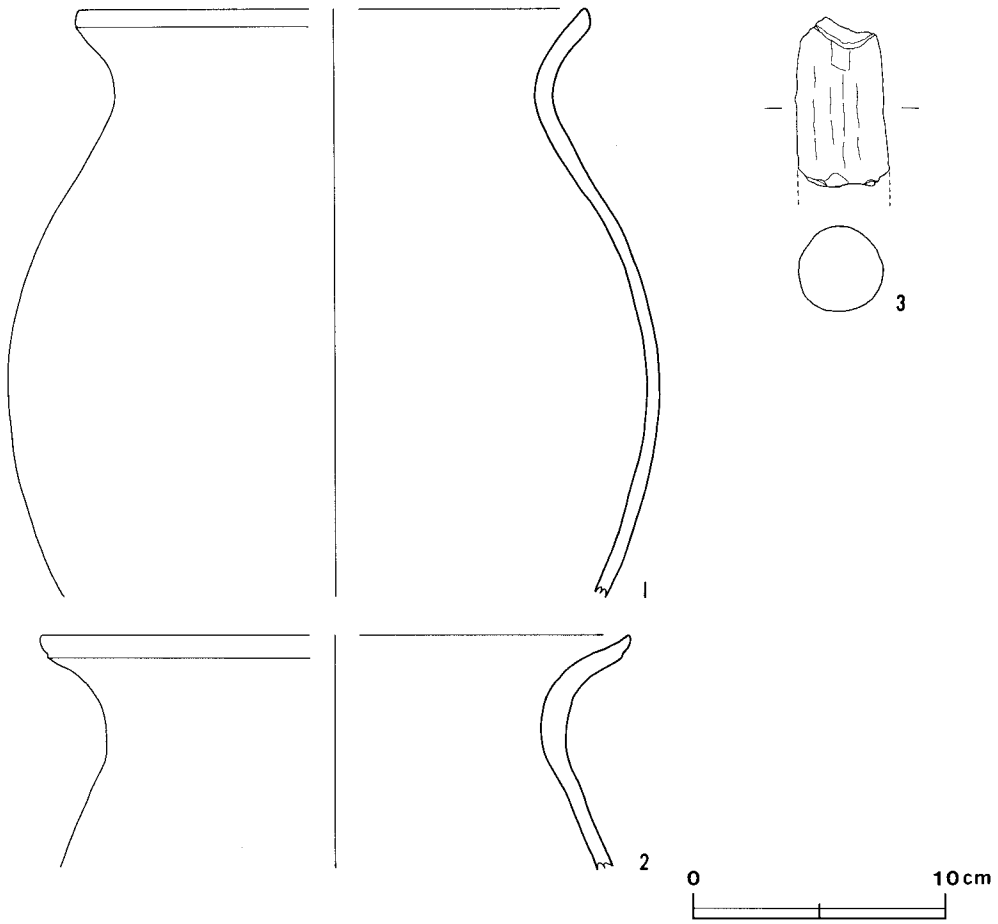
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.1 B 4.4	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・長石 灰褐色 普通	80% 口縁部外面黒色処理
2	坏 土師器	A (12.8) B 4.1	底部は丸底であるが，接地面は平坦である。口縁部との境に稜を有する。口縁部はわずかに外傾する。	底部はヘラ削り，接地面に木葉痕が残る。口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・パミス・スコリア にぶい橙色 普通	65% 器内・外面黒色処理
3	坏 土師器	A 12.4 B 4.4 E 12.9	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア 黒色 普通	60% 内面黒色処理

4	甕 土　師　器	A　13.2 B（15.2） E（15.7）	底部から胴部にかけては球形を呈し，胴部中位に最大径を有する。口縁部は短く外反する。	胴部外面は縦方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内外に輪積痕が残る。	石英・長石・礫にぶい赤褐色 普通（２次）	50%

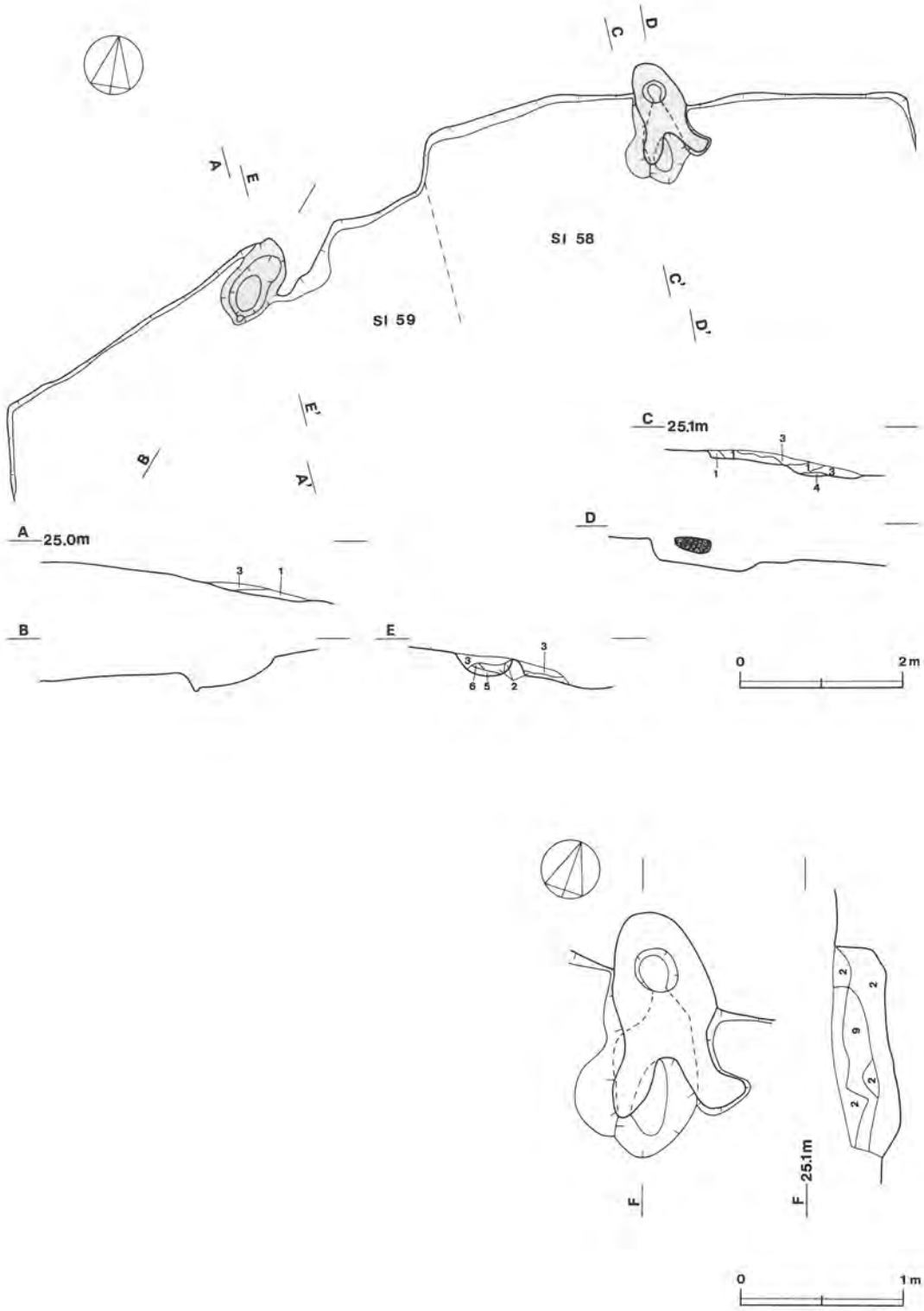
第58号住居跡（第32図）

本跡は，F8h9区を中心に確認された住居跡で，第59号住居跡と重複している。新旧関係は，不明である。

本跡の確認された場所は，南に向って傾斜しており，さらに遺構の南側３分の２近くが根切溝によって撹乱を受けており，全体の形状等は不明である。規模は東西方向だけ確認でき，5.98m



第31図　第58号住居跡出土遺物実測図



第32図　第58・59号住居跡実測図

である。確認できた壁は北側だけで，垂直に立ち上がっている。壁高は，30cmである。床はほとんど確認できない。ピットも，検出されていない。カマドは北壁中央部に山砂で構築されており，残存状態は非常に良好である。カマドの全長は154cm，最大幅105cmを測り，煙道は径25cmの円形を呈している。火床部の掘り込みは長径76cm，短径50cmの楕円形で，深さは15cmである。

覆土はカマド周辺にだけ残っており，遺構全体の様子は観察できていない。

遺物は，カマド西側の床面から土師器の坏・甕（1，2）2点，カマド内からは，支脚が出土している。他に，土師器・須恵器片65点が出土している。

出土遺物観察表（第31図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A (20.2) B (23.4)	胴部は外傾して立ち上がり，中位で胴部最大径に達した後内傾する。口頸部は「く」の字状に外反し，端部は上方につまみ出されている。	器内・外面とも荒れていて，調整痕不明。	石英・長石・スコリア・雲母 褐色 普通（2次）	30%
2	甕 土師器	A (23.4) B (9.3)	胴部は内傾して立ち上がり，口縁部はくずれた「コ」の字状を呈する。口縁端部に稜を有する。	胴部内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・石英・長石 にぶい黄橙色 良好	20%
3	支脚 土製品	全長(6.8) 径 (3.4)	基部を欠損している。			

第63号住居跡（第33図）

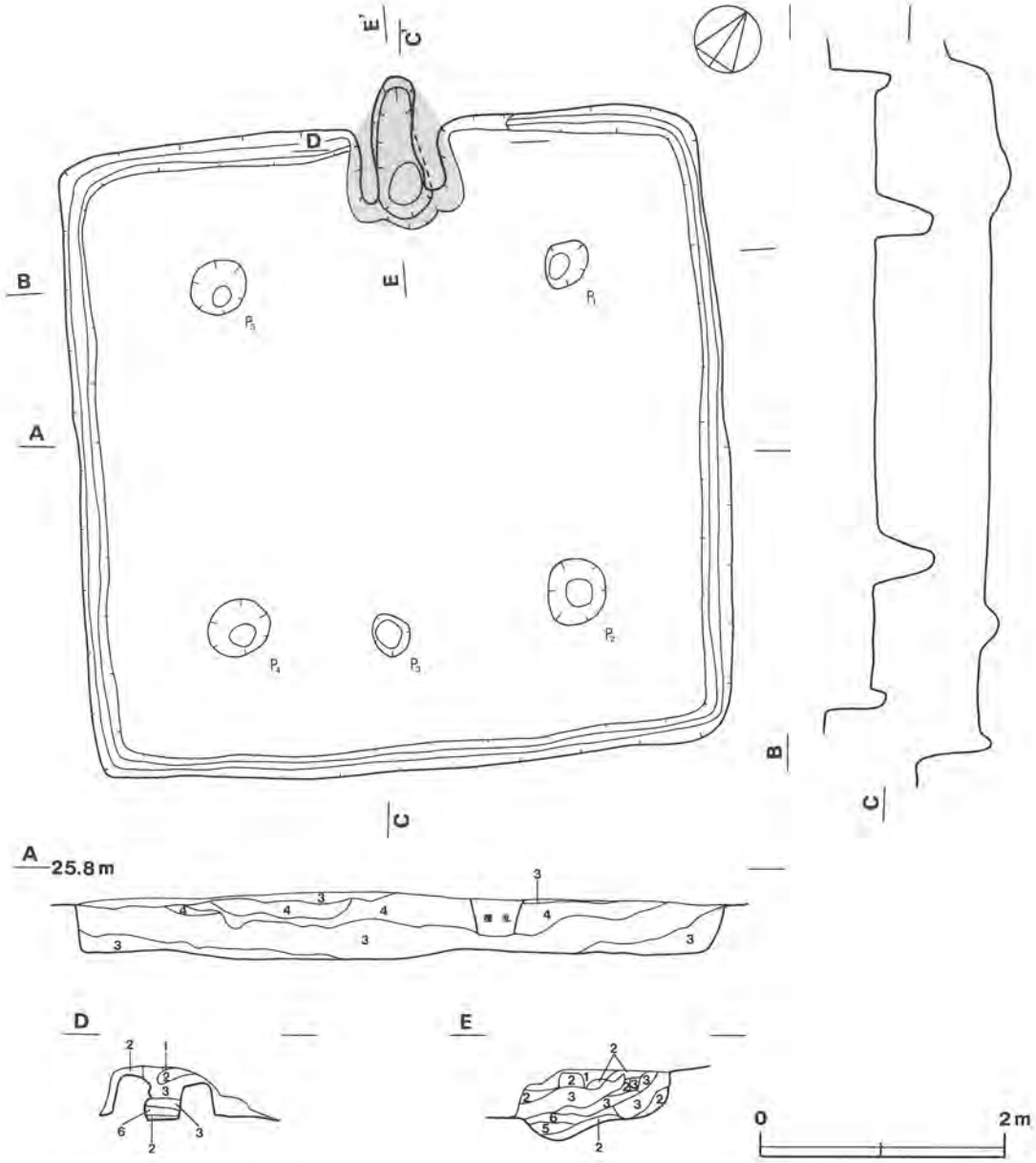
本跡は，F10h_2区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸5.40m，短軸5.38mで，主軸方向は，N－38.5°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは45cmである。壁溝は全周しており，上幅10～15cm，下幅4～11cm，深さ10～14cmである。床は平坦で硬く，特にピットに囲まれた内側は非常に硬く締っている。ピットは，5か所検出されている。検出された位置からみて，P_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と思われ，径55～72cm，深さ43～50cmである。P_3は，入口に関するピットであろう。カマドは北壁中央部に粘土で構築され比較的よく残っており，全長138cm，最大幅95cmを測る。火床部は，長径37cm，短径25cmの楕円形に床を20cm掘り下げてあり，煙道は外に40cm張り出している。

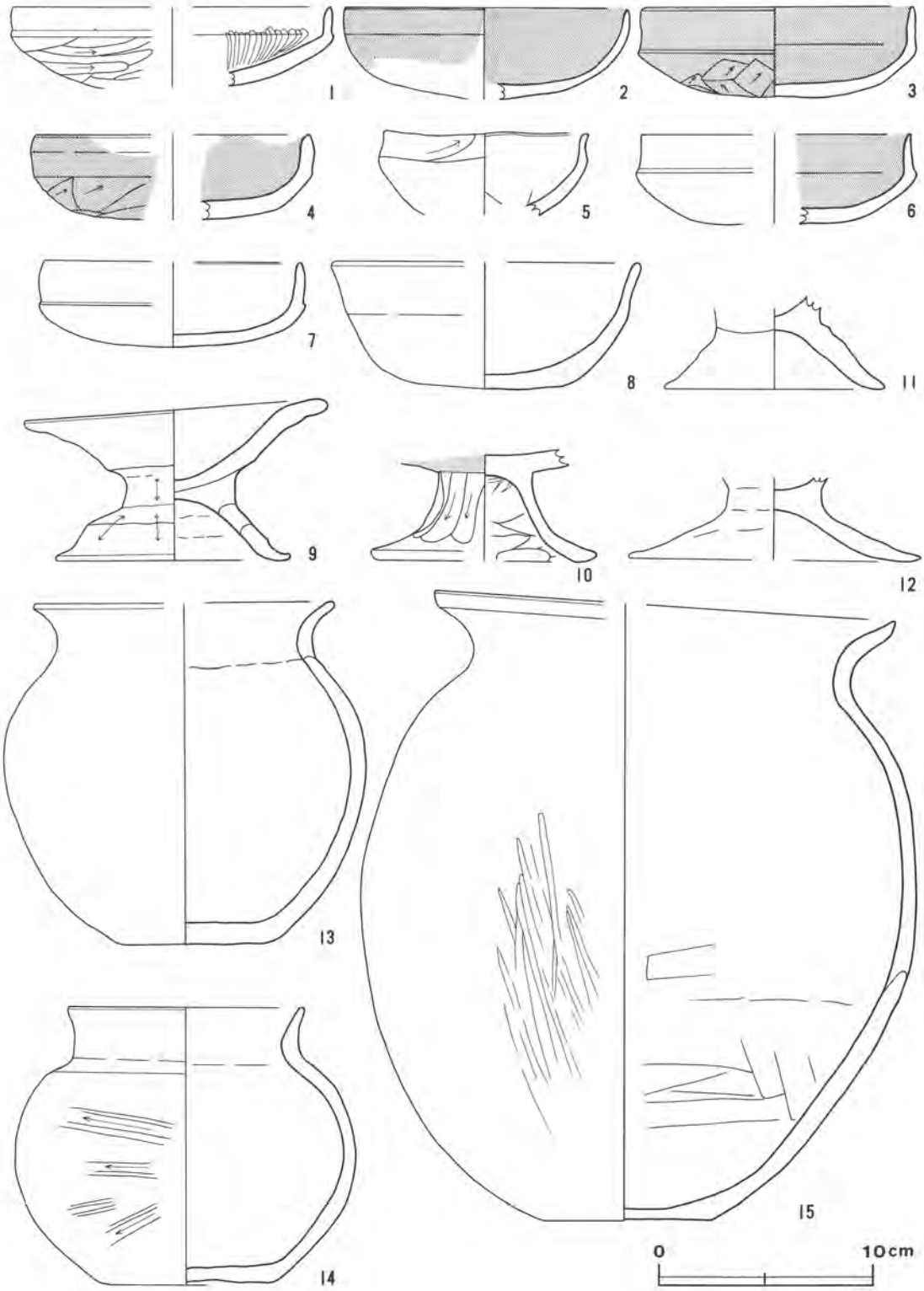
覆土は4層に大別される。1層は焼土粒子と炭化物を少量含む暗褐色土，2層は炭化物中量，焼土ブロック及びハードロームブロック少量を含む暗黒褐色土，3層はロームブロック中量，焼土粒子少量を含む暗褐色土，4層はロームブロック多量，炭化物少量を含む暗褐色土である。

遺物は極めて多く，そのほとんどが土師器片である。形状のわかる土器も全て土師器で，坏（1，2，3，4，5，6，7）7点・甕（16，18，19）5点・壺（14）・埦（8）・高坏（9，10，11，

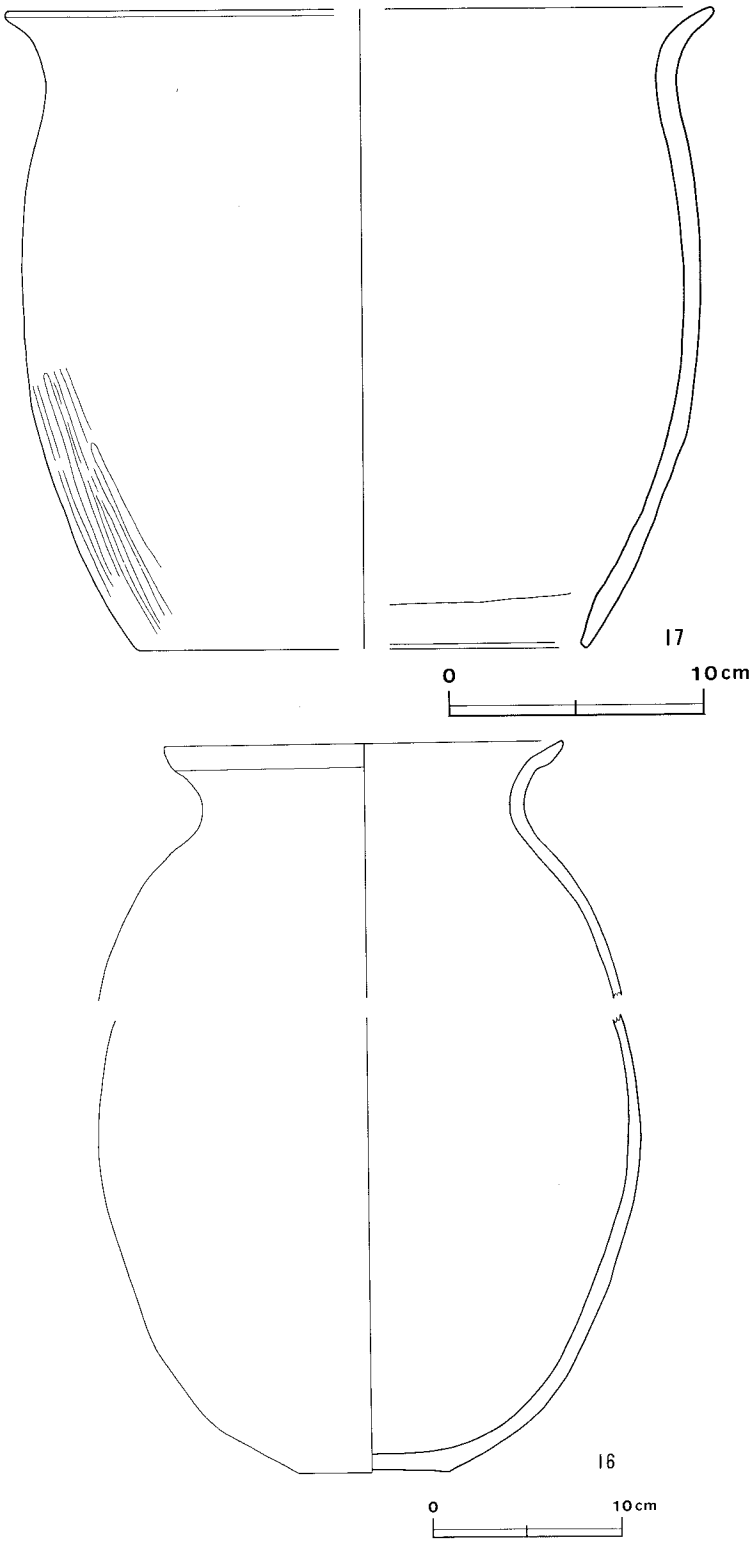
12）4点・甑（17，20）2点・支脚2点が出土している。全て3～4層からの出土である。土師器片は2,078点出土しているが，須恵器片はわずか8点だけである。他に，刀子（21）が覆土から出土している。



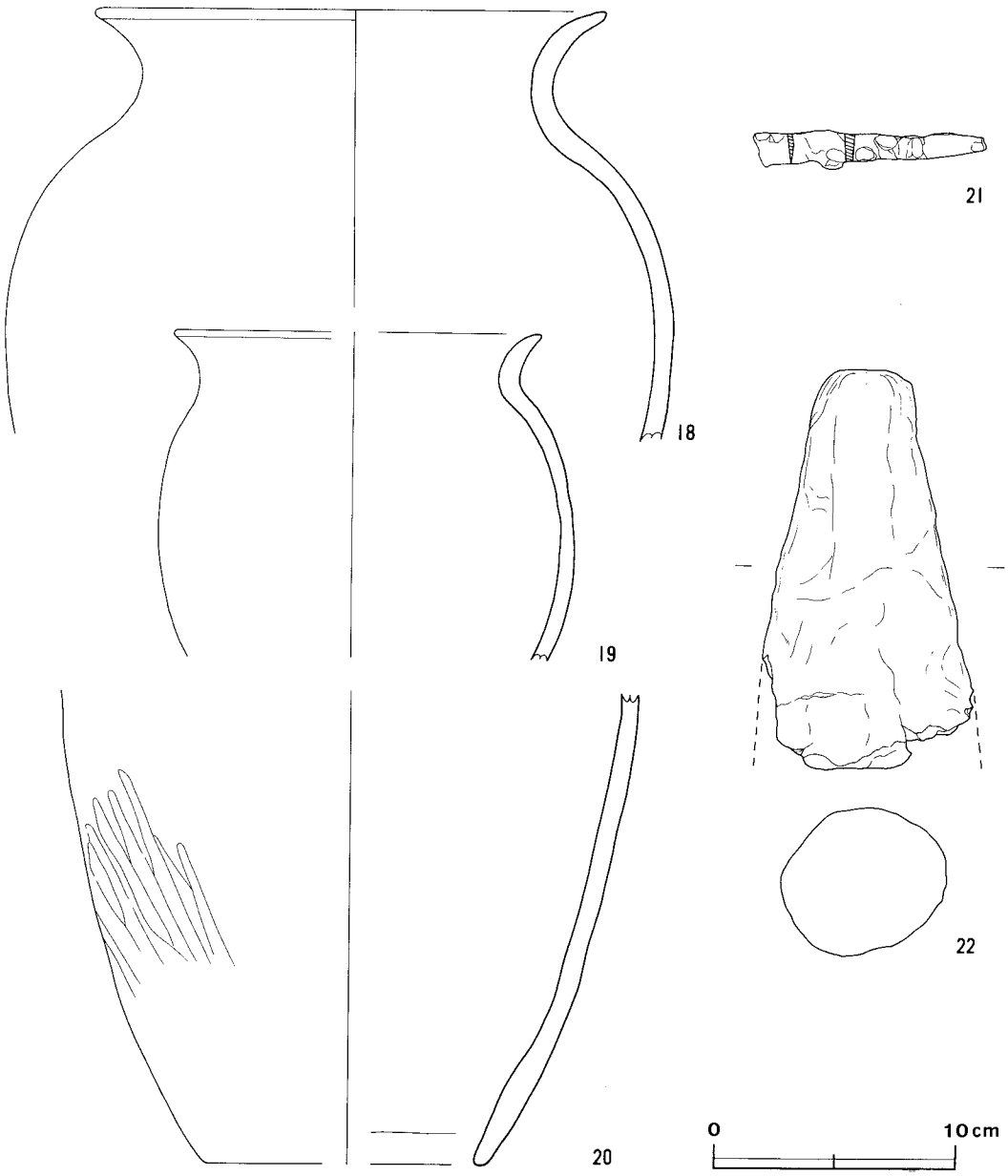
第33図　第63号住居跡実測図



第34図　第63号住居跡出土遺物実測図（1）



第35図　第63号住居跡出土遺物実測図（２）



第36図　第63号住居跡出土遺物実測図（３）

出土遺物観察表（第34・35・36図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	坏 土師器	A (14.9) B　3.7	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立し，端部は尖る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，体部内面は放射状のヘラ磨き調整。	スコリア・砂粒 にぶい赤褐色 普通	15%

2	坏 土師器	A 13.2 B (4.3)	底部は丸底で，なだらかに立ち上がり，口縁部は尖る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。底部と口縁部の境に輪積痕が残る。	長石・砂粒 橙色 普通	70% 内面及び口縁部外面黒色処理
3	坏 土師器	A 12.6 B 4.3	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・石英・パミス 黒色 普通	70% 内・外面黒色処理
4	坏 土師器	A (12.8) B (4.0)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立し，端部はやや内傾する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	スコリア・砂粒 浅い黄橙色 普通	35% 内・外面黒色処理
5	坏 土師器	A 9.5 B (3.9) E 9.7	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反ぎみに直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，底部内面はヘラナデ調整。	スコリア・砂粒 橙色 普通	70% 内面及び口縁部外面黒色処理
6	坏 土師器	A (12.8) B (4.2) E (13.1)	底部は丸底であるが，接地面はやや平坦である。口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部はわずかに内傾し，端部で外反する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒 暗灰色 普通	30% 内面黒色処理
7	坏 土師器	A (12.1) B 4.0 E (12.5)	底部はやや扁平な丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内湾ぎみに直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，底部内面はナデ調整。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	70%
8	塊 土師器	A (14.4) B 6.0	底部は扁平な丸底で，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部との境にあまい稜を有する。口縁部はわずかに外反して開く。	体部から底部にかけてヘラ削り，口縁部外面は横ナデ，内面はヘラナデ調整。底部に木葉痕が残る。	雲母・長石・石英・礫 橙色 普通（2次）	70%
9	高坏 土師器	A 14.2 B 7.6 D 10.9	坏部は，体部下端に稜を有し，外方向に開いて口縁部に至る。口縁部はやや外反する。脚部は坏底部から直線的に短く下がり，その後下方に大きく開く。脚先端部は外反する。	坏部は内・外面は横ナデ，脚部外面は縦方向のヘラ削り調整。脚部内面には輪積痕が残る。全体にひずみがある。	雲母・長石 にぶい赤褐色 良好	100%
10	高坏 土師器	B (5.3) D 10.5	脚部片である。坏底部から外反ぎみに下がり，その後大きく外反して先端部に至る。	外面上位は縦方向のヘラ削り，下位は横ナデ，内面は多方向のヘラ削り調整。	スコリア・砂粒 灰褐色 普通	40% 坏部外面黒色処理
11	高坏 土師器	B (3.7) D 10.2	脚部片である。脚部は「ハ」の字状に外下方に下がり，先端部でわずかに外反する。	ナデ調整。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	35%
12	高坏 土師器	B 3.9 D (13.7)	脚部片である。脚部は「ハ」の字状に大きく開いて下がり，先端部は尖る。	全面ナデ調整であるが，やや雑な仕上りで，器面に凹凸がのこる。	雲母・砂粒 極暗赤褐色 普通	30%
13	甕 土師器	A (14.0) B 16.2 C 7.1 E 16.9	底部は平底で，胴部は球状を呈し，上位に胴部最大径を有する。口縁部は外反する。	胴部内外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。底部には木葉痕が残る。	砂粒・礫・雲母・長石 明赤褐色 普通（2次）	70%

14	壺 土師器	A 11.0 B 13.1 C 8.1 E 16.0	底部は平底であるが，やや凹凸がある。胴部はやや扁平な球状を呈し，胴部最大径は中位にある。口縁部は外傾して開き，胴部との境に稜を有する。	底部及び胴部内・外面はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。口縁部に輪積痕が残る。	雲母・石英・パミス にぶい橙色 普通	100%
15	甕 土師器	A (21.5) B 29.8 C 8.0 E (25.9)	底部は平底である。胴部は内湾しながら外上方に立ち上がり，中位で胴部最大径に達した後内傾して口縁部に至る。口縁部は短く外反して立ち上がる。	底部はナデ，胴部外面は縦方向のヘラ磨き，内面はヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内面に輪積痕が残る。	雲母・長石・石英 礫 明黄褐色 普通	50%
16	甕 土師器	A 21.0 B (37.8) C (7.9) E (28.6)	長胴の甕で，底部は平底である。胴部は内湾しながら立ち上がり，中位で胴部最大径に達し口縁部に至る。口縁部は外反して開き，端部に稜を有す。	胴部外面はヘラ磨き，内面はヘラナデ調整と思われるが，荒れているため明確ではない。	雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	50%
17	甑 土師器	A (27.8) B 25.4 C (17.4)	胴部は内湾しながらやや外傾して立ち上がり，口縁部は短く外反する。底部は全面が開孔している。	胴部外面下位はヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ，底部の開孔部はヘラ削り調整。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	45%
18	甕 土師器	A 21.1 B (17.8) E (27.6)	胴部最大径は胴部上位にあり，口頸部は強く外反する。	胴部外面上位はヘラ削り，中位はナデ，内面はヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	30%
19	甕 土師器	A (15.2) B (13.6)	胴部は内湾しながら立ち上がり，口頸部は外反して立ち上がる。	全面荒れていて，調整痕不明。	石英・長石・雲母 礫 赤橙色 普通（2次）	40%
20	甑 土師器	B (19.6) C (11.5)	胴部はわずかに内湾しながら，外上方に立ち上がる。底部は全面が開孔している。	胴部外面はヘラ磨き，内面はナデ調整。	長石・石英・雲母・礫・スコリア にぶい黄橙色 普通	30%
21	刀子 鉄製品	全長(9.7) 幅 (1.3) 重さ(14.6g)	茎部は残存しているが，刃部の大半を欠損している。			50%
22	支脚	全長(16.7) 径 (6.9)	形状は円錐状を呈し，頂部は平坦に整形されている。基部は欠損している。	粘土塊から整形。		70%

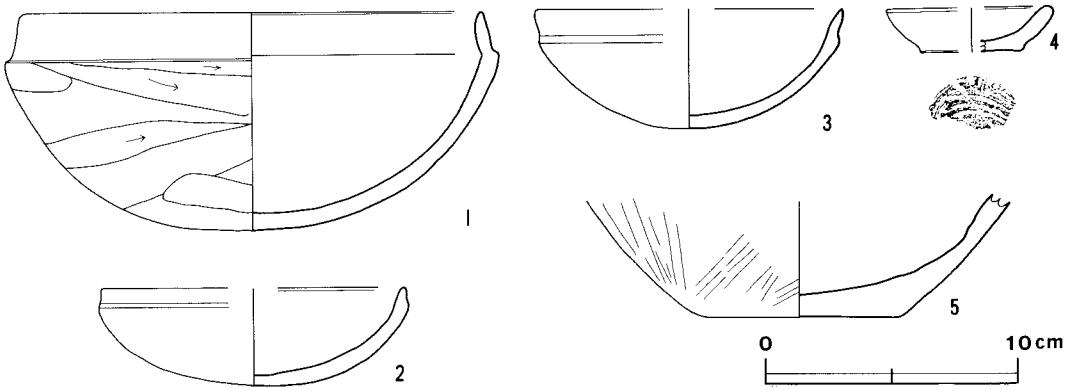
第65号住居跡（第38図）

本跡は，F9i_0区を中心に確認された住居跡で，本跡の南東側は第64号住居跡と重複し，東壁南側から床にかけて第64号住居跡に切られており，本跡の方が古い。

平面形は方形を呈し，規模は長軸6.78m，短軸6.76mで，当調査区の住居跡群のなかでは大型の住居跡である。主軸方向は，N－29°－Wである。東壁南側とカマドの西側の壁は消失している。他の壁は垂直に立ち上がり，高さは10～25cmである。壁溝は第64号住居跡と重複している部分を除き，全周しており，上幅は15～30cm，下幅は７～19cm，深さは４～７cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，９か所検出されている。位置や大きさからみて，P_1・P_3・P_7・P_9が主柱穴と考えられる。主柱穴の径は98～105cm，深さは54～66cmで，断面は底が丸みを持った「V」字状である。カマドは，北壁中央部に粘土で構築されており，長さ55～75cmの袖部が残っている。火床部の掘り込みは，認められない。煙道は，30cm外に張り出している。

覆土は１層で，ロームブロック・焼土粒子・炭化物をそれぞれ少量含む暗褐色土である。

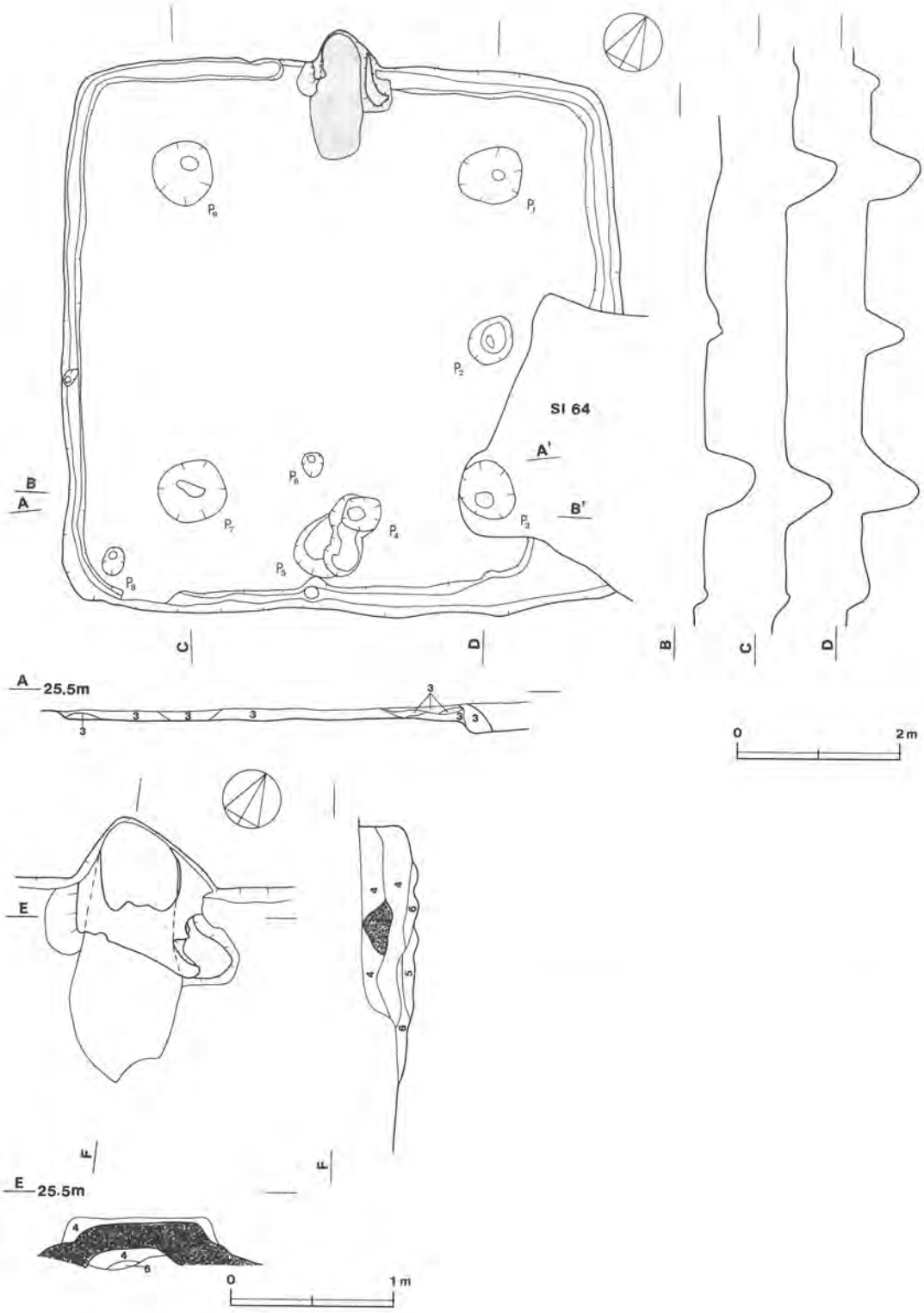
遺物は，土師器の坏（１，２，３）３点･甕（５），土師質の小皿（４）が床面から出土している。他に，土師器・須恵器片198点が出土している。



第37図　第65号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第37図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 18.4 B 8.7	底部は丸底で，半球形を呈し，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾し，端部は尖る。	底部は斜位のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・砂粒 明赤褐色 良好	95%
2	坏 土師器	A 12.0 B 3.8	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は短く直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒 黒褐色 普通	50% 内・外面黒色処理
3	坏 土師器	A (12.2) B 4.7	底部は丸底で深く，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや外傾し，端部は尖る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	30%



第38図　第65号住居跡実測図

4	皿 土師質	A（6.5） B 1.8 C（3.9）	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外傾して開く。	底部は糸切り後部分的にヘラ削り，体部は横ナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	30%
5	甕 土師器	B（5.1） C 7.6	底部片。底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	底部及び胴部外面はヘラ磨き調整。内面は荒れがひどく，調整痕不明。	雲母・長石・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	15%

第68号住居跡（第145図）

本跡は，G10a₂区を中心に確認された住居跡で，第67・69・70号住居跡と重複し，さらに南側はエリア外となっている。土層を観察しても，新旧関係は明確にできなかった。

確認できた部分は，カマドと北壁の一部，カマド前面の床だけであり，平面形をはじめ詳細は不明である。残存壁の高さは，10cmである。カマドは火床部から煙道にかけての掘り込みだけ検出され，全長135cm，最大幅56cmである。カマド前面の床は，硬く締まっている。

覆土は1層で，ハードロームブロック，炭化物を少量含む黒褐色土である。

遺物は，土師器の甕（2）が北側の床面から，同じく土師器の坏（1）が覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片52点が出土している。

第39図　第68号住居跡出土遺物実測図

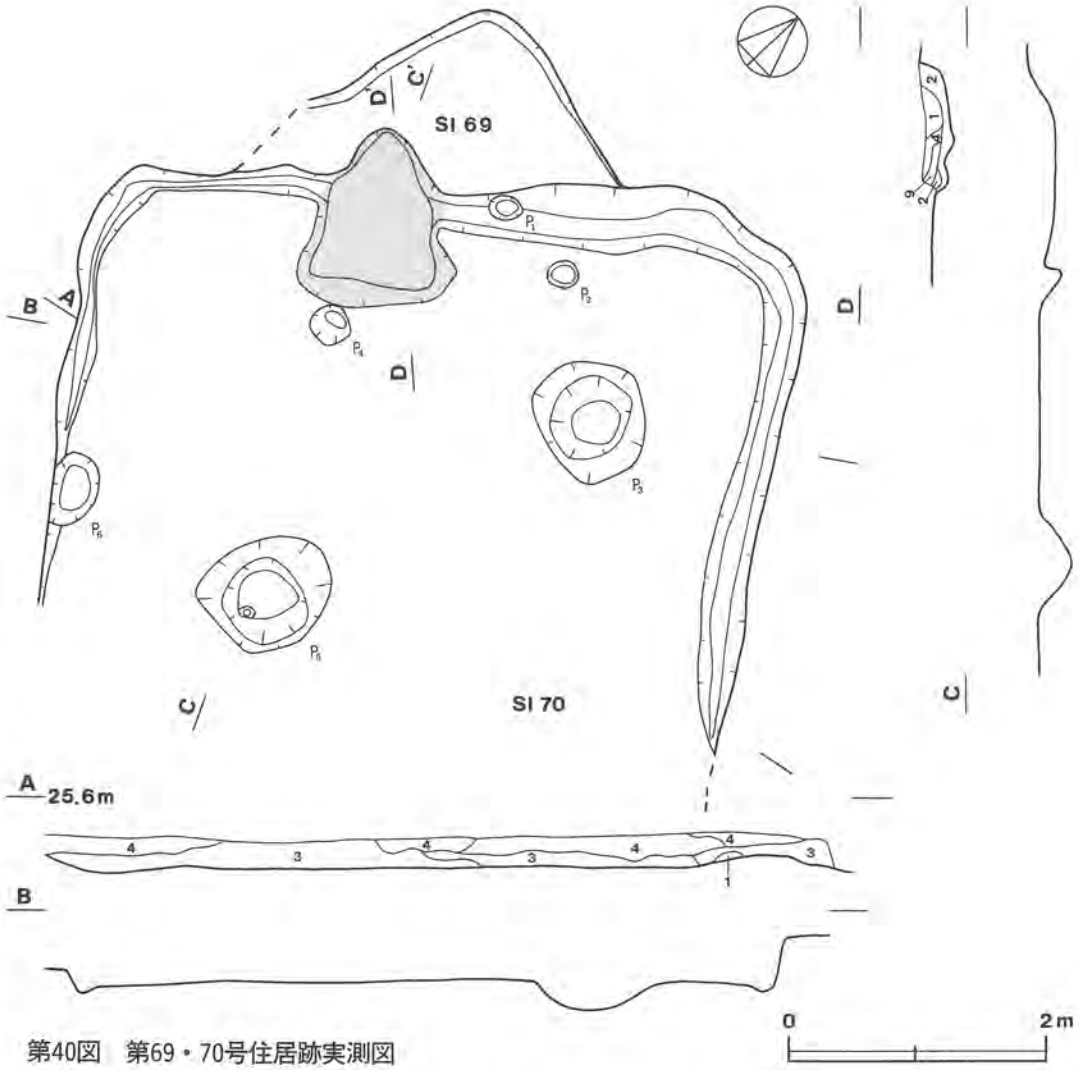
出土遺物観察表（第39図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A（11.8） B 4.7 E（12.4）	底部は丸底を呈しているが，中央部は扁平である。底部と口縁部の境には明瞭な稜を有し，口縁部は直立する。	底部は多方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・長石 にぶい褐色 普通	40% 内面及び口縁部外面黒色処理
2	甕 土師器	B（1.8） C（8.2）	底部片。底部は平底である。	器面が荒れており，調整痕不明。	長石・石英・スコリア・雲母・礫 赤褐色 普通（2次）	10%

第70号住居跡（第40図）

本跡は，F10j₂区を中心に確認された住居跡で，第68・69・71号住居跡と重複しており，本跡の南側３分の１はエリア外のため確認できなかった。土層断面を観察しても，新旧関係は明確にできなかったが，第71号住居跡は本跡を切っており，本跡は第68号住居跡を切って掘り込まれているようである。第69号住居跡は，その形状から推定して本跡より新しいと思われる。

平面形は方形を呈しているものと思われる。規模は，東西方向だけ確認でき，5.64mである。主軸方向は，N－43°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは15～33cmである。壁溝は南壁側を除き全周しており，上幅10～25cm，下幅３～15cm，深さ５cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，５か所検出されている。P_3・P_5は径が95～99cmもあり，深さは26～28cmで，主柱

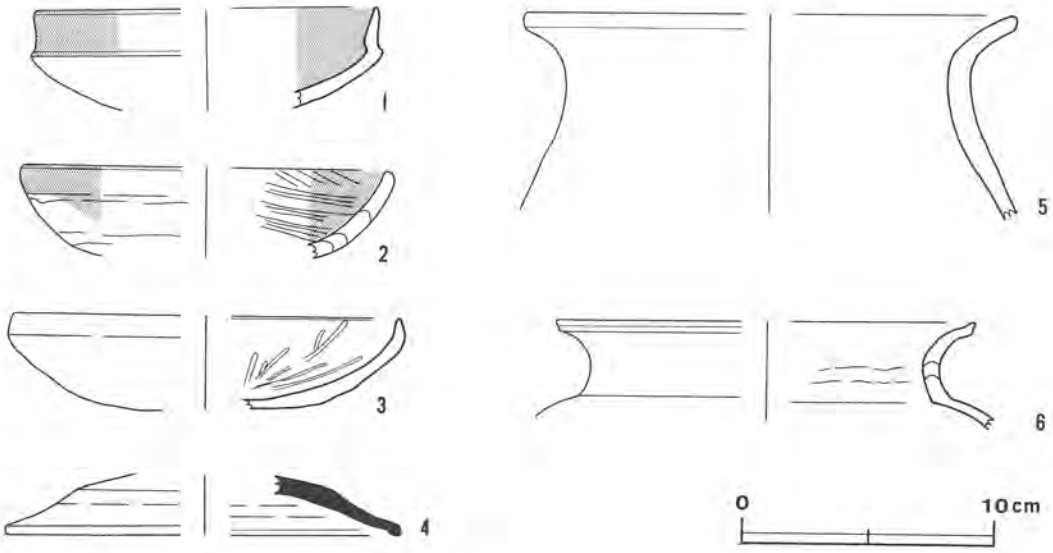


第40図　第69・70号住居跡実測図

穴の一部と思われる。他のピットは径，深さとも小規模で，木痕跡の可能性がある。カマドは北壁西寄りに構築されており，火床部は長径130cm，短径66cmの楕円形で床を10cm掘り下げてある。煙道の張り出しは40cmで，袖部は消失して不明である。

覆土は２層に分けられ，ともにローム粒子と焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の坏（１，２，３）３点・甕（５，６）２点，須恵器の蓋（４）が１層から出土している。他に，土師器・須恵器片178点が出土している。



第41図　第70号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第41図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.6) B (4.0)	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・雲母 褐灰色 普通	10% 内面及び口縁部外面黒色処理
2	坏 土師器	A (14.6) B (3.5) E (14.7)	底部は丸底で，なだらかに口縁部に続く。口縁端部はわずかに内湾する。	底部はヘラ削り，器内面はヘラナデ調整。体部外面に輪積痕が残る。	砂粒 黒色 普通	20% 内・外面黒色処理
3	坏 土師器	A (15.2) B (3.7)	底部は丸底で，口縁部との境にあまい稜をもつ。口縁部は短く，内傾する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内面には，まばらな放射状のヘラ磨きが施されている。	スコリア・長石 褐灰色 普通	20%
4	蓋 須恵器	A (14.3) B (2.5)	天井部は直線的に下がり，口縁部との境にわずかな稜を有する。口縁部は外反ぎみに下がり，端部は垂下する。	天井部は回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	石英・長石・雲母 灰色 普通	40%

5	甕 土師器	A (19.4) B (8.1)	胴部は内傾して立ち上がり，ゆるやかに外反する口縁部に至る。	器面は荒れているが，口縁部内・外面は横ナデ調整と思われる。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	20%
6	甕 土師器	A (16.6) B (3.9)	口縁部片。口縁部は大きく外反し，端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面とも横ナデ調整。内面に輪積痕が残る。	スコリア・雲母 橙色 普通	5%

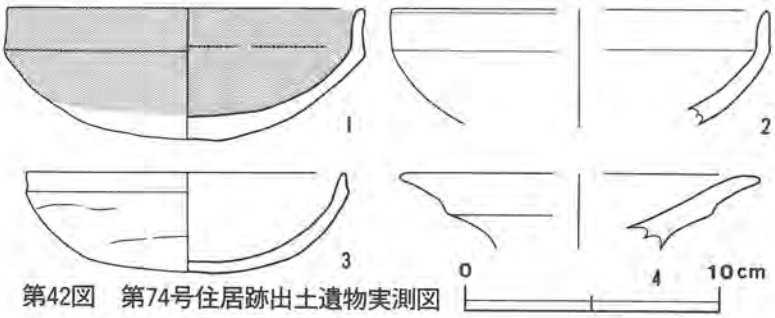
第74号住居跡（第43図）

本跡は，当調査区の南東部H11h_5区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸5.54m，短軸5.29mで，主軸方向は，N－33°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは20～34cmである。壁溝は，上幅10cm，下幅6cm，深さ5～8cmで，全周している。床は平坦で，硬く締っている。ピットは，5か所検出され，位置からみてP_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と考えられる。主柱穴の径は比較的大きく，49～65cmであるが，深さは20～42cmと浅い。P_1・P_2の内壁及び周辺の床や壁は，粘土が露出している。カマドは北壁中央部に粘土で構築されており，袖部が良好な状態で残っている。カマドの規模は，長さ110cm，幅85cmである。火床部は，意図的な掘り込みはなされておらず，床と同一レベルで続いている。煙道の張り出しは，45cmである。

覆土は基本的に1層から成り，焼土粒子及び炭化物を少量含む暗褐色土である。壁近くには，炭化物を少量含み，硬く締まった褐色土が堆積している。

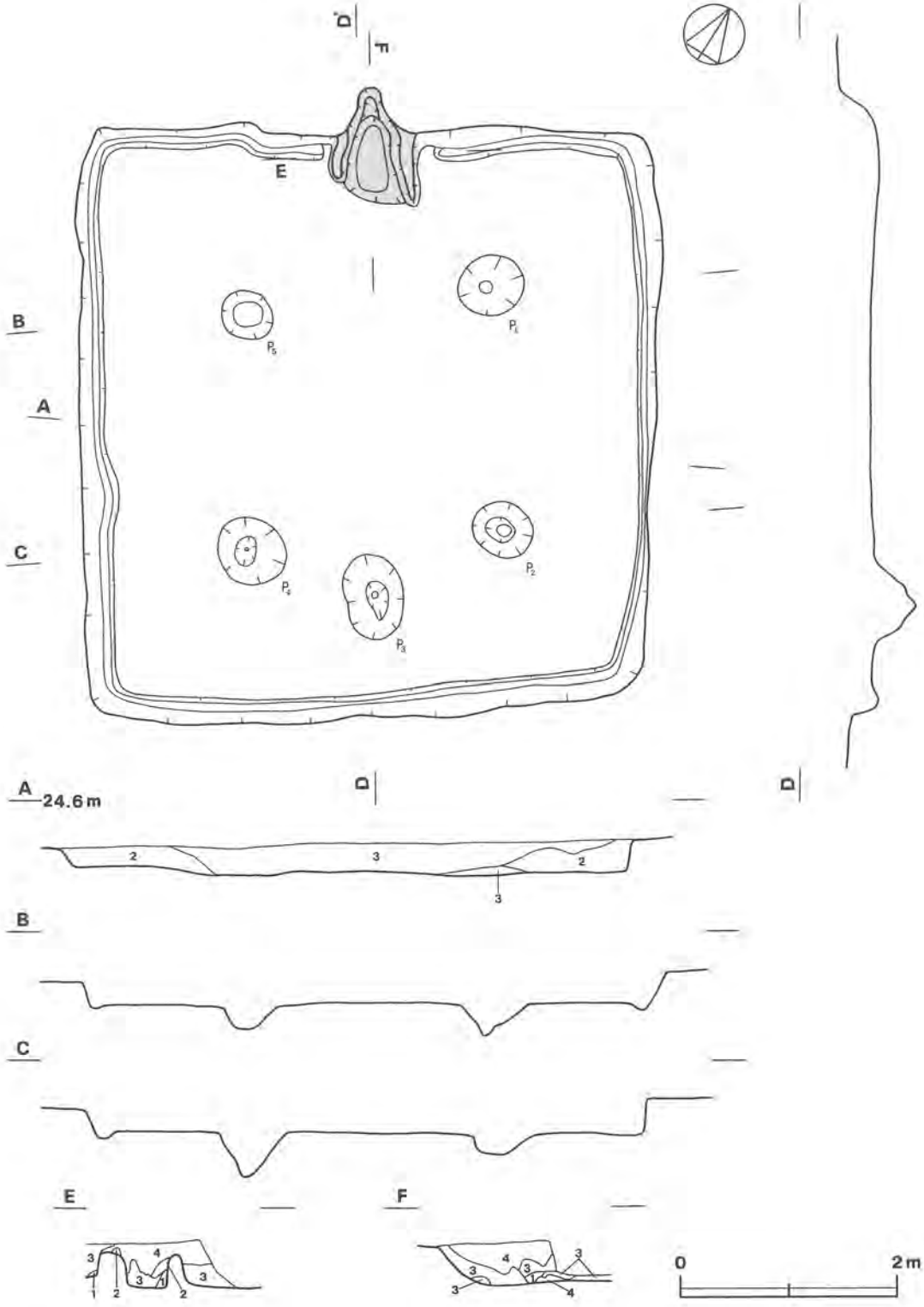
遺物は，土師器の坏（1，2，3）3点が南壁寄りの覆土から出土している。他に，土師器片54点が出土している。



第42図　第74号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第42図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 14.0 B 5.2	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	100% 内面及び口縁部外面黒色処理

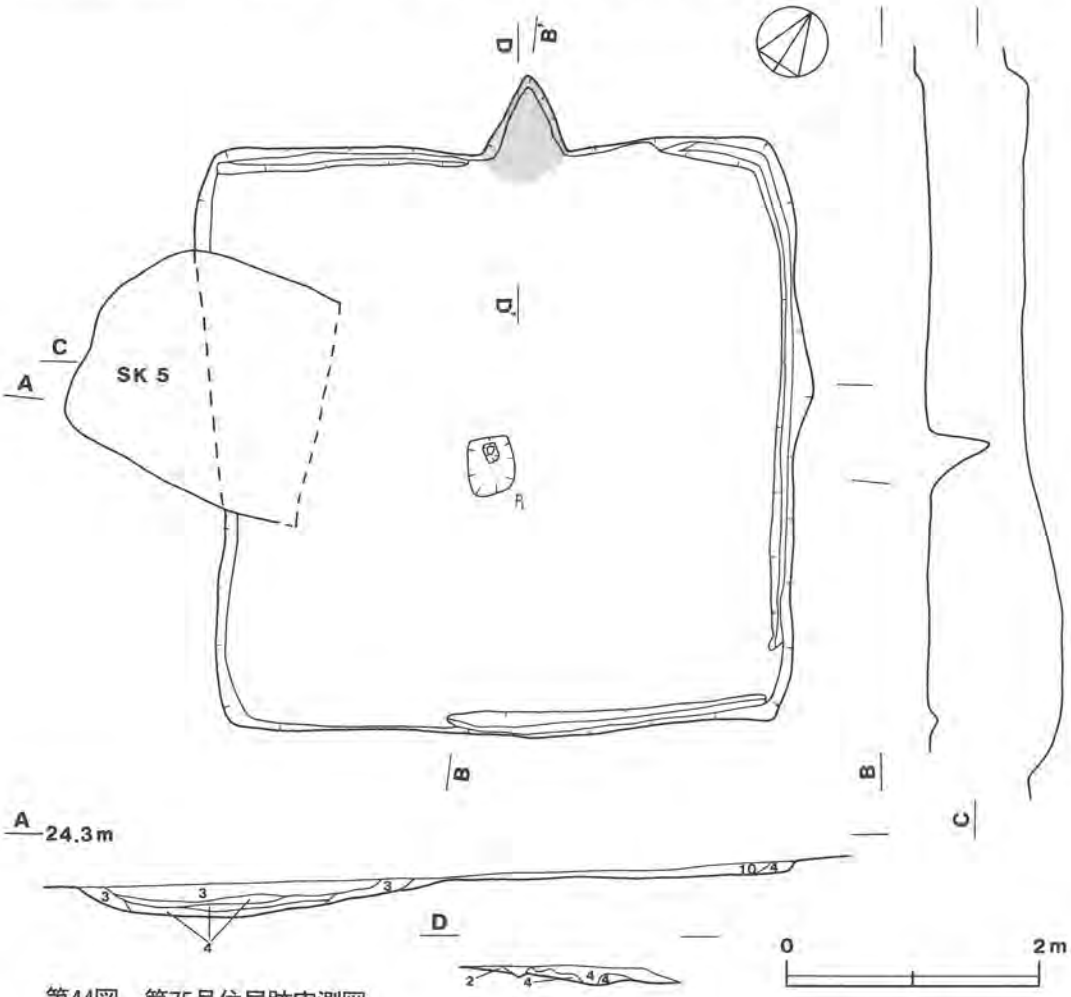


第43図　第74号住居跡実測図

2	坏 土師器	A (14.7) B (4.5)	底部は丸底で，口縁部との境にあまい稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	雲母・スコリア にぶい褐色 普通	20%
3	坏 土師器	A 12.4 B 4.1	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は短く直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器外面に輪積痕が残る。	砂粒 明褐灰色 普通	70%
4	高坏 土師器	A (14.2) B (3.0)	坏部片。体部下位は外反して立ち上がり，中位で稜をなす。口縁部は外反ぎみに開き，端部はやや尖る。	口縁部内・外面は横ナデ，体部下位はナデ調整。	スコリア・長石 浅黄橙色 普通（2次）	20%

第75号住居跡（第44図）

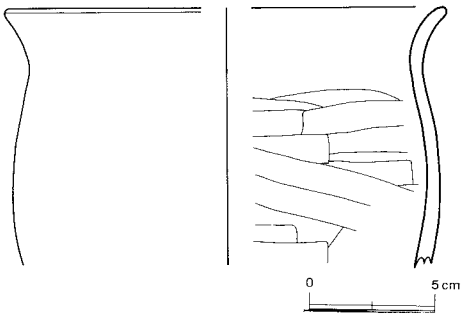
本跡は，H11i₂区に確認された住居跡で，第5号土坑と重複している。土坑が，本跡を切っている。非常に浅い住居跡で，西壁～南壁西側にかけては壁が消失している。



第44図　第75号住居跡実測図

平面形は方形を呈し，規模は長軸4.60m，短軸4.51mで，主軸方向は，N－34°－Wである。残存壁は外傾して立ち上がり，高さは18cmである。壁溝は，上幅15cm，下幅6cm，深さ5cmで西壁を除いた各壁下で検出されているが，本来は全周していたものと考えられる。床は軟らかく，平坦である。ピットは住居跡の中央に，1か所検出されている。長辺47cm，短辺36cmの長方形を呈するピットで，深さは50cmである。カマドは，北壁中央部に痕跡のみ確認できた。

覆土は一層で，焼土粒子及び炭化物を少量含む灰黄褐色土が堆積している。



第45図　第75号住居跡出土遺物実測図

遺物は比較的少量で，土師器の甕がカマド西側の床面から出土している。他に，土師器・須恵器片31点が出土している。

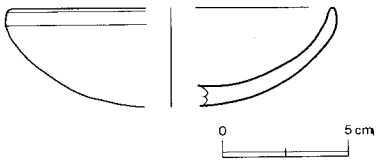
出土遺物観察表（第45図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
	甕 土師器	A (17.2) B (10.2)	胴部は内湾しながら直立ぎみに立ち上がり，口縁部はゆるく外反する。	胴部内面は横及び斜位のヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。胴部外面は磨滅がひどく，調整痕は不明。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	10%

第76号住居跡（第47図）

本跡は，H10h_8区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸5.37m，短軸5.31mで，主軸方向は，N－40°－Wである。遺構確認時に床まで露呈してしまい，東壁と壁溝のみが残されていた。東壁の高さは6cmで，垂直に立ち上がっている。壁溝は全周しており，上幅25～30cm，下幅8～19cm，深さ4～6cmである。床は上面を削られており，本来の床面は残っていない。ピットは，7か所検出されている。検出された位置からみて，P_2・P_4・P_6・P_7が主柱穴と考えられ，径は64～75cm，深さは22～30cmである。

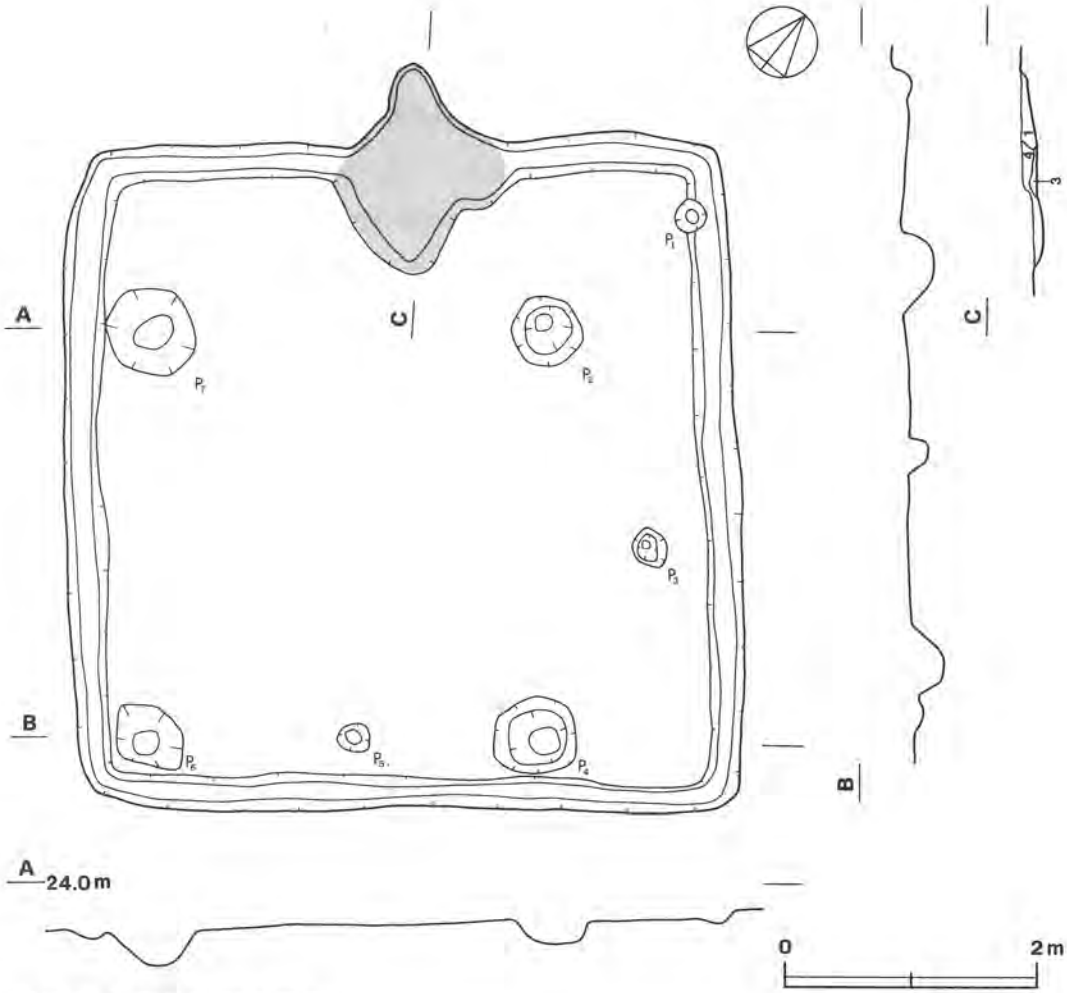


第46図　第76号住居跡出土遺物実測図

カマドは，痕跡のみ北壁中央部に確認された。煙道は，外側に65cm張り出している。

覆土はほとんど残っておらず，観察できなかった。

遺物は全て床面から出土したもので，土師器の坏が出土している。他に，土師器片24点が出土している。



第47図　第76号住居跡実測図

出土遺物観察表（第46図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	坏 土師器	A (13.2) B (3.8)	底部は丸底で，口縁部との境にあまい稜を有する。口縁部は短く，わずかに内傾する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母・スコリア・パミスにぶい赤褐色 普通	15%

第90号住居跡（第48図）

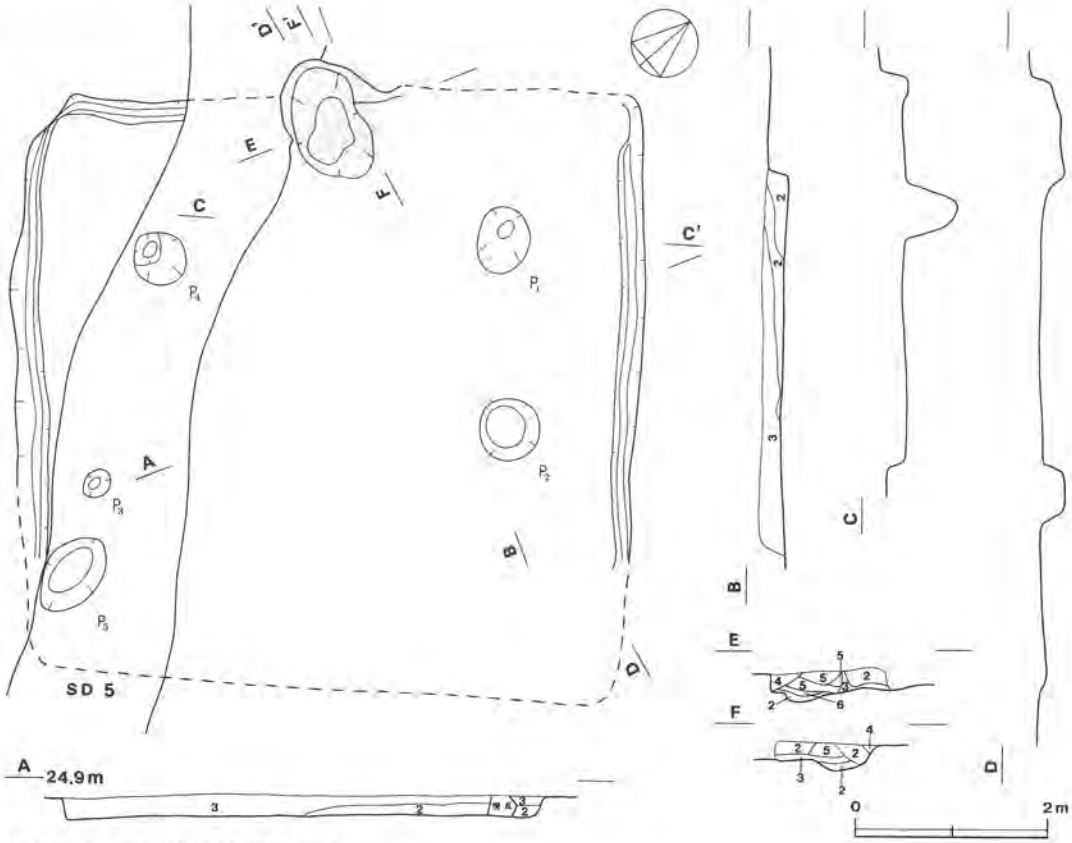
本跡は，G 9 d_4区を中心に確認された住居跡で，第109号住居跡，第５号溝と重複している。本跡は全ての遺構に切られており，最も古いと考えられる。

平面形は，残存壁から推定して方形を呈していたものと思われ，規模は，東西方向で6.61mである。壁は全体の２分の１ぐらいしか残っていないが，垂直に立ち上がっており，高さは20cmであ

る。壁溝は全周していたと考えられるが，確認できたのは東西の壁下及び北壁西側下で，上幅20cm，下幅7cm，深さ5cmである。床は平坦で，中央部はやや締っている。ピットは5か所検出され，位置からみてP_1・P_2・P_4が主柱穴と思われる。3か所とも径は60～70cmで，深さは25～52cmである。P_5は，撹乱孔であろう。カマドは，北壁中央部に構築されている。しかし，大部分は消失しており，火床部と思われる深さ5cmの掘り込みが確認できただけである。

覆土は1層で，ローム粒子及び焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の甕（3，4）2点と支脚がカマド内から，土師器の坏（1，2）2点が覆土からそれぞれ出土している。

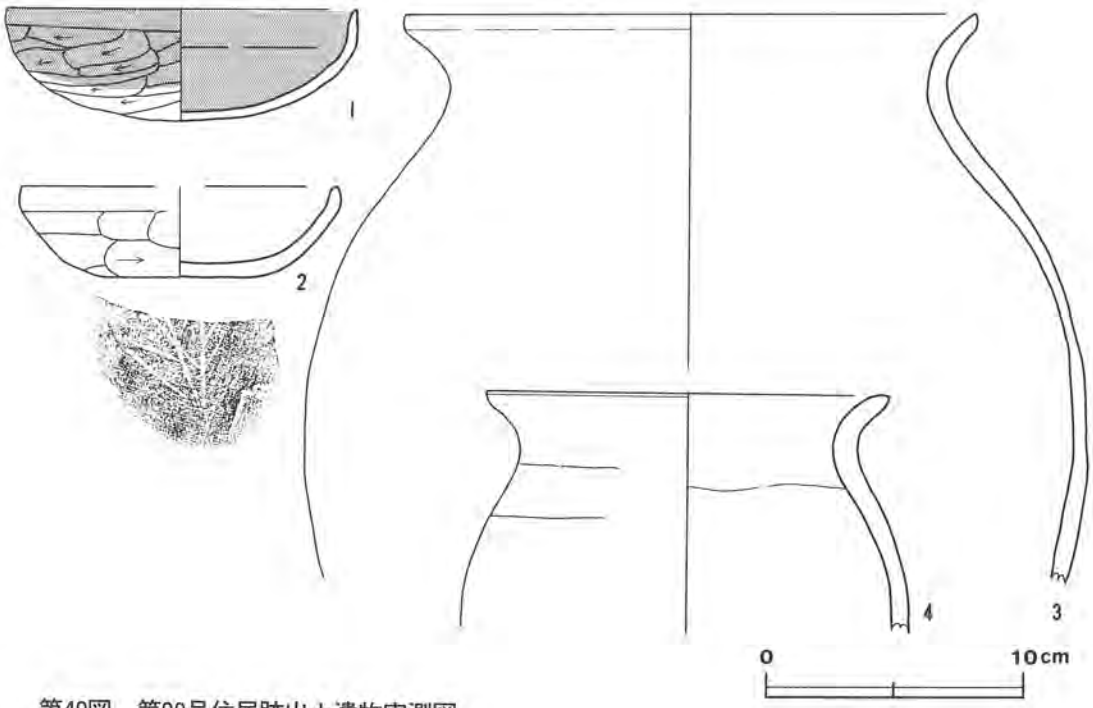


第48図　第90号住居跡実測図

出土遺物観察表（第49図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.9 B 4.4	底部は丸底で，なだらかに口縁部に続く。口縁端部は短く直立する。	底部は横方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・スコリア・長石 にぶい赤褐色 普通	95% 内・外面黒色処理

2	坏 土師器	A (12.5) B 3.6 C (6.0)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁端部は直立する。	体部は横方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。底部に木葉痕が残る。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	40%
3	甕 土師器	A 22.4 B (22.6) E (30.6)	胴部は内湾して立ち上がり，中位で胴部最大径に達し，内傾する。口縁部は外反し，口縁端部は尖っている。	胴部外面はヘラ磨き，内面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・雲母・長石・石英・礫 にぶい橙色 普通	30%
4	甕 土師器	A 15.9 B (9.4) E (17.7)	胴部は内湾ぎみに立ち上がり，内傾して口縁部に至る。口縁部は外反する。	胴部内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	30%

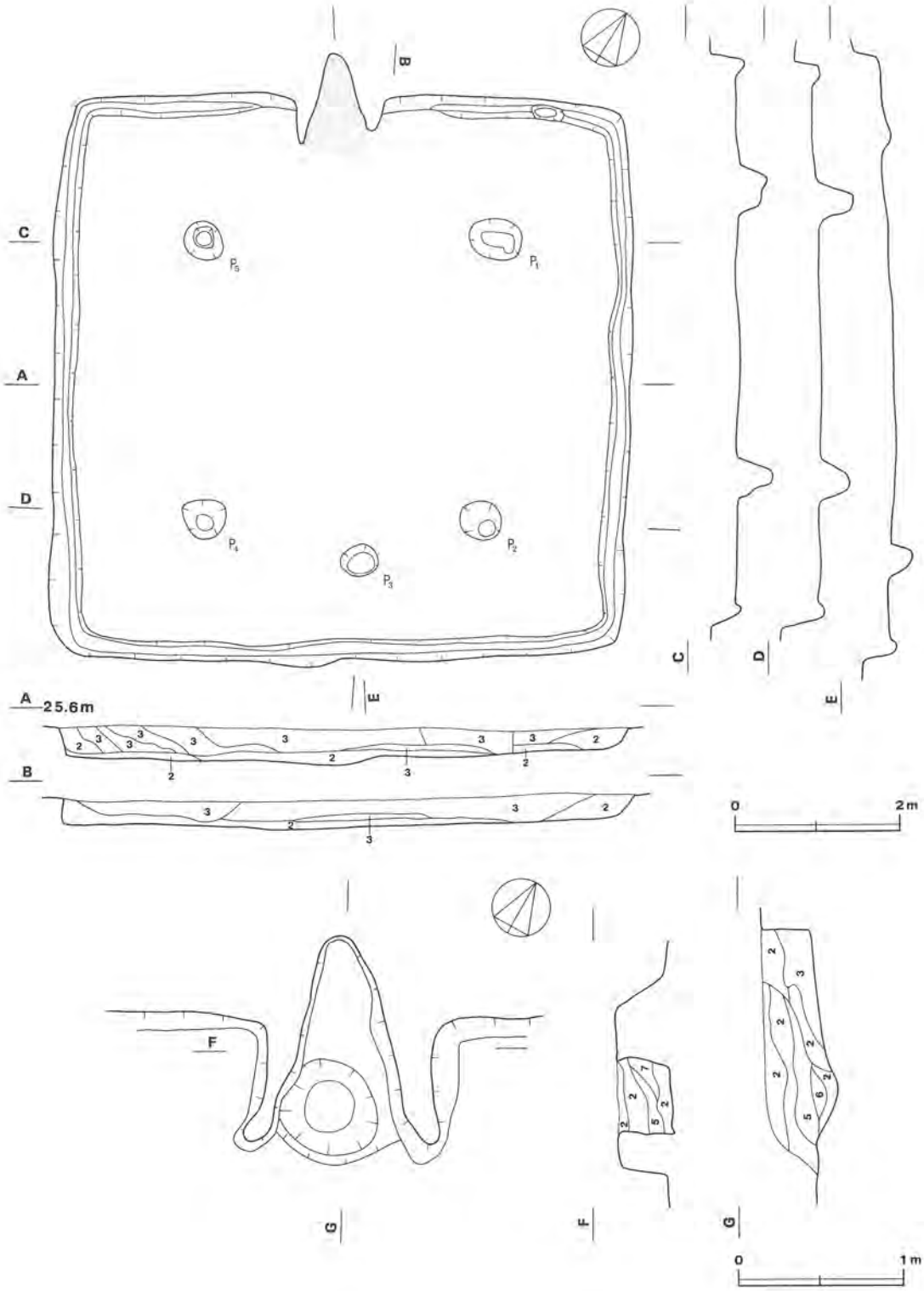


第49図　第90号住居跡出土遺物実測図

第96号住居跡（第50図）

本跡は，E10g₂区を中心に確認された住居跡で，当遺跡で調査した住居跡の中では，最大の規模を有している。

平面形は方形を呈し，規模は長軸7.09m，短軸7.02mである。一辺が7mを越える住居跡は，本跡のみである。主軸方向は，N－33°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは44cmである。壁溝は全周し，上幅15～20cm，下幅8～13cm，深さ10cmである。床は凹凸がみられ，住居跡中央部がやや低くなっている。また，床全面が硬く締まっており，特にピットに囲まれた部分は非常に

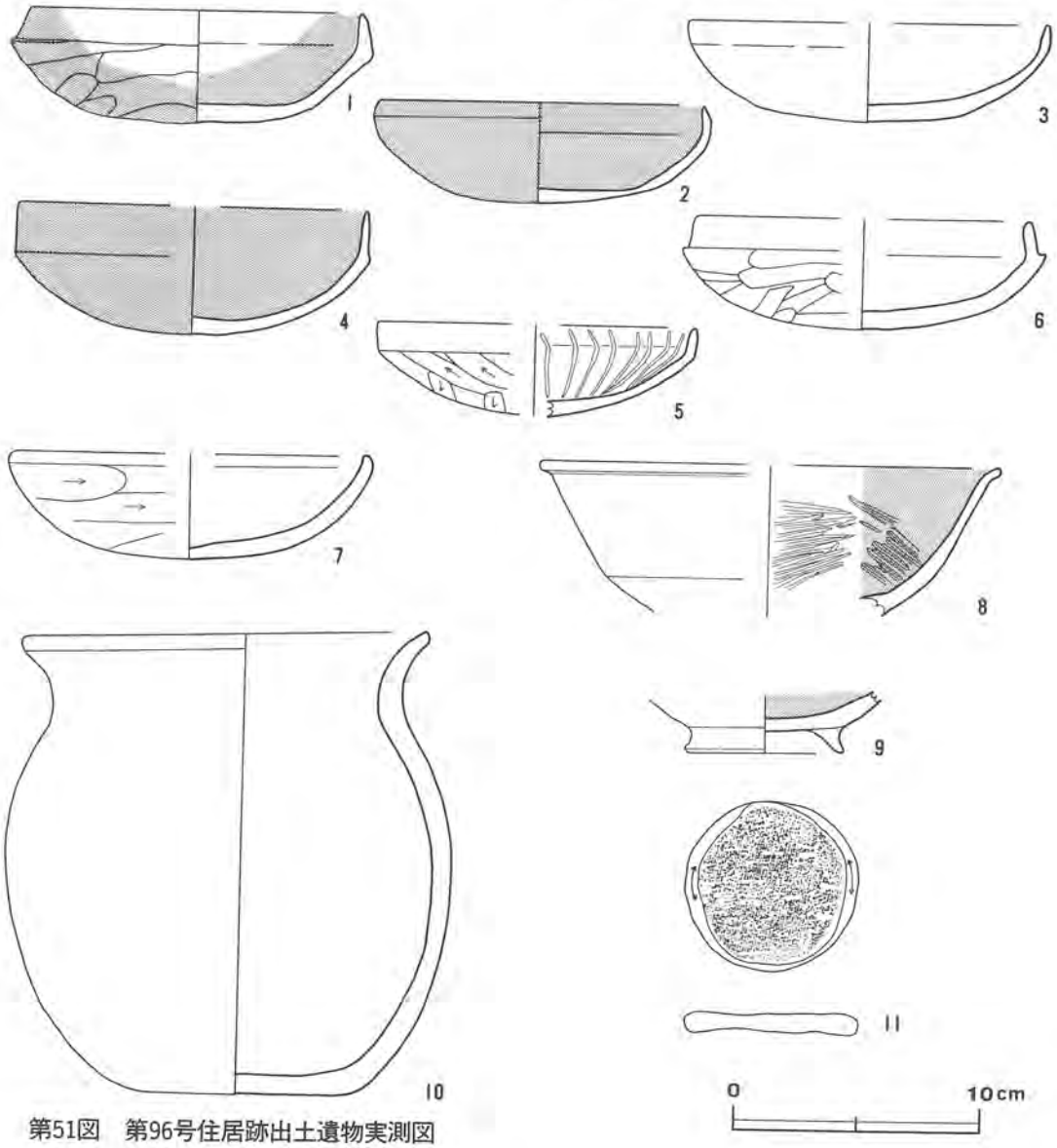


第50図　第96号住居跡実測図

硬く締まっている。ピットは，5か所検出されている。ピットの規模や位置から考えて，P_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と思われる。主柱穴の径は50cm前後，深さは38～53cmである。ピット間の距離は，3.5～3.6mである。カマドは北壁中央部に粘土で構築されており，両袖部が残っている。火床部の掘り込みは径64cmの円形を呈し，深さは8cmで，焼土はあまりみられない。煙道は，60cm外側に張り出している。

覆土は，9層に分けられる。中央部にはローム粒子を多量に含む暗褐色土が堆積し，周辺部にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。

遺物は，土師器の甕（10）がカマド内から，土師器の坏（1，2，3，4，5，6，7，8）



第51図　第96号住居跡出土遺物実測図

8点が床面から，それぞれ出土している。他に，紡錘車，砥石，土師器・須恵器片682点が出土している。

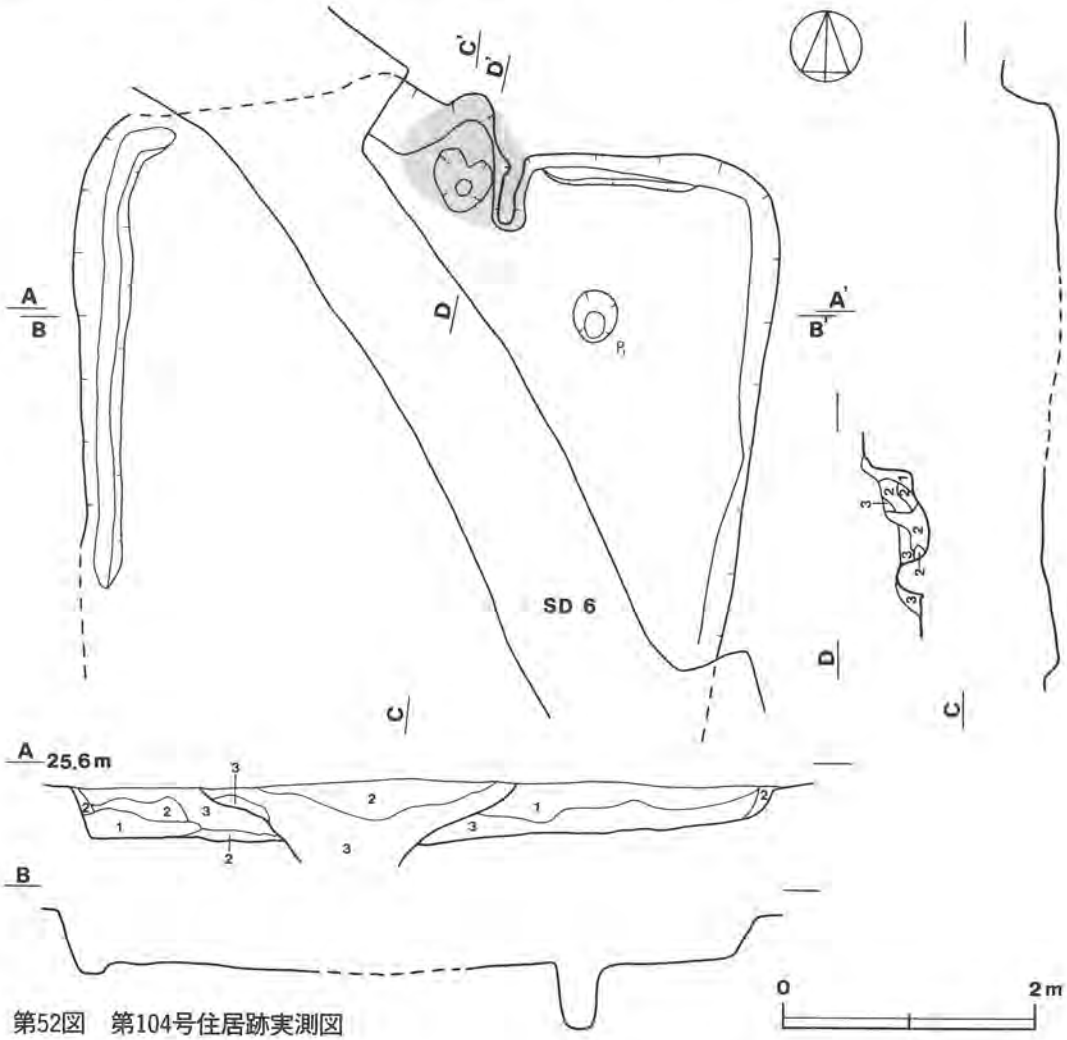
出土遺物観察表（第51図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.5 B 4.6 E 14.7	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は器壁を減じながら，内傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・スコリア・雲母 灰黄褐色 普通	90% 一部黒色処理
2	坏 土師器	A 13.1 B 4.1 E 13.6	底部は丸底で，口縁部とのさかいにわずかに稜が認められる。口縁部は短く内傾し，口縁端部は尖る。器壁は全体に薄い。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒 褐灰色 普通（2次）	90% 内・外面黒色処理
3	坏 土師器	A (14.5) B 4.0	底部は丸底で，なだらかに口縁部につづく。口縁部は直立ぎみに立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	スコリア・長石 にぶい赤褐色 普通	70% 内・外面黒色処理
4	坏 土師器	A (14.2) B 5.2	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	雲母・パミス・長石・石英・礫 黒褐色 普通	65% 内・外面黒色処理
5	坏 土師器	A (13.0) B (3.7)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部は斜位のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内面には，暗文が放射状に施されている。	砂粒 明赤褐色 普通	30%
6	坏 土師器	A (13.5) B 4.4 E (14.7)	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	底部は多方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	30%
7	坏 土師器	A (14.3) B 4.2	底部は丸底で，なだらかに口縁部につづく。口縁部は短く内傾し，口縁端部は尖る。	底部は横方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒 浅黄橙色 良好	40%
8	埦 土師器	A (18.6) B (6.1)	体部は直線的に外傾して開き，口縁部は短く外反する。 底部欠損	体部下端は回転ヘラ削り，体部外面は横ナデ，体部内面は斜位のヘラ磨き調整。	パミス・砂粒 にぶい橙色 普通	20% 内面黒色処理
9	高台付埦 土師器	B (2.2) D 6.4	底部片。底部は平底で，「ハ」の字状の高台が付く。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。高台は貼り付けである。	パミス 橙色 普通	25% 内面黒色処理
10	甕 土師器	A 16.5 B 19.0 C 8.2 E 18.1	平底の底部から，球状の胴部が立ち上がり，中位に胴部最大径を有する。口縁部は外上方に外反する。	胴部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器壁は荒れが目立つ。	石英・長石 褐灰色 普通（2次）	90%
11	円板 土製品	径 7.0 厚さ0.9	土器の底部片を利用しており，周縁部を磨っている。用途不明。			100%

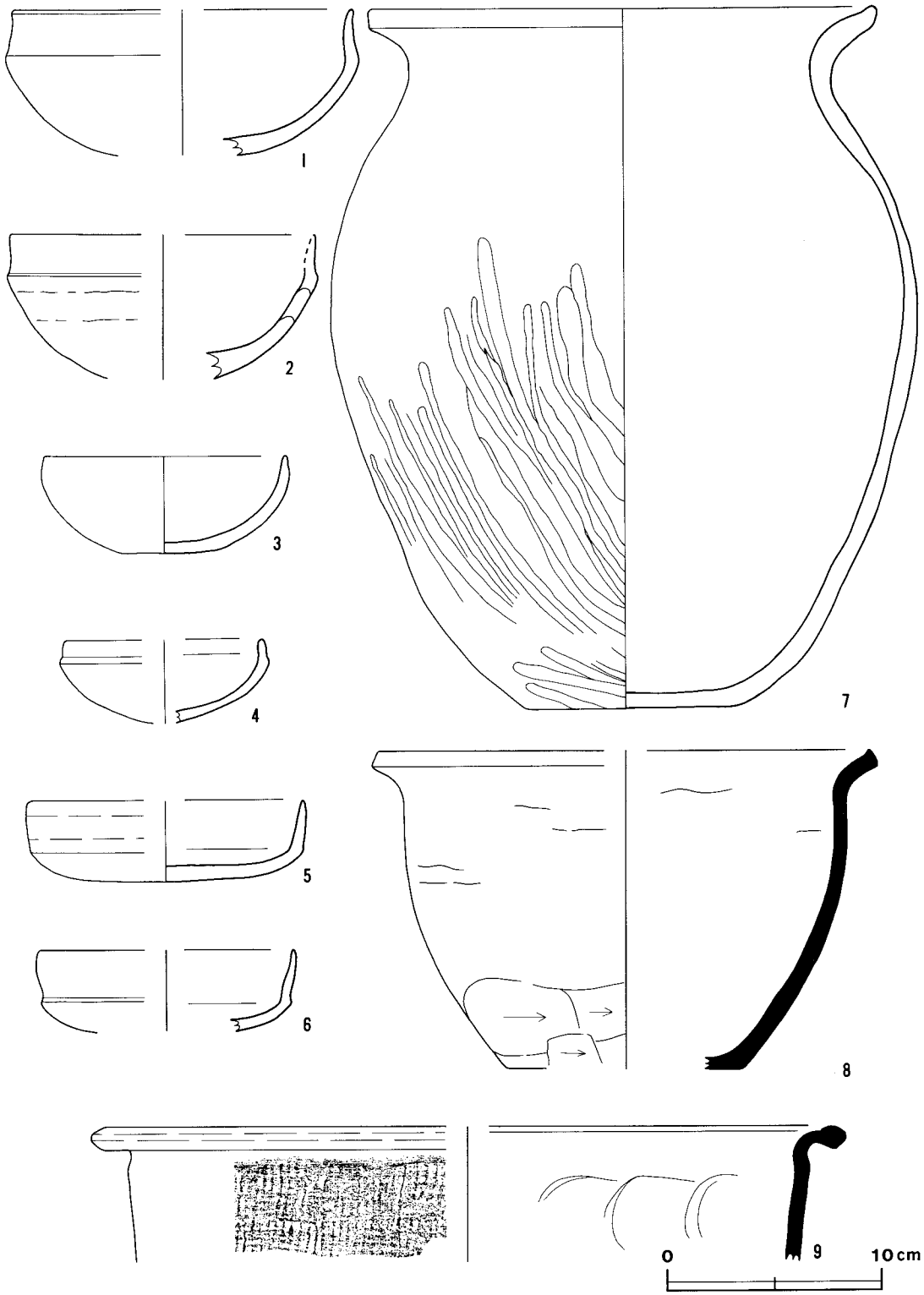
第104号住居跡（第52図）

本跡は，E9g₂区を中心に確認された住居跡で，南側は第102号住居跡と，中央部は第６号溝と重複している。溝は２軒の住居跡を切って掘り込まれており，最も新しいが，住居跡間の新旧は明確でない。

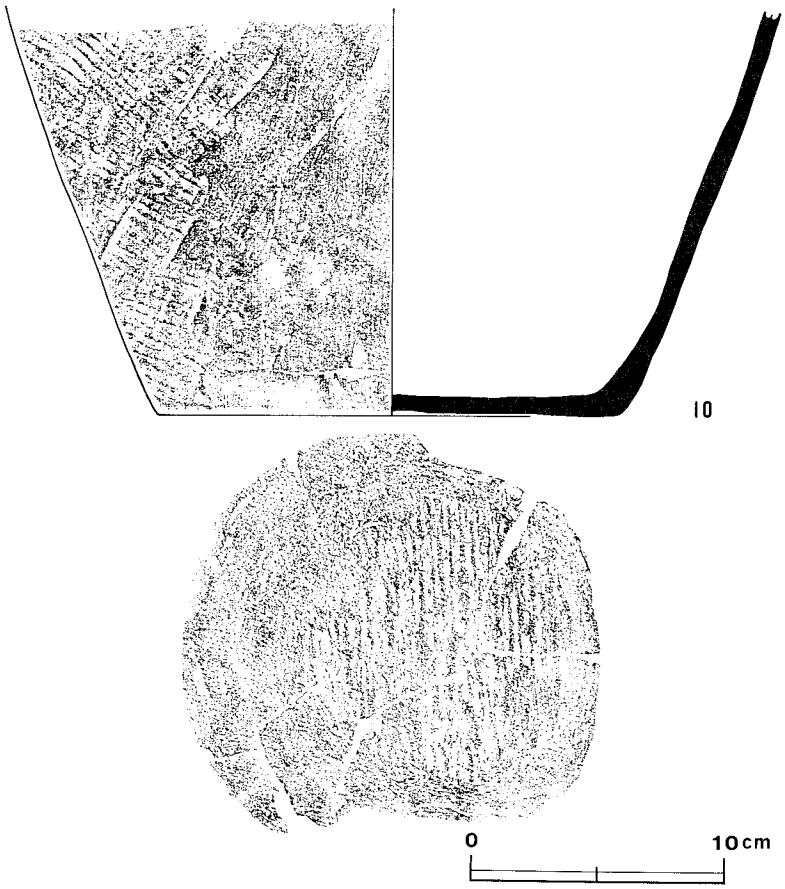
重複のため平面形は不明であるが，残存壁から推定すると一辺５m以上の方形を呈していたものと思われる。主軸方向は，N－0°である。壁は，東・西壁の一部，及び北壁の一部しか残っていない。残存壁は垂直に立ち上がり，高さは50cmである。壁溝は，西壁及びカマド東側に検出され，上幅25cm，下幅10cm，深さ10cmである。床は平坦で，全体に硬く締まっている。ピットは北東コーナー部に１か所だけ検出された。ピットの径は35cm，深さは52cmで，その検出位置からみて主柱穴の一部と思われる。カマドは北壁中央部に山砂で構築されているが，西側を第６号溝に切ら



第52図　第104号住居跡実測図



第53図　第104号住居跡出土遺物実測図（1）



第54図　第104号住居跡出土遺物実測図(2)

れているため，東側の袖部しか残っていない。火床部は長径75cm，短径49cmの楕円形でロームを10cm掘り下げてあったが，焼土はあまり検出できなかった。カマド全体の規模は溝に切られているため不明である。

覆土は，大きく2層に分けられ，上位は黄褐色土でハードロームブロックを少量含んでいる。下位は暗褐色土で，炭化物・ローム粒子を少量含んでいる。

遺物は，土師器の坏（1，3）3点・甕（7）がカマド内から，土師器の坏（2，4，5，6）4点，須恵器の鉢（8，9，10）3点が2層からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片137点が出土している。

出土遺物観察表（第53・54図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (15.8) B (6.8) E (16.5)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は外反しながら，内傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・雲母・パミス・スコリア 赤褐色 普通	25%
2	坏 土師器	A (14.1) B (6.7) E (14.5)	底部は半球形の丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面は横ナデ調整，他は磨滅がひどく不明。底部外面に輪積痕が残る。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	20%
3	坏 土師器	A 11.2 B 4.5 E 11.4	底部は丸底で，なだらかに口縁部に続く，口縁部は内傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内面は荒れている。	砂粒 橙色 普通	45%

4	坏 土師器	A（9.2） B（3.9） E（9.7）	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は下位で「く」の字状に屈曲し，内湾ぎみに立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・スコリア・長石 橙色 普通	45%
5	坏 土師器	A（12.8） B 3.8	底部は扁平な丸底で，口縁部との境で丸みを増す。口縁部は垂直ぎみに立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	40%
6	坏 土師器	A（11.8） B（3.8）	底部は扁平な丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	20%
7	甕 土師器	A 23.4 B 32.9 C 9.8 E 27.5	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに立ち上がり，上位に胴部最大径を有し，頸部に至る。口頸部は外反ぎみに立ち上がり，口縁端部は垂直になる。	胴部中位から下位，及び底部は磨きに近いヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，胴部内面は幅広のヘラナデ調整。	雲母・長石・砂粒 暗褐色 普通	75%
8	鉢 須恵器	A（23.1） B 15.0	底部は平底。胴部は内湾ぎみに外上方に立ち上がり，短く外反する口頸部に至る。口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面は横ナデ，胴部下端は横位のヘラ削り調整。器内・外面に輪積痕が残る。	長石・石英・雲母・礫 にぶい橙色 普通	20%
9	鉢 須恵器	A（35.0） B（6.6）	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内傾し，口頸部は直角に曲がっている。	器外面は叩き目，内面には円形の当て具痕が残る。	長石・石英・雲母・礫 にぶい橙色 普通	10%
10	鉢 須恵器	B（16.0） C 18.5	底部は平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部下位は横位及び斜位のヘラ削り，中位は平行叩き目による調整。	長石・雲母・礫 にぶい褐色 普通	30%

第108号住居跡（第55図）

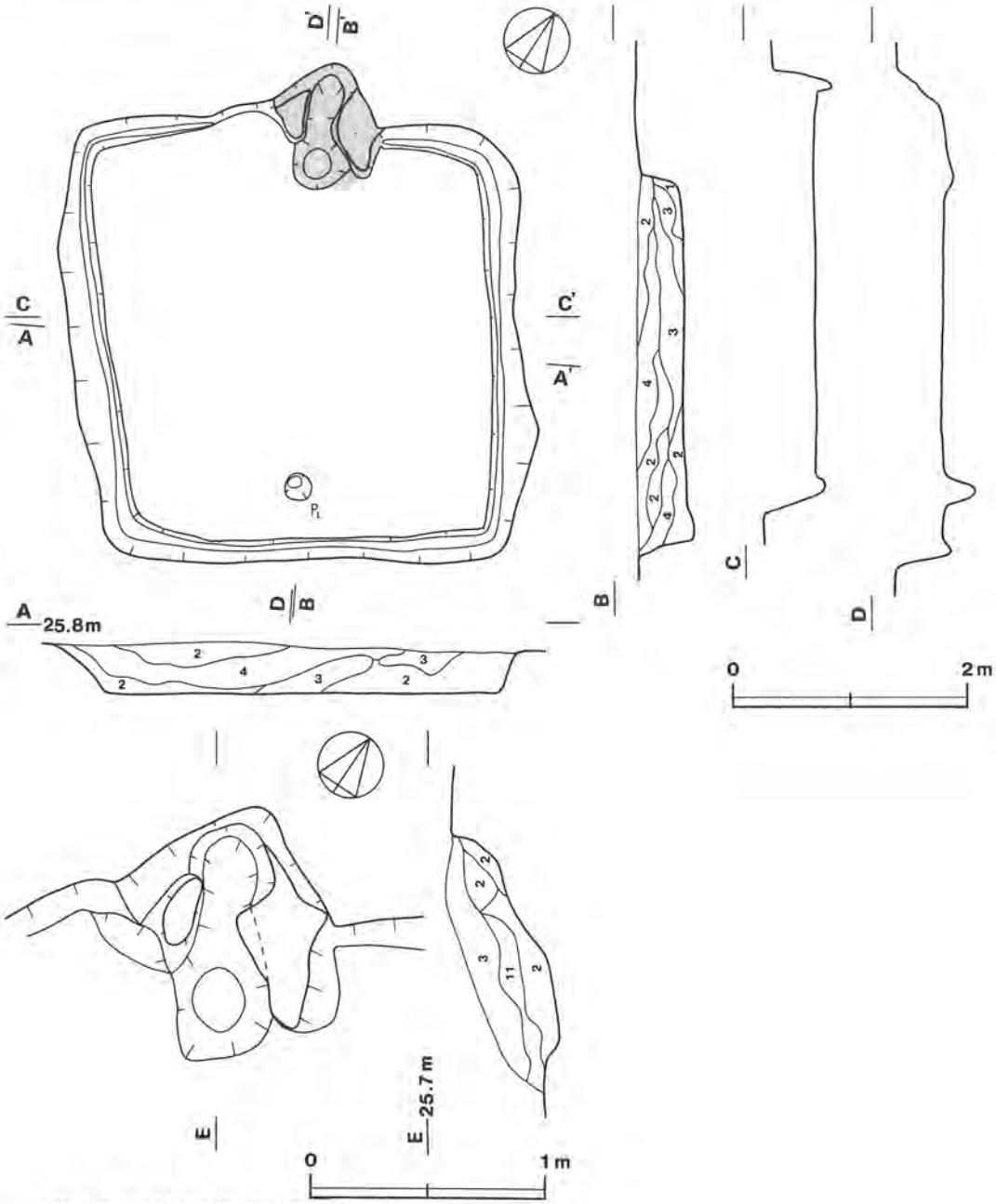
本跡は，E9i_9区を中心に確認された住居跡で，南側３mの地点に第55・56号住居跡が位置している。

平面形は方形で，規模は長軸3.93m，短軸3.86mで，主軸方向は，N－37°－Wである。壁は西壁だけ外傾し，他は垂直に立ち上がっている。壁高は，40mである。壁溝は全周しており，上幅10cm，下幅５cm，深さ５cmである。床は，中央部が硬く締まり，周辺部は軟らかい。ピットは，南壁下中央部に１か所検出できただけである。ピットは径25cm，深さ27cmであり，柱が外に傾くように掘り込まれていたことから，出入口に関するピットの可能性がある。カマドは，北壁のやや東寄りに粘土で構築されている。袖部は両側とも残存しており，煙道の張り出しは50cmである。火床部の掘り込みは径50cm，深さ５cmで，底面はそれほど焼けていない。

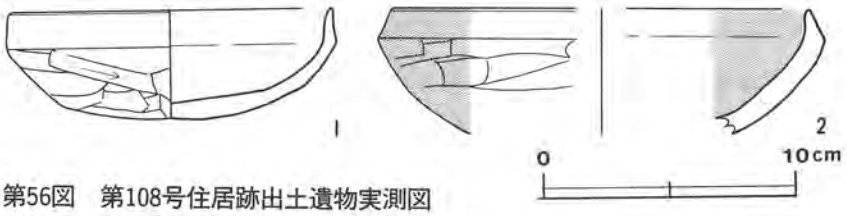
覆土は，大きく３層に分けられる。中央部上位にはローム ブロック及び焼土粒子を少量含む褐

色土，下位にはロームブロック・炭化物・焼土粒子を少量含む黒褐色土が堆積し，壁近くにはハードロームブロックを少量含む褐色土が堆積している。

遺物は，土師器の坏３点と須恵器の坏が床面から出土している。なお，土師器の坏のなかの１点（１）は，南壁に底部を向け，壁に貼り付くような状態で出土している。他に，土師器・須恵器片23点が出土している。



第55図　第108号住居跡実測図



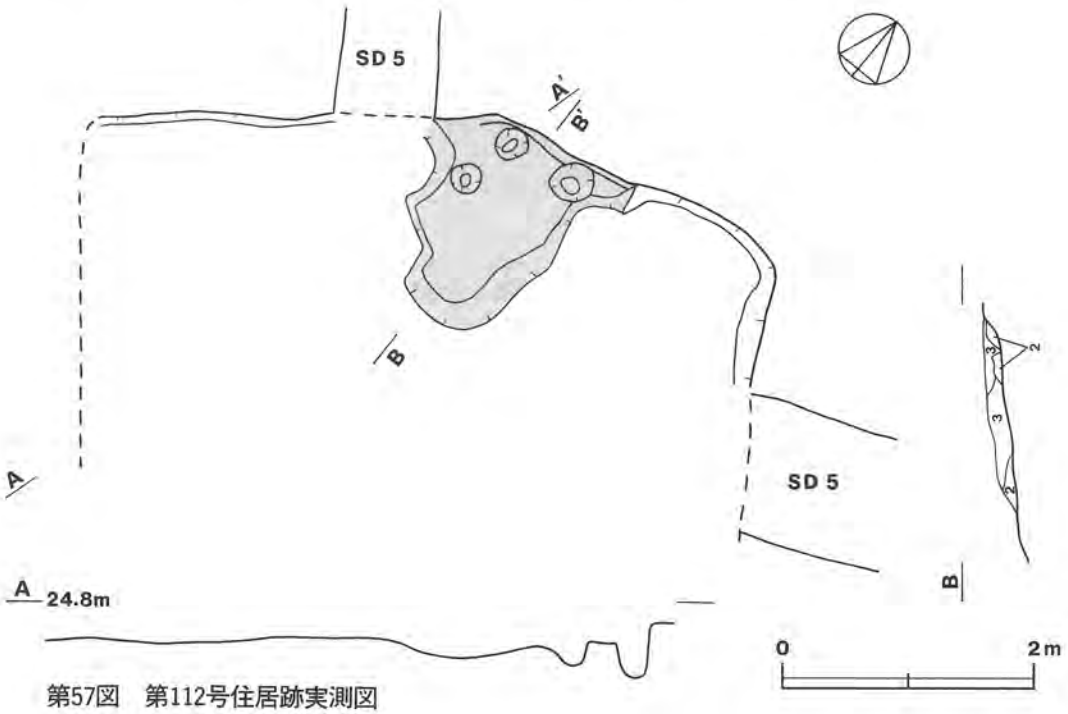
第56図　第108号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第56図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	坏 土師器	A 12.8 B 4.4	底部は丸底で，なだらかに口縁部に続く。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・砂粒 褐灰色 普通	80%
2	坏 土師器	A (16.5) B (5.0)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母 灰赤色 普通	25% 内・外面黒色処理

第112号住居跡（第57図）

本跡は，G9f$_6$区を中心に確認された住居跡で，第103号住居跡，第５号溝と重複し，かつ遺構が浅いことから，カマドと北東部の壁がわずかに検出できただけである。両遺構により，本跡の



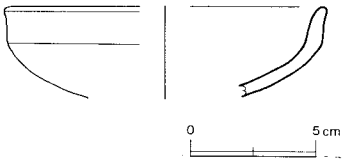
第57図　第112号住居跡実測図

床が切られている。

平面形，規模は不明である。主軸方向は，N－37°－Wと推定される。床は消失し，ピットも検出されなかった。カマドは痕跡のみ検出され，火床部と思われる掘り込みは長径169cm，短径117cmの不定形で，深さは10cmである。煙道の張り出しは，ほとんど認められない。

覆土の状況は，確認できなかった。

遺物は極めて少量で，土師器の坏２点がカマド内から出土した他には，土師器片６点だけである。



第58図　第112号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第58図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	坏 土師器	A (12.6) B (3.7)	底部は丸底で，口縁部との境ににぶい稜を有する。口縁部は直立ぎみに立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・砂粒 淡い赤橙色 普通	10%

2　奈良・平安時代の住居跡

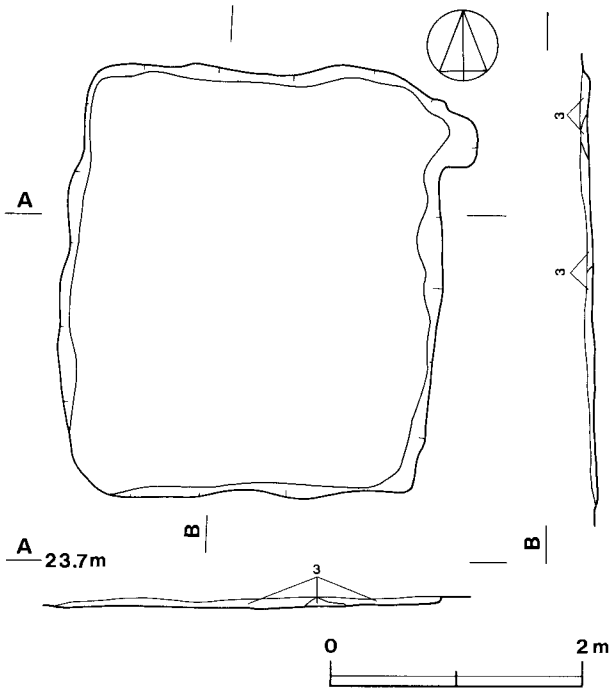
第２号住居跡（第59図）

本跡は，I11d₂区を中心に確認された住居跡で，第１号住居跡を切って掘り込まれている。

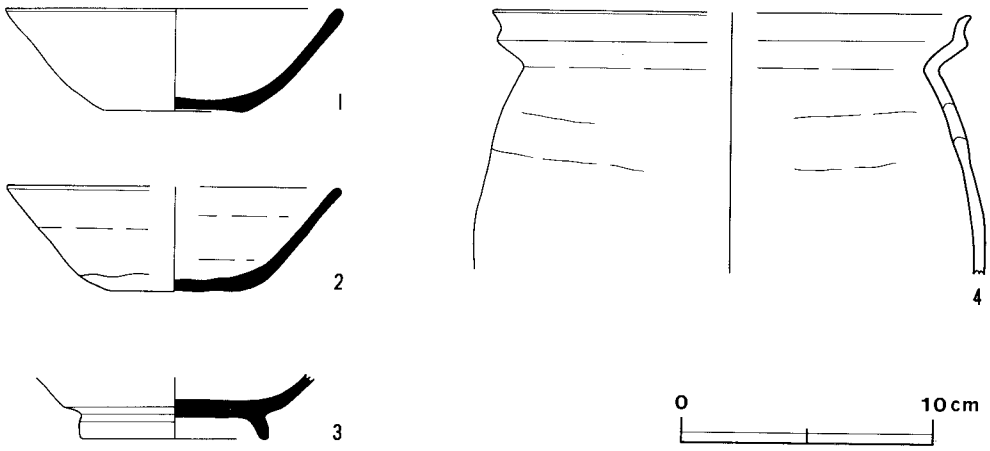
平面形は長方形を呈し，規模は長軸3.45m，短軸3.04mで，主軸方向は，N－３°－Eである。壁は粘土及び黒色土からなり，外傾して立ち上がっているが，明確にはとらえられなかった。壁高は４～８cmである。床は青灰色の粘土で，凹凸が多く，締まりはみられない。ピットやカマドは，確認できなかった。ただ，北壁中央部に多量の焼土が検出されたことから，このあたりにカマドが構築されていた可能性が認められる。

覆土は１～５cmの厚さで，焼土粒子と炭化粒子を中量含む暗褐色土で，硬く締まっている。

遺物は，覆土から須恵器の坏（１，２，３）が３点出土している。他に，土師器・須恵器片が149点出土している。



第59図　第２号住居跡実測図



第60図　第２号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第60図）

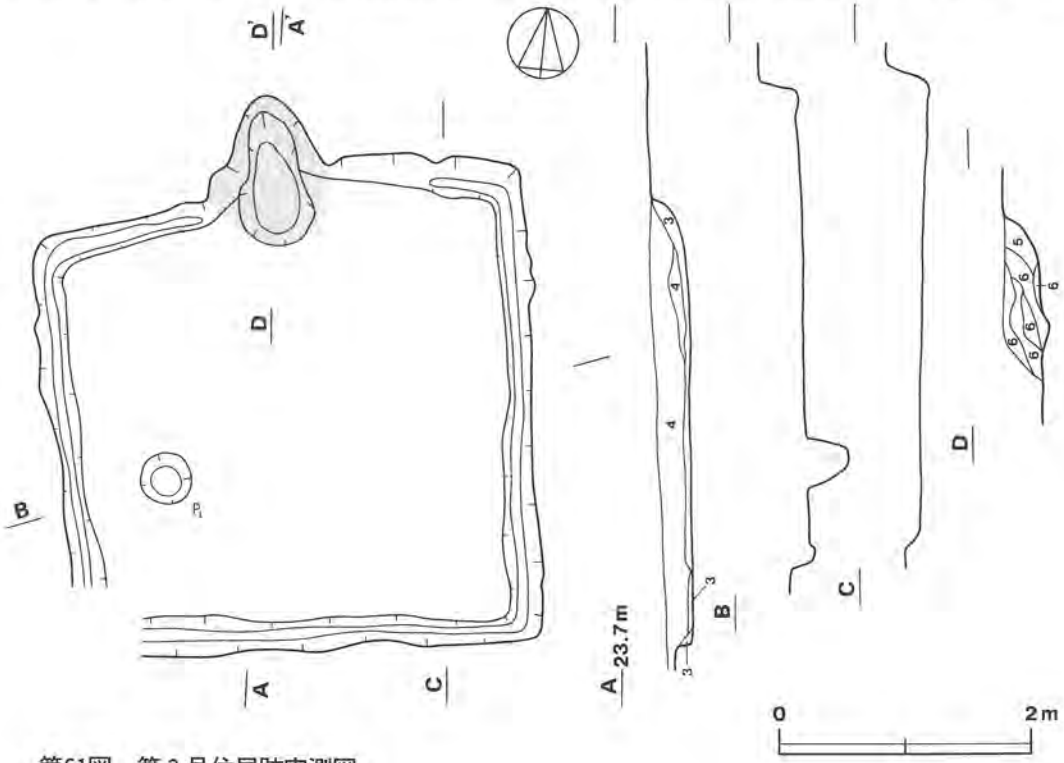
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	坏 須恵器	A 13.5 B 4.2 C 5.5	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。水挽き痕は弱い。	砂粒・長石・石英にぶい黄橙色 普通	75%

2	坏 須恵器	A (13.2) B 4.2 C (5.5)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	器面が荒れていて調整痕は明確でない。 水挽き成形。	長石・石英・礫・雲母 褐色 普通	40%
3	高台付坏 須恵器	B (2.6) D 7.4	底部片。底部は平底で，高さ1cmの高台がつく。	底部は回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒 灰黄褐色 普通	20%
4	甕 土師器	A (19.1) B 10.3	胴部は内傾して立ち上がり，「く」の字状に屈曲する口頸部に至る。	胴部内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。胴部には輪積痕が残る。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	20%

第3号住居跡（第61図）

本跡は，I11c₁区に確認された住居跡で，第1号住居跡と重複しており，本跡が切っている。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.93m，短軸3.90mで，主軸方向は，N－6°－Wである。壁はロームであるが，西壁の一部には黒褐色土が見られ，垂直に立ち上がっている。壁高は，17～28cmである。壁溝は全周しており，上幅10～20cm，深さ3～5cmである。床は平坦で硬く締まっており，全体に北西方向に傾斜している。なお，南東コーナー部付近の床はロームではなく，青灰色の粘土である。ピットが1か所検出されているが，本跡に伴うものではなく，第1号住居跡の



第61図　第3号住居跡実測図

ピットであり，本跡に伴うピットは確認されなかった。カマドは北壁中央部に構築されていたと思われ，その痕跡のみ確認できた。火床部の掘り込みはなく，床と同一レベルでつながっている。煙道の張り出しは，70cmである。

覆土は，２層に大別できる。１層は炭化粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色土，２層は１層と同じ含有物のみられる暗褐色土である。

遺物は，覆土から土師器･須恵器片197点が出土している。他に，鉄製の手斧が出土している。

第62図　第３号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第62図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	手斧 鉄製品	全長 9.3 幅　4.1 重さ150.5g	完成品で，柄の部分は袋状に作られている。			100%

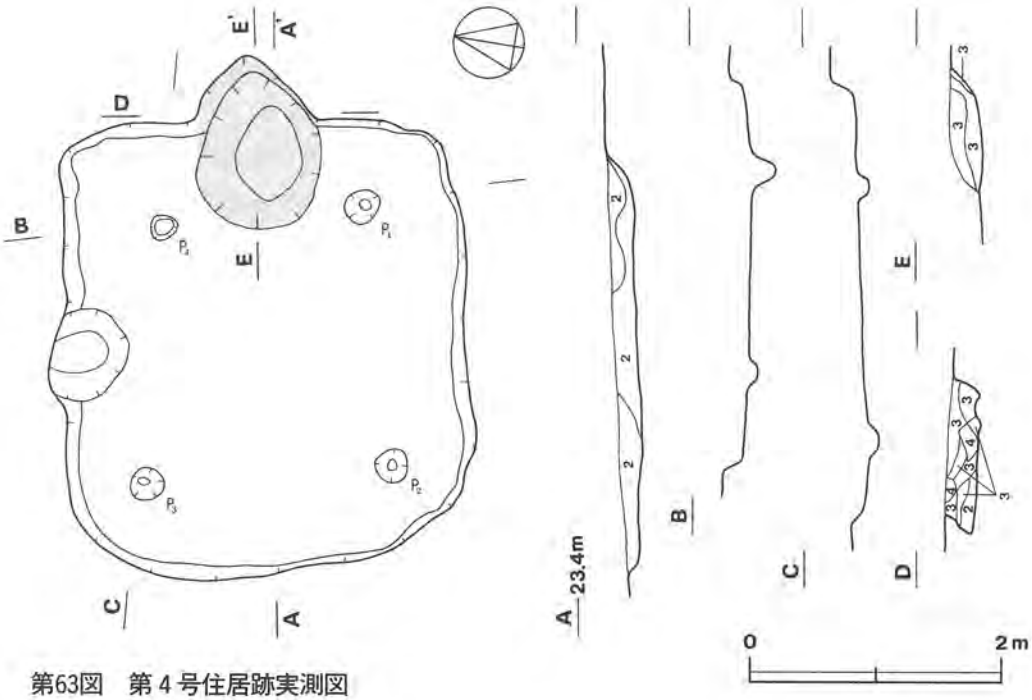
第４号住居跡（第63図）

本跡は，I10d_9区に確認された住居跡である。

平面形は長方形を呈し，規模は，長軸3.64m，短軸3.16mで，主軸方向は，N－86°－Eである。壁は黒色土で，垂直に立ち上がっている。壁高は17～21cmである。床は西に向ってやや傾斜しているが，全体に平坦で，中央部は硬く締まっている。ピットは４か所検出され，径は20～29cm，深さは8～19cmである。カマドは東壁中央部に構築されているが，袖部は残っていない。火床部の掘り込みはなく，煙道は50cm張り出している。北壁中央部にも焼土の堆積がみられたが，これは調査の結果，カマドではないことが判明した。

覆土は，焼土粒子を少量含む褐色土と焼土粒子及び炭化粒子を少量含む褐色土が，ブロック状に堆積していた。両層とも，硬く締まっている。

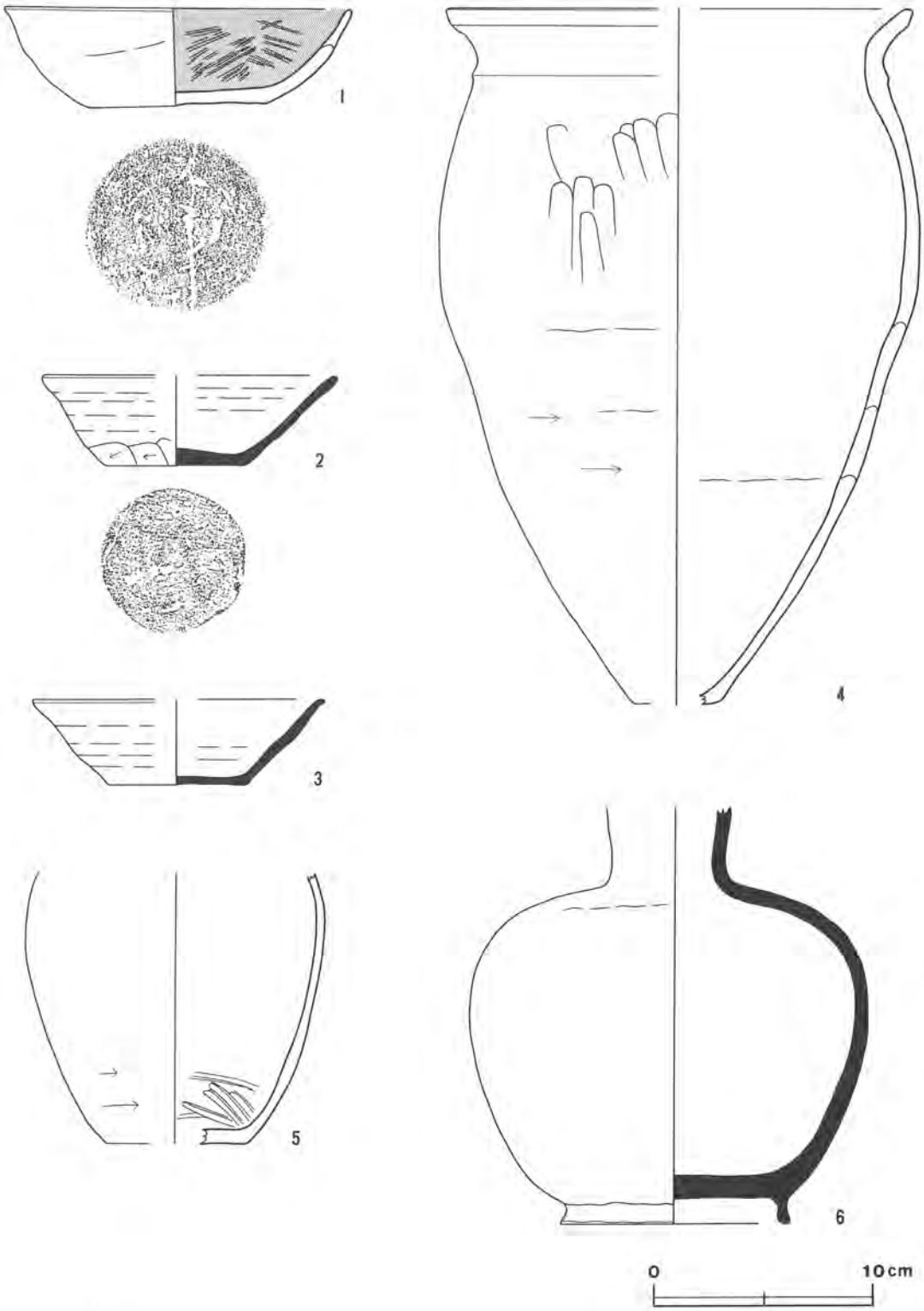
遺物は，床面近くの覆土からは土師器の坏（１）･甕（４），須恵器の坏（２）･壺（６）･鉢（５）等が出土し，カマド内からは須恵器の鉢（７）･甑（８）が倒立の状態で出土している。他に紡錘車（９），支脚，土師器・須恵器片310点が出土している。



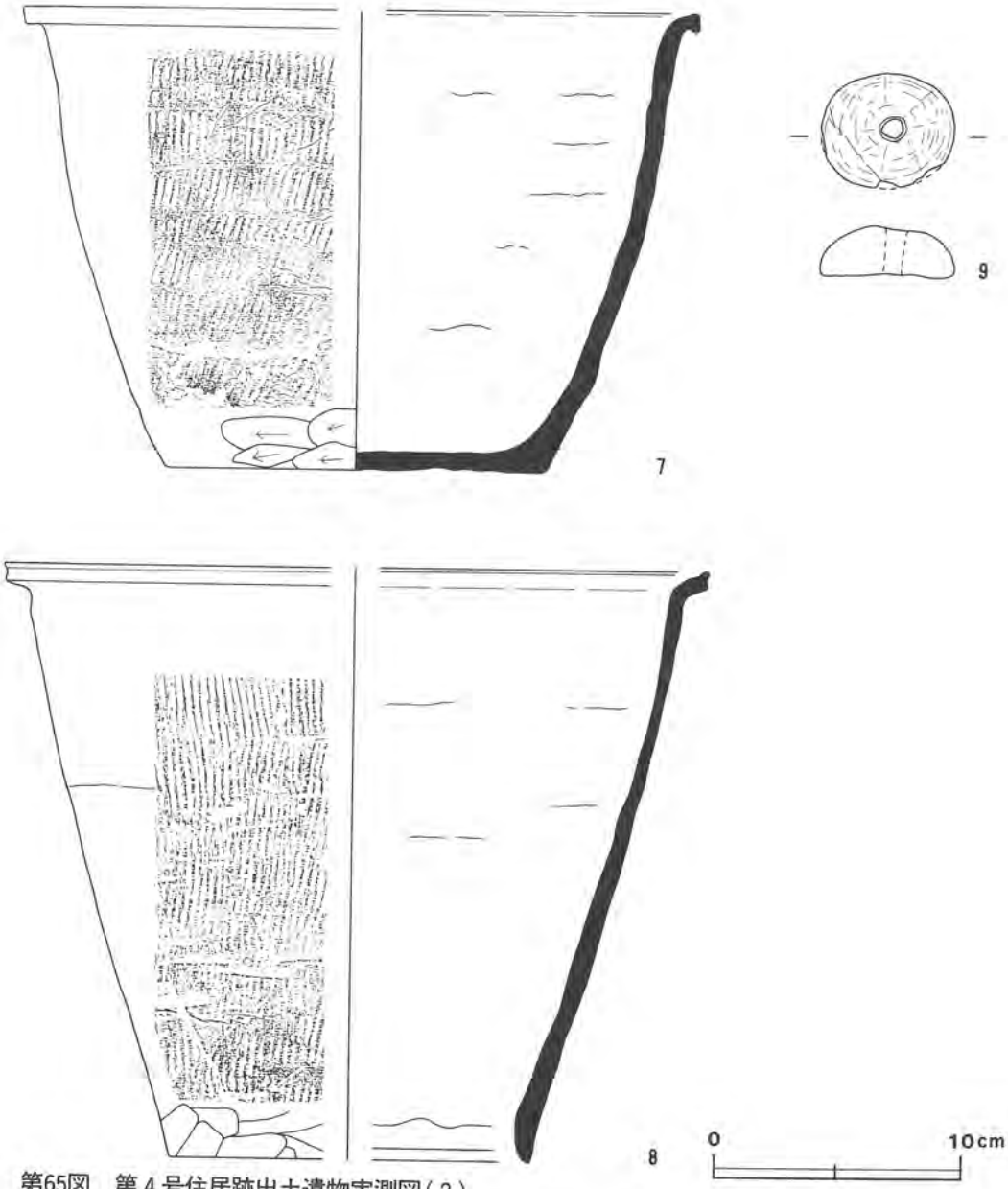
第63図　第４号住居跡実測図

出土遺物観察表（第64・65図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 16.1 B 4.8 C 8.2	底部は平底で，体部は内湾ぎみに開き，口縁端部でかるく外反する。	底部はヘラ削り，体部上半部は横方向のナデ，下半部はヘラ削り調整。器内面はヘラ磨き。	雲母・石英・長石 にぶい赤褐色 普通	80% 内面黒色処理
2	坏 須恵器	A (13.7) B 4.2 C 6.4	底部は平底で，中央部が厚くなる。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。水挽き成形。	雲母・砂粒 灰褐色 普通	60%
3	坏 須恵器	A (13.6) B 4.0 C 6.4	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁端部でわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り調整。水挽き成形。	砂粒・雲母 灰色 普通	40%
4	甕 土師器	A (21.6) B 32.4 C (4.4)	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，上位で胴部最大径に達し，口縁部に至る。口縁部は外反し，肩部との境に稜を有する。	胴部上半部は縦方向のヘラ磨き，下半部は横方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内・外面に輪積痕が残る。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	45%
5	甕 土師器	B 12.6 C (6.6)	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。胴部最大径は上位にある。	底部に木葉痕が残る。表面は荒れているが，胴部下位はヘラ削り，器内面はヘラナデ及びナデ調整。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通（２次）	75%



第64図　第４号住居跡出土遺物実測図（１）



第65図　第４号住居跡出土遺物実測図（２）

6	壺 須恵器	B (19.5) D 10.4 E 18.4	底部は平底で，胴部との境に高台が付く。胴部は内湾しながら外傾して立ち上がり，肩部で内傾した後，直立する頸部に至る。	全体に荒れがひどく，調整痕は明確でないが，胴部外面はヘラ削り後ナデ調整と思われる。器外面に輪積痕が残る。	雲母・石英 灰色 普通	90%
7	鉢 須恵器	A (27.9) B 19.0 C 15.6	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は短く屈曲する。	胴部は縦方向の平行叩き目，胴部下端ヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石 褐灰色 普通	70%

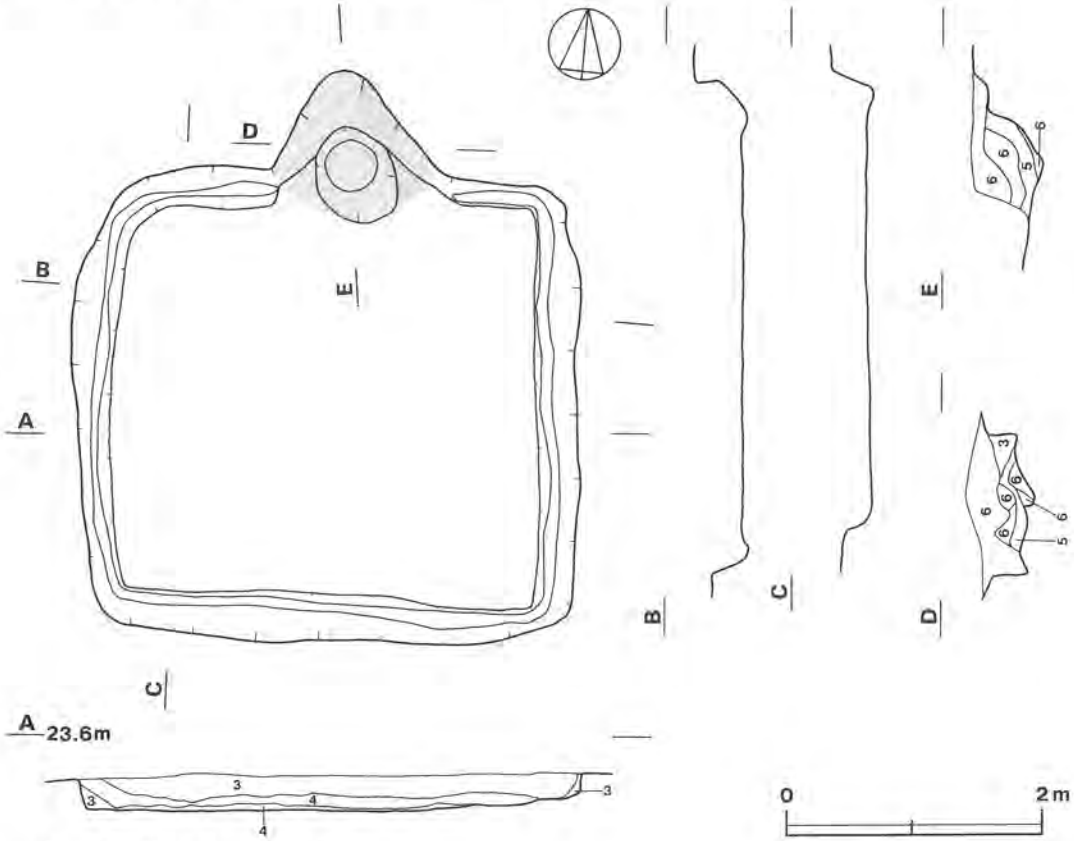
8	脚 須恵器	A (29.0) B 24.5 C 14.8	胴部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部は短く屈曲し，端部は上方につまみ出されている。底面は，全面が開孔している。	胴部は縦方向の平行叩き目，下端はヘラ削り調整。器内・外面に輪積痕が残る。	長石・石英・雲母 砂粒 黒褐色 普通	40%
9	紡錘車 石製品	径 5.4 厚さ 2.0 重さ(55.2g)	一部欠損しているが，完形に近い。断面は扁平な半円形を呈し，孔は上面より穿たれている。	器表面は，丁寧に磨かれている。		95% 凝灰岩

第5号住居跡（第66図）

本跡は，I10b$_9$区に確認された住居跡である。

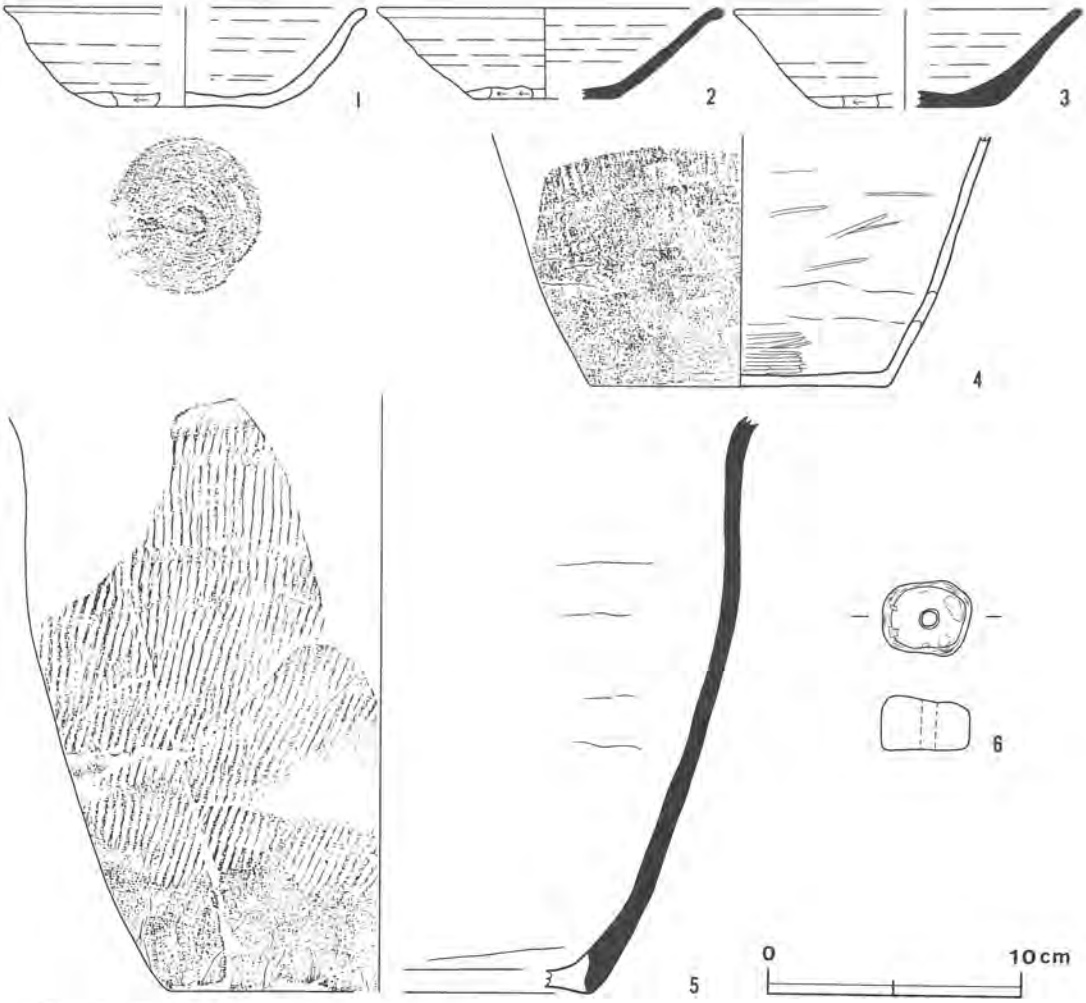
平面形は方形を呈し，規模は長軸3.95m，短軸3.73mで，主軸方向は，N－7°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは25～29cmであるが，南壁と西壁は攪乱が多く明確でない。壁溝は全周しており，上幅10～15cm，深さ6cmである。床は平坦で，硬く締まっている。カマドは北壁中央部に構築されている。しかし，残存状況は悪く確認されたのは，痕跡だけであった。

覆土は大きく3層に分けられ，硬く締まっている。1層は焼土粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土，2層は1層と同じ含有物を含む黒褐色土，3層は焼土粒子を中量，炭化粒子・砂粒を少量



第66図　第5号住居跡実測図

遺物は，土師器の鉢（4），須恵器の甑（5），紡錘車（6）が3層から出土している。他に土師器・須恵器片が523点出土している。



第67図　第5号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第67図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (14.2) B 4.0 C 6.4	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁端部はかるく外反する。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。水挽き成形。	砂粒・スコリア・パミス 橙色 普通	45%
2	坏 須恵器	A 13.7 B 3.6 C (5.6)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁端部で外反する。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。水挽き成形。	石英・長石・スコリア 褐色 普通	60%

3	坏 須恵器	A (13.6) B 3.9 C (6.0)	底部は平底で，体部は器壁を減じながら外傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	30%
4	鉢 土師器	B (10.0) C 11.8	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。器壁は全体に薄い。	胴部下端はヘラ削り，器内面は荒いヘラ磨き調整。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	20%
5	甑 須恵器	B (22.9) C (19.0)	胴部は外傾して立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。底面には孔が5か所あったものと思われる。底面中央に円孔，周辺部4か所に半球形の孔を有していたことが推定できる。	胴部外面は縦位の平行叩き目，下端は横方向のヘラ削り，器内面は横方向のヘラナデ調整。	雲母・砂粒 灰黄褐色 普通	20%
6	紡錘車 石製品	径 3.5 厚さ 2.2 重さ37.4(g)	やや方形ぎみの楕円形を呈し，厚さは一定でない。完形品。	器表面は，丁寧に削られている。		100% 凝灰岩

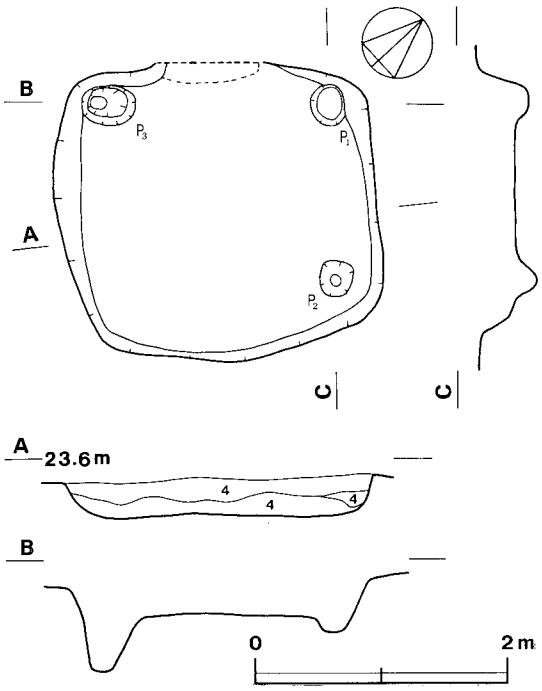
第7号住居跡（第68図）

本跡は，I10a_0区を中心に確認された住居跡で，本跡の北壁は第1号土坑と重複している。土層断面をみても，新旧関係は明確にできなかった。

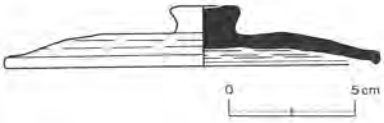
平面形は方形を呈し，規模は長軸2.57m，短軸2.34mで，主軸方向は，N－47°－Wである。壁は外傾して立ち上がり，高さは29cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは3か所で，南西コーナー部を除く他の各コーナー部の壁際に検出されている。P_1・P_2とも浅いピットであるが，P_3は，径42cm，深さ44cmである。他の内部施設は，確認されなかった。

覆土は2層に分けられ，1層にはソフトロームブロックを，2層にはハードロームブロックを，それぞれ少量含む黒褐色土が堆積している。

遺物は少量で，須恵器の蓋が2層から出土している。他に，土師器・須恵器片14点が出土している。



第68図　第7号住居跡実測図



第69図　第７号住居跡出土遺物実測図

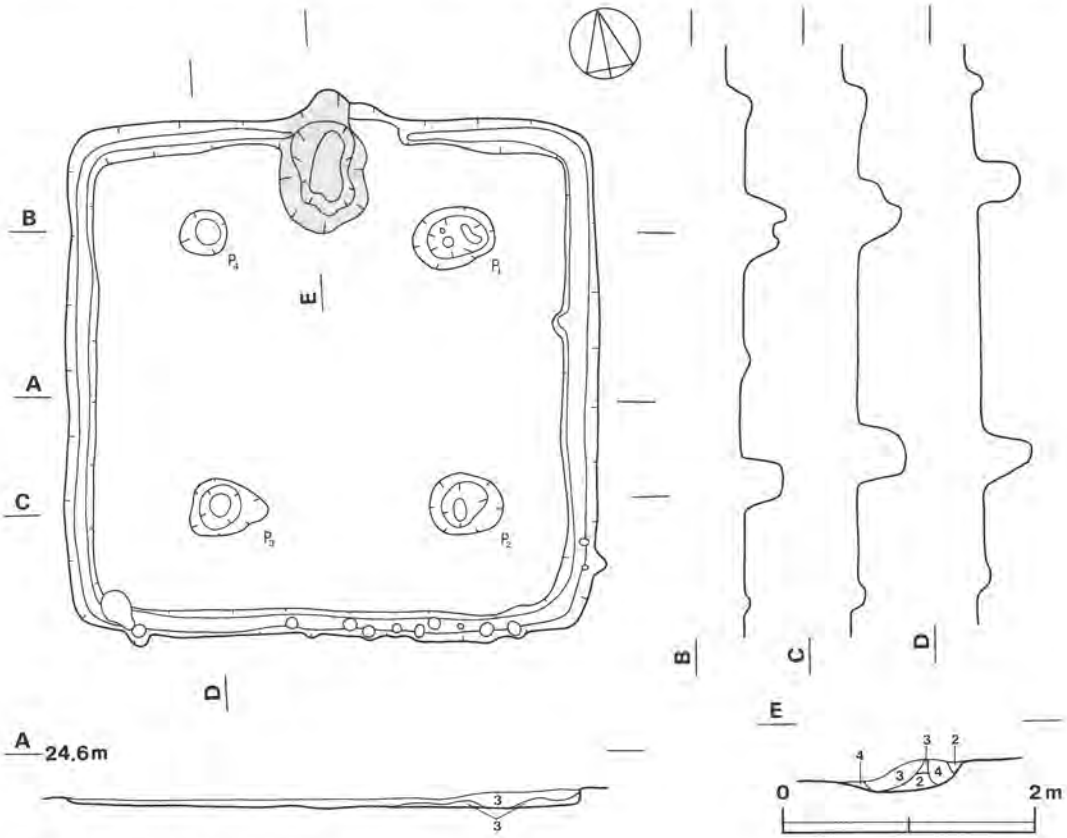
出土遺物観察表（第69図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	蓋 須恵器	A14.9 B 2.4	天井部は平坦で，円柱状のつまみがつく。口縁部は直線的に外下方に開き，端部は短く垂下する。	天井部は回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	砂粒・長石・雲母 灰色 普通	65%

第８号住居跡（第70図）

本跡は，H11g_7区を中心に確認された住居跡で，ロームへの掘り込みが浅い遺構である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸4.24m，短軸4.16mで，主軸方向は，N—13°—Eである。浅



第70図　第８号住居跡実測図

いため壁の状況は明確でないが，残存部の高さは４～10cmである。壁溝は全周し，上幅15～20cm，深さ４～10cmである。床は平坦で，壁近くまで硬く締まっている。ピットは，４か所検出されている。P_1が最も大きく，長径65cm，短径50cm，深さ33cmである。他のピットは，長径40～57cm、短径40～50cm，深さ34～41cmである。位置からみて４か所とも主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に構築されているが，袖部は残っていない。火床部の掘り込みは，10cmである。煙道の張り出しはほとんどなく，５cmぐらいである。

覆土は１層で，焼土粒子･ハードロームブロックを中量，炭化粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は少量で，土師器・須恵器片49点が出土した。遺物のほとんどは，覆土から出土している。

第９号住居跡（第71図）

本跡は，H11g_9区を中心に確認された住居跡で，第11号住居跡と重複している。本跡の覆土中に第11号住居跡の貼り床が検出されたことから，本跡の方が古い遺構である。

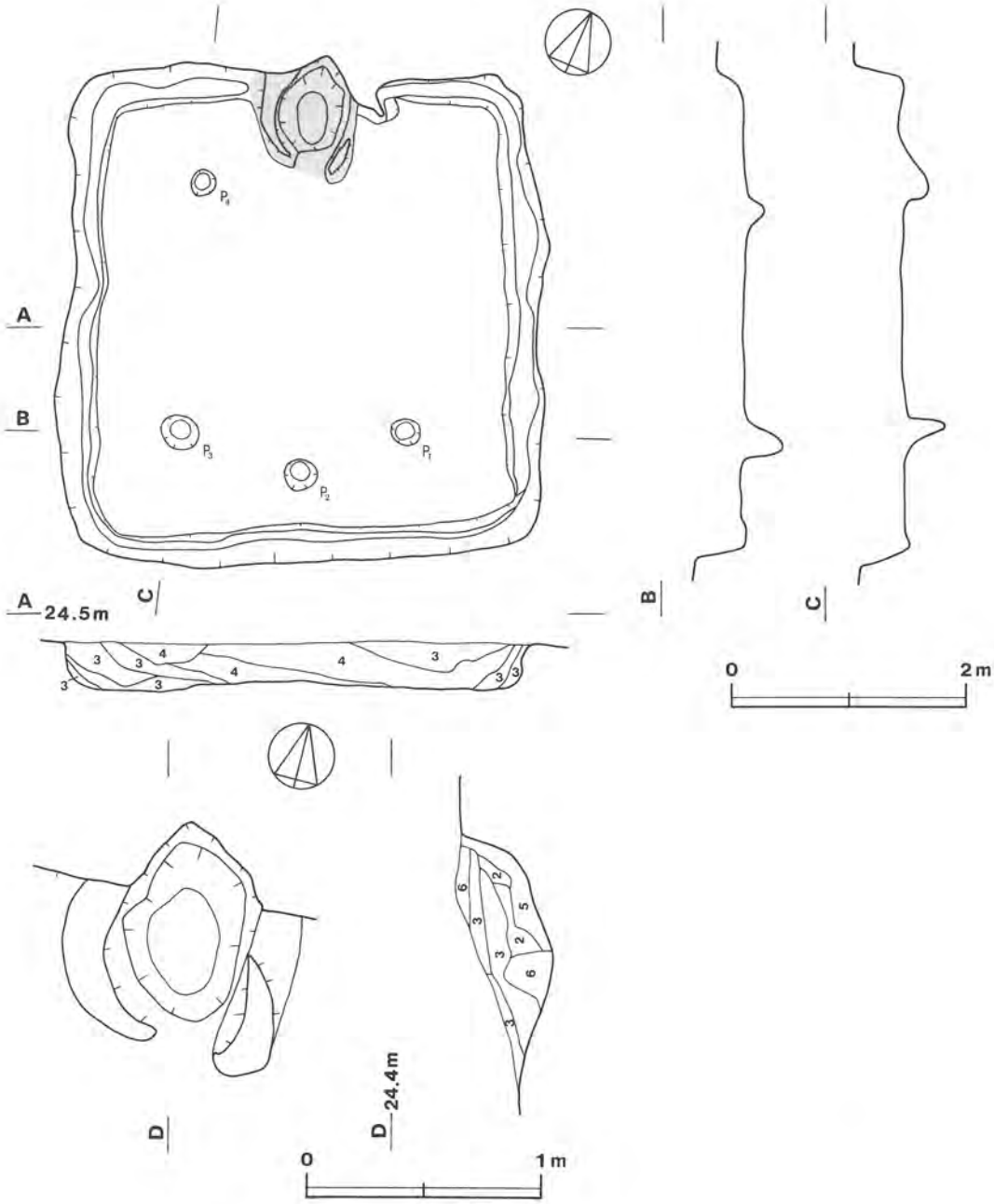
平面形は方形を呈し，規模は長軸4.27m，短軸4.08mで，主軸方向は，N―25.5°―Wである。壁は外傾して立ち上がり，高さは39cmである。壁溝は全周しており，上幅10～30cm，深さ１～５cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは４か所検出され，P_1・P_3・P_4がその位置からみて主柱穴と思われる。比較的細いピットが多く，径22～33cm，深さ16～35cmである。カマドは北壁中央部に山砂で構築されており，両袖部が残っている。火床部の掘り込みは，20cmである。煙道の張り出しは，10cmである。

覆土は，大きく３層に分けられる。いずれも黒褐色土で，ローム粒子・焼土粒子・粘土ブロック等が含まれている。なお，本跡の床上20cmの覆土中に，第11号住居跡の貼り床が確認されている。貼り床の厚さは３～５cmであった。

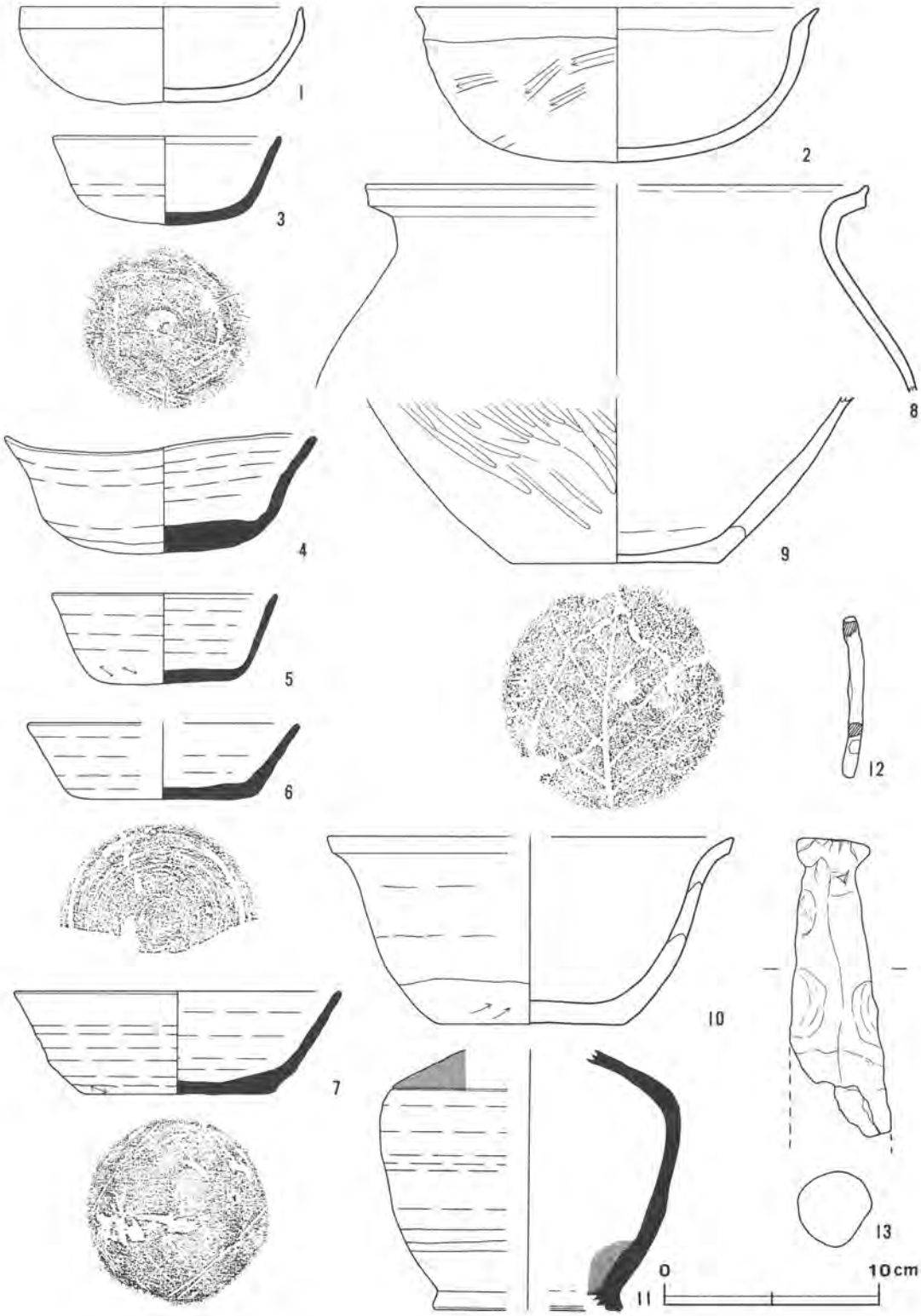
遺物は，須恵器の坏が北東コーナー部の床面から出土している。また，土師器の坏(２)・鉢(10)が２層から出土している。他に，釘・土師器・須恵器片576点が出土している。

出土遺物観察表（第72図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.2 B 4.6 E 13.4	底部は扁平な丸底で，なだらかに口縁部に至る。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	100%
2	坏 土師器	A 18.8 B 7.2	底部は丸底で，口縁部との境にあまい稜を有する。口縁部は外傾し，端部は尖る。	底部は斜位のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	パミス・スコリア にぶい橙色 良好	100%



第71図　第９号住居跡実測図



第72図　第９号住居跡出土遺物実測図

3	坏 須恵器	A 10.6 B 4.2	底部は浅い丸底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り調整。 水挽き痕は弱い。	砂粒・雲母・パミス 灰白色 普通	100%
4	坏 須恵器	A 14.7 B 5.6	底部は丸底で，浅い皿状を呈し，器厚は12mmと厚い。体部は外反ぎみに立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	75%
5	坏 須恵器	A 10.6 B 4.3 C 6.1	底部は平底で，体部との境には丸みが残る。体部は薄く，直線的に外傾して立ち上がる。	器面が荒れており調整痕は明確でないが，底部及び体部下端はヘラ削り調整と思われる。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 にぶい黄橙色 良好	100%
6	坏 須恵器	A (12.8) B 3.6 C 8.2	底部は平底で，体部との境には丸みが残る。体部は器壁を減じながら外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・砂粒 褐灰色 良好	40%
7	坏 須恵器	A 15.2 B 4.8 C 8.5	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・スコリア・長石 灰黄色 良好	95%
8	甕 土師器	A (23.4) B (9.7)	底部は欠損。胴部は内傾して立ち上がり，口縁部は「コ」の字状を呈し，端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石・石英 浅い黄橙色 普通	20%
9	甕 土師器	B (7.9) C 9.7	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	底部は木葉痕が残る。胴部は斜位のヘラ磨き調整。	長石・石英・雲母・スコリア・砂粒 浅黄橙色 普通	20%
10	浅鉢 土師器	A (19.0) B 8.8 C 8.6	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	底部には木葉痕が残る。胴部下位はヘラ削り調整。	雲母・長石 赤褐色 普通(2次)	30%
11	壺 須恵器	B (12.2) D (8.8) E (14.0)	底部は欠損し，低い高台が胴部最下端につく。胴部は外傾して立ち上がり，肩部で屈曲した後内傾する。	胴部下位は回転ヘラ削り調整。肩部に灰釉が流れている。 水挽き成形。	砂粒 黄灰色 良好	30%
12	釘 鉄製品	全長 (7.5) 厚さ (0.6) 重さ (8.7g)	角釘で，頭部と先端部が欠損している。残存部は，弧状に反っている。			
13	支脚 土製品	全長(14.0) 径 (4.1)	上部がやや細くなる円柱状を呈し，下部は欠損している。	粘土塊から成形。		

第10号住居跡（第73図）

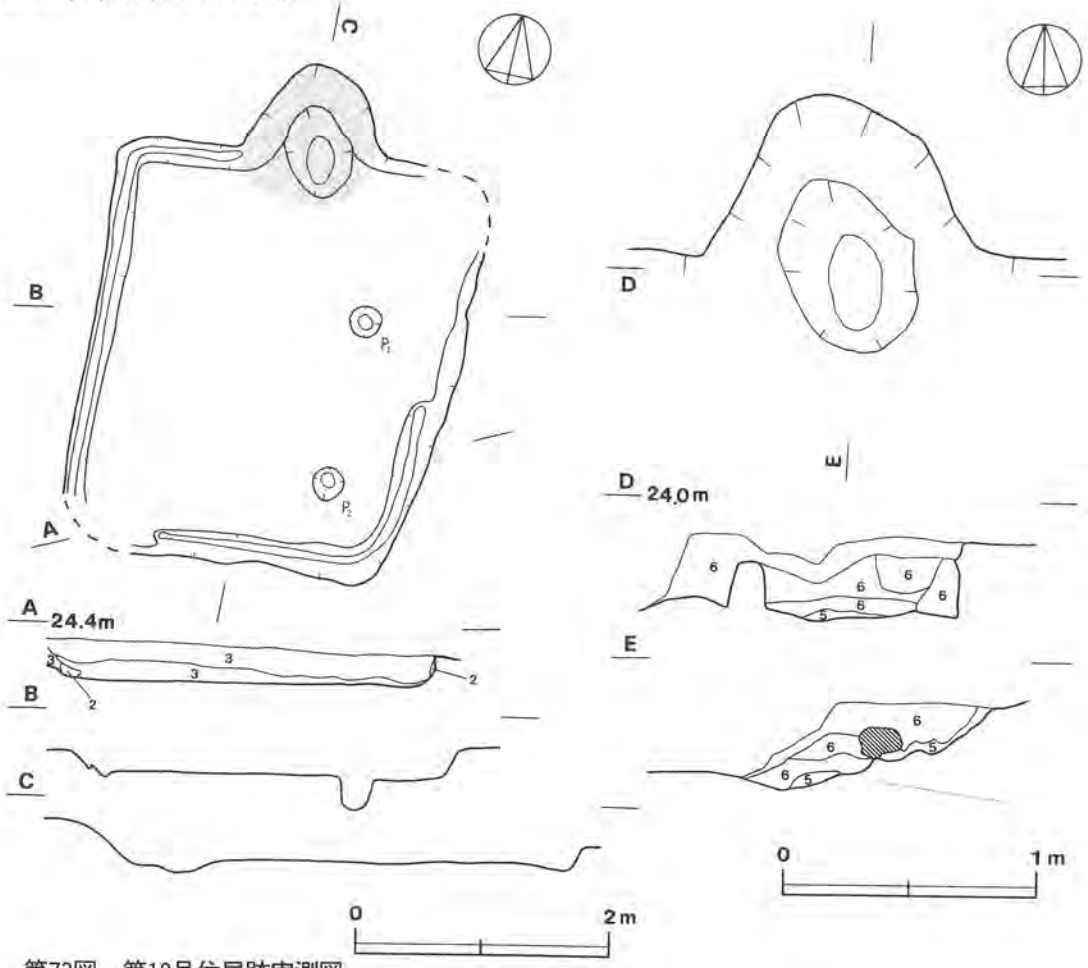
本跡は，H11j_9区に確認された住居跡で，西側で第9・11号住居跡と重複している。本跡が2軒の住居跡を切っており，最も新しい。北東コーナー部は壁が確認できず、他の遺構と重複してい

る可能性があるが，エリア外であるため不明である。

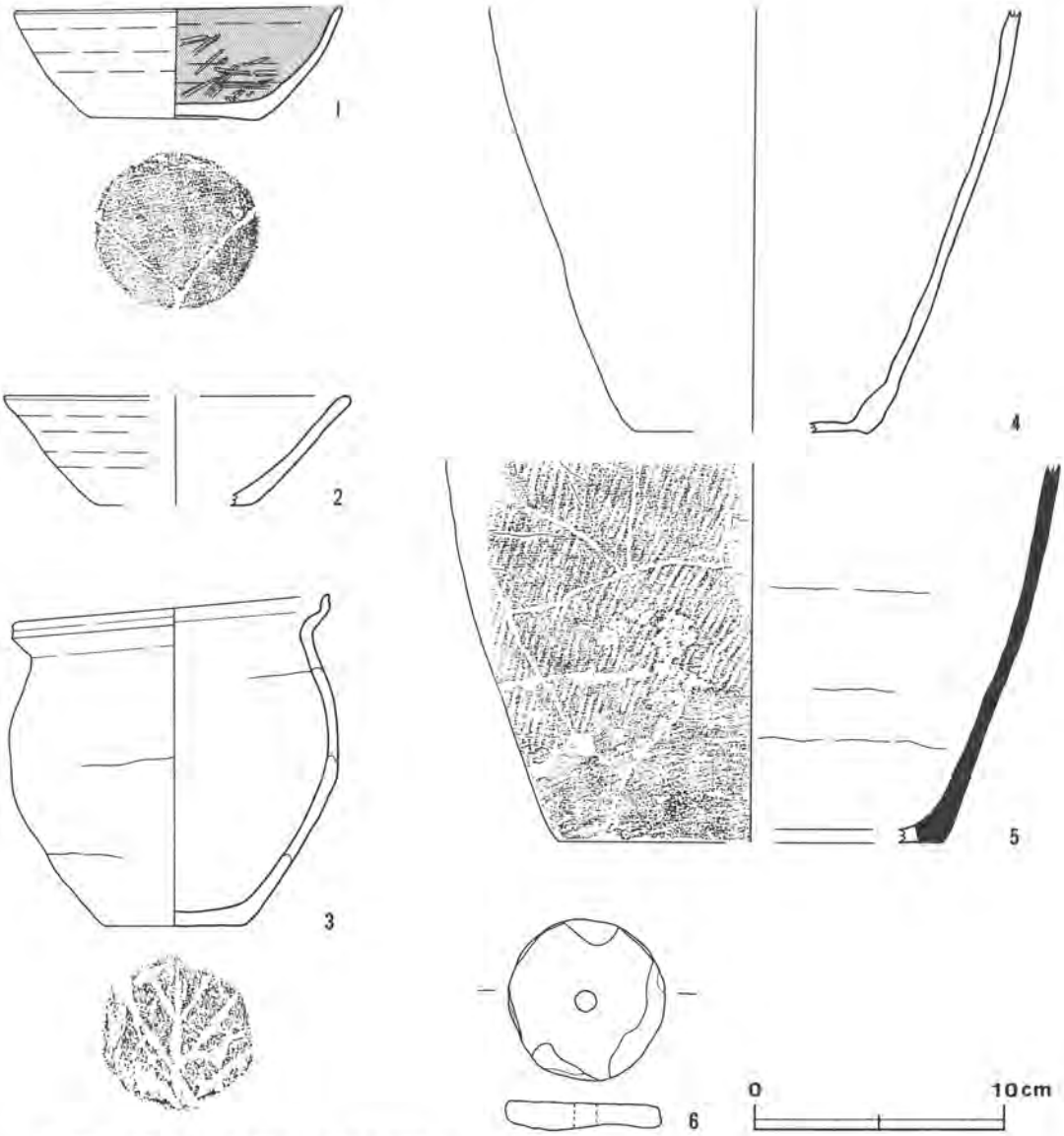
平面形は長方形を呈し，規模は長軸3.29m，短軸2.92mで，主軸方向は，N－0°である。壁は外傾して立ち上がり，高さは14～20cmである。壁溝は，南東コーナー部とカマド西側から西壁にかけて認められ，上幅12～17cm，深さ2～4cmである。床は平坦であるが，締まりはない。ピットは東壁寄りに2か所，南北に並んで検出された。本跡に伴うものかどうか断定はできないが，径25cm，深さ9～25cmである。カマドは，北壁中央部に山砂で構築されていた。西側の袖部がわずかに残存していたが，東側は全く残っていない。火床部は，長径73cm，短径52cmの楕円形に床を6cm掘り下げている。煙道の張り出しは，65cmである。

覆土は2層で，1層はローム粒子及び焼土粒子を少量含む暗褐色土，2層はローム粒子多量，焼土粒子少量を含む極暗褐色土である。

遺物は，坏（1，2）と甕（3，4）がカマド内から出土している。甕は，倒立の状態で出土した。須恵器の蓋が2層から，甑（5）がカマド内から出土している。他に，須恵器片42点，紡錘車（6）が出土している。



第73図　第10号住居跡実測図



第74図　第10号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第74図）

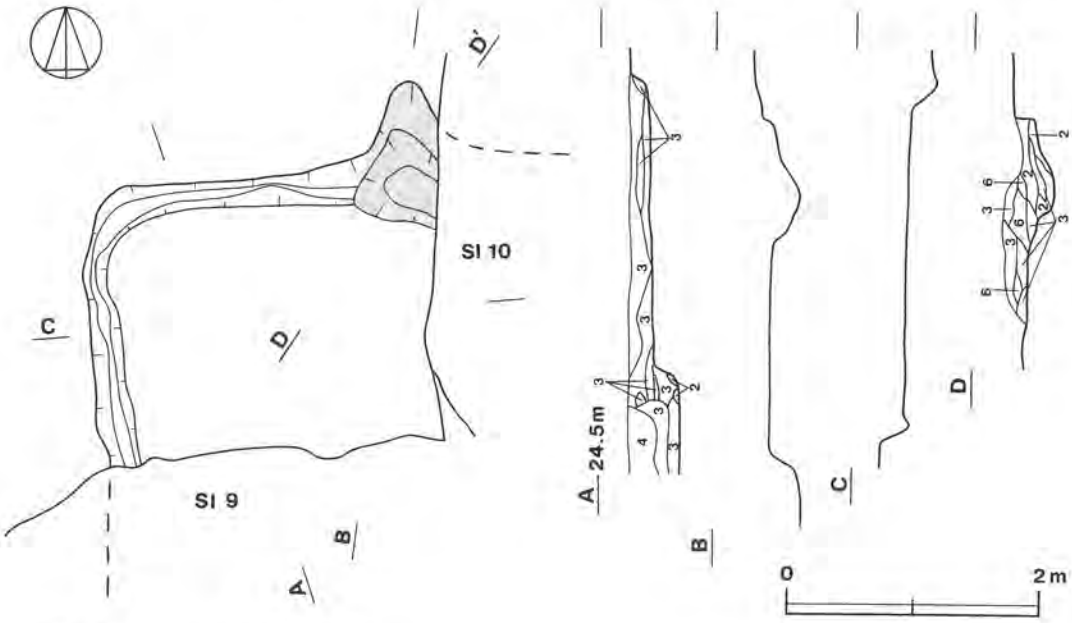
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.2 B 4.6 C 6.8	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	底部及び体部下端はヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。水挽き成形。	雲母・砂粒 灰褐色 普通	80% 内面黒色処理
2	坏 土師器	A (14.0) B 4.4 C (6.4)	底部は平底と思われる。体部は外傾して立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。	体部下端はヘラ削り，器内面はナデ調整。水挽き成形。	雲母・長石・礫 にぶい赤褐色 普通	50%

3	甕 土師器	A 12.7 B 13.3 C 5.5	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，中位に胴部最大径を有する。口頸部は「く」の字状に外反し，端部で逆「く」の字状に屈曲する。	底部に木葉痕，胴部上位はヘラナデ，中～下位はヘラ削り，口縁部内外面は横ナデ調整。器内・外面に輪積痕が残る。	砂粒・石英 橙色 普通	60%
4	甕 土師器	B (17.0) C (9.4)	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。器壁は底・胴部とも極めて薄い。	器面の荒れがひどく，調整痕不明。	砂粒・雲母・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	20%
5	瓶 須恵器	B (15.3) C (15.4)	胴部は外傾して外上方から立ち上がる。底面の孔は，5か所と推定される。	胴部には叩き目が残り，胴部下位は横方向のヘラ削り調整。器内・外面に輪積痕が認められる。	砂粒・雲母・長石 にぶい黄橙色 普通	25%
6	紡錘車 土製品	径 6.2 厚さ 1.1 重さ 12g	土師器片を利用した紡錘車である。			100%

第11号住居跡（第75図）

本跡は，H11f$_8$区を中心に確認された住居跡で，第9・10号住居跡と重複している。本跡は第9・10号住居跡の調査から，第9号住居跡より新しく，第10号住居跡より古いことが判明した。

いずれにしても，確認できたのはカマドの西側4分の1程度であり，詳細は不明である。調査

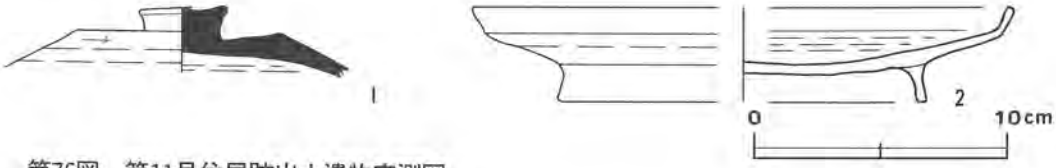


第75図　第11号住居跡実測図

の結果，第９号住居跡のあるカマド付近の床より約20cm高い地点に本跡の貼り床が検出された。10号との新旧関係は不明である。カマドは北壁中央部と推定される位置に，西側２分の１だけ確認できた。山砂で構築されており，火床部は床を10cm掘り下げている。煙道は，外に60cm張り出している。ピットは確認できなかった。

覆土は２層で，１層はローム粒子多量，焼土粒子少量を含む極暗褐色土，２層はローム粒子多量，ロームブロック少量を含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の盤（２）が２層から出土している。他に，土師器・須恵器片が80点出土している。



第76図　第11号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第76図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	蓋 須恵器	B（2.8）	天井部は平坦で，大きめのつまみがつく。口縁部は外傾して下がる。	天井部は回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	砂粒・雲母 灰黄褐色 普通	80%
2	盤 土師器	A（21.5） B　3.7 D（14.6）	底部は丸底で，高さ1.5cmの高台がつく。体部は外傾して開き，口縁部との境に稜を有する。口縁部は短く外傾する。	底部は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。水挽き成形。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	60% 内面黒色処理

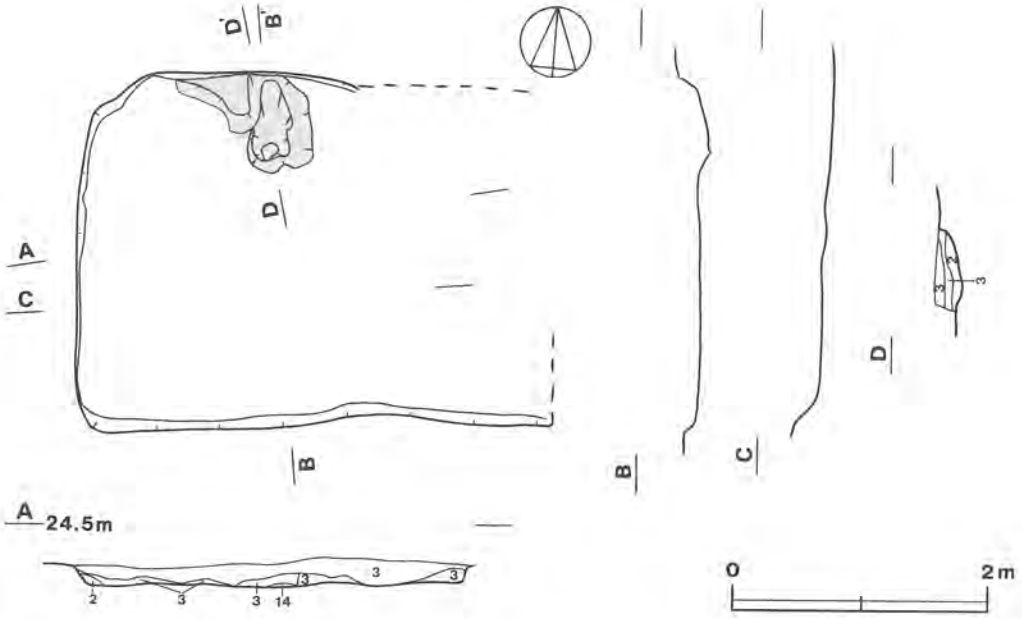
第12号住居跡（第77図）

本跡は，H11e_8区を中心に確認された住居跡で，東側約２分の１がエリア外にのびている。

調査できた部分は住居跡の西側２分の１であり，平面形や規模は不明である。壁は外傾して立ち上がり，高さは10～16cmである。床は軟らかく，凹凸が多い。北壁には，カマドの痕跡が認められた。煙道の張り出しはなく，火床部は，長径62cm，短径35cmの不定形で，床を10cm掘り下げている。ピット等は検出されていない。

覆土は２層に分けられ，１層は暗褐色土，２層は極暗褐色土で，それぞれ，ローム粒子・焼土粒子を少量含んでいる。

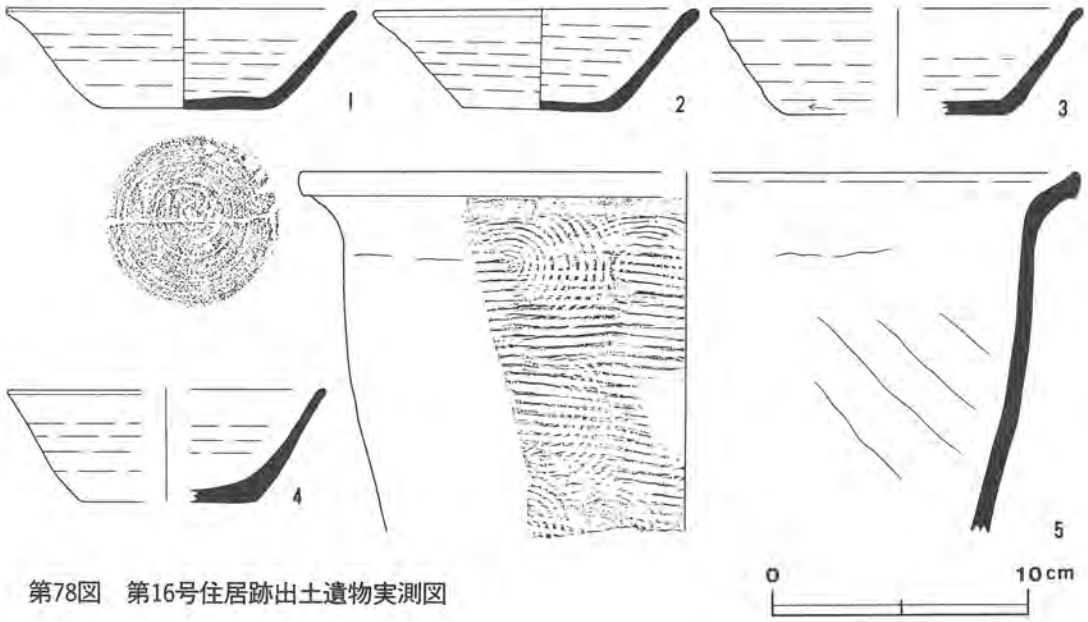
遺物は，覆土から土師器・須恵器片34点が出土している。



第77図　第12号住居跡実測図

第16号住居跡（第79図）

本跡は，H10d₀区を中心に確認された住居跡で，第15号住居跡に東側３分の１を切られている。平面形は南北に長い長方形を呈し，規模は長軸5.21m，短軸4.15mで，主軸方向はN－18°－W

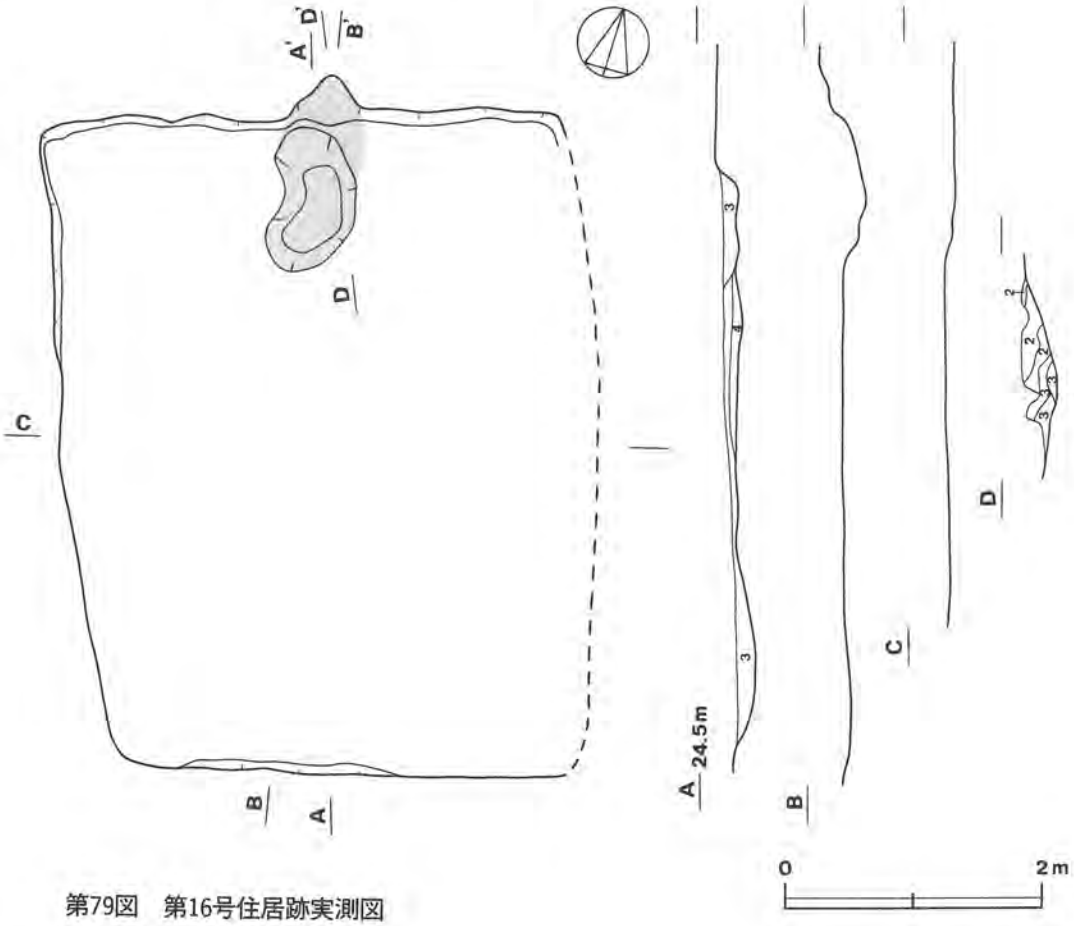


第78図　第16号住居跡出土遺物実測図

である。壁は，北壁と南壁の一部が残っていただけで，東壁と西壁は消失している。残存壁も低い部分が多く，最も高い壁で12cmである。床は，中央部は硬く締まっているが，周辺部は締まりがなく軟らかである。カマドは北壁中央部に構築されているが，袖部は残っておらず，火床部は長径110cm，短径55cmの楕円形を呈し，深さは20cmである。ピットは検出されていない。

覆土は１層で，焼土粒子中量，ローム粒子少量を含む暗褐色土である。

遺物は，須恵器の坏（１，２，３，４）・鉢（５）が床面から出土している。他に，土師器・須恵器片が86点，鉄製品が出土している。



第79図　第16号住居跡実測図

出土遺物観察表（第78図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 13.9 B 4.0 C 6.6	底部は平底で，体部は外傾して開き，口縁端部でわずかに外反する。	底部及び体部下端は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石 黄灰色 良好	60%

2	坏 須恵器	A 12.9 B 4.2 C 6.0	底部は平底で，体部は外傾して開き，口縁端部でわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 褐灰色 普通	75%
3	坏 須恵器	A (14.6) B 4.2 C (8.6)	底部は平底で，体部は器壁を減じながら外傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り成整。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 褐灰色 良好	20%
4	坏 須恵器	A (12.6) B 4.5 C (6.8)	底部は平底で，体部は器壁を減じながら外傾して立ち上がる。	器面の荒れがひどいが，底部はヘラ削り調整と思われる。 水挽き成形。	長石・石英・砂粒 灰色 普通	20%
5	鉢 須恵器	A (31.0) B (14.2)	胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	胴部外面は叩き目，内面は斜位のヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	15%

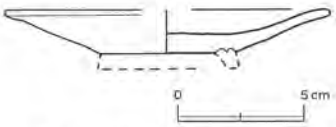
第19号住居跡（第81図）

本跡は，G10j₀区を中心に確認された住居跡で，非常に浅く，南壁と北壁がかろうじて確認できた程度である。

平面形は不明であり，他の住居跡の形状等から類推して，方形を呈していたと思われる。規模も計測不能である。壁もほとんど残っておらず，最も高い部分で4cmである。床はカマドの前面だけ硬く締まっている。ピットは，不規則な位置に8か所検出されているが，本跡に伴うものかどうか不明である。本跡が確認された地点はもと山林であるので，木根跡の可能性もある。カマドは北壁に粘土で構築されており，袖部と火床部がわずかに確認されただけである。火床部は，床を10cm掘り下げている。

覆土は，厚い部分でも3～4cmしかないため，層位的な確認はできていない。

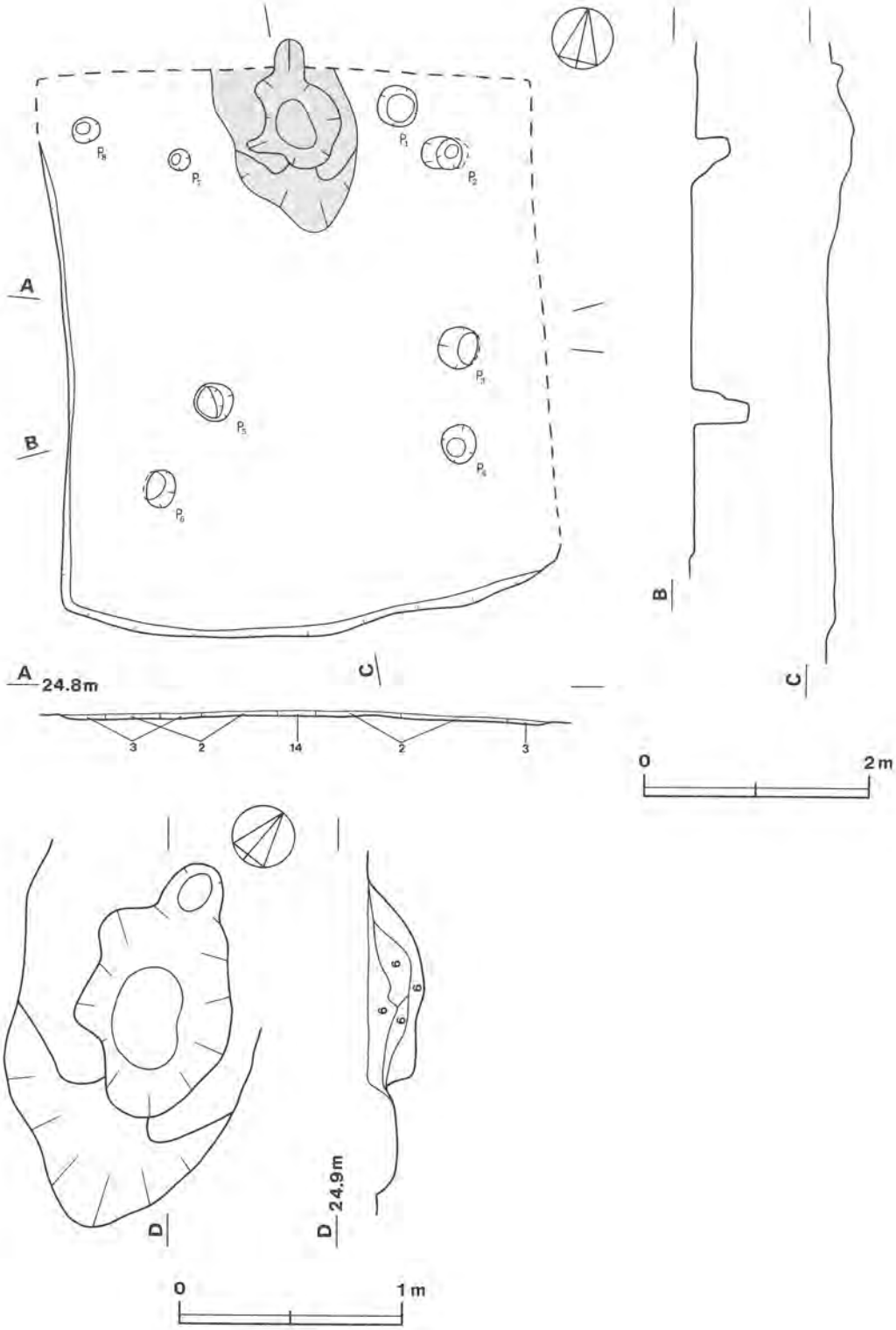
覆土がほとんどないこともあり，遺物のほとんどが床面からの出土である。土師器の皿の他に，土師器・須恵器片168点が出土している。



第80図　第19号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第80図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
	高台付皿 土師器	A (12.9) B (1.8)	底部は平底で，高台の剥離痕が認められる。体部は大きく外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り，器内面は一定方向のヘラ磨き調整。	砂粒・スコリア・パミス 浅黄橙色 普通	30% 内面黒色処理



第81図　第19号住居跡実測図

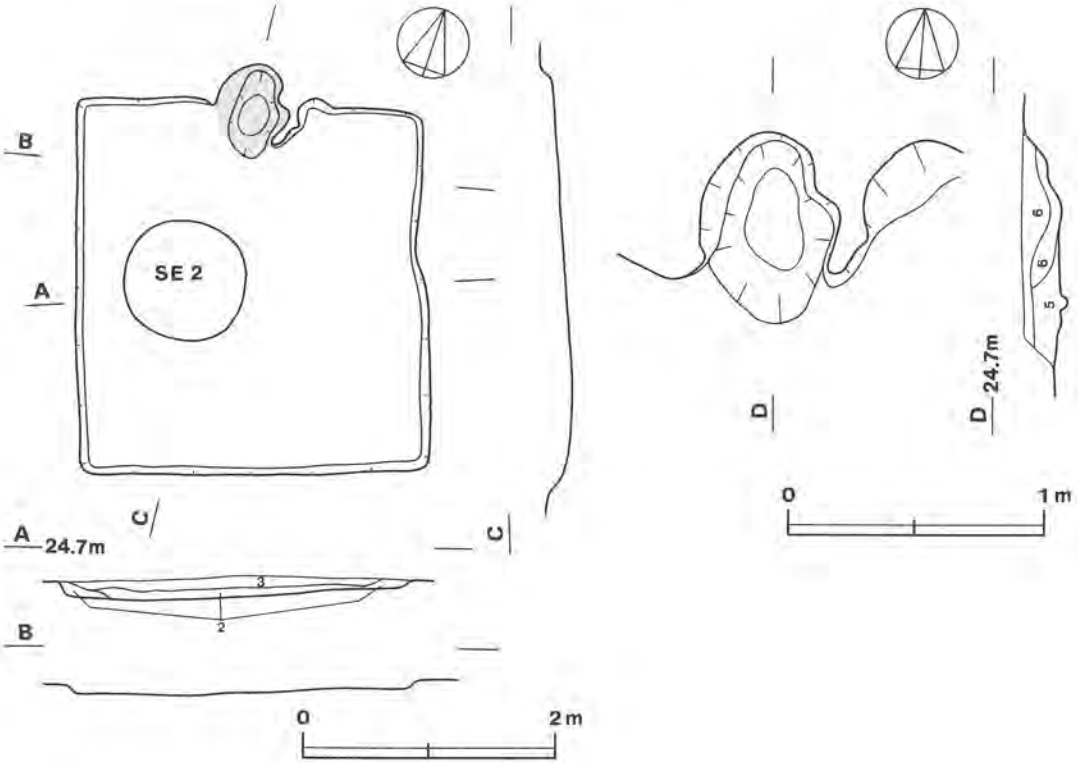
第20号住居跡（第82図）

本跡は，H10a$_8$区を中心に確認された住居跡で，第２号井戸と重複している。井戸は，本跡の床を切って掘り込んでいる。

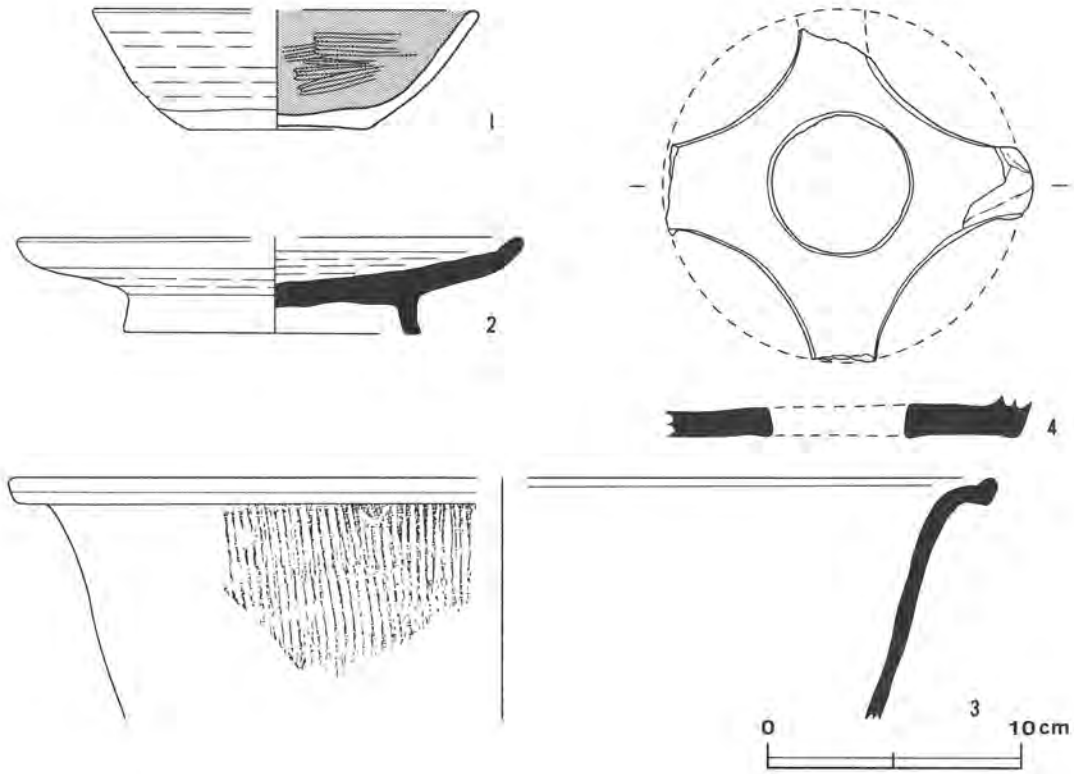
平面形は方形を呈し，規模は長軸2.99m，短軸2.80mで，長軸方向はN—20°—Wである。壁の一部はロームであるが，大部分は暗褐色土で，高さは11～19cmである。床は，非常に硬く締まり，南西方向に２°の角度で傾斜している。床中央部は，第２号井戸に掘り込まれている。カマドは，北壁中央部に構築されているが，残存状況は良くない。袖部は山砂で20cmぐらい残っており，火床部は意図的な掘り込みがなく，床と同一レベルでつながっている。ピットは検出できなかった。

覆土は，２層に分けられる。１層はローム粒子多量，焼土粒子少量を含む暗褐色土，２層は含有物は１層と同様の褐色土が堆積している。

遺物は土師器の坏（１）と，須恵器の盤（２）・鉢（３）がカマド周辺の覆土から，須恵器の甑（４）がカマド内からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片51点が出土している。



第82図　第20号住居跡実測図



第83図　第20号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第83図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (15.3) B 4.8 C 7.1	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部及び体部下端は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。水挽き成形。	長石・スコリア・雲母 褐色 普通	60% 内面黒色処理
2	盤 須恵器	A (20.0) B 3.9 D 11.7	底部は平底で，高さ1.5cmの高台がつく。体部は外傾して大きく開き，口縁端部は内湾する。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り調整。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	70%
3	鉢 須恵器	A (39.0) B (9.6)	口縁部片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。	胴部外面は叩き目，内面はナデで指紋が残る。口縁部外面は横ナデ調整。	雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	10%
4	甑 須恵器	C (14.2)	底部片。開孔部は5か所と思われる。	ナデ調整。	砂粒 褐灰色 普通	10%

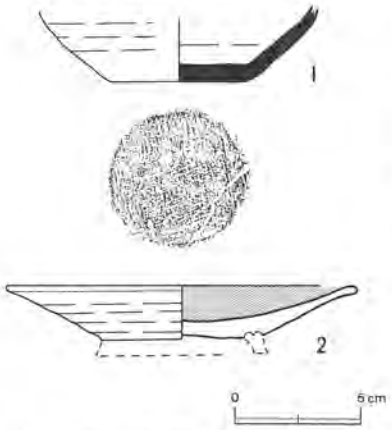
第22号住居跡（第85図）

本跡は，G10h_5区を中心に検出された住居跡で，第21号住居跡，第３号井戸と重複している。床の切り合い状況から判断して，本跡は第21号住居跡より新しく，井戸よりは古いと思われる。

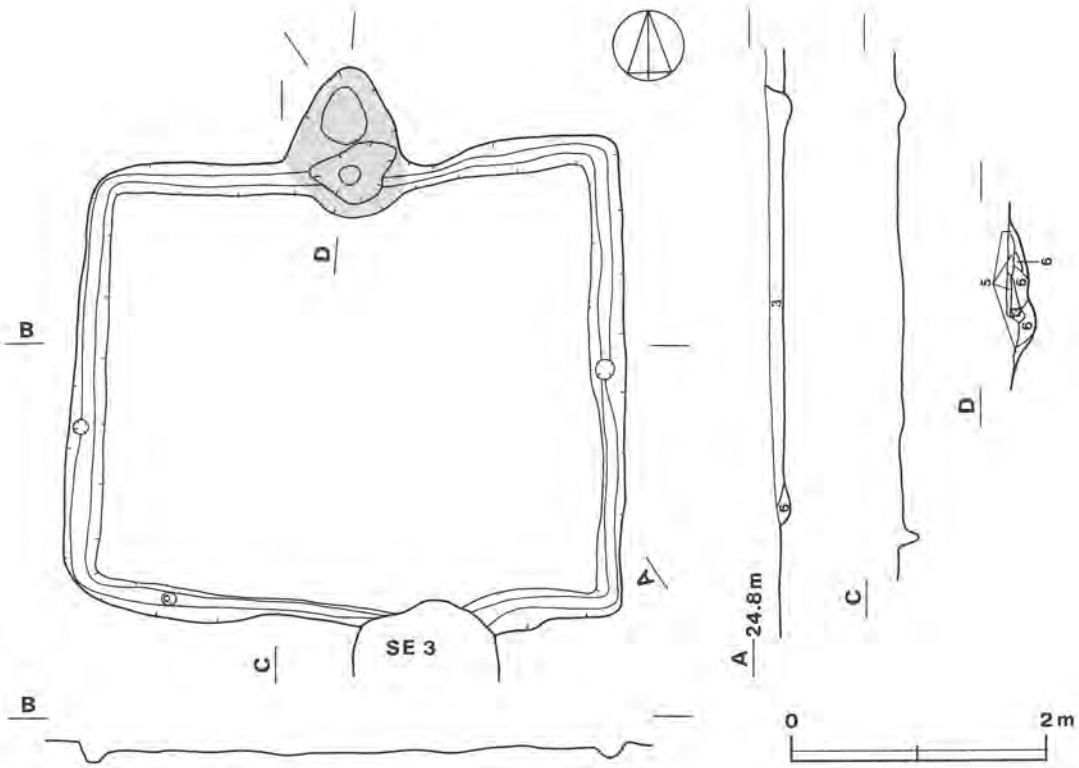
非常に浅い住居跡で，壁は全て消失しているが，幸い壁溝が検出できたため平面形等が判明した。平面形は東西に長い長方形を呈しており，規模は長軸4.39m，短軸3.62m程で，主軸方向はN－0°である。壁溝は，上幅17～30cm，下幅６～15cm，深さ５～12cmで，井戸と重複している部分を除き全周している。床は平坦で，非常に硬く締まっている。ピットは床には検出できなかったが，壁溝内に３か所検出されている。壁柱穴の一部であろう。カマドは北壁中央部に構築されているが，大部分が消失している。煙道は，壁外に大きく75cm張り出している。

覆土は，遺構確認の段階で大部分が削り取られてしまい，堆積状況は不明である。

遺物は全て覆土から出土しており，須恵器の坏（１）と土師器・須恵器片187点である。



第84図　第22号住居跡出土遺物実測図



第85図　第22号住居跡実測図

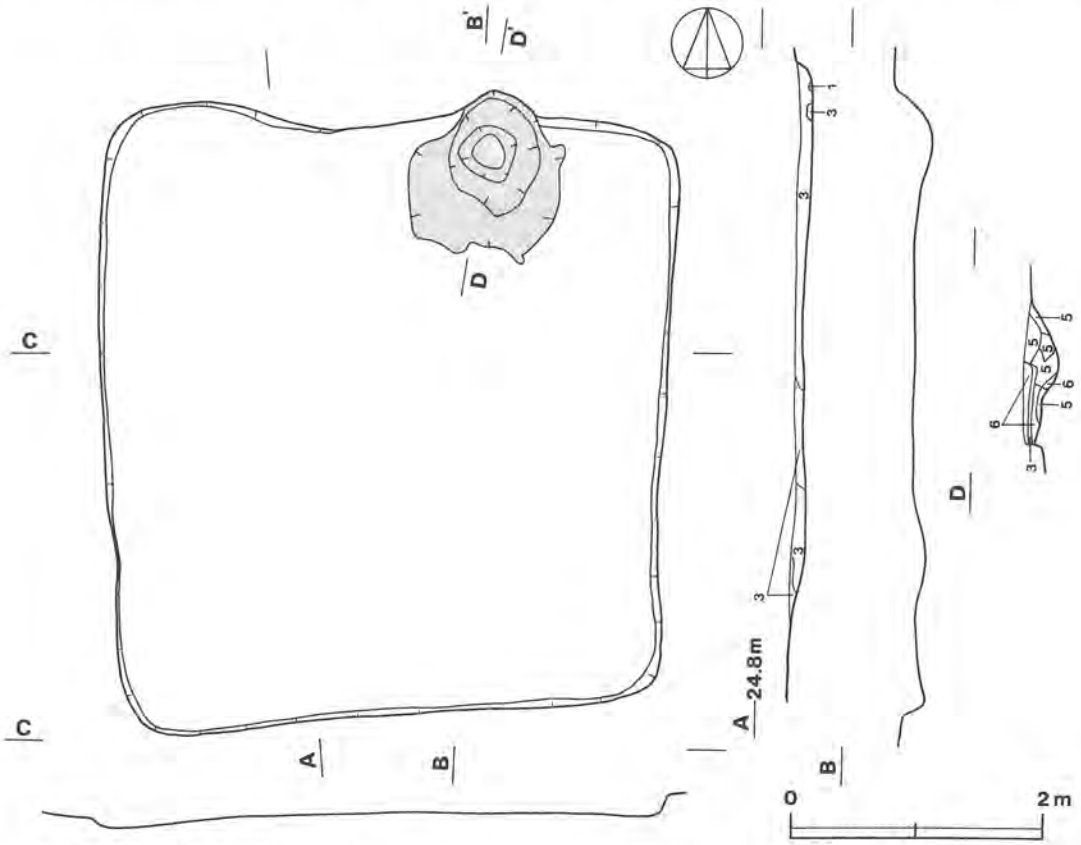
出土遺物観察表（第84図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	B（3.0） C 5.3	底部は平底で，体部は外傾して開く。	底部及び体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・長石・石英 灰白色 普通	30%
2	高台付皿 土師器	A 13.9 B（2.0） C 6.4	底部は平底で，高台の剥離痕が残る。体部は器壁を減じながら，大きく外傾して開く。	底部は回転ヘラ切り後，周辺部のみ回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。 水挽き成形。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	70% 内面黒色処理

第24号住居跡（第86図）

本跡は，G10h_4区を中心に確認された住居跡で，西側で南北に走る第9号溝と重複し，本跡が切られている。

平面形は，長方形を呈すものと推定される。規模は，南北間が4.36mであるが，東西間は明確でない。主軸方向はN－8°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは10～20cmである。床は中央



第86図　第24号住居跡実測図

部がやや盛り上がり，周辺部が低くなる。カマド前面の床は，非常に硬く締まっている。なお，カマドから中央部にかけての床は，３回にわたって作り直されていた。すなわち，最上面の床の下３cmのレベルに第２面の床が検出され，さらに，その下５cmのレベルに第３面の床が検出された。この結果，第３面の床が最も古く，第１面の床が最も新しいことが確認できた。第３面の床は地山で，第１・２面の床はロームを貼って硬く踏み固めていた。このような例は，当遺跡では他に類例がなく，何の目的で２回も床を貼っているのか不明である。ピットは，検出されていない。カマドは北壁東寄りに構築されていたと思われるが，床を長径91cm，短径70cmの楕円形に15cm掘り下げた火床部が確認できただけである。

覆土は１層で，ローム粒子を多く含む暗褐色土で，硬く締まっている。

遺物は覆土からの出土が多く，須恵器の坏（１）と土師器･須恵器片200点である。他に，刀子（２）が出土している。

第87図　第24号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第87図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A (14.8) B 4.3 C (6.3)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石・雲母 褐灰色 普通	20%
2	刀子 鉄製品	全長(10.7) 幅 1.6 重さ(16.1g)	刃部はほぼ完全に残存しているが，茎部は欠損している。			70%

第25号住居跡（第88図）

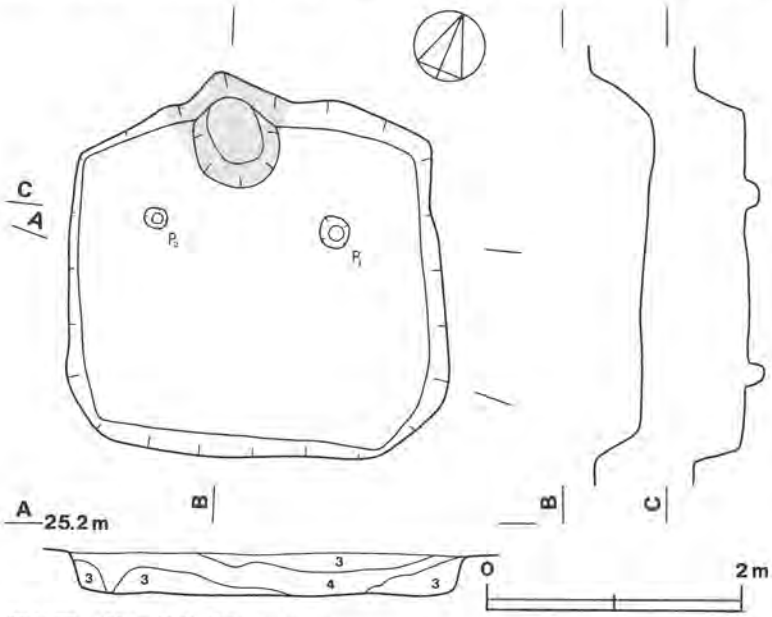
本跡は，G9c9区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸2.94m，短軸2.81mで，主軸方向は，N－27°－Wである。壁は外傾して立ち上がり，高さは43cmで，当遺跡の住居跡群では比較的深い住居跡である。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，カマドの両側に２か所検出されている。P_1は径31cm，深さ12cm，P_2は径22cm，深さ16cmである。カマドは北壁中央に構築されていたが，煙道の張り出しもほとんどなく，床を長径73cm，短径68cmの楕円形に10cm掘り下げた火床部が確認できただけである。

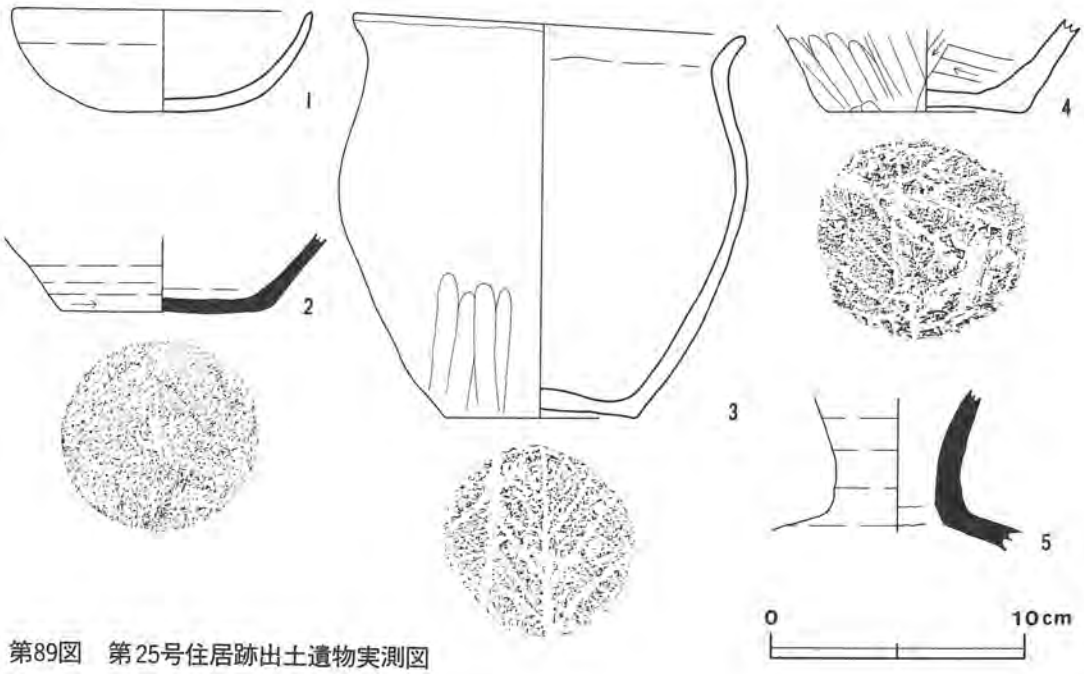
覆土は，大きく３層に分けられる。１層はハードロームブロック・炭化物・焼土粒子をそれぞ

れ少量含む暗褐色土，２層はハードロームブロック・炭化物を少量含む黒褐色土，３層はハードロームブロックを少量含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の坏（１）・甕（3, 4）２点及び須恵器の坏（２）・壺（５）がカマド前面の覆土から集中して出土している。他に，土師器・須恵器片122点，鉄製品等が出土している。



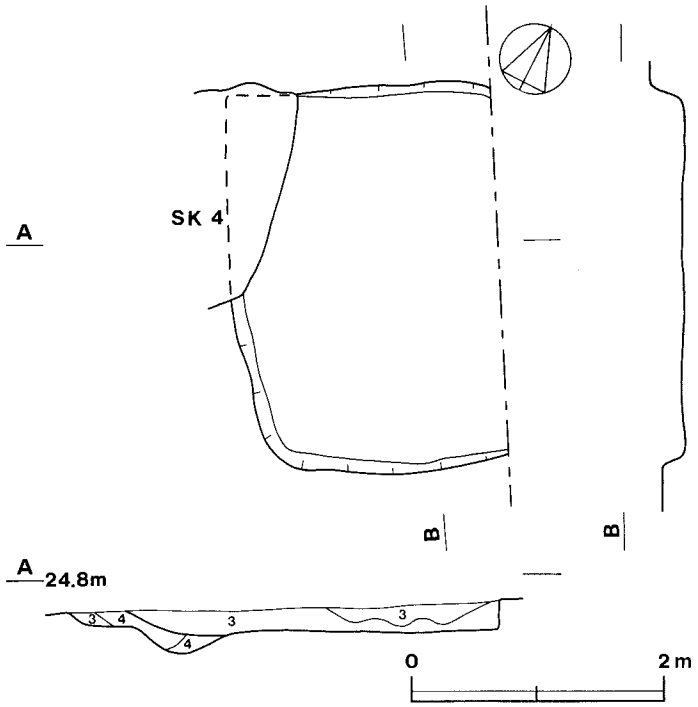
第88図　第25号住居跡実測図



第89図　第25号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第89図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 11.9 B 4.0	底部は丸底で，なだらかに口縁部に至る。口縁部は尖る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	100%
2	坏 須恵器	B（3.2） C 8.0	底部は平底で，体部は直線的に外傾して開く。	底部全面及び体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石 褐灰色 良好	60%
3	甕 土師器	A 15.5 B 16.0 C 7.4 E 16.0	底部は中央が凹んだ平底で，胴部は外傾して立ち上がり，中位に胴部最大径を有する。口縁部は短く外反する。	底部に木葉痕が残り，胴部下位は縦方向のヘラ削り，中～上位はヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	石英・長石・パミス 明赤褐色 普通	90%
4	甕 土師器	B（3.4） C 7.8	底部片。平底である。	底部に木葉痕。胴部下端はヘラ磨き調整。胴部内面はヘラナデ調整と思われる。	雲母・石英・長石 赤褐色 普通	10%
5	壺 須恵器	B（6.3）	頸部片。長頸壺の頸部で，外反して立ち上がる。	頸部と肩部の接合部は，ヘラ削り後指頭で押えている。 水挽き成形。	砂粒・礫 灰黄色 良好	10%



第90図　第26号住居跡実測図

第26号住居跡（第90図）

本跡は，G10e_1を中心に確認された住居跡で，北西コーナー部で第４号土坑と重複している。土坑は本跡の床を切って掘り込まれている。本跡の東側はエリア外であるため，詳細は不明である。

平面形や主軸方向は，不明である。規模は南北間だけで確認でき，3.09mである。壁は垂直に立ち上がり，高さは16～24cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットやカマドは検出されず，北西部は第４号土坑に切られている。当遺跡では，ピットが２か所でカマドをもたない住居跡が多く確認されているが，本跡もその類似遺構の可能性がみられる。

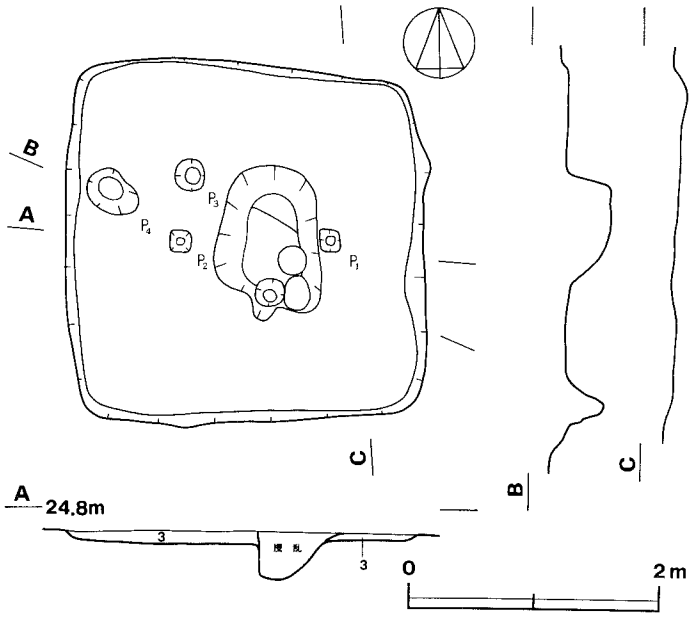
覆土は，大きく２層に分けられる。ともに極暗褐色土で，１層には多量のローム粒子と中量のロームブロックを含み，２層には多量のローム粒子を含んでいる。

遺物は，覆土及び床面から土師器・須恵器片38点が出土している。

第27号住居跡（第91図）

本跡は，G9f_0区を中心に確認された住居跡で，遺構の床面中央部に大きな撹乱を受けている。

平面形は方形を呈し，規模は長軸2.90m，短軸2.81mである。全体に浅い住居跡で，壁は垂直に立ち上がり，高さは４～10cmである。主軸方向は，N—89°—Wである。床は平坦であるが，中央部に撹乱坑がある。ピットは４か所検出されているが，東西に並ぶP_1・P_2が本跡の柱穴と考えら



第91図　第27号住居跡実測図

れる。この種の住居跡では，ピット間に炭化物の層が認められること多いが，本跡の場合は撹乱を受けており，確認できなかった。P_1・P_2とも，一辺15cmの方形を呈しており，深さはそれぞれ33cm，35cmである。

覆土は1層で，ローム粒子多量，炭化粒子少量を含む暗褐色土である。

遺物は極めて少なく，覆土から土師器・須恵器片14点が出土しただけである。

第92図　第27号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第92図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師質	A (12.2) B (3.5)	底部は丸底で，なだらかに口縁部に至る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はヘラナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	20%
2	蓋 須恵器	A (14.5) B 3.2	天井部はほぼ平坦で，口縁部は外下方に下がり，端部で屈曲した後，短く垂下する。	天井部及び器内面は回転ヘラ削り調整。 水挽き痕は弱い。	長石・石英 褐灰色 普通	40%

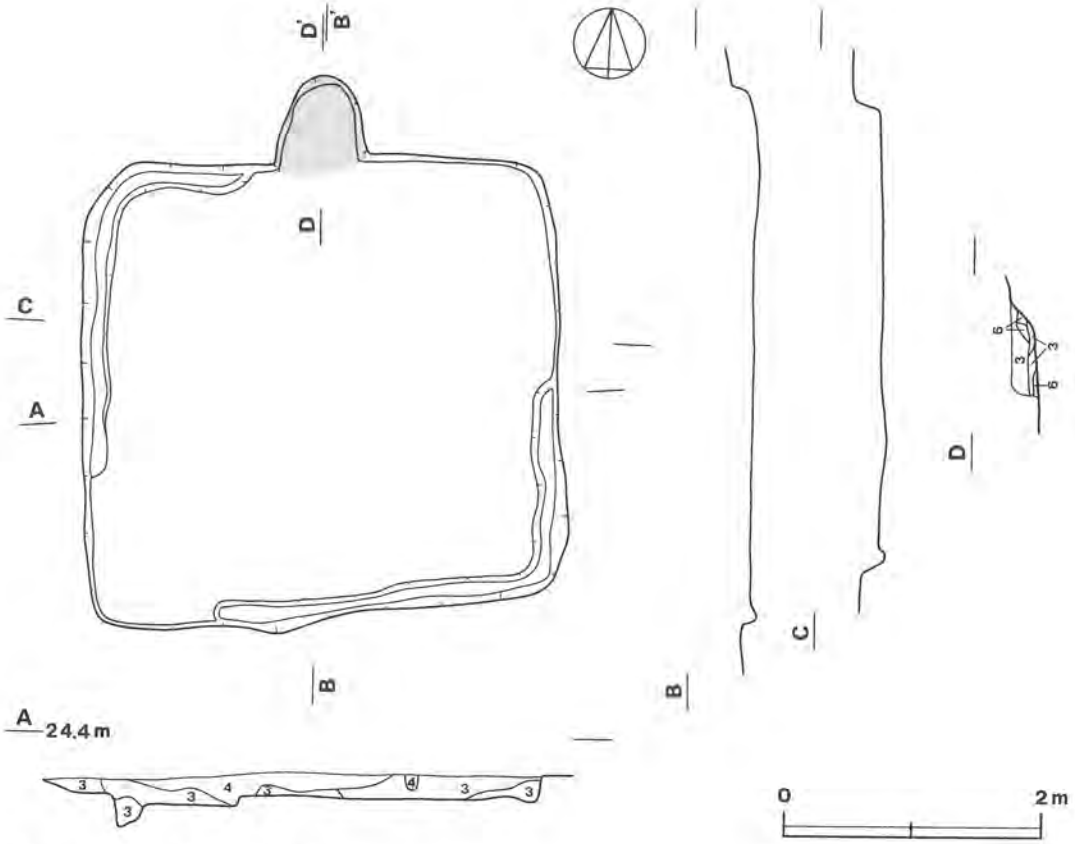
第28号住居跡（第93図）

本跡は，G9g_0区を中心に確認された住居跡である。

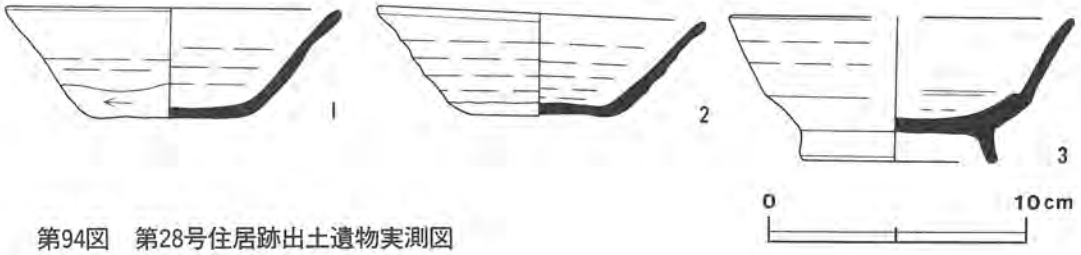
平面形は方形を呈し，規模は長軸3.74m，短軸3.68mで，主軸方向は，N－3°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは20cmである。壁溝は，北東及び南西の各コーナー部を除き確認され，上幅15～20cm，深さ5cmである。床は平坦で，硬く締まっているが，ピットは検出されない。カマドは北壁中央部に構築されており，袖部や火床部の掘り込みもなく，煙道だけが外に大きく張り出している。

覆土は，大きく2層に分けられるが，撹乱とみられる暗褐色土も所々に認められる。1層は焼土ブロック多量，炭化物中量を含む黒褐色土，2層はローム粒子及び焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は，須恵器の蓋と坏（1，2，3）3点がカマド前面の覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片62点が出土している。



第93図　第28号住居跡実測図



第94図　第28号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第94図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 13.3 B 4.4 C 6.2	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・雲母・スコリア・長石 灰白色 普通	70%
2	坏 須恵器	A 13.0 B 4.3 C 5.5	底部は平底で，体部は器壁を減じながら外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後中央部を残してヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・礫 灰白色 普通	55%

3	高台付坏 須恵器	A (13.6) B 5.7 D 7.6	底部は平底で，高さ1.2cmの高台がつく。体部は下位に稜を有し，外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後周辺部のみ回転ヘラ削り，体部下端はヘラナデ調整。 水挽き成形。	長石・石英 褐灰色 普通	60%

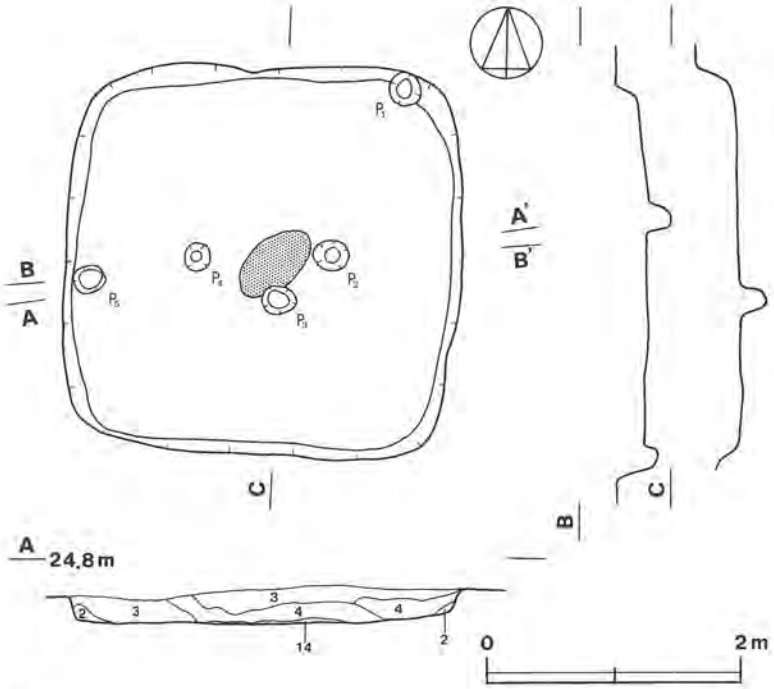
第29号住居跡（第95図）

本跡は，G9g_8区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.14m，短軸3.11mで，主軸方向はN—86°—Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは23～29cmである。床は平坦で，南に向かってやや傾斜している。ピットは，5か所検出された。東西に並んで検出されたP_1・P_2が主柱穴になると思われる。それぞれの径は20～27cm，深さは20～40cmである。P_1・P_2の間には，厚さ2cmの植物質の炭化物の層が認められた。炭化物の層は，硬い床面上にあり，焼土はほとんど検出されていない。

覆土は，2層から成っている。1層は，ローム粒子や焼土粒子を少量含む極暗褐色土，2層は，ローム粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土で，両層とも硬く締まっている。

遺物は，須恵器片が1点だけ床面から出土している。



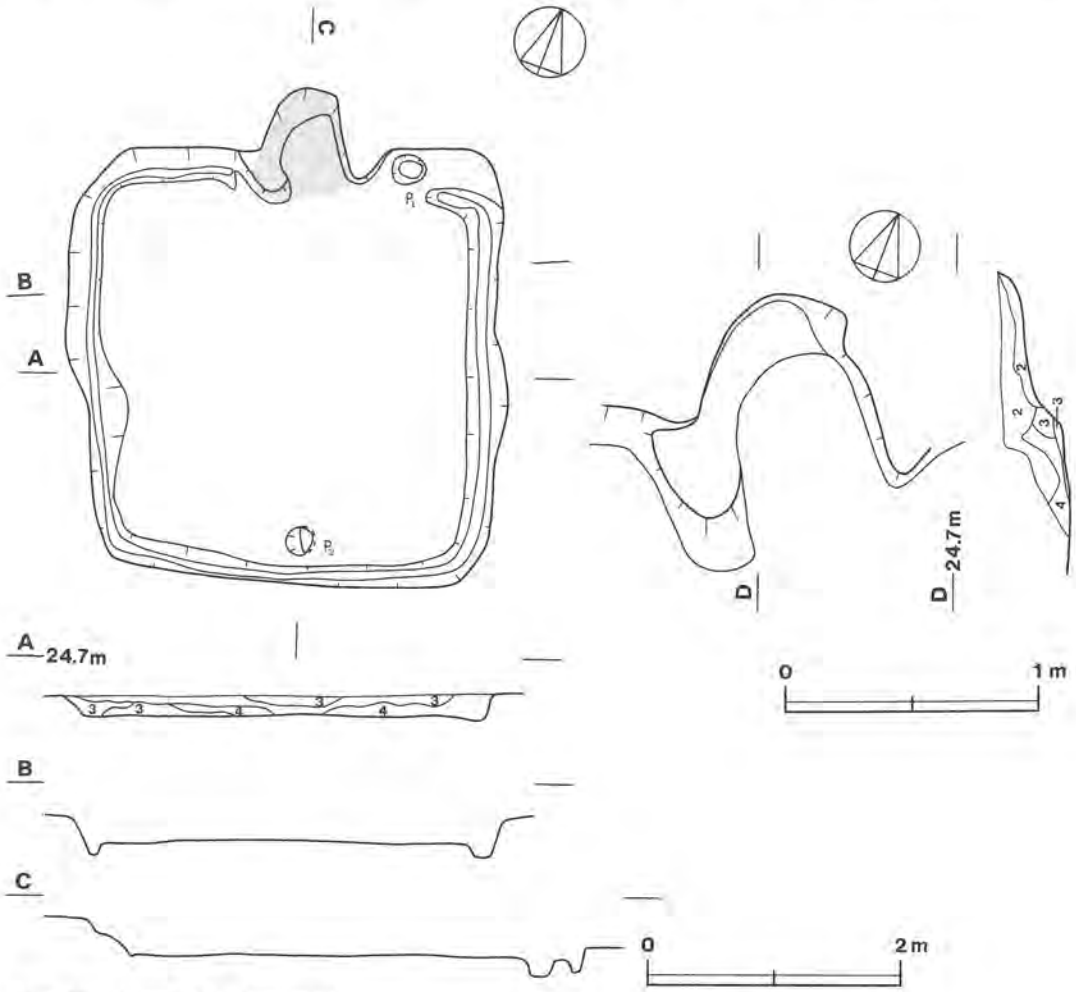
第95図　第29号住居跡実測図

第30号住居跡（第96図）

本跡は，G9f_7区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.50m，短軸3.45mで，主軸方向はN－19°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは18cmである。壁溝は全周しており，上幅10～18cm，深さは10cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，カマド東側と南壁中央下の２か所に検出されている。検出位置からみて，主柱穴とは認められない。カマドは北壁中央部に構築されている。袖部がわずかに残存しており，その基部は地山を意図的に掘り残したロームで，その先に砂混じりの粘土を貼り付けている。住居跡の掘り方を決定する時に，カマドの位置も決められていたことが窺える。煙道は，外に50cm張り出している。火床部の掘り込みはない。

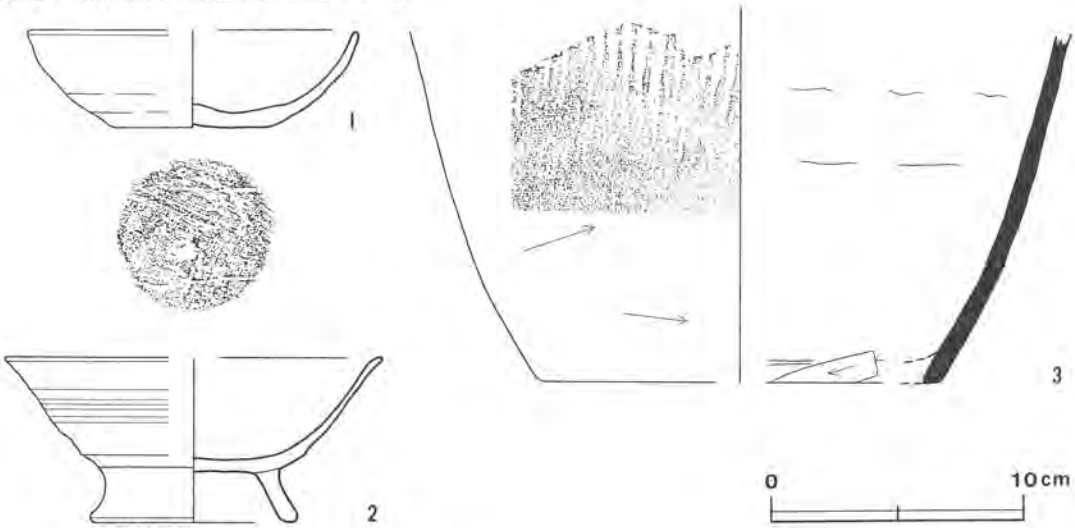
覆土は３層から成り，上位２層はロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土



第96図　第30号住居跡実測図

と極暗褐色土で，3層はロームブロック多量，ローム粒子中量，焼土粒子少量含む黒褐色土である。

遺物は，土師器の坏（1，2）2点と須恵器の甑（3）がカマド内から出土している。他に，土師器・須恵器片144点が出土している。



第97図　第30号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第97図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.0) B 3.9 C 6.0	底部は平底で，中央部が厚くなる。体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。水挽き成形。	雲母・砂粒・礫 灰褐色 普通	40%
2	高台付坏 土師器	A (14.2) B 6.1 D 8.2	底部は平底で，「ハ」の字状に開く高さ2cmの高台がつく。体部は器壁が薄く，外傾して立ち上がる。	高台の内・外及び口縁部内面は横ナデ調整。体部中位だけ回転ヘラナデ調整である。	雲母・長石・礫 浅黄橙色 普通	45%
3	甑 須恵器	B (14.0) C (16.0)	胴部は外上方に直線的に立ち上がる。底面の開孔部は2か所以上あったものと思われる。	胴部中位は平行叩き目，下位は横方向のヘラ削り調整。器内面に輪積痕が残る。	雲母・長石 にぶい橙色 普通	20%

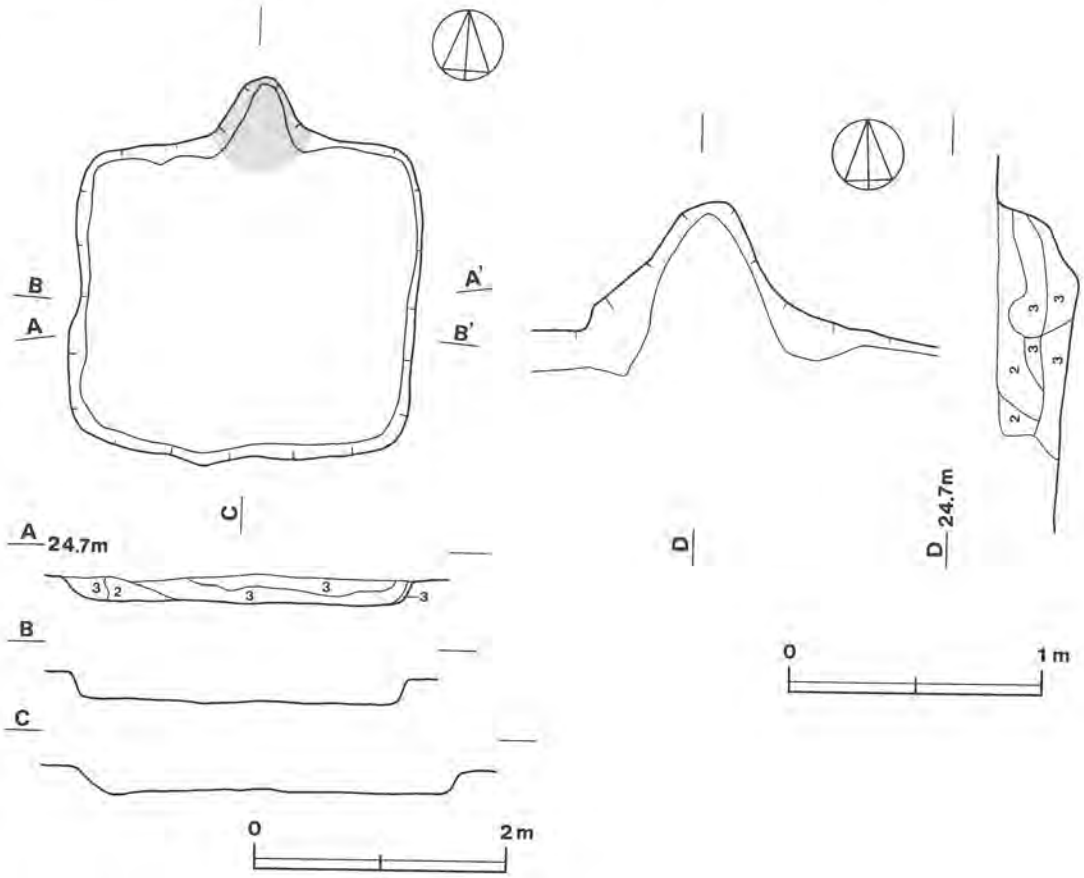
第34号住居跡（第98図）

本跡は，G8g₀区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸2.71m，短軸2.61mで，主軸方向は，N－0°である。壁は垂直に立ち上がり，高さは21cmである。西壁の上端は，やや屈曲している。床は平坦で，非常に硬く締まっている。ピットや壁溝はない。カマドは北壁中央部に構築されており，煙道が外に50cm張り出している。袖部や火床部の掘り込みはない。

覆土は２層で，両層とも多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含んでいる。１層は暗褐色土，２層は極暗褐色土である。

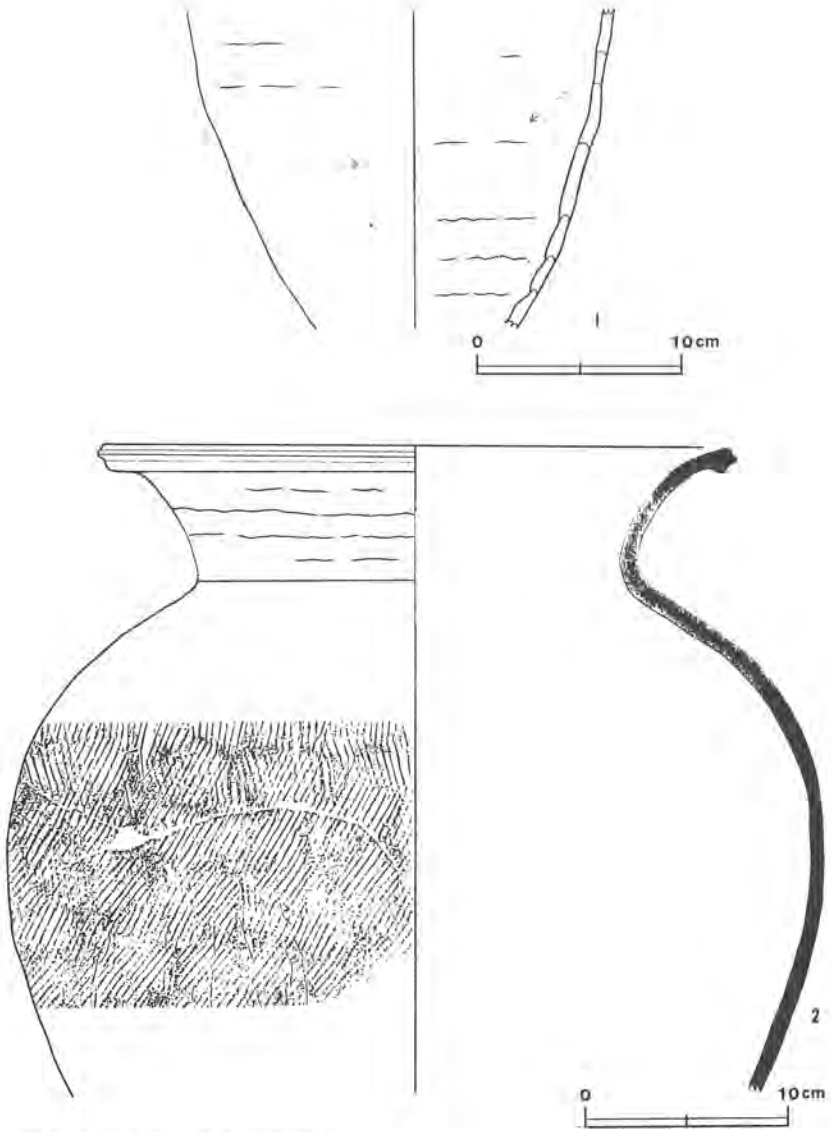
遺物は，土師器の甕（１）と須恵器の甕（２）が床面中央部から出土している。他に，土師器・須恵器片162点が出土している。



第98図　第34号住居跡実測図

出土遺物観察表（第99図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	B (15.7)	甕の胴部片で，わずかに内湾しながら外上方に立ち上がる。	胴部外面は横方向のヘラ削り，内面はヘラナデ調整。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	50%
2	甕 須恵器	A 30.6 B (32.0) C 40.0	胴部は球形を呈し，胴部最大径を中位にもつ。口縁部は強く外反して立ち上がる。	胴部外面は平行叩き目，内面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。口縁部に輪積痕が残る。	長石・石英・雲母・スコリア・礫 にぶい褐色 普通	50%



第99図　第34号住居跡出土遺物実測図

第35号住居跡（第100図）

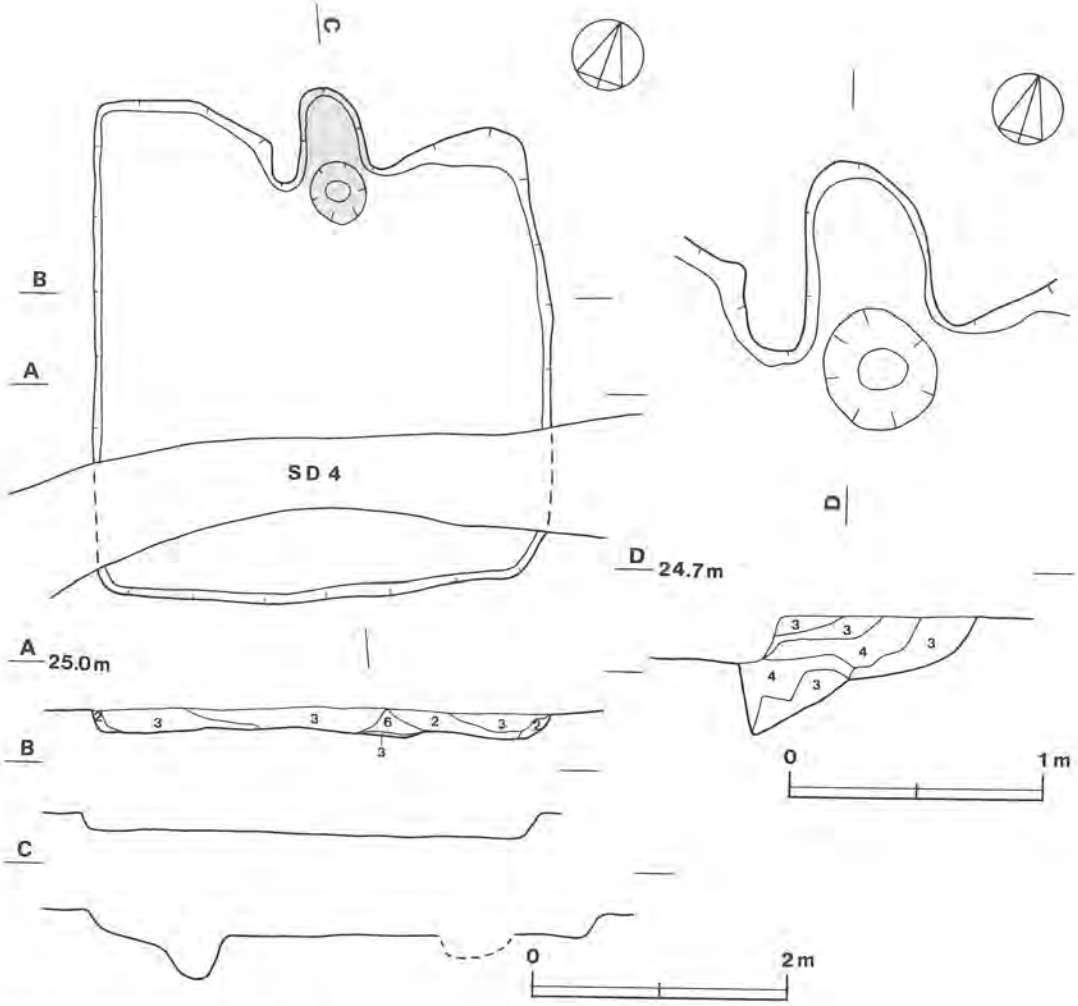
本跡は，G9d₁区を中心に確認された住居跡で，南側の床を切って第４号溝に掘り込まれている。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.61m，短軸3.55mで，主軸方向は，N－21°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは18cmである。南壁は，溝の南側に検出されている。床は平坦で，硬く締まっている。ピットや壁溝はない。カマドは北壁中央部に山砂で構築されており，袖部がわずかに残っている。火床部は，径47cm，深さ30cmのピット状に掘り込まれている。煙道の張り出しは，ほとんどない。

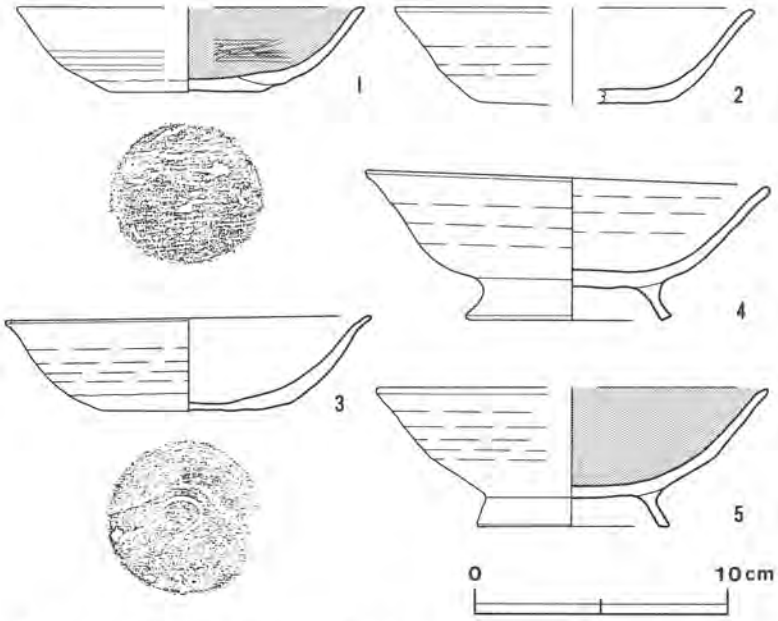
覆土は，遺構中央部にローム粒子多量，焼土粒子及び粘土粒子を少量含む暗褐色土が，周辺部

にローム粒子多量，焼土粒子少量を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，土師器の坏５点（１，２，３，４，５）が床面中央部から出土している。他に，土師器・須恵器片200点が出土している。



第100図　第35号住居跡実測図



第101図　第35号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第101図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.7) B 3.4 C 6.0	底部は平底で，体部との境に接合痕を残す。体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部中位は回転ヘラナデ，器内面はヘラ磨き調整。	雲母・石英・礫 にぶい橙色 普通	40% 内面黒色処理
2	坏 土師器	A (14.1) B 3.7 C (7.7)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部でかるく外反する。	底部は回転ヘラ切り後ナデ，器内面はナデ調整。水挽き成形。	砂粒・礫・雲母・スコリア・長石 にぶい赤褐色 普通	40%
3	坏 土師器	A 13.5 B 3.8 C 6.5	底部は平底で，体部は器壁を減じながら内湾ぎみに立ち上がり，口縁部で外反する。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り，体部下端は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。水挽き成形。	雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	70%
4	高台付坏 土師器	A 16.0 B 6.0 D 8.2	底部は平底で，体部との境は丸みがある。体部は外傾して立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部は回転ヘラ切り後ナデ，器内面はヘラ磨き調整。水挽き成形。	雲母・砂粒 にぶい赤褐色 普通	65%
5	高台付坏 土師器	A (15.3) B 5.5 D 7.5	底部はわずかに丸みをもち，なだらかに体部に続く。体部は中位でかるく屈曲した後，外傾して立ち上がる。「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。水挽き成形。	雲母・スコリア・砂粒・礫 橙色 普通	50% 内面黒色処理

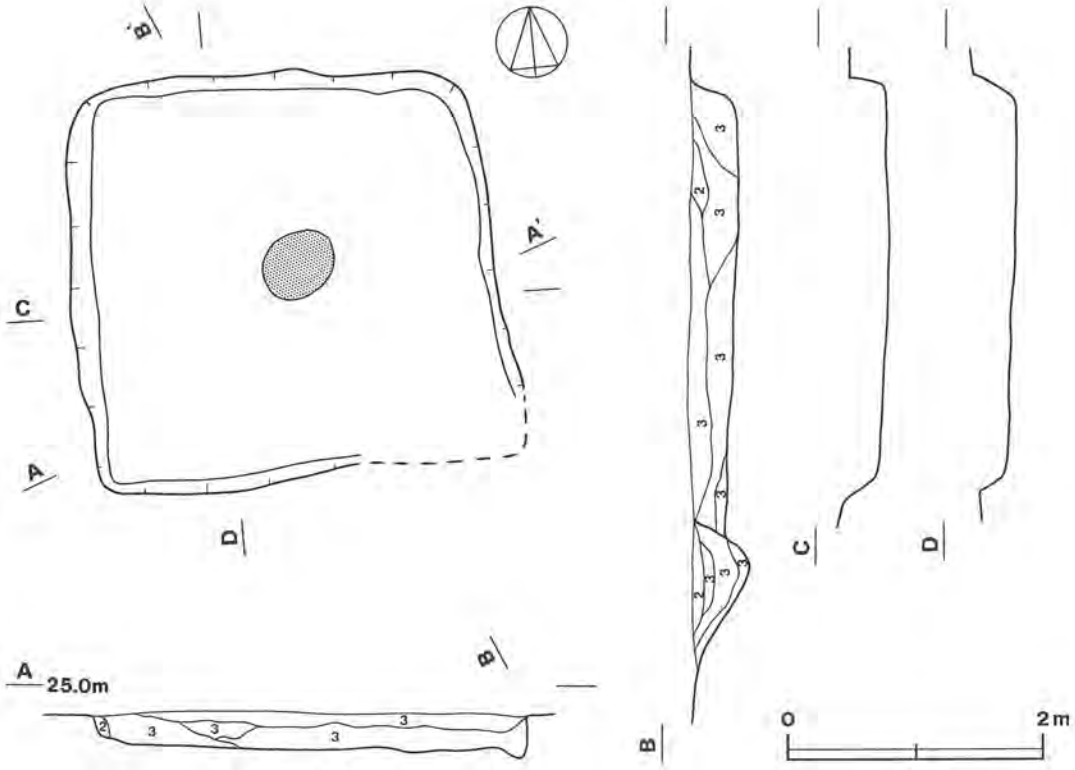
第36号住居跡（第102図）

本跡は，G 9 b_1区を中心に確認された住居跡で，南東コーナー部を第５号溝によって切られている。

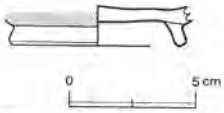
平面形は方形を呈し，規模は長軸3.35m，短軸3.25mで，主軸方向は，ピットがないため断定できなかったが，四辺とも東西南北のライン上にあることから，N－0°と考えられる。壁は垂直に立ち上がっているが，西壁だけやや外傾している。壁高は，34cmである。床は平坦で，硬く締まっており，全体に北に向って傾斜している。ピットはなく，床中央部に炭化物の層がうすく認められた。しかし，焼土は検出できず，床の掘り込みもないことから，炉としても長期間火を使用したとは思われない。

覆土は２層で，ともに暗褐色土であり，ローム粒子を多量に含んでいる。

遺物は，土師器の坏と陶器片が覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片123点が出土している。



第102図　第36号住居跡実測図



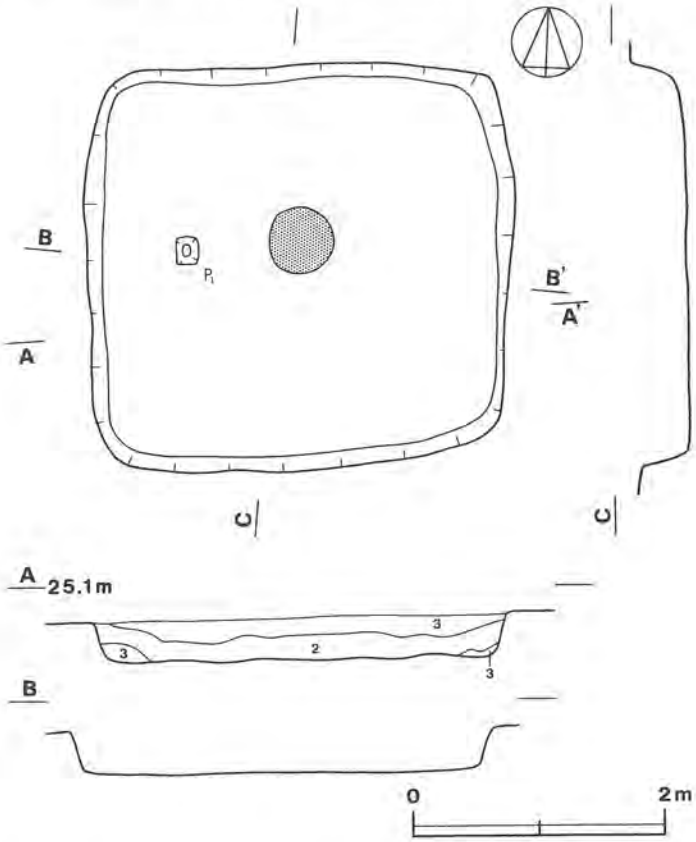
第103図　第36号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第103図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	高台付坏 土師器	B（1.6） D　7.0	底部片。平底で，高さ1cmの高台がつく。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。	スコリア・砂粒・石英 橙色 普通	10% 外面黒色処理

第37号住居跡（第104図）

本跡は，G9a₁区を中心に確認された住居跡である。

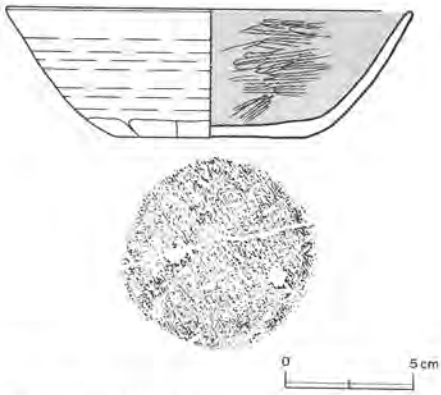


第104図　第37号住居跡実測図

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.33m，短軸3.22mで，主軸方向は，N－84°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは40cmである。床は平坦で，硬く締まっており，中央部に炭化物が，薄く付着していた。しかし，第36号住居跡と同様，炭化物は平坦な床面上に検出されており，掘り込みはなく，焼土も認められない。したがって，長期間火を利用した痕跡ではないと考えられる。ピットは，西壁近くの床面に１か所検出されている。このピットは，長辺20cm，短辺15cmの長方形を呈しており，深さは20cmである。

覆土は２層で，両層ともローム粒子多量，焼土粒子少量を含んでおり，１層は暗褐色土，２層は褐色土である。

遺物は，土師器の坏が覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片46点が出土している。



第105図　第37号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第105図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
	坏 土師器	A 16.0 B 5.1 C 7.4	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端はヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。 水挽き成形。	雲母 長石・石英 にぶい赤褐色 普通	70% 内面黒色処理

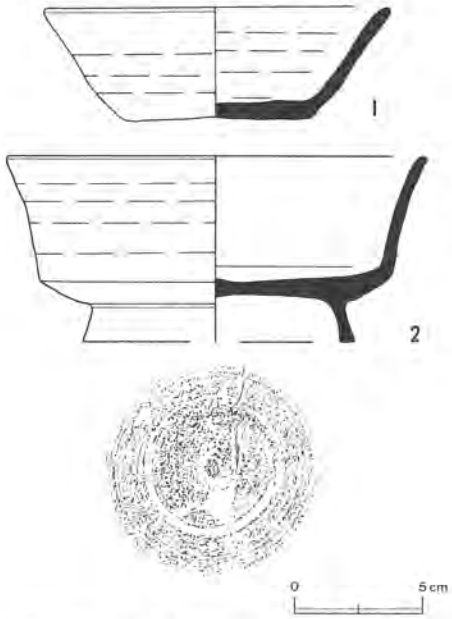
第39号住居跡（第21図）

本跡は，F8i_9区を中心に確認された住居跡で，第38号住居跡と重複しており，本跡が切っている。

平面形は，東西に長い長方形を呈し，規模は長軸3.56m，短軸2.96mで，主軸方向は，N－22.5°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは30cmである。西壁は撹乱が多い。壁溝は全周しており，上幅８～20cm，下幅５～11cm，深さ８cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは確認されなかった。カマドは，北壁の東寄りに構築されている。袖部はなく，床を長径49cm，短径40cmの楕円形に５cm掘り下げた火床部が確認された。煙道は，壁外に65cm張り出している。

覆土は，１層で，褐色土，暗褐色土，黒褐色土がブロック状に堆積している。いずれのブロックにも，焼土粒子を含んでいる。

遺物は，須恵器の坏（１）が床面西側から出土している。他に，土師器・須恵器片が27点出土している。



第106図　第39号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第106図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 13.5 B 4.4 C 7.4	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は部分的にヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英 灰色 良好	100%
2	高台付坏 須恵器	A 16.5 B 7.3 D (10.7)	底部は平底で，周辺部はやや下がる。体部は下位で屈曲した後，外反ぎみに立ち上がる。高台は高さ1.5cmで，「ハ」の字状に開く。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り，体部下端はナデ調整。 水挽き成形。	長石・石英・礫 灰色 普通	80%

第40号住居跡（第107図）

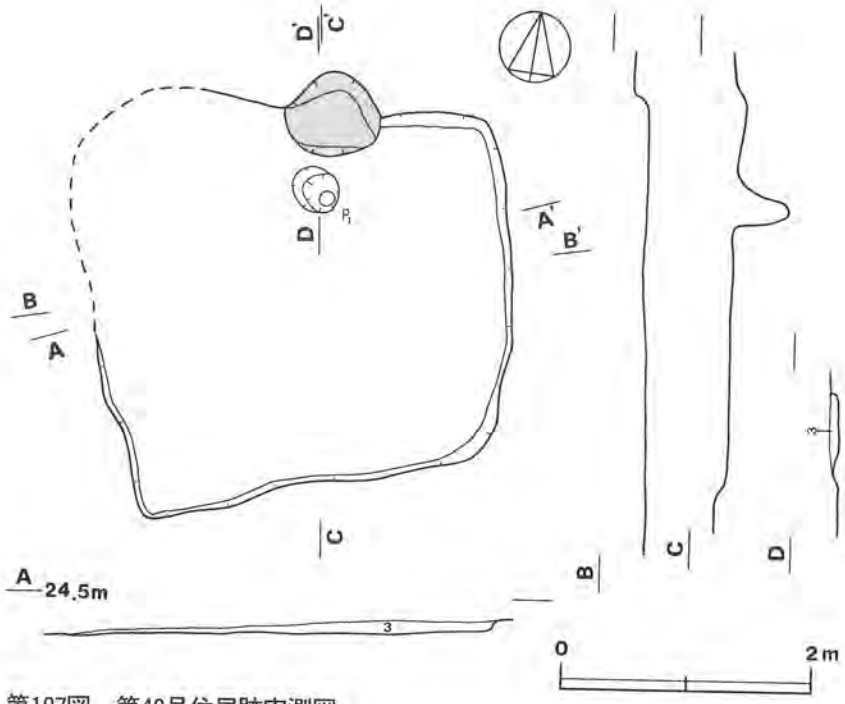
本跡は，G8b$_6$区を中心に確認された住居跡である。

大変浅い住居跡で，北西コーナー部では壁も消失している。平面形は不整方形を呈し，規模は長軸3.29m，短軸2.95mで，主軸方向は，N－18°－Wである。壁は全体に不明確で，最も高い西壁では10cmである。床は，締まりがなく軟らかである。ピットは，カマド前面に１か所検出され，

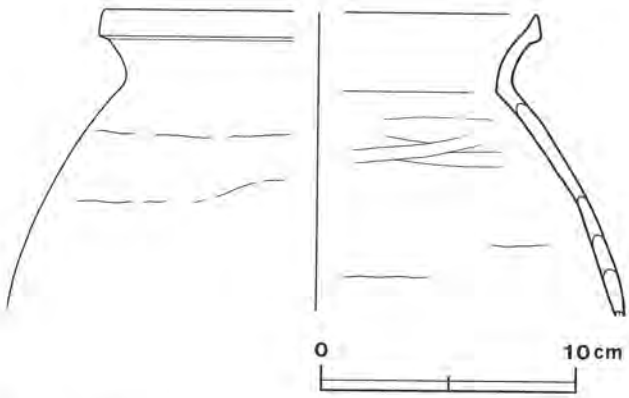
径40cm，深さ42cmである。ピットの底面は南東側に寄っており，柱を立てると，北西方向に柱が傾斜するように掘られている。カマドは北壁中央部に構築されているが，大部分が消失しており，わずかに焼土が検出したにとどまる。

覆土は，焼土粒子及びローム粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の甕が床面北東部から出土している。他に，土師器・須恵器片が41点出土している。



第107図　第40号住居跡実測図



第108図　第40号住居跡出土遺物実測図

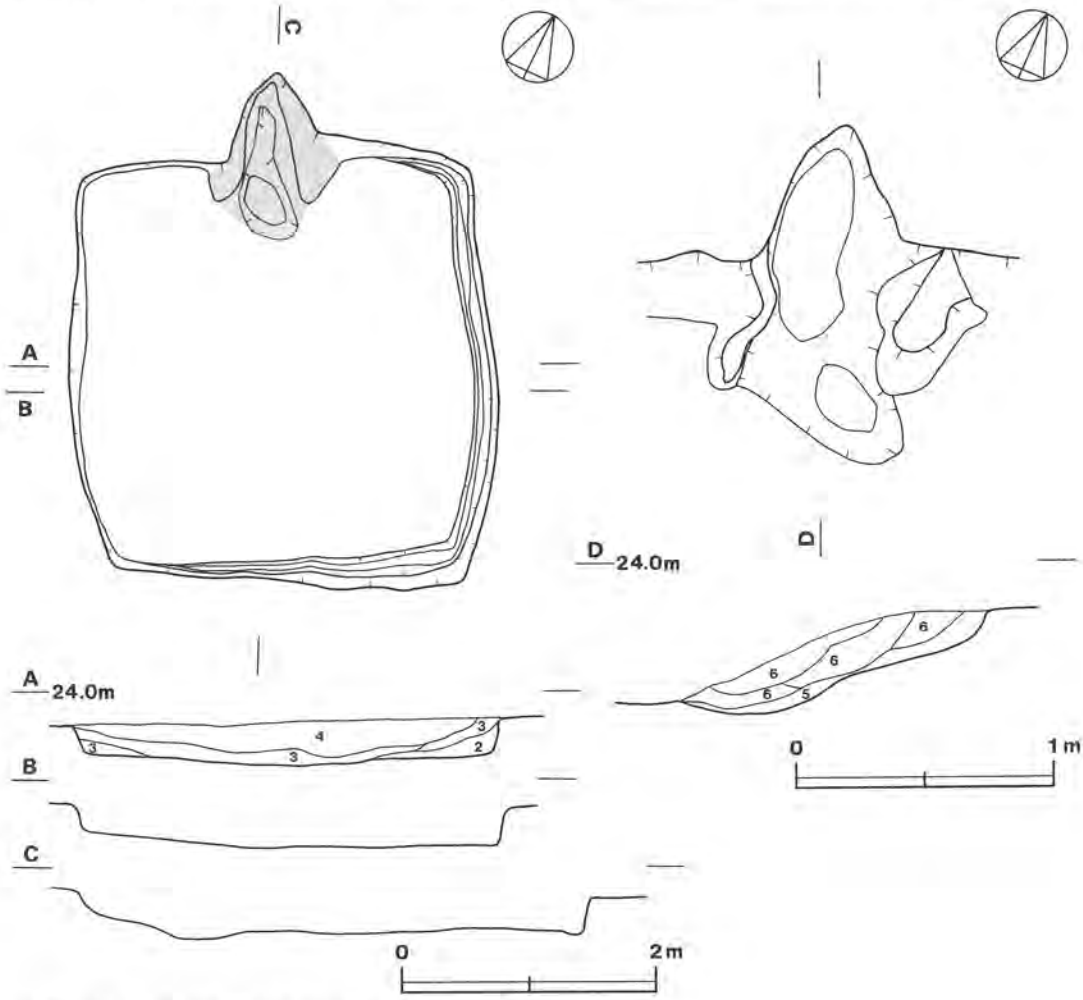
出土遺物観察表（第108図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	甕 土師器	A (17.2) B (11.9)	胴部はかるく内湾しながら内傾して立ち上がり，「く」の字状に屈曲する口頸部に至る。口縁端部は上方につまみ出されている。	胴部内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。輪積痕が残る。	長石・石英・砂粒 にぶい橙色 普通	20%

第42号住居跡（第109図）

本跡は，H8c₈区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.36m，短軸3.31mで，主軸方向は，N—27°—Wである。壁は粘土質の暗褐色土から成っており，高さは32cmである。壁溝は東壁～南壁下にかけて検出され，

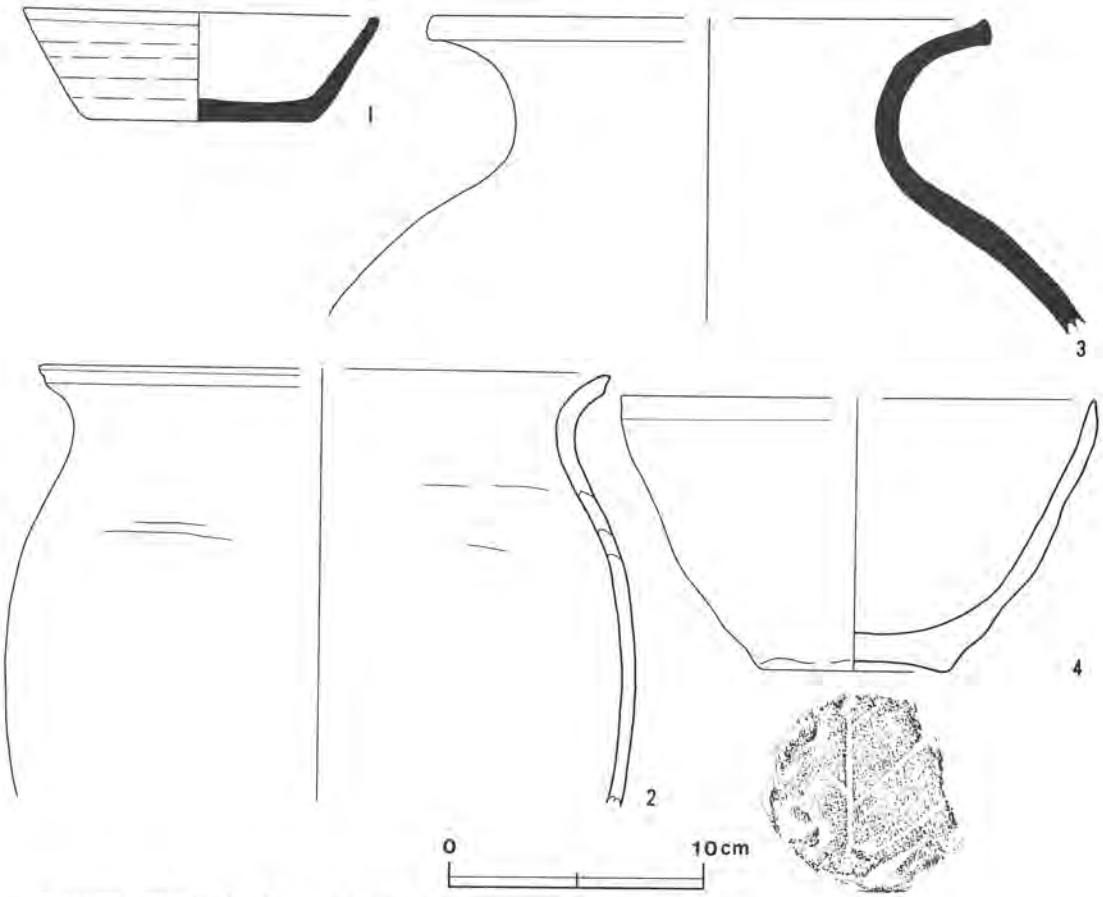


第109図　第42号住居跡実測図

西壁と北壁にはみられない。壁溝の上幅は10～15cm，下幅は３～10cm，深さは２～５cmである。床も壁と同様の土で，水分が多いとベトベトしてくる。ピットはなく，北壁中央部にカマドが粘土で構築されている。袖部はわずかに残り，火床部は床を長径105cm，短径32cmの長楕円形に，８cm掘り込んでいる。煙道は，壁外に75cm張り出している。

覆土は，２層に大別される。１層はローム粒子を中量含む黒褐色土で，２層はローム粒子中量，黒色土ブロック多量を含む極暗褐色土である。

遺物は，土師器の甕（２）が床面西側から，須恵器の坏（１）と甕（３）が覆土からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片137点が出土している。



第110図　第42号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第110図）

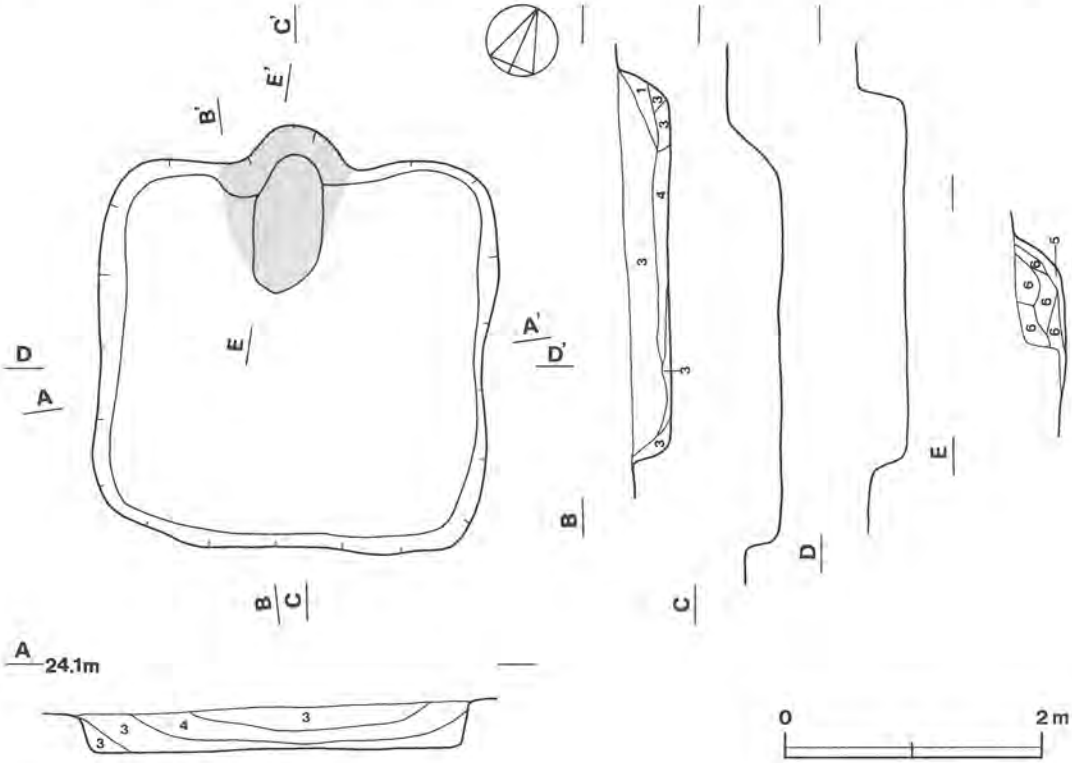
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 14.1 B 4.4 C 8.8	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 灰白色 普通	70%

2	甕 土師器	A (22.6) B (17.1) E (24.9)	胴部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部は外反する	胴部はナデ，口縁部は横ナデ調整。器内・外面に輪積痕が残る。	長石・石英・雲母 スコリア にぶい橙色 普通	30%
3	甕 須恵器	A (21.7) B (12.5)	肩部は大きく内傾して口縁部に至る。口縁部は外反し，端部は上方につまみ出されている。	肩部下端は平行叩き目，他はナデ調整。	雲母・砂粒 灰白色 普通	20%
4	鉢 土師器	A 18.5 B 10.8 C 7.5	底部は上げ底状で，周縁部のみ接地する。胴部は器壁を減じながら外傾して立ち上がり，口縁端部は尖る。	底部は木葉痕，胴部外面はヘラ削り，内面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・パミス・砂粒 橙色 普通	30%

第43号住居跡（第111図）

本跡は，H8c7区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.12m，短軸3.10mで，主軸方向は，N—23°—Wである。壁は粘土質の暗褐色土で，高さは29～41cmである。床も同様の土から成っており，ピットや壁溝はなく，北壁中央部にカマドが構築されている。しかし，残存状況は悪く，粘土ブロックと焼土が認められただけである。なお，本跡は焼失家屋らしく，床面から長さ20～45cm程の炭化材が数か所

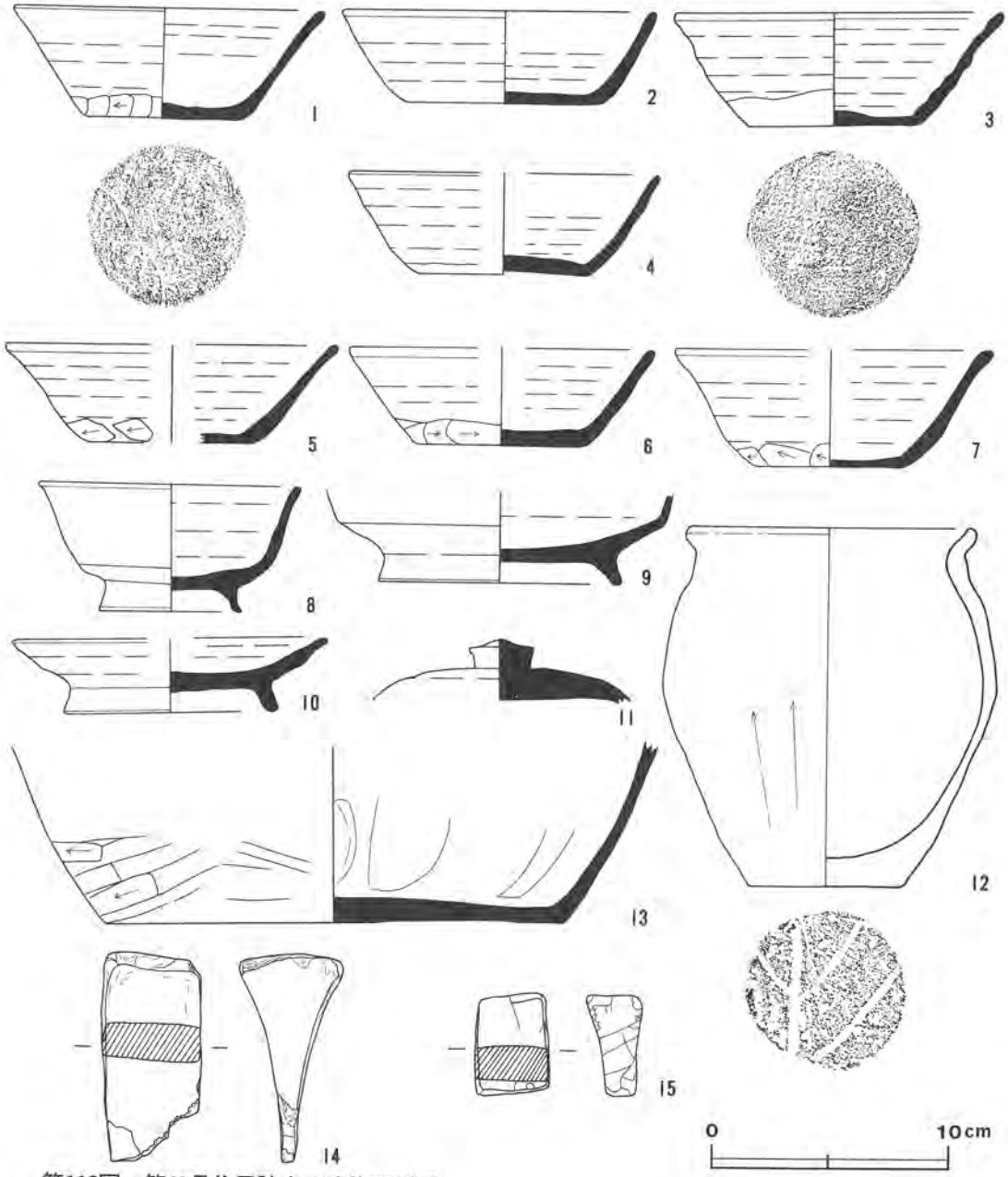


第111図　第43号住居跡実測図

から出土している。

覆土は，３層に分けられる。１層は焼土粒子を中量含む極暗褐色土，２層は焼土ブロック及び粒子を中量含む暗褐色土，３層は焼土粒子少量，炭化物少量を含む粘土質の暗褐色土である。

遺物は，土師器の甕（12）１点と須恵器の皿（10）１点が２層から出土している。甕は，カマド内からも倒立の状態で１点出土している。須恵器の坏（１，２，３，４，５，６，７，８）８点と蓋(11)１点も覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片279点が出土している。



第112図　第43号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第112図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 13.4 B 4.8 C 6.8	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・雲母 褐灰色 普通	100%
2	坏 須恵器	A 13.2 B 4.0 C 8.1	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・砂粒 灰白色 普通	100%
3	坏 須恵器	A 14.0 B 4.9 C 7.3	底部は平底で，中央部が厚くなる。体部は外傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・石英・長石 褐灰色 普通	90%
4	坏 須恵器	A (13.2) B 4.4 C 7.2	底部は平底で，中央部がやや凹む。体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石・雲母・礫 にぶい黄橙色 普通	50%
5	坏 須恵器	A (14.2) B 4.3 C (7.2)	底部は平底で，体部は器壁を減じながら外傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 褐灰色 普通	40%
6	坏 須恵器	A (12.9) B 4.2 C 7.1	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・礫 灰色 普通	30%
7	坏 須恵器	A (13.3) B 5.0 C 6.2	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部でかるく外反する。	底部は全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・長石・石英・礫 暗灰黄色 普通	30%
8	高台付坏 須恵器	A 11.3 B 5.6 D 6.1	底部は平底で，体部との境は丸みがある。体部は外傾して立ち上がり，口縁部で外反する。「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部は回転ヘラ切後回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英 灰色 普通	90%
9	高台付埦 須恵器	B (3.9) D 10.2	底部は平底で，体部は下位で屈曲した後立ち上がる。	底面ヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母 褐灰色 普通	60%
10	高台付皿 須恵器	A (13.6) B 3.1 D 9.1	底部は平底で，体部は器壁を減じながら外傾して立ち上がる。「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母 橙色 普通	60%
11	蓋 須恵器	B (2.7)	天井部のみの破片。天井部は浅く丸い。器壁は非常に厚い。高さ1cmのつまみがつく。	天井部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	30%
12	甕 土師器	A 11.9 B 15.5 C 6.5 E 14.2	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，中位に胴部最大径を有した後，内傾して口縁部に至る。口縁部は短く外傾する。	底部に木葉痕，胴部は縦方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	石英・長石・雲母 赤褐色 普通	95%

13	鉢 須恵器	B（7.8） C 19.6	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	胴部中位に叩き目，下位はヘラ削り，底部はヘラ削り調整。	石英・雲母・長石 にぶい褐色 普通（2次）	30%
14	砥石 石製品	全長（8.9） 厚さ（4.5） 重さ （135.2g）	欠損しているため，形状は不明である。表裏・両側面が使用されており，特に表裏面は断面が撥状を呈するほど，磨り減っている。			凝灰色
15	砥石 石製品	全長（4.5） 厚さ（2.4） 重さ （41.5g）	欠損しているため，本来の形状は不明である。表裏・両側面が使用され，特に表面は磨り減っている。			凝灰岩

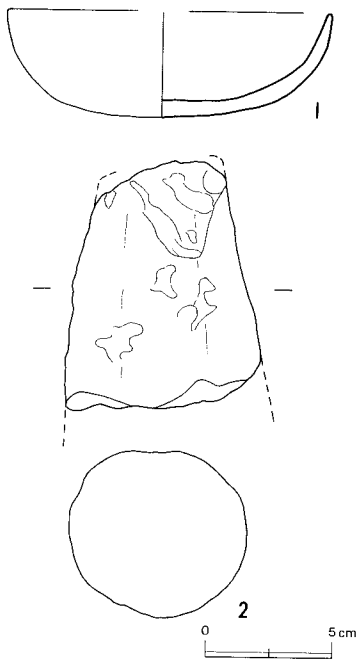
第44号住居跡（第114図）

本跡は，H8c$_5$区を中心に確認された住居跡である。

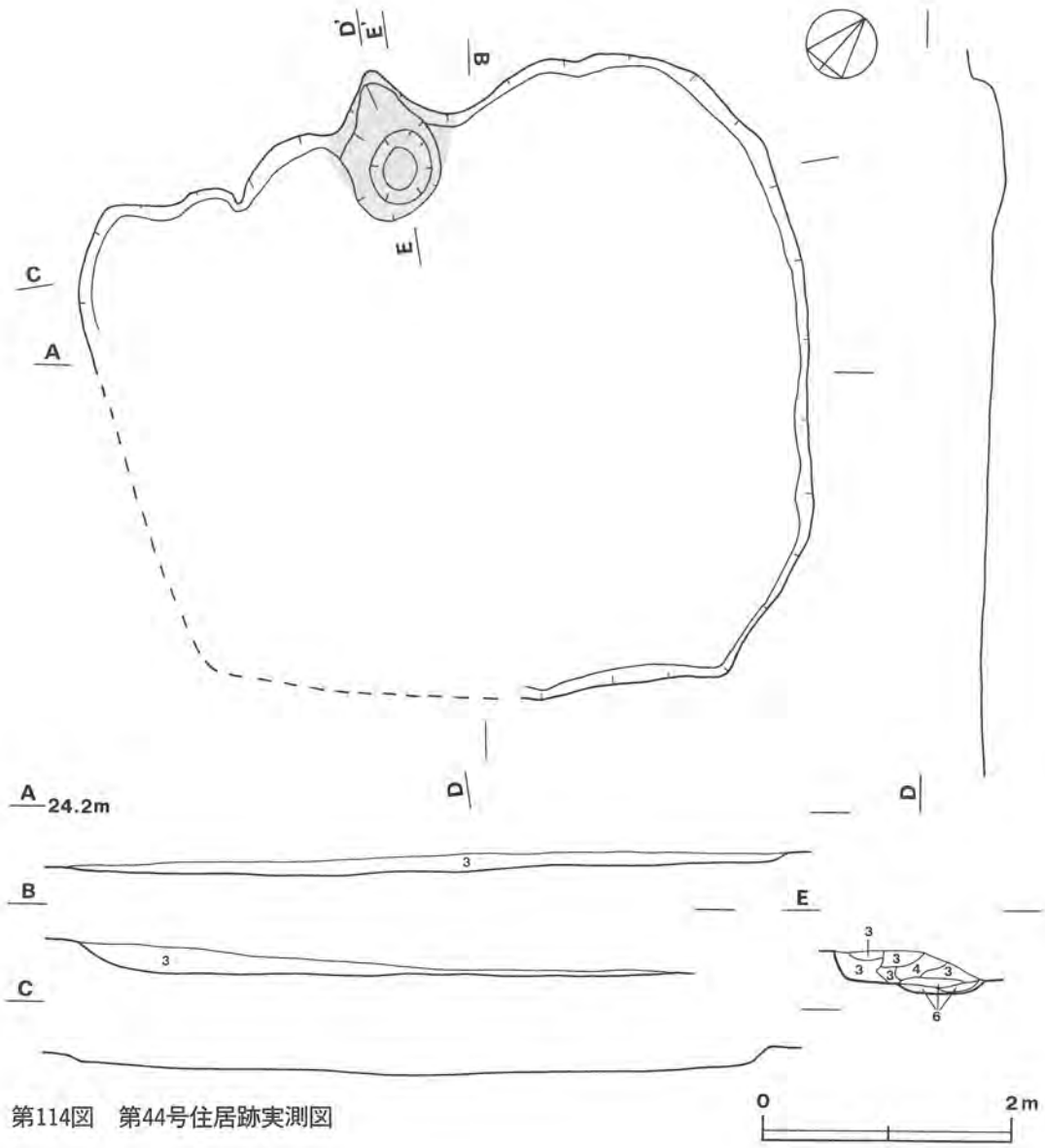
確認された地点が南西方向に傾斜しており，南壁と西壁は一部を残して消失している。平面形は不整長方形を呈し，規模は長軸5.70m，短軸5.17mで，主軸方向は，N—50°—Wである。壁は，約2分の1しか残っていなかったが，残存部は外傾して立ち上がり，高さは20cmである。床は粘土質のロームで，硬く締まっている。ピット等は検出されず，北壁中央部にカマドが構築されており，床を10cm掘り下げた火床部と，外に40cm張り出した煙道が確認されただけである。

覆土は1層だけで，焼土粒子中量，粘土ブロック少量を含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の坏が覆土から，支脚がカマド東側から出土している。他に，球状土錘，土師器・須恵器片115点が出土している。



第113図　第44号住居跡出土遺物実測図



第114図　第44号住居跡実測図

出土遺物観察表（第113図）

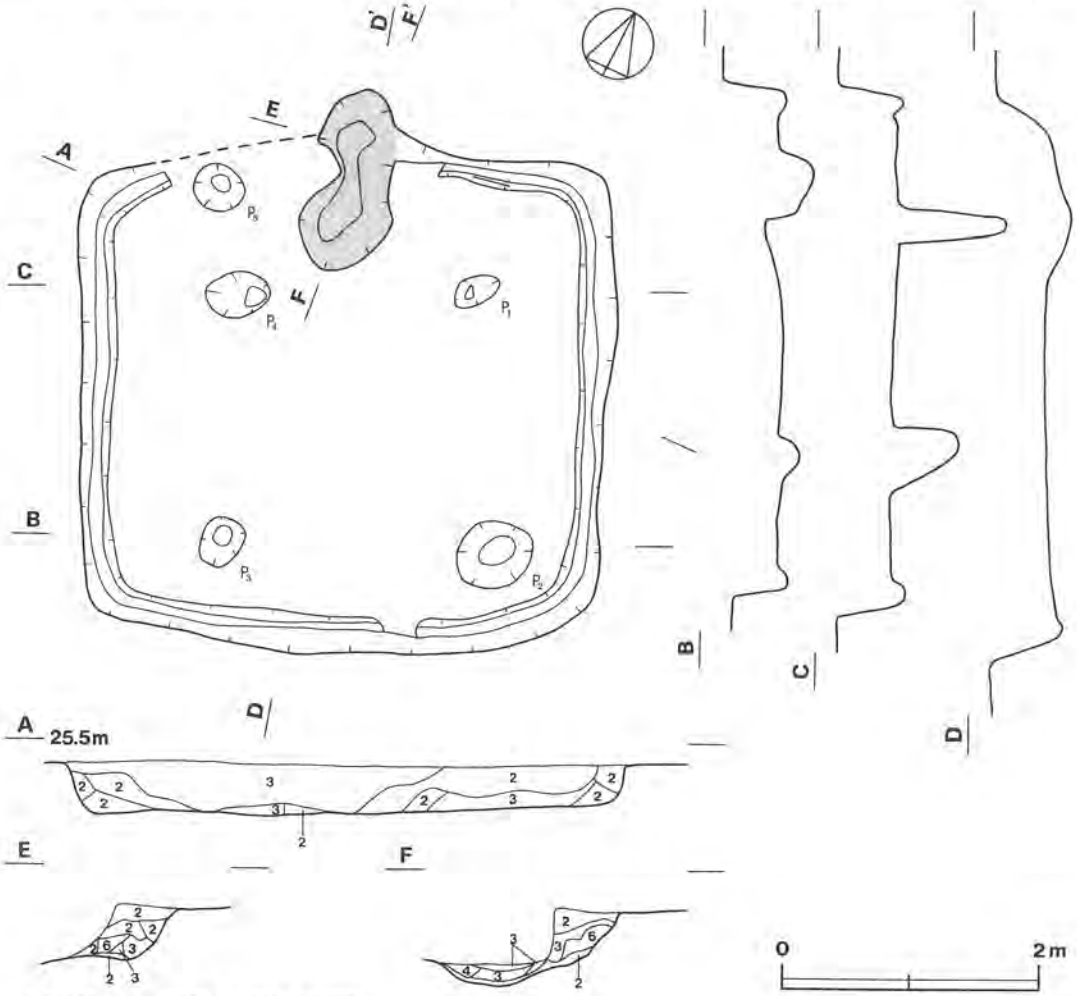
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (12.9) B 4.2	底部は丸底で，なだらかに立ち上がり，口縁部に至る。	器外面はヘラ削り，内面はナデ調整。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	50%
2	支脚 土製品	全長 (9.8) 径 (7.0)	支脚の頭部片である。			

第45号住居跡（第115図）

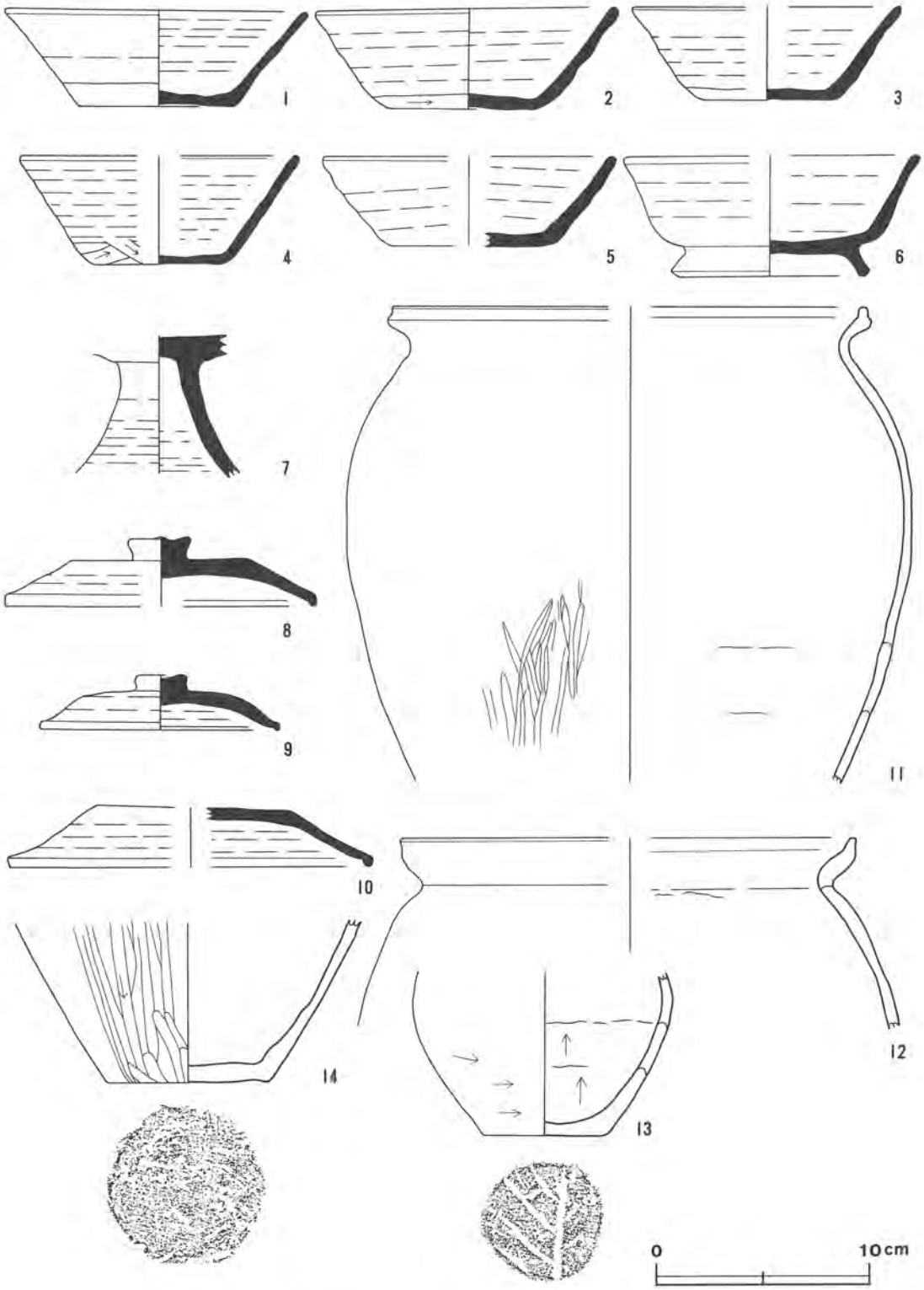
本跡は，F9f$_5$区を中心に確認された住居跡で，北東コーナー部で第49号住居跡と接しているが，切り合いはない。

平面形は方形を呈し，規模は長軸4.17m，短軸3.90mで，主軸方向は，N－25.5°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは47cmである。壁溝は，カマドの西側及び南壁の一部を除いて周回しており，上幅15cm，下幅5～10cm，深さ4～10cmである。床は硬く締まっており，全体に南に向って傾斜している。ピットは，5か所検出されている。このうち，カマド西側にあるピットを除いたものが，主柱穴と考えられる。主柱穴の長径は38～65cm，短径は24～55cm，深さは16～84cmである。カマドは北壁中央部に構築されているが，大部分は消失しており，床を20cm掘り下げた火床部が確認できただけである。

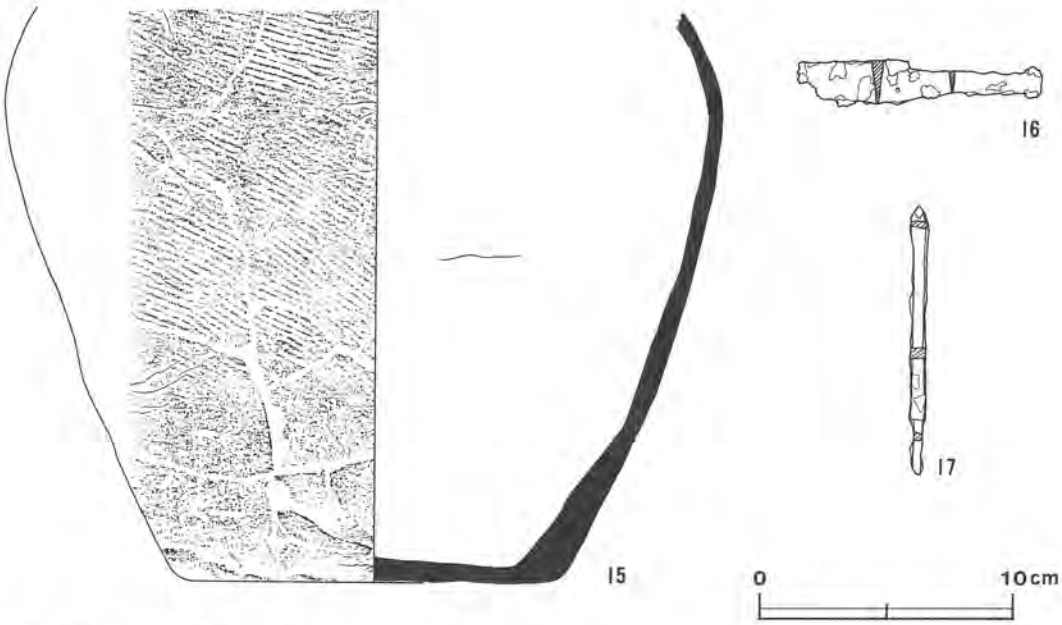
覆土は，基本的には1層で，ローム粒子多量，焼土粒子少量を含む暗褐色土である。壁近くに



第115図　第45号住居跡実測図



第116図第45号住居跡出土遺物実測図（1）



第117図　第45号住居跡出土遺物実測図（2）

は，ローム粒子や焼土粒子を含む褐色土がブロック状に堆積している。

遺物は，土師器の甕（11）がカマド西側の床面から倒立状態で出土し，遺構内部の覆土からは土師器の坏2点・甕（12,13,14）3点・埦1点，須恵器の坏（1，2，3，4，5，6）6点・蓋（8，9，10）3点・甕（15）1点が出土しいる。他に鉄鏃，土師器・須恵器片840点が出土している。

出土遺物観察表（第116・117図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 14.2 B 4.6 C 7.2	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後周辺部のみヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石・礫 灰色 普通	60%
2	坏 須恵器	A 14.2 B 4.9 C 7.0	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後中心部を除いてヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・礫 黄灰色 普通	60%
3	坏 須恵器	A (12.6) B 4.4 C 6.0	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・雲母・石英・礫 褐灰色 普通	45%
4	坏 須恵器	A (13.0) B 5.2 C 6.1	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁端部を丸くおさめている。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は斜位のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・パミス・礫 灰色 良好	40%

5	坏 須恵器	A (13.7) B 4.2 C (7.2)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。口縁端部を丸くおさめている。	底部は回転ヘラ切り後周辺部のみヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石・雲母・礫 褐灰色 普通	40%
6	高台付坏 須恵器	A (14.0) B 5.7 D 8.9	底部は平底で，体部との境にあまい稜を有する。体部は器壁を減じながら，外傾して立ち上がる。「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 灰黄色 普通	70%
7	高坏 須恵器	B (6.7)	脚部片で，外反して外下方に開く。	水挽き成形。	雲母・長石 灰白色 普通	20%
8	蓋 須恵器	A (14.4) B 3.3	天井部は極めて平坦で，高さ1.2cmのつまみがつく。口縁部は直線的に外下方に下がり，端部は垂下する。	天井部は回転ヘラ削り，器内面はナデ調整。 水挽き成形。	石英・長石 灰色 良好	50%
9	蓋 須恵器	A 11.2 B 2.6	天井部は丸く浅い。口縁部は内湾ぎみに下がり，端部は垂下する。円柱状の低いつまみがつく。	天井部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石 灰黄色 普通	60%
10	蓋 須恵器	A (17.0) B 3.0	天井部は極めて平坦で，口縁部は直線的に外下方に下がる。口縁端部は，短く垂下する。つまみはつかなかったものと思われる。	天井部は回転ヘラ削り，口縁部上端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・礫 灰色 普通	40%
11	甕 土師器	A (22.5) B (22.4) E (26.4)	胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有し，口縁部に至る。口縁部は外反し，端部は上方につまみ出されている。	胴部外面は細いヘラ磨き，内面はナデ，口縁部外面は横ナデ調整。器内面に輪積痕が残る。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通（2次）	30%
12	甕 土師器	A (21.4) B (9.0)	胴部は内傾して立ち上がり，「く」の字状に開く口頸部に至る。	口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	25%
13	甕 土師器	B (7.7) C 5.6 E 12.2	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに立ち上がり，中位に胴部最大径を有し，その後内傾する。	底部は木葉痕，胴部外面は横方向のヘラ削り，内面は縦方向のヘラナデ調整。器内面に輪積痕が残る。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通（2次）	60%
14	甕 土師器	B (7.5) C 7.6	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，胴部外面はヘラ磨き，内面はナデ調整。	長石・雲母・石英 にぶい橙色 普通	10%
15	甕 須恵器	B (22.8) C 14.9 E (28.2)	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は欠損。	底部はナデ，胴部外面は上～中位が叩き目，下位がヘラ削り，器内面はナデ調整。	長石・石英・礫 灰色 普通	60%
16	刀子 鉄製品	全長 (9.7) 幅 (1.7) 重さ (13.6g)	刃部は大半は欠損している。茎部は，幅0.9cmでよく残存している。			40%

17	鉄　鏃 鉄製品	全長 10.6 幅　0.6 重さ 9.7g	全体に角棒状を呈し，先端部のみ扁平になり尖る。			100%

第47号住居跡（第118図）

本跡は，F8f₀区を中心に確認された住居跡である。南壁を中心に，撹乱を受けている。

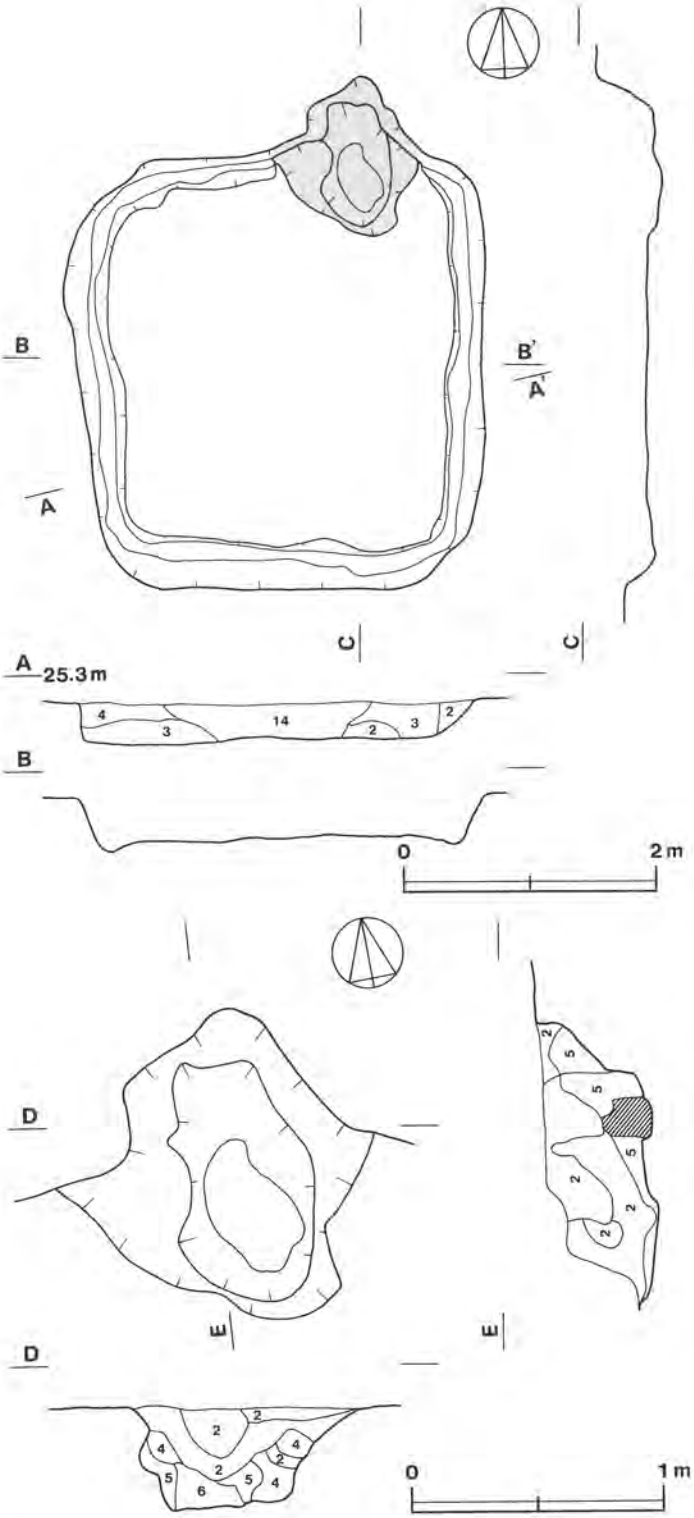
平面形は隅丸方形を呈し，規模は長軸3.45m，短軸3.22mで，主軸方向は，N－0°である。南壁は撹乱を受けているため褐色土しか認められないが，他の壁はロームで，高さは34cmである。壁溝は全周しており，上幅15～20cm，下幅4～17cm，深さ3～7cmである。床は平坦で，硬く締まっている。特に南側の床は，極めて硬く締まっている。カマドは，北壁東寄りのコーナーに近い部分に構築されている。袖部は残っていないが，袖部を補強するのに使われたとみられる土師器の甕が，火床部から出土した。煙道は，壁外に50cm張り出している。ピットは確認されなかった。

覆土は，撹乱のため層位的な観察は困難である。遺構中央部に黒色土の堆積がみられ，周辺部には黒褐色土，褐色土，暗褐色土などがブロック状に堆積している。黒色土は後世の撹乱によるもので，床面まで達している。

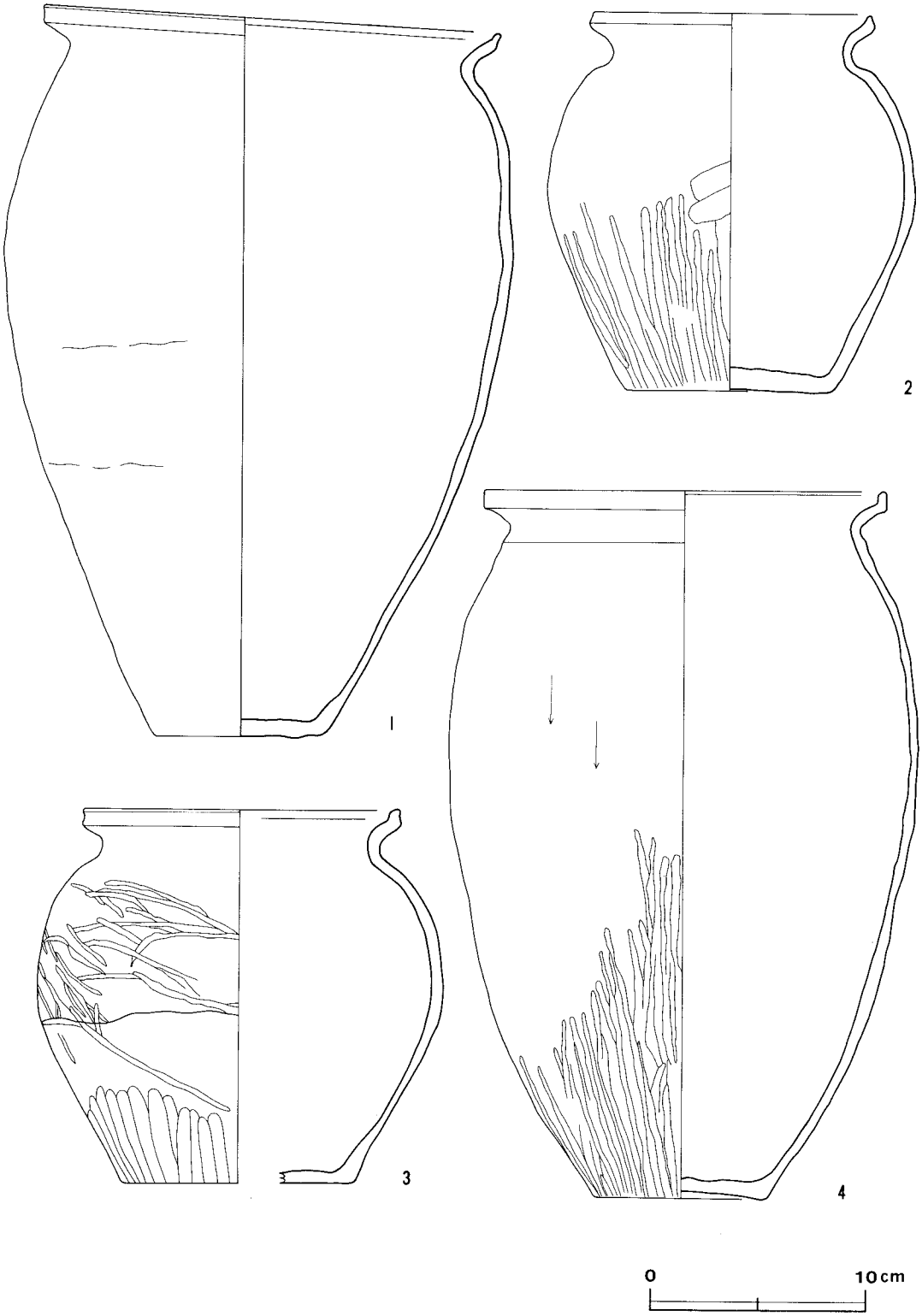
遺物は，土師器の甕（7）がカマド前面の床から1点，カマド内から倒立の状態で2点（1，4）出土している。カマド周辺部から他にも土師器の甕が5点出土している。他に，土師器・須恵器片671点が出土している。

出土遺物観察表（第119・120図）

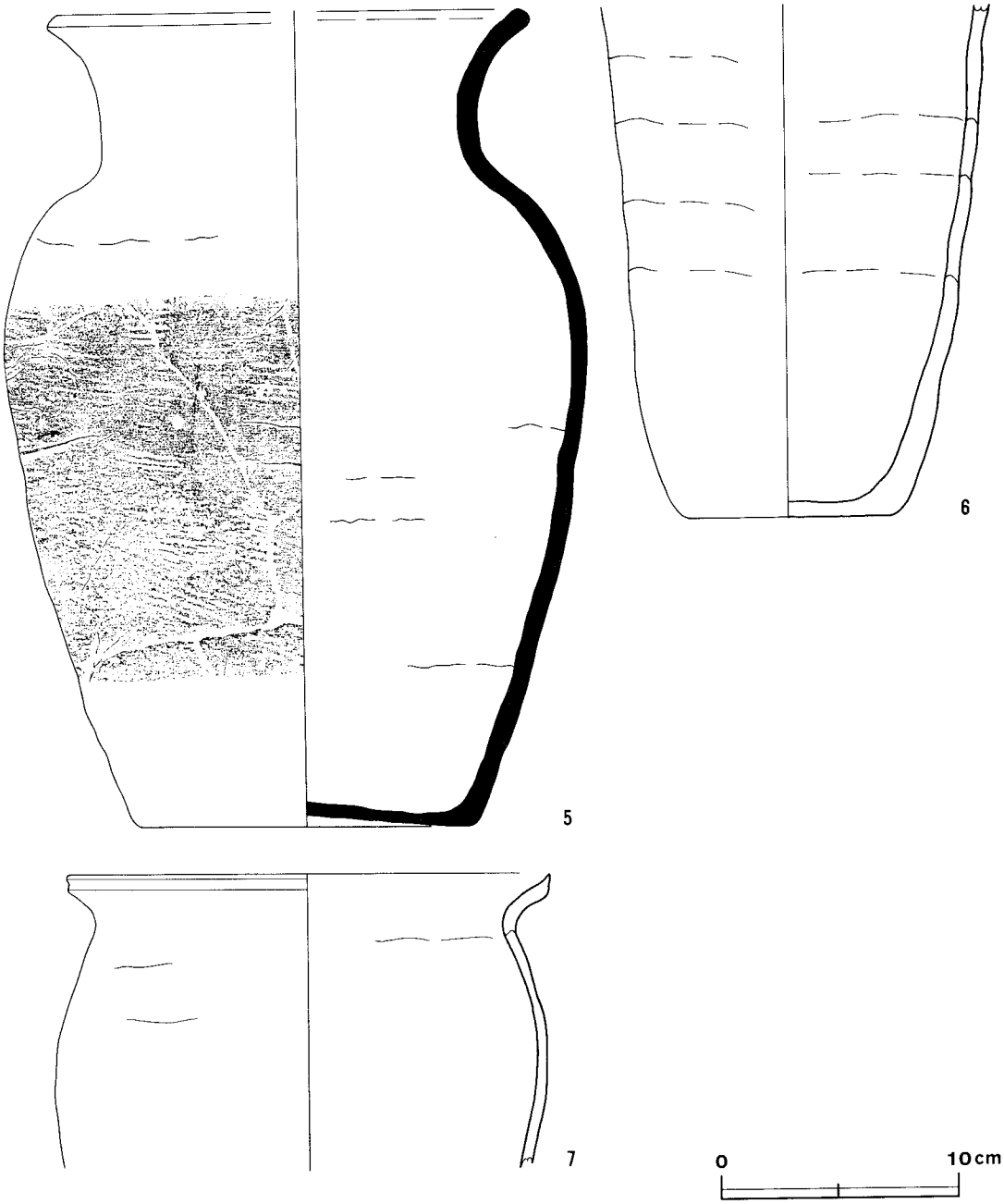
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A 21.1 B 34.1 C 7.7 E 23.1	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口頸部は短く「く」の字状に外反する。	胴部外面上位はナデ，中～下位は横及び縦方向のヘラ削り，器内面は全体的にヘラナデ調整。	砂粒・パミス・スコリア 明赤褐色 普通（2次）	80%
2	甕 土師器	A 12.9 B 17.6 C 9.4 E 17.2	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，中位に胴部最大径を有した後，内湾する。口縁部は丸く外反し，端部は上方につまみ出されている。	底部及び胴部外面上位はナデ，胴部外面下位は縦方向のヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。	石英・長石・雲母・スコリア 橙色 普通（2次）	80%
3	甕 土師器	A 14.7 B 17.4 C (10.6) E 18.9	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，中位に胴部最大径を有する。口縁部は短く外反して立ち上がる。	底部はナデ，胴部外面は上位が斜位のヘラ磨き，下位が縦方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	80%



第118図　第47号住居跡実測図



第119図　第47号住居跡出土遺物実測図（1）



第120図　第47号住居跡出土遺物実測図（2）

4	甕 土師器	A 18.6 B 33.1 C 8.0 E 21.8	底部は中央部がやや凹む。胴部は内湾ぎみに外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口頸部は短く「く」の字状に外反し，端部は垂直に立ち上がる。	底部は木葉痕，胴部外面上～中位はヘラ削り，下位はヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。	石英・長石・雲母・スコリア・礫 橙色 普通	50%

5	甕 須恵器	A 19.6 B 35.0 C 14.6 E 24.9	底部は平底で，中央部がやや凹む。胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がり，端部は角張っている。	胴部外面は斜位の叩き目調整。器内・外面に輪積痕が残る。	砂粒・長石・雲母 暗灰黄色 普通	50%
6	甕 土師器	B (22.0) C 8.8	底部は平底で，胴部は円筒状に立ち上がる。	器面の荒れがひどく，調整痕不明。器内・外に輪積痕が残る。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通（2次）	70%
7	甕 土師器	A 20.8 B (12.6) E (21.0)	胴部は内湾ぎみに口縁部に至る。口縁部は短く外反して立ち上がり，端部は尖る。	胴部は内・外面ともナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・礫 明赤褐色 普通（2次）	30%

第48号住居跡（第121図）

本跡は，F9c_5区に確認された住居跡で，第53号住居跡と重複している。土層の観察から，本跡の方が新しいと考えられる。

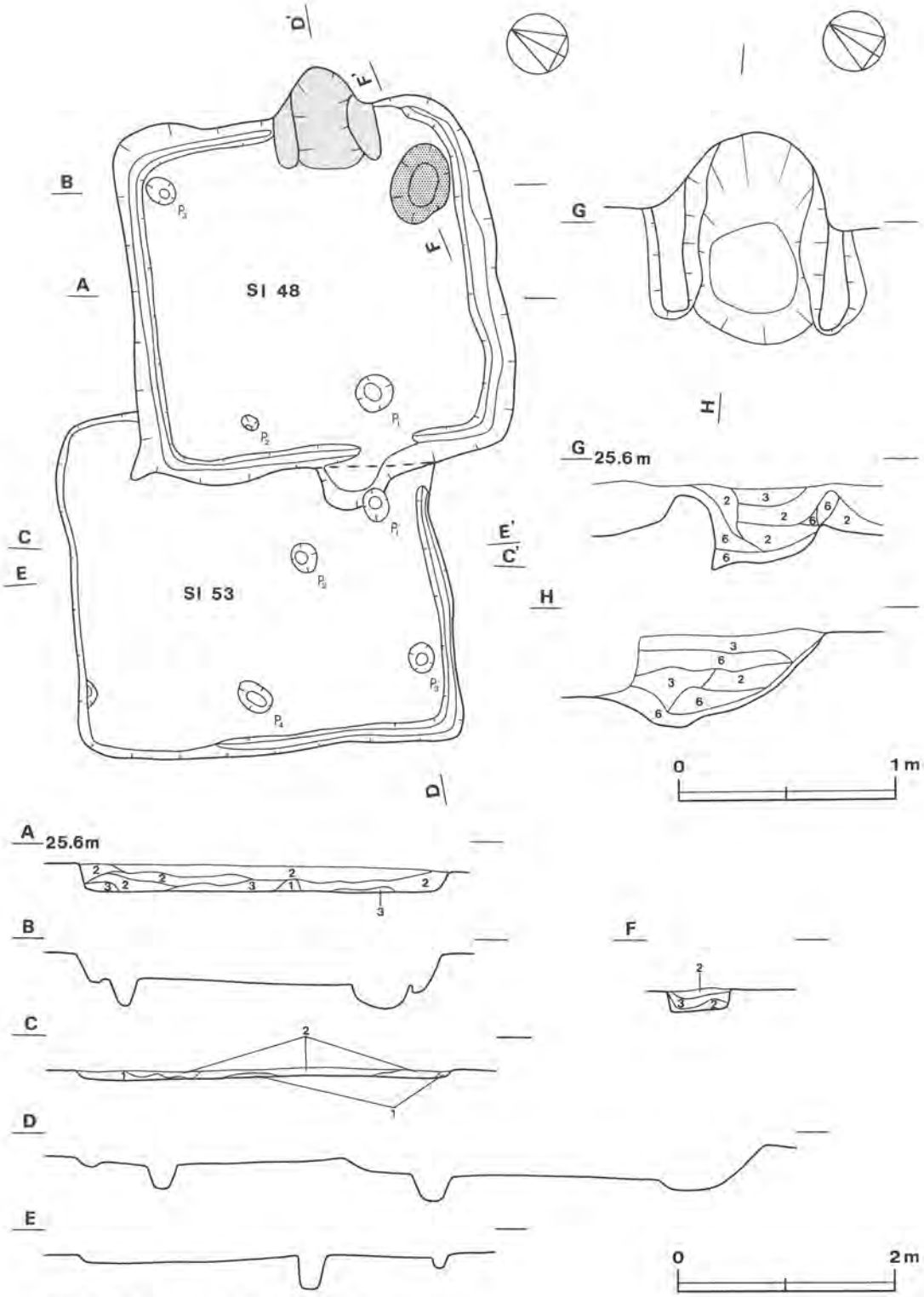
平面形は方形を呈し，規模は長軸3.40m，短軸3.24mで，主軸方向は，N－55°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは29cmである。重複している部分は，やや低くなっている。壁溝は，西壁の一部を除いて全周している。カマドが東壁にあることから，西壁の壁溝の切れている付近が入口になると思われる。この部分から東側30cmの位置にP_1があり，このピットは入口に関する施設に伴うものと推定される。ピットは他に2か所あり，径15～27cm，深さ27～49cmである。床は平坦で硬く，東に向かってゆるく傾斜している。カマドは，東壁南寄りの部分に，山砂で構築されている。長さ55cmの袖部が残っており，火床部は，径40cmの円形に床を10cm掘り込んでいる。カマドの南側には，長径75cm，短径45cmの楕円形の貯蔵穴があり，深さは20cmである。

覆土は基本的に1層で，ハードロームブロック，焼土ブロックを少量含む褐色土である。周辺部には，ローム粒子や炭化物を含む褐色土や，暗褐色土がブロック状に堆積している。

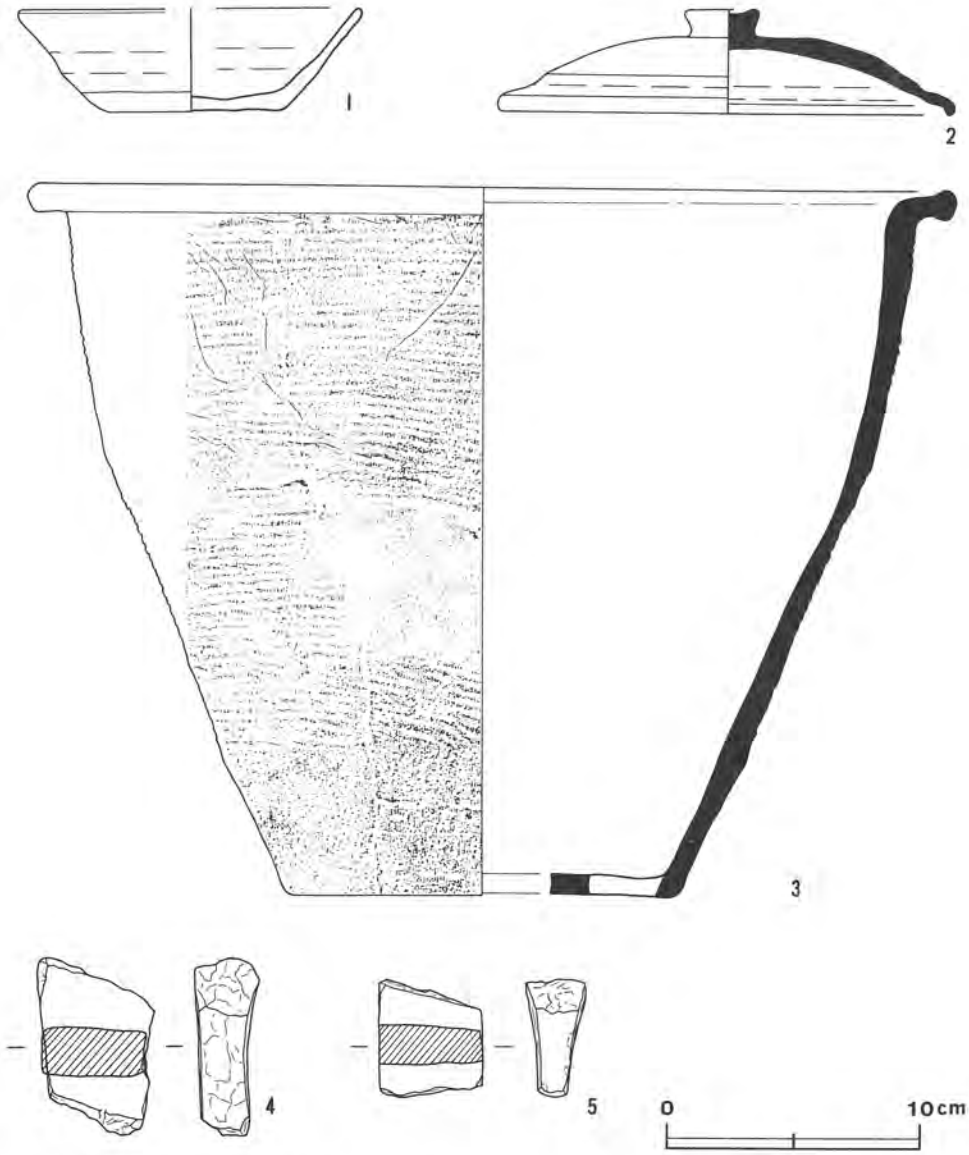
遺物は，土師器の坏（1）と須恵器の甑（3）が覆土から，須恵器の蓋（2）がカマド内からそれぞれ出土している。他に，砥石，土師器・須恵器片278点が出土している。

出土遺物観察表（第122図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.2) B 4.1 C 6.9	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母・スコリア・礫 にぶい橙色 普通	50%
2	蓋 須恵器	A 18.0 B 4.1	天井部は丸く，浅い。つまみは高さ1.1cmで，中央部がやや凹む。口縁部はかるく屈曲して下がり，端部は垂下する。	天井部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・石英・長石 灰黄色 普通	95%



第121図　第48・53号住居跡実測図



第122図　第48号住居跡出土遺物実測図

3	甕 須恵器	A 36.0 B 28.1 C 15.2	胴部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部は直角に屈曲する。底面には，中央部に円孔，周辺部に半円形の孔が4か所，計5孔が認められる。	胴部外面上～中位は横位の平行叩き目，下位はヘラ削り，器内面はナデ，口縁部は横ナデ調整。	雲母・長石・石英 灰色 普通	40%
4	砥石 石製品	全長 (7.0) 幅 (4.6) 重さ(91.3g)	表裏面及び側面の片側だけ使用している。			

5	砥石 石製品	全長（4.6） 幅　（4.0） 重さ(52.4g)	表裏・両側面を使用している。			

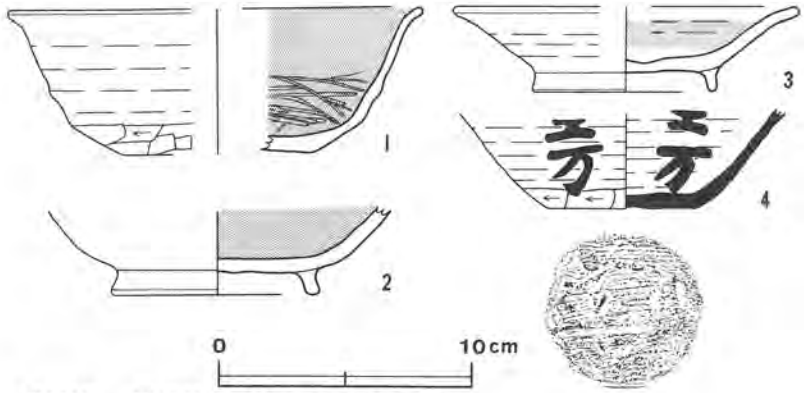
第49号住居跡（第124図）

本跡は，F9e₄区を中心に確認された住居跡で，南東コーナー部で，第45号住居跡と接している。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.84m，短軸3.65mで，主軸方向は，N－0°である。壁は垂直に立ち上がり，高さは45cmである。第45号住居跡と接している部分は，やや低くなっている。壁溝は全周しており，上幅15～25cm，下幅9～17cm，深さ10cmである。床は傾斜もなく平坦であるが，全体に軟らかい。カマドは，北壁中央部に構築されており，火床部と煙道だけが確認できた。火床部は床を20cm掘り下げてあり，煙道は壁外に80cm張り出している。

覆土は2層認められ，ともに硬く締まっている。1層はローム粒子中量，炭化粒子少量を含む暗褐色土，2層はローム粒子を多量含む褐色土である。

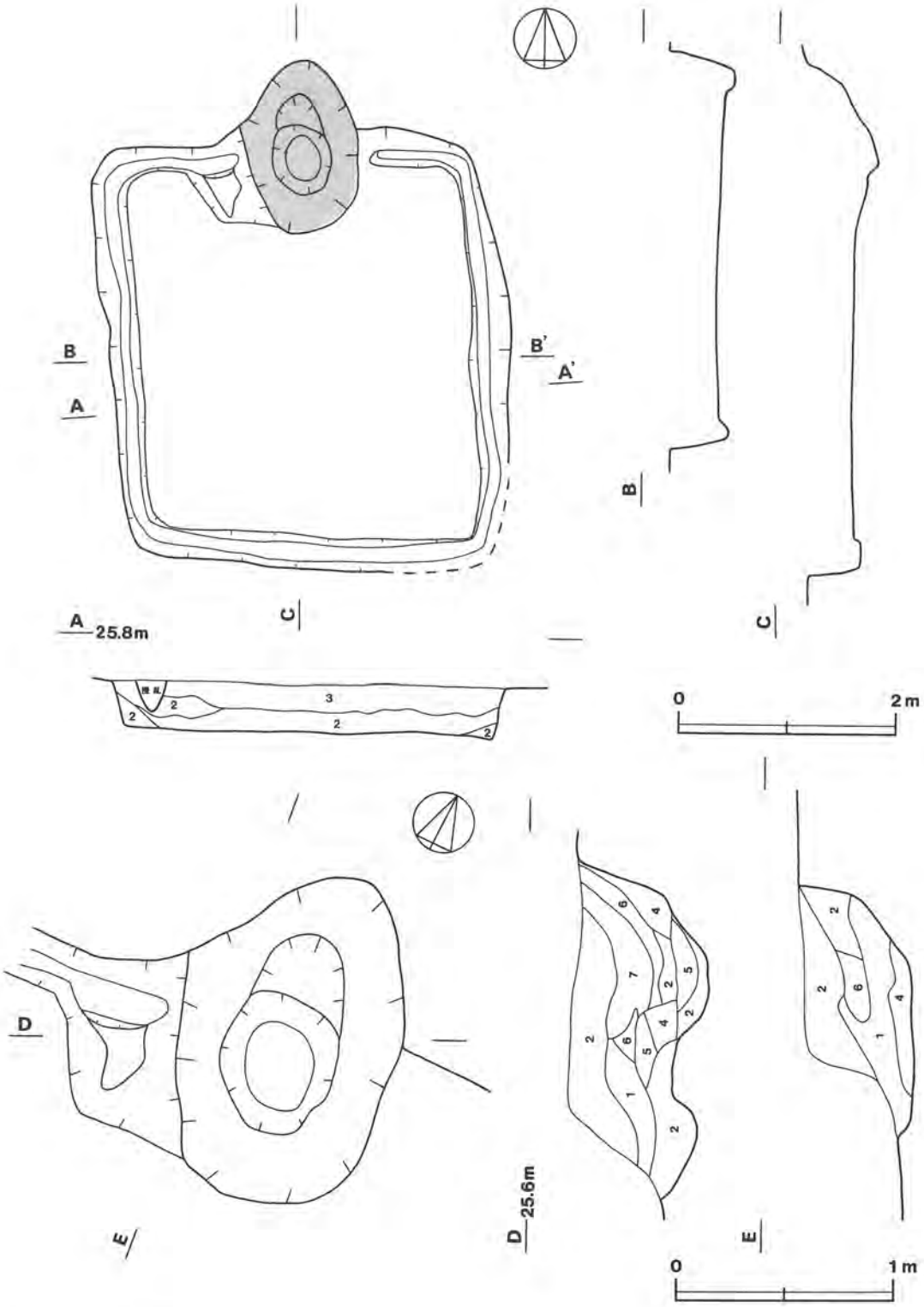
遺物は，土師器の坏（1，2）2点・皿（3），須恵器の坏（4）が2層から出土している。須恵器の坏は，墨書が認められる。他に，土師器・須恵器片671点が出土している。



第123図　第49号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第123図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A（16.4） B　5.8 C（7.6）	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁端部で外反する。	胴部下端は横方向のヘラ削り，器内面は斜位のヘラ磨き調整。水挽き成形。	雲母・石英・長石 にぶい橙色 普通	30% 内面黒色処理
2	高台付坏 土師器	B（3.5） D　8.2	底部は平底で，低い高台がつく。体部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。	長石・石英・雲母・礫 橙色 普通	40% 内面黒色処理

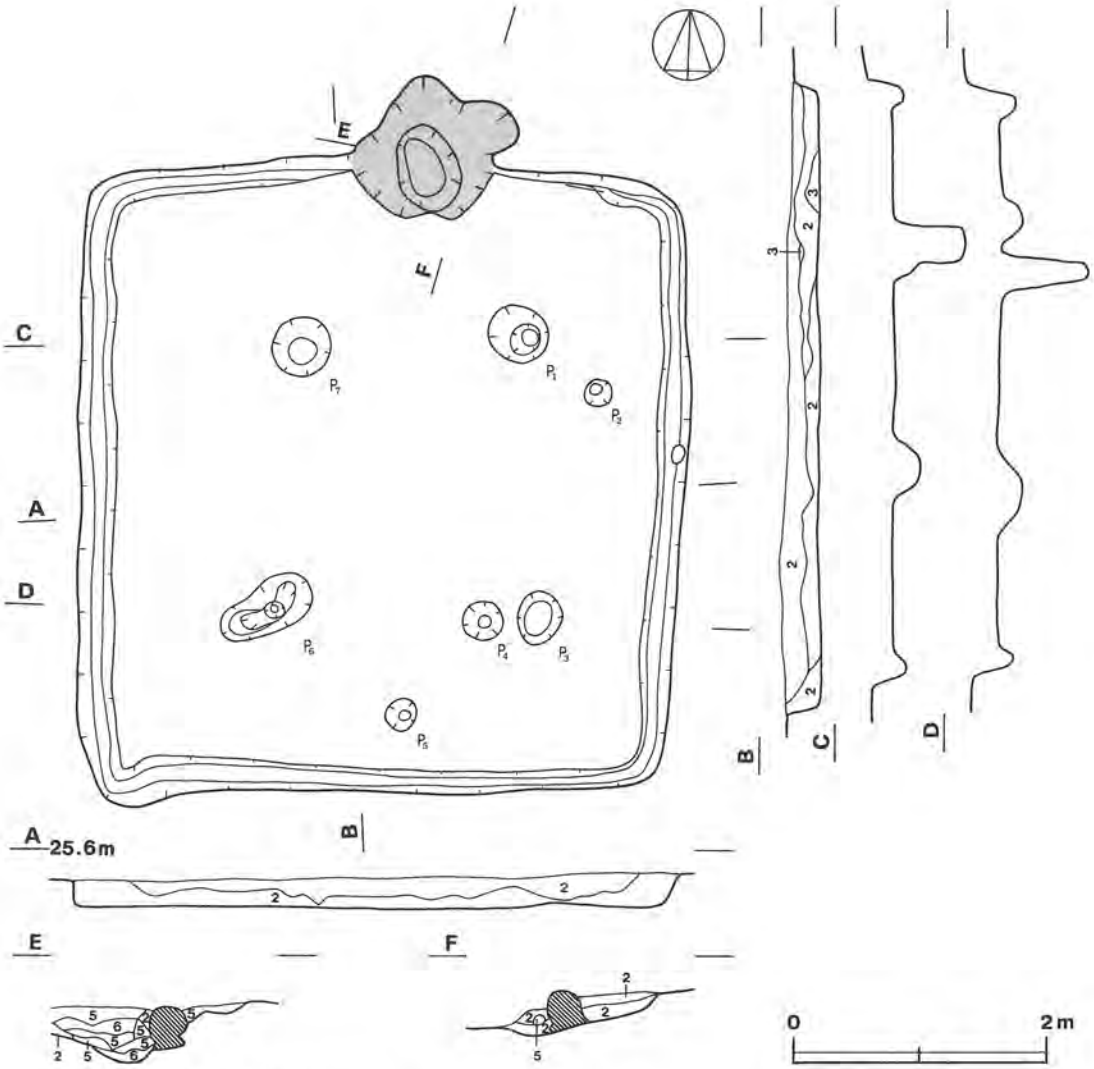


第124図　第49号住居跡実測図

3	高台付皿 土師器	A (13.4) B 3.4 D 7.0	底部は平底で，低い高台がつく。 体部は大きく外傾して立ち上がり， 口縁端部で外反する。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘ ラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	65% 内面黒色処理
4	坏 須恵器	B (3.9) C 6.0	底部は平底で，体部は器壁を減じ ながら外傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下 端は横方向のヘラ削り調整。	長石・雲母・石英 黒色 普通	60% 内・外面に同 一の墨書「口 万」

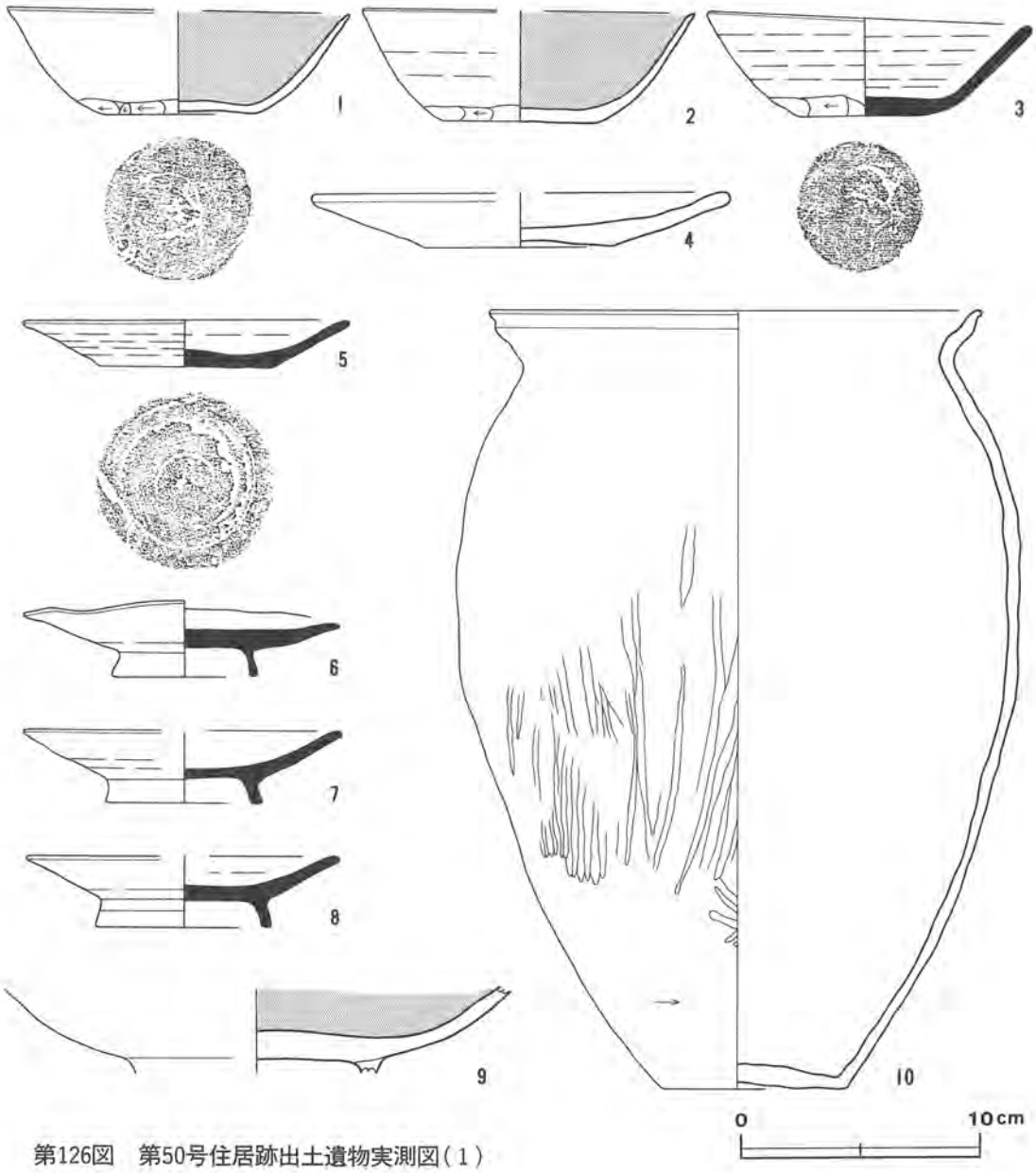
第50号住居跡（第125図）

本跡は，F9b$_3$区を中心に確認された住居跡である。

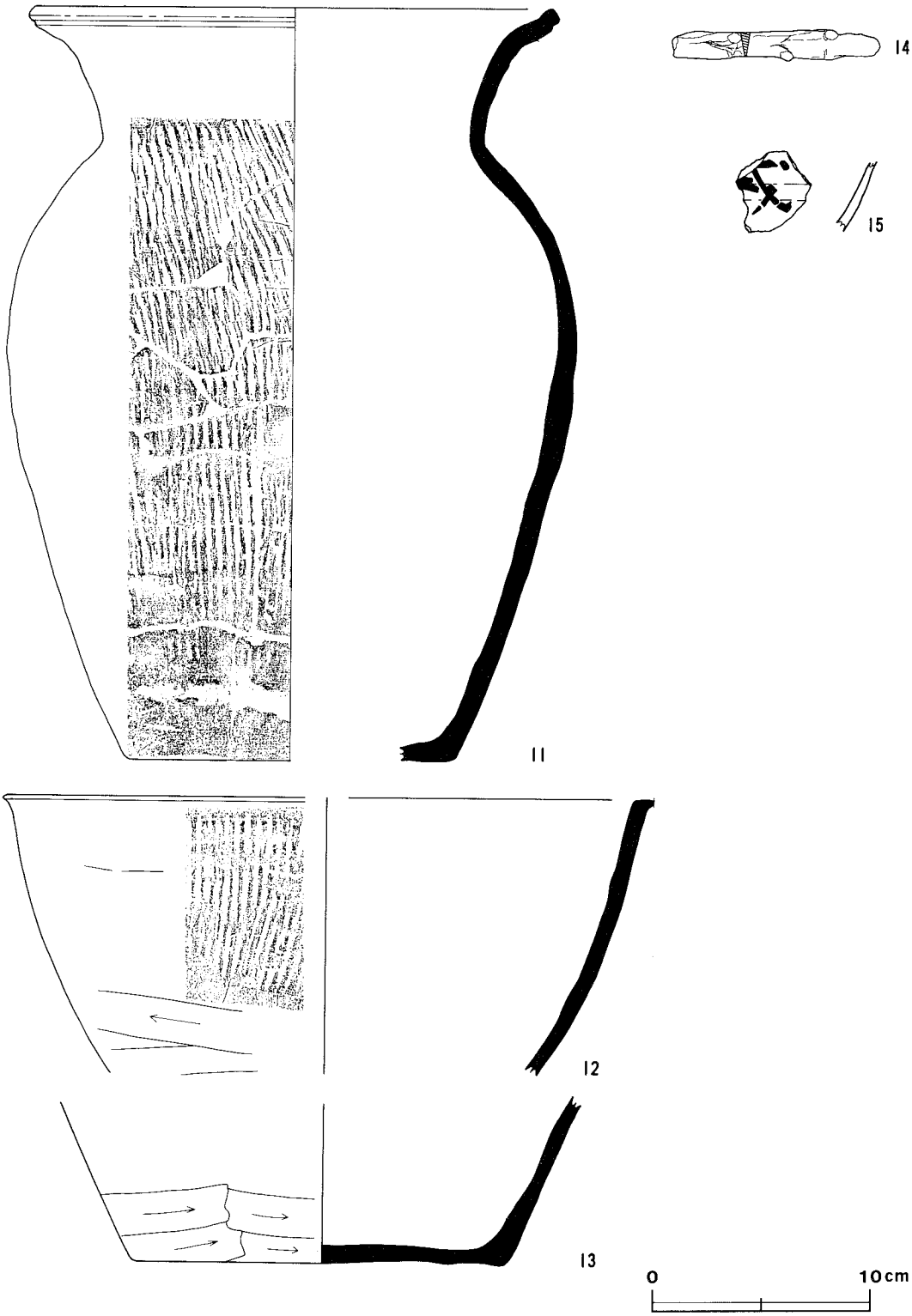


第125図　第50号住居跡実測図

平面形は方形を呈し，規模は長軸5.01m，短軸4.72m，主軸方向は，N－1°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは26cmである。壁溝は，カマド東側を除いて全周しており，上幅11～20cm，下幅5～13cm，深さ8～12cmである。床は平坦で，カマド前面から中央部にかけて硬く締まっている。ピットは，7か所検出されている。ピットの位置や規模から，P_1・P_4・P_6・P_7が主柱穴と思われる。主柱穴の径は32～50cm，深さ24～71cmである。なお，P_5は入口に関するピットと考えられる。カマドは，北壁中央やや東寄りに構築されているが，火床部の掘り込みが検出できたにとどまる。火床部は，長径71cm，短径53cmの楕円形に，22cm掘り下げている。



第126図　第50号住居跡出土遺物実測図（1）



第127図　第50号住居跡出土遺物実測図（２）

覆土は，２層に分けられる。１層はハードロームブロック中量，焼土粒子及び炭化物少量を含む褐色土，２層はハードロームブロックを中量含む褐色土である。

遺物は，住居跡全体の覆土や床から多量に出土している。土師器･須恵器片が732点である。カマド内からは，須恵器の甕（11）が倒立した状態で出土している。恐らくカマドの袖部を補強するために使われたものと思われ，土器表面は赤褐色に変化している。他に，紡錘車，刀子が覆土２層から出土している。

出土遺物観察表（第126・127図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (14.2) B 4.5 C 6.0	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がり，口縁端部は尖る	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，体部下端はヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整	長石・スコリア にぶい橙色 普通	60% 内面黒色処理
2	坏 土師器	A (13.4) B 4.7 C (6.6)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。弱い水挽き痕が残る。	長石・砂粒 にぶい橙色 良好	30% 内面黒色処理
3	坏 須恵器	A 13.6 B 4.5 C 5.5	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・礫・砂粒 灰白色 普通	50%
4	皿 土師器	A (17.3) B 2.3 C 8.0	底部は平底で，中央部がやや凹む。体部は大きく外傾して開き，口縁端部は丸い。	底部は全面ヘラ削り調整。他の部位は磨滅のため不明。	砂粒 にぶい橙色 普通	70%
5	皿 須恵器	A 13.5 B 2.1 C 7.1	底部は平底で，体部は外反ぎみに大きく開いて立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後，部分的にヘラ削り，器内面はナデ調整。水挽き成形。	雲母・長石 灰白色 普通	70%
6	高台付皿 須恵器	A 13.2 B 3.2 D 6.0	底部は平底で，高さ1.2cmの高台がつく。体部は外傾して開く。 全体にゆがみがひどく，口縁部までの器高差が１cmある。	内・外面ともナデ調整。水挽き痕はほとんどみられない。	長石・砂粒 灰白色 普通	90%
7	高台付皿 須恵器	A (13.3) B 3.1 D 6.6	底部は平底で，高さ１cmの高台がつく。体部は大きく外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラナデ，高台部内・外面は横ナデ調整。水挽き成形。	長石・砂粒 灰黄色 普通	70%
8	高台付皿 須恵器	A 13.0 B 3.0 D 7.3	底部は平底で，体部は外傾して開く。「ハ」の字状の高台がつく。	底部は回転ヘラ切り後周辺部のみナデ，器内面はナデ調整。水挽き成形。	砂粒 灰白色 普通	60%
9	盤 土師器	B (3.7) D (10.0)	底面は平底で，体部との境に高台がつく。体部は内湾しながら外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	50% 内面黒色処理
10	甕 土師器	A 20.5 B 32,8 C 7.7 E 23.6	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口頸部は「く」の字状に外反し，端部は尖る。	底部に木葉痕，胴部外面上位はヘラナデ，中位はヘラ磨き，下位はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	石英・長石・雲母・礫 明赤褐色 普通	80%

11	甕 須恵器	A 23.8 B 35.0 C (14.8) E 26.3	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は外反して開く。	胴部外面は平行叩き目，下端はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通（2次）	60%
12	鉢 須恵器	A (29.7) B (12.8)	胴部はわずかに内湾しながら外傾して立ち上がる。口縁端部は水平に整形されている。	胴部外面上位は叩き目，下位は横方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器外面に輪積痕が残る。	長石・砂粒 灰色 良好	30%
13	鉢 須恵器	B (7.4) C 17.2	底部片。底部は平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部下端はヘラ削り調整。	長石・石英・雲母礫 にぶい黄橙色 普通	30%
14	刀子 鉄製品	全長 (9.6) 幅 (1.4) 重さ(13.6g)	刃先部が欠損している刀子で，茎部は刃部と同じ幅で続いている。			50%
15	墨書土器 土師器		破片のため器形等は不明である。文字も右側2分の1だけ残り，他は不明である。			

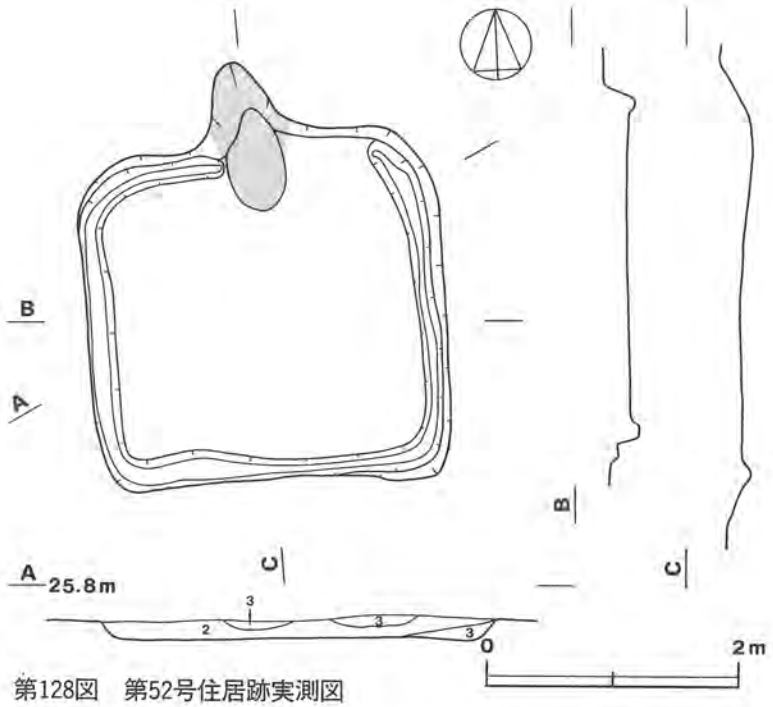
第52号住居跡（第128図）

本跡は，当遺跡の中央部北寄りのF9c6区を中心に確認された住居跡である。

平面形は隅丸方形を呈し，規模は長軸2,85m，短軸2,76mと小型で，主軸方向は，N－2°－Wである。壁は撹乱を受けている部分が多く，東壁だけが明確に検出される。東壁は垂直に立ち上がり，高さは18cmである。壁溝は，カマドの東側を除いて検出され，上幅14～20cm，下幅5～12cm，深さ4～8cmである。床は平坦で，カマド前面は硬く締まっている。ピットは検出されない。カマドは北壁中央部に構築されているが，残存状況は悪く，外に70cm張り出した煙道が確認できただけである。

覆土は2層認められ，1層はローム粒子及び焼土粒子を少量含む暗褐色土，2層はローム粒子を少量含む褐色土である。両層とも締まりがなく，軟らかい。

遺物は，カマド内から土師器の甕（7）と須恵器の坏（6）がそれぞれ倒立の状態で出土している。また，カマド東側の床面から土師器の坏（1，2，3）・甕（8），須恵器の坏（5）が出土している。他に，土師器・須恵器片292点が出土している。

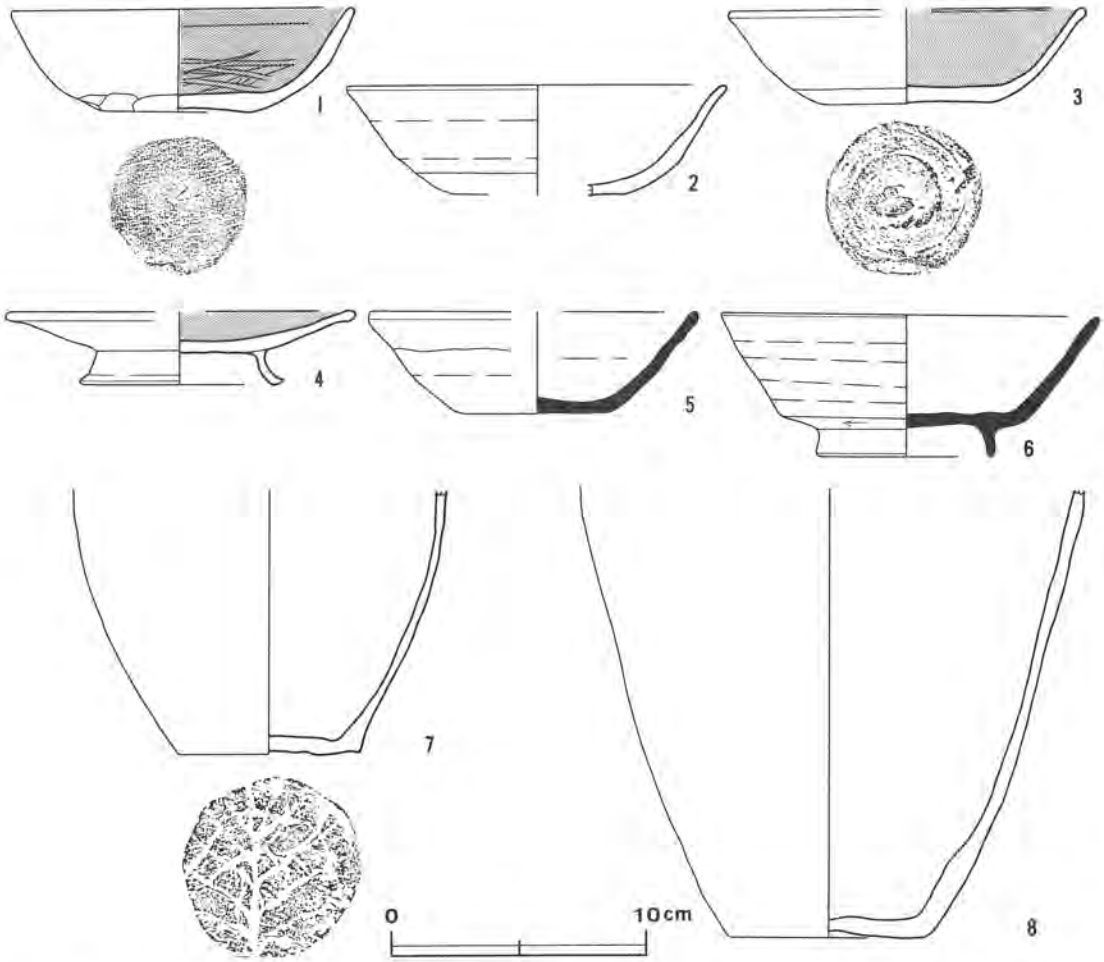


第128図　第52号住居跡実測図

出土遺物観察表（第129図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.6 B 4.2 C 5.9	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。	砂粒 橙色 普通	90% 内面黒色処理
2	坏 土師器	A 14.9 B 4.3 C (6.9)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部はヘラ削り，体部下端はヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。水挽き成形。	砂粒・長石 橙色 普通	60%
3	坏 土師器	A (13.9) B 3.7 C 6.7	底部は平底で，体部は薄く内湾ぎみに立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り，体部下端はヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	50% 内面黒色処理
4	高台付皿 土師器	A (13.9) B 2.9 D 8.0	底部は平底で，体部との境に「ハ」の字状に開く薄い高台がつく。体部は大きく外傾し，口縁部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。	雲母・長石・石英 灰褐色 普通	60% 内面黒色処理
5	坏 須恵器	A (12.9) B 4.1 C 5.8	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・砂粒 にぶい黄橙色 普通	40%
6	高台付坏 須恵器	A 14.9 B 5.7 C 6.9	底部は平底で，高さ1.2cmの高台がつく。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母・礫 にぶい橙色 普通	95%

7	甕 土師器	B (10.5) C 7.3	底部は平底で，胴部はやや内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	底部に木葉痕，胴部外面はヘラ削り，内面はナデ調整。	スコリア・長石 明赤褐色 普通（2次）	60%
8	甕 土師器	B (17.6) C 7.9	底部は平底で，中央部がやや凹む。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	器面は荒れが目立つ。胴部外面は横方向のヘラ削り調整と思われる。	長石・スコリア 赤褐色 普通（2次）	40%



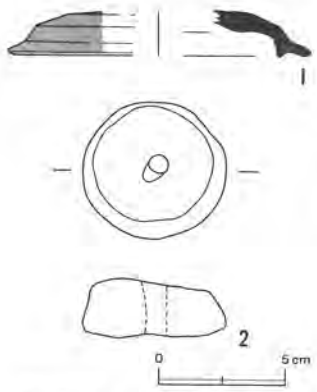
第129図　第52号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡（第121図）

本跡は，F9d$_4$区に確認された住居跡で，第48号住居跡と重複している。第48号住居跡に切られており，本跡の方が古い。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.49m，短軸3.23mで，主軸方向は，不明である。ロームへの掘り込みが浅いため，壁の状況は明確でなく，高さは4～10cmである。東壁は重複のため消失し

ている。壁溝は南壁下と西壁下の南側で確認され，上幅10cm，下幅３～７cm，深さ４～10cmである。床には木根跡があるため凹凸が多い。ピットは，４か所検出され，径は27～33cm，深さは13～33cmである。床の南東部に，長径65cmの楕円形の落ち込みが認められているが，これは第48号住居跡で検出された貯蔵穴と形状がよく似ている。



覆土は２層認められ，１層はハードロームブロックと焼土ブロックを少量含む褐色土，２層はハードロームブロック中量，焼土ブロック少量を含む褐色土である。

遺物は極めて少量で，須恵器の蓋（１），紡錘車（２），土師器片７点が覆土から出土しただけである。

第130図　第53号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第130図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	蓋 須恵器	A（11.6） B（1.8）	天井部は浅い。口縁部は屈曲して外下方に下がり，内側にかえりをもつ。	器外面に自然釉がかかる。 水挽き成形。	長石・砂粒 灰色 普通	10%
2	紡錘車 土製品	径　5.7 厚さ　2.4 重さ72.8g	完形品である。			100%

第54号住居跡（第27図）

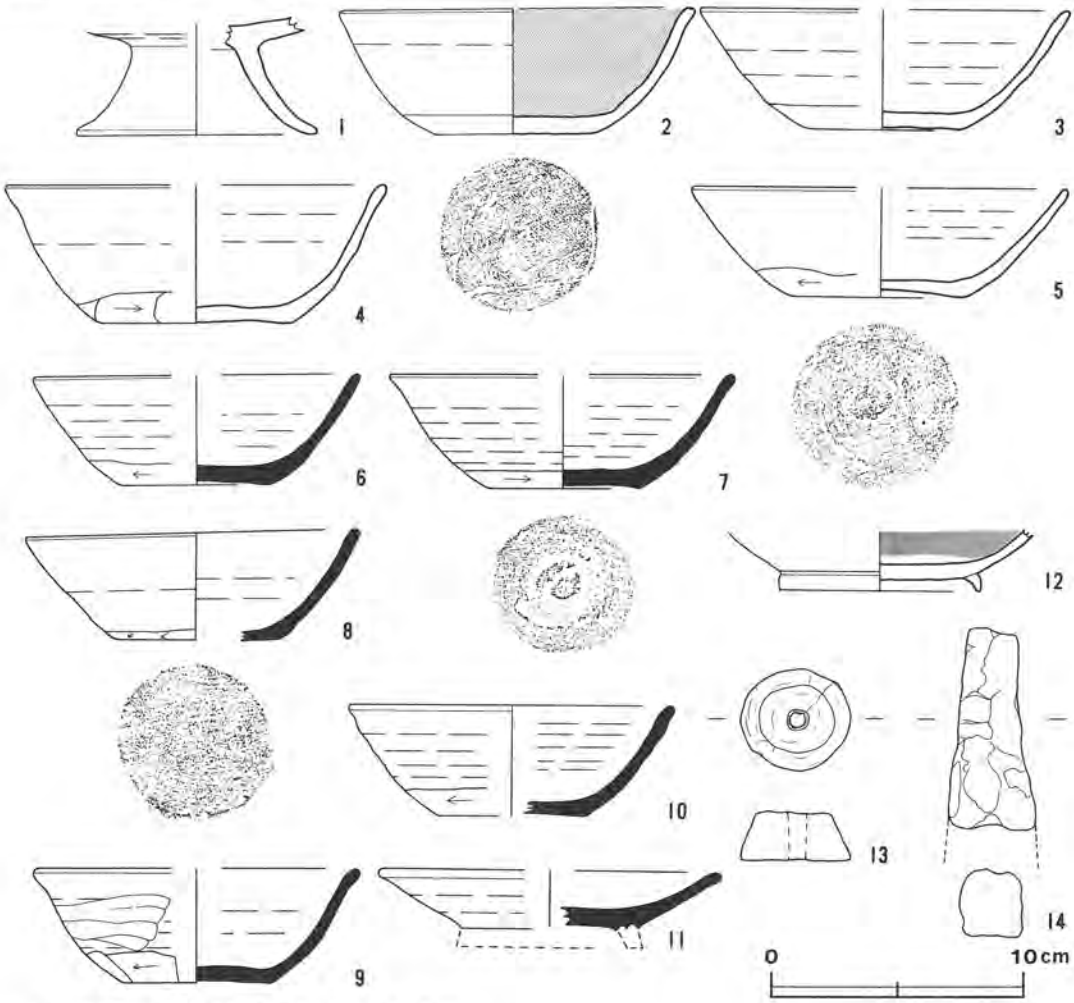
本跡は，F9e_6区を中心に確認された住居跡で，第51号住居跡と重複している。本跡が，第51号住居跡を切っている。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.21m，短軸3.08mで，主軸方向は，N－0°である。壁は西壁だけがロームで，他は暗褐色土である。各壁とも垂直に立ち上がり，高さは32cmである。壁溝は，北壁下を除いて認められるが，断続的にしか検出できず，上幅10～15cm，下幅４～10cm，深さ５cmである。床は硬く締まっており平坦である。ピットは南壁中央部下端近くに検出され，径33cm，深さ29cmである。カマドは，北壁中央部やや東寄りに構築されているが，ほとんど消失しており，煙道が外に30cm張り出しているのが確認できただけである。

覆土は２層で，１層は焼土粒子及び炭化物を少量含む褐色土，２層は焼土粒子・炭化物・ロー

ム粒子を小量含む暗褐色土である。

遺物は，床面及び覆土から多量に出土している。土師器の坏（2，3，4，5）5点，須恵器の坏（6，7，8）3点は2層から，須恵器の皿（11）はカマド内からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片792点が出土している。

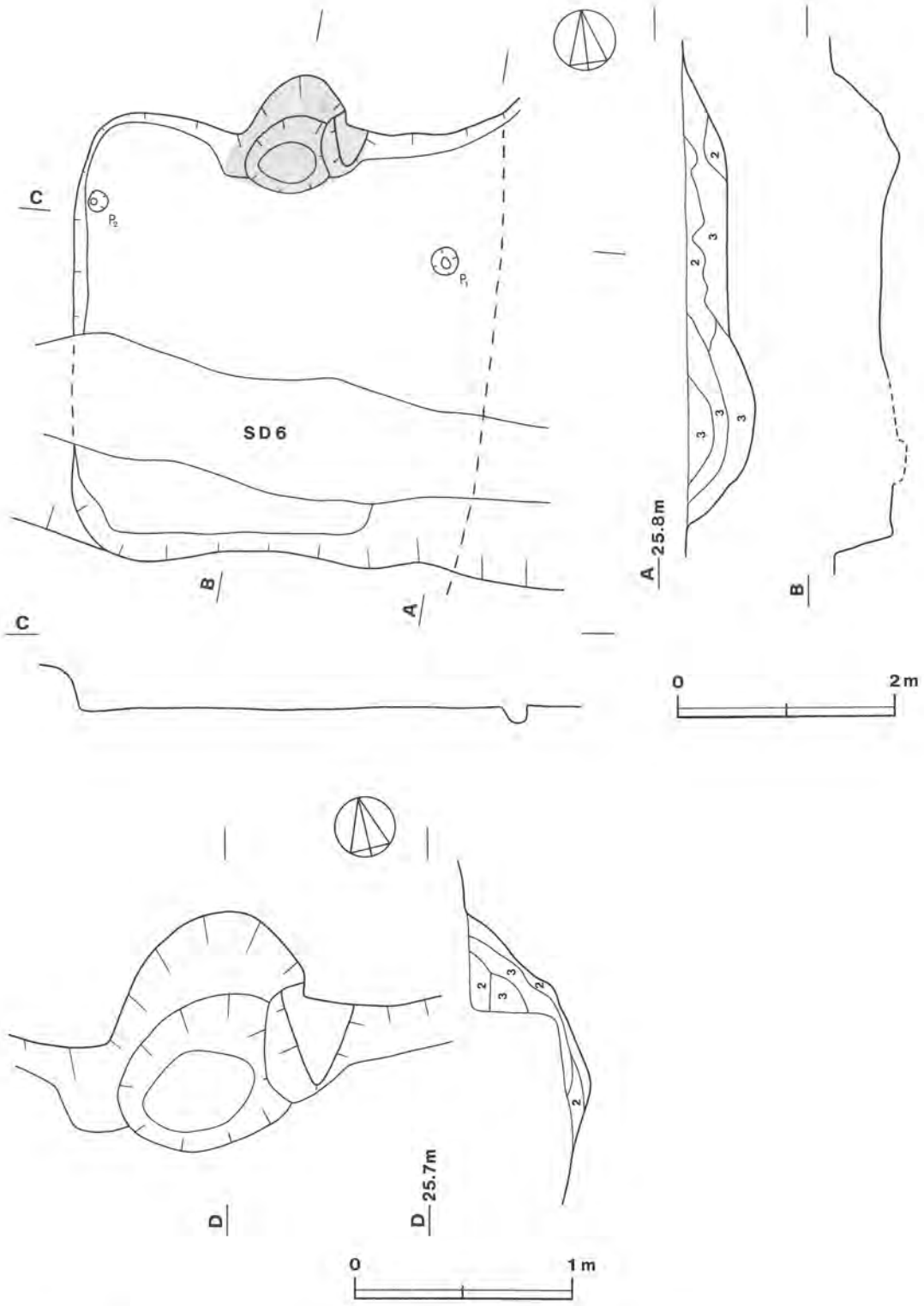


第131図　第54号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第131図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	高坏 土師器	B（4.6） D 9.5	脚部片。脚部は器壁を減じながら，外下方に開く。	脚部は内・外面ナデ，坏部内面はヘラ磨き調整。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	30% 坏部内面黒色処理
2	坏 土師器	A 14.1 B 5.1 C 6.2	底部は平底で，厚い。体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部及び体部下端は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。水挽き痕は弱い。	砂粒 にぶい褐色 普通	80% 内面黒色処理

3	坏 土師器	A (14.7) B 4.8 C 6.0	底部は平底で，体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。	底部及び体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・礫 にぶい黄橙色 普通	50%
4	坏 土師器	A (15.2) B 5.5 C (7.6)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	40%
5	坏 土師器	A (15.0) B 4.4 C 6.8	底部は平底で，中央部がやや凹む。体部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面回転ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。	石英・砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	40% 内面黒色処理
6	坏 須恵器	A (13.0) B 4.4 C 5.9	底部は平底で，中央部がやや凹む。体部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は縦方向の後横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・砂粒 にぶい黄橙色 普通	50%
7	坏 須恵器	A (13.6) B 4.6 C 5.9	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後周辺部のみ回転ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・長石・雲母 黄灰色 普通	50%
8	坏 須恵器	A 13.2 B 4.5 C 6.5	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部はヘラ削り，体部下端は斜位のヘラ削り調整。 水挽き成形。	礫・砂粒・石英 灰色 普通	80%
9	坏 須恵器	A (13.0) B 4.6 C (5.9)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り，体部中位の一部はナデ調整。 水挽き成形。	長石・砂粒・パミス 灰黄褐色 普通	40%
10	坏 須恵器	A (13.0) B 4.4 C (5.8)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・砂粒 灰白色 普通	30%
11	高台付皿 須恵器	A (13.6) B (2.4) C (7.0)	底部は平底で，体部との境に高台のとれた痕跡が残る。体部は大きく外傾して開き，口縁端部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り調整。 水挽き成形。	長石・砂粒 黄灰色 普通	30%
12	高台付皿 須恵器	B (2.2) D (8.0)	底部は丸底ぎみである。体部との境に，低く端部の尖る高台がつく。体部は内湾しながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り調整。器内面には灰釉がかかり，重ね焼きの痕跡が残る。	精製土 灰黄色 良好	25% 猿投系か
13	紡錘車 土製品	径 4.3 厚さ 1.9 重さ35.4g	完形品である。全体に削り及びナデ調整がなされている。			100%
14	支脚 土製品	全長(8.1) 幅 (3.5)	基部を欠損している。断面は不整方形を呈する。			



第132図　第55号住居跡実測図

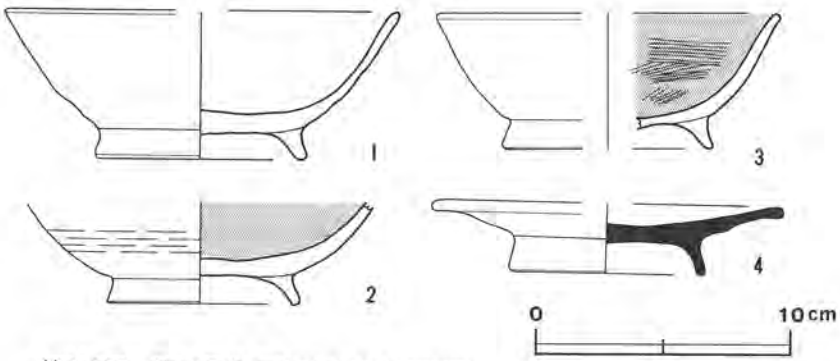
第55号住居跡（第132図）

本跡は，F9a₈区を中心に確認された住居跡で，東側で第56号住居跡と，南側で第６号溝とそれぞれ重複している。溝はいずれの住居跡をも切っており最も新しい。住居跡間の新旧については，土層を観察しても明確にはできないが，埋土の流れている状況から本跡の方が新しいと推定される。

重複している関係で東壁は確認できないが，他の壁から推定して，平面形は方形を呈していたものと思われる。規模は，南北間が4.09mである。主軸方向は，N－6°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは44cmである。床は平坦で，締まりは弱い。ピットは，カマドの東と西に２か所検出されている。東側のP_1は，径25cm，深さ14cmである。P_2は，径18cm，深さ12cmである。カマドは，北壁中央部に粘土で構築されている。両袖部がわずかに残り，火床部は径70cmの円形で床を16cm掘り下げている。煙道の張り出しは弱く，45cmである。本跡の床面は，第56号住居跡より３cm低く，第６号溝の底面よりは20cm高いレベルにある。

覆土は北東方向より流れ込んだ状況が観察でき，３層に分けられる。１層はロームブロック及び黒色土ブロックを中量含む締まりのない褐色土，２層は砂粒を中量含む暗褐色土，３層はローム粒子を中量含む褐色土である。

遺物は，土師器の坏（１），須恵器の皿（４）が３層から出土している。他に，灰釉陶器片，刀子，土師器・須恵器片355点が出土している。



第133図　第55号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第133図）

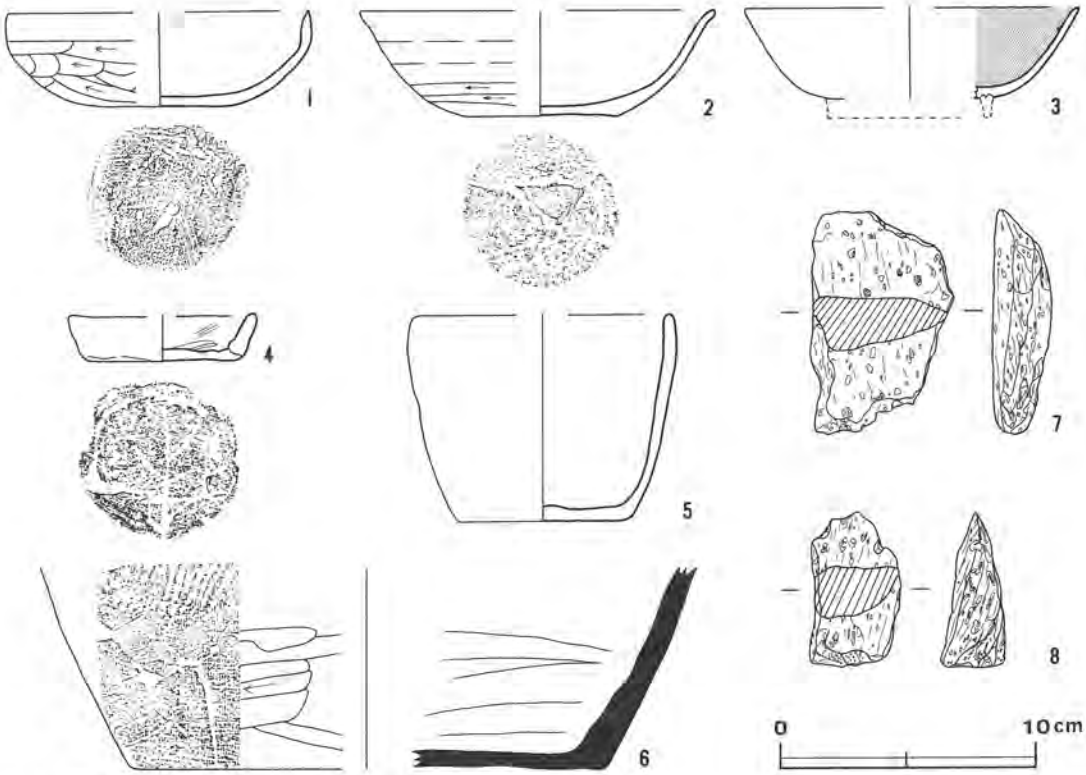
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	高台付坏 土師器	A (15.6) B 5.9 D 8.2	底部は平底で，「ハ」の字状の高台がつく。体部はほぼ直線的に外傾する。体部の器壁は薄い。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。	雲母・長石・石英 橙色 普通	40% 内面黒色処理
2	高台付坏 土師器	B (4.1) D 7.6	底部は平底で，「ハ」の字状の高台がつく。体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。	器内面は細いヘラ磨き調整。全体に荒れている。	雲母・スコリア 浅黄橙色 普通	60% 内面黒色処理

3	高台付坏 土師器	A (13.3) B 5.4 D (8.2)	底部は丸底の可能性がある。高台は「ハ」の字状である。体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部でかるく外反して開く。	器内面はヘラ磨き調整。全体に荒れている。	雲母・砂粒 明褐灰色 普通	30% 内面黒色処理
4	高台付皿 須恵器	A (13.9) B 2.8 D 7.6	底部は平底で，高さ1.5cmの高台がつく。体部は外傾して開き，口縁部は外反する。	底部は回転ヘラ切り後、周辺部のみ回転ヘラ削り調整。器内面に重ね焼きの痕跡がある。水挽き成形。	長石・礫・雲母 にぶい黄橙色 普通	60%

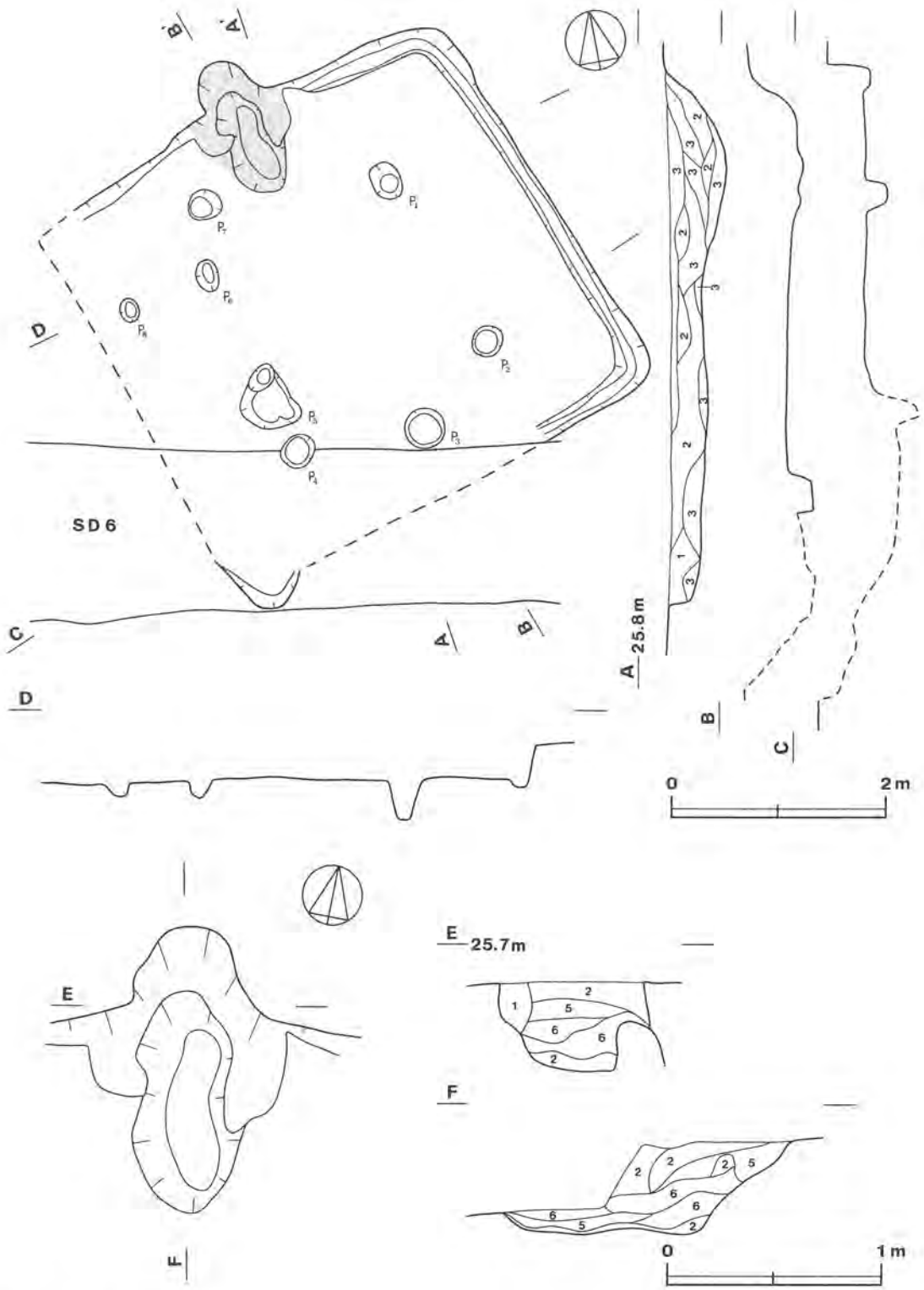
第56号住居跡（第135図）

本跡は，F9a$_9$区を中心に確認された住居跡で，西側で第55号住居跡と，南側で第６号溝と重複している。溝が最も新しく，本跡が最も古いと推定される。

西壁と南壁の大半が消失しているが，第６号溝の壁中に本跡の南西コーナー部が残っており，平面形は方形を呈していたことがわかる。規模は長軸4.45m，短軸4.08mで，主軸方向は，N－17°－Wである。前述のように壁は全体の２分の１しか残っていないが，垂直に立ち上がり，高さは38cmである。壁溝は，住居跡の東及び北側で確認され，南及び西側では不明である。壁溝の上



第134図　第56号住居跡出土遺物実測図



第135図　第56号住居跡実測図

幅は12～16cm，下幅は５～14cm，深さは６～８cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは８か所検出され，位置からみて，P_1・P_2・P_4・P_6の４か所が主柱穴と思われる。主柱穴の長径は30～35cm，短径は21～25cm，深さは16～41cmである。カマドは北壁中央部に粘土で構築されており，袖部が40～55cmの長さで残存している。火床部は長径105cm，短径51cmの楕円形で床を10cm掘り下げており，煙道は屋外に40cm張り出している。

覆土は，大きく２層に分けられる。１層はローム粒子を中量含む暗褐色土，２層は焼土粒子中量，粘土ブロック少量を含む褐色土である。なお，２層の最下部に暗褐色土がブロック状に混入している。

遺物は，土師器の坏（１，２，３，４）４点･鉢（５），須恵器の鉢（６）が２層から，支脚９点がカマド内及び周辺の床面から出土している。他に，鉄製品，軽石片４点，土師器・須恵器片547点が出土している。

出土遺物観察表（第134図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (11.9) B 3.8	底部は丸底であるが，接地面はやや平坦になる。口縁部は直立し，端部は尖る。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	パミス・スコリア 明赤褐色 普通	50%
2	坏 土師器	A (13.9) B 4.2 C 6.0	底部は平底で，体部は内湾ぎみに開く。口縁部はかるく外反する。	底部は全面回転ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。 水挽き成形。	長石・砂粒 明赤褐色 普通	60%
3	高台付坏 土師器	A (13.1) B (4.6)	体部は直線的に外傾して開く。高台のとれた痕跡が残る。	口縁部外面は横ナデ，器内面はヘラ磨き調整。全体に荒れている。	スコリア･パミス･砂粒 橙色 普通（２次）	30% 内面黒色処理
4	坏 土師器	A (7.5) B 1.9 C 6.0	底部は平底で，体部は外傾して開く。手提土器。	底部に木葉痕が残り，体部との境には接合痕が認められる。器内面にはヘラあるいは棒状工具による圧痕がある。	雲母・スコリア 灰褐色 普通	60%
5	鉢 土師器	A (10.1) B 8.2 C (6.7)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部で軽く内湾する。	器内・外面ともナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通（２次）	60%
6	鉢 須恵器	B 8.0 C (19.0)	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部外面は横方向のヘラ削り，内面は横方向のヘラナデ調整。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 普通	20%
7	軽石	全長 8.9	用途不明			
8	軽石	全長 6.2	用途不明			

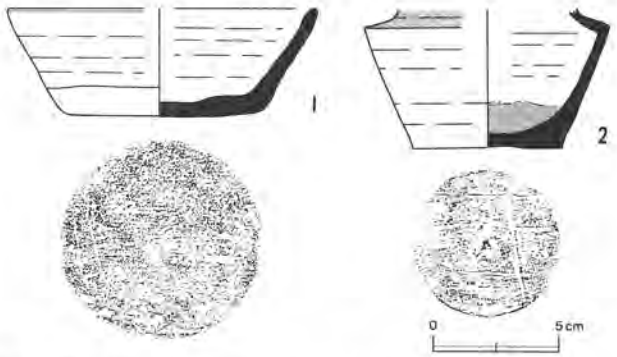
第59号住居跡（第32図）

本跡は，F8h_8区を中心に確認された住居跡で，第58号住居跡と重複している。新旧関係は，不明である。

本跡も第58号住居跡と同様，全体の形状はもちろん，壁も明確に検出できず，カマドの痕跡だけの調査である。火床部は，長径110cm，短径55cmの楕円形で，確認面より25cm掘り下げられており，内部には焼土ブロックや焼土粒子を含む褐色土が堆積していた。火床部の周囲には，粘土がブロック状に残っており，袖部の一部であろうと思われる。

覆土は残っておらず，不明である。

遺物は，カマド西側の覆土から須恵器の坏（1）と壺（2）が出土している。他に，土師器・須恵器片98点が出土している。



第136図　第56号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第136図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A (12.2) B 4.3 C 7.7	底部は平底であるが，周縁部はやや丸みをもつ。体部は直線的に外傾する。	底部は全面一定方向のヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・砂粒 灰色 普通	70%
2	壺 須恵器	B 5.5 C 5.9 E (9.8)	底部は平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がり，肩部で鋭角的に屈曲し口縁部に至る。口縁部は欠損。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り調整。肩部と底部内面に自然釉が付着する。水挽き成形。	長石・砂粒 灰色 良好	70%

第60号住居跡（第137図）

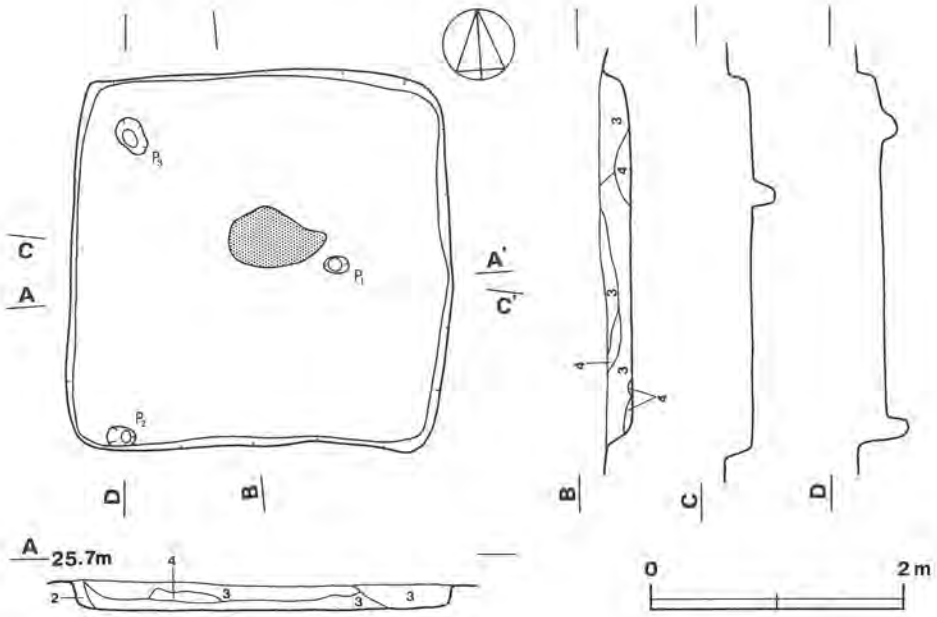
本跡は，当調査区の東部F10g_4区を中心に確認された住居跡である。

平面形は，一辺が2.98mの方形を呈している。主軸方向は，N－86°－Wである。壁は垂直に立ち上がり、高さは23cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，3か所検出されている。P_1は中央からやや東寄りに位置し，長径19cm，短径13cm，深さ20cmである。P_2・P_3は北西及

び南西のコーナー部に確認されたが，木根跡の可能性もある。P_1の西側30cmに，厚さ1mmの炭化物の層が確認された。炭化物は硬い床面上に確認されており，焼土は検出されず，床にも焼けた様子は見られない。本跡は，当遺跡で確認されている類似の住居跡から推察して，東西に2か所のピットを有する住居跡と同類の遺構であると思われる。

覆土は，2層に大別される。1・2層とも暗褐色土で，ともにロームブロックを多量に含んでいる。

遺物は少なく，覆土から土師器・須恵器片32点が出土しただけである。



第137図　第60号住居跡実測図

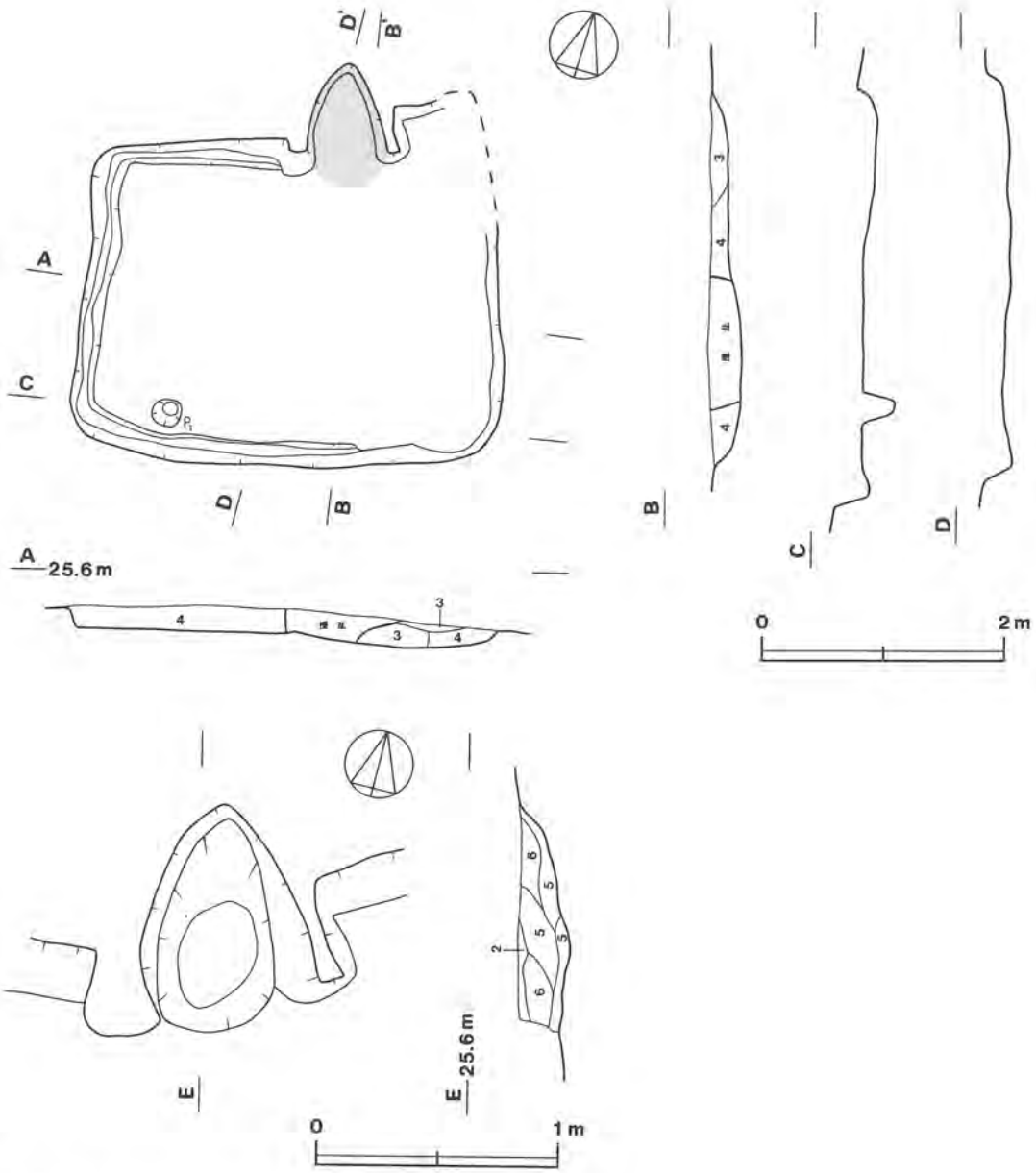
第61号住居跡（第138図）

本跡は，F10h_5区を中心に確認された住居跡である。

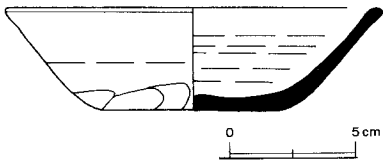
平面形は東西に長い長方形を呈し，規模は長軸3.34m，短軸2.67mで，主軸方向は，N－17°－Wである。カマド東側の北壁がやや外に広がり，そのため東壁の長さは3.01mで，西壁より30数cm長くなっている。ロームへの掘り込みが浅いため，壁の状況は明確でないが，垂直に立ち上がっていたものと思われる。壁高は最も高いところで22cmである。壁溝は，住居跡の西側だけで確認され，上幅10cm，下幅8cm，深さ6cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，南西コーナー部に1か所検出され，径25cm，深さ28cmである。カマドは北東コーナー部に近い北壁に粘土で構築されており，袖部が10～40cmの長さで残存している。火床部の掘り込みはなく，煙道は50cm外に張り出している。

覆土は大きく撹乱を受けており，層位的な観察はできなかった。ロームブロックを多量に含む黒褐色土と暗褐色土が，ブロック状に推積していた。

遺物は，須恵器の坏２点が，住居跡南側の床面とカマド前面の床面から出土している。他に，土師器・須恵器片136点が出土している。



第138図　第61号住居跡実測図



第139図　第61号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第139図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	坏 須恵器	A　15.0 B　4.1 C　7.4	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反し，端部を丸くおさめている。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。水挽き成形。外面の水挽き痕は弱い。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	80%

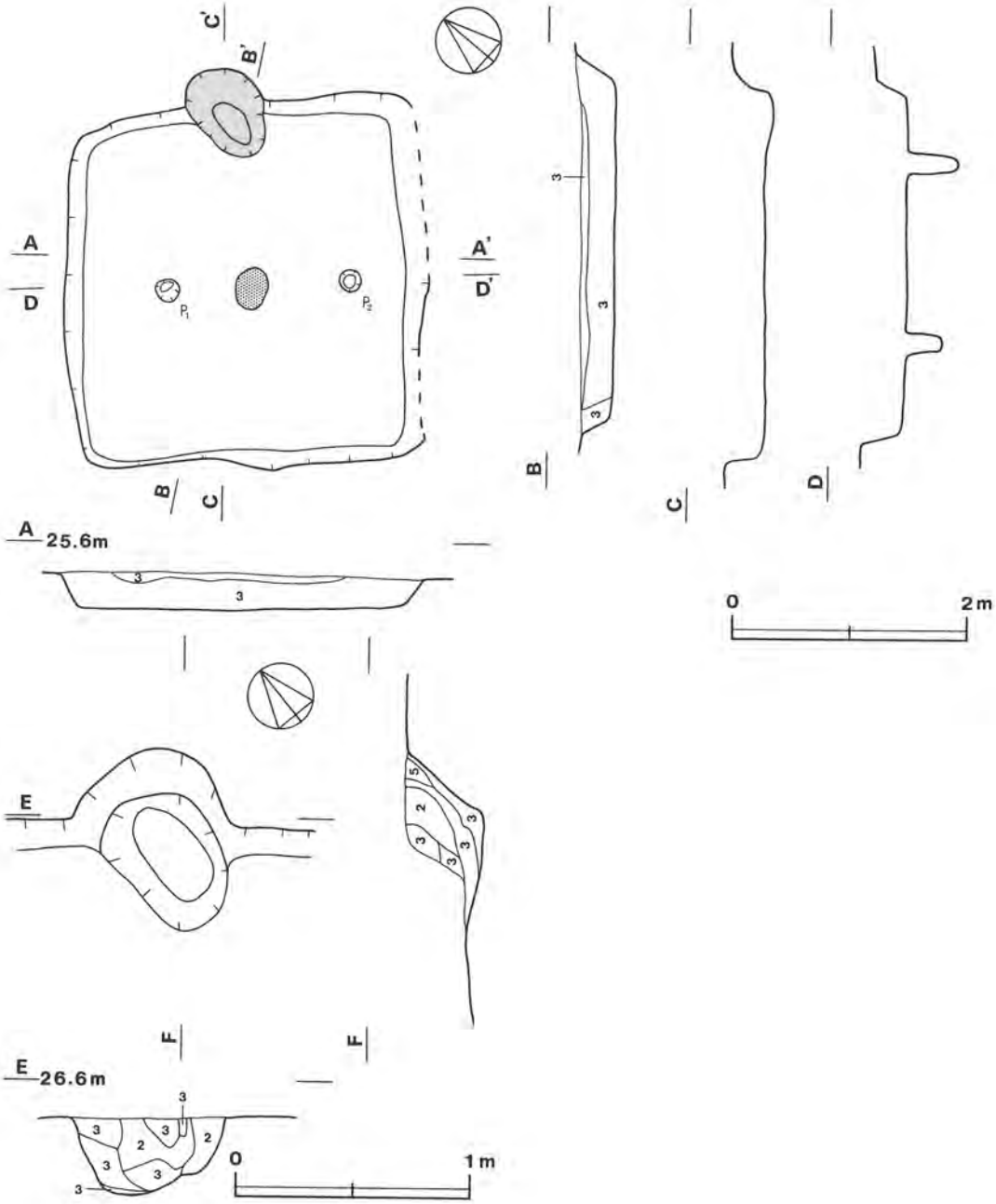
第62号住居跡（第140図）

本跡は，当調査区の東部F10i_2区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.12m，短軸3.02mで，主軸方向は，N－43°－Eである。南東側の壁は撹乱を受け消失しているが，他は垂直に立ち上がり，高さは30cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは床中央部に2か所検出され，径20cm，深さ32・44cmである。ピット間の中央部には，炭化物の層が0.5～1cmの厚さで認められたが，焼土は検出されていない，カマドは，北東側の壁中央部に粘土で構築されている。残存状況は悪く，長径85cm，短径60cmの楕円形に10cm掘り下げた火床部と，外に30cm張り出した煙道を確認したに過ぎない。当遺跡で確認されている類似の住居跡では，造り付けのカマドが付設されることはなく，床の中央部に炭化物の層が認められるだけである。そういう意味では本跡は例外と言ってよく，カマドをもつ住居跡からカマドが無くなる住居跡への過渡的な性格を有する遺構と考えられる。いずれにしても，カマドと炭化物の層の両方が検出されたのは本跡だけである。

覆土は暗褐色土だけで，含有物の差異により2層に分けられる。1層にはハードロームブロック中量，焼土粒子少量を含み，2層にはハードロームブロック多量，焼土粒子少量を含んでいる。

遺物は，土師器片16点が床面や覆土から出土しただけである。



第140図　第62号住居跡実測図

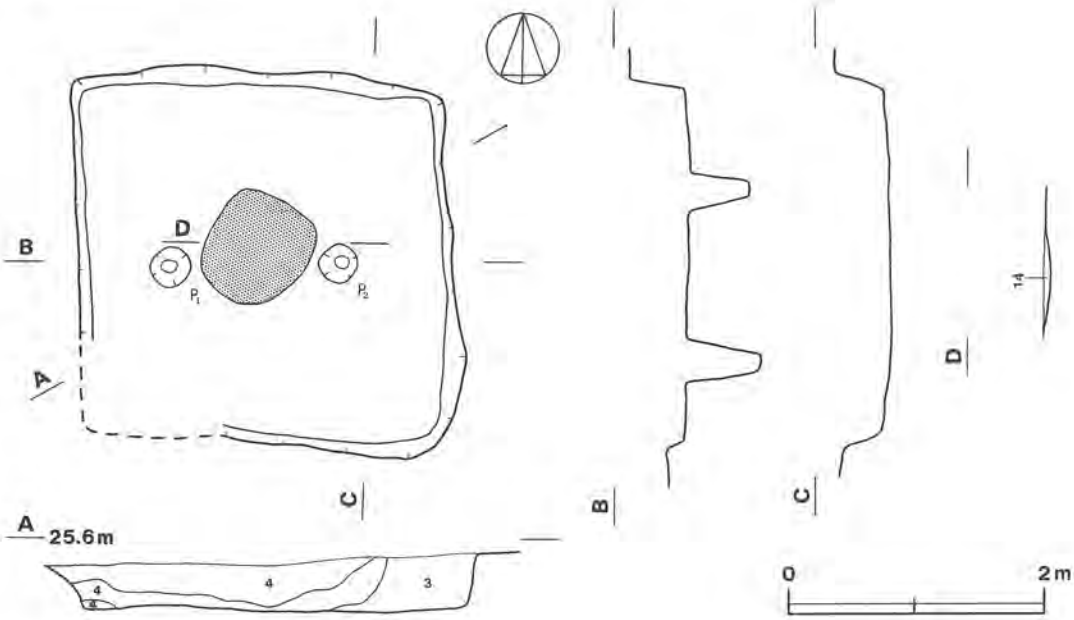
第64号住居跡（第141図）

本跡は，F10i_1区を中心に確認された住居跡で，第65号住居跡と西側で重複している。本跡は第65号住居跡を切って掘り込まれている。

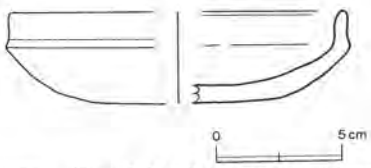
平面形は方形を呈し，規模は長軸2.96m，短軸2.95mで，主軸方向は，N－85°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは40cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，東西に並んで2か所検出され，径30cm，深さ48・64cmである。ピット間には，径80cmの円形で深さ3cm掘り下げた内部に炭火物の層の堆積が認められるが，内面には焼けた痕跡は残っていない。

覆土は2層で，ともに黒褐色土である。両層とも，ハードロームブロック中量，焼土粒子少量を含んでいる。

遺物は，土師器の坏と甕が2層から出土している。他に，土師器・須恵器片164点が出土している。



第141図　第64号住居跡実測図



第142図　第64号住居跡出土遺物実測図

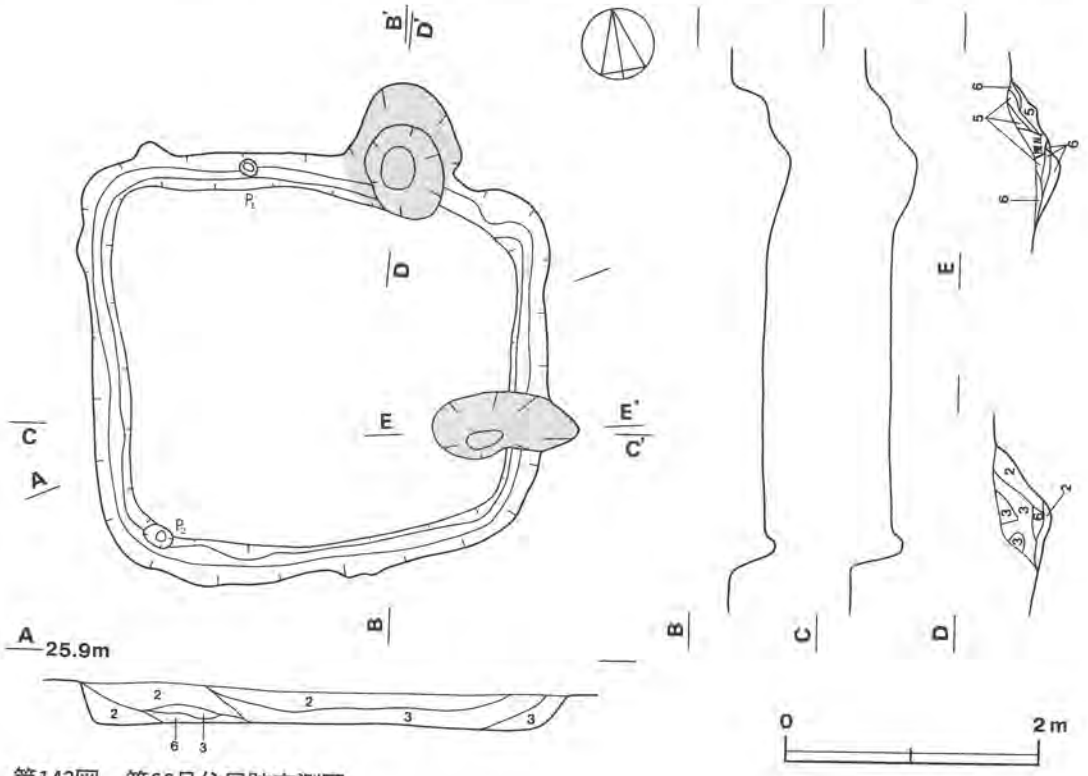
出土遺物観察表（第142図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	坏 土師器	A (13.5) B (3.6) E (13.7)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・スコリア・雲母 褐色 普通	25%

第66号住居跡（第143図）

本跡は，F10e₁区を中心に確認された住居跡である。

平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し，規模は長軸3.64m，短軸2.82mで，主軸方向は，N－5°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは27cmである。壁溝は全周しており，溝中に小ピットが北壁と南壁の2か所検出されている。ピットの径は10～20cm，深さは18～32cmである。溝の上幅は10～15cm，下幅は6～11cm，深さは8cmである。床は中央部が特に硬く締まり，平坦である。カマドは，北壁東寄りと，東壁南寄りとの2か所に構築されている。北壁のカマドは，その大部分が壁外にあり，火床部は，長径78cm，短径58cmの楕円形で，深さは16cmである。煙道は，65cm

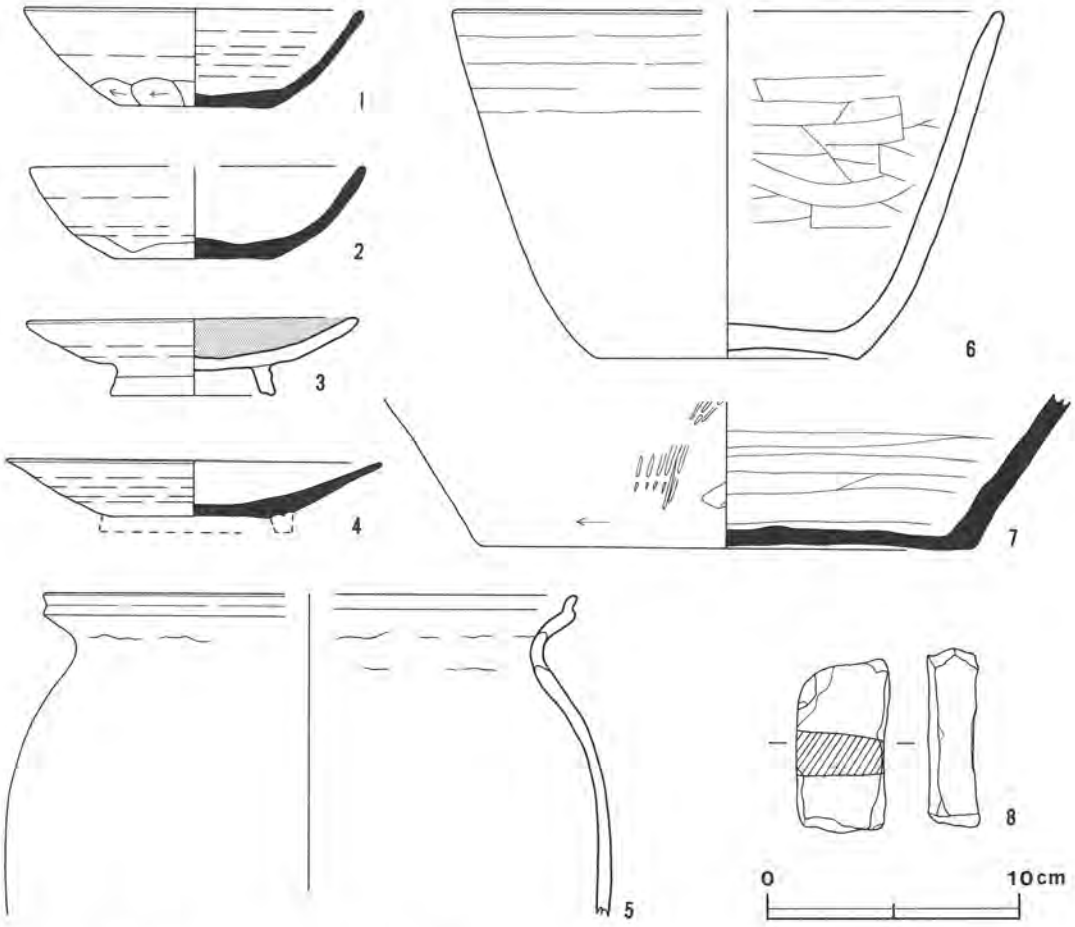


第143図　第66号住居跡実測図

外に張り出している。東壁のカマドは明確なものではなく，焼土も少量しか検出されなかったことから，あまり使用されなかったものと思われる。

覆土は２層で，１・２層ともローム粒子を多量に含んでおり，１層は褐色土，２層は暗褐色土である。

遺物は，土師器の甕（５），須恵器の坏（１）・鉢（７）がカマド内から，土師器の鉢（６）・皿（３）１点・埦，須恵器の皿（４）が２層からそれぞれ出土している。他に，砥石，刀子，土師器・須恵器片344点が出土している。



第144図　第66号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第144図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 13.5 B 3.9 C 6.1	底部は平底で，体部はわずかに内湾しながら外上方に立ち上がる。口縁端部は丸い。	底部は全面一定方向のヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。水挽き成形。	砂粒・石英・雲母 褐灰色 普通	65%

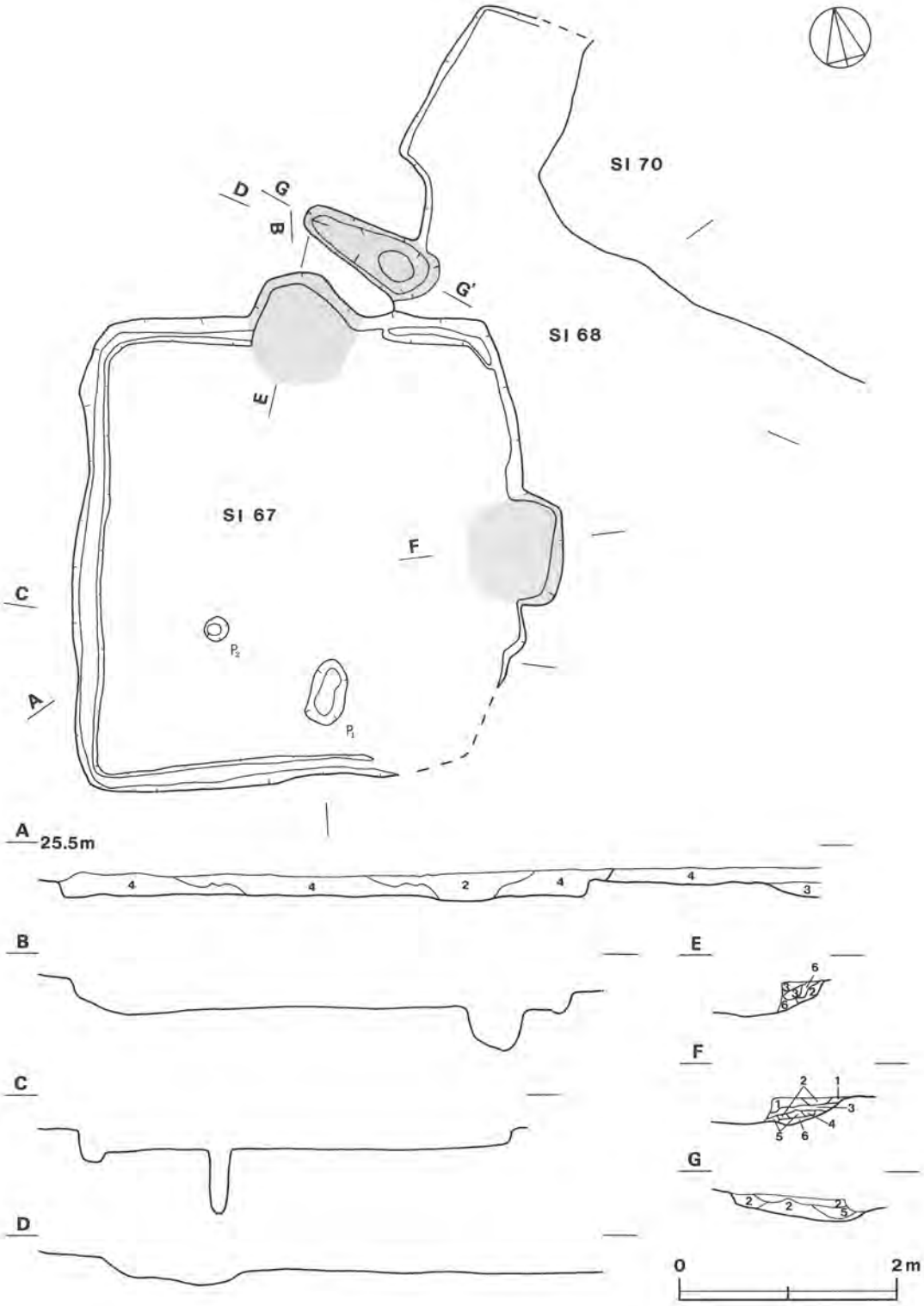
2	坏 須恵器	A (13.3) B 3.7 C 6.2	底部は平底で，体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。	底部はヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石 灰白色 普通	65%
3	高台付皿 土師器	A 13.3 B 3.1 D 6.4	底部は平底で，高さ1cmの高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。 水挽き成形。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	100% 内面黒色処理
4	高台付皿 須恵器	A 14.9 B (2.2) C (6.6)	底部は平底で，体部は器壁を減じながら直線的に外傾して立ち上がる。底部外縁に高台のとれた跡が残る。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・礫 にぶい橙色 良好	90% 底面に墨書 (判読不能)
5	甕 土師器	A (21.0) B (12.9) E (23.8)	胴部は内傾ぎみに立ち上がり，口頸部は短く外反する。口縁端部は上方につまみ出されている。	全体に荒れているが，器内・外面ともナデ調整と思われる。頸部内面には輪積痕が残る。	雲母・長石・スコリア にぶい橙色 普通（2次）	15%
6	鉢 土師器	A (21.8) B 13.8 C (10.2)	底部は平底であるが，中央部が浅く凹み，接地するのは外縁のみである。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部との境は，明瞭でない	胴部外面上位はヘラナデ，中位は縦方向のヘラ削り，下位は横方向のヘラ削り，胴部内面上～中位はヘラナデ，下位はヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・長石 橙色 普通	40%
7	鉢 須恵器	B (6.2) C (19.1)	底部は平底で，少し上げ底ぎみである。体部は外上方に外傾して立ち上がる。	胴部外面は縦位の平行叩き目，下端はヘラ削り，器内面はナデ調整。	雲母・石英・長石 にぶい褐色 普通	25%
8	砥石 石製品	全長(6,8) 幅 (3.7) 厚 (2.2)	表裏2面に使用痕が残る。			

第67号住居跡（第145図）

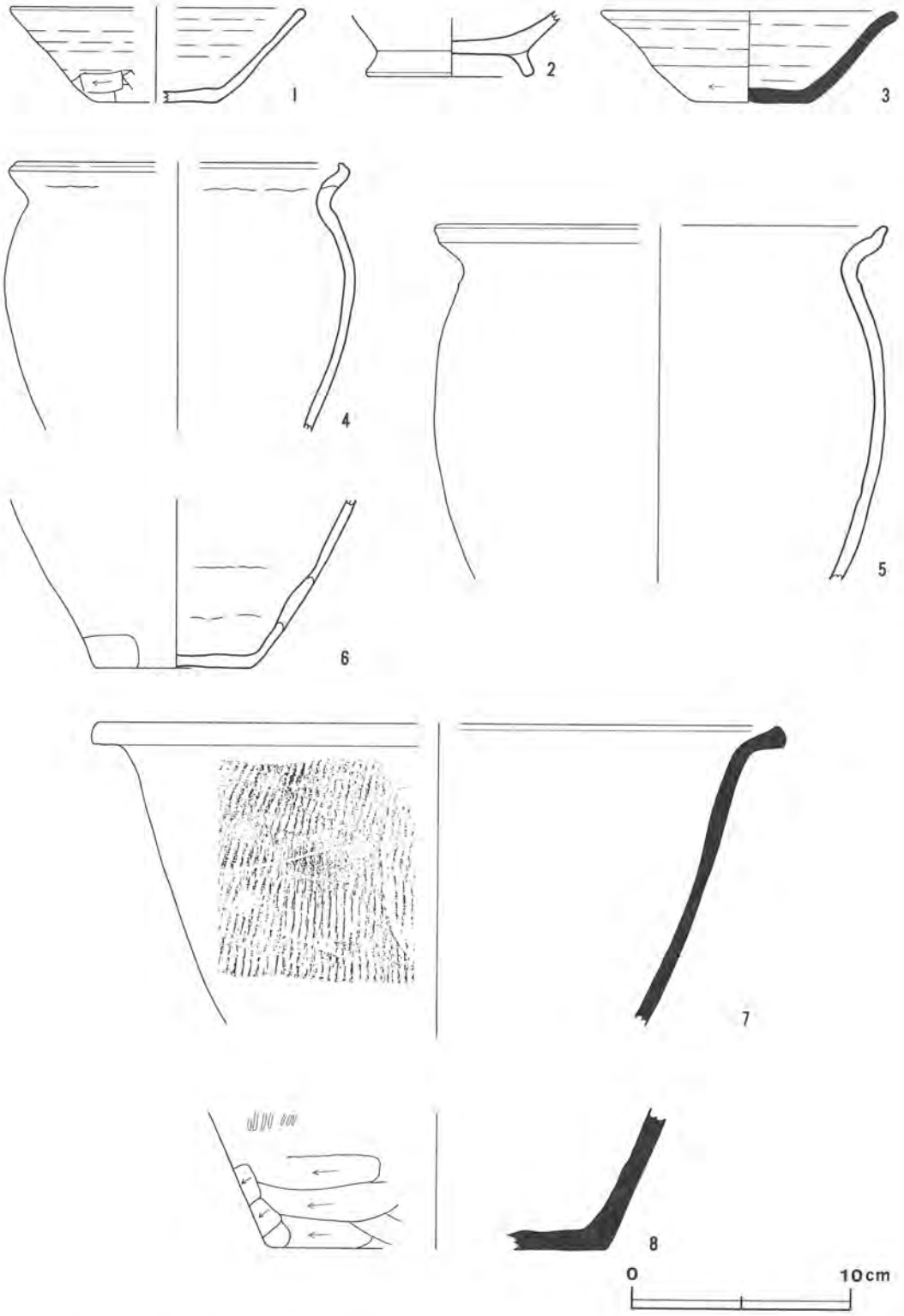
本跡は，G10a₁区を中心に確認された住居跡で，本跡の東側は第68号住居跡と重複している。新旧関係は，不明である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸4.32m，短軸4.15mで主軸方向は，N—18°—Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは21cmである。なお，南東コーナー部はエリア外になり，重複している東壁部分は凹凸が多く，明確な壁ではない。壁溝は，東壁下を除き全周しており，上幅8～20cm，下幅3～15cm，深さ4～8cmである。床は平坦で，中央部は硬く締まっている。ピットは2か所確認されている。P_1は入口に関連するピットと考えられ，長径60cm，短径34cmの楕円形を呈し，深さは36cmである。P_2は径22cm，深さ55cmと径に対して深いピットである。カマドは北壁中央部に構築されているが，煙道が40cm張り出すだけで，火床部の掘り込みはなく床と同一レベルである。

覆土は，2層に分けられる。1層はハードロームブロック中量，炭化粒子少量を含む褐色土，



第145図　第67・68号住居跡実測図



第146図　第67号住居跡出土遺物実測図

2層はハードロームブロック中量，炭化粒子及び焼土粒子少量を含む黒褐色土である。

遺物は，土師器の甕（5）が床面から，須恵器の坏（3）2点・鉢（7，8）2点がカマド内から，土師器の甕（4，6）2点，須恵器の鉢が3層からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片564点が出土している。

出土遺物観察表（第146図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.6) B 4.4 C (5,9)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・石英・雲母 橙色 普通	25%
2	高台付坏 土師器	B (3.0) D 7.6	底部片。底部は平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部はナデ，高台内・外面はナデ調整。	雲母・石英・長石 にぶい褐色 普通	20%
3	坏 須恵器	A 13.5 B 4.2 C 5.3	底部は平底で，体部は外傾して開き，口縁部はゆるく外反する。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。水挽き成形。	石英・礫 灰色 普通	75%
4	甕 土師器	A (15.0) B (12.4) E (16.1)	胴部は外傾して立ち上がり，胴部最大径は上位にある。口頸部は「く」の字状に屈曲し，口縁端部は内上方につまみ出されている。	胴部外面上位はナデ，下位はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内・外面に輪積痕が残る。	スコリア・長石・石英 橙色 普通	30%
5	甕 土師器	A (20.8) B (16.4)	胴部は内湾して立ち上がり，胴部最大径は上位にある。口頸部は，「く」の字状に屈曲し外反する。	胴部内外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	石英・雲母 にぶい橙色 普通	20%
6	甕 土師器	B (7.8) C 7.2	底部は平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がる。器壁は薄い。	胴部外面はヘラナデ調整。他は荒れていて不明。	砂粒 橙色 普通（2次）	40%
7	鉢 須恵器	A (31.4) B (13.9)	胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は強く外反する。	胴部は叩き目，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石 明褐灰色 普通	20%
8	鉢 須恵器	B (6.2) C (15.7)	底部は平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，胴部は平行叩き目，胴部下端はヘラ削り，調整。	雲母・長石・石英 にぶい黄橙色 普通（2次）	20%

第71号住居跡（第147図）

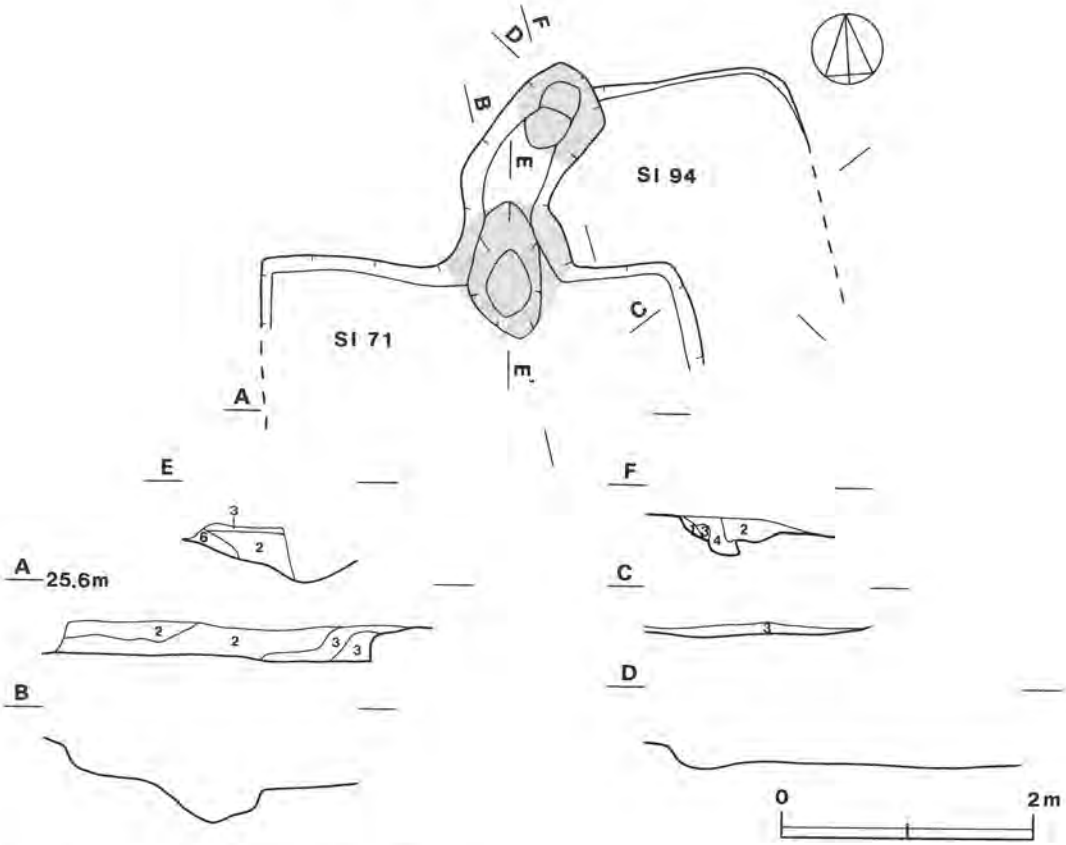
本跡は，F10j_4区を中心に確認された住居跡で，南側2分の1がエリア外にかかっており，さらに西側で第70号住居跡と，東側で第94号住居跡と重複しており，形状等は明確にできていない。なお，本跡は2軒の住居跡を切って掘り込んでいる。

平面形は前述のごとく不明である。規模は，東西方向だけ確認でき3.30mである。主軸方向は，N－2°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは30～32cmである。床は平坦で，締まりがなく

軟らかである。ピットは検出されていない。カマドは北壁中央部に構築されていたが，袖部は消失しており，火床部も明確な掘り込みは確認できなかった。

覆土は一部しか確認できなかったが，ハードロームブロックを含む褐色土である。

遺物は，土師器の甕（3）が北側の床面から，順恵器の蓋（1）・皿（2）がカマド内からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片144点が出土している。

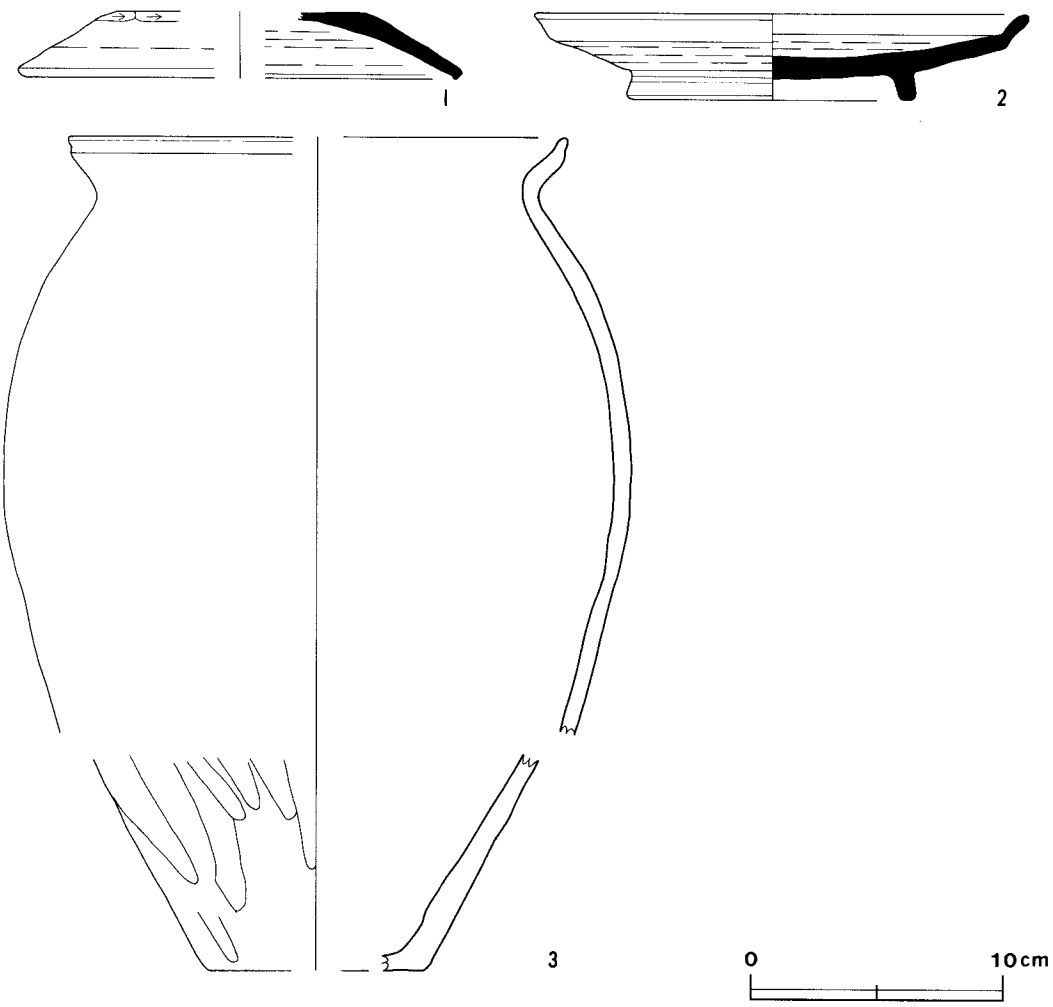


第147図　第71・94号住居跡実測図

出土遺物観察表（第148図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	蓋 須恵器	A (17.2) B 2.6	天井部は平坦で，口縁部は直線的に下がる。口縁端部は内傾する。	天井部は回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	石英・長石・礫 黄灰色 普通	20%
2	高台付皿 須恵器	A 19.2 B 3.4 D 11.2	底部は平底で，体部との境に高台がつく。体部は外傾し，口縁部との境に稜を有する。口縁部は短く外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	雲母・礫 灰色 普通	70%

3	甕 土師器	A (19.7) B (32.3) C (8.6) E (24.8)	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有し，その後内傾する。口頸部は「く」の字状に外反する。	胴部は縦方向のヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母 橙色 普通	50%

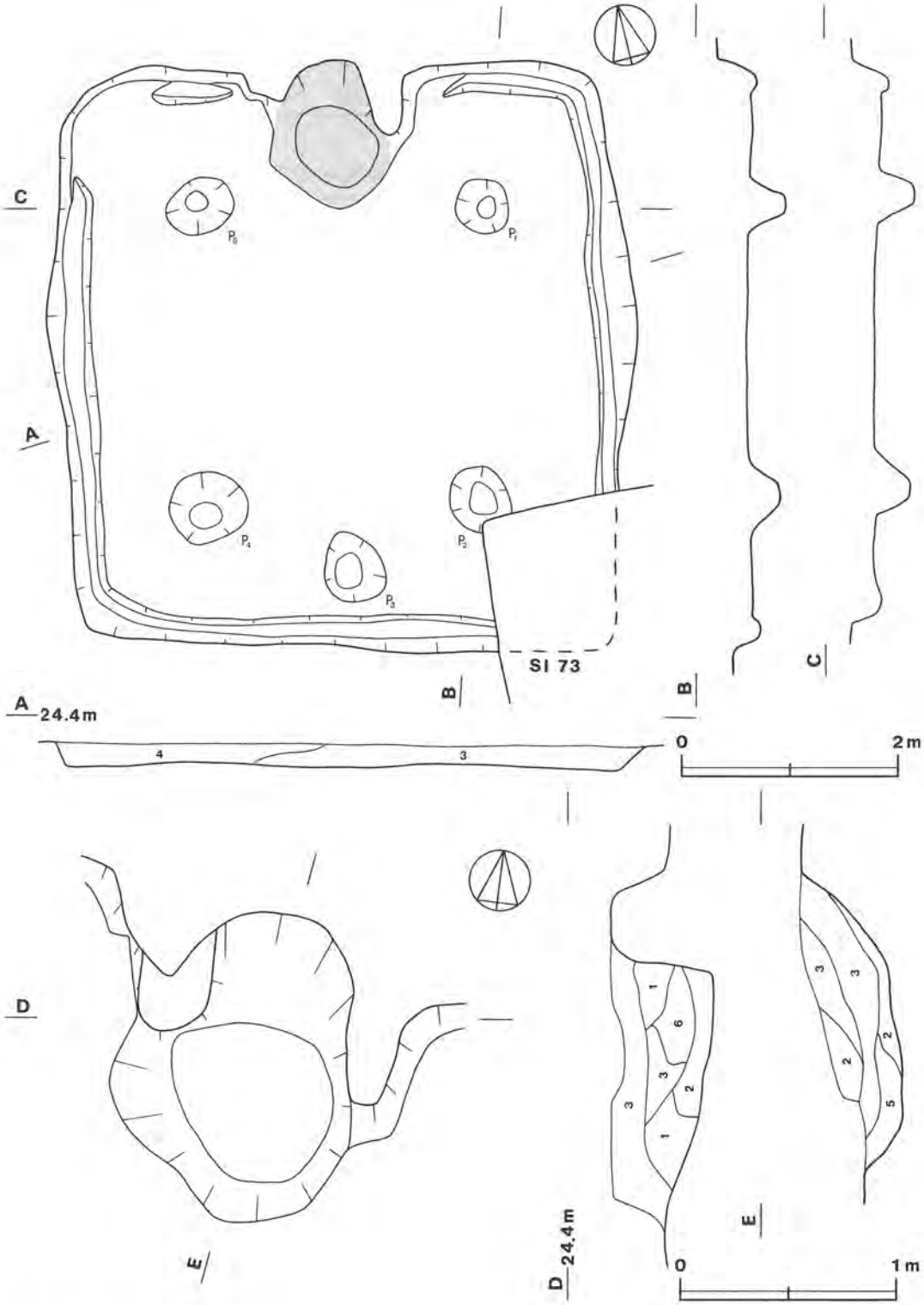


第148図　第71号住居跡出土遺物実測図

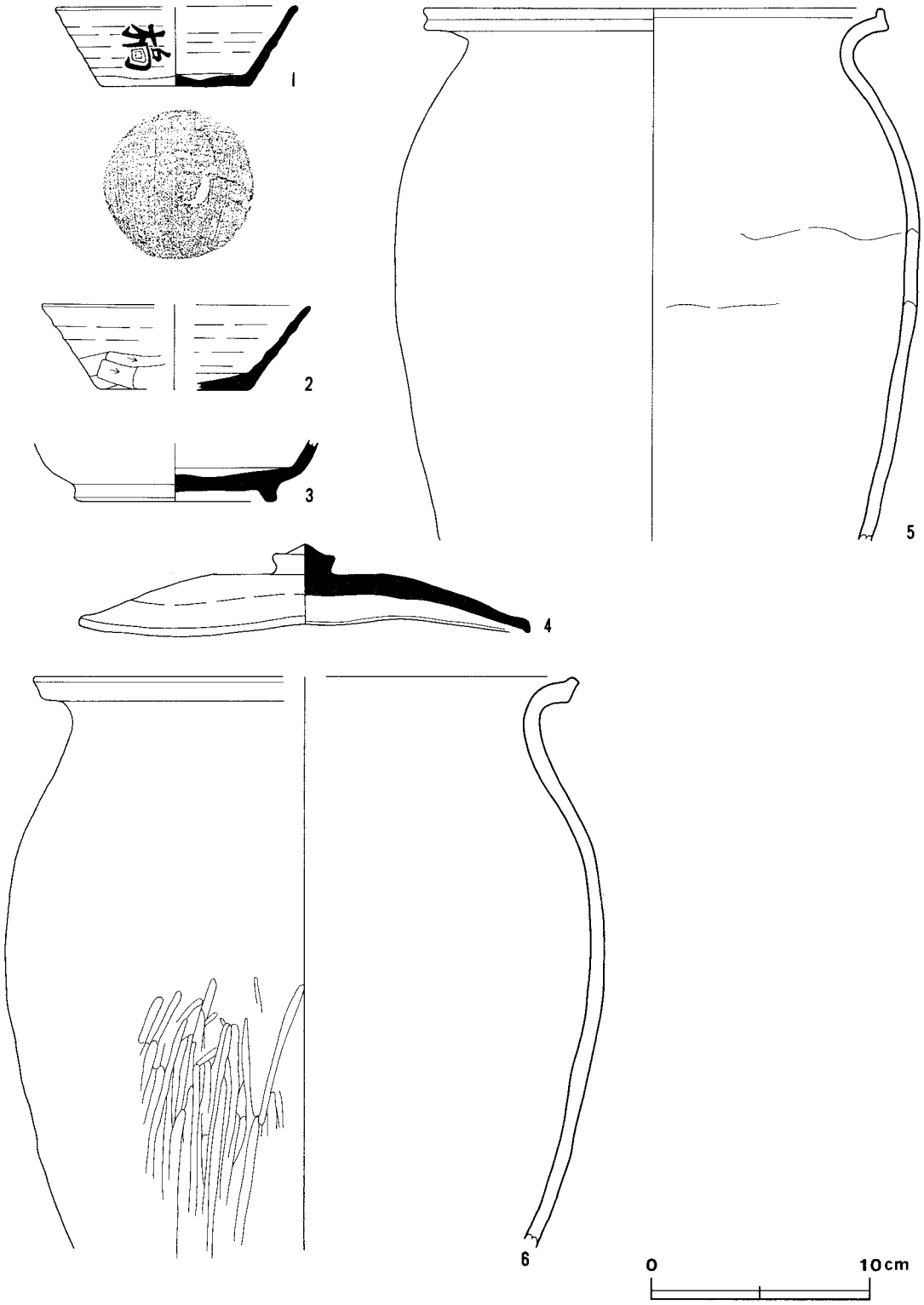
第72号住居跡（第149図）

本跡は，H11i_6区を中心に確認された住居跡で，南東コーナー部で第73号住居跡と重複し，本跡が切られている。

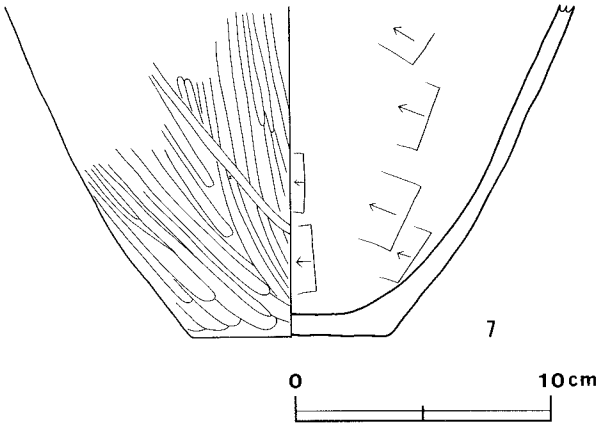
平面形は方形を呈し，規模は長軸5.46m，短軸5.31mで，主軸方向は，N—13°—Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは20～32cmである。壁溝は北西コーナー部を除いて周回しており，上



第149図　第72号住居跡実測図



第150図　第72号住居跡出土遺物実測図（１）



第151図　第72号住居跡出土遺物実測図（２）

幅12～25cm，下幅７～19cm，深さ５～10cmである。床は平坦で，住居跡中央部が硬く締まっている。なお，本跡と第73号住居跡のレベル差は５cmで，本跡の方が高い。ピットは，５か所検出されている。P_3を除いた４か所が主柱穴と思われ，径48～75cm，深さ29～42cmである。カマドは北壁中央部に山砂で構築されている。袖部は両側とも残り，火床部は長径83cm，短径70cmの楕円形で，床を20cm掘り込んでいる。煙道の張り出しは，10cmで，非常に短い。

覆土のほとんどが焼土ブロックを中量含む暗褐色土であるが，住居跡西側には焼土粒子及び炭化物を少量含む黒褐色土がみられる。

遺物は，須恵器の蓋（４）がカマド内から，土師器の甕（５，６）４点，須恵器の坏（１，２）２点が覆土から出土している。他に，支脚２点，土師器・須恵器片377点が出土している。

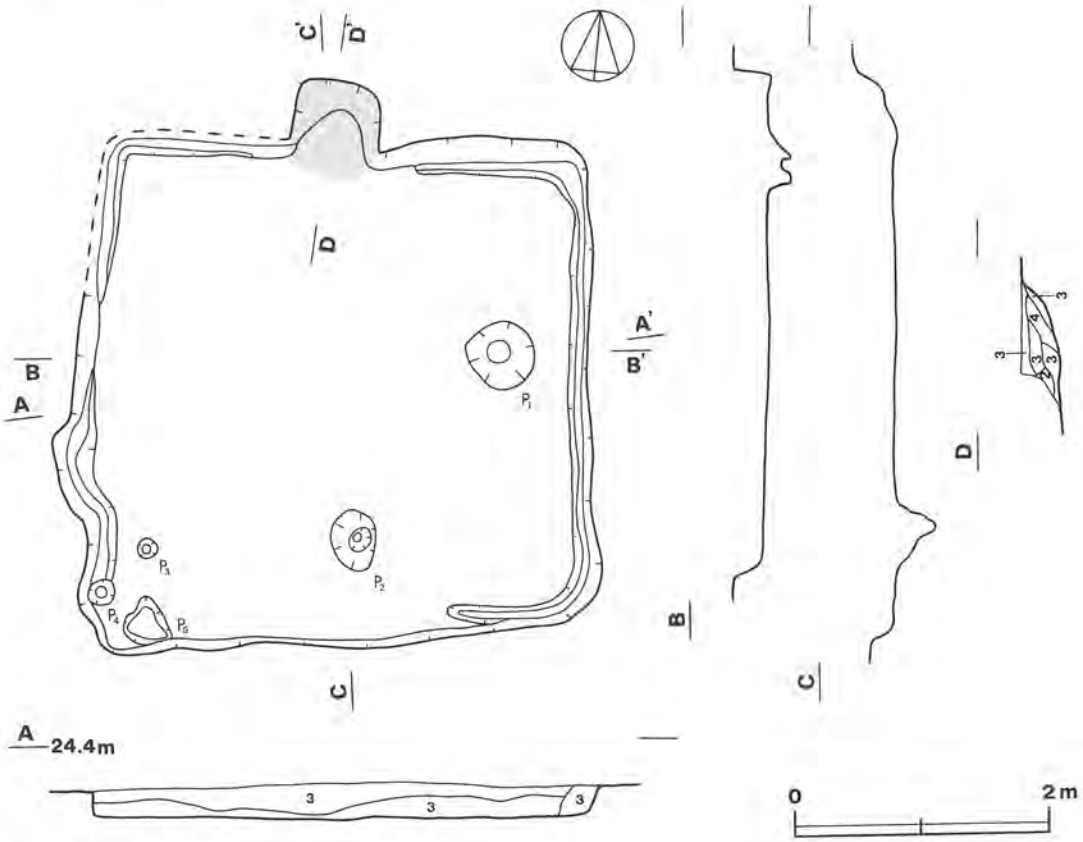
出土遺物観察表（第150・151図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A (11.2) B 3.7 C 7.0	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。体部の器壁は薄い	底部は回転ヘラ切り後一定方向のヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・石英・礫 灰色 良好	60%
2	坏 須恵器	A (12.4) B 4.0 C (6.1)	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。	雲母・長石 灰黄色 普通	20%
3	高台付埦 須恵器	B (2.7) D 9.1	底部は平底で，低い高台がつく。体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。 水挽き成形	雲母・長石 灰色 普通	40%
4	蓋 須恵器	A (20.4) B 3.9	天井部は浅く，丸い。口縁部は直線的に外傾して下がり，端部は垂下する。つまみは宝珠状を呈し，中央部が突出する。	天井部はヘラ削り調整。水挽き成形。	雲母・スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	75%

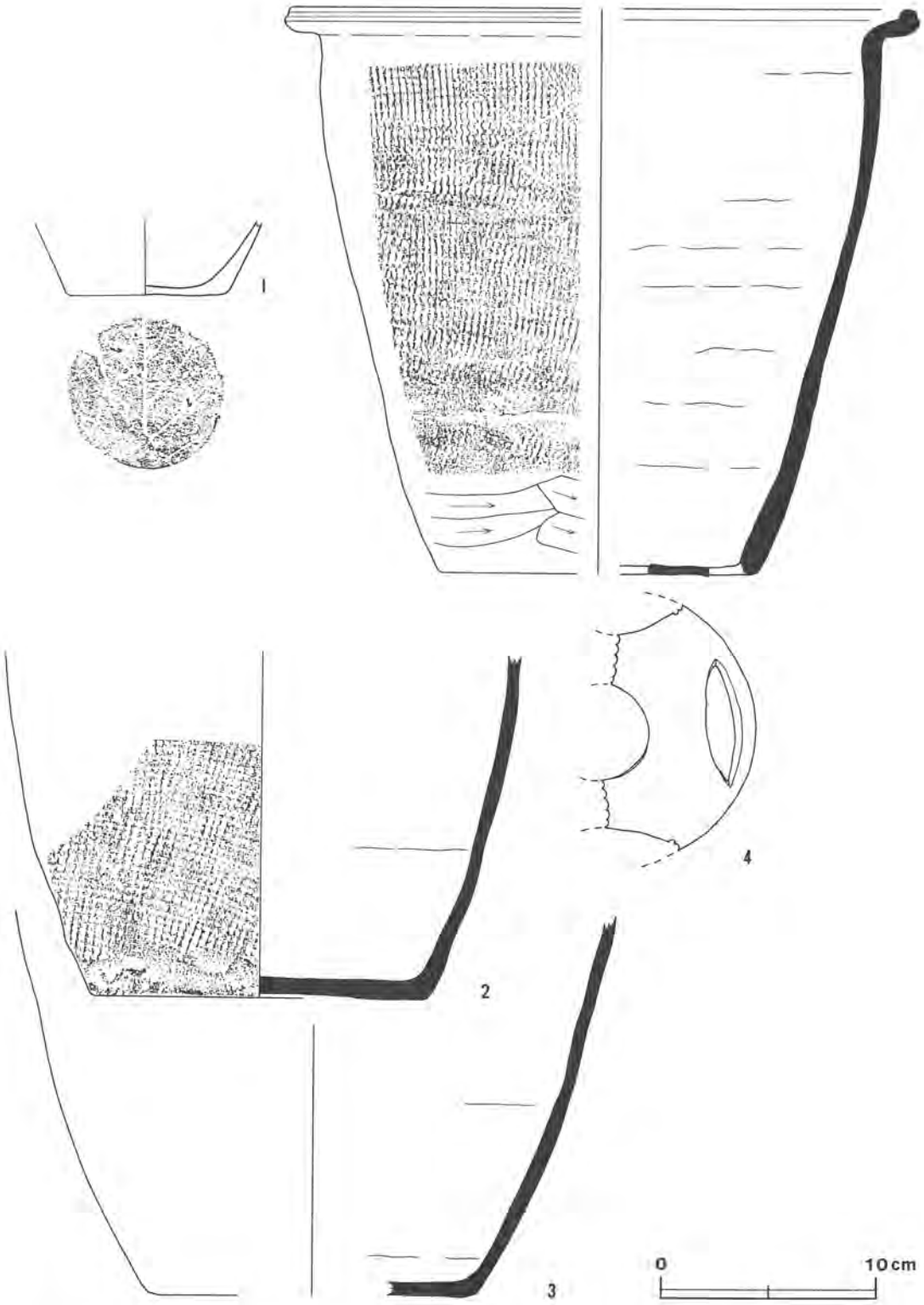
5	甕 土師器	A (21.0) B (24.8) E (24.1)	胴部はわずかに外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口頸部は「く」の字状に強く屈曲し，端部は上方につまみ出されている。	胴部外面下位はヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。胴部内面には輪積痕が残る。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	30%
6	甕 土師器	A (25.0) B (26.6) E (27.8)	胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口頸部は強く屈曲し，外上方に立ち上がる。	胴部外面中～下位はヘラ磨き，内面はヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通（2次）	35%
7	甕 土師器	B (13.2) C (7.6)	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	底部に木葉痕が残る。胴部外面はヘラ磨き，内面はヘラナデ調整。	雲母・長石・石英 赤褐色 普通	15%

第73号住居跡（第152図）

本跡は，H11j$_7$区を中心に確認された住居跡で，北西コーナー部で第72号住居跡と重複し，本跡が切っている。



第152図　第73号住居跡実測図



第153図　第73号住居跡出土遺物実測図

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.99m，短軸3.98mで，主軸方向は，N－0°である。壁は粘土質のロームで，垂直に立ち上がっている。北西コーナー部は重複のため，検出できなかった。壁高は，27cmである。床も壁同様粘土質のロームから成り，平坦で，硬く締まっている。壁溝は断続的に回っているが，明確ではない。ピットは，5か所検出されている。P_1～P_3は径48～52cmと比較的太く，深さは12～32cmである。P_4・P_5はともに浅く，壁際に検出されている。5か所のピットは，検出位置からみて，主柱穴ではないと思われる。カマドは北壁中央部に構築されているが，火床部の掘り込みはなく，床と同一レベルで続いている。煙道は，外側に60cm張り出している。

覆土は2層から成り，1層は焼土粒子及びローム粒子を少量含む暗褐色土，2層は焼土粒子を少量含む極暗褐色土である。

遺物は，土師器の甕（1）がカマド内から，須恵器の鉢（2，3）2点がカマド南東の床面から，須恵器の甑（4）が東壁寄りの覆土からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片154点が出土している。

出土遺物観察表（第153図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	B（3.5） C 7.5	底部から胴部片。平底を呈する。	胴部外面はヘラ削り，内面はナデ調整。底部に木葉痕が残る。	長石・石英・雲母・スコリア・パミス にぶい橙色 普通	10%
2	鉢 須恵器	B（16.2） C 15.5	底部は平底で，中央部がやや凹む。胴部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	底部はヘラ削り，胴部外面は叩きによる調整。器内面に輪積痕が残る。	礫・雲母 暗灰黄色 普通	35%
3	鉢 須恵器	B（17.9） C（14.8）	底部は平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部外面上位は叩き目，下位はヘラ削り，胴部内面及び底面は荒れていて調整痕不明。	雲母・長石・石英 にぶい赤褐色 普通（2次）	30%
4	甑 須恵器	A（28.6） B 26.5 C 15.0	体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部は外に強く屈曲する。口縁端部は上方につまみ出している。底部中央に円孔，外周部4か所に柳葉状の孔が穿たれている。	胴部上～中位は格子状の叩き目，下位は横方向のヘラ削り，口縁部内・外面及び器内面は横ナデ調整。器内面には輪積痕が残る。	長石・石英 灰色 良好	30%

第77号住居跡（第154図）

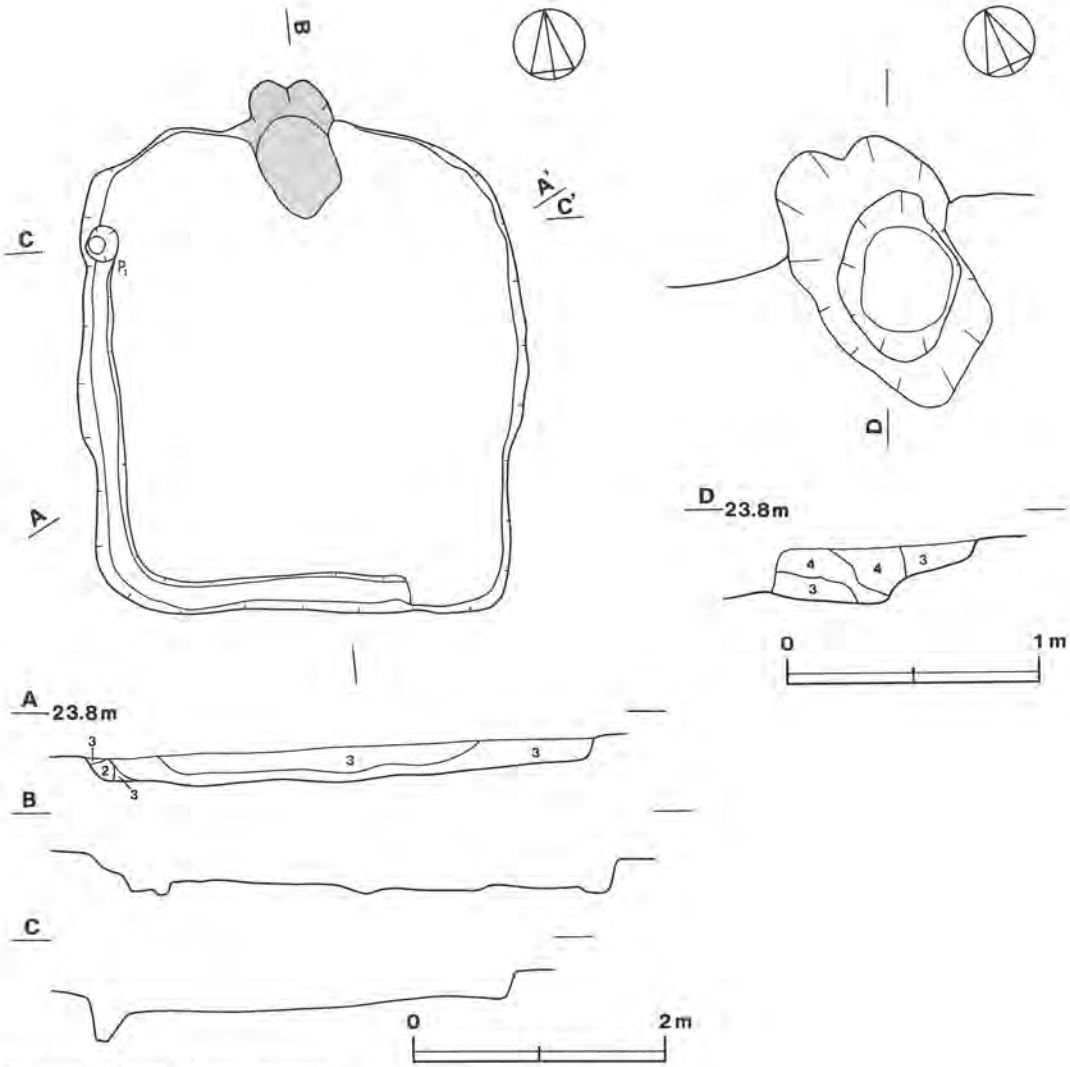
本跡は，I11b_1区を中心に確認された住居跡である。

平面形は隅丸長方形を呈し，規模は長軸3.90m，短軸3.28mで，南北方向に長い。主軸方向は，N－8°－Eである。壁は粘質のロームで，垂直に立ち上がっているが，一部撹乱を受けている。

壁高は20cmである。壁溝は，西壁から南壁にかけて半周しており，上幅20cm，下幅10～15cm，深さ5cmである。西壁沿いに延びる溝の北端部はピット状に落ち込んでおり，深さは23cmである。他にピットは検出されなかった。床は硬く締まり，やや凹凸している。床の所々に焼土の堆積がみられ，火災に遭遇したものと思われる。ピットは，検出されていない。カマドは北壁中央部に構築されていたと思われるが，床面を長径84cm，短径59cmの楕円形に，10cm掘り下げた火床部が確認できただけである。

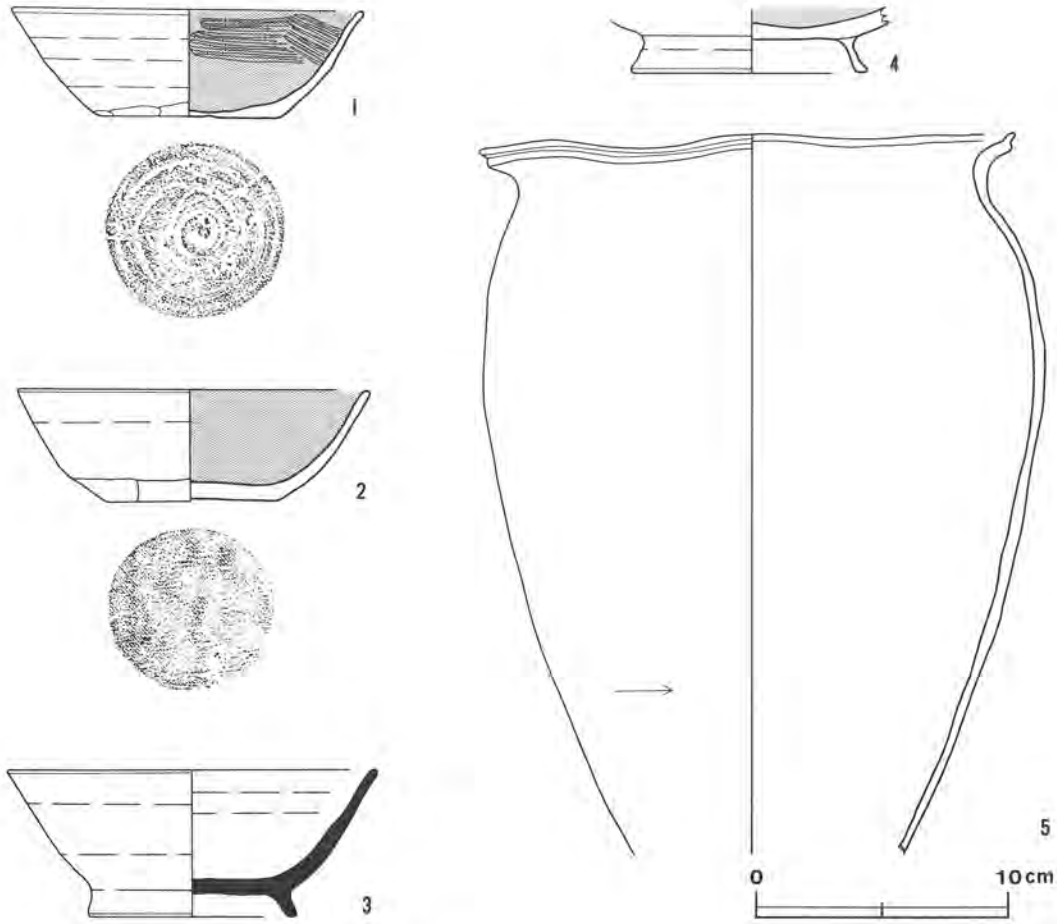
覆土は2層で，ともに暗褐色土である。1層は焼土ブロック及び粒子，炭化物を少量含み，2層には焼土粒子・炭化粒子を少量含んでいる。1層は2層よりやや明かるい色調を呈している。

遺物は，土師器の坏（1，2）2点が北西コーナー部の床面から，土師器の甕（5）がカマド



第154図　第77号住居跡実測図

内から，須恵器の埦（3）と土師器の埦（4）が3層から出土している。他に，土師器・須恵器片219点が出土している。



第155図　第77号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第155図）

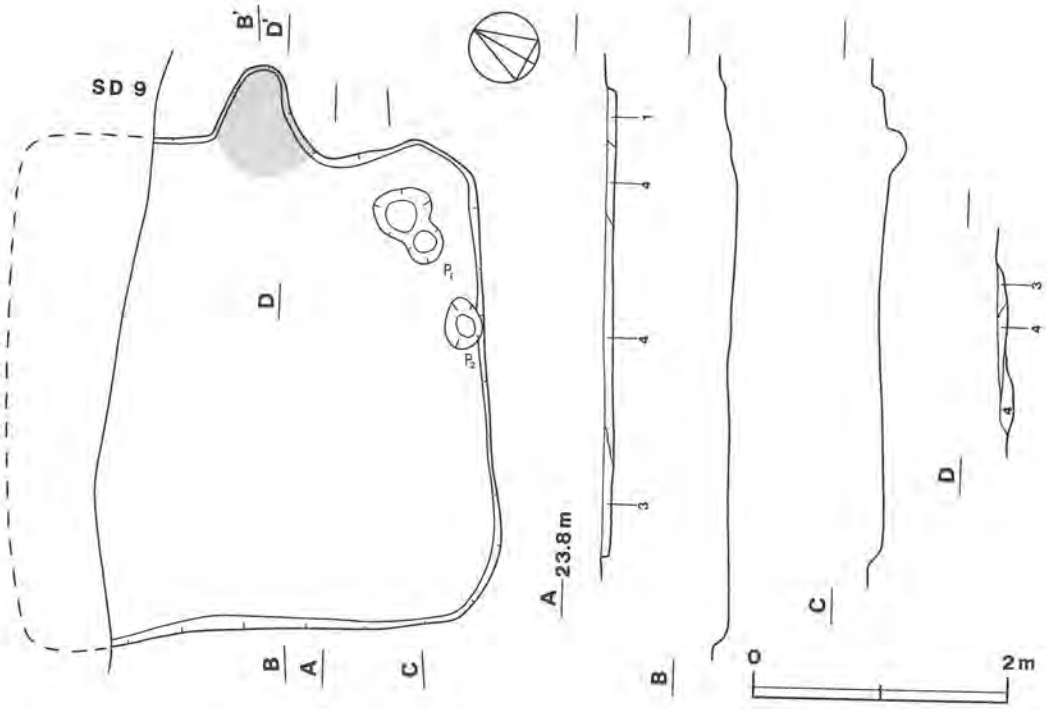
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.8 B 4.8 C 7.1	底部は平底で，中央部は極めて薄い。体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り，口縁部外面は横ナデ，器内面はヘラ磨き，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	100% 内面黒色処理
2	坏 土師器	A 13.8 B 4.5 C 6.6	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外上方に開く。	底部は全面ヘラ削り，内面はヘラ磨き調整。 水挽き成形。	スコリア・長石・石英 にぶい橙色 普通	100% 内面黒色処理

3	高台付埦 須恵器	A 14.5 B 5.9 D 8.2	平底の底部から，外傾してのびる体部をもつ。底部は，「ハ」の字状に開く高台が付く。	底部は回転ヘラ切り後，周辺部のみヘラ削り，高台内・外面は横ナデ調整。水挽き成形。	砂粒・礫 灰黄色 普通	100%
4	高台付埦 土師器	B (2.1) D 9.2	底部片。平底の底部に，「ハ」の字状に開く高い高台が付く。	底部はヘラ削り，器内面はヘラ磨き，高台内・外面は横ナデ調整。	長石・雲母・スコリア 橙色 普通	10% 内面黒色処理
5	甕 土師器	A 21.2 B (28.7) E 22.2	胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有し，その後内湾して口頸部に至る。口頸部は短く外反し，端部を外上方につまみ出している。	胴部上位はナデ，下位はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	40%

第78号住居跡（第156図）

本跡は，H10e₃区を中心に確認された住居跡で，北側の床から壁にかけて第9号溝に切られている。

平面形は残存部からみて方形を呈していたものと思われ，規模は東西方向で3.95mである。主軸方向は，N－60°－Eである。壁は粘土まじりの褐色土で，高さ5～10cmである。北壁は，重複の

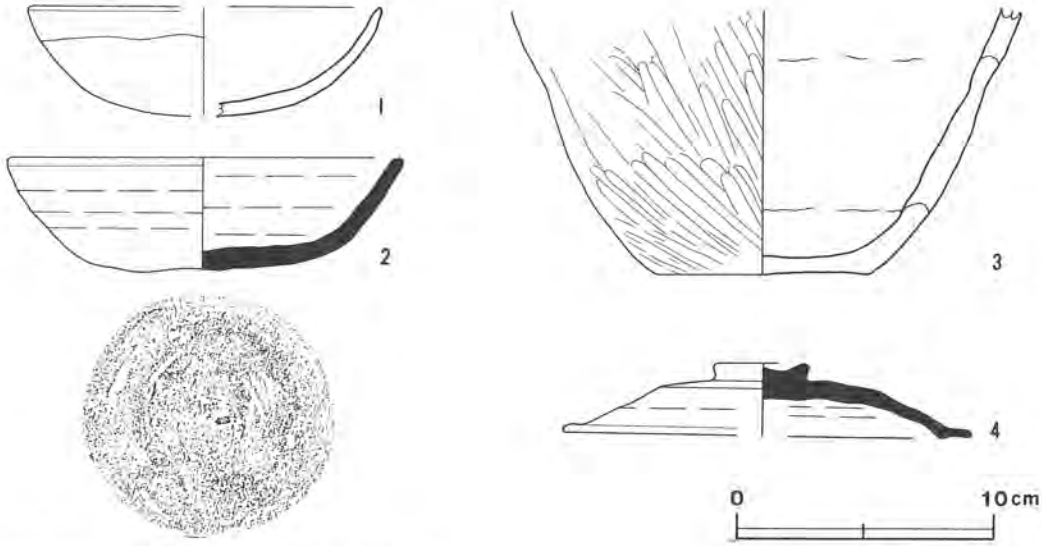


第156図　第78号住居跡実測図

ため確認できない。床も壁と同様の褐色土で，ほぼ平坦である。ピットはカマドの南西方向に，2か所検出されている。非常に浅いピットで，径40・47cm，深さ9・16cmである。カマドは東壁中央部に構築されていたと思われるが，火床部の掘り込みもなく，痕跡のみが確認できた。

覆土は1層で，焼土粒子及び炭化粒子を少量含む黒褐色土である。

遺物は，須恵器の坏（2）・蓋（4）がカマド南側の覆土から，土師器の坏（1）・甕（3）が覆土からそれぞれ出土している。



第157図　第78号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第157図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (14.0) B (4.3)	底部は丸底で，体部は内湾しながら外上方に開く。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・スコリア・パミス 明赤褐色 普通	48%
2	坏 須恵器	A 15.6 B 4.6	底部は扁平な丸底で，体部は外傾して外上方に開く。口縁端部は丸くおさめている。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒・長石・石英・スコリア 褐灰色 普通	65%
3	甕 土師器	B (10.6) C (8.3)	底部は平底で，胴部はわずかに内湾しながら外上方に立ち上がる。	底部及び胴部外面はヘラ磨き，胴部内面はナデ調整。胴部内面に輪積痕が残る。	雲母・礫・長石・石英 にぶい橙 普通	20%
4	蓋 須恵器	A (15.8) B 2.9	天井部は丸く，浅い。口縁部は外に屈曲し，内側に低いかえりをもつ。つまみは扁平なボタン状で，中央部がやや凹む。	天井部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	礫・長石・石英 黄灰色 普通	50%

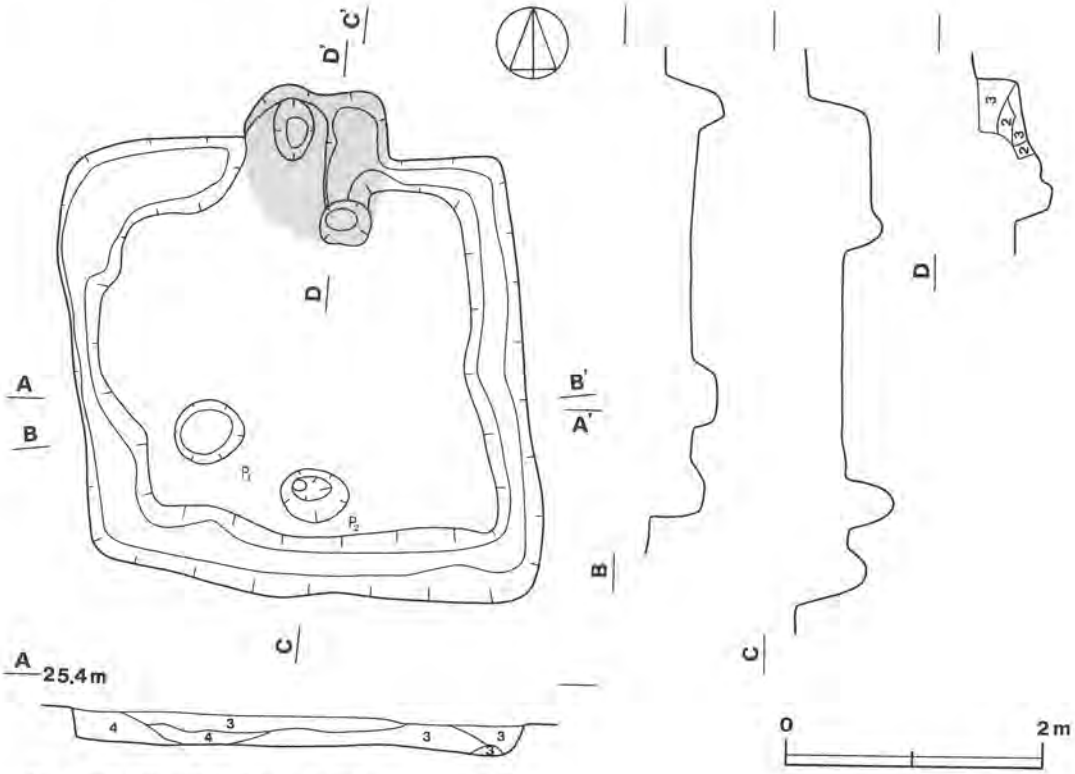
第79号住居跡（第158図）

本跡は，当調査区の中央部F9h8区を中心に確認された住居跡である。

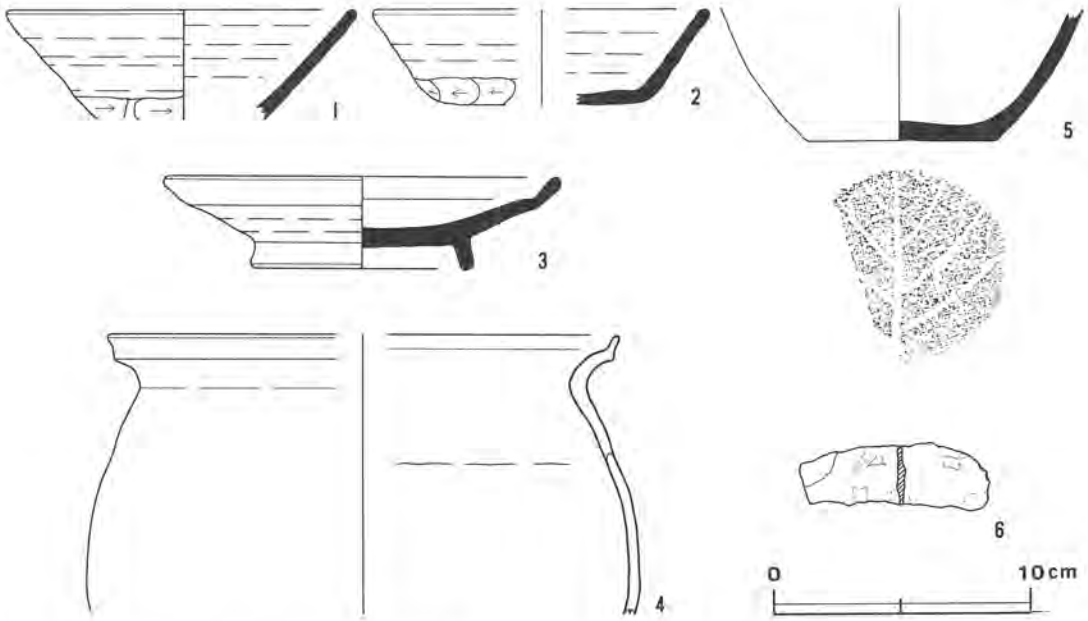
平面形は不整方形を呈し，規模は長軸3.54m，短軸3.45m，主軸方向は，N－1°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは32cmである。壁溝は全周しているが，非常に不規則な規模で，上幅40～65cm，下幅7～45cm，深さ10～20cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，床の南側の壁近くに2か所，カマド前面に1か所，それぞれ検出されている。カマド前面のピットは，本跡に伴うものかどうか明確でなく，木根跡の可能性もある。南側の2か所は，長径50・54cm，短径40・50cm，深さ26・40cmである。カマドは北壁中央部に構築されていたが，ほとんど消失しており，細部については不明である。

覆土は，2層からなっている。1層はローム粒子・炭化物を少量含む暗褐色土，2層はロームブロック多量，焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の甕（4）が北西コーナー部の壁溝から，須恵器の皿（3）がカマド前面の床から，須恵器の坏（1，2）2点が2層からそれぞれ出土している。他に，鎌，支脚，土師器・須恵器片99点が出土している。



第158図　第79号住居跡実測図



第159図　第79号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第159図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 13.6 B (4.4)	体部は外傾し，直線的に開く。底部欠損。	体部下端は横方向のヘラ削り調整。水挽き成形。	雲母・長石・石英 暗灰黄色 普通	60%
2	坏 須恵器	A (13.0) B 3.8 C (8.0)	底部は丸底ふうで，体部との境は明確でない。体部は外傾し，直線的に開く。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。水挽き成形。	砂粒・長石・石英・パミス 灰色 良好	25%
3	高台付皿 須恵器	A 15.4 B 3.7 D 8.4	底部は丸底ふうで，体部は外傾して開き，口縁部でやや屈曲する。高さ1cmの高台がつく。	高台は横ナデ調整。水挽き成形。	雲母・スコリア・長石・石英・礫 黄灰色 普通	80%
4	甕 土師器	A (20.0) B (11.0) E (21.8)	胴部は内湾して立ち上がり，「く」の字状に屈曲する口頸部に続く。口縁端部は外上方につまみ出されている。	胴部はヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。胴部内面に輪積痕が残る。	雲母・長石・石英 浅黄橙色 普通	20%
5	甕 須恵器	B 5.3 C 7.4	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部に木葉痕，胴部外面はヘラ削り，内面はヘラナデ調整。	砂粒・長石・石英・雲母 褐灰色 普通	30%
6	鎌 鉄製品	全長(7.4) 幅 (2.4) 重さ(14.4g)	先端部が欠損している。			

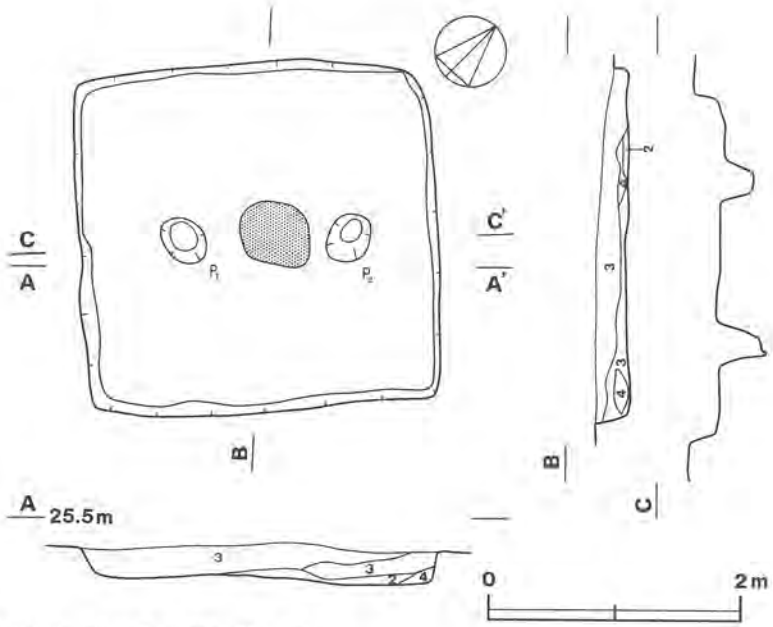
第80号住居跡（第160図）

本跡は，F9i_8区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸2.85m，短軸2.77mで，主軸方向は，N－90°である。壁は垂直に立ち上がり，高さは23cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，東西に並び，1.3mの間隔で2か所検出されている。径はともに40cmであり，深さはP_1が41cm，P_2が25cmである。ピット間には，炭化物の層が薄く確認された。炭化物の中には，焼土はほとんど混入していない。この種の住居跡は，当遺跡で他にも類例があり，性格等について検討を要する。

覆土は2層で，締まりがなく，ハードロームブロックを含んでいる。1層はハードロームブロックを多く含む暗褐色土，2層は少量含む褐色土が堆積している。

遺物は極めて少量で，土師器・須恵器片12点が覆土から出土しただけである。



第160図　第80号住居跡実測図

第81号住居跡（第161図）

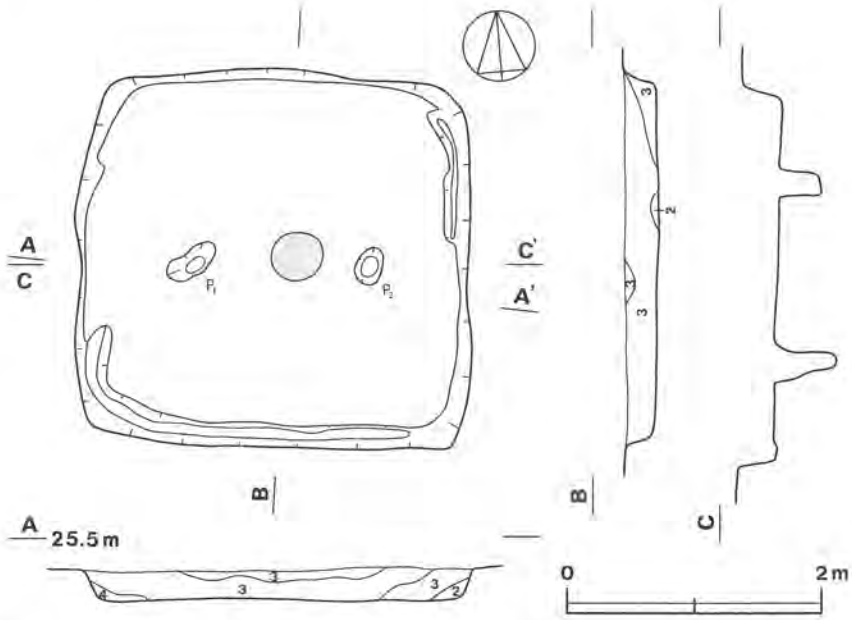
本跡は，F9j_8区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.13m，短軸2.99mで，主軸方向は，N－86°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは30cmである。床は平坦で，極めて硬く締まっている。壁溝は，南壁下と東壁北側下に確認されている。しかし，上幅が10cm前後，下幅4～6cm，深さが2～4cmと非常に浅く小規模なものである。ピットは，東西に並んで2か所検出されている。それぞれの長径は30・43cm，短径20cm，深さ32・52cmである。ピット間には，炭化物の層がわずかに確認され

た。

覆土は2層に分けられるが，その大部分はハードロームブロックを中量，炭化物を少量含む暗褐色土が占めている。

遺物は第80号住居跡と同様に非常に少なく，土師器・須恵器片16点が覆土から出土しただけである。



第161図　第81号住居跡実測図

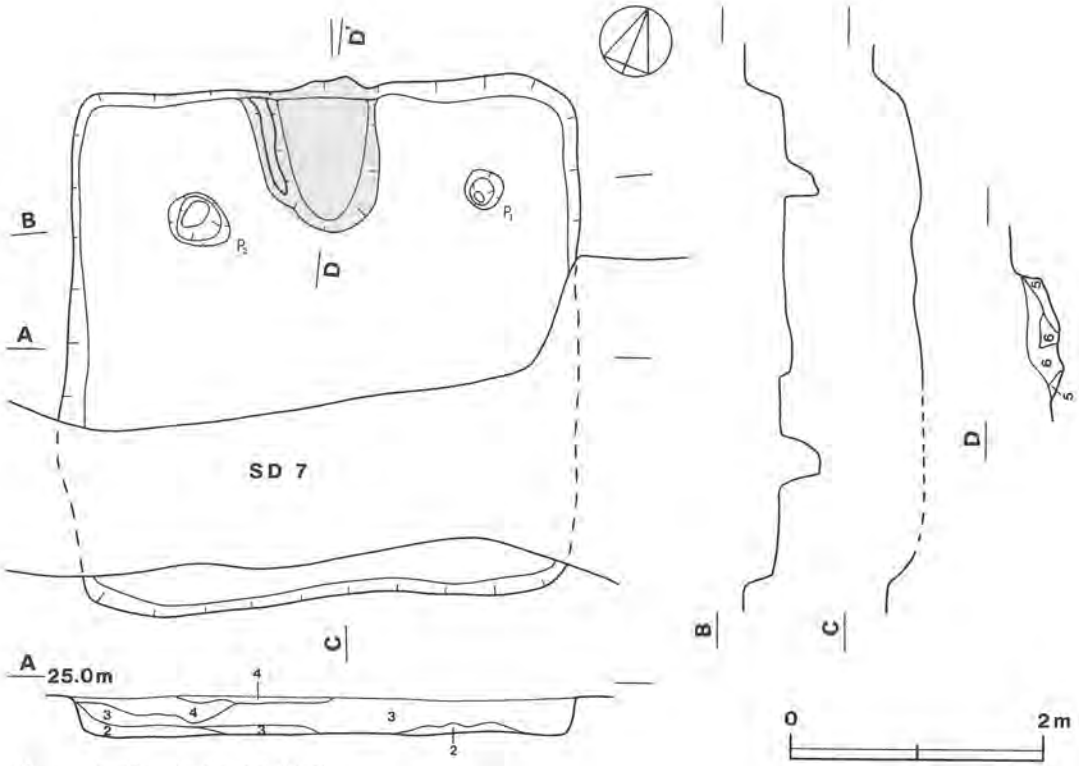
第82号住居跡（第162図）

本跡は，G9e8区を中心に確認された住居跡で，南側2分の1ぐらいの部分を東西に走る第5号溝によって切られている。

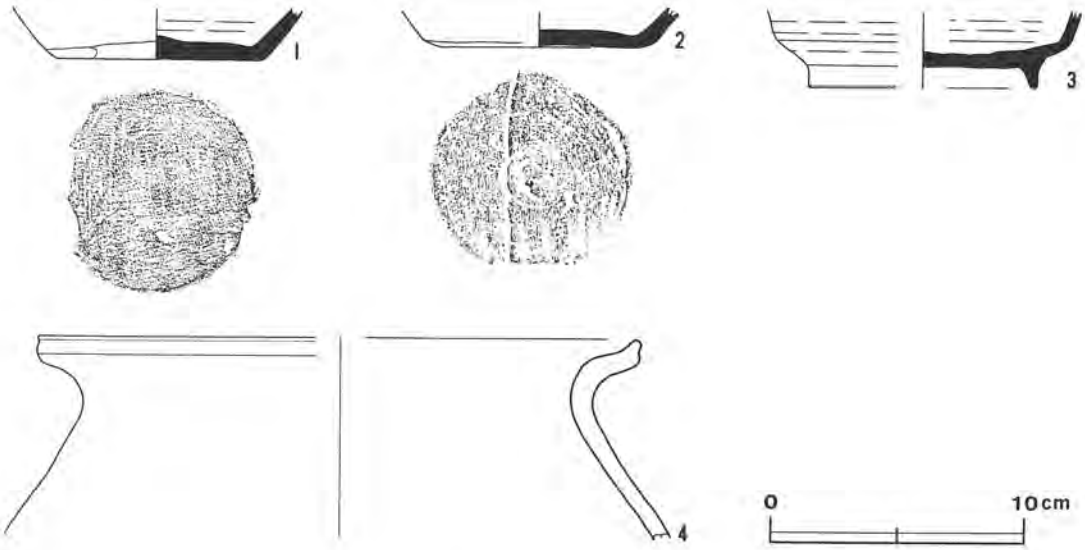
平面形は方形を呈し，規模は長軸4.04m，短軸4.03mで，主軸方向は，N－23.5°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは38cmである。床はあまり締まっておらず，南に向かってゆるく傾斜している。ピットは2か所検出され，P_1は径37cm，深さ42cm，P_2は径50cm，深さ35cmである。2か所とも検出された位置からみて，主柱穴の一部と思われる。カマドは，北壁中央部に構築されていたと思われるが，火床部や煙道の掘り込みもなく，痕跡のみを確認できただけである。

覆土は，大きく2層に分けられる。1層は黒褐色土，2層は暗褐色土で，それぞれに焼土粒子と炭化粒子を少量含んでいる。

遺物は，土師器の甕（4）と須恵器の坏（1，2，3）3点がカマド内から出土している。他に，土師器・須恵器片283点が出土している。



第162図　第82号住居跡実測図



第163図　第82号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第163図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	B（2.0） C　8.1	底部片。平底で，中央部が厚くなる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英 暗灰黄色 普通	30%
2	坏 須恵器	B（1.4） C（8.3）	底部片。平底で，体部との接合部は器壁が薄くなる。	底部は回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・石英・雲母 黄橙色 普通	30%
3	高台付坏 須恵器	B（3.3） D（8.8）	底部片。底部は平底で，低い高台が付く。	底部は回転ヘリ切り後，回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・礫 灰白色 普通	45%
4	甕 土師器	A（23.7） B（7.8）	胴部は内傾し，強く外反する口縁部に至る。口縁端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・スコリア 暗赤褐色 普通	25%

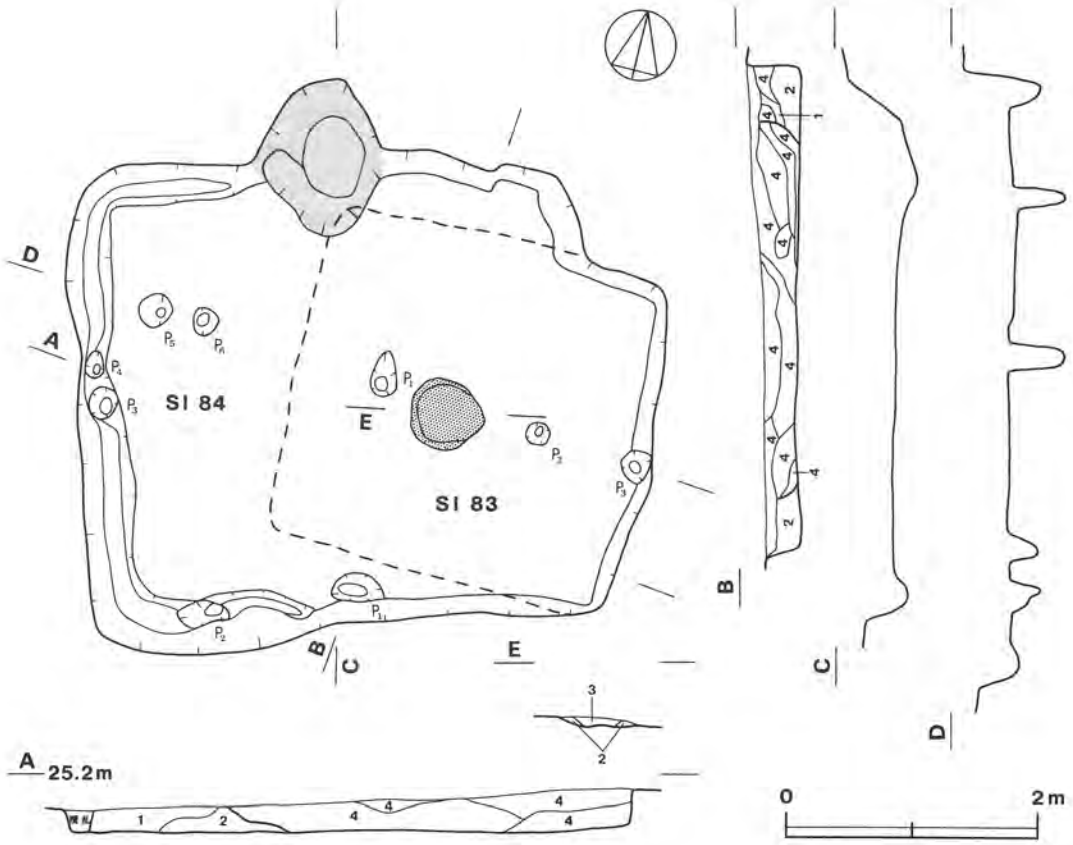
第83号住居跡（第164図）

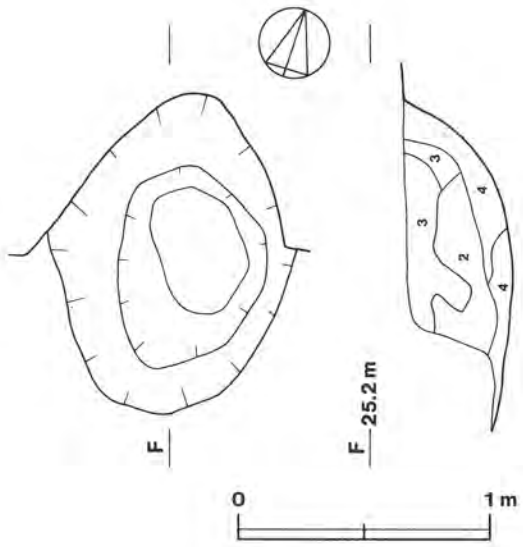
本跡は，G9b$_7$区を中心に確認された住居跡で，大部分が第84号住居跡と重複している。土層断面をみると，第84号住居跡の覆土を本跡が切っていることがわかる。

残っている壁は東壁の一部だけで，他は全て消失しているため，平面形や規模は不明である。しかし，類似の遺構から推定すると，方形を呈していたものと考えられる。主軸方向は，N—87°—Wである。残存壁は垂直に立ち上がり，高さは25～39cmである。床は平坦で，締まりはない。ピットは，東西に並んで2か所検出されている。いずれも小規模なピットで，径20・25cm，深さ42・45cmである。ピット間には，径1.15m，深さ6cmの皿状の凹みがあり，内部に炭化物が5cmの厚さで堆積していた。なお焼土粒子は少量しか検出できず，長期間火を使用した跡ではないと考えられる。

覆土は，黒褐色土が3層に分けられて堆積している。いずれの層にも焼土粒子が少量含まれており，ローム粒子は1層に，ハードロームブロックは2・3層に含まれている。

遺物は極端に少なく，須恵器の鉢（1，2）の他に，陶器片が3層から出土している。

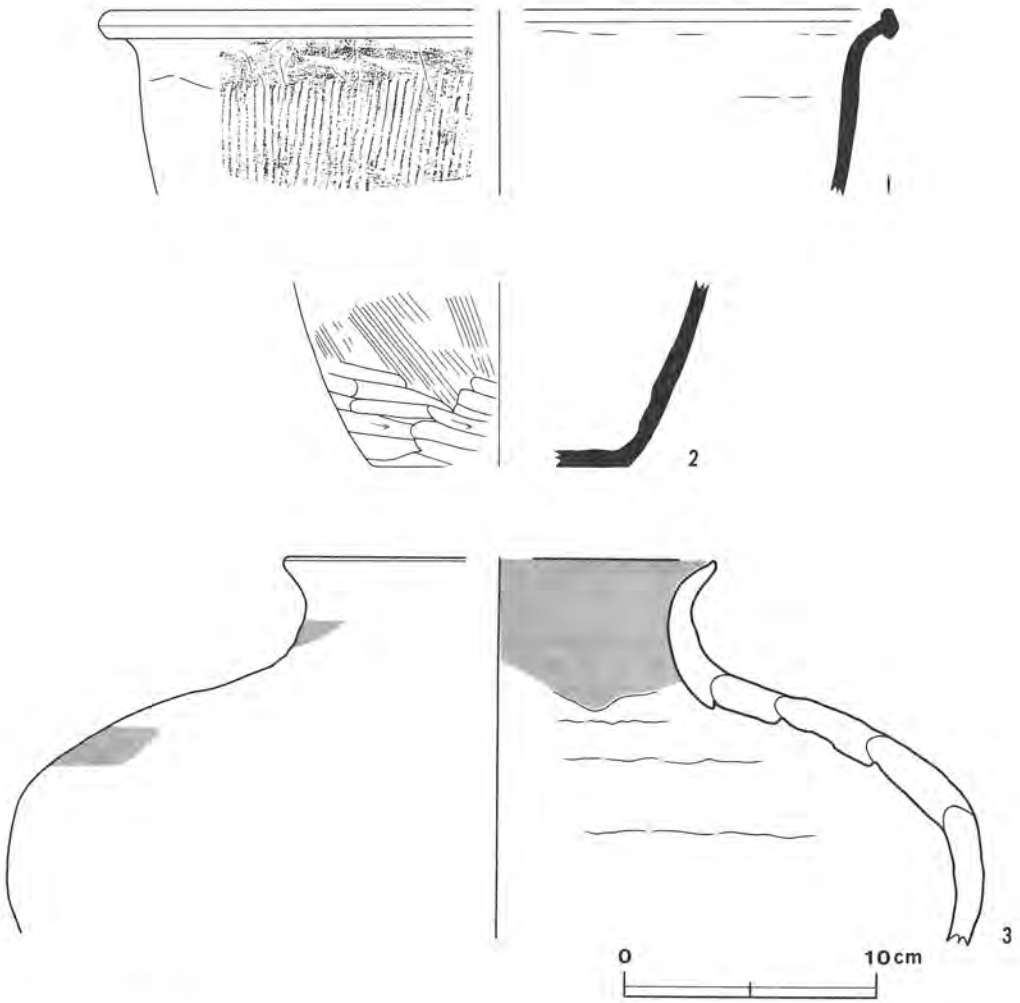




第154図　第83・84号住居跡実測図

出土遺物観察表（第165図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	鉢 須恵器	A (31.0) B (7.4)	胴部はやや外傾して立ち上がり，口縁部は短く外反する。	胴部外面は平行叩き目，内面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内外面に輪積痕が残る。	スコリア・雲母・長石・石英・礫 にぶい赤褐色 普通	10%
2	鉢 須恵器	B 7.3 C (10.2)	底部は平底で，胴部はかるく内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	胴部中位は平行叩き目，下位は斜位のヘラ削り，器内面はナデ調整。	長石・石英 青灰色 良好	15%
3	甕 陶器	A (16.8) B (15.1) E (38.7)	胴部は強く内湾しながら口縁部に向けて内傾し，口縁部は外反する。口縁端部は薄く，尖る。	器外面と口縁部内面に自然釉が流れる。胴部内面には，輪積痕が明瞭に残っている。	長石・石英 淡黄色 普通	35%

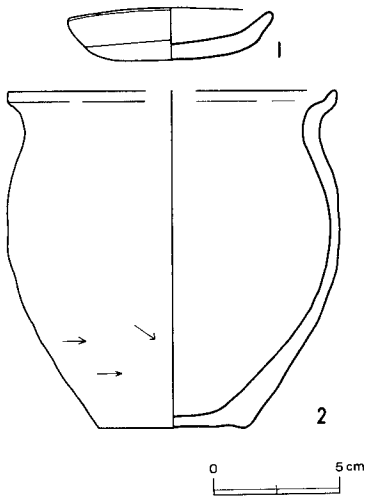


第165図　第83号住居跡出土遺物実測図

第84号住居跡（第164図）

本跡は，G９b_6区を中心に確認された住居跡で，東側は第83号住居跡と重複している。土層断面から判断して，本跡の方が古いものと考えられる。

平面形は方形を呈すものと思われるが，東壁が確認できないため断定はできない。規模は，残存壁から推定すると，長軸4.08m，短軸3.89mで，主軸方向は，N—15°—Wである。壁は垂直に立ち上がっているが，東壁は第83号住居跡の構築により消失しており不明である。壁高は，25～39cmである。床は平坦で，第83号住居跡の床と同一レベルであり段差はみられない。壁溝は，カマドの西側から南壁中央部まで連続して確認されており，上幅30cm，下幅15cm，深さ５cmである。ピットは，床及び壁溝中から６か所検出されている。いずれも小規模なもので，規則的な配置はみられない。カマドは，北壁中央部に構築されている。袖部は残っておらず，床を15cm掘り下げた火床部と，外側に60cm張り出した煙道が確認できただけである。



第166図　第84号住居跡出土遺物実測図

覆土は，３～５層に分けられるが，大部分が重複しているため明確でない。

遺物は，須恵器の鉢２点がカマド東側の床面から，土師質の皿（１）が覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片144点が出土している。

出土遺物観察表（第166図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	皿 土師質	A 8.0 B 2.1	底部は扁平な丸底で，体部は短く外傾して立ち上がる。	器内・外面は横ナデ調整。底部に輪積痕が残る。	砂粒 橙色 良好	90%
2	甕 土師器	A (13.1) B 13.4 C 5.9 E 13.2	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに立ち上がり，上位で胴部最大径に達し，内傾する。口縁部は短く外上方に立ち上がる。	全体に荒れが目立つ。胴部外面はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通（２次）	80%

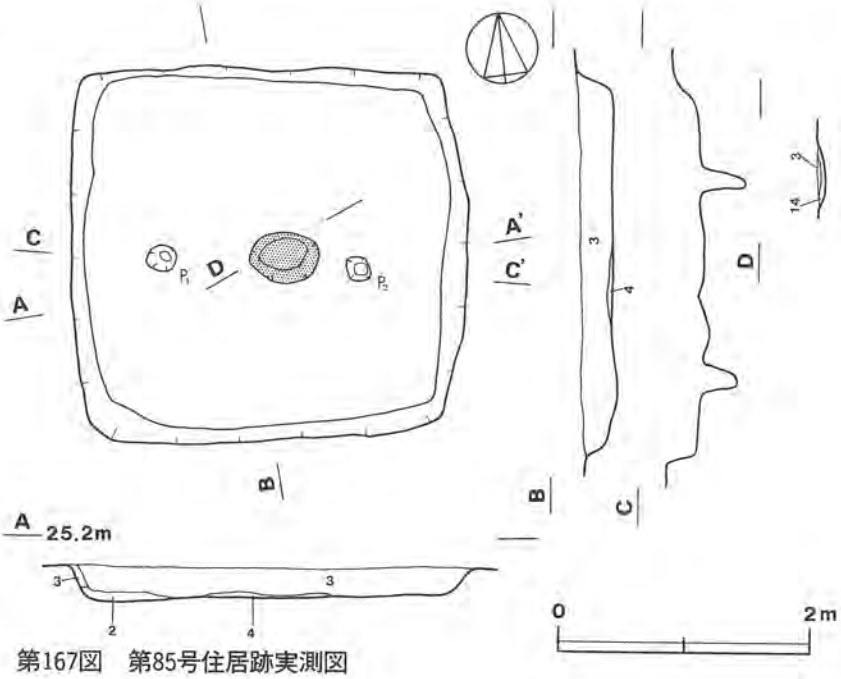
第85号住居跡（第167図）

本跡は，当調査区の中央部G9a_5区に確認された住居跡である。

平面形は方形で，規模は長軸3.12m，短軸2.91mで，主軸方向は，N－85°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは25cmである。床は硬く締まっているが，やや凹凸がみられる。ピットは，東西に並んで1.5m間隔で2か所検出されており，双方とも細く，径21・23cm，深さ32・37cmである。当遺跡で確認されたこの類の住居跡では，ピット間に炭化物の層が認められている。しかし，本跡ではそれがなかったため，硬い床面を少し掘り下げてみたところ，床面の下に深さ10cmの皿状の凹みがあり，内部に炭化物が堆積していることが認められた。つまり，炭化物の上にロームを1cm前後の厚さで貼り，床として利用していたわけである。これは，大変興味ある事実である。本跡の場合，住居跡として使用を開始した後，内部で物を焼やすことはなく，むしろ構築時，あるいは使用開始直前に1～2度使用しただけと推定できる。

覆土は1層のみで，ハードロームブロック多量，焼土粒子及び炭化物少量を含む暗褐色土である。

遺物は非常に少なく，土師器・須恵器片11点が覆土から出土しただけである。



第167図　第85号住居跡実測図

第86号住居跡（第168図）

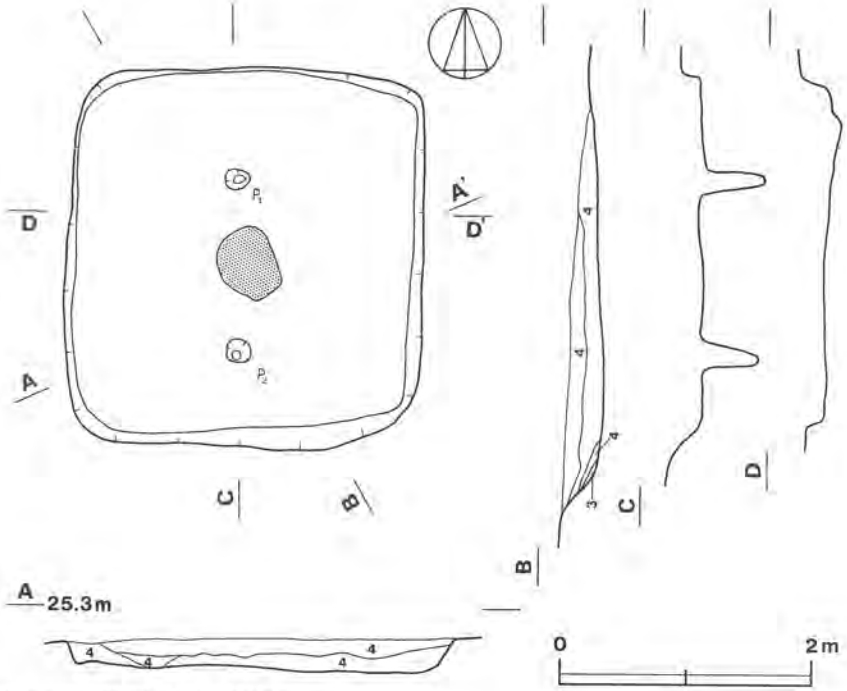
本跡は，当調査区の中央部F9i5区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形で，規模は長軸2.79m，短軸2.81mで，主軸方向は，N－0°である。壁はロームであるが，撹乱が多く明確でない部分もある。そのため，北壁と西壁は垂直に立ち上がるが，東壁と南壁は外傾している。壁高は，21cmである。床は非常に硬く締まっており，全体として東に

傾斜している。ピットは，南北に並んで2か所検出されている。ピットの径は18・20cm，深さは48・54cmである。ピット間には，炭化物の層が認められたが，床面は掘り込みもなく平坦である。

覆土は，2層に分けられる。1・2層とも黒褐色土で，ハードロームブロック・ローム粒子を中量含んでいる。1層はやや明かるい色調を呈し，2層は1層よりも暗い。

遺物は，土師器・須恵器片118点が覆土から出土している。



第168図　第86号住居跡実測図

第87号住居跡（第169図）

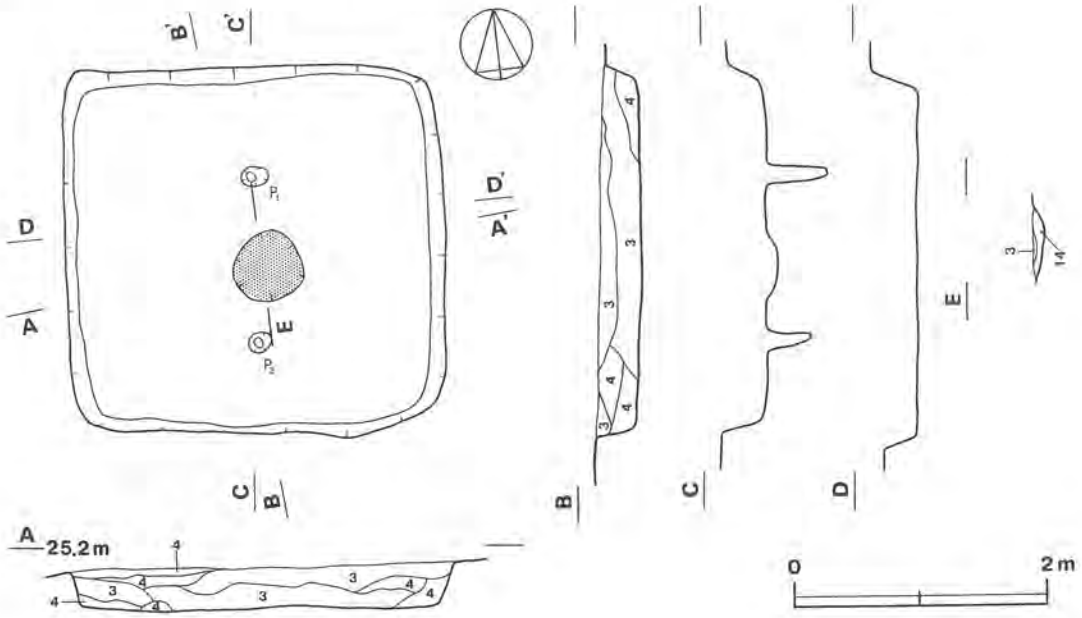
本跡は，F9j4区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.00m，短軸2.91mで，主軸方向は，N－5°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは32cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，南北に並んで2か所検出されている。2か所のピットは径20cmと細く，深さはP_1が54cm，P_2が39cmである。ピット間には炭化物の層が認められたが，他の同類の遺構と異なる点は，床を皿状に7cm掘り下げて「炉」に似た形状を示していた点にある。前述の第86号住居跡，あるいは後述する第88号住居跡等で認められた炭化物は床面上に堆積しているものであるが，本跡の場合は炉のように床を掘り下げてあり，その窪みに炭化物が堆積していた。形状的には炉によく似ているが，底面には焼けた様子も見られず，焼土ブロック等もごく少量しか残っていない。また前述のように，内部には炭化物しか堆積しておらず，通常の炉としての利用は考えられない。しかし，第85号住居跡

のように，炭化物の上にロームを貼った痕跡は，本跡においてはみられない。このように，炭化物の層の検出状況も一定でないことがわかるが，各遺構に共通していることは，火の利用が１回，あるいは多くても数回の利用で終わっている点にある。このことが何を意味しているのか，現時点ではわかっていない。しかし，住居跡そのものの性格を考える上でも興味のある点であり，類例の増加を待って検討することが必要であろう。

覆土は２層に分けられ，１層はハードロームブロックを中量含む暗褐色土，２層はハードロームブロックを多量含む暗褐色土である。

遺物は全て覆土からで，土師器・須恵器片56点，灰釉陶器片が出土している。



第169図　第87号住居跡実測図

第88号住居跡（第170図）

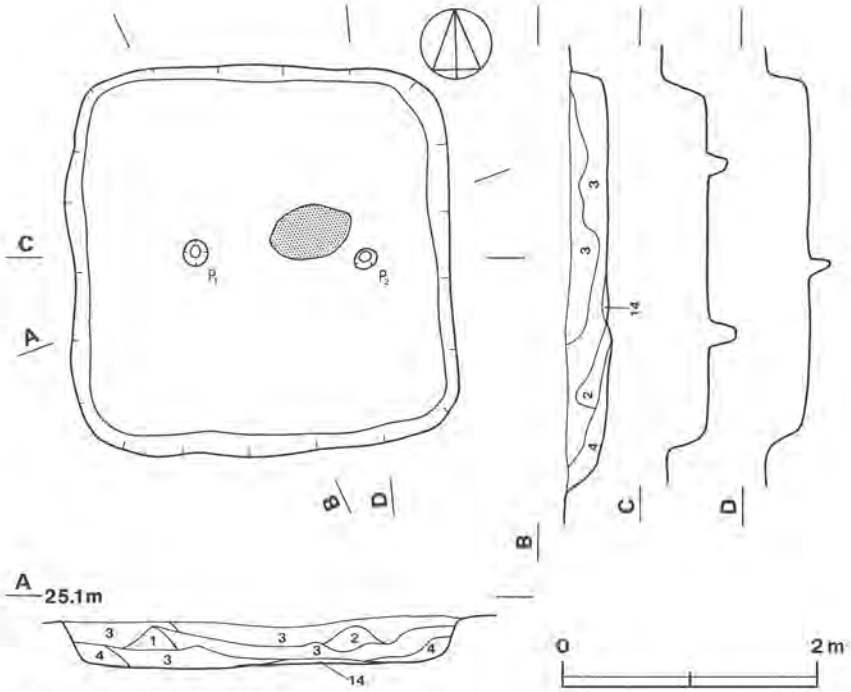
本跡は，G9a₂区を中心に確認された住居跡である。南西２mの地点に第87号住居跡が確認されている。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.14m，短軸3.03mで，主軸方向は，N－90°である。壁は良好な状態で検出され，西壁と南壁は外傾して立ち上がり，北壁と東壁は垂直に立ち上がっている。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，東西に並んで２か所検出されている。いずれも細いもので，径20cm，深さ20・23cmである。ピット間には，炭化物の層が認められる。炭化物は植物質のもので，硬い床面上に１～２cmの厚さで堆積している。

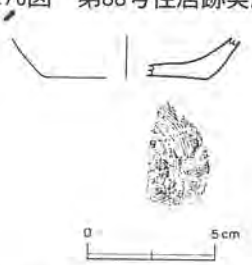
覆土は２層で，いずれも締まりがなく，軟らかい土である。１層はロームブロック・炭化物を

少量含む暗褐色土，２層はロームブロック・焼土粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は，土師器・須恵器片56点，土師質土器が覆土から出土している。



第170図　第88号住居跡実測図



第171図　第88号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第171図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	皿 土師質	B（1.7） C（6.5）	底部は平底で，体部は外傾する。	底部に糸切り痕が残る。 水挽き成形。	砂粒・雲母 橙色 普通	10%

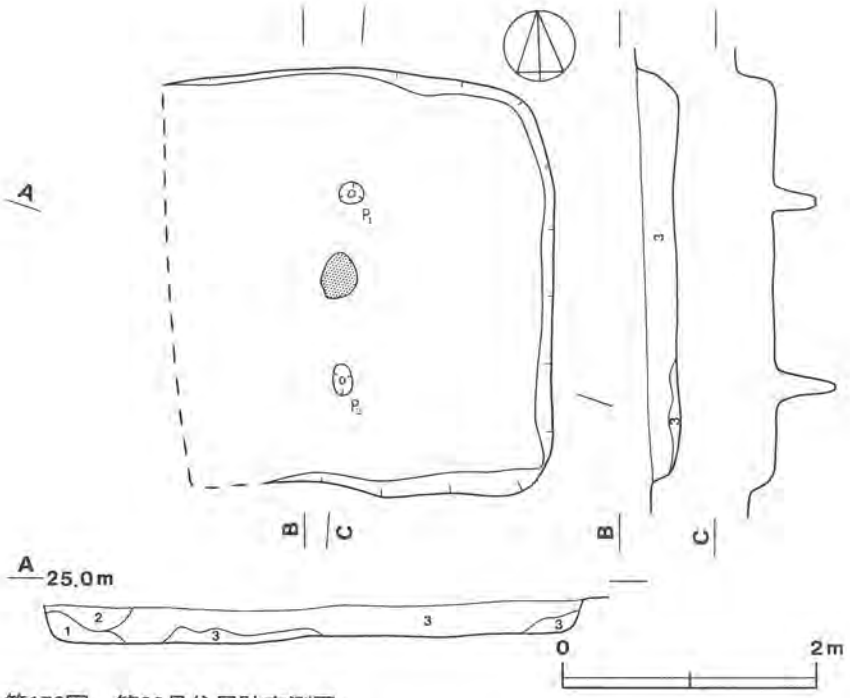
第89号住居跡（第172図）

本跡は，G9d₆区を中心に確認された住居跡で，第90号住居跡と重複している。床や土層断面の状況からは新旧関係は明確にならないが，形状から本跡の方が新しいと考えられる。

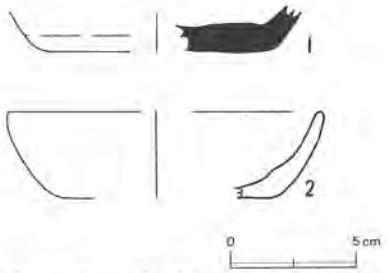
平面形は方形を呈していたものと推定されるが，西壁が消失しているため断定はできない。規模は，南北方向で3.35mである。主軸方向は，N－2°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは25cmである。床は平坦で，中央部は硬く締まっている。ピットは，南北に2か所並んで検出された。2か所とも細く，長径20・24cm，短径14・17cm，深さ36・44cmである。ピット間には，炭化物の層がうっすらと確認できた。

覆土は，ローム粒子や焼土粒子等を少量含む暗褐色土がほとんどであり，周辺部にロームブロックを中量含む暗褐色土がみられる。

遺物は，土師質の坏（2）須恵器の鉢（1）が覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片30点が出土している。



第172図　第89号住居跡実測図



第173図　第89号住居跡出土遺物実測図

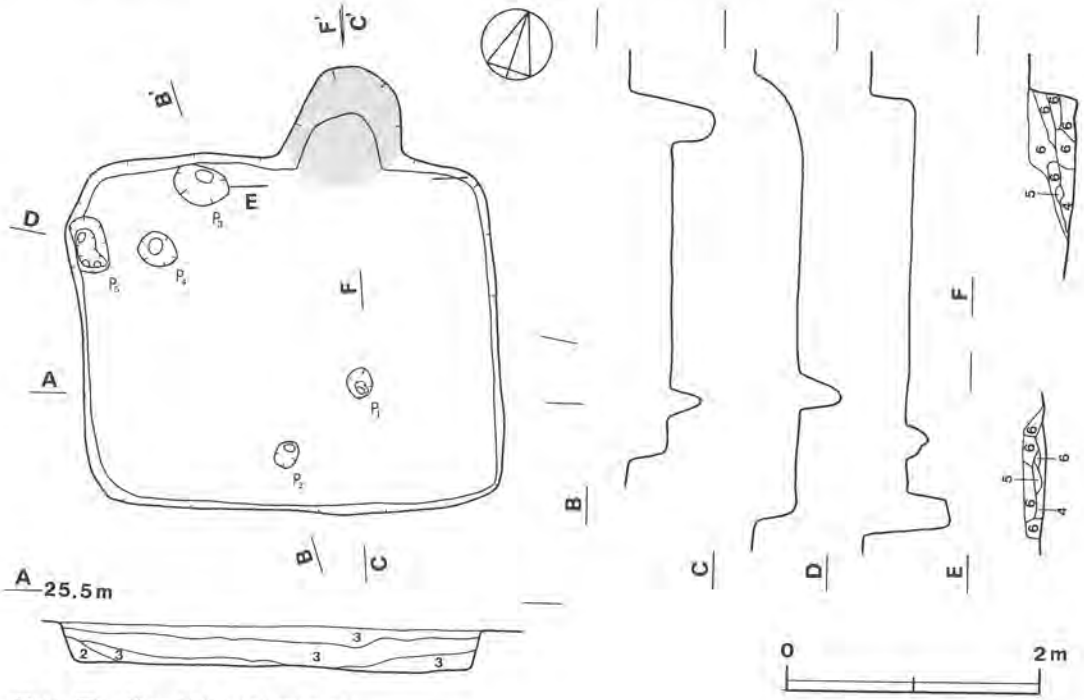
出土遺物観察表（第173図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	鉢 須恵器	B（1.5） C（8.8）	底部片。平底である。	底部はヘラ削り調整。	雲母・砂粒 灰白色 普通	15%
2	坏 土師質	A（12.4） B　3.5	底部は平底で，体部は器壁を減じながら外傾する。	器内・外面とも横ナデ調整。	砂粒 淡橙色 普通	15%

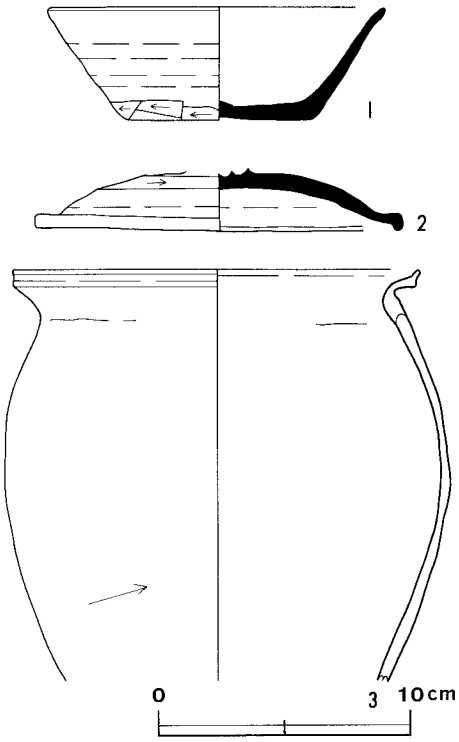
第91号住居跡（第174図）

本跡は，G9a$_7$区を中心に確認された住居跡である。

平面形は，東西に長い長方形を呈し，規模は長軸3.26m，短軸2.79mで，主軸方向は，N－22°－Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは34～37cmである。床は平坦で，南に向かってわずかに傾斜している。ピットは，不規則に5か所検出されている。いずれのピットも細いものが多く，柱穴と断定することはできない。P_1とP_2は長方形に掘られており，P_5は西壁に接して検出されている。カマドは，北壁東寄りに構築されている。袖部はすでに消失しており，火床部の掘り込みもなく床と同一レベルで煙道に続いている。煙道は，70cm外に張り出している。



第174図　第91号住居跡実測図



第175図　第91号住居跡出土遺物実測図

覆土は，大きく３層に分けられる。１層はローム粒子を中量含む極暗褐色土が堆積し，２・３層はローム粒子多量，焼土粒子少量を含む暗褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は，土師器の坏・甕（３），須恵器の蓋（２）がそれぞれ３層から出土している。他に，土師器・須恵器片136点が出土している。

出土遺物観察表（第175図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 13.3 B 4.5 C 7.2	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後ナデ，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	スコリア・パミス・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	100%
2	蓋 須恵器	A 14.4 B（2.6）	天井部は丸く，浅い。口縁部は屈曲し，端部は短く垂下する。	天井部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・礫 褐灰色 良好	75%
3	甕 土師器	A 16.1 B（16.3） E（17.7）	胴部は内湾して立ち上がり，中位に胴部最大径を有し，強く外反する口縁部に至る。口縁端部は外上方につまみ出されている。	胴部内面はナデ，外面はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・スコリア・長石・石英 にぶい赤褐色 普通（２次）	40%

第92号住居跡（第177図）

本跡は，F9h_6区に確認された住居跡で，北西コーナー部で第105号住居跡と重複し，本跡が第105号住居跡の床を切って構築されている。

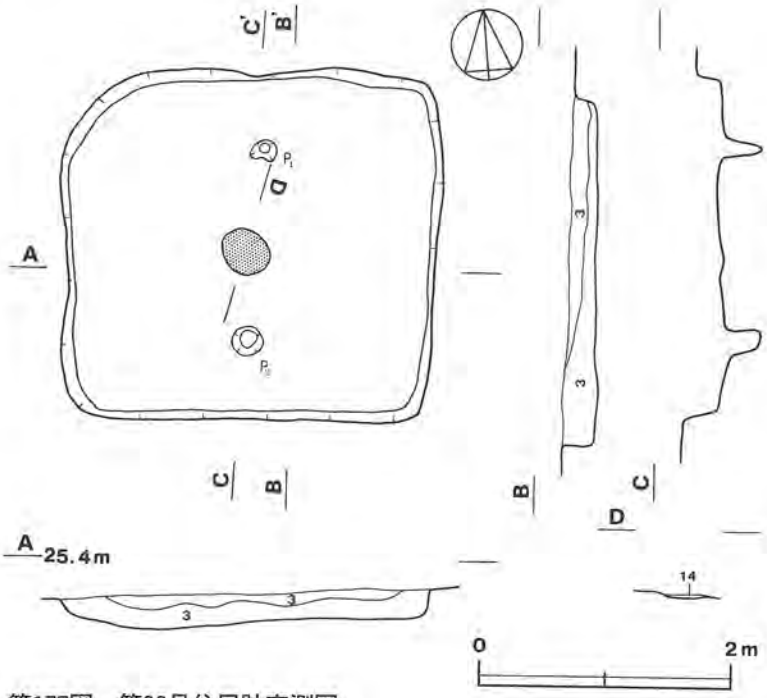
平面形は方形で，規模は長軸2.94m，短軸2.79mで，主軸方向は，N—9.5°—Eである。壁は垂直に立ち上がっているが，北西コーナー部は消失している。壁高は，20～29cmである。床はやや

凹凸があるものの，全体としては平坦である。ピットは，南北に並んで2か所検出されている。2か所とも同規模で，径は22・23cm，深さ34・38cmである。ピット間には炭化物の層が認められた。炭化物は植物質のものと推定でき，床を3cm掘り凹めた部分に堆積している。

覆土は2層から成り，ともに，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を少量含んでいる。1層は暗褐色土，2層は極暗褐色土である。

遺物は，古銭（大観通宝・1107年）が2層から出土している。他に，土師器・須恵器片45点が出土している。

第176図　第92号住居跡出土遺物拓影図



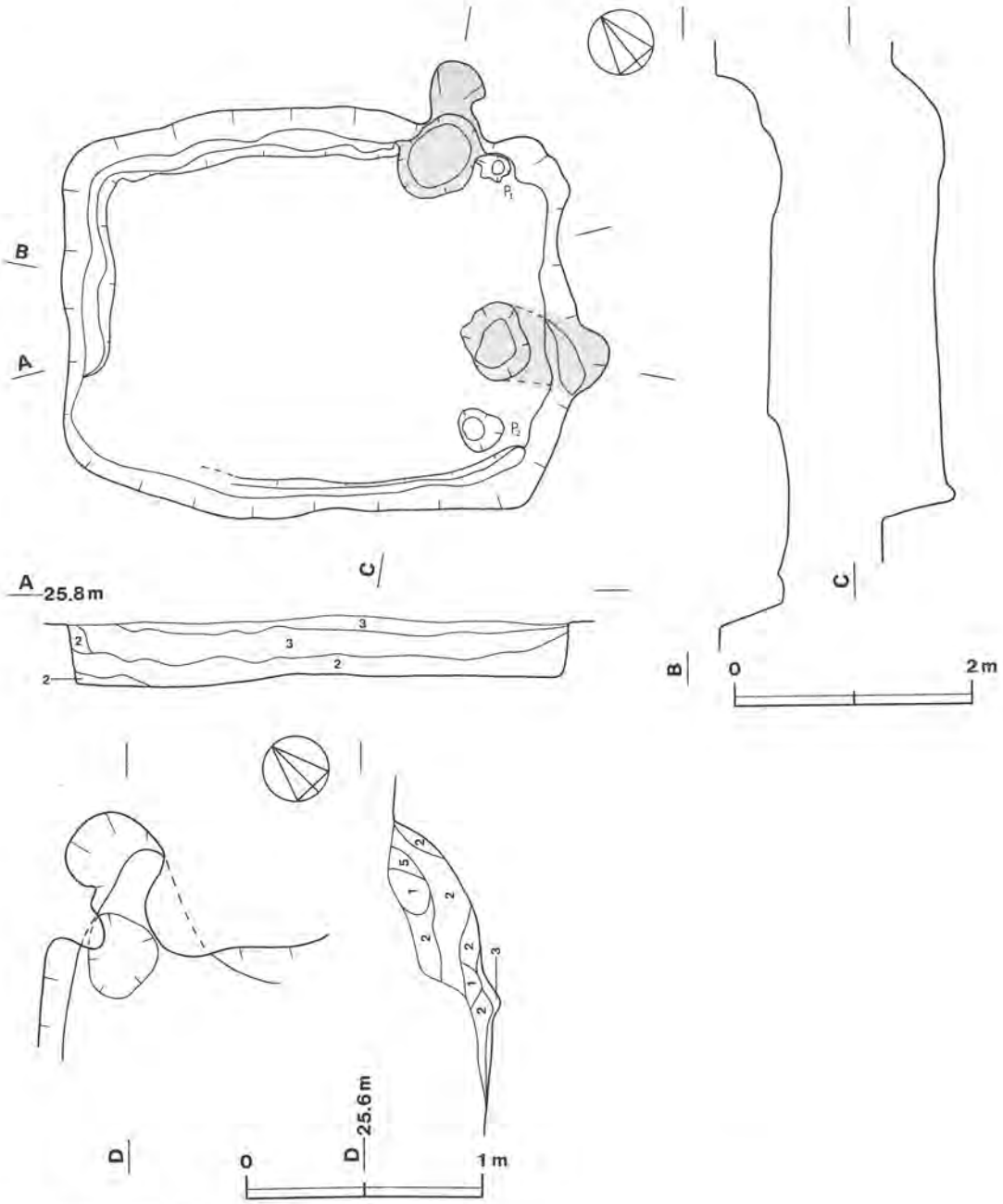
第177図　第92号住居跡実測図

第95号住居跡（第178図）

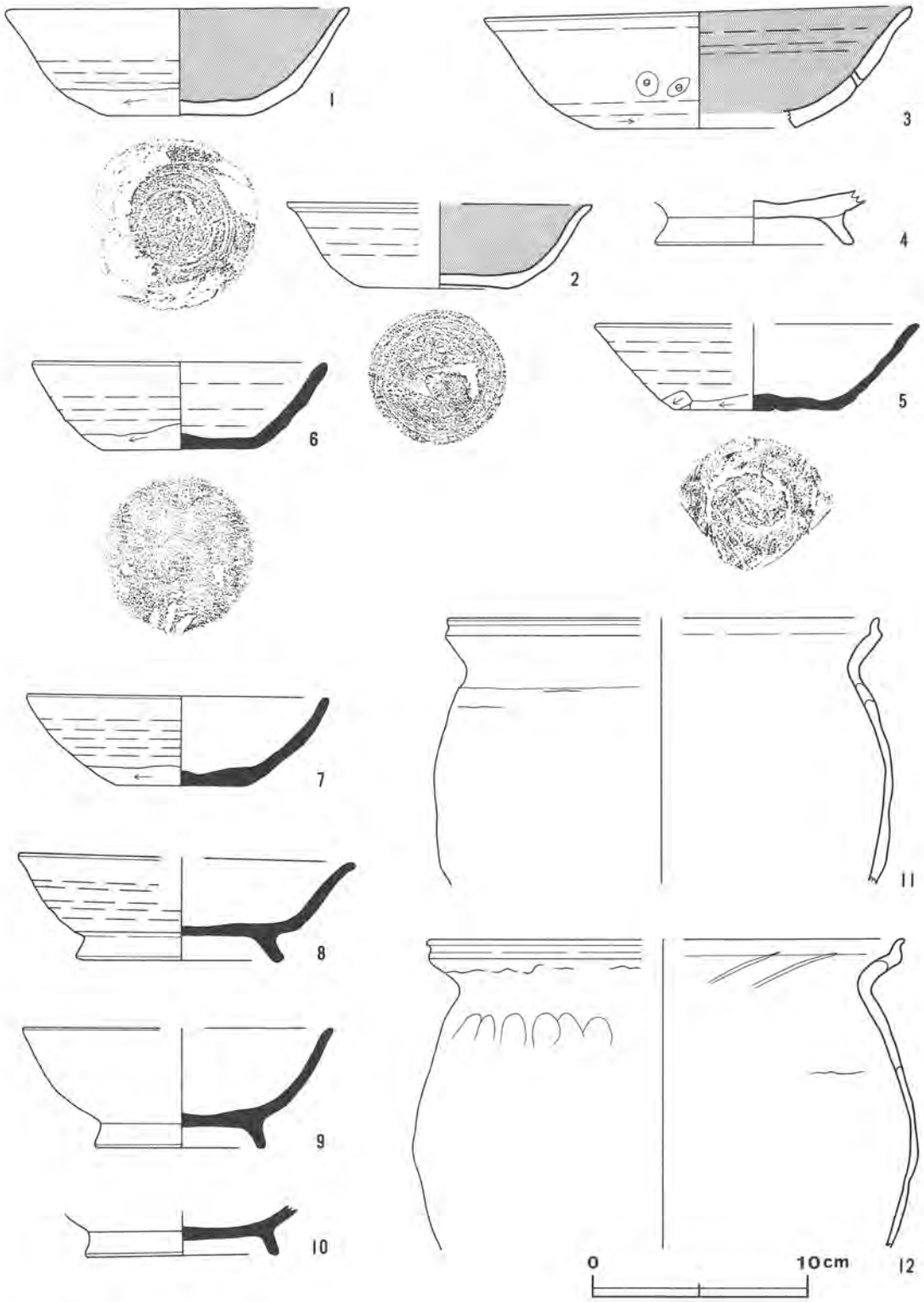
本跡は，E10i₃区を中心に確認された住居跡である。特徴的なことは，カマドの痕跡が北壁と東壁の2か所で検出された点である。

平面形は東西に長い隅丸長方形を呈し，規模は長軸4.37m，短軸3.47mで，主軸方向は，N—28°—Eである。北壁と南壁は弧状に外側に張り出す特異な形状である。各壁とも垂直に立ち上がり，

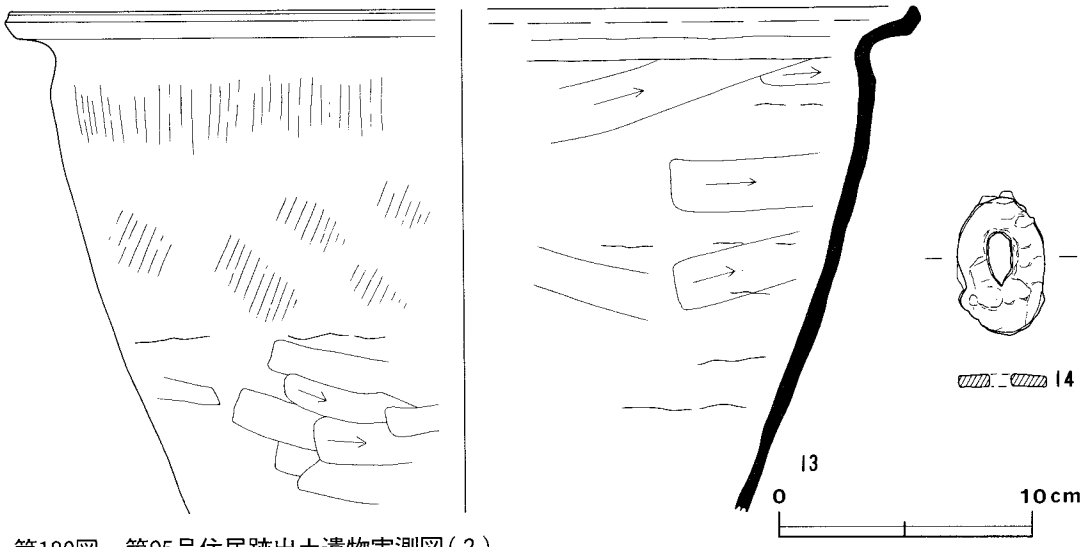
高さは44cmである。床は平坦で，中央部が硬く締まり，壁近くは軟らかい。西側の床は後世の撹乱を受けており，本来の床面が消失している部分がある。なお，北壁から西壁にかけての部分と，南壁の部分に壁溝が検出されている。上幅は10～20cm，下幅７～15cm，深さは７cmである。ピットは２か所検出された。２か所のカマドの東及び南側にそれぞれ検出されたもので，カマドに伴



第178図　第95号住居跡実測図



第179図　第95号住居跡出土遺物実測図（1）



第180図　第95号住居跡出土遺物実測図（２）

うピットなのか，あるいは柱穴になるものなのか不明である。カマドは２基検出されている。北壁に構築されているカマドは，袖部の粘土がわずかに残存している。火床部の掘り込みは，長径77cm，短径60cmの楕円形で，深さは３cmである。東壁の南側に構築されているカマドは痕跡のみで，火床部の掘り込みは長径65cm，短径50cmの楕円形で，深さは２cmである。カマドとしては，北壁のカマドの方がより長く使用されたものと考えられる。２か所のカマドの新旧関係については，不明である。

覆土は，３層に分けられる。１層は焼土粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土，２層はローム粒子・ロームブロックを少量含む暗褐色土である。３層は焼土粒子・炭化粒子を少量含む褐色土である。

遺物は，東壁のカマド西側の床面から須恵器の坏（５，６）２点，カマド内から土師器の甕(11)，須恵器の鉢（13），が北壁のカマド内から須恵器の埦（９，10）２点がそれぞれ出土している。他に，土師器の坏や鉄製鍔，土師器・須恵器片336点が出土している。

出土遺物観察表（第179・180図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	坏 土師器	A 15.8 B 5.1 C（6.8）	底部は平底で，体部下端に削りによる稜を有する。体部は内湾ぎみに外上方にのびる。	底部は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石 にぶい黄橙色 普通（２次）	80% 内面黒色処理
2	坏 土師器	A (14.0) B 4.0 C 6.4	底部は中央部がやや凹んだ平底で，体部は内湾ぎみに外上方にのび，端部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り，体部内面はヘラ磨き，体部下端は回転ヘラ削り調整。	スコリア・長石 にぶい黄橙色 普通（２次）	50% 内面黒色処理

3	坏 土師器	A 19.8 B 5.5 C 9.4	底部には削り出し高台があったと思われる。体部は内湾ぎみに外上方にのび，口縁端部でやや外反する。体部中位に一対の補修孔がある。	体部下端は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。 水挽き成形。	雲母・長石 橙色 普通	80% 内面黒色処理
4	高台付坏 土師器	B（2.1） D 9.1	底部片で，「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部は回転ヘラ切り後，ヘラ削り，高台内・外面は横ナデ調整。水挽き成形。	長石・石英・雲母 褐灰色 普通	20%
5	坏 須恵器	A（14.9） B 4.0 C（7.5）	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。底部の器壁は，中央部が厚い。	底部は回転ヘラ切り後，雑なヘラ削り，体部下端は横及び斜位のヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通（2次）	40%
6	坏 須恵器	A 13.5 B 4.2 C 7.2	底部は平底で，体部はわずかに内湾しながら外上方にのびる。	底部は全面が一定方向のヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・砂粒 灰白色 普通	95%
7	坏 須恵器	A 14.1 B 4.2 C 6.0	底部は平底で，体部はわずかに内湾して立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部下端は横方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母・スコリア・礫 明褐灰色 普通	75%
8	高台付坏 須恵器	A（15.3） B 5.0 D 9.5	底部は平底で，高台が付く。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内湾ぎみに開き，口縁部で軽く外反する。	底部は回転ヘラ切り後，高台を貼り付けている。高台内・外面は横ナデ調整。内面は荒れている。水挽き成形。	雲母・長石・スコリア 灰白色 普通	70%
9	高台付埦 須恵器	A（14.5） B 5.6 D 8.0	底部は平底で，高台が付く。高台は「ハ」の字状に開く。体部は内湾しながら，外上方に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り，高台貼り付け後ナデ調整。水挽き成形と思われるが，磨滅がひどく明瞭ではない。	長石・石英・雲母・礫 灰白色 普通	50%
10	高台付埦 須恵器	B（2.1） D 9.0	底部片である。底部は平底で，高台が付く。高台は「ハ」の字状に開く。	底部は回転ヘラ切り，高台貼り付け後ナデ調整。 水挽き成形。	砂粒 浅い黄色 普通	20%
11	甕 土師器	A（20.0） B 12.4	胴部はゆるく内湾しながら立ち上がり，「く」の字状に屈曲する口頸部に至る。口縁端部は上方につまみ出されている。底部は欠損。	荒れがひどいが，器内・外面ともナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石・石英 赤色 良好（2次）	20%
12	甕 土師器	A（22.0） B 14.4	胴部は内湾して立ち上がり，「く」の字状の口頸部に至る。口縁端部は外上方につまみ出されている。器壁は非常に薄い。	口縁部内・外面は横ナデ調整。器内・外面は荒れていて，調整痕不明。胴部上位に，指頭痕が横に並ぶ。	長石・石英 にぶい橙色 普通（2次）	20%
13	鉢 須恵器	A（35.6） B 20.0	胴部は直線的に立ち上がり，上位でわずかに内湾し頸部に続く。口縁部は短く，強く外反する。底部欠損。	胴部外面は上位が叩き目，中位が横方向のヘラ削り，内面は横・斜位のヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。胴部内・外面に右上がりの輪積痕が明瞭に残る。	雲母・スコリア・長石 にぶい橙色 普通	40%

14	鐙 鉄製品	長径 5.7 短径 3.4 厚さ 0.5 重さ 37.0g	倒卵形を呈し，完形である。表面に文様等はなく，無文である。			100%

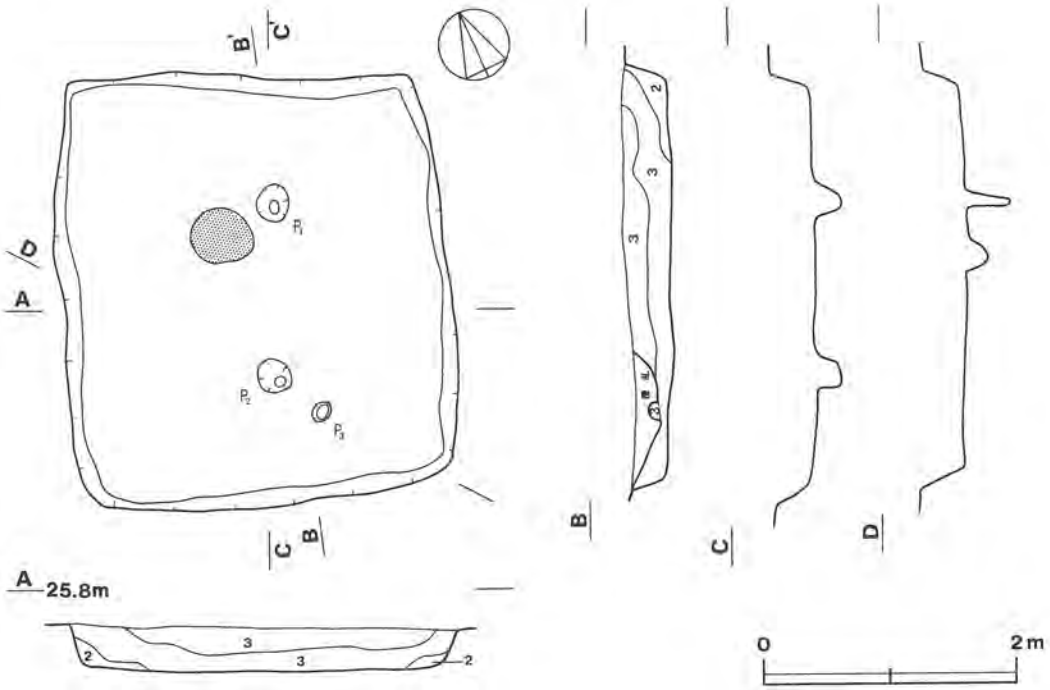
第97号住居跡（第181図）

本跡は，当調査区の北部E10d₁区を中心に確認された住居跡である。

平面形は南北に長い長方形で，規模は長軸3.48m，短軸3.08mで，主軸方向は，N－22°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは35cmである。床は硬く締まり，平坦である。ピットは，3か所検出されている。P_1・P_2は南北に並んで検出され，径は30cm前後，深さは20・25cmである。P_2の南東40cmの位置にP_3があり，径17cm，深さ39cmである。この種の住居跡の大部分にみられる炭化物の層はピット間ではなく，P_1の西側に確認された。

覆土は暗褐色土が2層に堆積し，それぞれにロームブロックを中量含んでいる。

遺物は，土師器片1点のみで，床面中央部から出土している。



第181図　第97号住居跡実測図

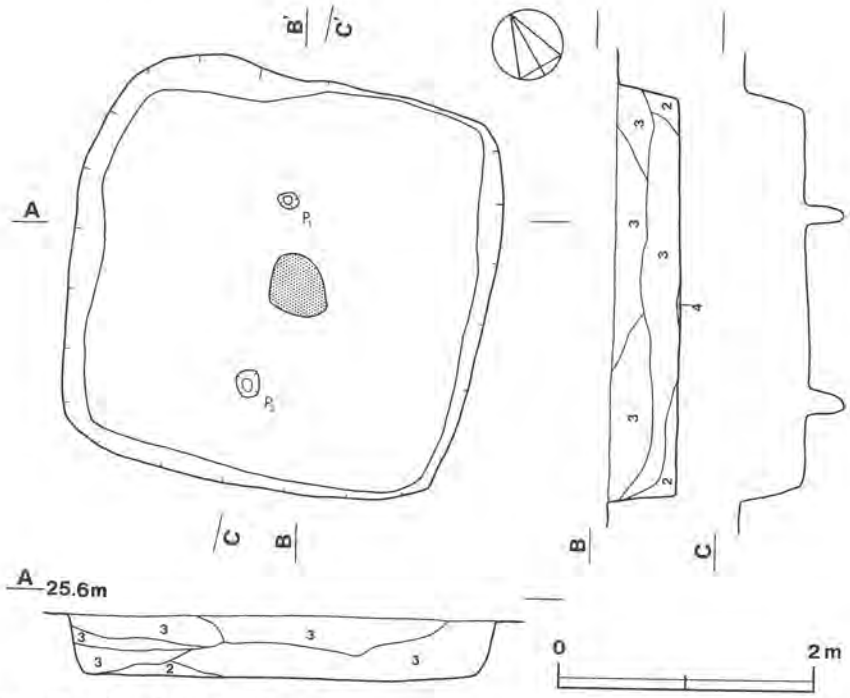
第98号住居跡（第182図）

本跡は，E9d₉を中心に確認された住居跡で，北西部は第８号溝と接している。

平面形は方形を呈し，規模は，長軸3.35m，短軸3.28mで，主軸方向はN－39°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは52cmである。床は極めて硬く締まっており，平坦である。ピットは，南北に並んで２か所検出されている。２か所のピットは，径・深さとも同規模で，径は20cm，深さは32cmである。ピット間には，炭化物の層が最大５mmの厚さで堆積しているのが認められた。

覆土は３層以上に分けられるが，どの層にもロームブロック，あるいはハードロームブロックを少量～多量含んでいる点が特徴で，いずれも暗褐色土である。

遺物は，覆土から土師器・須恵器片86点が出土している。

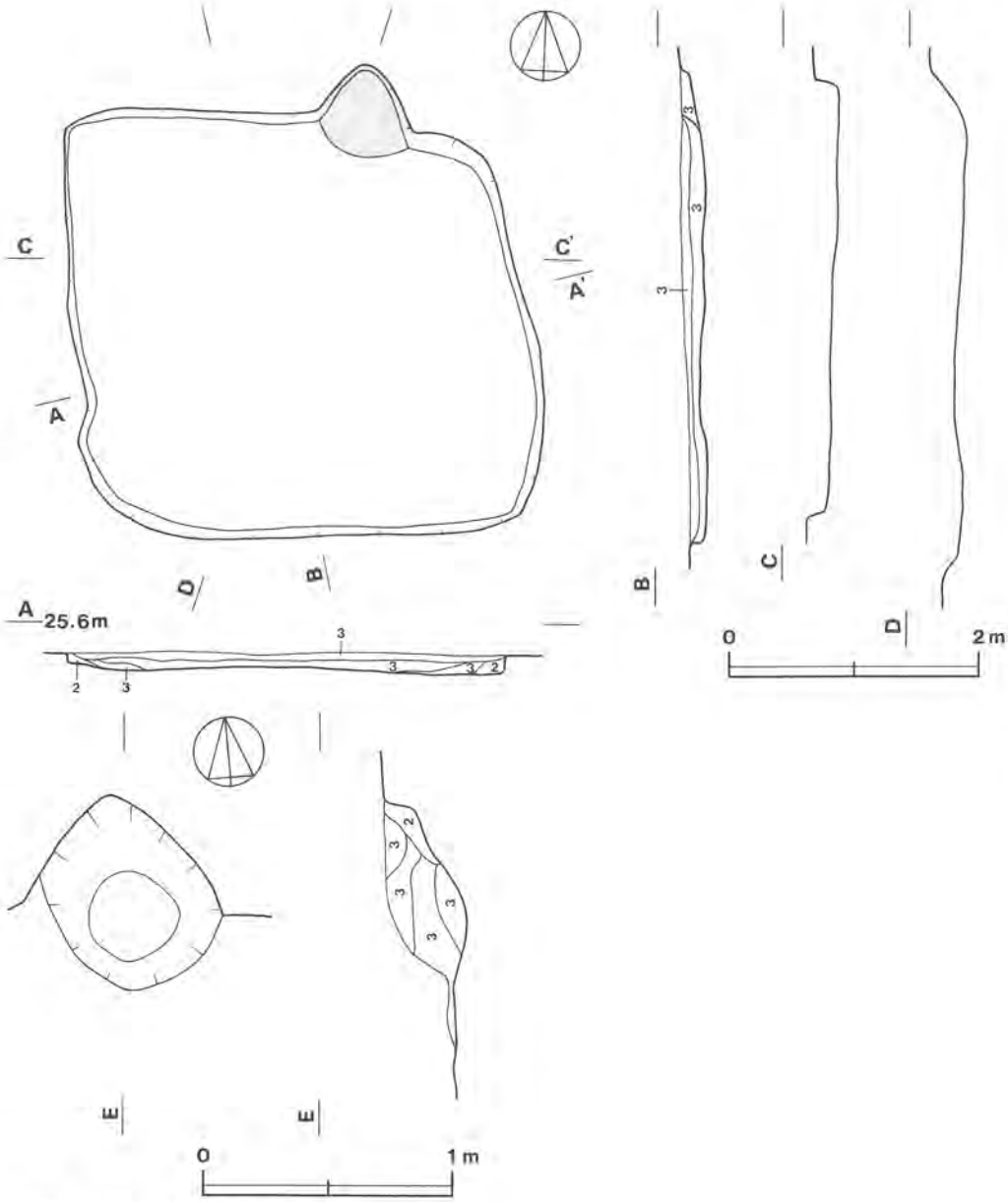


第182図　第98号住居跡実測図

第99号住居跡（第183図）

本跡は，F9g₉区を中心に確認された住居跡で，このあたりは山林であったため木根跡による撹乱が多い。

本跡の床面まで撹乱を受けている状況のため，平面形は不整方形を呈している。主軸方向は，N－5°－Wである。規模は東西が長く3.69m，南北は3.45mである。壁は垂直に立ち上がり，高

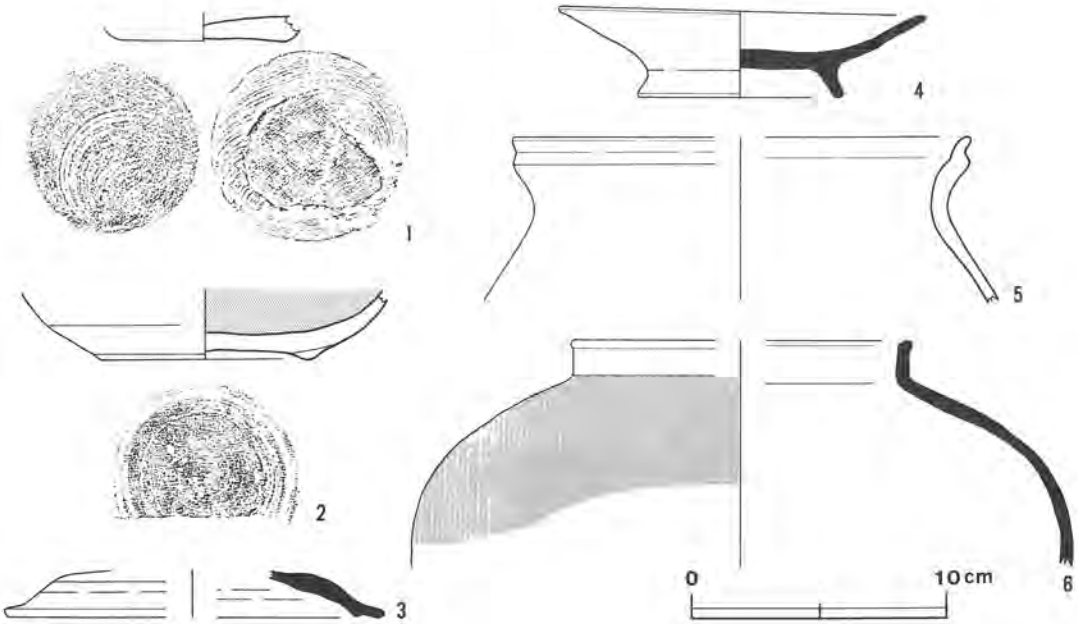


第183図　第99号住居跡実測図

さは22cmである。床は，攪乱のため南側２分の１ぐらいは残っておらず，北側の残存部は硬く締まっている。ピットや壁溝は検出されていない。カマドは北壁の東寄りに構築されていたが，ほとんど残っておらず，痕跡のみが確認できた。煙道の張り出しは40cmである。

覆土は２層で，１層はローム粒子を少量含む暗褐色土，２層は焼土粒子・ローム粒子を少量含む極暗褐色土である。

遺物はカマド周辺の床面を中心に出土しており，土師器の坏（１）・埦（２），須恵器の皿（４）が出土している。他に，土師器・須恵器片306点が出土している。



第184図　第99号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第184図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	B（1.0） C　6.6	平底の底部片である。	内面ヘラ磨き調整。内・外面に糸切り痕が残る。製作時に底部にする円板だけを次々に切り離した痕跡であろうか。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	20%
2	高台付埦 土師器	A（14.3） B（2.8） D　8.1	底部は平底である。体部は底部からあまい角度で立ち上がり，直線的にのびる。底部に高台が付く。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラナデ，体部内面はヘラ磨き調整。高台は断面逆三角形を呈し，貼り付け。	石英・雲母・長石 にぶい橙色 普通	55% 内面黒色処理

3	蓋 須恵器	A (14.9) B (1.8)	天井部は浅く，外周部で外反する。口縁部は外反し，内側にかえりを有する。	天井部は回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	雲母・砂粒 灰黄色 普通	10%
4	高台付皿 須恵器	A 14.4 B 3.6 D 7.8	底部は平底で，なだらかに体部につながる。体部は器厚を減じながら，直線的に外傾する。高台は「ハ」の字状に開く。	底部は回転ヘラ切り，高台は貼り付け，器内・外面は横ナデ調整。水挽き痕は弱い。	雲母・石英・長石 にぶい黄橙色 普通	80%
5	甕 土師器	A (17.7) B (6.5)	口頸部片で，「く」の字状に屈曲する。	口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・長石・石英・礫 にぶい黄橙色 普通	10%
6	壺 須恵質陶器	A (13.4) B (9.0) E (26.0)	球形の胴部が内傾しながら口縁部にのび，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面は横ナデ，胴部内面はナデ調整。口縁部から胴部にかけて，灰釉がかかる。	長石・礫 黄灰色 良好	20%

第100号住居跡（第185図）

本跡は，当調査区の北端D9i_0区を中心に確認された住居跡である。

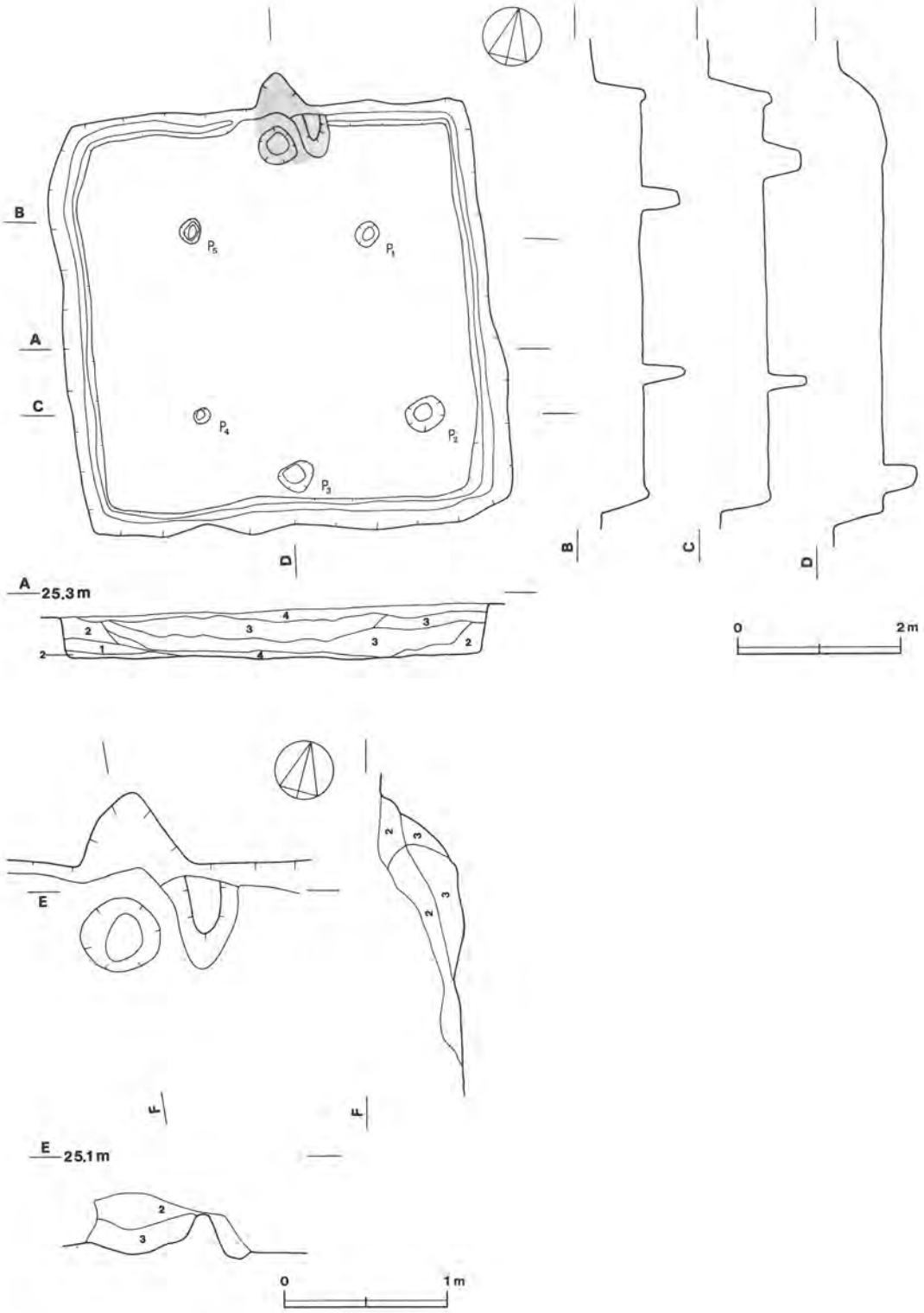
平面形は整った方形を呈し，規模は長軸5.30m，短軸5.12mで，主軸方向は，N−13°−Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは63cmである。壁溝は全周しており，上幅15cm，下幅８cm，深さ５cmである。床は平坦で，ピットの内側は硬く締まっている。ピットは，５か所検出されている。それぞれの長径は20～45cm，短径は18～38cm，深さは44～54cmで，P_1，P_2，P_4，P_5がその位置から判断して主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に構築されており，東側の袖部が残っていた。火床部は，径45cm，深さ５cmのピット状に掘られている。煙道の張り出しは少なく，40cmである。

覆土は，大きく４層に分けられる。１層はロームブロックを少量含む黒褐色土，２層はロームブロックを中量含む暗褐色土，３層はロームブロック及びハードロームブロックを少量含む暗褐色土，４層はロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子を少量含む黒褐色土である。

遺物は，須恵器の坏（２）がカマド東側の床面から，須恵器の高坏（３）がカマド内からそれぞれ出土し，須恵器の坏（１）は３層から出土している。３層からは，平瓦の破片も２点出土している。瓦が出土したのは，当遺跡では本跡だけである。他に，土師器・須恵器片161点が出土している。

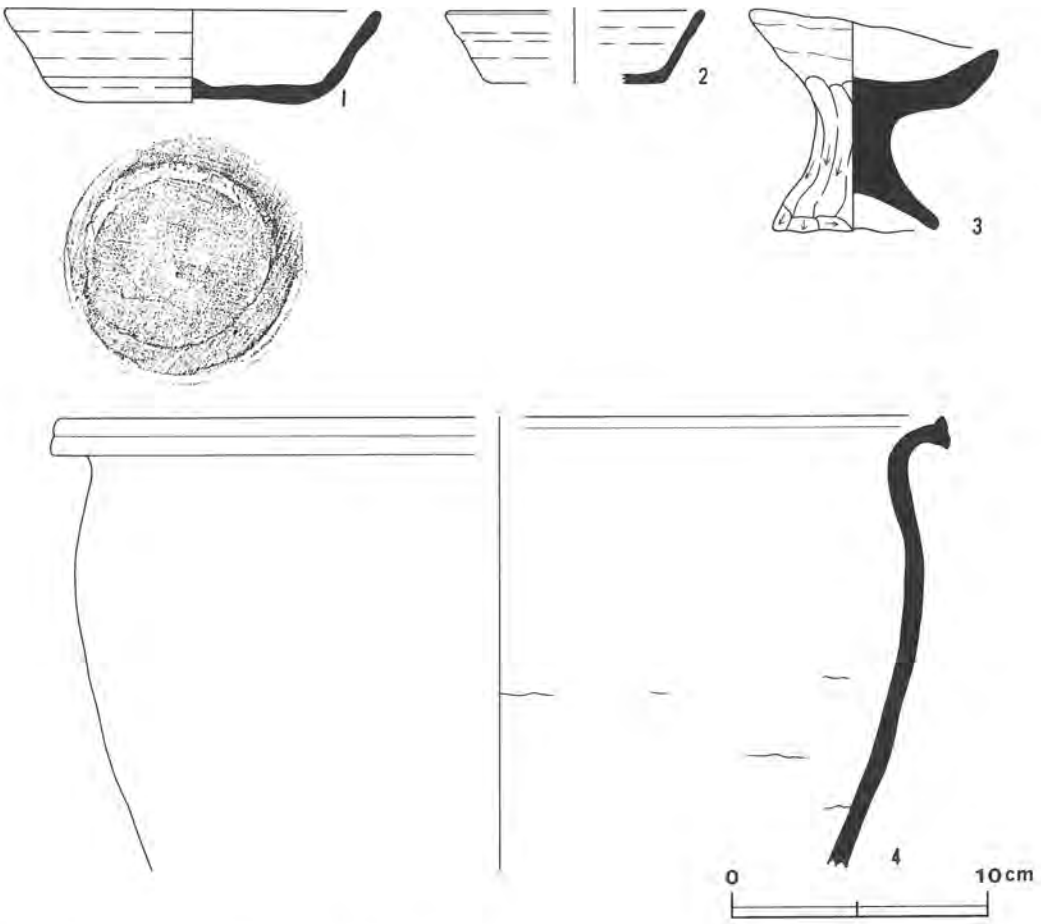
出土遺物観察表（第186図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 14.9 B 3.7 C 8.5	底部は平底で，中央部がやや凹む。体部は外傾して外上方に立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後，ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母 暗灰黄色 普通	100%

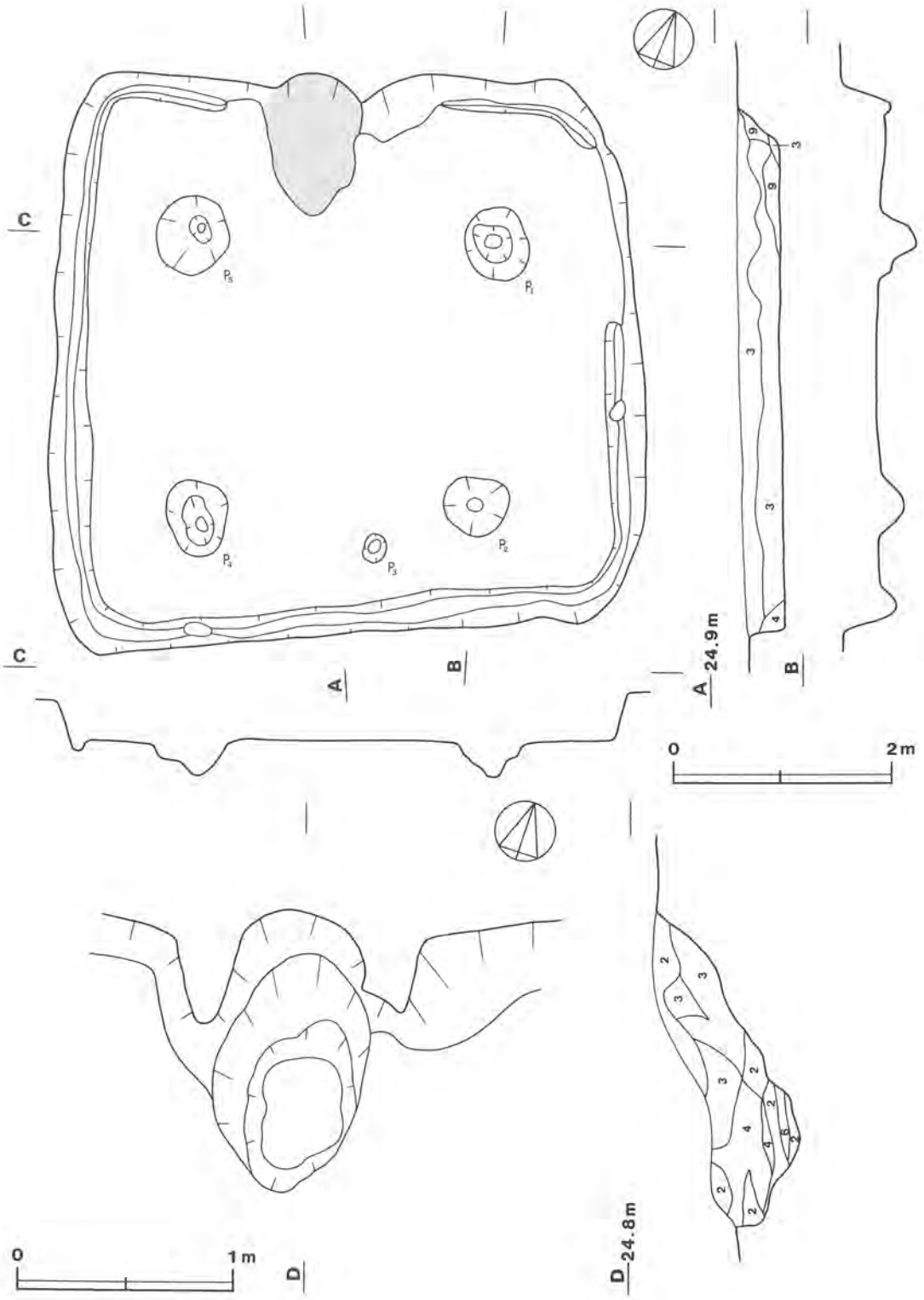


第185図　第100号住居跡実測図

2	坏 須恵器	A (10.2) B 2.9 C (6.9)	底部は平底で，体部は直線的に外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・砂粒 灰色 普通	10%
3	高坏 須恵器	A 9.8 B 8.8 C 6.4	ゆがみがひどく，作りも雑である。坏部は半球形を呈する。脚部は外下方に開く。	坏部内面はヘラ削り，外面はナデ，脚部は縦方向のヘラ削り調整。	石英・長石・礫 灰色 良好	100%
4	甕 須恵器	A (34.8) B (18.0)	胴部は内湾ぎみに立ち上がり，口頸部は大きく外反する。口縁端部は，上下につまみ出され，断面は「いちょう葉」状を呈する。	器内・外面は横方向のヘラナデ調整。胴部内面に輪積痕が残る。	長石・石英・礫 灰色 普通	30%



第186図　第100号住居跡出土遺物実測図

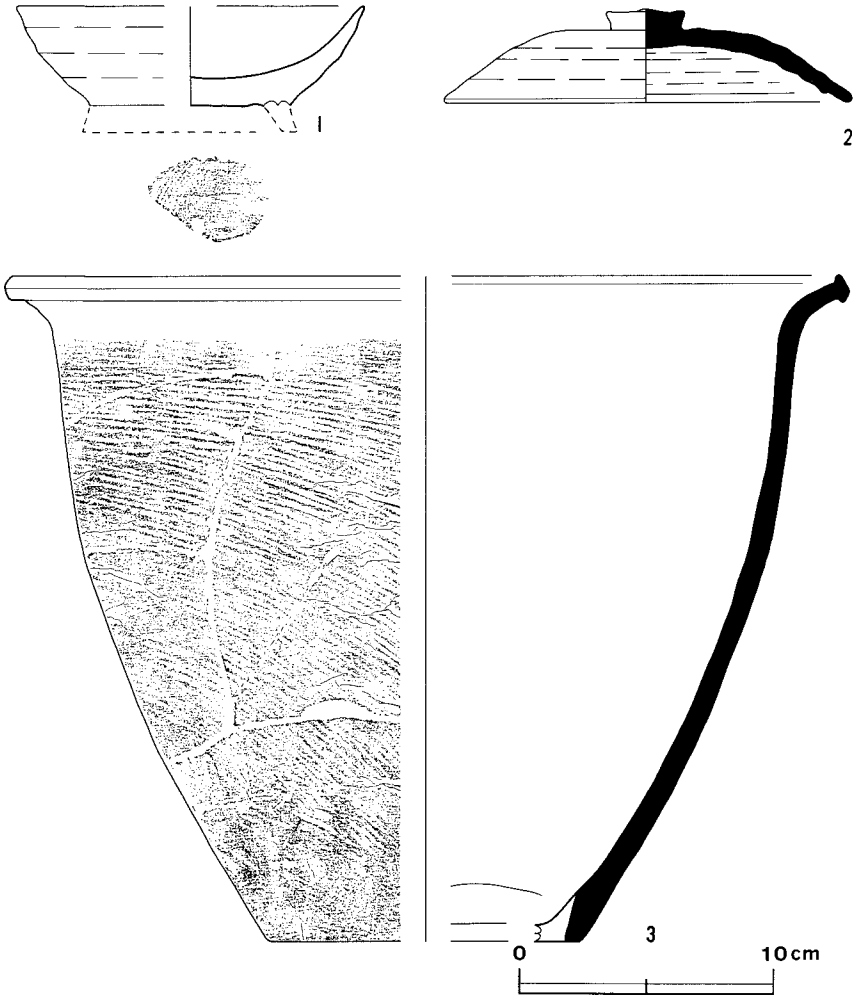


第187図　第101号住居跡実測図

第101号住居跡（第187図）

本跡は，G9e$_3$区を中心に確認された住居跡で，北東コーナー部で第111号住居跡と，南東コーナー部で第110号住居跡とそれぞれ重複している。重複している２軒の住居跡は、いずれも本跡を切って掘り込んでいる。

平面形は方形を呈しており、主軸方向はN—25°—Wである。規模は，長軸5.46m，短軸5.15mで，主軸方向が30cmほど短い。壁は良好な状態で残っており，高さは35～55cmである。床はロームで平坦であり，周辺部まで硬く踏み固められている。ピットは，５か所検出された。P$_3$を除いた４か所のピットはそれぞれ60cm以上の径を有しており，主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に構築されており，長さ130cm，幅70cmの規模である。袖部は残存せず，火床部の掘り込みは長径83cm，短径54cmの楕円形で，深さは30cmである。



第188図　第101号住居跡出土遺物実測図

覆土は，２層に分けられる。ともに暗褐色土で，焼土粒子・炭化粒子を少量含んでいる。２層の方がやや暗い色調を呈している。

遺物は，須恵器の甑（３）がカマド東側の床面から，土師器の埦（１），須恵器の蓋（２）が２層からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片175点が出土している。

出土遺物観察表（第188図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	高台付埦 土師質	A (13.6) B (4.0)	底部は平底である。体部は器壁を減じながら，内湾して立ち上がる。口縁端部は尖る。	体部内面はナデ，底部は糸切り，底部外周に高台のとれた痕跡がある。水挽き成形。	スコリア・砂粒 淡い橙色 普通	20%
2	蓋 須恵器	A 16.0 B 3.7	天井部は丸く，口縁部は直線的にのび，内側に低いかえりを有する。つまみは扁平で，中央部がわずかに突出する。	天井部は回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・石英・雲母・礫 褐灰色 普通	85%
3	甑 須恵器	A (32.6) B 26.4 C (12.3)	胴部は内湾ぎみに外上方に立ち上がり，口縁部は強く外側に屈曲する。口縁端部は上下に突出し，断面三角形状を呈する。底部については不明。	口縁部内・外面は横ナデ，胴部外面上位から中位は平行叩き目，内面はナデ，胴部下端は斜位のヘラ削り調整。	雲母・長石・砂粒 灰黄色 普通	20%

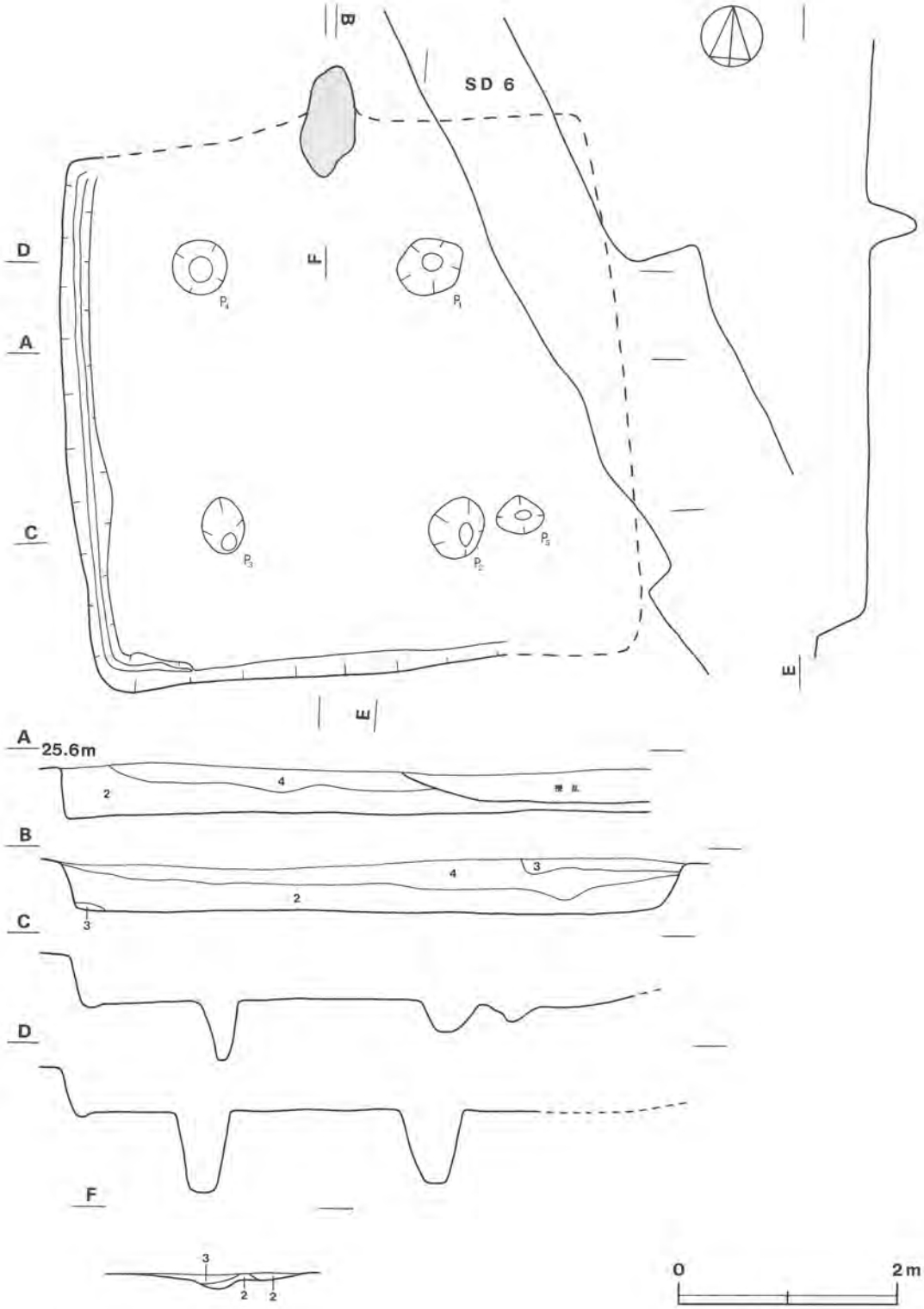
第102号住居跡（第189図）

本跡は，E9g_2区を中心に確認された住居跡で，北東側約半分近くは第104号住居跡・第６号溝と重複している。溝は２軒の住居跡を切って掘り込まれているが，住居跡間の新旧関係は明確でない。

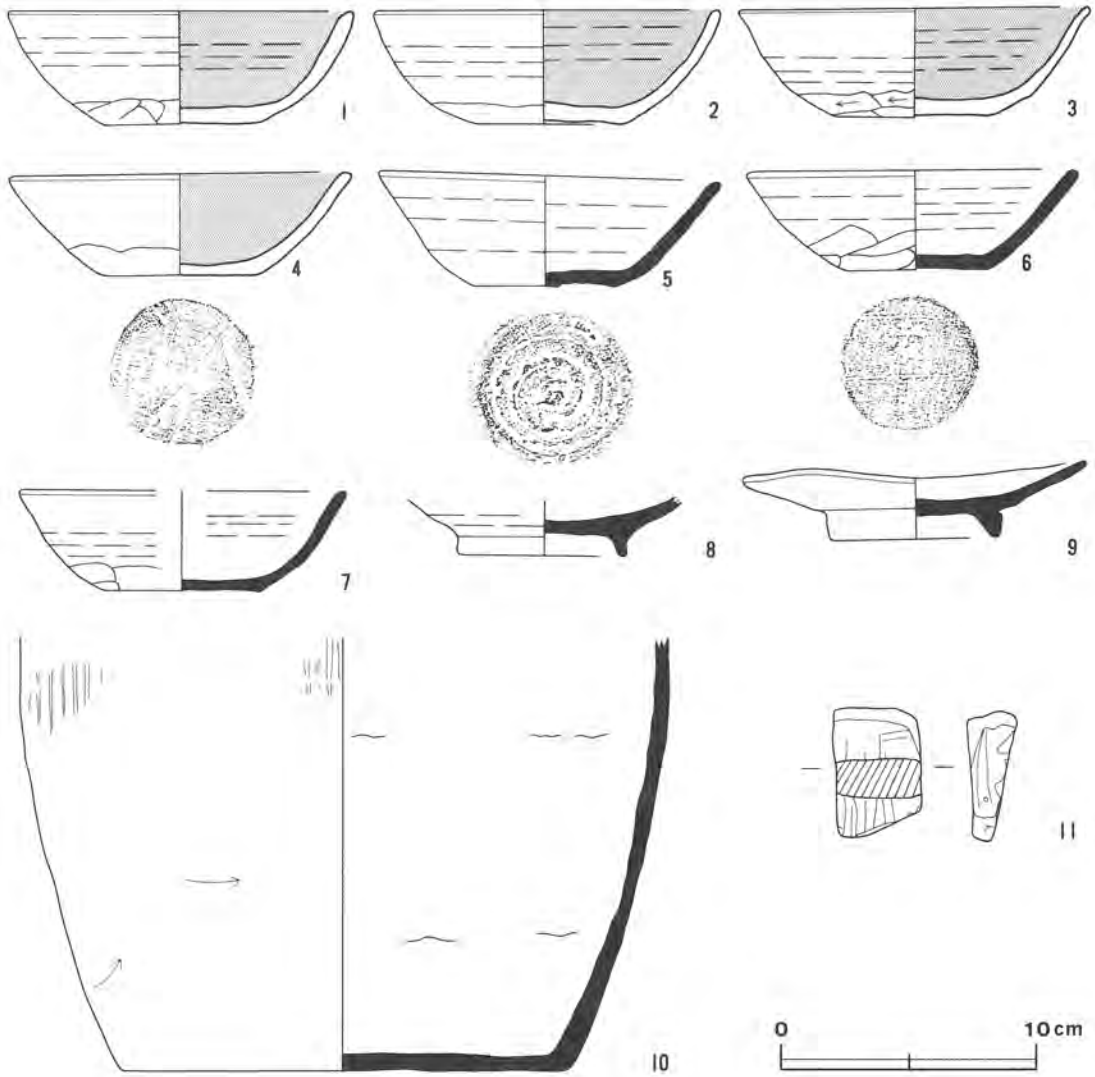
平面形は方形を呈していたものと思われるが，東・北壁が消失しているため断定はできない。主軸方向は形状から判断して，N－6°－Wと思われる。規模は，残存部から推定して１辺５m前後と考えられる。壁は，前述のように東・北壁が不明であるが，南・西壁はほぼ垂直に立ち上がり，高さは43cmである。壁溝は，西壁側に部分的に検出されている。床は極めて平坦で，硬く踏み固められている。ピットは５か所検出された。P_1～P_4は，径51～67cm，深さ55～78cmで，規模や位置から判断して主柱穴と思われる。P_5は，径45cm，深さ７cmと極めて浅いものである。カマドは北壁に構築されていたと思われるが，火床部の痕跡が検出されただけである。

覆土は２層に分けられ，上位は黒褐色土，下位は褐色土で，両層ともロームブロックを少量含んでいる。

遺物は，土師器の坏（１，２，３，４）４点，須恵器の坏（５，６，７，８）６点・鉢(10)・皿（９）が２層から出土している。他に，砥石２点，土師器・須恵器片326点が出土している。



第189図　第102号住居跡実測図



第190図　第102号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第190図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A 13.5 B 4.6 C 6.1	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	体部内面は，横位及び斜位のヘラ磨き，底部内面は一定方向のヘラ磨き調整。体部下端はヘラ削り調整。	長石・砂粒 明黄褐色 良好	100% 内面黒色処理
2	坏 土師器	A 13.5 B 4.6 C 5.7	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。	内面全体がヘラ磨き調整，体部下端はヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・スコリア 砂粒 にぶい黄橙色 普通	95% 内面黒色処理

3	坏 土師器	A 13.9 B 4.4 C 5.9	2の坏と同じ特徴を有しており，同一工人の手によるものと思われる。	内面全体がヘラ磨き調整，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒 にぶい橙色 普通	95% 内面黒色処理
4	坏 土師器	A 13.5 B 4.1 C 6.0	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。	底部及び体部下端はヘラ削り，内面はヘラ磨き調整。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	50% 内面黒色処理
5	坏 須恵器	A 13.3 B 4.6 C 6.0	底部は平底で，ヘラ切りによる凹みが残る。体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁端部はやや角張っている。	底部は回転ヘラ切り後，無調整。 水挽き成形。	砂粒・スコリア・パミス 浅黄橙色 普通	80%
6	坏 須恵器	A 13.0 B 4.0 C 5.7	底部は平底で，体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後全面ヘラ削り，体部下端は斜位のヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・石英 灰黄色 普通	65%
7	坏 須恵器	A (12.8) B 3.9 C (6.4)	底部は平底で，体部は直線的に立ち上がる。	底部は全面ヘラ削り，体部上から中位は横ナデ，同下端は斜位のヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・砂粒 灰黄色 普通	25%
8	高台付坏 須恵器	B (2.4) D 6.6	底部片で，高台が貼り付けられている。	底部は回転ヘラ切り後，回転ヘラ削り，高台は貼り付け後横ナデ調整。水挽き成形。	長石・石英・礫 橙色 普通	40%
9	高台付皿 須恵器	A 13.5 B 3.0 D 6.6	体部は直線的に外傾して開く。口縁部は，かなりゆがんでおり波状を呈している。	水挽き成形後，内・外面横ナデ調整。底部は回転ヘラ切り。高台は貼り付け。	砂粒・長石 黄灰色 普通	80%
10	鉢 須恵器	B 17.0 C 17.5	底部から胴部にかけての破片で，底部は平底である。胴部はわずかに内湾しながら立ち上がる。	胴部外面は斜位のヘラ削り，部分的に平行叩き目が残る。	雲母・長石・礫 灰黄色 普通（2次）	50%
11	砥石 石製品	全長(5.1) 幅 (3.6) 厚さ(2.0)	表裏2面を使用している。			

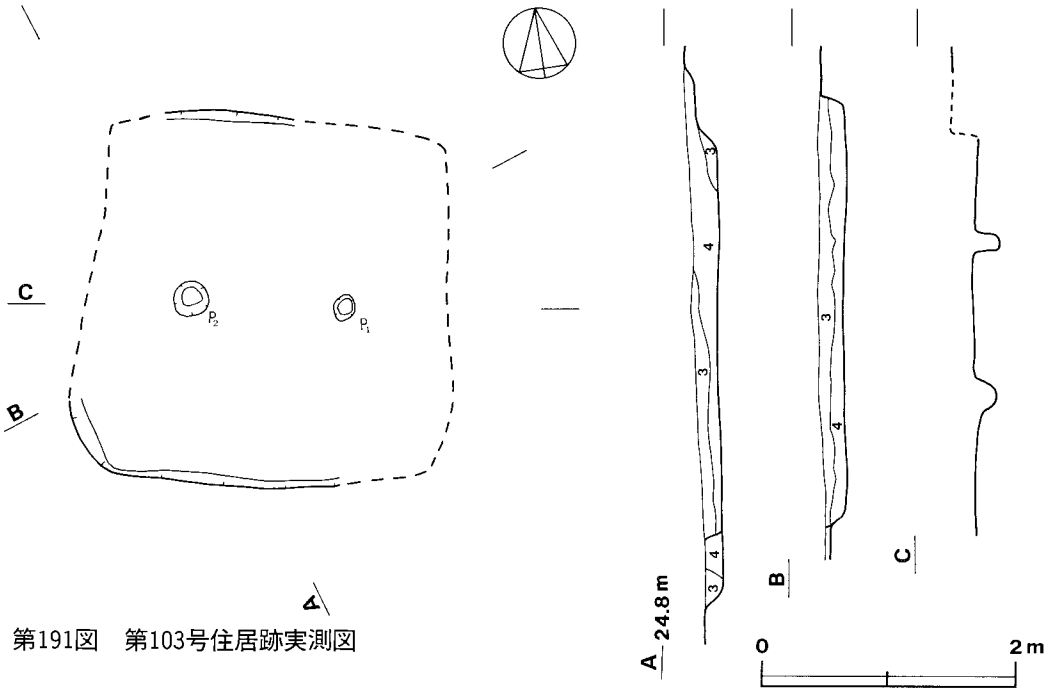
第103号住居跡（第191図）

本跡は，G9f_6区に確認された住居跡で，第112号住居跡，第5号溝と重複している。第112号住居跡を切って本跡が掘り込まれ，第7号溝は2軒の住居跡を切って東西に延びている。

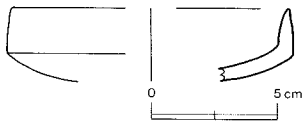
重複が多く，壁も南及び北側の一部分しか検出できなかったため，平面形は明確にできなかった。残存部から推定すると，一辺が約3mの方形を呈するものと思われる。主軸方向はN—82°—Wである。壁は垂直に立ち上がっており，高さは19cmである。床は平坦で，中央部は硬く締まっている。ピットは，東西に並んで2か所検出された。ピットの径は20・30cm，深さは18・19cmである。カマドや炉はなく，この種の住居跡で多く検出されるピット間の炭化物の層も認められない。

覆土は，暗褐色土，黒褐色土の２層で，それぞれにロームブロック・焼土粒子を少量含んでいる。

遺物は，土師器の坏が２層から出土している。他に，土師器・須恵器片37点が出土している。



第191図　第103号住居跡実測図



第192図　第103号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第192図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	坏 土師器	A (10.9) B　2.9	底部は丸底と思われ，口縁部との境に稜を有する。口縁部はやや内傾ぎみに立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10%

第106号住居跡（第193図）

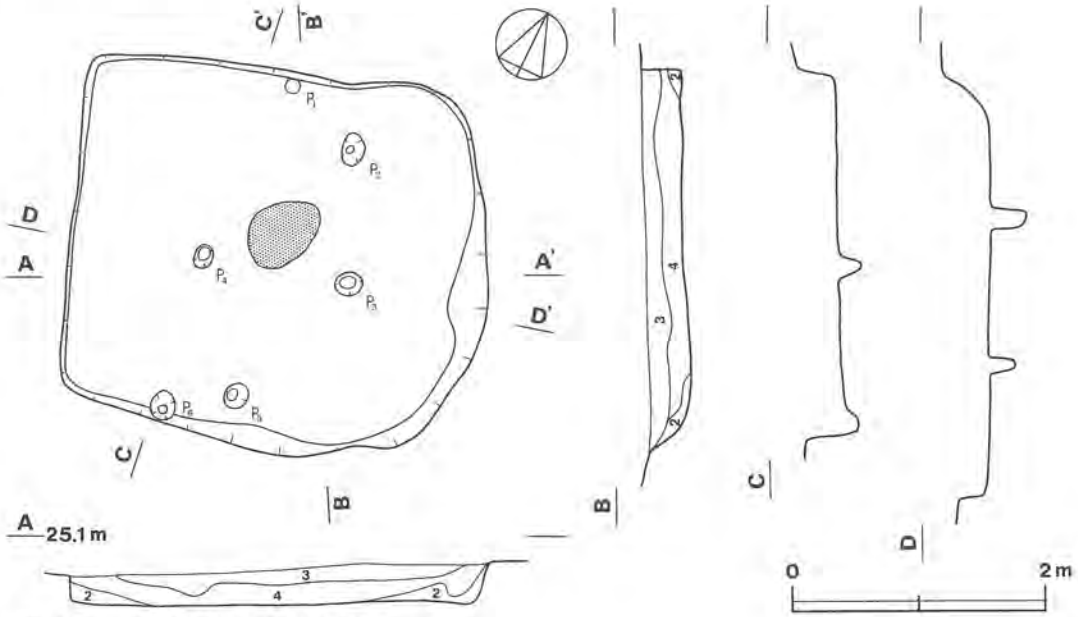
本跡は，G9a3区に確認された住居跡で，東側はやや撹乱を受けている。

平面形は方形で，規模は長軸3.12m，短軸3.02mで，主軸方向は，N—71°—Eである。壁は垂直に立ち上がるが，東側は撹乱を受けていることもあり，外傾してゆるやかに立ち上がっている。

壁高は，32cmである。床は平坦で，極めて硬く締まっている。ピットは6か所検出されたが，本跡に伴うものはP_3, P_4の2か所で，他は木根跡と思われる。P_3, P_4とも径は20cmと細く，ピット間の床面上には炭化物の層が薄く認められる。

覆土は3層で，1層はロームブロック・焼土粒子を少量含む暗褐色土，2層は1層と同じ含有物の黒褐色土，3層は壁近くの床面にみられ，ロームブロックを多く含む褐色土である。

遺物は，土師器の坏（1）が床面から，土師器の甕（2）が1層からそれぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片85点が出土している。なお，須恵器片の中には外面に同心円文叩き目を有するものがみられる。



第193図　第106号住居跡実測図

第194図　第106号住居跡出土遺物実測図

0　5cm

出土遺物観察表（第194図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.3) B (2.8) E (14.0)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は短く，内傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	雲母・砂粒 褐灰色 普通	10%

2	甕 土師器	A (13.3) B (3.0)	「く」の字状に外反する口頸部片。	磨滅がひどく，調整痕不明。	雲母・長石・砂粒 にぶい褐色 普通	10%

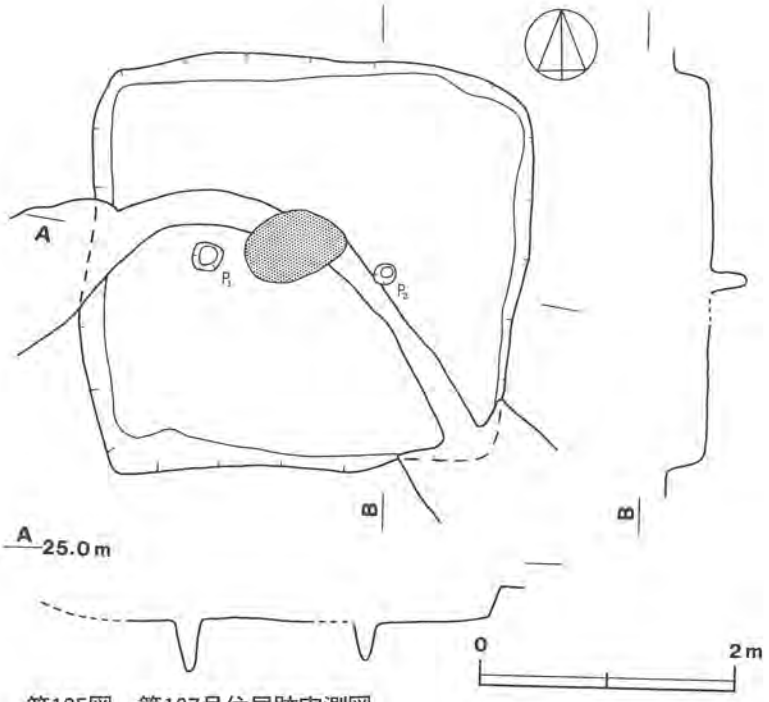
第107号住居跡（第195図）

本跡は，G9b₃区に確認された住居跡で，第5号溝と重複している。第5号溝は，本跡の南壁から床中央部に延び，さらに西に向きを変え，西壁を切って南西方向に走っている。

平面形は方形で，長軸3.44m，短軸3.30mの規模を有している。主軸方向は，N—86°—Wである。壁は溝に切られている部分を除いて良好に残存しており，高さは31cmで，垂直に立ち上がっている。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは，東西に並んで2か所検出されている。ピットの径は20～25cm，深さは30～44cmで，ピット間には炭化物の層が薄く堆積している。

覆土の状況については，撹乱が多く，さらに溝に切られていることから観察できなかった。

遺物は少量で，覆土から土師器・須恵器片44点が出土している。

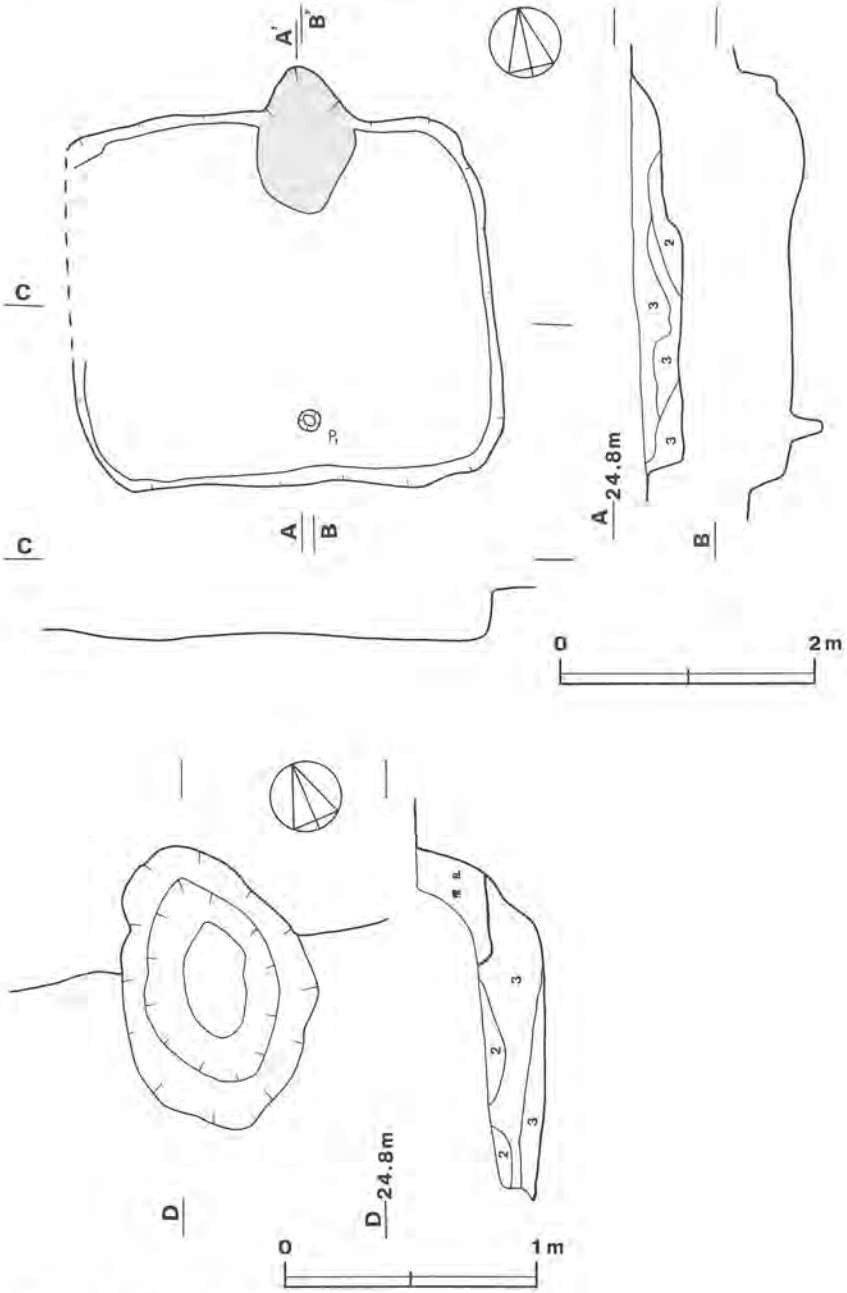


第195図　第107号住居跡実測図

第110号住居跡（第196図）

本跡は，G9f₄区を中心に確認された住居跡で，第101号住居跡と西壁の部分が重複している。本跡が第101号住居跡を切って掘り込まれていたが，重複部分の壁は検出できなかった。

平面形は隅丸長方形を呈しており，規模は長軸3.39m，短軸2.99mで，主軸方向は，N－4°－Eである。壁は，重複部分以外は良好な状態で残っており，垂直に立ち上がっている。壁高は29～40cmである。床はやや凹凸があるものの，全体的には平坦である。ピットは，南壁中央下に1か所検出され，径は20cm，深さは27cmである。カマドは北壁の東寄りに構築されていたが，袖部等は残存せず，痕跡のみが確認できた。火床部は，長径84cm，短経53cmの楕円形を呈し，ロームを10

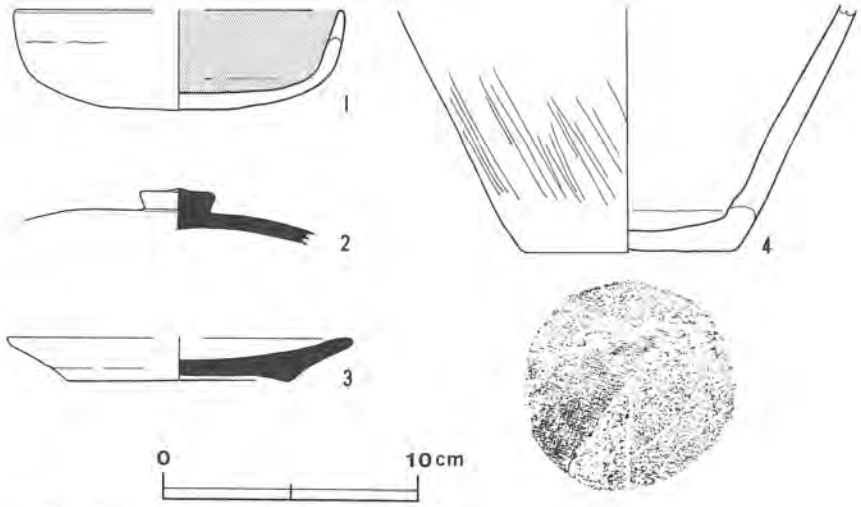


第196図　第110号住居跡実測図

cm掘り下げてある。

覆土は4層確認され，遺構中央部には黒色土を多量に含む暗褐色土が2層，壁近くにはローム粒子を中量含む褐色土が2層，それぞれ堆積している。

遺物は，土師器の坏（1）が床面北東部から，土師器の甕（4）がカマド前の床面からそれぞれ出土している。また，カマド内からは，須恵器の蓋（2）と皿（3）が出土している。他に，土師器・須恵器片94点が出土している。



第197図　第110号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表（第197図）

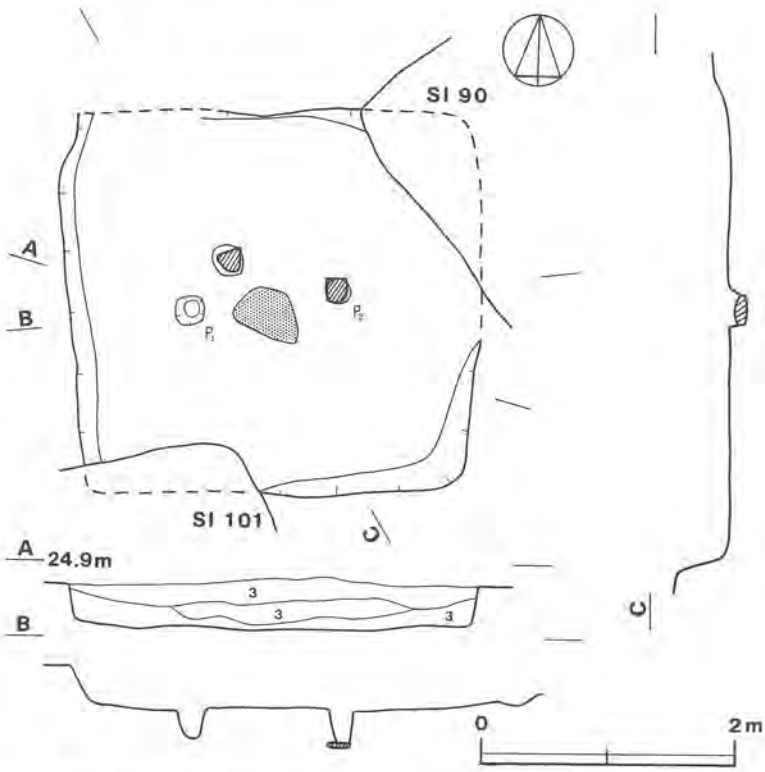
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (12.7) B 4.0	底部は扁平な丸底を呈し，なだらかに体部に続く。体部はわずかに内湾しながら外上方に開く。	底部はヘラ削り，体部内・外面は横ナデ調整。内面に漆状の物質が付着する。	雲母・長石・砂粒 にぶい橙色 普通	50% 内面黒色処理
2	蓋 須恵器	A (11.3) B 2.0	天井部は，丸く浅い。つまみは，扁平なボタン状を呈する。	天井部は回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・礫 灰白色 普通	50%
3	皿 須恵器	A (13.5) B 1.7 C 8.6	底部は中央部がやや凹んだ平底で，外周部が高台状に削り残されている。体部は外反ぎみに外上方に立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。	底部は，回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	雲母・砂粒 灰黄色 普通	48%
4	甕 土師器	B (9.8) C 8.2	底部は平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	胴部外面は斜位のヘラ削り，内面はナデ調整。底部は木葉痕。	石英・長石・雲母・礫 にぶい褐色 普通	30%

第111号住居跡（第198図）

本跡は，G9d₃区を中心に確認され，北東コーナー部は第90号住居跡と，南西コーナー部は第101号住居跡とそれぞれ重複している。また，北西コーナー部には新しい撹乱がみられる。2軒の住居跡の調査結果から，本跡が最も新しいと思われる。

本跡は切り合いが多いため，プランの確認が困難であったが，残存壁から推定して平面形は方形であったものと思われる。規模は，長軸3.15m，短軸3.10mで，主軸方向は，N－82°－Eである。壁は垂直に立ち上がり，高さは10～39cmである。床は平坦で硬く締まっているが，壁際はやや軟らかである。ピットは，2か所検出されている。P_1は，径・深さとも25cmである。P_2は，径20cm，深さ28cmで，底面に雲母片岩の扁平な石が，すっぽりと埋めてあった。この石は柱の沈下を防ぐ目的で利用したものと考えられる。同様の石は，P_1の北東50cmの床面でも検出された。こちらは柱穴状のピットはなく，ロームを石の厚みだけ掘り下げて埋め込み，石の上面と床面とが同一レベルになるよう据えられていた。このような検出例は当遺跡では他になく，唯一の例である。なお，P_1とP_2の間には，炭化物の層が認められた。

覆土は，3層に分けられる。1層は黒色土を多量に含む暗褐色土，2層はローム粒子及び同ブ



第198図　第111号住居跡実測図

ロックを少量含む暗褐色土，3層は炭化物を少量含む暗褐色土である。

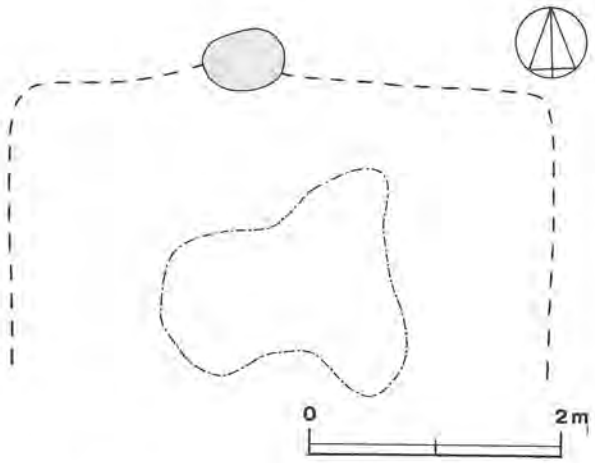
遺物は前述の石の他，土師器・須恵器片3点が2層から出土している。

3　時期不明の住居跡

第17号住居跡（第199図）

本跡は，H10c_0区を中心に確認された住居跡である。しかし，確認できたのはカマド跡と思われる焼土の堆積している部分と，床の一部とみられる硬く締まった部分だけである。恐らく，ロームへの掘り込みがほとんどない住居跡のため，表土除去の段階で大部分が消失してしまったものと思われる。きわめて不明な点が多いが，住居跡として掲載することにした。

遺物は出土していない。



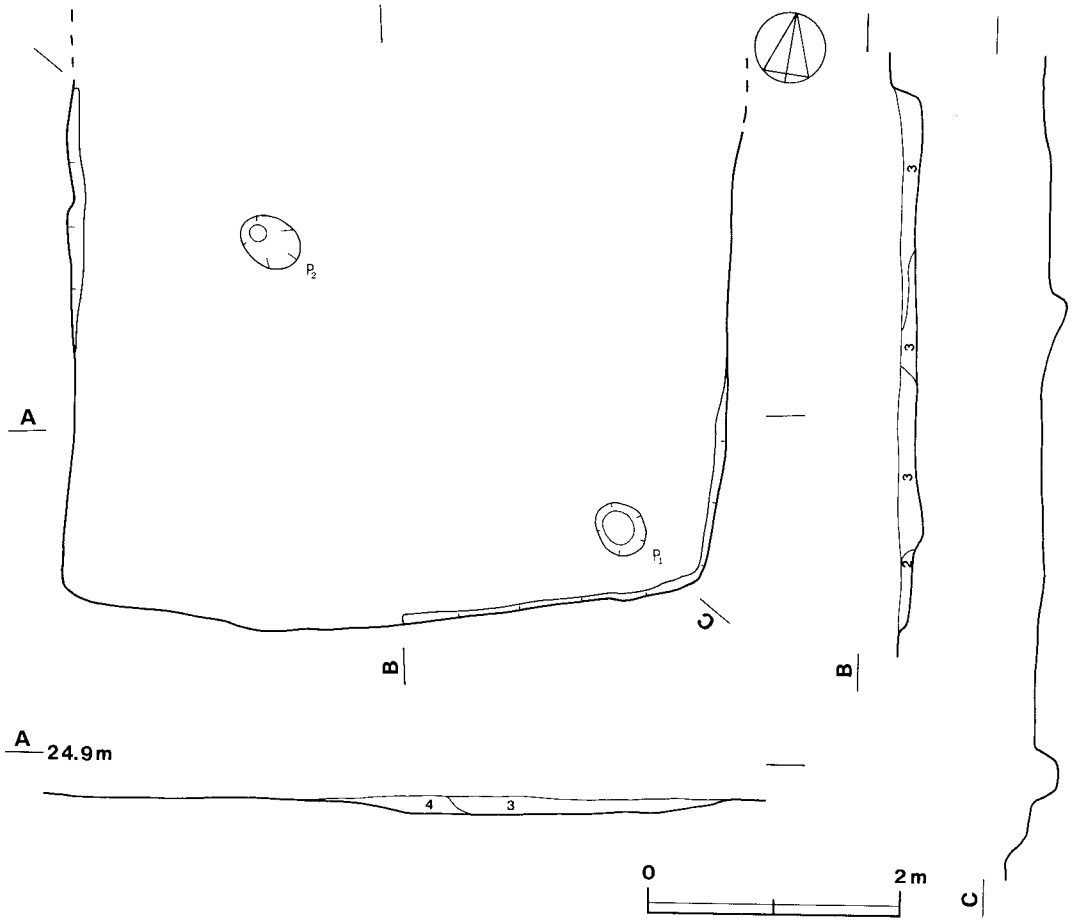
第199図　第17号住居跡実測図

第23号住居跡（第200図）

本跡は，G10e_6区を中心に確認された住居跡で，遺構の大半がエリア外のため，詳細は不明である。壁は南東コーナー部でわずかに確認され，高さは14cmである。床は軟らかく，凹凸が多い。ピット等は検出できず，不明である。

覆土は黒褐色土と暗褐色土がブロック状に認められ，それぞれハードロームブロックを中量含んでいる。

遺物は全て覆土からで，土師器・須恵器片155点が出土している。



第200図　第23号住居跡実測図

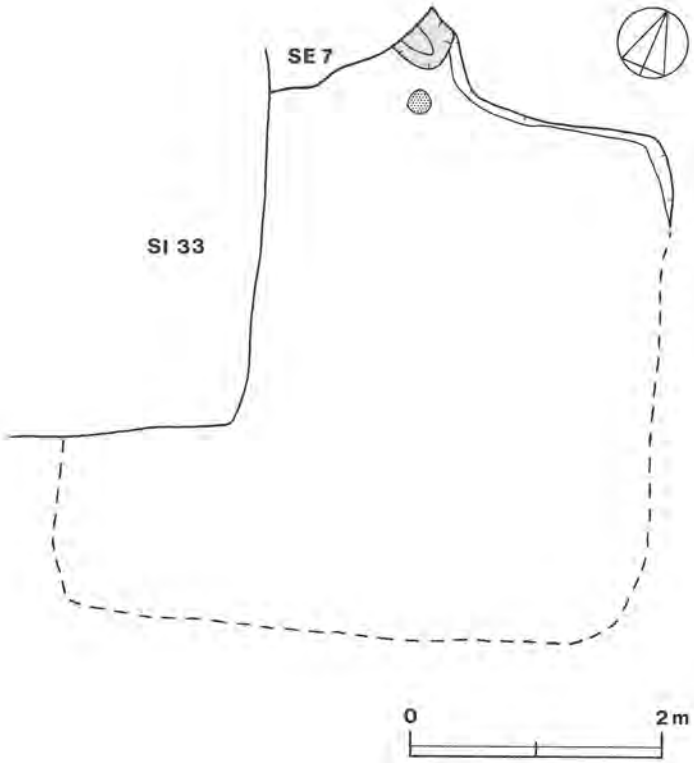
第32号住居跡（第201図）

本跡は，G9f$_4$区を中心に確認された住居跡で，非常に浅く，北側の壁がわずかに残っているだけである。また，北西コーナー部で第33号住居跡と重複し，本跡が切られている。

平面形や規模等は，不明である。床と思われる部分は硬く締まっているが，ピット等は検出できない。カマドが構築されていたと思われる地点に，焼土が少量認められた。

覆土も残っておらず，観察できなかった。

遺物は，比較的少量で，土師器・須恵器片40点が床面から出土した。



第201図　第32号住居跡実測図

第69号住居跡（第40図）

本跡は，F10j_2区に確認された住居跡で，第68・70号住居跡と重複している。形状等から推定して，本跡が最も新しいと思われる。

いずれにしても，本跡は重複が多いため北西コーナー部だけしか確認されておらず，詳細は不明である。壁は，確認できた部分では垂直に立ち上がり，高さは10cmである。床は平坦で，第70号住居跡のカマド付近に本跡の貼り床がわずかに残っている。

覆土は，焼土粒子を少量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は極めて少量で，土師器・須恵器片６点が床面から出土しただけである。

第93号住居跡（第202図）

本跡は，G9c_2区を中心に確認された住居跡で，第５号溝と東側で接している。

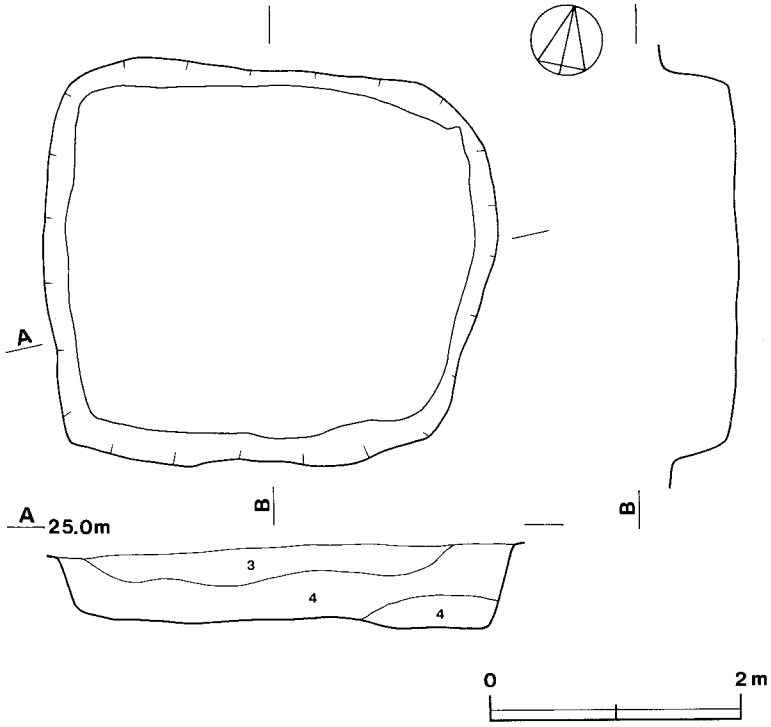
平面形は隅丸方形を呈し，規模は長軸3.38m，短軸3.16mで，主軸方向は，N－9.5°－Wである。北東コーナー部は，後世の撹乱を受けているが，それ以外の壁は良好な状態で検出でき，垂直に立ち上がっている。壁高は，56cmである。床は平坦で，締まりがなく軟らかい。ピットやカマド，

壁溝といった内部施設は全く検出されていない。

覆土は２層に分けられ，１層はローム粒子・炭化物を少量含む暗褐色土，２層はローム粒子中量，炭化物少量を含む黒褐色土である。

遺物は，出土していない。

本跡は他の住居跡群とはいろいろな面で差異があり，他の住居跡と同一に扱うことは難があると思われる。



第202図　第93号住居跡実測図

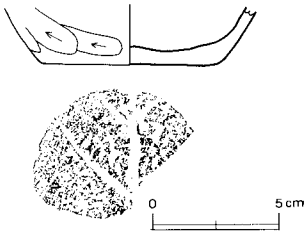
第94号住居跡（第147図）

本跡は，F10j_4区に確認された住居跡で，本跡の南西側の大半は第71号住居跡と重複し，本跡が切られている。

本跡はカマド部から北東コーナー部にかけての部分しか検出できなかったため，平面形や規模等は不明である。主軸方向はカマドの痕跡から推定して，N－8.5°－Wと思われる。壁高は，残存部で２～３cmで，壁溝は検出されなかった。床は平坦であり，それほど硬くない。カマドは痕跡のみであり，袖部や火床部も消失して，不明である。

覆土は，ローム粒子を少量含む暗褐色土が10cmの厚さで堆積していた。

遺物は少量で，土師器・須恵器片30点が出土しただけである。



第203図　第94号住居跡出土遺物実測図

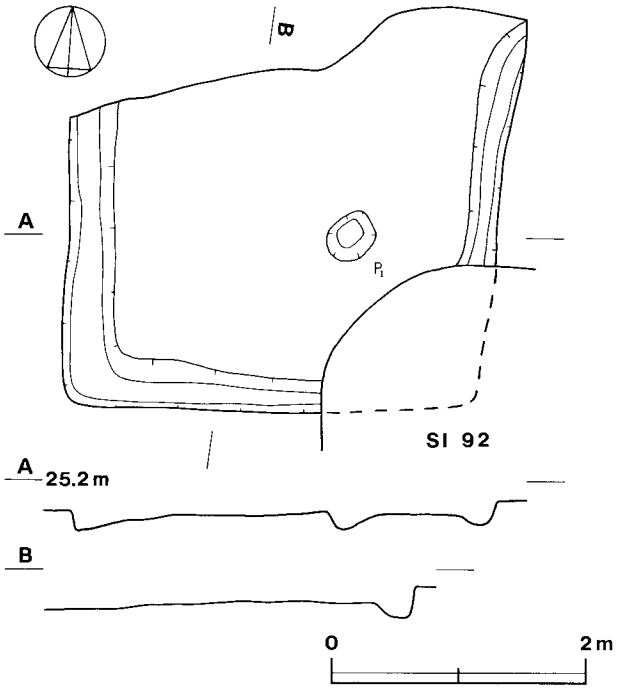
出土遺物観察表（第203図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	甕 土師器	B　2.1 C（7.0）	底部片。底部は平底で，胴部は外傾する。	胴部はヘラ削り調整。底部に木葉痕が残る。	雲母・長石・礫 暗赤褐色 普通	10%

第105号住居跡（第204図）

本跡は，F9i_6区を中心に確認された住居跡で，南東部を第92号住居跡に切られ，さらに北側は地境の溝によって切られている。

確認できた壁等からみると，方形を呈していたものと思われ，規模は東西間で3.42mである。



主軸方向は，N－4°－Wである。壁は，東及び南側の一部しか残っていないが，垂直に立ち上がり，高さは15cmである。壁溝は残存壁部分にみられ，上幅25cm，下幅9～17cm，深さ10cmである。床は大変硬く締まり，平坦である。ピットは，径40cmのものが南東コーナー部近くに1か所だけ検出できた。カマドは確認できなかった。

覆土の状況は，床面までが浅いため，不明である。

遺物は，出土していない。

第204図　第105号住居跡実測図

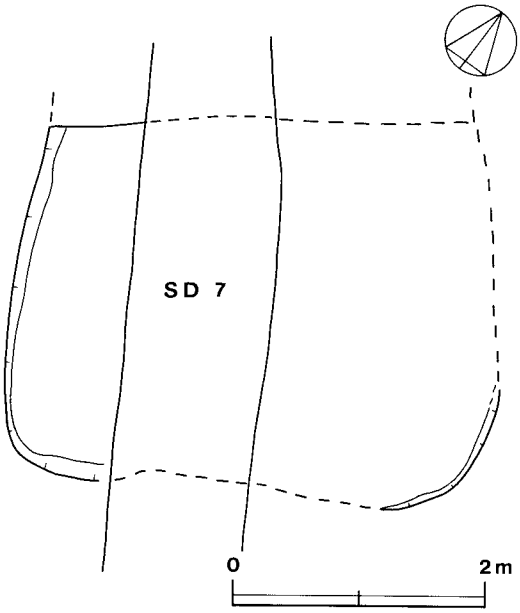
第109号住居跡（第205図）

本跡は，G9e_5区を中心に確認された住居跡で，第90号住居跡，第５号溝と重複している。溝は２軒の住居跡を切っており，本跡の床の一部は第90号住居跡の床面上に残っていたことから，第90号住居跡が最も古い遺構と考えられる。

本跡で確認できた部分は，南東コーナー部と南西壁の一部だけであるため，全体の形状は不明である。床もそのほとんどが消滅していたが，第90号住居跡との境界付近に本跡の貼り床が残っていた。ピットやカマドも確認できなかった。

覆土は遺構確認の時点で消失しており，観察できなかった。

遺物は極めて少量で，土師器・須恵器片15点が床面近くから出土しただけである。



第205図　第109号住居跡実測図

第３節　土　　坑

当遺跡では，５基の土坑が検出されている。ここでは主な土坑について説明し，他は一覧表で表示する。なお，調査時に地下式坑や井戸の一部も土坑として扱ったため，土坑の番号は連続していない。

第２号土坑（第208図）

本跡は，H11b_2区を中心に確認された土坑である。

平面形は長方形を呈し，規模は長軸2.36m，短軸1.64m，深さ49cmである。壁は垂直に立ち上が

り，上部はローム，下部は暗褐色を呈する粘土質の土から成っている。底面は壁下部と同一の粘土質の土で，平坦である。ピットは，東壁及び西壁の中央部下端にそれぞれ１か所，南壁中位のやや東寄りに１か所，計３か所が検出されている。それぞれの径は30cm前後，深さは10～20cmで，いずれも土坑の中央部方向に傾くように掘り込まれている。上屋の存在が推定できるが，簡単なものであったと思われる。

覆土は，大きく３層に分けられる。１層は暗褐色土，２層はハードロームブロックを多く含むにぶい黄褐色土、３層はハードロームブロックと粘土ブロックを少量含む黒褐色土である。

遺物は少量で，覆土から土師器・須恵器片32点，石１点が出土している。

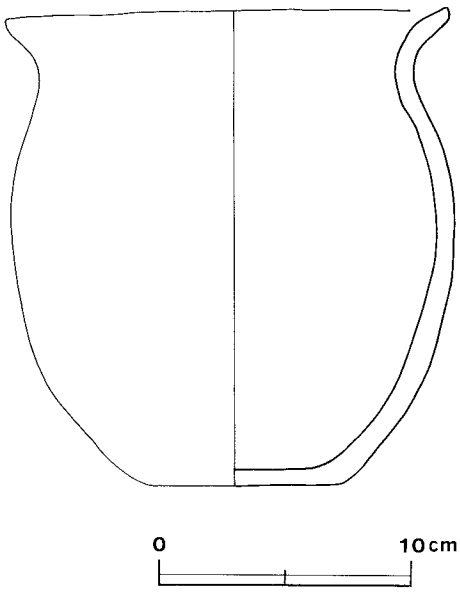
第10号土坑（第208図）

本跡は，F10f_6区を中心に確認された土坑である。

平面形は長方形を呈し，規模は長軸2.64m，短軸2.23m，深さ108cmである。北壁及び南壁は垂直に立ち上がり，東壁及び西壁は外傾して立ち上がっている。底面は２段に掘り込まれ，南西コーナー部を主に全体の４分の１程が10～20cm下がっている。

覆土は，自然堆積で，ローム粒子を含む暗褐色土である。

遺物は大部分が土師器で，その出土状況に特徴がみられた。すなわち，土坑の東側から投棄されたような状況がみられ，遺物が覆土の中ほどから上位に集中して出土している。このことは土坑が廃棄された後，土砂が流入し，その後土器が投棄されたものと思われる。図示できた遺物は，土師器の甕１点だけである。他に，土師器・須恵器片134点が出土している。



第206図　第10号土坑出土遺物実測図

出土遺物観察表（第206図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
	甕 土師器	A 17.8 B 19.0 C 7.6	底部は平底で，胴部は内湾しながら立ち上がり，中位に胴部最大径を有する。口頸部は「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面は横ナデ調整。他は荒れていて調整痕不明。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通（２次）	90%

土坑一覧表

番号	位　置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁　面	底　面	備　考 (出土遺物)
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
1	I10a$_9$	N—43°—W	(長方形)	(1.32)×0.76	20	外傾	平坦	S1—7と重複
2	H11b$_2$	N—23°—W	長方形	2.36 ×1.64	49	垂直	平坦	ピット3
4	G10f$_1$	—	不定形	2.27 ×1.69	47	〃	〃	
5	H11i$_1$	N—80°—E	長方形	(1.95)×1.88	27	外傾	〃	S1—75と重複
10	F10f$_6$	N—34°—W	長方形	2.64 ×2.23	108	垂直	平坦	底面は一部深くなる

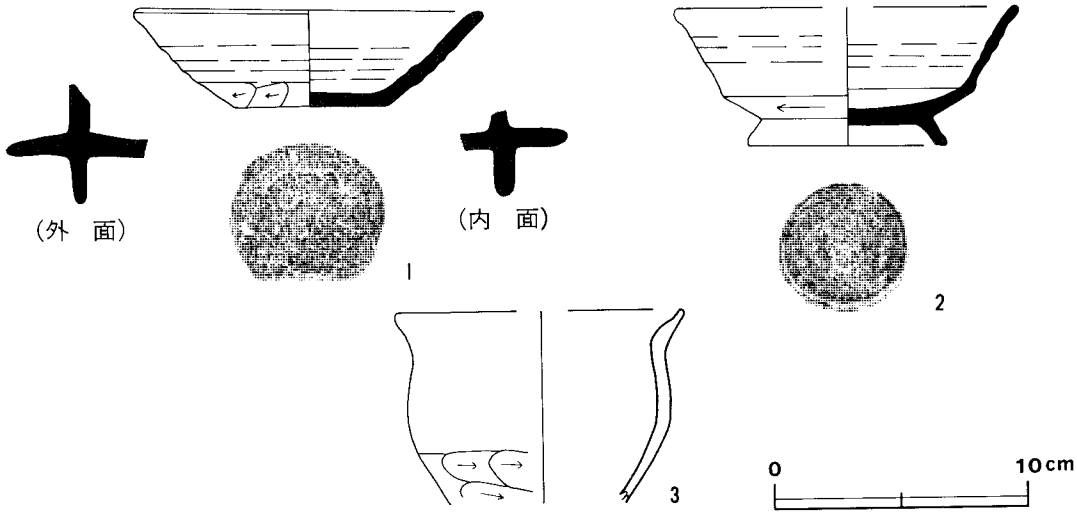
第4節　掘立柱建物跡

当遺跡から検出された掘立柱建物跡は，1棟だけである。

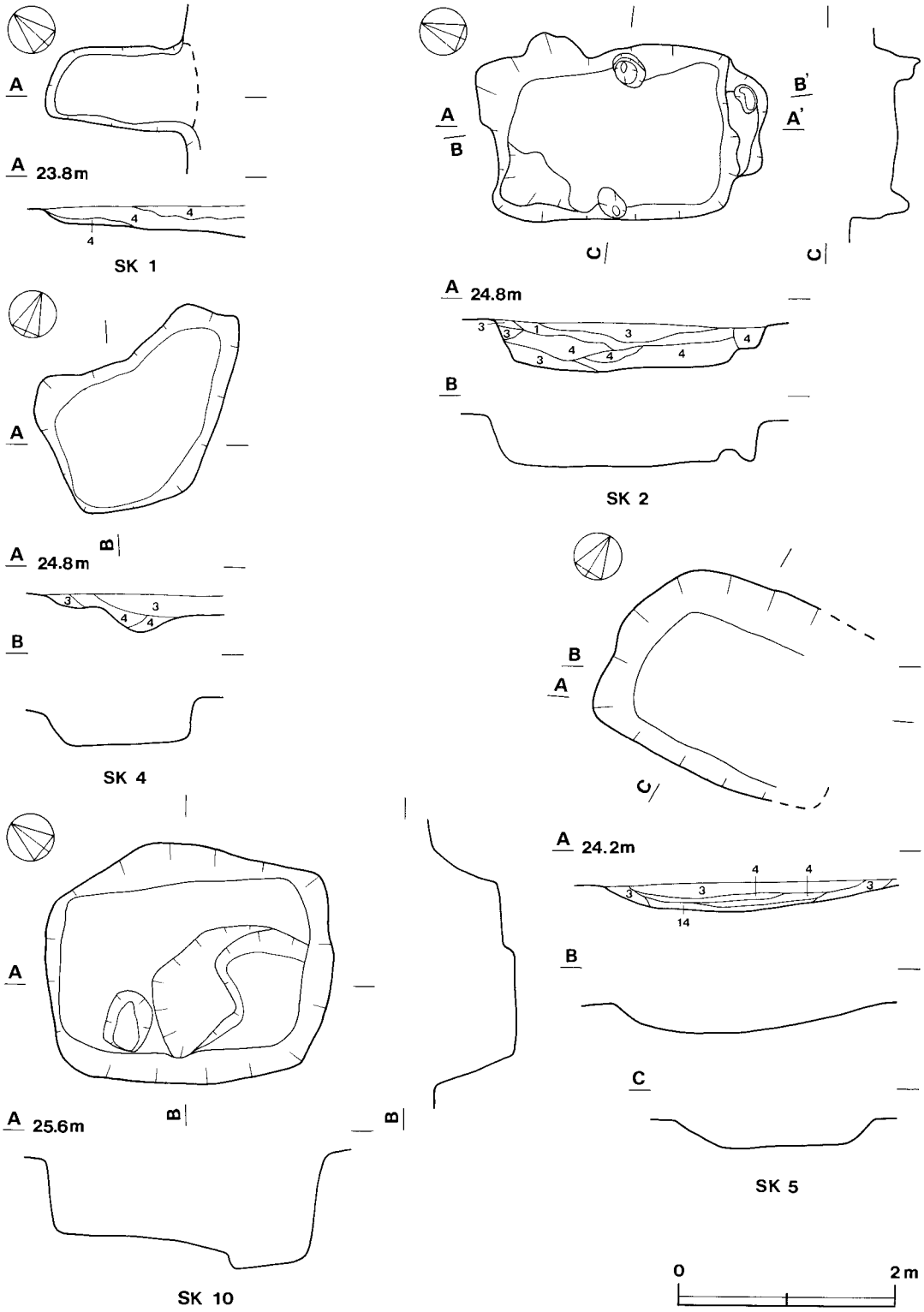
第1号掘立柱建物跡（第207図）

本跡は，G9g$_0$区を中心に確認され，規模は東西2間（5.0m），南北2間（4.8m）の総柱の建物跡である。

柱間寸法は，桁行は2.50m前後で，P$_5$～P$_6$の間はやや長く2.85mである。梁行は，2.30～2.50mである。柱掘方は長軸0.90m程の隅丸長方形のものと，一辺0.80m前後の隅丸方形のものの2種類が認められる。柱痕跡は全ての柱掘方内に確認され，径20～25cm，深さ15～40cmである。P$_1$・P$_2$・P$_8$の柱痕跡は柱掘方の中央部に検出され，他は壁に寄って検出されるものが多い。



第207図　第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第208図　第１・２・４・５・10号土坑実測図

柱掘方内の覆土は，ロームブロックを多量に含む褐色土・黒褐色土が２～３層堆積している。覆土はつき固められた痕跡が認められ，硬く締まっている。

遺物は，P_5の覆土から須恵器の坏（１）が，P_8の覆土から土師器の小型甕（３）と須恵器の坏（２）が出土している。他に土師器・須恵器片16点が出土している。

出土遺物観察表（第207図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 14.0 B 4.0 C 6.0	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り後，部分的に静止ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。	長石・石英・雲母 明褐灰色 普通	70% 体部内・外面に墨書あり「十」
2	高台付坏 須恵器	A (13.4) B 5.5 C 8.0	底部は平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は下位で「く」の字状に屈曲した後外反ぎみに立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ナデ，体部下端は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石 灰色 良好	45%
3	甕 土師器	A (11.5) B (7.6)	胴部は内湾しながら立ち上がり，口縁部はかるく外傾する。	口縁部内・外面は横ナデ，胴部中～下位は横位のヘラ削り調整。	雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	20%

第５節　地下式坑

地下式坑は，４基検出されている。４基とも第３号溝に沿って検出されている。

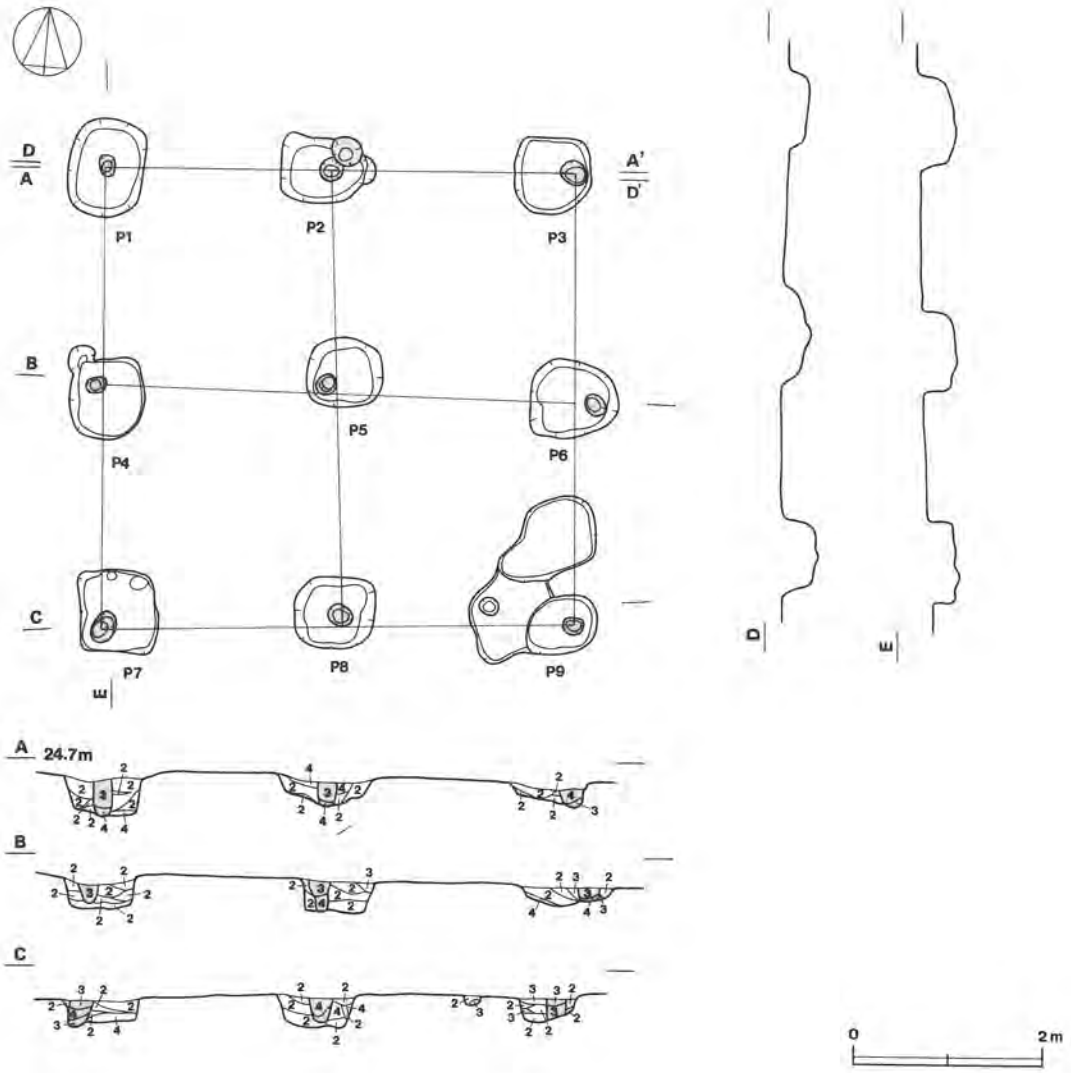
第１号地下式坑（SK－６，第210図）

本跡はG9b$_7$区に確認され，南側で東西に走る第３号溝と接している。竪坑は南側にあり，主軸方向はN－４°－W，主軸長は2.00mである。

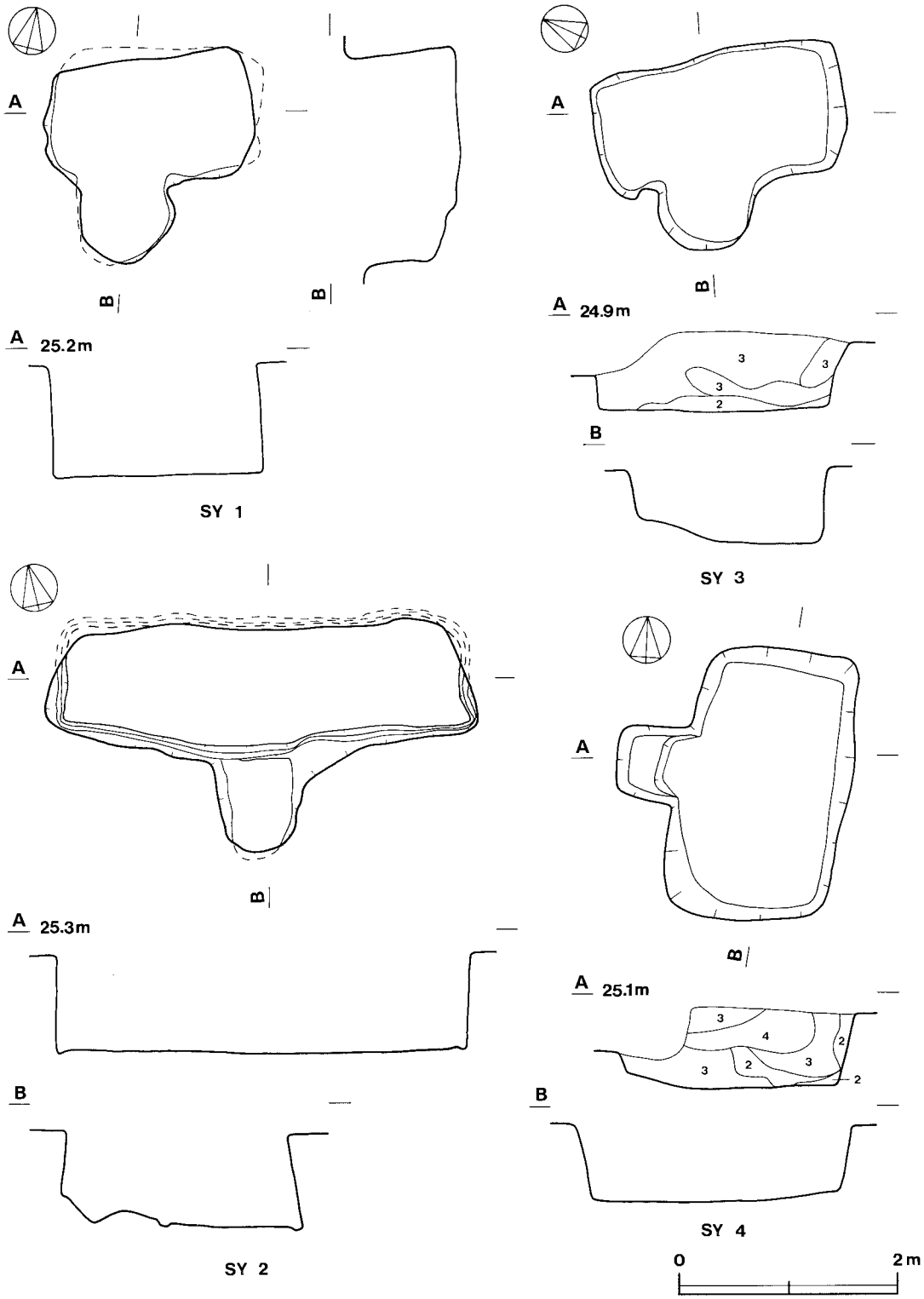
竪坑は径0.90mの円形を呈し，深さは0.65mである。壁は，南及び北西側はオーバーハングしているが，その他は垂直に掘られている。底面は主室方向にゆるく傾斜している。主室は，長軸1.90m，短軸1.20mの長方形を呈し，長軸は主軸と直交している。深さは1.00mで，底面は平坦である。北壁と東壁はオーバーハングして立ち上がるが，南壁と西壁は垂直に立ち上がっている。

覆土は観察できなかった。

遺物は出土していない。



第209図　第１号掘立柱建物跡実測図



第210図　第１・２・３・４号地下式坑実測図

第２号地下式坑（SK―７，第210図）

本跡はG9b_9区を中心に確認され，南側で第３号溝と重複し，本跡が溝を切っている。竪坑は南側にあり，主軸方向はN―15°―E，主軸長は2.20mである。

竪坑は長軸0.85m，短軸0.70mの隅丸長方形を呈し，深さは約0.80mである。壁は，南壁のみオーバーハングしており，他は垂直である。底面は，中央部が10cm程凹んでいる。主室は，長軸2.80m，短軸1.80mの長方形を呈しているが，南側がやや張り出している。北壁と東壁及び西壁の北側２分の１はオーバーハングしており，南壁は垂直に立ち上がっている。底面は平坦で，竪坑底面より12～16cm下がっている。壁直下には巾７cm前後，深さ５cmの壁溝が全周している。壁溝が全周している。壁溝が検出されたのは，本跡だけである。

覆土は，木根によって撹乱を受けており，堆積状況は不明である。

遺物は土師器・須恵器片62点が覆土から出土している。

第３号地下式坑（SK―９，第210図）

本跡はG9c_0区に確認され，西側は第３号溝と重複し，本跡が溝を切っている。竪坑は西側にあり，主軸方向はN―82°―W，主軸長は2.15mである。

竪坑は長軸0.70m，短軸0.60mの長方形を呈し，深さは0.75mである。壁は外傾して立ち上がり，底面の東側２分の１は主室の底面とつながり，段差は認められない。主室は長軸2.55m，短軸1.55mの隅丸長方形を呈している。壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。

覆土は，大きく４層に分けられる。いずれもレンズ状に堆積しており，上層にはローム粒子，焼土粒子を少量含み，中・下層にはロームブロックを多く含んでいる。ロームブロックは，主室の天井部が崩落した時のものと思われる。

遺物は出土していない。

第４号地下式坑（SK―８，第210図）

本跡はG10e_1区を中心に確認され，西側は南北に走る第３号溝に面している。竪坑は西側にあり，主軸方向はN―55°―E，主軸長は1.77mである。

竪坑は径0.85mの不整円形を呈し，深さは0.47mである。壁は垂直に立ち上がり，底面は主室の底面に向かって傾斜している。主室は長軸2.30m，短軸1.25mの長方形を呈している。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦で，竪坑の底面より約20cm下がっている。

覆土は，４層に分けられる。１層には黒色土，２層にはロームブロックが多量に混入しており，天井部が一気に崩落して水平に堆積したことが考えられる。３・４層にはローム粒子が多く含まれている。

遺物は出土していない。

第6節　井　　戸

当遺跡からは，8基の井戸が検出されている。検出位置をみると，遺跡中央部に4か所集中して検出されたのをはじめ，南東部に3か所，北端部に1か所という状況である。調査時には，ほとんどの井戸で湧き水がみられた。

第1号井戸（第213図）

本跡は，H11e₁区を中心に確認された井戸で，2段に掘り込まれている。

開口部は径3.20mの円形を呈し，遺構確認面から0.90mの深さまで掘り下げ，さらに底面中央部を一辺1.70mの方形に，2.30m掘り下げている。確認面から最深部までは3.20mである。方形の掘り込み部の壁面は，崩落を防止するため木材を井桁に組んであったと思われ，その一部が残存していた。なお，深さ2m以上の部分は土砂まじりの固い土となるため，素掘りであった。

遺構上部の壁がもろく危険なため，覆土の観察は十分できなかったが，自然堆積と思われる。全体に黒褐色土がみられ，上層には焼土粒子や炭化物を少量含み，中～下層には粘土ブロックを含んでいる。

遺物は，土師器の坏（1），須恵器の皿（2），土師質の皿（3）が覆土から出土している。他に土師器・須恵器片491点が出土している。

第211図　第1号井戸出土遺物実測図

出土遺物観察表（第211図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	高台付坏 土師器	B（2.2） C（9.4）	底部片で，平底である。「ハ」の字状に開く高台がつく。	底部はナデ，内面はヘラ磨き調整。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	20% 内面黒色処理

2	高台付皿 須恵器	A (15.2) B (3.4) C (5.9)	底部は平底で，高さ1cmの高台がつく。体部は内湾ぎみに立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒 灰白色 良好	30% 内面黒色処理
3	皿 土師質	A (8.8) B 1.6 C (6.2)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転糸切り，体部内・外面は横ナデ調整。	スコリア・砂粒 浅い黄橙色 普通	45%

第2号井戸（第213図）

本跡は，H10a_8区を中心に確認された井戸で，第20号住居跡の床を切って掘り込まれている。

平面形は円形を呈し，規模は径1.05m，深さ0.80m以上である。本跡は第1号井戸と異なり，円筒状に垂直に掘り下げられている。確認面下1m付近から湧き水が多くなり，遺構全体の調査は不可能であった。

覆土は観察できた部分は全て黒褐色土で，1・2層は焼土粒子や粘土ブロックを少量含み締まっているが，3層以下は焼土粒子を少量含み水分が多いため軟らかい。

遺物は出土していない。

第3号井戸（第213図）

本跡は，G10i_6区を中心に確認された井戸で，第21･22号住居跡の床を切って掘り込まれている。

平面形は円形を呈し，規模は径1.15m，深さ0.80m以上である。断面は逆台形で，壁はかるく外傾して立ち上がっている。本跡も確認面下1m付近で湧き水がみられ，それ以上の調査はできなかった。

覆土は，6層以上に分けられる。上層は暗褐色土，中～下層は黒褐色土が主で，いずれも焼土粒子，炭化粒子を含んでいる。

遺物は出土していない。

第4号井戸（第213図）

本跡は，G9a_7区を中心に確認された井戸である。

平面形は，楕円形を呈し，規模は長径1.47m，短径1.15m，深さ1.35m以上である。井戸の掘り込みは2段階になっており，1段目は確認面から1.20mの深さまで掘り込み，2段目は1段目の底面の北西部を長径0.60mの楕円形に掘り込んでいる。湧き水が多く，2段目の深さは確認できなかった。

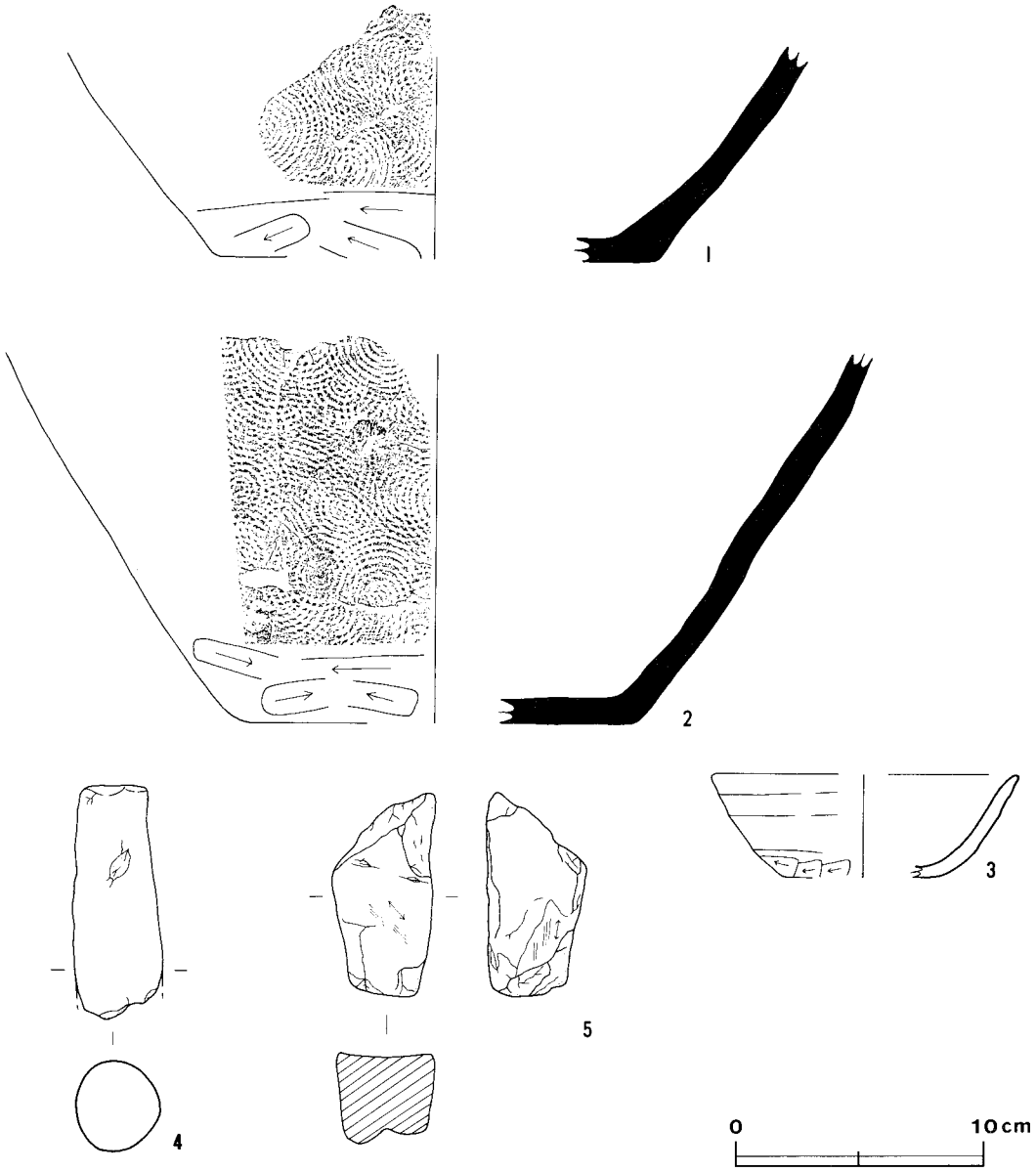
覆土の上層は水平に，下層は垂直方向に堆積している。この覆土堆積状況は，先に壁面が崩落して下層に堆積した後，その上部に土砂が次第に流入していったことを推定させる。

遺物は全て覆土からの出土で，土師器・須恵器片31点が出土している。

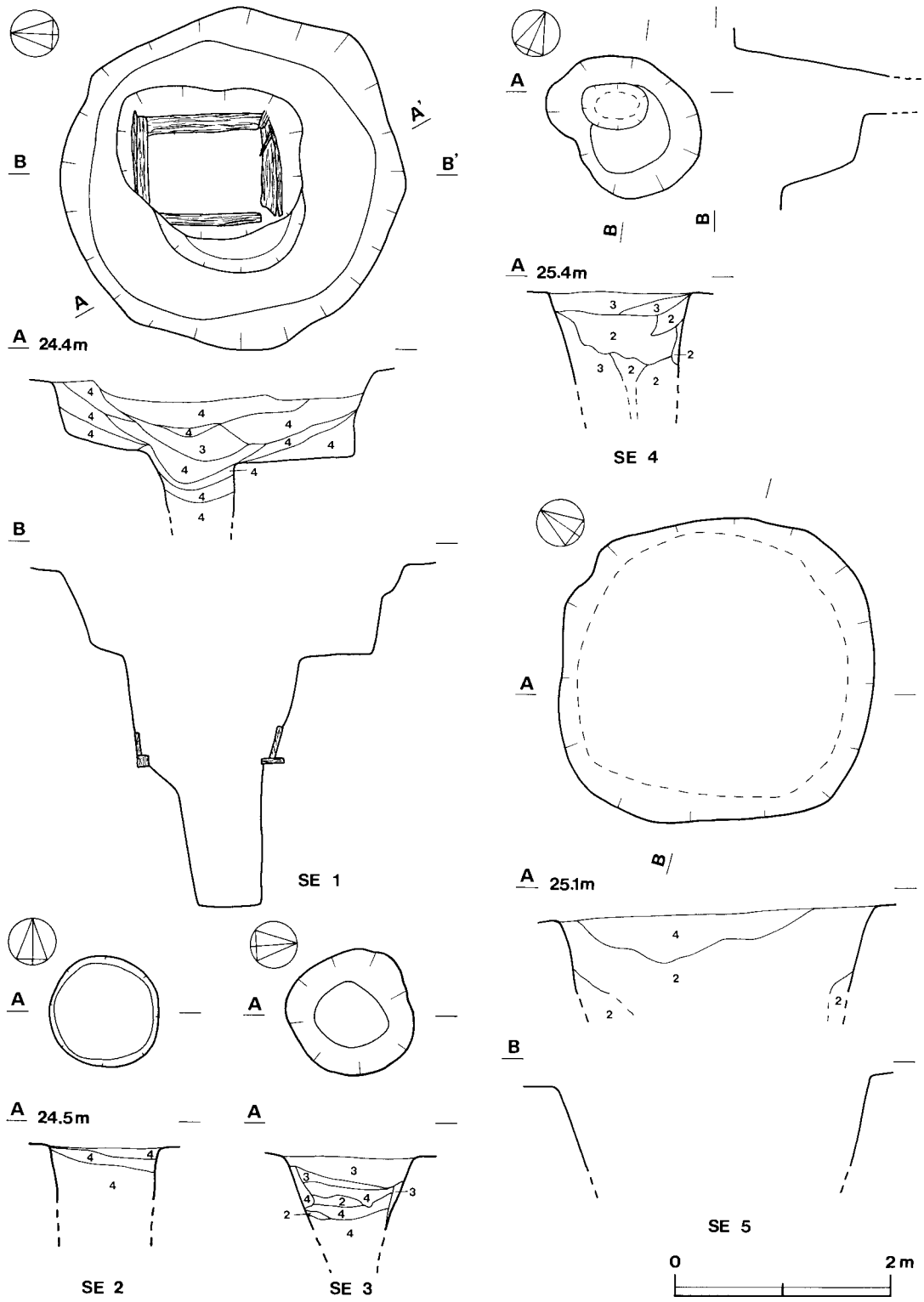
第５号井戸（第213図）

本跡は，E9c$_4$区を中心に確認された井戸で，遺跡の北側，谷に向かって傾斜する地点に位置している。

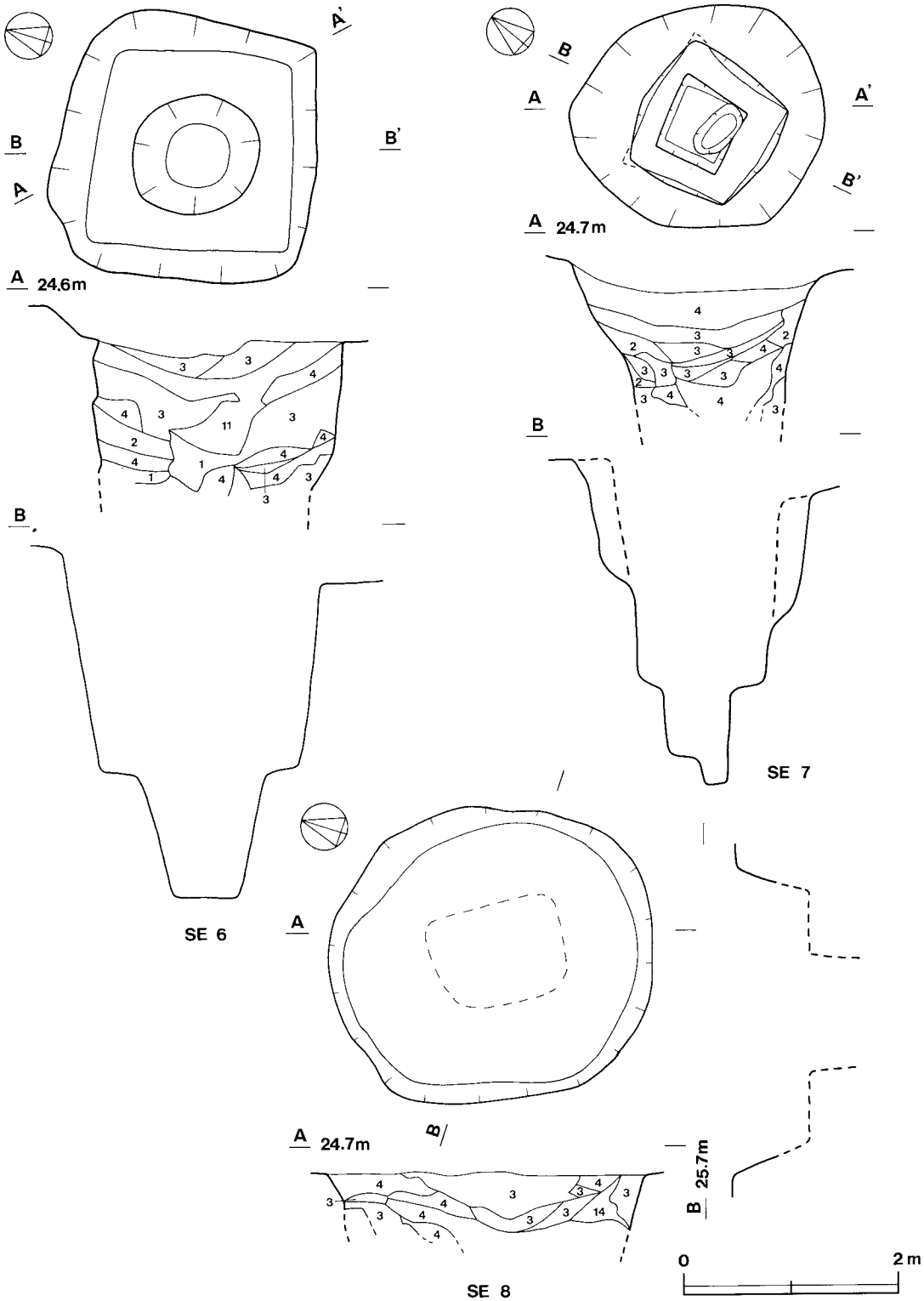
平面形は不整円形を呈し，規模は径2.85～3.15mで，深さは１m以上あるものと思われる。比較



第212図　第５号井戸出土遺物実測図



第213図　第１・２・３・４・５号井戸実測図



第214図　第６・７・８号井戸実測図

的大型の井戸であるが，２段掘り込みはなされておらず，円筒状に近い断面形を呈する。ほとんどの井戸に共通することであるが，本跡も１m程下げたところ湧き水が認められ，それ以上の調査はできなかった。

覆土は２層に大別され，１層はロームブロックを中量含む黒褐色土，２層はハードロームブロックを少量含む褐色土である。

遺物は，須恵器の甕２点（１，２），土師質の坏（３），支脚（４），砥石（５）が覆土から出土している。他に土師器・須恵器片43点が出土している。

出土遺物観察表（第212図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 須恵器	B（8.2） C（17.7）	底～胴部片。底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面は同心円文叩き目，同下端は横方向のヘラ削り，同内面はナデ調整。	長石・砂粒 灰色 普通	10%
2	甕 須恵器	B（15.0） C（16.0）	底～胴部片。底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。全体にゆがみがみられる。	胴部外面は同心円文叩き目，同下端は横方向のヘラ削り，同内面はナデ調整。	長石・砂粒 灰色 普通	20%
3	坏 土師質	A（12.2） B　4.2 C（5.6）	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	体部下端及び底部はヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒 灰黄色 普通	40%
4	支脚 土製品	高さ（9.4） 最大径 3.6 重量 185.1g	支脚の一部で，円柱状を呈する。			
5	砥石 石製品	長さ（8.0） 幅　4.3 厚さ　3.7	砥石の一部で，４面が使用されている。			

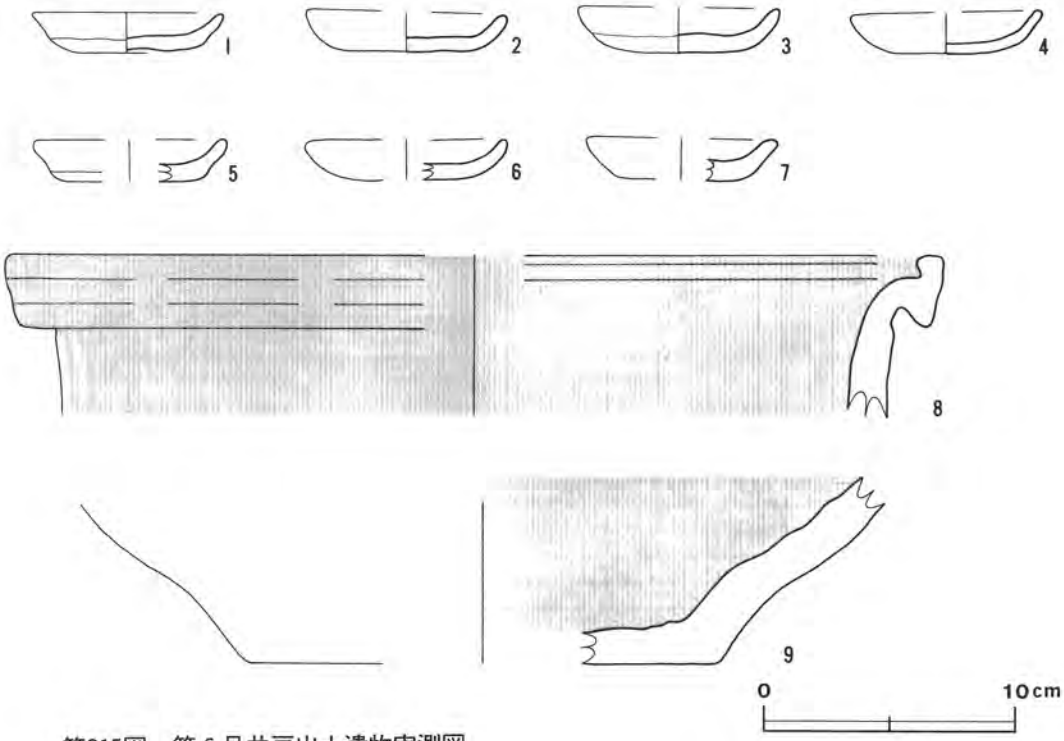
第６号井戸（第214図）

本跡はG9g3区に確認された井戸で，第33号住居跡と重複している。新旧関係は明確にできなかったが，本跡の覆土上に床が残っていなかったことから，本跡の方が新しいものと推定される。

本跡は２段掘り込みの井戸で，１段目は一辺2.40mの方形を呈し，深さは2.10mである。２段目は１段目の底面中央部を円筒状に掘り下げており，径1.15m，深さ1.15mで，確認面から最深部までは3.25mである。１段目の壁はロームと粘土であるが，２段目は粘土が混入した硬い砂層である。水は砂層部から湧いており，現在でも使用に耐える状態であった。

覆土は，褐色土や黒褐色土がブロック状に堆積していた。上層部には粘土ブロックが多量に混入しており，人為的に埋め戻したことが推定できる。

遺物は，土師質の皿14点（１，２，３，４，５，６，７）と陶器の甕２点（８，９）が覆土から出土している。他に土師器・須恵器・土師質土器片54点が出土している。



第215図　第６号井戸出土遺物実測図

出土遺物観察表（第215図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	皿 土師質	A 7.6 B 1.6 C 4.9	底部は平底で，中央部がやや凹む。体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	60%
2	皿 土師質	A 8.0 B 1.8 C 4.9	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	60%
3	皿 土師質	A 8.0 B 1.8 C 4.4	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	75%
4	皿 土師質	A (7.6) B 1.6 C (4.0)	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	45%
5	皿 土師質	A (7.6) B 1.7 C (5.3)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 浅黄褐色 普通	35%
6	皿 土師質	A (8.0) B 1.6 C (4.4)	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	40%
7	皿 土師質	A (7.6) B 1.7 C (4.9)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 褐灰色 普通	40%

8	甕 陶器	A (47.4) B (6.4)	口縁部片で，端部近くで直角に屈曲した後，外上方に短く立ち上がる。	内・外面横ナデ調整。飴釉。	砂粒 にぶい赤褐色 良好	5％
9	甕 陶器	B (6.4) C (18.6)	底部片で平底である。体部は外傾して立ち上がる。	器外面は荒いナデ調整。内面に自然釉がかかる。	砂粒 にぶい褐色 良好	10％

第７号井戸（第214図）

本跡はG9g_4区を中心に確認された井戸で，第32・33号住居跡と重複し，本跡が床面を切って掘り込まれている。

本跡は第６号井戸と同様，方形の２段掘り込みの井戸と想定されるが，上部の壁が崩れたらしく，現状では３段に掘り込まれた状態をみせている。開口部は径2.30mの円形で，深さ1.15～1.60mまでは円筒に掘り込まれ，その後，一辺1.30mの方形に0.60～0.90m掘り下げられている。さらに，一辺0.65mの方形に0.60m程掘り込まれているため，確認面から最下段の底面までの深さは2.75mである。本来は，確認面から約２mの深さまでは方形に掘り込まれていたと思われる。

覆土は，黒褐色土と暗褐色土が主に堆積しており，大部分の層に炭化物を含んでいる。壁近くの層には，上部から崩落してきたとみられるロームブロックや粘土ブロックが混入している。

遺物は出土していない。

第８号井戸（SK―３，第214図）

本跡は，G10g_2区に確認された井戸で，調査開始時には土坑としていたが，その後井戸と判明した遺構である。

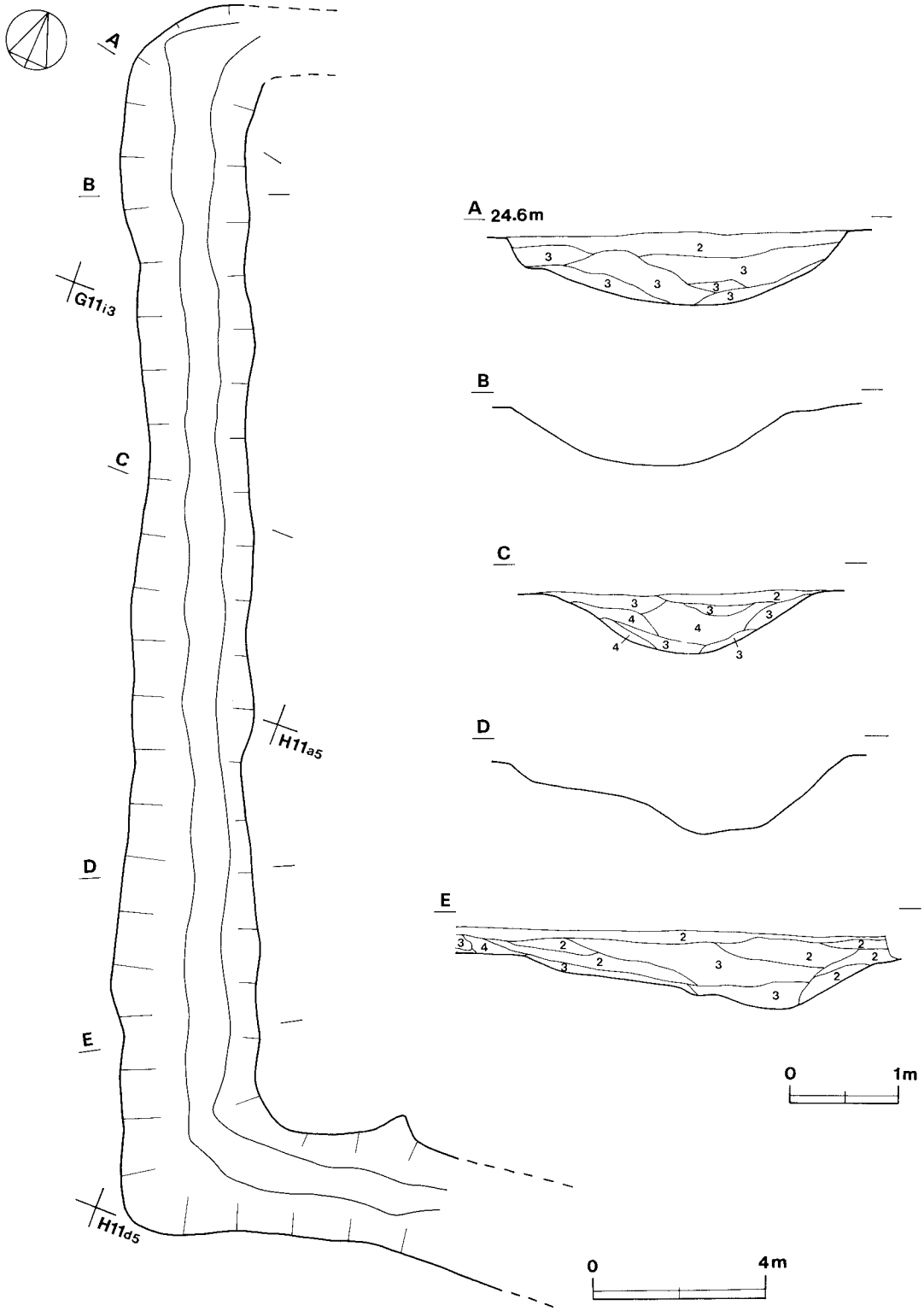
２段掘り込みの井戸と思われるが，出水がひどく，１段目の調査しかできなかった。１段目の平面形は円形を呈し，径3.05m，深さ0.50m以上であるものと思われる。ボーリングステッキを用いて探査したところ，２段目の掘り込みは長方形に掘られており，深さは１m以上あるものと推定できる。

覆土は，人為的に埋め戻したと考えられ，黒褐色土や極暗褐色土がブロック状に堆積している。覆土上層には，青灰色の粘土ブロックが多量に混入しているのが認められた。

遺物は，土師器・須恵器片92点が覆土から出土している。

第７節　溝

当遺跡からは，８条の溝が検出されている。各溝の時期や性格については，出土遺物も少なく，不明な点が多い。なお，第７号溝が欠番となっているが，これは後述するように第７号溝が第５号溝と合流し同一遺構と判明したため，第５号溝として説明したからである。



第216図　第１号溝実測図

第１号溝（第216図）

本跡はG11g_3区からH11b_7区にかけて確認され，第14号住居跡と重複している。土層の観察から，本跡の方が新しいものと思われる。

本跡の調査は西側の一部であり，東側の大部分は調査区域外に延びている。確認された状況から方形に回る遺構と推定される。北端部のG11g_3区から南東に28.50m延び，H11c_5区内で直角に北東方向に向きを変え，７mあまり先で調査区域外に消えている。全長は35.50mである。溝の規模は，G11h_3区で上幅2.90m，下幅1.00m，深さ55cm，H11a_4区で上幅2.70m，下幅0.80m，深さ70cmである。底面のレベルは，北部で23.90m，中央部から南部で23.60mであり，北から南に向けてゆるく傾斜している。断面は逆台形を呈している。

覆土は，大きく３～５層に分けられる。上層には炭化物や焼土粒子が少量含まれ，下層にはローム粒子や粘土ブロックが少量含まれ硬く締まっている。

遺物は，土師器・須恵器片38点が覆土から出土している。

第２号溝（第218図）

本跡はG11f_2区からH10b_3区にかけて確認され，第21号住居跡，第９号溝と重複し，西端で第３号溝に合流している。土層からみて第21号住居跡よりは新しいことがわかるが，第９号溝との新旧関係は明確でない。

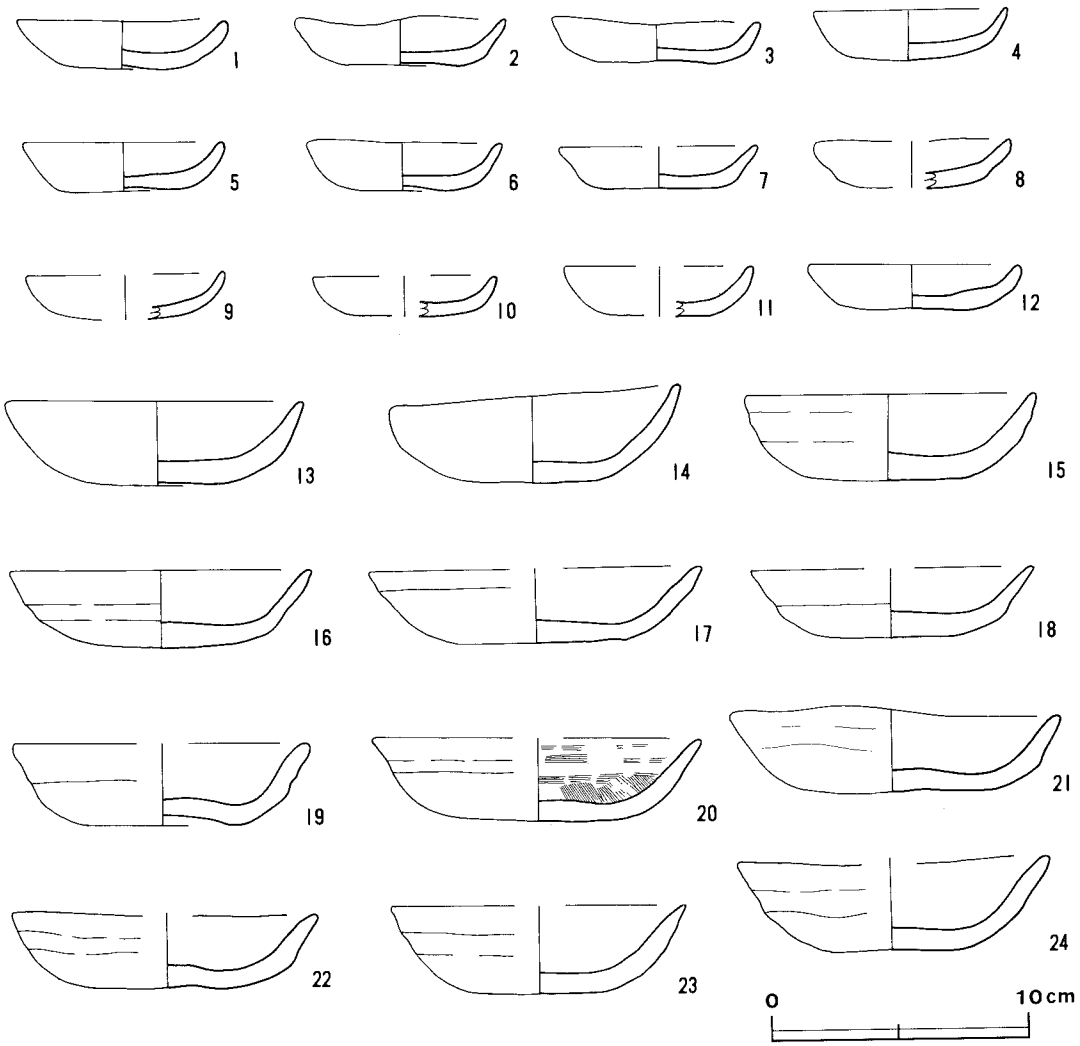
本跡の北東側の端部はG11f_2区で，ここから南西方向にほぼ一直線に延び，H10b_3区に至っている。全長は39.00mである。溝の規模はG11g_1区で上幅1.01m，下幅0.95m，深さ15cm，G10j_7区で上幅1.04m，下幅0.93m，深さ20cm，H10b_4区で上幅1.10m，下幅0.90m，深さ17cmである。底面のレベルは，北東部で24.35m，南西部で24.00mと南西方向に向かって傾斜している。断面は皿状を呈している。

覆土は，２～３層に分けられる。いずれの層もローム粒子を多く含み，硬く締まっている。

遺物は，土師質の皿18点（１～12），坏25点（13～24）が覆土から出土している。他に，土師器・須恵器・土師質土器片280点が出土している。

出土遺物観察表（第217図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	皿	A 8.4	底部は平底で，体部はわずかに内	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア	100%
	土師質	B 1.9	湾しながら立ち上がる。		橙色	
		C 4.4			普通	
2	皿	A 8.2	底部は平底で，体部は外傾して立	内・外面ナデ調整。	砂粒	90%
	土師質	B 2.0	ち上がる。体部下位に稜をもつ。		橙色	
		C 4.4			普通	



第217図　第２号溝出土遺物実測図

3	皿	A 8.3	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒	70%
	土師質	B 1.9			橙色	
		C 4.6			普通	
4	皿	A 7.1	底部は丸底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア	100%
	土師質	B 3.9			橙色	
					普通	
5	皿	A 7.9	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	体部内面は横ナデ，他はナデ調整。	砂粒	100%
	土師質	B 2.0			橙色	
		C 4.0			普通	

6	皿 土師質	A 27.6 B 2.0 C 4.0	底部は平底で，中央部はやや凹む。体部は内湾ぎみに立ち上がる。	体部内面は横ナデ，他はナデ調整。	砂粒 橙色 普通	100%
7	皿 土師質	A (8.0) B 1.7 C (5.0)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面は横ナデ，他はナデ調整。	砂粒 橙色 普通	40%
8	皿 土師質	A (7.6) B 1.9 C (3.5)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がる。体部下端に弱い稜をもつ。	内・外面ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	45%
9	皿 土師質	A (8.0) B 1.8	底部は丸底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ハケ目状のナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	30%
10	皿 土師質	A (7.2) B 1.6 C (3.6)	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	40%
11	皿 土師質	A (7.6) B 2.0 C (4.0)	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	45%
12	皿 土師質	A 8.2 B 1.8 C 4.1	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	65%
13	坏 土師質	A 12.2 B 3.3 C 6.0	底部は平底で，体部は内湾ぎみに立ち上がる。	底部はヘラ削り，他はナデ調整。	砂粒 灰白色 普通	100%
14	坏 土師質	A 11.5 B 3.9	底部は丸底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	95%
15	坏 土師質	A 11.3 B 3.4 C 6.6	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	底部及び体部下端はヘラ削り，内面及び体部上端は横ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	95%
16	坏 土師質	A 11.9 B 3.2 C 5.7	底部はやや丸みのある平底で，中央部が厚い。体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	80%
17	坏 土師質	A (13.1) B 2.9 C (6.4)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 淡い橙色 普通	40%
18	坏 土師質	A (11.1) B 2.7 C (5.0)	底部は平底で，体部は器厚を減じながら外傾して立ち上がる。体部中位に稜をもつ。	体部上位は横ナデ，他はナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	40%
19	坏 土師質	A (10.6) B 3.2 C (6.0)	底部は平底で，中央部が凹んでいる。体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒 淡い橙色 普通	50%

20	坏 土師質	A (13.0) B 3.3 C 7.0	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	体部上端外面は横ナデ，他はナデ調整。	砂粒 浅い黄橙色 普通	30%
21	坏 土師質	A 12.9 B 3.5 C 6.9	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	65%
22	坏 土師質	A 12.2 B 3.0 C 5.6	底部は平底で，体部は内湾しながら立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒 淡い赤橙色 普通	60%
23	坏 土師質	A (11.6) B 3.5 C (5.6)	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面は横ナデ，他はナデ調整。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	40%
24	坏 土師質	A 12.2 B 3.7 C 5.0	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 浅い黄橙色 普通	50%

第3号溝（第221図）

本跡はG9b$_4$区からH10b$_4$区にかけて確認され，第2号地下式坑，第5号溝と重複している。土層の観察から，本跡が最も新しいと思われる。

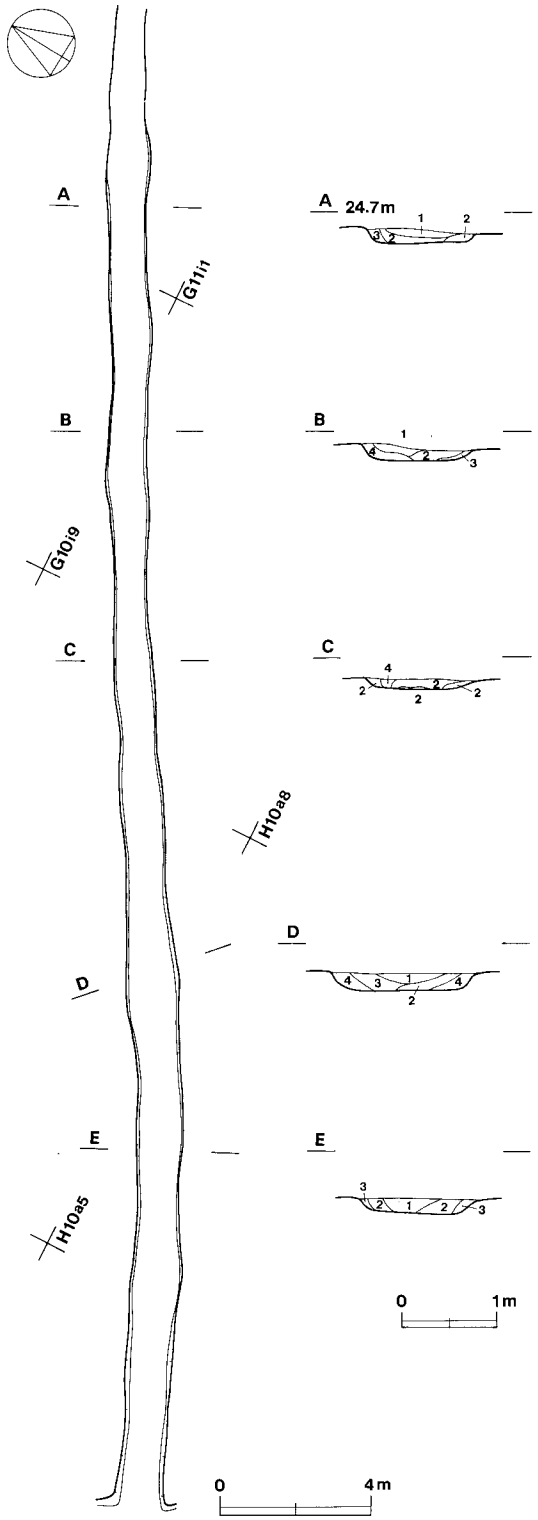
本跡はG9b$_4$区で第5号溝と合流しており，ここから東方に延びてG9b$_0$区に至る。ここで南方に向きを変え，H10b$_3$区で東から延びてくる第2号溝と合流した後第9号溝とH10b$_4$区で合流して終っている。全長は87.00mである。溝の規模はG9b$_5$区で上幅1.20m，下幅0.90m，深さ25cm，G9d$_0$区で上幅0.90m，下幅0.40m，深さ35cm，H10b$_3$区で上幅1.20m，下幅0.90m，深さ23cmである。底面のレベルは，北部で24.50m，南部で23.60mとなり，南に向かって大きく傾斜している。断面は逆台形を呈している。

覆土は，2～3層に分けられる。上層には焼土粒子やローム粒子を少量含み，下層にはロームブロックを少量含んでいる。

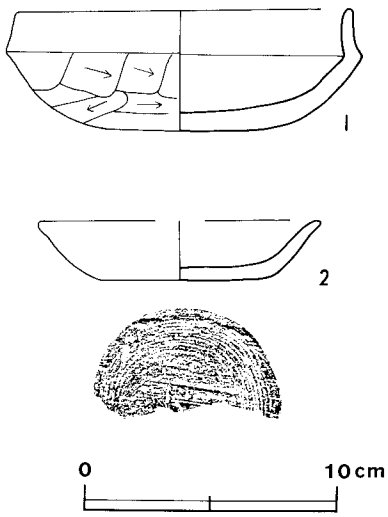
遺物は，土師器の坏（1），土師質の坏（2）が覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片134点が出土している。

出土遺物観察表（第219図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師質	A 13.2 B 4.9	底部は丸底で，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反ぎみに内傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	90%



第218図　第２号溝実測図



第219図　第３号溝出土遺物実測図

第４号溝（第222図）

本跡はG9c₄区からG8f₉区にかけて確認され，第35・93・111号住居跡と重複している。新旧関係は明確でないが，各遺構の検出状況からみて本跡が最も新しいと思われる。

本跡はG9c₄区で第５号溝と合流しており，ここから南西方向に直線的に延び，G8f₉区で終っている。全長は24.60mである。溝の規模はG9d₃区で上幅0.90m，下幅0.35m，深さ30cm，G9e₁区で上幅0.55m，下幅0.40m，深さ35cm，G8f₉区で上幅0.45m，下幅0.35m，深さ10cmである。底面のレベルは北東部で24.50m，南西部で24.20mであり，南西に向かって傾斜している。断面は皿状を呈している。

覆土は，２～３層に分けられる。大部分は褐色土で，ローム粒子や砂粒を含んでいる。

遺物は全て覆土からで，土師器・須恵器片49点が出土している。

2	坏 土師質	A 11.4 B 2.3 C 6.9	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	内・外面ナデ調整。	砂粒 淡い橙色 普通	50%

第5号溝（SD—7を含む，第223図）

本跡は，第5号溝及び第7号溝として別々に調査を実施したが，G9b_3区で合流したため同一の溝と考え，第5号溝とした。7軒の住居跡と重複しているが，すべて本跡が切っている。

本跡はG8e_7区から北東方向に延び，G9b_3区に至って直角に南東方向に向きを変え，その後G9f_6区で再度北東方向に曲がり，23m先で調査区外に消えている。なお，G9d_0区で第3号溝とG9c_4区で第4号溝とそれぞれ接続している。全長は54.00mである。溝の規模はG8e_8区で上幅0.50m，下幅0.15m，深さ30cm，G9c_4区で上幅1.70m，下幅0.15m，深さ25cm，G9d_0区で上幅1.90m，下幅0.20m，深さ65cmである。底面のレベルは東部で24.15m，西部で23.30～23.40mとなり，全体として西に傾いている。断面は皿状を呈している。

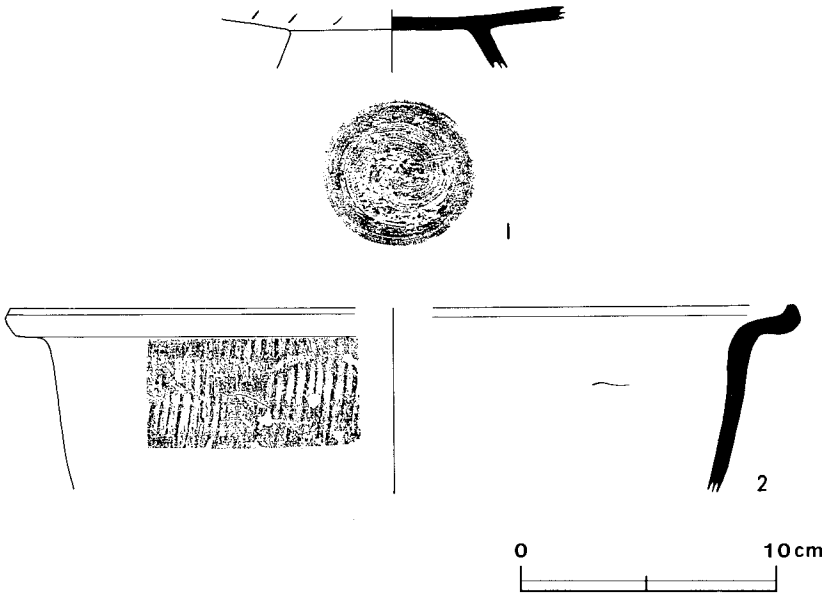
覆土は，2～5層に分けられる。各層ともローム粒子が含まれ，締まりがなく軟らかい。

遺物は出土していない。

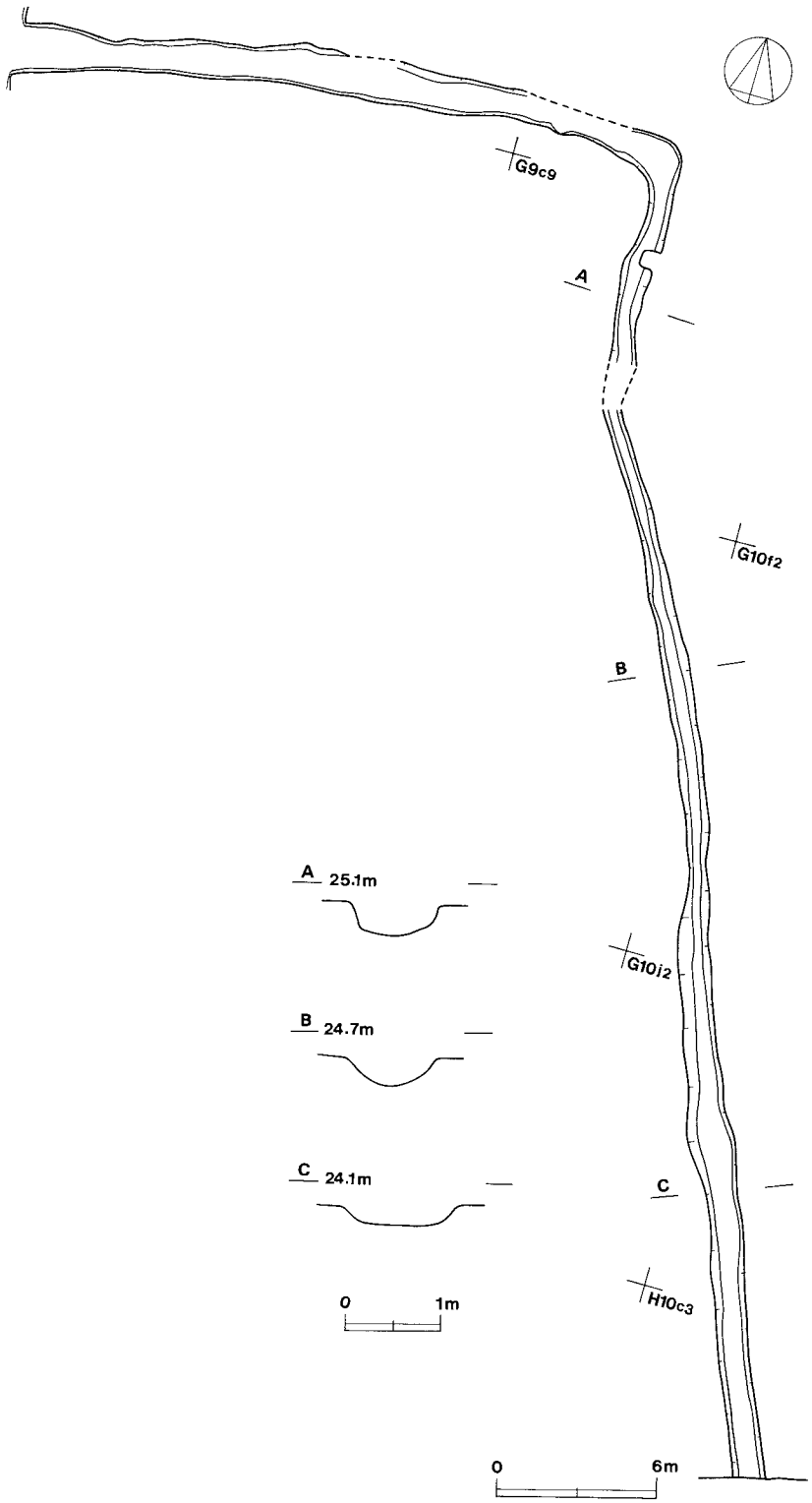
第6号溝（第224図）

本跡はE9c_1区からF10b_5区にかけて確認され，第55・56・57・102・104号住居跡と重複している。本跡は全ての住居跡を切って，掘り込まれている。

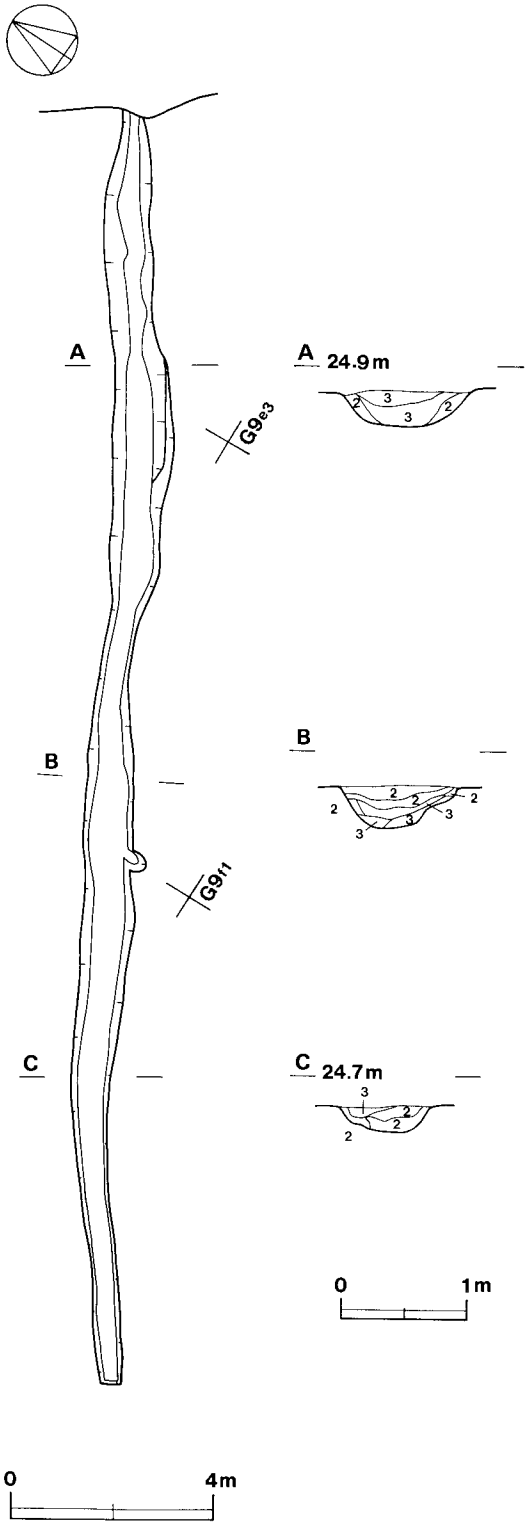
東端部のF10b_5区から西北方向に直線的に延びてE9j_5区に至り，ここで北西方向に向きを変え，E8c_0区付近で遺跡北側の谷津に流入していると思われる。E9h_4区では，北東側から延びてくる第8号溝と合流している。全長は73.00mである。溝の規模はF10a_1区で上幅2.30m，下幅0.70



第220図　第6号溝出土遺物実測図



第221図　第３号溝実測図



第222図　第４号溝実測図

m，深さ90cm，E9e₁区で上幅2.10m，下幅0.25m，深さ72cmである。底面のレベルは東部で24.90～24.95m，中央部から北部で24.80～24.90mを示し，わずかではあるが北側の谷津に向かって傾斜している。断面は逆台形を呈している。

覆土は，３～５層に分けられる。全体的にロームブロックを含んでおり，締まりがなく軟らかい。

遺物は，須恵器の盤（１）と鉢（２）が覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片523点が出土している。

第８号溝（第225図）

本跡はE10b₃区からE9h₄区にかけて確認され，E9d₉区で第98号住居跡と接している。

E10b₃区が本跡の東端部で，ここから南西方向に直線的に延び，E9d₈区で南東及び南西に２度屈曲し，そのまま南西方向に向かいE9h₄区で第６号溝と合流している。全長は29.00mである。溝の規模はE10b₂区で上幅0.85m，下幅0.45m，深さ25cm，E9g₆区で上幅1.10m，下幅0.80m，深さ30cmである。底面のレベルは，屈曲部の東側では25.10m，西側では25.30mとなり，全体としては東側のほうが低くなっている。断面は皿状を呈している。

覆土は，２～３層に分けられる。褐色土が多く，各層ともローム粒子を多量に含み，硬く締まっている。

遺物は全て覆土からで，土師器・須恵器片168点が出土している。

出土遺物観察表（第220図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	盤 須恵器	B（2.5）	底部は平底で，「ハ」の字状に開く高台がつく。体部は直線的に大きく外傾して開く。	底部は回転ヘラ削り，高台は横ナデ調整。 水挽き成形。	長石 にぶい黄色 普通	40%
2	鉢 須恵器	A（31.5） B（7.4）	胴部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は外上方に尖る。	胴部外面は縦位の叩き目，同内面は横位のナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母 スコリア にぶい黄橙色 普通	10%

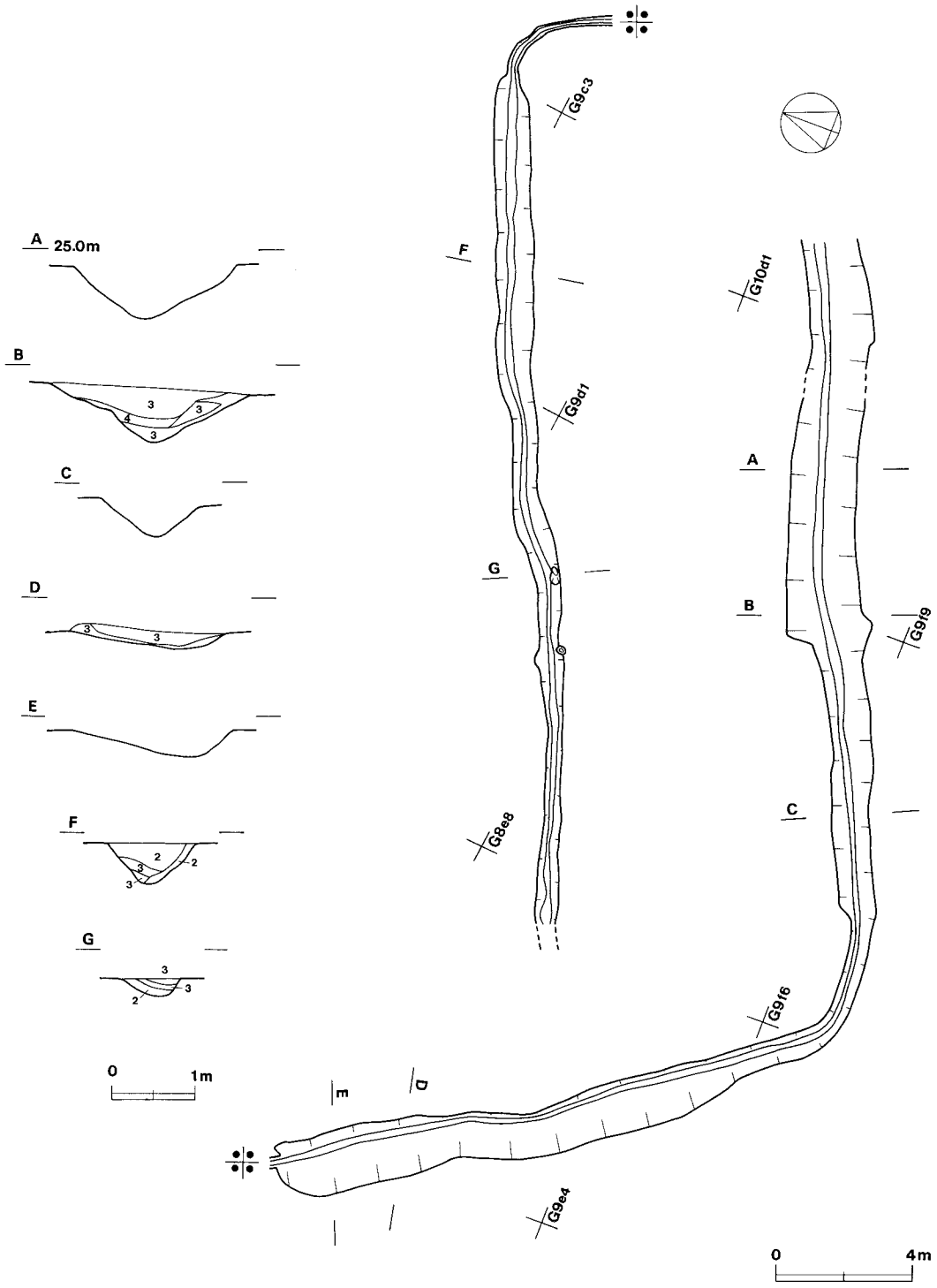
第9号溝（第226図）

本跡はF10j_2区からH9f_8区にかけて確認され，第24・78号住居跡，及び第2号溝と重複している。調査時の所見から，2軒の住居跡よりも本跡の方が新しいと思われるが，溝との新旧関係は明確でない。

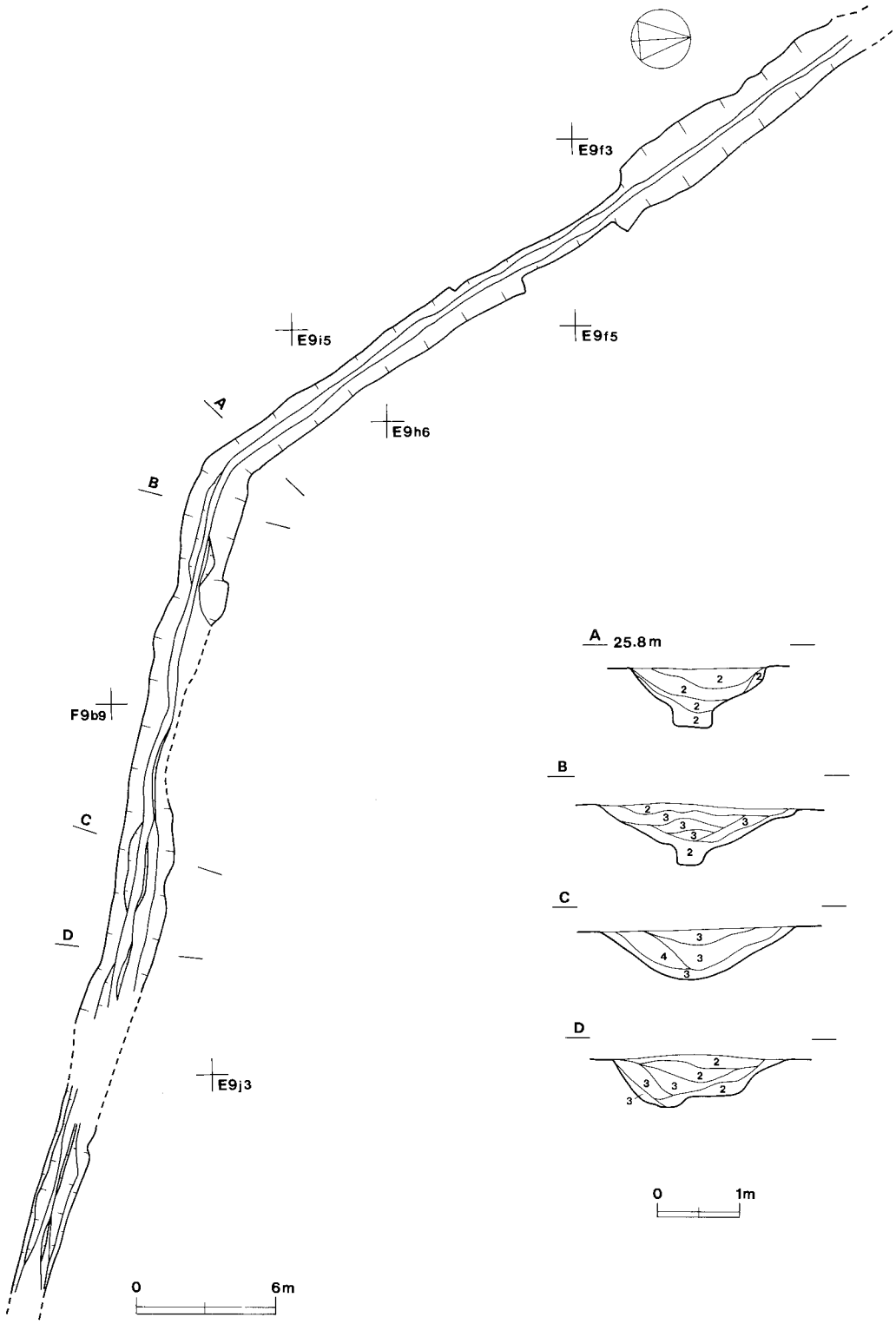
本跡の北側は調査区域外のため不明であるが，第5号溝と接続することが推定できる。F10j_2区から南東方向に直線的に延びてH10d_5区に至り，ここで南西方向に直角に向きを変え，H9f_8区まで続いている。全長は51.00mである。溝の規模はH10b_4区で上幅0.80m，下幅0.40m，深さ25cm，G9j_4区で上幅0.70m，下幅0.30m，深さ25cmである。底面のレベルは，北部で24.00m，南部で22.90mとなり，南側に向かって大きく傾斜している。断面は逆台形を呈している。

覆土は2層で，ともに焼土粒子を少量含んでいる。

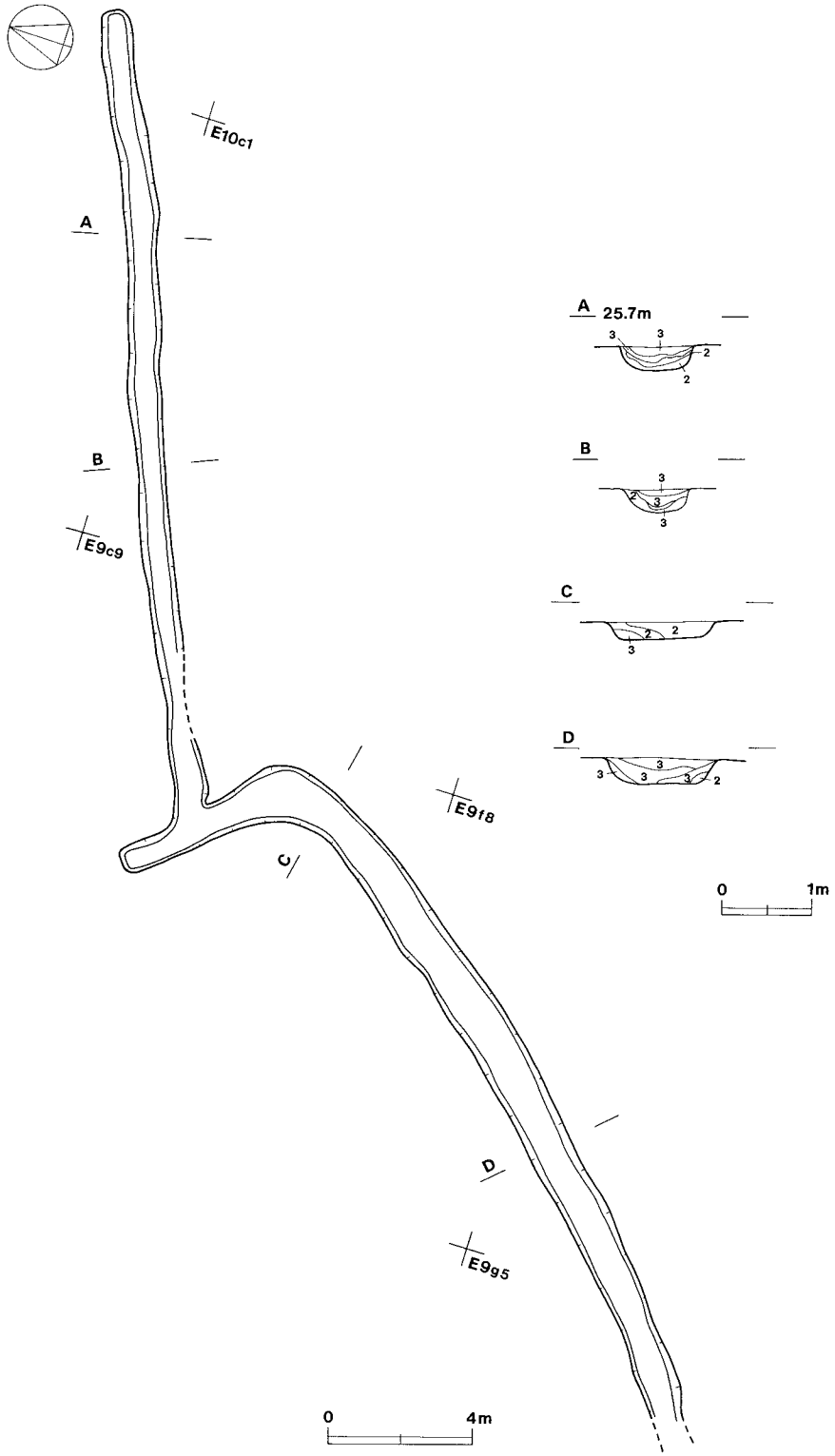
遺物は少量で，土師器・須恵器片22点が覆土から出土している。



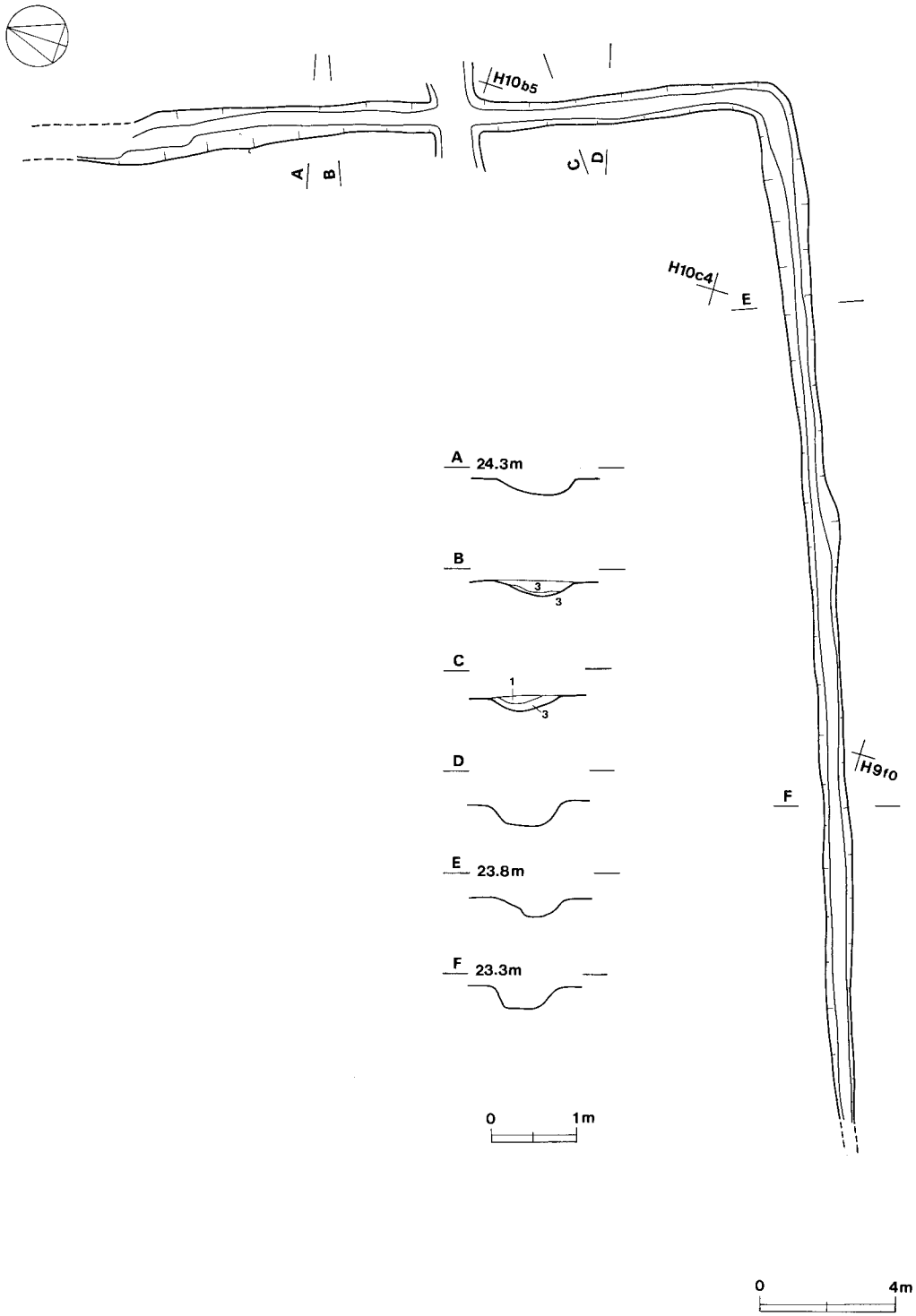
第223図　第５号溝実測図



第224図　第６号溝実測図



第225図　第８号溝実測図



第226図　第９号溝実測図

第8節　まとめ

1　竪穴住居跡と出土遺物について

今回の調査で検出された住居跡は，これまで述べてきたように112軒である。これらの住居跡は，出土遺物から次のようにⅠ～Ⅴ期に分けることができる。

Ⅰ期　6世紀後半　　Ⅱ期　8世紀前半

Ⅲ期　9世紀前半　　Ⅳ期　9世紀後半

Ⅴ期　12世紀以降

ここでは，各時期毎に住居跡と出土遺物について概観し，まとめとしたい。

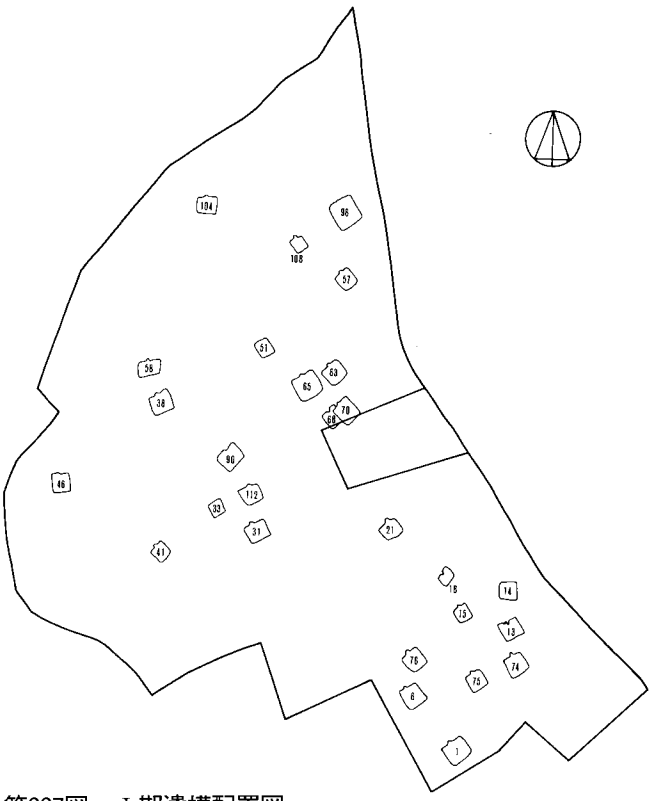
(1)　Ⅰ期（6世紀後半）

Ⅰ期に編年される住居跡は27軒で，遺跡全域から散在して検出されている。これらの住居跡は，大きく遺跡の北側，及び西側，そして南側の3地域にグルーピングすることは可能である。各グループは9軒ずつの住居跡で構成されており，グループ間の時期差等は認められない。

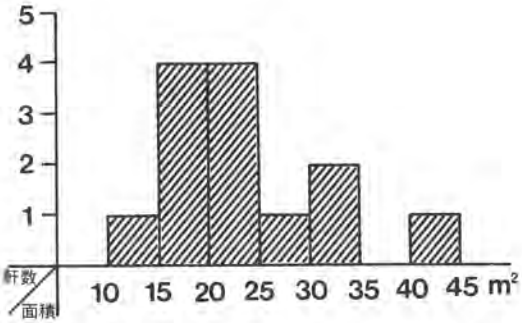
Ⅰ期の住居跡は，比較的大型のものが多く，最も大規模なものは第96号住居跡で，長軸7.09mを測る。他の住居跡も，概ね一辺が5～6m台の規模を有している。最小の住居跡は第108号住居跡で，長軸が3.93mである。

ピットは，主柱穴4か所，出入口に関連する柱穴1か所の計5か所検出されるのが基本である。他の住居跡と切り合っていたり，残存状況が悪かった住居跡では1か所も検出できなかった例もあるが，大部分は5か所のピットが検出されている。第75･108号住居跡のように，1か所だけしか検出されなかった住居跡も認められる。

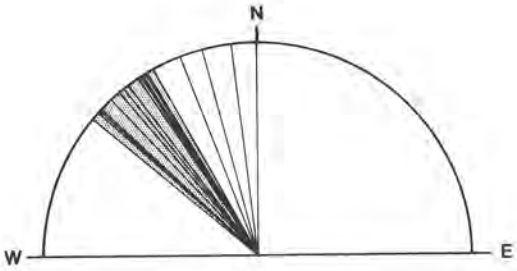
カマドは，北壁中央部に山砂や粘土で構築されている。住居跡の残存状態が悪いこともあり，全体の形状がわかるカマドはなく，袖部だけが残っていること



第227図　Ⅰ期遺構配置図



第228図　Ⅰ期住居跡床面積



第229図　Ⅰ期住居跡主軸方向

が多い。煙道の張り出しは，全体に弱く，平均すると40～50cmである。

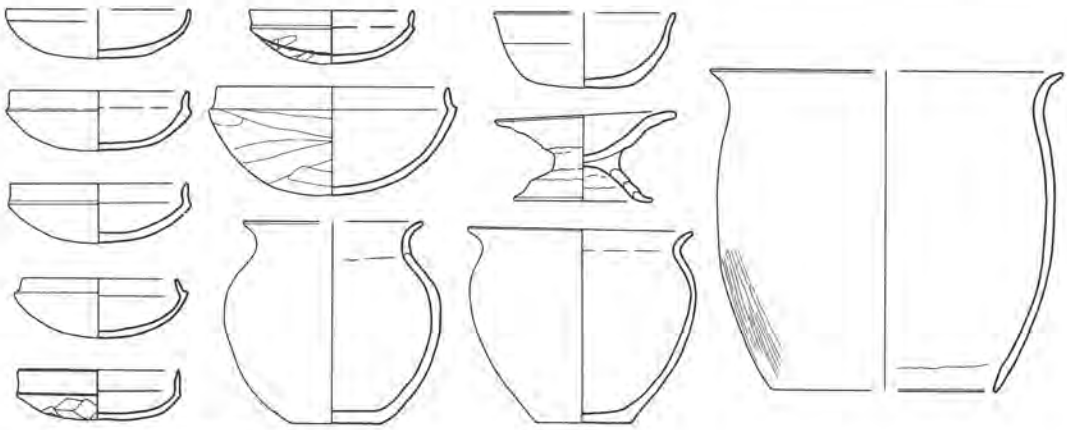
主軸方向をみると，東に傾く住居跡は1軒もなく，全て西に傾いている。特に西へ30～50°の間に90%の住居跡が集中しているのが，大きな特徴である。

床面積は，30m²を超す住居跡が3軒認められ，最も狭い住居跡でも14.8m²である。該期の住居跡の平均床面積は，24.3m²である。この数値は，後述するⅡ期以降の床面積と比べると，2～3倍に相当している。

出土遺物は全て土師器と言ってもよいほどで，わずかに混入したと思われる須恵器片があるが，図示できるものはない。器種としては，坏・埦・高坏・甕・甑の5種類が出土している。

坏は丸底で，口縁部と底部の境に稜を有している点が特徴である。口縁部の形状等から5種類に分類可能であるが、大きな差異は認められない。調整は，口縁部内・外面は横ナデ，底部はヘラ削り，器内面はナデ調整が基本である。

甕は大型と小型の2種類が認められ，口縁部はいずれも単純口縁である。胴部の調整は，縦方向のヘラ磨きやヘラ削りが主である。



第230図　Ⅰ期出土遺物

甑は，底部全面が開孔する単孔式のものである。

Ⅰ期の実年代としては，出土遺物から6世紀後半と考えられる。ただ，第33・63・68号住居跡からはやや古い様相をみせる遺物が出土していることや，切り合い関係から，他の住居跡よりも多少先行することが推定でき，6世紀中頃と思われる。

(2) Ⅱ期（8世紀前半）

Ⅱ期に編年される住居跡は6軒で，遺跡全域から点在して検出されている。規模はⅠ期より小型になり，最大の第44号住居跡でも長軸の長さは5.70mである。他の住居跡は，一辺が3～4m台である。

ピットはⅠ期同様5か所検出された住居跡もあるが，不規則な位置に数か所検出されるか，あるいは全く検出されない例が多くなっている。住居跡の規模が小さくなることと，ピットが明確に検出できないという傾向は，Ⅱ期以降，どの時期にも共通する現象である。これには，生活環境や建物の構造的な変化が理由のひとつと考えられるが，現時点では，はっきりした根拠はつかめていないのが実状であろう。

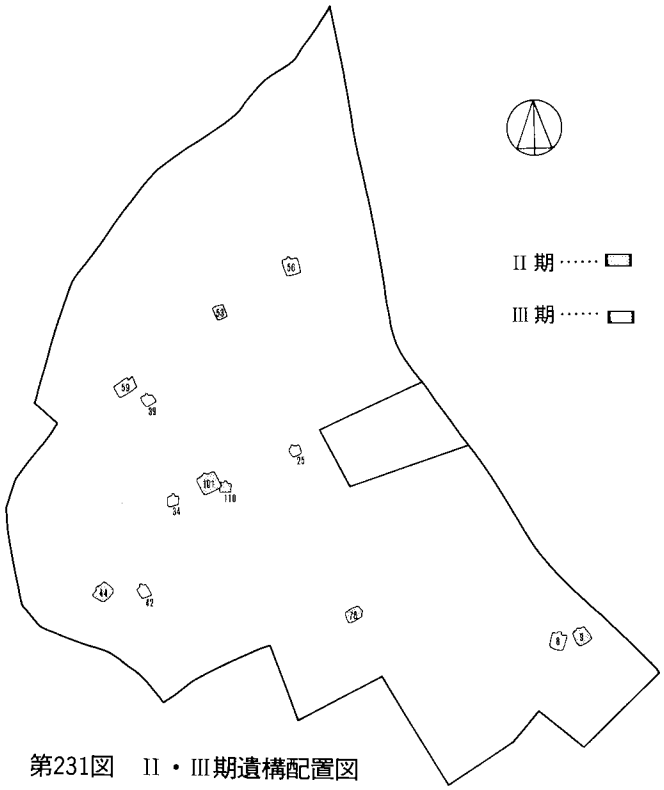
カマドは，北壁中央部に構築されており，Ⅰ期と比べても大きな変化は認められない。

主軸方向は全体に西に傾くが，特定の角度域に集中する傾向はみられない。

床面積はⅠ期と比較して大きな変化が認められ，Ⅰ期よりおよそ10m²少ない14.3m²が平均値である。

遺物は，須恵器の量が増加してくるが，まだ主体となるのは土師器である。土師器には坏・浅鉢・甕がみられ，須恵器では坏・蓋・長頸壺・甑等がある。

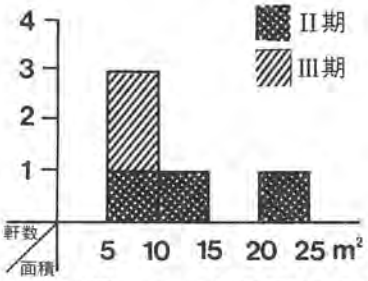
土師器の坏は，小型と大型の2種が認められる。ともに丸底で，底部と口縁部の境に稜がわずかに残存し，小型坏の口縁部は直立，大型坏の口縁部は外反している。調整技法は両者とも同一で，口縁部内・外面は横ナデ，器内面は指頭あるいはヘラによるナデ，底部はヘラ削りである。



第231図　Ⅱ・Ⅲ期遺構配置図

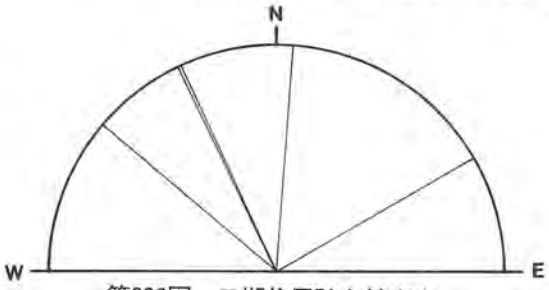
浅鉢はⅠ期では出土しなかった器種で，底部から胴部にかけて器壁を減じながら立ち上がり，口縁部でかるく外反している。

甕はいわゆる「常総型」の甕で，長胴を呈し，胴部は縦方向のヘラ磨き（あるいはヘラ削り）が施され，口縁端部はかるくつまみ出されている。器壁は，非常に薄いものが多い。この種の甕は，Ⅱ期からⅣ期まで連続してみられるが，Ⅳ期以後は消滅していくようである。



第232図　Ⅱ・Ⅲ期住居跡床面積

須恵器の坏には，丸底と平底のものがある。底部の切り離しは回転ヘラ切りで，その後回転ヘラ削りあるいは手持ちヘラ削りで底部全面を丁寧に調整している。体部下端のヘラ削りは，この段階ではほとんどみられない。



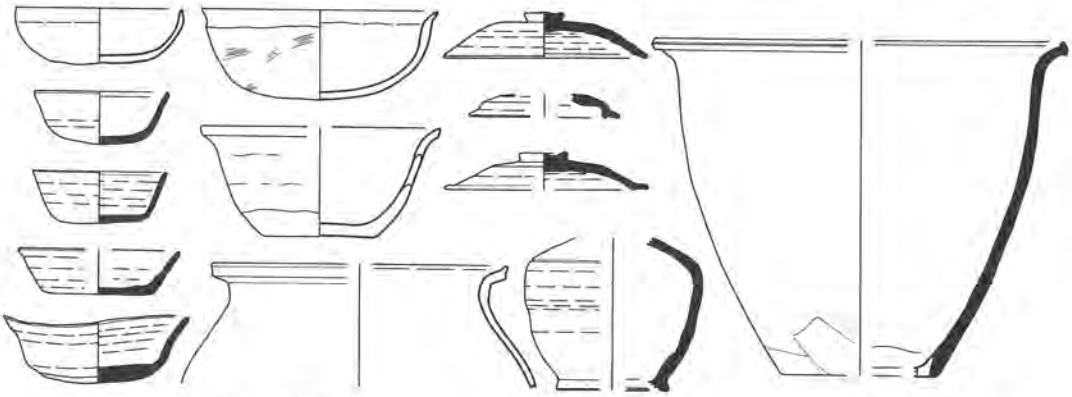
第233図　Ⅱ期住居跡主軸方向

蓋は全てにかえりがみられ、天井部と口縁部の境が屈曲している。つまみは，径が比較的大きく高さが低い環状のものである。かえりのみられる蓋はこの時期までで，以後は消失する。

壺は比較的小型のもので，底部に低い高台がつき，肩部で「く」の字状に屈曲した後，上方に開きながらのびる長頸がつくと思われる。この種の壺は，Ⅳ期まで存続しているようである。

甑については，県内では９世紀初頭頃から出現すると考えられており，本期のものとするより，他遺構からの流入と考えた方がよさそうである。

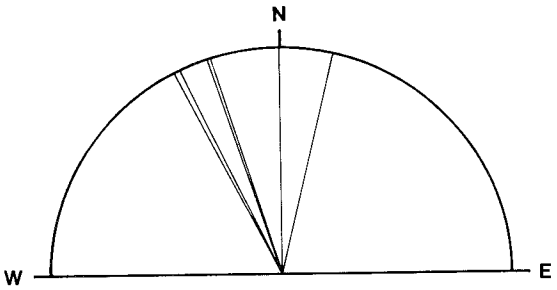
Ⅱ期の実年代としては，８世紀前半と考えることができる。もちろん，細分化は可能であろうが，重複している第101・110号住居跡の遺物をみても大きな隔たりは認められない。なお，第53号住居跡から出土した須恵器の蓋は，本期の遺物の中では最も古い形態を残しており，７世紀代


第234図　Ⅱ期出土遺物

まで遡る可能性がある。

(3) III期（9世紀前半）

III期に編年される住居跡は，8軒である。これらの住居跡は，遺跡中央部から，西側にかけて点在している。重複している住居跡は，一軒もない。



第235図　III期住居跡主軸方向

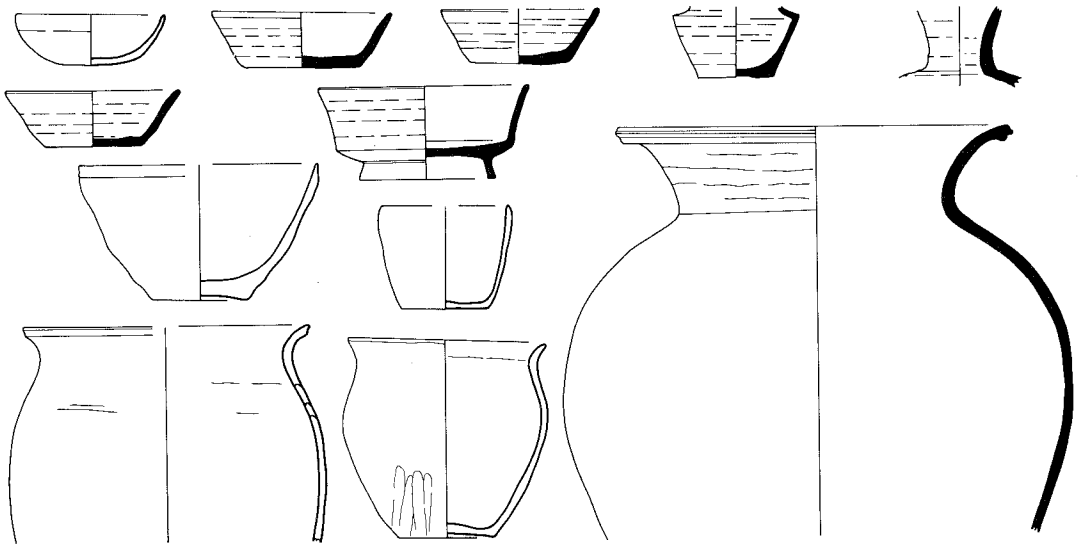
住居跡の規模は，II期とほとんど同様で，全体に小型である。一辺の長さは，3～4m台のものが多く，第100号住居跡だけ例外的に5mを越えている。また，最小の住居跡は，第34号住居跡で長軸2.71mである。

ピットは，比較的大型の第56・100号住居跡では4～5か所検出されたが，他の住居跡では全く検出されないか，不規則な位置に2～3か所しか検出されず，II期と同様な傾向がみられる。

カマドの構築位置は，相変わらず北壁中央部であるが，第25号住居跡ではやや西に片寄るように，東・西の何れかの方向に片寄る現象が認められるようになる。一般的に，時代が下るほど煙道が壁外に大きく張り出すようになると言われているが，当遺跡ではI期から後述するIV期まで極端な変化はみられない。

主軸方向をみると，I～II期よりも西への傾きは小さくなり，真北に近づきつつあることがわかる。

床面積はII期よりもさらに狭くなり，平均11.2m²という数値である。現在の坪数に換算すると，およそ3.4坪に当たり，一家族を4～5人としてもかなり窮屈であったろうと思われる。


第236図　III期出土遺物

遺物は，土師器が少なくなり，須恵器が増加する。土師器は，坏がほとんど姿を消し，甕中心の構成になり，須恵器では坏の比率が増し，壺・甕も出土している。

土師器の坏は丸底で，鬼高期以来の形状を残しているが，口縁部と底部の境にみられた稜は消失し，わずかにその痕跡を残すだけとなる。

鉢は，胴部が外傾して開くものと，直立ぎみに立ち上がるものがある。

甕は大型と小型の２種があり，両者とも最大径を胴部上位に有し，調整技法も縦位のヘラ磨き，あるいはヘラ削りが主で，II期と比較して目立った変化はない。なお，大型甕の口縁端部は外上方につまみ出されているものが多い。

須恵器の坏は，II期でみられた丸底は消失し，平底が定着する。ただ，II期とIII期では１世紀近い隔たりがあることから，II期からIII期に移行する間に平底化が定着したと思われる。底部はヘラ切り後，回転ヘラ削りあるいは２方向の手持ちヘラ削りで調整されているが，底面中央部をヘラ切り離しのままにする坏も出現する。体部下端は，回転ヘラ削りや静止ヘラ削りされている。口径に対する底径比は，56～71である。高台付坏もこの時期からみられるようになる。

壺は大型と小型のものがあり，大型壺はII期でみられた長頸壺になると思われる。小型壺は残存部の形状から，短頸の広口壺と推定される。

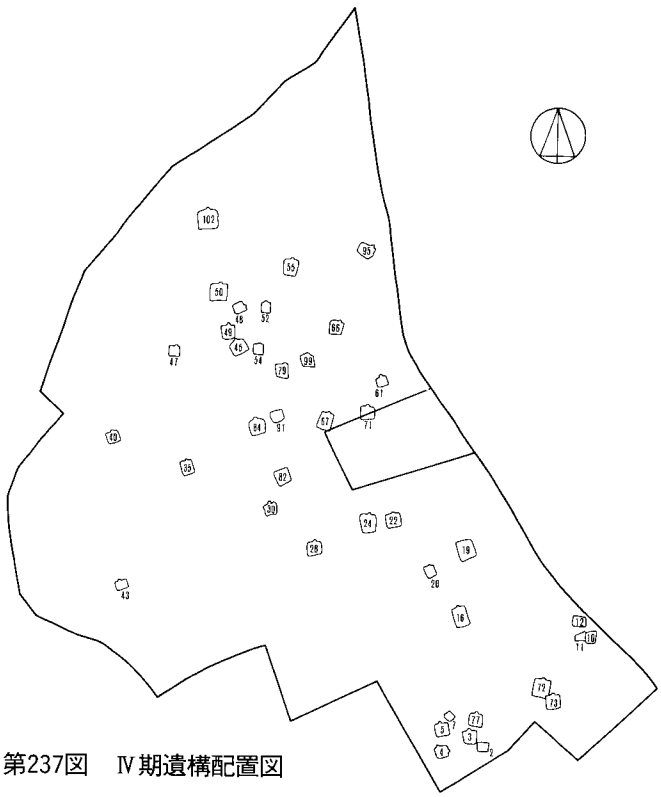
甕は，胴部が球状を呈し，内・外面に叩き目が残る。この時期の須恵器は焼成状態が良く，特に坏類は硬く焼き締まり，叩くと金属的な音がするほどである。

本期は，９世紀前半に位置づけることができる。

(4)　IV期（９世紀後半）

IV期は当遺跡の主体を成す時期で，遺構・遺物とも多く，検出された住居跡は40軒である。各住居跡は１か所に集中することなく，遺跡全体から検出されている。遺構数が多い割には重複が少なく，第10･11号住居跡，第72・73号住居跡の２か所で切り合いが認められるだけである。

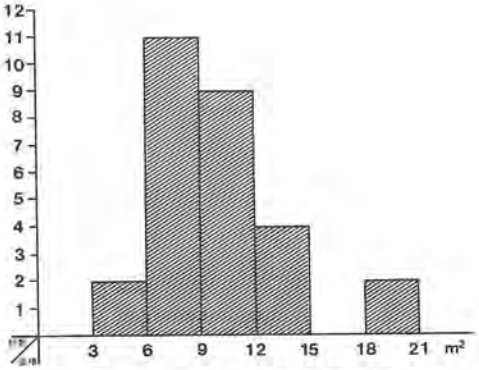
住居跡の規模は，III期と比較して大差はなく，わずかに小型



第237図　IV期遺構配置図

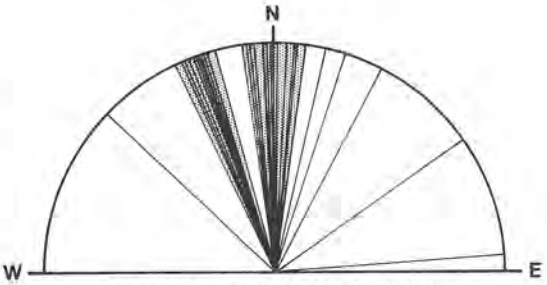
化する程度である。大型の住居跡でも一辺が5mを越える程度で，大多数の住居跡は3m台に集中する傾向が窺える。

ピットは，大型の住居跡では4～5か所検出されているが，大多数の住居跡では全く検出されないか，不規則な位置に数か所検出されるだけである。ピットの検出状況については，II期以降規則的な位置に検出できない傾向が続いており，大型と小型の住居跡では上屋構造に明らかな差異のあったことが推定される。



第238図　Ⅳ期住居跡床面積

カマドは，北壁中央部に構築されることが多い。しかし，本期になって北カマドの原則がくずれをみせ，北東コーナー部近くに構築される住居跡が出現する。第48号住居跡では東壁中央部に認められ，第95号住居跡では北東コーナー部と東壁中央部の2か所に構築されている。いずれにしても，カマドの構築場所が北側から東側に移動する傾向を認めることができる。



第239図　Ⅳ期住居跡主軸方向

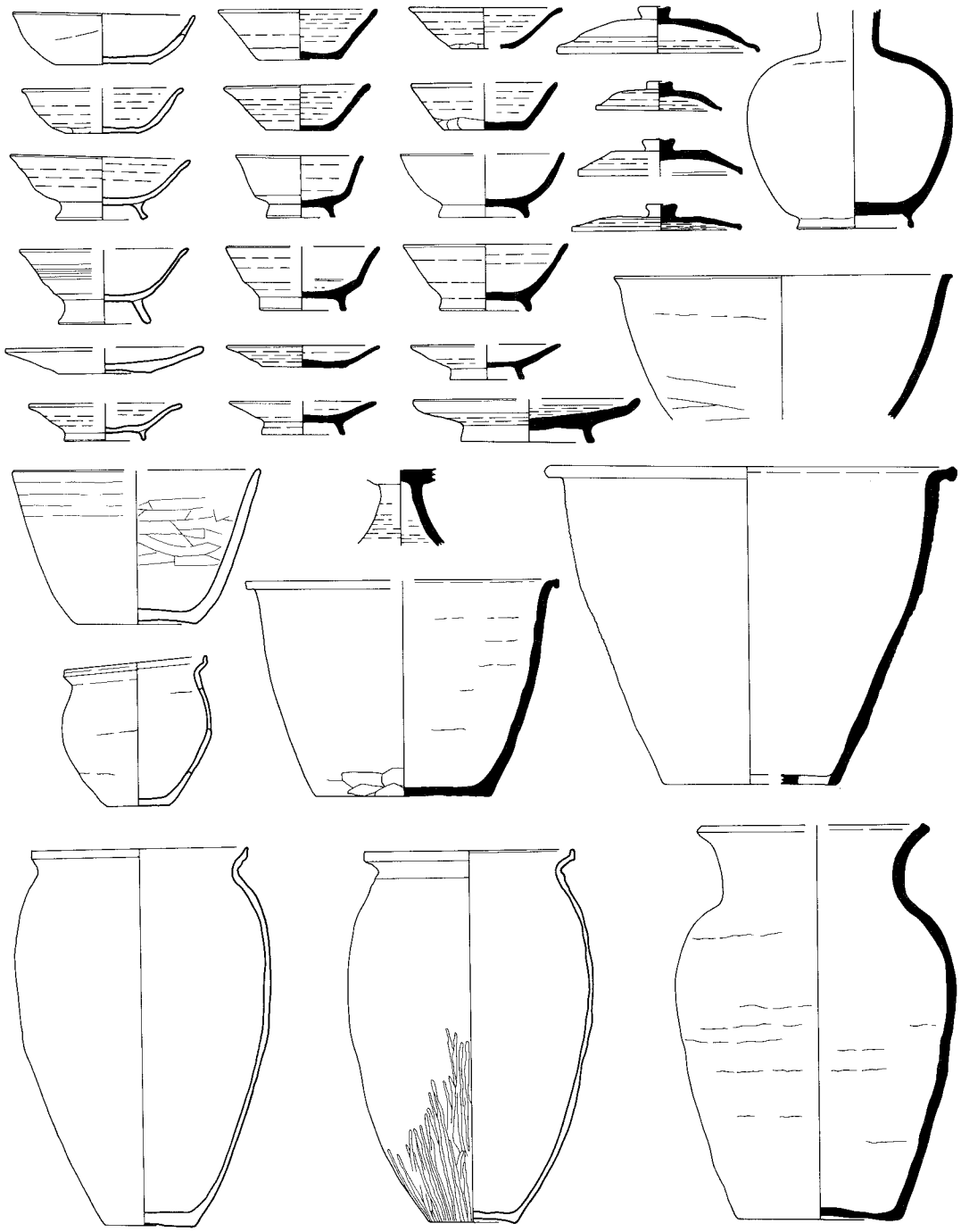
主軸方向は，III期までと比較すると大きな変化がみられる。西に傾く住居跡が減少し，真北を向く住居跡が極めて多くなる。さらに，これまでは東に傾く例はごく少数であったが，本期では25%にあたる10軒が東に傾きをみせるほどになる。カマドの構築場所も東側に移りつつあるが，主軸方向も西向きから北及び東向きに変化してきていることがわかる。

住居跡の床面積はさらに狭くなり，平均10.2m²になる。I期の住居跡と比較すると，実に14.1m²も減少したことになる。

遺物は須恵器を主体とするが，III期ではほとんど出土しなかった土師器の坏が再び増加する傾向をみせる。土師器では，坏・皿・鉢・甕が出土し，須恵器では，坏・蓋・皿・鉢・壺・高坏・甕・盤・甑が出土している。須恵器は，本期が最も多種多様な器種構成を展開している。

土師器の坏は，平底のものと，高台付のものに大別できる。どちらも水挽き成形が施され，平底の坏では体部下端にヘラ削り調整のみられるものもあり，製作技法は須恵器のそれと同一といってよい。高台は，全て付け高台である。

皿も高台の付くものと付かないものがあり，高台の付かない皿は，体部が大きく開いて立ち上がっている。この皿は，後述する須恵器の皿と合わせてIV期になって初めて出現する器種である。



第240図　Ⅳ期出土遺物

鉢はⅢ期と同じ器形を呈しているが，作りはやや雑になる傾向がみられる。

甕はⅢ期から継続する長胴の大型甕と，小型甕がある。大型甕は最大径を胴部上位に有し，口縁部がかるくつまみ出されている。小型甕も同様であるが，内・外面に輪積痕が明確に残り，器形にもゆがみがみられるなど，鉢と同じように粗雑な作りになってくる。

須恵器の坏は平底のものと高台の付くものがあり，後者の方がやや大ぶりである。坏の口縁部は，III期では外反するものはわずかであったが，IV期になると急に増加する。底部の切り離しは全て回転ヘラ切りで，その後一定方向あるいは多方向の静止ヘラ削りが施される。III期までみられた回転ヘラ削りの技法は一部残るものの，ほとんどその姿を消していくようである。なお，底部周辺部のみヘラ削りを行い，中央部は切り離しのままの坏が認められるようになってくる。体部下端のヘラ削りも回転ヘラ削りはみられず，手持ちヘラ削りに変化する。底径比は40～56を示し，III期よりも底径が小さくなることがわかる。

蓋は，天井部が平坦になり，口縁端部が短く垂下する。

皿は本期になって新しく出現する器種で，高台の有無により２種類に分けられる。

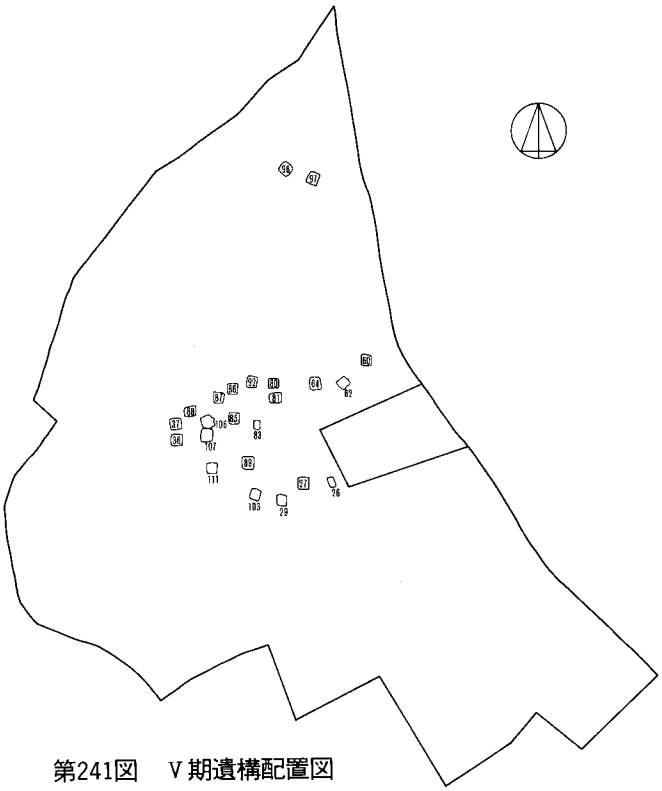
鉢と甑は，両者とも形状はほとんど同一である。甑の底面は，中央と周辺部４か所の計５か所開孔する。

甕は大型で，最大径を胴部上位に有し，内・外面に輪積痕を残している。本期の須恵器は器種的には多様化する傾向をみせるが，焼成はIII期よりも不良で，灰白色や黄褐色を呈するものが目立ち，土師器と区別するのが困難な場合がある。

本期は須恵器等の編年から，９世紀後半に位置づけられる。

(5)　Ｖ期（12世紀以降）

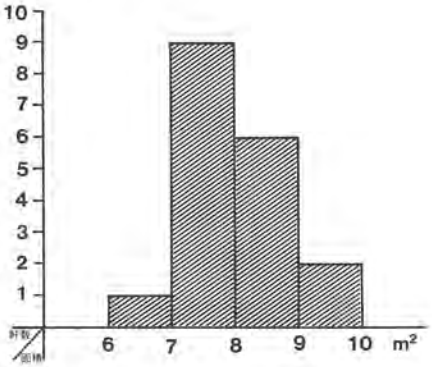
Ｖ期に編年される住居跡は，23軒である。各住居跡は遺跡中央部に集中して検出されたほか，北端部にも２軒だけ検出されている。遺跡中央部に検出された住居跡は，東西に長い楕円形状に配置されている。東側は調査地域外のため明らかにはできないが，遺構の配置からみて連続的に検出される可能性がある。ただ，第60・62号住居跡と調査地域外との間におよそ10mの未検出地があることから，ここには遺構が存在せず，集落の出入口として利用されたとも推定できる。本期の住居跡は狭い地域



第241図　Ｖ期遺構配置図

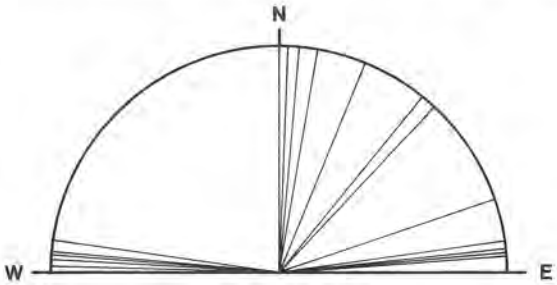
に密集しているにもかかわらず，切り合っている住居跡は1軒もないことから，時期差はほとんどなかったものと思われる。

住居跡の規模をみると，何らかの規格性があったと言えるほど，同一規模の住居跡が目につく。規模が計測できなかった2軒を除くと，最大のものは一辺の長さが3.48mで，3.12～3.35m間に11軒，2.83～3.00m間に9軒となり，平均の長さは約3.1mである。



第242図　V期住居跡床面積

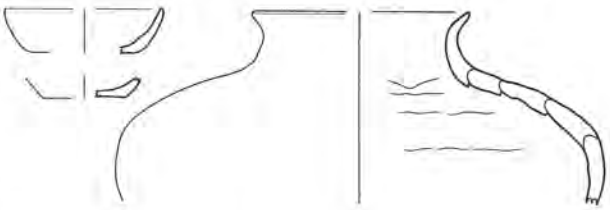
ピットは床面中央部に東西あるいは南北に並んで2か所検出されるのが特徴で，撹乱等で1か所しか検出できなかったのは1軒，全く検出できなかったのは2軒である。第27・37号住居跡のピットは円形ではなく，方形に掘られている。この事実から，他の住居跡のピットも，本来は方形を呈していたものがもっと存在したことが推定できる。



第243図　V期住居跡主軸方向

IV期までの住居跡には全てカマドがみられたが，本期では基本的にカマドは構築されなかったと思われる。例外的に第62号住居跡では，東壁中央部にカマドが構築されていた。第62号住居跡以外の住居跡は2本のピット間に炭化物の層が薄く認められ，炭化物を観察すると，植物質のものを燃やしたことがわかる。しかし，一般的な炉と違い，平坦な床面上から炭火物が検出され，さらに，炭火物のみで焼土粒子等は認められず，床面にも焼けた痕跡は残っていない。以上の点から，火の使用は一時的なもので，しかも極めて短時間であったことが推察できる。カマドをもつ第62号住居跡でも，炭化物の層がピット間に検出されている。

主軸方向は，2か所のピットを通るラインを主軸として分類すると，東西方向と南北方向の2種類に大別できる。南北のグループは，第62・82・86・87・89・97・98号住居跡で，東西のグループは，第27・29・37・60・64・80・81・83・85・88・103・106・107・111号住居跡である。主軸方向の違いが時期差を表わすと仮定すれば，カマドをもつ第62号住居跡の属する南北のグループの方がやや先行する可能性がある。



第244図　V期出土遺物

床面積をみると，平均値が7.9m²であり，本期が最も狭くなっている。Ⅰ期の住居跡と比較すればその差は歴然としており，実に３分の１に相当する。Ⅰ期以来次第に減少してきた床面積であるが，Ⅴ期に至って最も狭くなったことになる。現場に立ってみると，「家族」が生活できたとは考えられず，せいぜい１人か２人が限界ではなかったかという印象が強い。

遺物は，各住居跡から少量しか出土せず，しかも時期を推定できそうな遺物は極めて少量である。土器類としては，底部に糸切り痕を残す土師質のかわらけ(皿)が第84・88号住居跡から，常滑系の壺が第83号住居跡から，他に古銭「大観通宝」(1107年)が第92号住居跡から出土しているだけである。Ⅳ期までにみられた須恵器類が完全に姿を消していることから，Ⅳ期とⅤ期の間にはかなりの時期差があったと思われる。

さて本期の実年代であるが，常滑系の壺が12～13世紀と推定され，第92号住居跡から出土した古銭と併せて，12世紀以降と推定できるのではないだろうか。

ところで，本稿ではⅤ期に編年した遺構を住居跡としての見解にたって記述してきた。しかし，狭い地域に集中し過ぎていることや，出土遺物が極端に少ないこと等住居跡とするには多少無理があることも事実である。これらの点については，次項で他地域の類例と比較・検討してみたい。

以上，当遺跡で調査された住居跡について，Ⅰ～Ⅴ期に分け時期毎に概観してきた。その結果は前述のとおりで，６世紀中頃から人々が定住し，集落が構成された。しかし，７世紀に入ると無人の野と化したことが想像され，新しく人々が再びその姿を当地にみせるのは７世紀の終末から８世紀の前半であった。しかし，これも永くは続かず，９世紀の前半まで生活の痕跡は認められなくなる。このような断絶の時期を経て，柴崎の集落が最盛期を迎えたのは，９世紀の後半であった。時はすでに平安の世となり，京の都では華やかな貴族文化が展開されていた時代である。そして，10世紀になると，集落を形成していた家々が急激に姿を消してしまう。その後，およそ２世紀の間静かな山野であった柴崎の地に，再度人々が姿を現わすのは12世紀を前後する頃であった。

住居跡一覧表

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模		壁	床	カマド	時期	備　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					(出土遺物)
1	I11d₁	N－37°－W	(方形)	－	－	－	－	N	Ⅰ	SI－2・3より古い
2	I11d₂	N－3°－E	長方形	3.45×3.04	4～8	外傾	凹凸	(N)	ⅠⅤ	SI－1と重複 8.8m²
3	I11c₁	N－6°－W	方　形	3.93×3.90	17～28	垂直	平坦	N	ⅠⅤ	SI－1と重複 11.1m²
4	I10d₉	N－86°－E	長方形	3.64×3.16	17～21	〃	〃	E	ⅠⅤ	9.8m²

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模		壁	床	カマド	時期	備　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					(出土遺物)
5	I10b$_9$	N—7°—W	方　形	3.95×3.73	25～29	垂直	平坦	N	IV	10.3m²
6	H10j$_7$	N—32°—W	方　形	6.34×6.12	14～25	〃	〃	N	I	32.0m²
7	I10a$_0$	N—47°—W	方　形	2.57×2.34	29	外傾	〃	—	IV	4.6m²
8	H11g$_7$	N—13°—E	方　形	4.24×4.14	4～10	—	〃	N	III	13.6m²
9	H11g$_9$	N-25.5°-W	方　形	4.27×4.08	39	外傾	〃	N	II	SI—11より古い 12.3m²
10	H11f$_9$	N—0°	長方形	3.29×2.92	14～20	〃	〃	N	IV	SI—9・11より新しい
11	H11f$_8$	N—3°—W	—	—	18～20	—	—	(N)	IV	SI—9より新しく SI—10より古い
12	H11e$_8$	N—2°—W	—	2.63× —	10～16	外傾	凹凸	N	IV	
13	H11e$_4$	N—31.5°—W	方　形	5.98×5.51	8～16	垂直	〃	N	I	29.7m²
14	H11c$_4$	—	—	4.33× —	23	〃	平坦	—	I	SD—1と重複
15	H11d$_1$	N—31.5°—W	(方形)	4.02× —	6～17	—	〃	N	I	SI-16より新しく SE—1より古い
16	H10d$_0$	N—18°—W	長方形	5.21×4.15	3～12	—	〃	N	IV	SI—15と重複
17	H10c$_0$	—	—	—	—	—	—	—	—	
18	H10b$_0$	N—50°—W	方　形	4.20×3.86	11～20	垂直	平坦	N	I	16.6m²
19	G10j$_0$	N—18.5°—W	(方形)	—	4	—	—	N	IV	
20	H10a$_8$	N—20°—W	方　形	2.99×2.80	11～19	外傾	傾斜	N	IV	SE—2より古い 7.5m²

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模		壁	床	カマド	時期	備　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					(出土遺物)
21	G10j6	(N-47°-W)	(方形)	6.08×5.76	1～11	—	—	—	I	SI-22, SE-3より古い
22	G10h5	N—0°	長方形	4.39×3.62	2～10	—	平坦	N	IV	SI-21より新しく SE—3より古い 12.6m²
23	G10e6	—	—	—	0～14	外傾	凹凸	—	—	
24	G10h4	N—8°—W	(長方形)	(5.03)×4.36	10～20	垂直	凹凸	NE	IV	SD—9と重複 20.2m²
25	G9c9	N—27°—W	方　形	2.94×2.81	43	外傾	平坦	N	III	6.4m²
26	G10e1	—	—	3.09× —	16～24	垂直	〃	—	V	ピット2本の住居跡 SK—4と重複
27	G9f0	N—89°—W	方　形	2.90×2.81	4～10	〃	〃	—	V	ピット2本 7.0m²
28	G9j0	N—3°—W	方　形	3.74×3.68	20	〃	〃	N	IV	11.6m²
29	G9g8	N—86°—E	方　形	3.14～3.11	23～29	〃	〃	炭火物	V	ピット2本 8.0m²
30	G9f7	N—19°—W	方　形	3.50×3.45	18	〃	〃	N	IV	8.4m²
31	G9i6	N—31°—W	長方形	6.08×5.51	0～12	〃	〃	N	I	31.6m²
32	G9f4	N—21°—W	—	—	—	—	〃	—	—	SI-33より古い
33	G9g4	—	方　形	4.29×4.11	8～16	〃	〃	—	I	SI-32より新しい 14.8m²
34	G8g0	N—0°	方　形	2.71×2.61	21	〃	〃	N	III	5.7m²
35	G9d1	N—21°—W	方　形	3.61×3.55	18	〃	〃	N	IV	SD—4と重複 11.7m²
36	G9b1	N—0°	方　形	3.35×3.25	34	〃	傾斜	炭化物	V	ピット2本の住居跡と同類　9.0m²

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模		壁	床	カマド	時期	備　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					(出土遺物)
37	G9a$_1$	N—84°—E	方　形	3.33×3.22	40	垂直	平坦	炭化物	V	ピット2本の住居跡と同類　8.9m²
38	F8j$_9$	N—21°—W	方　形	6.36×6.04	22～39	〃	〃	N	I	SI-39より古い
39	F8i$_9$	N—25.5°—W	長方形	3.56×2.96	30	〃	〃	NE	III	SI-38と重複 7.3m²
40	G8b$_6$	N—18°—W	不　整 方　形	3.29×2.95	0～10	—	〃	N	IV	
41	H8a$_9$	N—48°—W	方　形	4.55×4.54	28	垂直	〃	N	I	16.6m²
42	H8c$_8$	N—27°—W	方　形	3.36×3.31	32	〃	〃	N	III	9.2m²
43	H8c$_7$	N—23°—W	方　形	3.12×3.10	29～41	外傾	〃	N	IV	7.8m²
44	H8c$_5$	N—50°—W	不　整 長方形	5.70×5.17	20	〃	〃	N	II	
45	F9f$_5$	N—25.5°—W	方　形	4.17×3.90	47	垂直	傾斜	N	IV	12.3m²
46	G8f$_3$	N—7°—W	長方形	5.61×5.09	16～23	〃	平坦	N	I	24.5m²
47	F8f$_0$	N—0°	隅　丸 方　形	3.45×3.22	34	〃	〃	NE	IV	7.4m²
48	F9c$_5$	N—55°—E	方　形	3.40×3.24	29	〃	傾斜	ES	IV	SI—53より新しい 8.4m²
49	F9e$_4$	N—0°	方　形	3.84×3.65	45	〃	平坦	N	IV	10.4m²
50	F9b$_3$	N—1°—E	方　形	5.01×4.72	26	〃	〃	NE	IV	19.6m²
51	F9e$_7$	N—32°—W	方　形	4.78×4.48	24	〃	〃	(N)	I	SI—54より古い
52	F9c$_6$	N—2°—W	隅　丸 方　形	2.85×2.76	18	〃	〃	N	IV	5.5m²

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模		壁	床	カマド	時期	備　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					(出土遺物)
53	F9d$_4$	—	方　形	3.49×3.23	4～10	—	凹凸	—	II	SI—48と重複
54	F9e$_6$	N—0°	方　形	3.21×3.08	32	垂直	平坦	NE	IV	SI-51と重複 7.5m²
55	F9a$_8$	N—6°—E	(方形)	4.09× —	44	〃	〃	N	IV	SI-56より新しい
56	F9a$_9$	N—17°—W	方　形	4.45×4.08	38	〃	〃	〃	III	SI—55と重複
57	F10a$_2$	N—40°—W	方　形	4.79×4.73	57	〃	〃	〃	I	SD—6重複 16.9m²
58	F8h$_9$	N—15°—W	—	5.98× —	30	〃	—	〃	I	SI—59と重複
59	F8h$_8$	N—18°—W	—	—	23	—	—	—	III	SI—58と重複
60	F10g$_4$	N—86°—W	方　形	2.98×2.98	23	垂直	平坦	炭化物	V	ピット2本の住居跡と同類　8.1m²
61	F10h$_5$	N—17°—W	長方形	3.34×2.67	22	〃	〃	NE	IV	7.5m²
62	F10i$_2$	N—43°—E	方　形	3.12×3.02	30	〃	〃	NE	V	ピット2本カマドあり 7.6m²
63	F10h$_2$	N—38.5°—W	方　形	5.40×5.38	45	〃	〃	N	I	24.5m²
64	F10i$_1$	N—85°—E	方　形	2.96×2.95	40	〃	〃	炭化物	V	ピット2本 SI-65より新しい 7.5m²
65	F9i$_0$	N—29°—W	方　形	6.78×6.76	10～25	〃	〃	N	I	
66	F10e$_1$	N—5°—E	隅　丸 長方形	3.64×2.82	27	〃	〃	NE ES	IV	
67	G10a$_1$	N—18°—E	方　形	4.32×4.15	21	〃	〃	N	IV	
68	G10a$_2$	—	—	—	10	—	—	(N)	I	

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模		壁	床	カマド	時期	備　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					(出土遺物)
69	F10j$_2$	—	—	—	10	垂直	平坦	—	—	
70	F10j$_2$	N—43°—W	(方形)	5.64× —	15～33	〃	〃	NW	I	
71	F10j$_4$	N—2°—W	—	3.30× —	30～32	〃	〃	N	IV	
72	H11i$_6$	N—13°—E	方　形	5.46×5.31	20～32	〃	〃	〃	IV	
73	H11j$_7$	N—0°	方　形	3.98×3.99	27	〃	〃	〃	IV	
74	H11h$_5$	N—33°—W	方　形	5.54×5.29	20～34	〃	〃	〃	I	
75	H11i$_2$	N—34°—W	方　形	4.60×4.51	18	外傾	〃	〃	I	
76	H10h$_8$	N—40°—W	方　形	5.37×5.31	6	垂直	—	〃	I	
77	I11b$_1$	N—8°—E	隅　丸 長方形	3.90×3.28	20	〃	凹凸	〃	IV	
78	H10e$_3$	N—60°—E	(方形)	3.95× —	5～10	外傾	平坦	E	II	
79	F9h$_8$	N—1°—W	不　整 方　形	3.54×3.45	32	垂直	〃	N	IV	
80	F9i$_8$	N—90°	方　形	2.85×2.77	23	〃	〃	炭化物	V	
81	F9i$_8$	N—86°—W	方　形	3.13×2.99	30	〃	〃	〃	V	ピット２本 7.4m²
82	G9e$_8$	N—23.5°—W	方　形	4.04×4.03	38	〃	傾斜	N	IV	SD—7と重複 14.7m²
83	G9b$_6$	N—87°—W	(方形)	2.83× —	25～39	〃	平坦	炭化物	V	ピット２本 SI-84より新しい
84	G9b$_6$	N—15°—W	(方形)	(4.08)×3.89	25～39	〃	〃	N	IV	SI—83と重複

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模		壁	床	カマド	時期	備　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					(出土遺物)
85	G9a5	N—85°—W	方　形	3.12×2.91	25	垂直	平坦	炭化物	V	ピット2本 7.4m²
86	F9i5	N—0°	方　形	2.97×2.81	21	外傾 垂直	傾斜	〃	V	ピット2本 7.3m²
87	F9j4	N—5°—E	方　形	3.00×2.91	32	垂直	平坦	〃	V	ピット2本 7.4m²
88	G9a2	N—90°	方　形	3.14×3.03	34	外傾 垂直	〃	〃	V	ピット2本 7.5m²
89	G9d6	N—2°—E	(方形)	3.35× —	25	垂直	〃	〃	V	ピット2本 SI-90より新しい
90	G9d4	N—46.5°—W	(方形)	6.61×(5.7)	20	〃	〃	N	I	SI-89・109SD-7より古い
91	G9a7	N—22°—W	長方形	3.26×2.8	34～37	〃	〃	NE	IV	8.3m²
92	F9h6	N—9.5°—E	方　形	2.94×2.79	20～29	〃	〃	炭化物	V	ピットト2本 SI-105より新しい 7.2m²
93	G9c2	N—9.5°—W	隅　丸 方　形	3.38×3.16	56	〃	〃	—	—	8.1m²
94	F10j4	N—8.5°—W	—	—	—	—	〃	N	—	SI—71と重複
95	E10i3	N—28°—E	隅　丸 長方形	4.37×3.47	44	垂直	〃	NE ES	IV	9.9m²
96	E10g2	N—33°—W	方　形	7.09×7.02	44	〃	凹凸	N	I	42.6m²
97	E10d1	N—22°—E	長方形	3.48×3.08	35	〃	平坦	—	V	ピット2本 8.8m²
98	E9d9	N—39°—E	方　形	3.35×3.28	52	〃	〃	炭化物	V	ピット2本 8.5m²
99	F9g9	N—5°—W	不　整 方　形	3.69×3.45	22	〃	〃	NE	IV	10.9m²
100	D9i0	N—13°—W	方　形	5.30×5.12	63	〃	〃	N	III	20.9m²

番号	位　置	主軸方向	平面形	規　模		壁	床	カマド	時期	備　考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					(出土遺物)
101	G9e3	N—25°—W	方　形	5.46×5.15	35～55	垂直	平坦	N	II	SI—110・111より古い　22.1m²
102	E9g2	N—6°—W	方　形	(5.10)×(5.00)	43	〃	〃	〃	IV	SI—104・SD—6と重複
103	G9f6	N—82°—W	方　形	3.00×(2.81)	19	〃	〃	—	V	ピット2本SI—112・SD—7と重複
104	E9g2	N—0°	(方形)	(5.56)×—	50	〃	〃	N	I	SI—102・SD—6と重複
105	F9h6	N—4°—W	(方形)	3.42×(3.20)	15	〃	〃	—	—	SI—92と重複
106	G9a3	N—71°—E	方　形	3.12×3.02	32	〃	〃	炭化物	V	ピット2本 8.2m²
107	G9b3	N—86°—W	方　形	3.44×3.30	31	〃	〃	—	V	ピット2本SD—7と重複　9.1m²
108	E9i9	N—37°—W	方　形	3.393×3.86	40	〃	〃	NE	I	
109	G9e5	(N—42°—W)	(方形)	3.85×—	—	—	—	—	—	SI—90・SD—7と重複　11.0m²
110	G9f4	N—4°—E	隅丸長方形	3.39×2.99	29～40	垂直	平坦	NE	II	SI—101と重複　8.4m²
111	G9d3	N—82°—E	(方形)	3.15×3.10	10～39	〃	〃	炭化物	V	ピット2本SI—90・101と重複
112	G9f6	N—37°—W	—	—	20	—	—	(N)	I	SI—103・SD—7と重複

2　カマドのない小型住居跡について

前項で述べたように，当遺跡では原則としてカマドのない住居跡が23軒（1軒だけカマドがある）検出されている。これは，住居跡検出総数の約20%にあたり，比較的多い確認数と言える。本書では住居跡として記述してきたが，カマドがなく，出土遺物も極めて少ない等住居跡以外の性格を有する可能性もある。

この類の遺構は当遺跡だけで検出されているわけではなく，県内，あるいは近県等でも類例が報告されている。本項ではその類例を挙げ，比較・検討していきたい。

(1) 茨城県の検出例

尾島貝塚[1]（稲敷郡桜川村）……２軒

尾島貝塚からは，第22・23号住居跡の２軒が検出されており，ともに方形を呈し，規模は3.8mと4.7mである。床は平坦で，カマド・ピットは検出されていない。遺物は土師器の壺や石製模造品等である。時期は古墳時代後期で，生活の場ではなく，祭祀の場ではないかと推定されている。

北新田Ａ遺跡[2]（猿島郡総和町）……２軒（土坑として報告されている）

北新田Ａ遺跡においては，第３・４号土坑の２基が小型住居跡の様相を呈している。規模・形状は，長軸3.1mと3.2mで長方形を呈している。床は締まりがあり，ピットは１～６か所である。遺物は土師器が出土しているが，時期は明確でない。周辺には，10～11世紀の住居跡が検出されている。

弁ノ内遺跡[3]（土浦市）……１軒

弁ノ内遺跡では，第２号住居跡の１軒だけ検出されている。長軸は3.2mで，長方形を呈し，床は硬い。ピットは，南西コーナー近くに１か所検出されている。遺物は土師器・須恵器片で，９世紀末に推定される。

鹿の子Ｃ遺跡[4]（石岡市）……１軒

鹿の子Ｃ遺跡では，第135号住居跡が検出され，一辺3.9mの方形を呈している。ピットは，各コーナー付近に４か所検出されている。遺物は土師器片が少量出土しただけで，時期は明確でない。周辺の住居跡は，８～９世紀代のものである。当遺跡は，多量の漆紙文書が出土したことで知られている。

鹿の子Ａ遺跡[5]（石岡市）……5軒（竪穴状遺構として報告されている）

鹿の子Ａ遺跡では５軒検出され，第11・15・23・27号住居跡は方形，第13号住居跡は長方形を呈し，規模は2.6～3.7mである。２か所以上のピットを有する遺構は２軒で，他は全くないか，１か所だけある。床は硬く締まり，遺物は出土しないか，ごく少量の土師器・須恵器片がみられる程度である。時期は10世紀代に比定され，機能としては倉庫，あるいは作業場的なものと考えられている。

砂川遺跡[6]（水戸市）……６軒（竪穴状遺構として報告されている）

砂川遺跡では６軒検出されており，第３～７号住居跡は長方形，第８号住居跡は方形を呈し，規模は2.5～2.9mである。ピットは１～４か所検出され，長軸線上に並ぶ傾向がみられる。床は，硬く踏み固められている。遺物はほとんど出土せず，ごく少量の土師器・須恵器片がみられるだけである。時期は周囲の住居跡（全て国分期）と同一と考えられ，倉庫あるいは作業場と推定されている。

廻り地A遺跡[7]（竜ケ崎市）……5軒以上（土坑として報告されており，詳細は明確でない）

廻り地A遺跡では全て土坑として報告されており，詳細は不明であるが，5軒以上あるものと思われる。形状は方形と長方形の2種が認められ，規模は2.2～3.7mである。床は平坦で硬く締まり、ピットはほとんど検出されていない。ピットが検出された遺構では，長軸線上に並ぶ傾向がみられる。遺物は出土していない。

以上が県内で検出された類例であるが，カマドが付設されず，ピットや遺物も少数しか検出されないため，住居跡ではなく，土坑として報告されることが多いようである。したがって，現時点では見落としていることが多く，各報告書を丹念に調べれば，さらに類例が増加するものと思われる。

ところで，やや大型の住居跡でカマドが付設されない住居跡も数例確認されている。例えば，つくば市の下広岡遺跡では長軸7mの長方形を呈する住居跡が検出され，長軸線上にピットが並んでいる。時期は国分期と推定されている。龍ケ崎市の屋代B遺跡II・III区では長軸7.5～8.5mの長方形を呈するもの2軒，楕円形を呈するもの1軒が検出されている。床は硬く，遺物は少量である。時期は中世と推定されている。これらの住居跡は規模が大きいだけで，他の状況は小型の住居跡とよく類似しており，推定時期もほぼ同時期である。

(2) 千葉県の検出例

井戸向遺跡[8]（八千代市）……8軒（土坑として報告されている）

井戸向遺跡では8軒検出され，長方形を呈するもの5軒（P008・015・016・022・026），方形を呈するもの3軒（P013・014・021）である。規模は1.8～2.4mである。ピットは，P016号遺構だけ3か所検出され，他は認められない。床は踏み固められた痕跡はなく，軟らかい。遺物は極めて少量で，時期や性格は不明であるが，周囲の状況から平安時代の可能性がある。

北海道遺跡[9]（八千代市）……4軒

北海道遺跡では4軒検出され，D066・052・007は方形，D100は長方形を呈している。規模は2.2～3.5mである。床は軟弱で，ピットは検出されていない。時期は明確でないが，平安時代と推定されている。

千葉県では，この他にも伊篠白幡遺跡，椎名崎遺跡等で類例が報告されている。いずれも平面形は方形あるいは長方形を呈し，ピットは長軸線上に並ぶものが多い。遺物は例外なく少量で，時期は9～11世紀と推定されている。

(3) 東京都の検出例

落川遺跡[10]（日野市）……本報告がなされておらず詳細は不明であるが，多数検出されている。

落川遺跡からは多数の遺構が検出されているが，その詳細は明確でない。遺構の平面形は，方形あるいは長方形を呈し，規模は3～4mのものが多い。ピットは検出されないことが多いが，2

～3か所検出される例も認められる。遺構によっては，床面に小規模な炉が確認されることがある。落川遺跡では，これらの遺構は全て住居跡として調査され，時期は平安時代後半の11世紀代としている。

上野原遺跡[11]（調布市）……2軒（土坑として報告されている）

上野原遺跡からは，1・2号土坑の2基が検出されており，ともに長軸1.7mの長方形を呈している。ピットは，床あるいは壁上端に数か所検出されている。遺物は，土師器・須恵器片がごく少量出土しているだけで，時期は不明である。他の遺構も含めて，広義に歴史時代と推定されている。

武蔵国分寺跡[12]（国分寺市）……2軒（土坑として報告されている）

武蔵国分寺跡からは，SK-17・19の2基が検出されている。2基とも長方形を呈し，長軸1.5・1.7mである。類似の遺構は他にも多数認められ，いずれも床面にピットはなく，遺物も出土していない。時期は平安時代と推定されている。

(4) 神奈川県の検出例

千葉地東遺跡[13]（鎌倉市）……4軒（竪穴状遺構あるいは土坑として報告されている）

千葉地東遺跡からは，3軒の竪穴状遺構と1基の土坑が検出されている。規模等をみると，長軸2.6～4.7mの長方形を呈しており，内部に木材の残っている住居跡もある。床は平坦で，ピットはなく，遺物はかわらけや木材が少量出土している。時期は，14～15世紀と推定されている。

鳶尾遺跡[14]（厚木市）……1軒

鳶尾遺跡からは，86号竪穴住居跡として1軒だけ検出されている。一辺が3.1mの方形を呈する住居跡で，床は平坦である。床の南側中央部にピットが1か所だけ検出されている。遺物は，土師器・須恵器片と火熱を受けた礫が少量出土している。時期は，不明である。

宮久保遺跡II[15]（綾瀬市）……7軒（竪穴状遺構として報告されている）

宮久保遺跡IIからは，方形を呈する住居跡5軒（SX01～05），長方形を呈する住居跡2軒（SX06・07）の計7軒が検出されている。ピットは，SX01では四壁に沿って7か所検出されているが，他は全く検出されていない。遺物は，土師器・須恵器片・及び青磁片が少量出土している。時期は13～15世紀と推定され，カマドはもちろん炉も認められないことから，仮設的な建物跡と推定されている。

(5) 埼玉県の検出例

若宮台遺跡[16]（児玉郡上里町）……4軒（住居跡1軒，土坑3基として報告されている）

若宮台遺跡からは，第48号住居跡，第1～3号土坑の4遺構が類似の住居跡として検出されている。平面形は全て長方形を呈し，規模は2.8～3.7mである。第48号住居跡からは，ピットと炉跡とみられる焼土が検出されている。遺物は全体に少量であり，第1号土坑からは自然石が出土して

いる。時期は，10～11世紀と推定されている。

台耕地遺跡[17] II（大里郡花園町）……1軒

台耕地遺跡では，第97号住居跡が検出され，長軸3.75mの長方形を呈している。床はやや凹凸が認められ，ピットは検出されない。遺物は，鉄製紡錘車や羽釜が出土している。時期は，10世紀末頃と推定されている。

白鳥田遺跡[18]（行田市）……2軒

白鳥田遺跡からは，3・4号住居跡の2軒が検出されている。2軒とも方形を呈し，規模は3.85・4.0mである。床は平坦で，ピットは2～6か所検出されている。遺物はほとんど出土していない。

(6) 群馬県の検出例

株木遺跡[19]（藤岡市）……1軒（竪穴状遺構として報告されている）

株木遺跡では，第1号竪穴遺構が検出され，平面形は長軸2.4mの長方形を呈している。床は中央部がやや高く，周辺部は低くなり，ピットは検出されていない。時期は奈良・平安時代で，作業場か倉庫と推定されている。

小角田前遺跡[20]（新田郡尾島町）……6軒（竪穴遺構として報告されている）

小角田前遺跡からは，6軒確認されており，このうち形状のわかる住居跡は5軒で，方形を呈するもの1軒（1号竪穴），長方形を呈するもの4軒（2～4・6号竪穴）である。各遺構の規模は，2.8～3.5mである。床は平坦で，ピットは1～2か所ずつ検出されている。遺物は，ほとんど出土しない。時期は古墳時代後期から奈良時代と推定され，住居跡の可能性を残しつつも別の性格も想定できるとされている。

(7) 栃木県の検出例

猿山遺跡[21]（宇都宮市）……2軒

猿山遺跡からは，1－2号住居跡と1－20号住居跡の2軒が検出され，2軒とも長方形を呈し，規模は3.45・3.55mである。床は比較的硬く，平坦である，ピットは，1－2号住居跡の東壁下に1か所だけ検出されている。遺物は，土師器・須恵器片が数点出土している。時期は，9世紀前半頃と推定される。

下古館遺跡[22]（河内郡南河内町）……遺跡は数区に分かれており，H区では16軒検出されている。（方形竪穴遺構として報告されている）

下古館遺跡からは，多くの遺構が検出されている。遺構の形状は長方形を呈するものが多く，規模は3～4mである。他遺跡と異なる点は，コーナー部に方形の張り出しを有することである。ピットは，長軸あるいは短軸方向に並んで検出されることが多く，その掘り方は方形を呈している。ピットの底面には，根石が置かれていた痕跡が認められる。床は平坦で硬く締まっており，炉状の浅い掘り込みを有する遺構も確認されている。遺物は，土師器・須恵器片や常滑片などが

少量出土している。時期は，14世紀を中心にその前後と推定されている。

赤塚遺跡[23]（下都賀郡岩舟町）……9軒（方形竪穴遺構として報告されている）

赤塚遺跡からは，9軒検出されている。形状は不整なものが多く明確ではないが，長方形を呈するもの6軒（1・2・4・6～8号方形竪穴），方形を呈するもの3軒（3・5・9号方形竪穴）である。規模は，1.8～2.6mである。床は平坦で硬く，ピットは1～3号方形竪穴を除き，壁際に数か所検出されている。炉と思われる落ち込みがコーナー一部に検出された住居跡が，2軒認められる。また，壁の一部やコーナー一部が外に張り出すものが7軒ある。遺物は，土師質土器が少数出土している。時期は，15～16世紀頃と推定されている。遺物の貧弱さから住居跡の可能性はうすく，9世紀以降の住居跡構造の変化の延長線上として考えるか，あるいは番屋・貯蔵小屋などの特殊遺構かと推定されている。

(8) 住居跡の特徴

カマドのない小型住居跡の関東地方における類例について述べてきたが，当遺跡で検出された住居跡と類似の住居跡との共通点をまとめてみると，

①平面形は方形が基本である。他の遺跡では長方形が主になるところもある。

②規模は3m前後である。他の例をみても3mぐらいのものが多い。

③床は平坦で，硬く締まっている。千葉の例では，軟弱な傾向が窺える。

④ピットは2か所で，東西又は南北線上に並ぶ。千葉や東京では，ピットの検出できない住居跡が多い。ピットの掘り方は円形を呈するが，方形の場合も認められる。栃木では，検出されたピットは全て方形を呈している。

⑤ピット間に，炭化物の層がうすく堆積している。住居跡によっては，床をやや掘り下げて炉のようになっているものもある。栃木や埼玉，千葉，東京の例では炉跡状の掘り込みが壁に寄ったところにあることが多い。神奈川では，炉やそれに類するものは検出されていない。

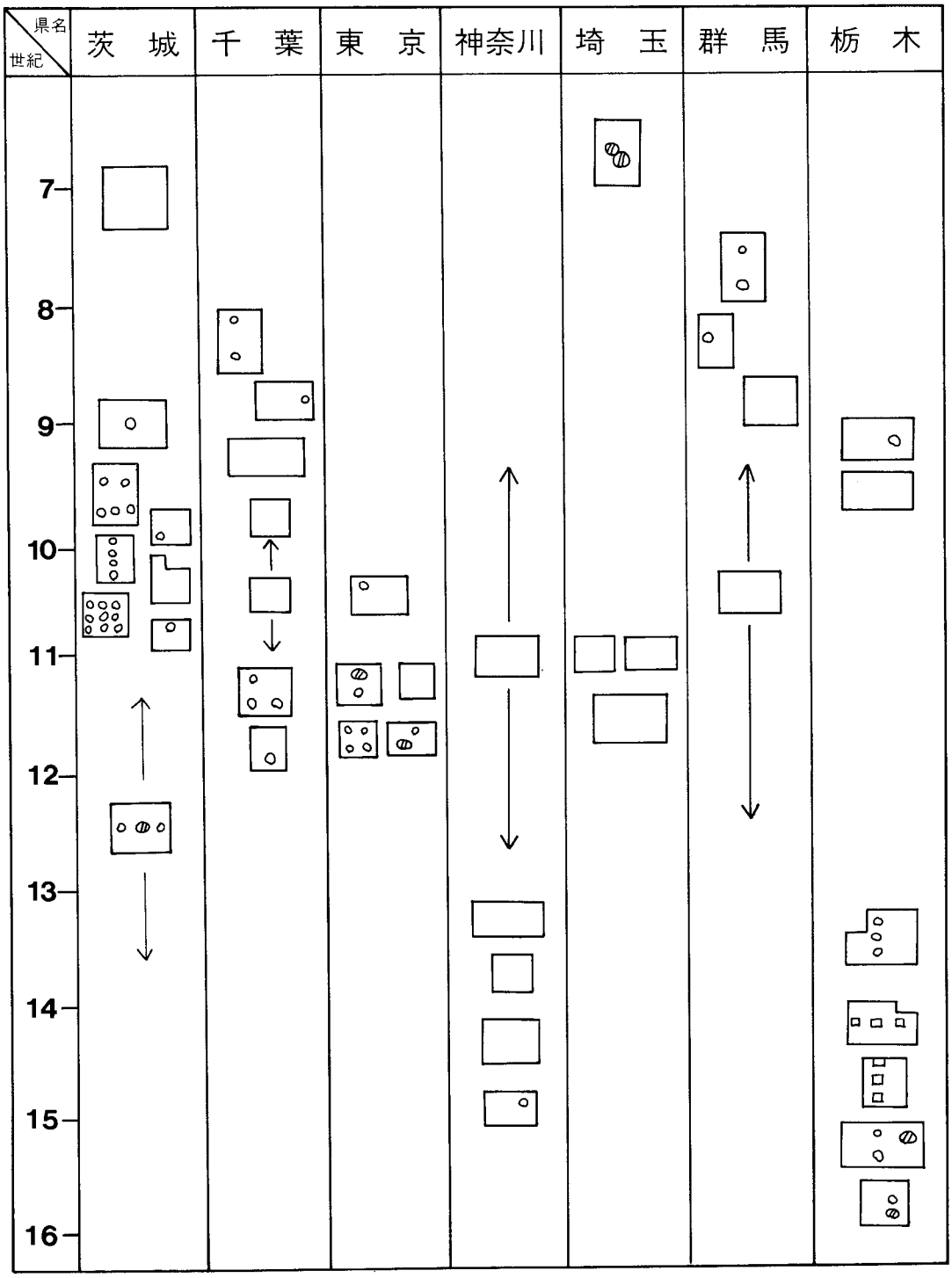
⑥2か所のピットを結ぶラインを主軸と考えれば，主軸方向は，東西あるいは南北の方位線上にある住居跡が多い。

⑦出土遺物が非常に少なく，土師器や須恵器の破片が少量出土するぐらいである。時期を推定できるような遺物は，ほとんど出土していない。遺物の少ないことから遺跡によっては住居跡とせず，土坑あるいは竪穴遺構として処理している例もある。

⑧住居跡同志の切り合いは1例も認められない。もちろん，カマドをもつ住居跡とは切り合いが認められるが，その全てでカマドのない住居跡が切っており，最も新しい時期の住居跡である。この点も，他の遺跡と共通する特徴である。

⑨住居跡の分布は，遺跡内でも比較的高い地点にあり，東西に長い楕円形状に，集中して分布している。

住居跡の推定時期と形状



⑩栃木県の下古館遺跡では，２軒隣接して営まれる傾向があると指摘されている。当遺跡でも，遺跡北側に２軒検出されたように，２～３軒を１単位としてとらえることは可能である。しかし，全ての住居跡に当てはまるわけではない。

⑪23軒の住居跡が，比較的隣接して営まれていながら，切り合いが認められないという事実から，同一時期，あるいは多少の年代差はあっても極めて短期間のうちに形成された集落であったことが推定される。

(9) 住居跡の分類と今後の課題

カマドのない小型住居跡を分類・整理する上で，いくつかの観点が考えられるが，ここでは平面形状を基本にし，ピットや炉の有無を考慮して分類した。なお，長軸と短軸の差が長軸の10%以内のものは，全て方形とした。

平面形	ピット	炉(炭化物)
方　形……A	有……1	有……a
長方形……B	無……2	無……b
楕円形……C		
不定形……D		

※１出入口(外又は内側に張り出す部分)の認められる住居跡は，平面形のアルファベットに「′」を付した。

※２平面形が長方形で，ピットがなく，炉が検出された住居跡は，「B2a」というように表記した。

上記の分類法で，今までみてきた各県の類例を概観してみる。

茨城……A1a・B1b類の２種が多い。他にB′・C類が少数ながら検出されている。当遺跡では，大部分の住居跡がA1a類に分類される。

千葉……B2b類が多く，ピットや炉のある住居跡は極めて少数である。B′類が１例だけ認められる。

東京……B2b類が比較的多く，B1a類やB2a類も少数ではあるが検出されている。

神奈川…B2b・B1b類が多く，A・D類は少数である。炉が検出された住居跡は１軒もない。

埼玉……B2b類が比較的多いが，B1b類，B1a類も検出されている。

群馬……B2b・B1b類だけで，他の種類は今のところ検出されていないようである。

栃木……B′1b類が極めて多いのが特徴である。地域の特色と言ってもよく，他には茨城で数例認められるだけである。B1a類も検出されている。

こうして概観してみると，地域により特色のあることがわかるが，全体的にB2b類が多いという点が特徴である。しかし，北関東の茨城・栃木ではB2b類は少数で，この種類は南関東に多く検出される傾向がある。また，全体にA類の少ないのも特徴と言えよう。千葉では，ややA類が認められるが，やはりB類の方が多い。A類が極めて多いのは茨城で，中でも当遺跡においては大部分がA類であり，特異な例と言える。ピットは，B類に多く検出され，長軸線上あるいはそ

れに沿って掘り込まれている。栃木・茨城においてはピットの平面形が方形で，一部に根石を使用している例が確認されている。床面から炉(炭化物)が検出される住居跡は，全体の2割ぐらいである。この点でも当遺跡の住居跡は例外で，ほとんどの住居跡から炭化物の層が検出されている。神奈川・群馬においては，炉は検出されていない。このように大雑把な分類をしただけでも，地域差や内部施設の違いを捉えることができる。

現時点では調査例も少なく，多くを論ずることはできないが，とりあえず各地域の類例とその特徴等を概観してきた。

最後に，各地域の住居跡を時期毎に模式図的に表示し，整理しておく。なお，ここでの時期は報告書に記載されている時期，あるいは報告書から読み取れる時期である。住居跡の時期を断定できるだけの遺物が出土していないことが特徴のひとつでもあり，表示した時期は，周囲の遺構及び遺物から推定した年代である。したがって今後の新知見により，前後する可能性を含んでいる時期であることを御理解いただきたい。

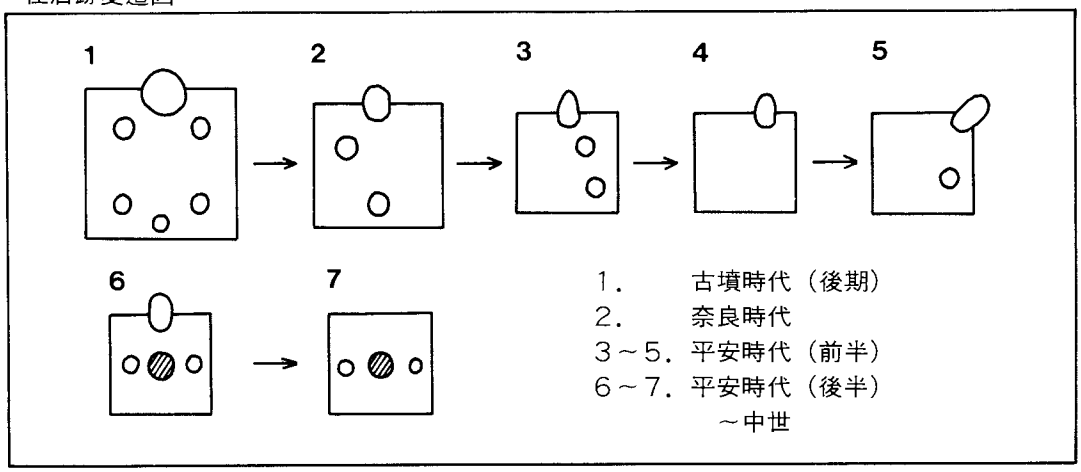
こうしてみると，茨城・千葉・東京での調査例はほぼ平安時代の住居跡であることがわかる。神奈川や栃木は，中世～近世にかけての住居跡が多くなる。最も古い例として，埼玉で6世紀後半に推定される住居跡が検出されている。

いずれにしても，カマドのない小型住居跡は平安時代に集中する傾向がある。その中でも，方形で炉が検出される住居跡は11世紀代に多く認められる。

以上，当遺跡で検出されたカマドのない小型住居跡について，近県の調査例と併せて比較検討してきた。報告書によってはこの種の遺構を住居跡として理解しない例もみられるが，これまでの調査状況から住居跡として位置づけてもよいと考えられる。当遺跡の遺構も，明確な床，ピット，短期間ではあっても火の使用が窺える炭化物の検出，1例だけであるがカマドが付設されている例のあること等，住居跡としての要素を備えていると言える。時期については前項で触れたように，12世紀以降と推定できる。

最後になったが，狭い地域に密集して検出されながら切り合いがない点や，住居跡としては出土遺物が極端に少なく，長期間火を使用した痕跡がないことや，建物内の調理場や地下式坑などと関連づけて考える見方もあり，今後の解明を待つべき点が多く残されている。また，平安時代から中・近世にかけての住居跡では平地式住居跡との関連[24]も問題になり，上屋構造の解明をも含めて追求していかなければならないであろう。

住居跡変遷図



注

(1)　茨城県教育財団「尾　島　貝　塚」（茨城県教育財団文化財調査報告第46集）1988年

(2)　〃　「北新田A遺跡」（　〃　〃　第38集）1986年

(3)　〃　「弁ノ内遺跡」（　〃　〃　第43集）1987年

(4)　〃　「鹿の子C遺跡」（　〃　〃　第20集）1983年

(5)　〃　「鹿の子A遺跡」（　〃　〃　第16集）1982年

(6)　〃　「砂　川　遺　跡」（　〃　〃　第16集）1982年

(7)　〃　「廻り地A遺跡」（　〃　〃　第15集）1982年

(8)　千葉県文化財センター「八千代市井戸向遺跡」1987年

(9)　〃　「八千代市北海道遺跡」1985年

(10)　日野市落川遺跡調査会「日野市落川遺跡調査概報II」1982年

(11)　調布市深大寺町上野原遺跡調査会「上野原遺跡」1986年

(12)　武蔵国分寺関連遺跡調査会「武蔵国分寺跡関連遺跡調査報告」1985年

(13)　神奈川県立埋蔵文化財センター「千葉地東遺跡」1986年

(14)　神奈川県教育委員会「鳶尾遺跡」1975年

(15)　神奈川県立埋蔵文化財センター「宮久保遺跡II」1988年

(16)　埼玉県埋蔵文化財調査事業団「若宮台」（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第28集）1983年

(17)　〃　「台耕地II」（　〃　〃　第33集）1984年

(18)　〃　「白鳥田遺跡」（　〃　〃　第54集）1985年

(19)　群馬県藤岡市教育委員会「株木遺跡」1984年

⑳ 群馬県埋蔵文化財調査事業団「小角田前遺跡」1985年

㉑ 栃木県教育委員会「猿山遺跡」1981年

㉒ 栃木県文化振興事業団「自治医科大学周辺地区下古館遺跡」1986年

㉓ 栃木県教育委員会「赤塚遺跡」1981年

㉔ 福田健司「古代から中世へ」(東京考古４)東京考古談話会1986年

3　その他の遺構について

(1)　土坑

土坑は５基しか検出されず，時期や性格を明確にできるものは少ない。第２号土坑は貯蔵用としての性格が考えられるが，竜ケ崎市の屋代Ｂ遺跡や南三島遺跡３・４区等で検出されている墓壙的な性格も推定できる。第10号土坑は，本来の目的での利用がなされなくなった後，土器捨て場として使われたものと思われる。

(2)　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は１棟だけ検出され，２間四方の総柱の建物である。一般的に総柱の建物跡は倉庫と考えられており，本跡もそのような性格の建物跡と考えられる。時期については，柱痕内より須恵器の坏が出土しており，この坏が第Ⅳ期に編年できることから，９世紀後半と推定できる。

(3)　地下式坑

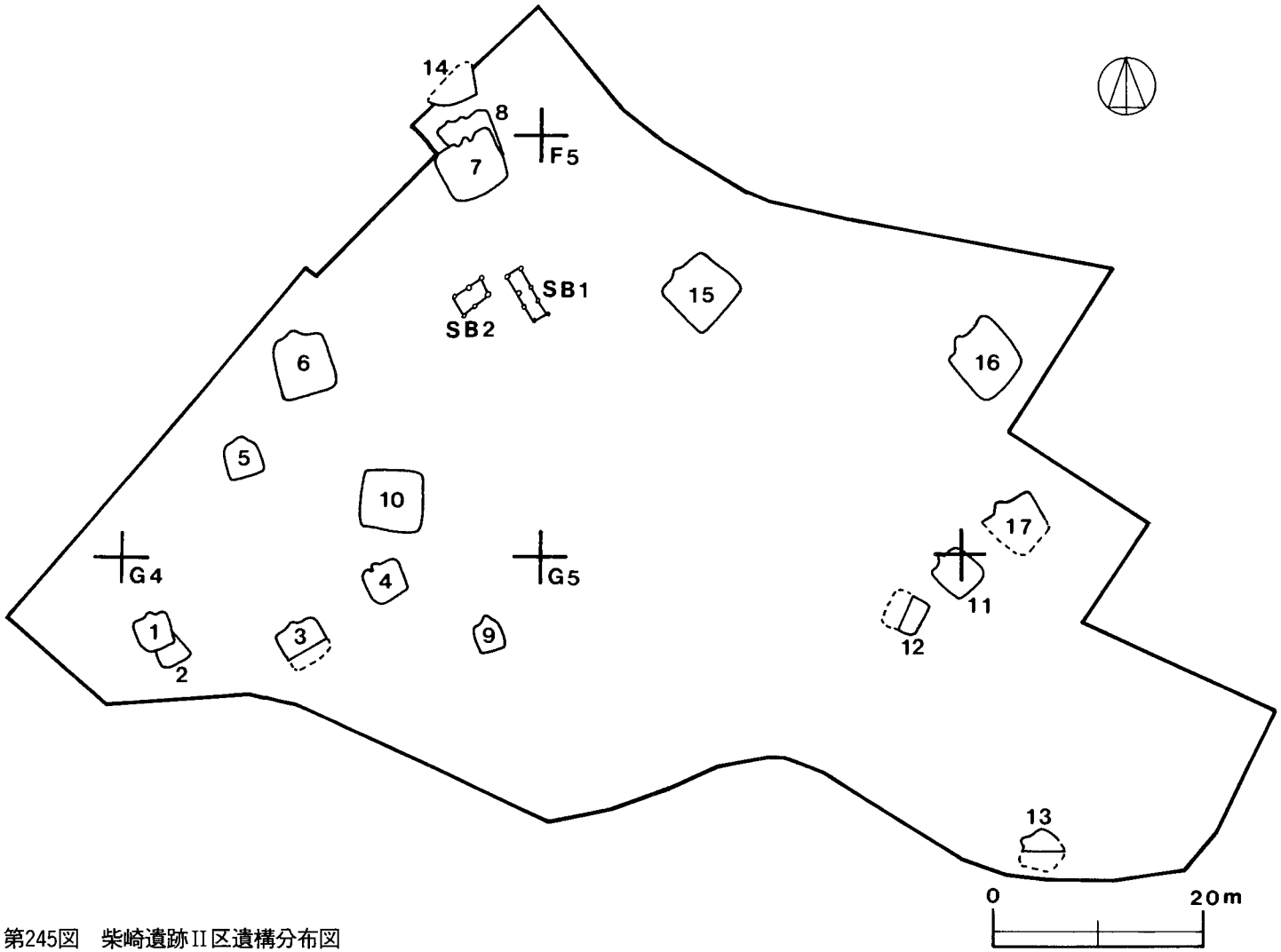
４基検出されている。いずれも第３号溝に面して，あるいは接して竪坑が掘られている。地下式坑は検出位置が遺跡の中央部で，かつ集中して構築されていることから，一定の地域に構築するという意識があったと思われる。この種の遺構を墓壙と考えるならば，所かまわず構築されることはなかったと考えられ，「墓域」が設定されていたものと思われる。

(4)　井戸

井戸は，８基検出されている。開口部の平面形をみると，円形を呈するもの６基，方形を呈するもの２基に分けられる。また，円筒状に掘り下げられるものと，２段に掘り下げられるものも認められる。大部分の井戸は調査時に湧き水があり，現在でも利用できる程で，水位は使用されていた頃のレベルと大差ないものと推定される。井戸の中には人為的に埋め戻されたものがあり，この場合の埋土は土砂の他に必ず粘土が使われていた。この粘土は，井戸を掘った時に出た粘土を利用したものと思われる。あるいは現在でも井戸を埋める場合に息抜き穴と称するものを残す習慣があるように，当時は粘土で埋め戻すことに何らかの意味があったのかもしれない。ところで井戸が構築された時期であるが，住居跡との切り合い関係から，上限はⅣ期以降であることがわかるが，下限についてははっきりしていない。しかし，井戸の形状や出土遺物からみて，Ⅴ期まで下ることはないと思われる。

(5) 溝

溝は8条検出されているが，時期や性格は明確ではない。しかし，溝は全ての他遺構を切って掘り込まれていることから，最も新しい時期に掘られたことが推定できる。第1号溝は方形に周回することが予想され，他の溝とは性格が異なるものと思われる。第2号溝の南西端付近からは，土師質土器(かわらけ)が集中して出土しており，その出土状況から一括して投棄されたことが推定できる。第6号溝は大規模な溝の一部とみられ，調査区域外に大きく延びていると思われる。



第245図　柴崎遺跡II区遺構分布図

第４章　柴崎遺跡II区（II－１）

当遺跡の調査は，昭和62年度と63年度にわたって実施された。本書では，62年度の調査結果を報告する。なお，調査手順の相違により同一の遺構番号があるため，62年度は１次区，63年度は２次区とし，II－１・II－２と呼称することにする。

第１節　竪穴住居跡

１　古墳時代の住居跡

第10号住居跡（第246図）

本跡はＦ$4i_7$区を中心に確認された住居跡である。

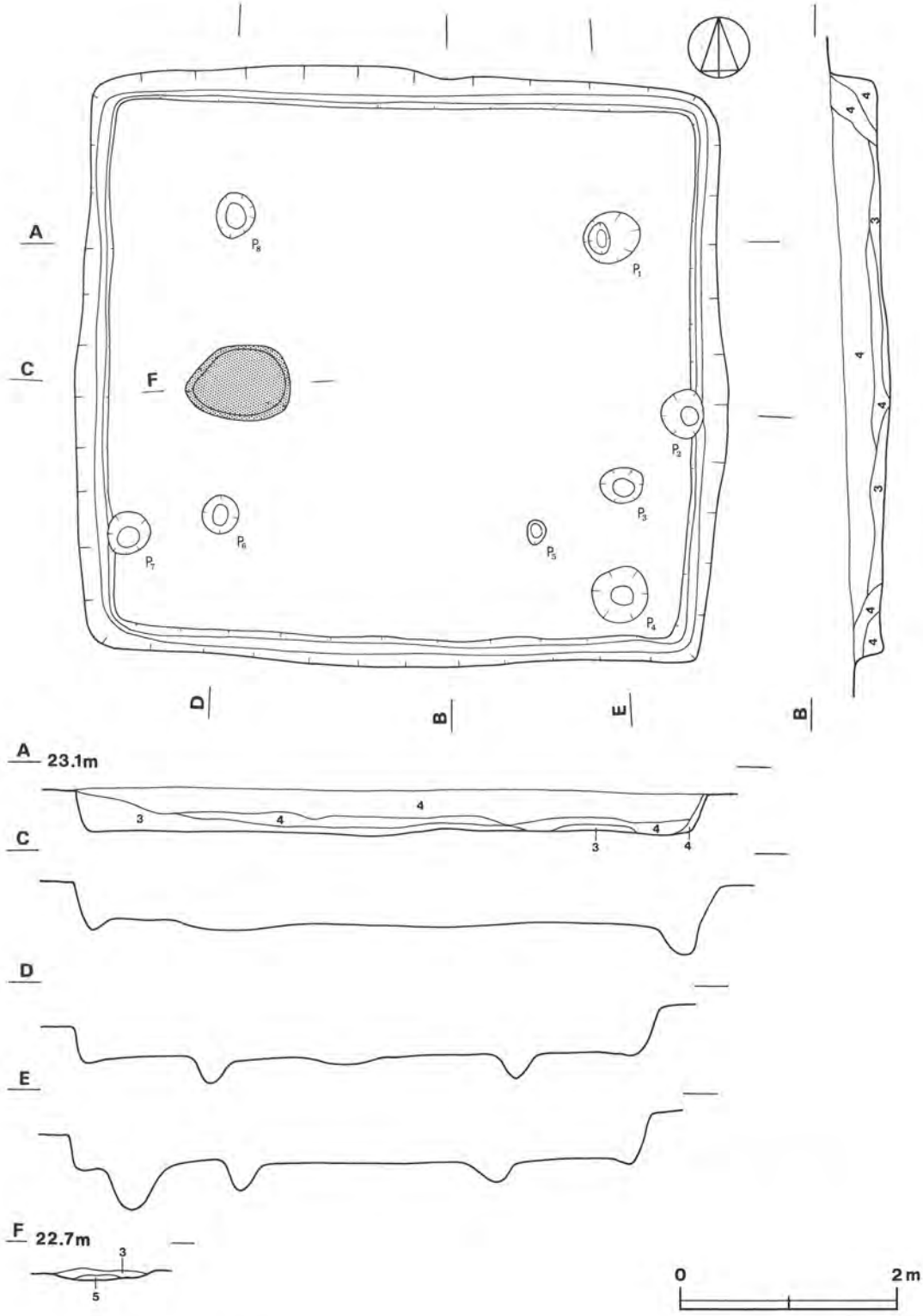
平面形は方形を呈し，規模は長軸6.00m，短軸5.50mで，主軸方向はＮ－85°－Ｗである。壁は外傾して立ち上がり，高さは40cmである。壁溝は全周しており，上幅15cm前後，下幅８～10cm，深さ４～８cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは８か所検出されている。位置からみて，P_1・P_3・P_6・P_8は主柱穴，P_2は出入口に関するピットと考えられる。主柱穴の径は33～52cm，深さは19～27cmである。南東コーナー部に検出されたP_4は貯蔵穴と思われ，径55cmの円形を呈し，深さは42cmである。床の西側，P_6とP_8の間に炉が認められた。炉は長径97cm，短径66cmの楕円形を呈し，ロームを８cm掘り込んだ地床炉である。炉の底面は，赤く焼き締まっている。

覆土は，３層に分けられる。上位の２層は焼土粒子と炭化物を少量含む黒褐色土，３層は暗褐色土で，含有物は上位２層と同じである。

遺物は全て土師器で，坏（１）・高坏５点（２，３，４，５）・小型壺（６）・鉢（７）・甕３点（８，９，10）である。小型壺は西壁寄りの床面から，甕は西壁と炉の間の覆土から，それぞれ出土している。また高坏や鉢は，炉周辺の床面及び覆土から出土している。他に，土師器片298点が出土している。

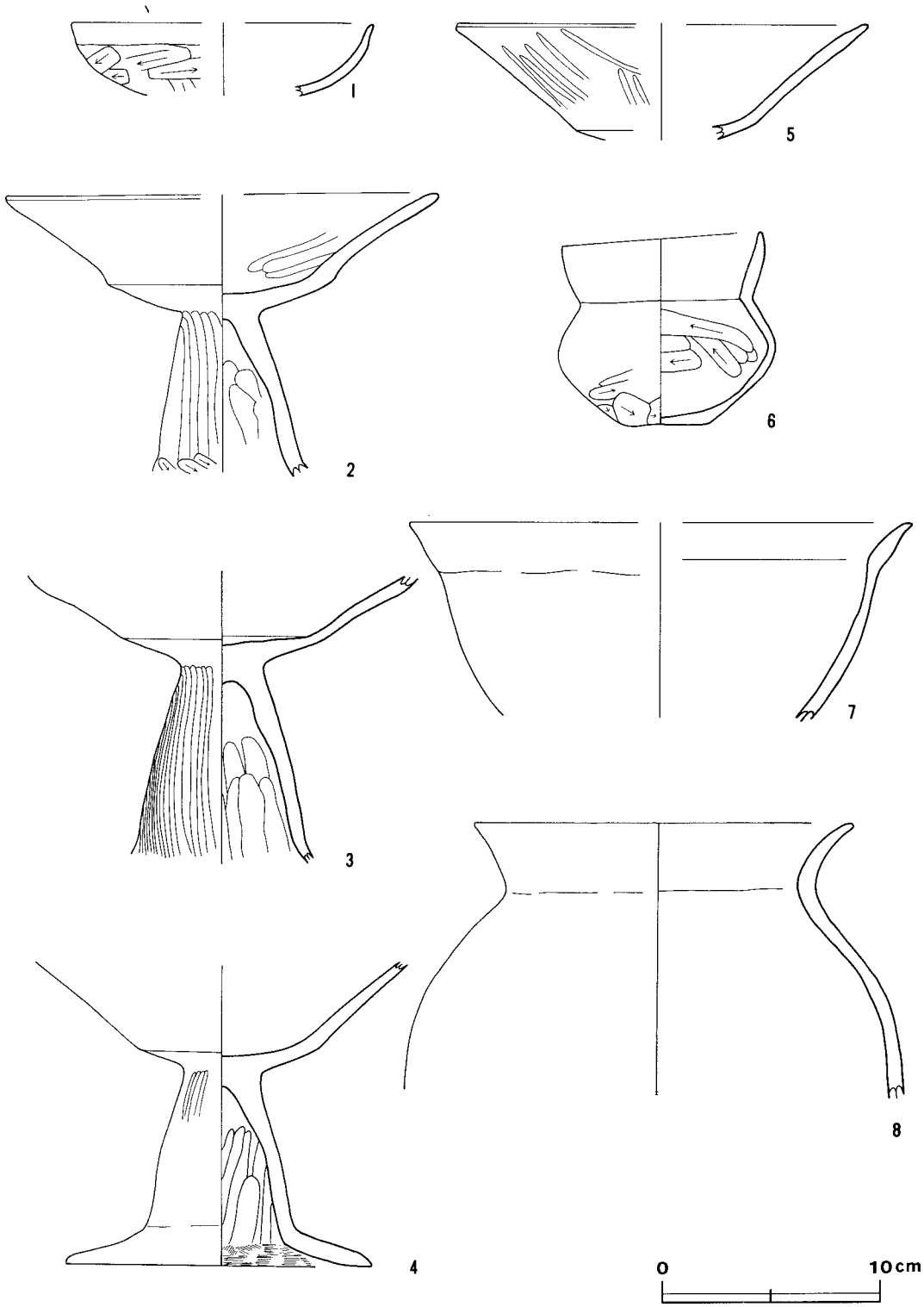
出土遺物観察表（第247・248図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (14.0) B (3.4)	底部は丸底で，口縁部との境に弱い稜を有する。口縁部は外傾する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面横ナデ，器内面はナデ調整。	長石・雲母 明赤褐色 普通	10%



第246図　第10号住居跡実測図

2	高　　坏 土　師　器	A (20.0) B (12.8)	坏部は底部と口縁部の境に明確な稜を有し，口縁部は外反ぎみに大きく開く。脚部は直線的に外下方に下がり，端部は欠損している。	坏部の口縁部内･外面横ナデ，内面はヘラナデ，脚部外面はヘラナデ，内面は指頭によるナデ調整。	雲母 にぶい橙色 普通	50%
3	高　　坏 土　師　器	B (13.2)	坏部は底部と口縁部の境にあまい稜を有し，口縁部は外傾して開く。脚部は内湾ぎみに外下方に下がり，端部は欠損している。	坏部内・外面はナデ，脚部外面はヘラナデ，内面は指頭によるナデ調整。	長石・スコリア・石英 にぶい橙色 普通	50%
4	高　　坏 土　師　器	B (14.0) C 14.1	坏部は底部と口縁部の境にあまい稜を有し，口縁部は外傾して開く。脚部は内湾ぎみに外下方に下がり，「く」の字状に屈曲して大きく開く。	坏部内・外面はナデ，脚部外面はヘラナデ，内面は指頭によるナデ，先端部はハケ目調整。	雲母・石英・長石 明赤褐色 普通	80%
5	高　　坏 土　師　器	A (18.9) B (5.4)	坏部片である。底部と口縁部の境にあまい稜を有し，口縁部は外傾して開く。	外面はヘラナデ，内面は荒いナデ調整。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	10%
6	壺 土　師　器	A 9.2 B 8.8 C 3.6	底部は平底で，胴部は算盤玉状を呈する。口縁部は外傾し，端部は尖る。	底部はヘラ削り，胴部上半はナデ，下半はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はヘラナデ調整。	長石・石英・雲母 橙色 普通	100%
7	鉢 土　師　器	A (23.0) B (8.9)	胴部は内湾しながら立ち上がり，口縁部は外傾する。	胴部内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	10%
8	甕 土　師　器	A 15.8 B (12.5)	胴部は球形を呈し，口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部端は尖る。	口縁部内・外面は横ナデ，他は磨滅がひどく調整痕不明。	長石・石英・雲母 橙色 普通	25%
9	甕 土　師　器	B (20.6) C (5.4)	底部は平底で，胴部は球形を呈している。	器内・外面ともナデ調整。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	40%
10	甕 土　師　器	A (16.8) B 22.1 C 5.5	底部は平底で，胴部は算盤玉状を呈する。口縁部は外傾して立ち上がる。	胴部外面はハケ目調整後，上位はナデ，中～下位はヘラ削り，同内面はナデ，底部近くはハケ目，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・パミス にぶい橙色 普通	70%



第247図　第10号住居跡出土遺物実測図（1）

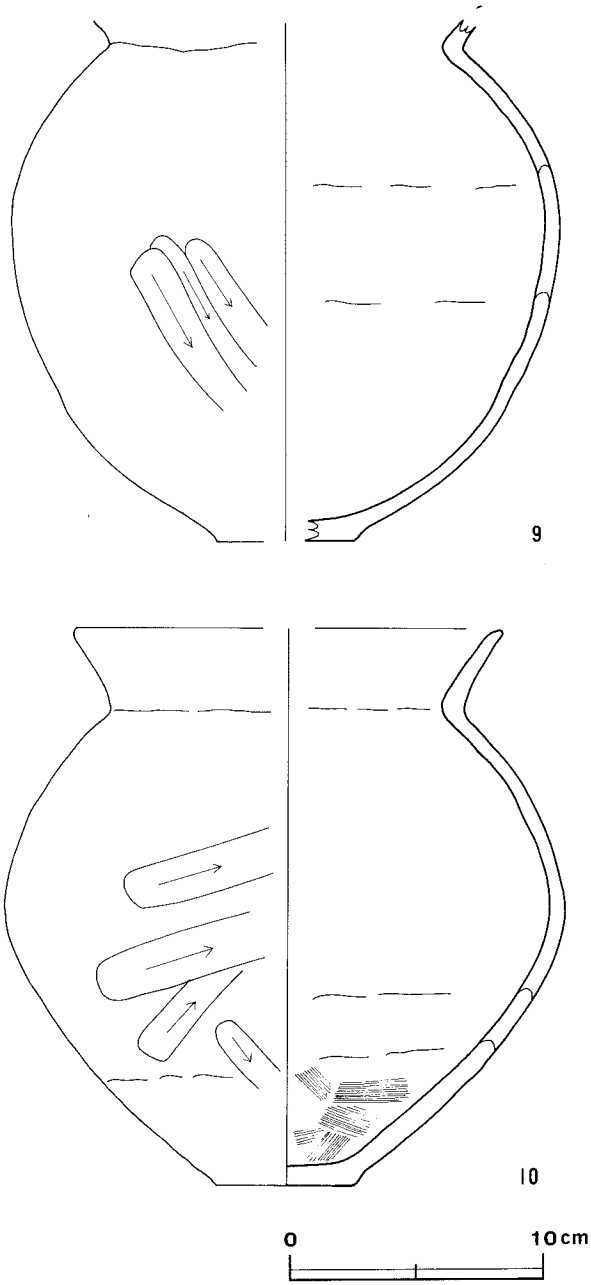
第12号住居跡(第249図)

本跡はG5b9区を中心に確認された住居跡である。地形の関係で北西側2分の1は消失しており，調査できたのは南東側だけである。

平面形は方形を呈していたと推定され，規模は計測できた部分で3.40mである。主軸方向は不明である。壁は外傾して立ち上がり，高さは20cmである。壁溝は認められない。床は平坦で，ピットはない。南西コーナー部には貯蔵穴が検出され，楕円形に掘り込まれている。規模は長径106cm、短径82cm，深さ22cmである。北壁寄りの床の一部が焼けていたが，その性格は不明である。

覆土は2層から成り，1層は焼土粒子を少量含む黒褐色土，2層はローム粒子を含む暗褐色土である。

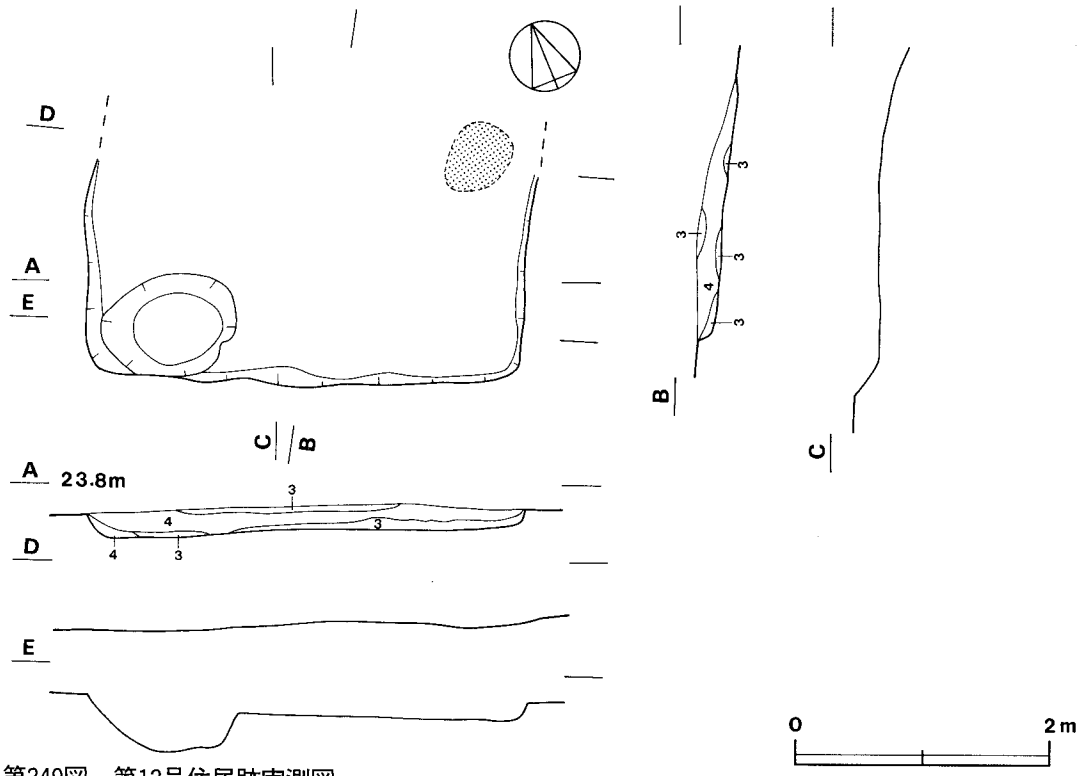
遺物は，土師器の坏が覆土から，土師器の甕3点(3)が南東コーナー部近くの覆土から，同じく土師器の鉢(2)が南東コーナー部の床面から，それぞれ出土している。他に，土師器片18点が出土している。



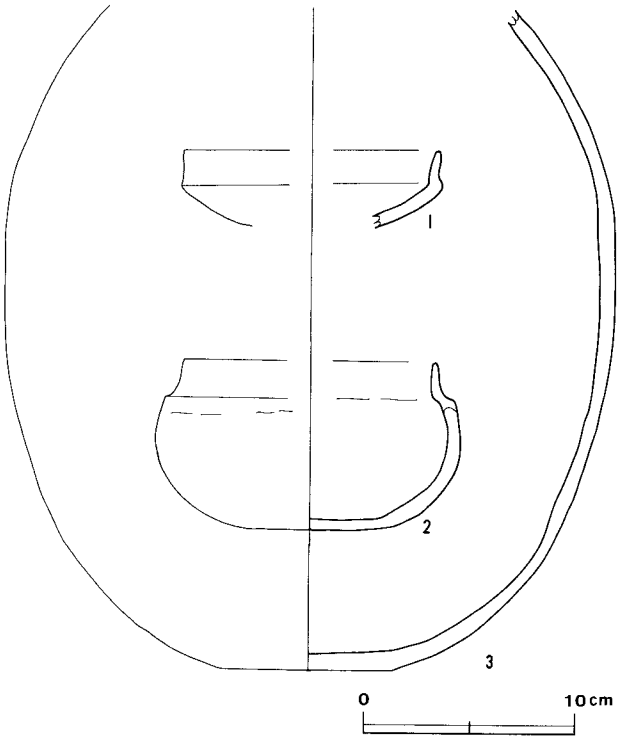
第248図　第10号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物観察表(第250図)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (12.0) B (3.7)	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は直立する。	磨滅しており調整痕不明。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	5%



第249図　第12号住居跡実測図



第250図　第12号住居跡出土遺物実測図

2	鉢 土師器	A (12.0) B 8.0	底部は丸底で，口縁部との境に稜を有する。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面は横ナデ，他はナデ調整。	スコリア・長石・雲母・石英 にぶい橙色 普通	50%
3	甕 土師器	B (31.2) C 8.1 E 28.8	底部は平底で，胴部は内湾しながら立ち上がり，中位に胴部最大径を有する。	磨滅しており調整痕不明。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	30%

第15号住居跡(第251図)

本跡はF5d_4区を中心に確認された住居跡である。

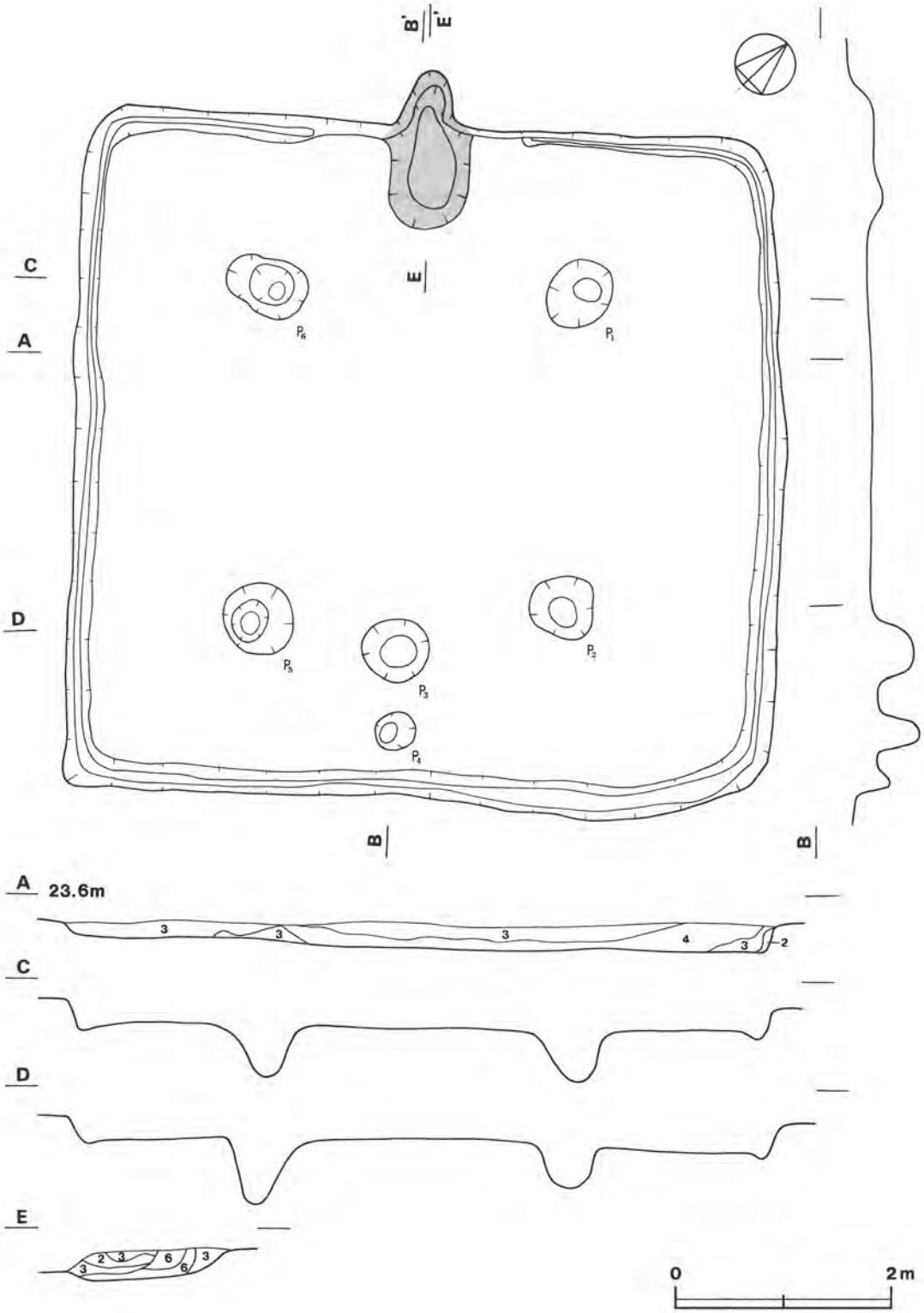
平面形は方形を呈し，規模は長軸6.55m，短軸6.10mで，主軸方向はN—50°—Wである。壁は外傾して立ち上がり，高さは20cmである。壁溝は全周し，上幅12～25cm，下幅5～18cm，深さ5～14cmである。床は平坦で，硬く締まっている。ピットは6か所検出されている。位置からみて，P_1・P_2・P_5・P_6が主柱穴と思われ，それぞれの径は56～68cm，深さは41～65cmである。P_3・P_4は南壁中央部下に検出されており，出入口に関連するピットと思われる。カマドは北壁中央部に構築されていたが，袖部や火床部の掘り込みは認められず，煙道の張り出しは50cmである。

覆土は2層で，1層は暗褐色土，2層は黒褐色土で，ともにローム粒子を含んでいる。

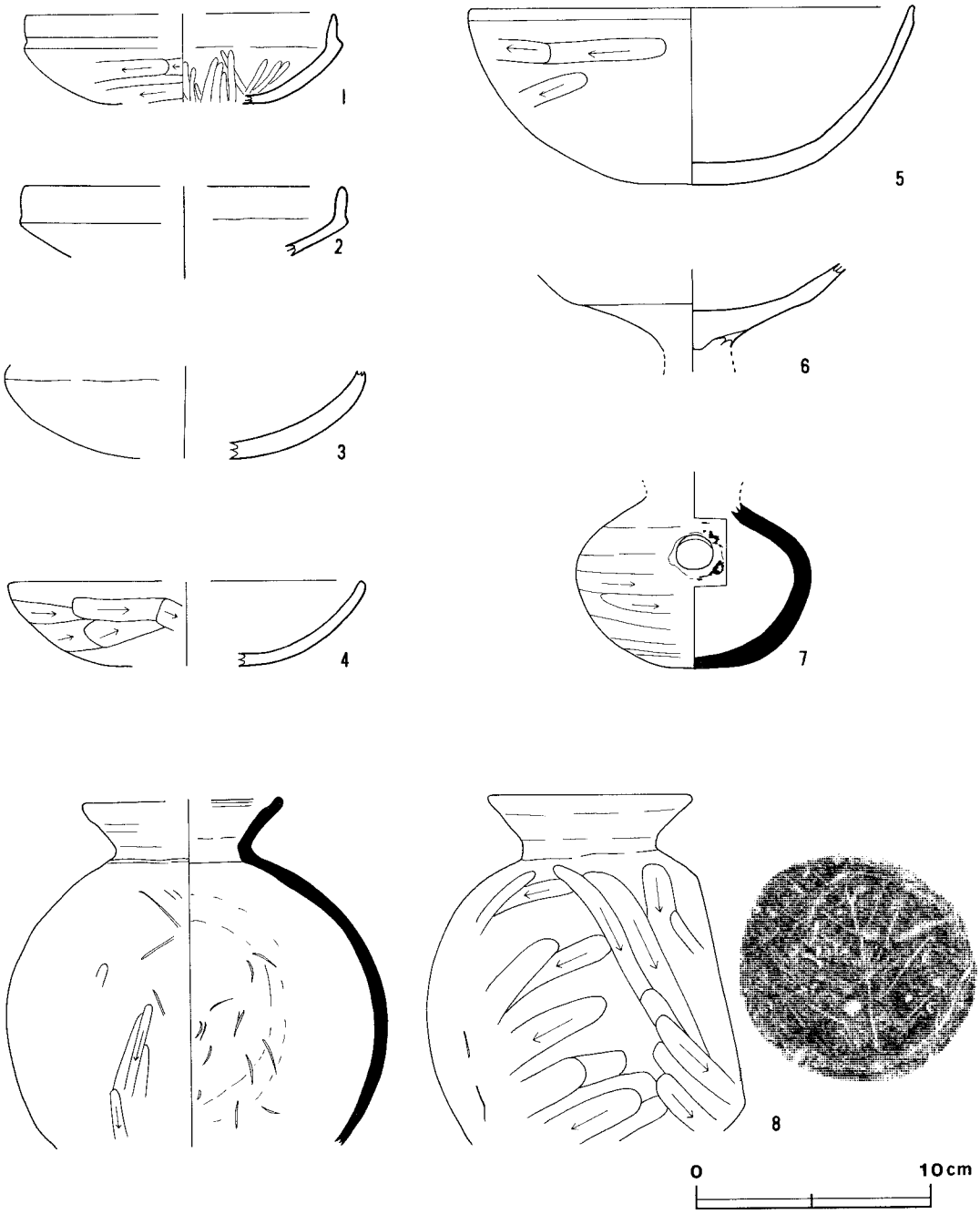
遺物は，土師器の坏5点(1，2，3，4)・甕2点(9，10)がカマド周辺の覆土から，土師器の鉢(5)が南西コーナー部の覆土から，土師器の高坏(6)及び須恵器の提瓶(8)が北西コーナー部の覆土から，須恵器の瑠(7)がP_1の底面から，支脚2点(12)がカマド内から，それぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片270点が出土している。

出土遺物観察表(第252・253図)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.2) B (3.9)	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はヘラ磨き調整。	雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	20%
2	坏 土師器	A (14.0) B (3.0)	底部は丸底で，口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	雲母 黒褐色 普通	20%
3	坏 土師器	B (4.0)	底部片で，丸底である。	外面はヘラ削り，内面はヘラナデ調整。	砂粒・雲母 褐色 普通	20%
4	坏 土師器	A (15.6) B (3.7)	底部は丸底で，口縁部は短く内湾する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	20%
5	鉢 土師器	A 19.2 B (8.7)	底部は半球形を呈し，口縁部は短く直立する。	底部はヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ，器内面はナデ調整。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	80%

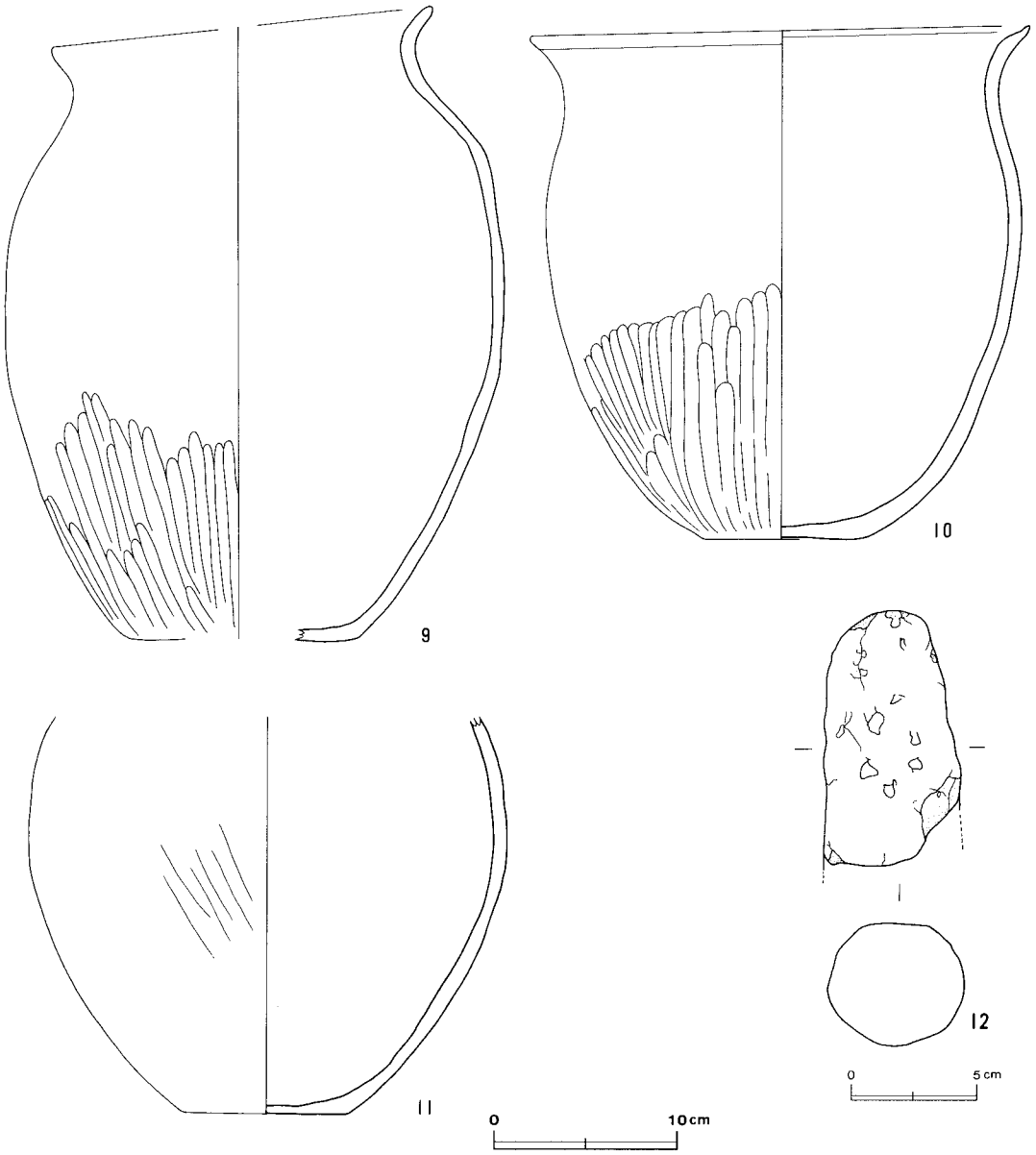


第251図　第15号住居跡実測図



第252図　第15号住居跡出土遺物実測図（1）

6	高　　坏 土　師　器	B（3.6）	坏部片で，底部と口縁部の境に稜を有する。	内・外面ナデ調整。	雲母・石英・長石 明赤褐色 普通	10%



第253図　第15号住居跡出土遺物実測図（２）

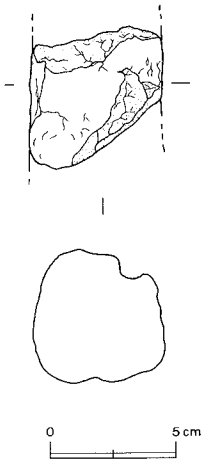
7	甕 須恵器	B（7.5） E 10.2	底部は丸底で，胴部は内湾しながら立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は欠損している。孔径は1.5cm。	底部はヘラ削り，胴部下半は回転ヘラ削り，上半はナデ調整。開孔部周辺には，タール状の物質が付着している。	砂粒 灰白色 普通	80%
8	提瓶 須恵器	A（8.5） B（15.2） E 16.5	体部は球形を呈し，最大径は中位にある。口縁部は外傾し，端部でわずかに上方に屈曲する。	体部前面はナデ，側面はヘラナデ及びヘラ削り調整。体部背面は平坦で木葉痕が残る。	長石・石英 灰白色 普通	70%

9	甕 土師器	A (20.8) B 35.1 C (12.8)	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は短く外傾する。	胴部下位はヘラ磨き，上位及び内面はナデ調整。	砂粒・雲母 褐色 普通	50%
10	甕 土師器	A 27,1 B 28.3 C 8.3	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに立ち上がり，上位に胴部最大径を有する。口縁部は短く外反する。	底部はヘラナデ，胴部下位はヘラ磨き，上位及び内面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英 浅い黄橙色 普通	90%
11	甕 土師器	B (21.7) C (9.0) E (26.2)	底～胴部片。底部は平底で，胴部は内湾ぎみに立ち上がり，中位に胴部最大径を有する。	底部はナデ，胴部はヘラ磨き調整。	長石・石英・雲母 橙色 普通	30%
12	支脚 土製品	全長 10.5 径 5.5 重量 199.5g	支脚の一部で，円柱状を呈している。			

第16号住居跡(第255図)

本跡はF6f₁区を中心に確認された住居跡で，遺構確認の段階で床が露呈してしまい，壁やカマドの大部分が消失している。さらにカマド南側は撹乱を受けている。

平面形は方形を呈し，規模は長軸6.35m，短軸5.98mで，主軸方向はN—45°—Wである。壁は北東コーナー部付近でわずかに確認でき，高さは15cmである。壁溝は撹乱部分を除き全周しており，上幅14～25cm，下幅7～15cm，深さ6cmである。床は北側に傾斜しているが，本来の床は南側の一部で検出されただけである。ピットは5か所検出され，P_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と思われる。南側に位置するP_2・P_4は径60～61cm，深さ33～35cm，北側のP_1・P_5は径32～44cm，深さ30～31cmである。カマドは，北壁中央部に構築されていたが，痕跡のみ確認できた。



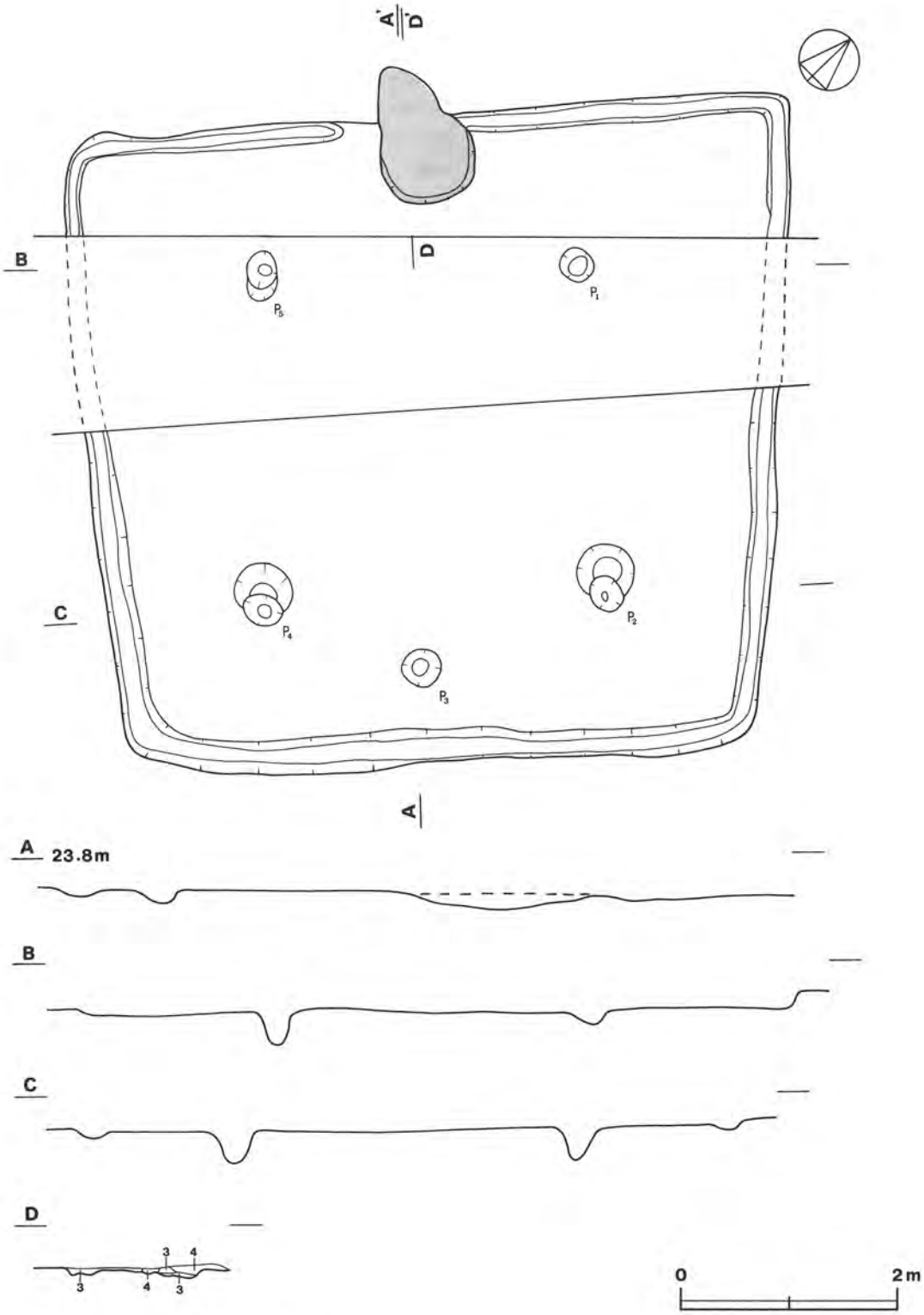
第254図
第16号住居跡出土遺物実測図

覆土は消失していて不明である。

遺物は，支脚がカマド内より出土し，他に土師器・須恵器片29点が出土している。

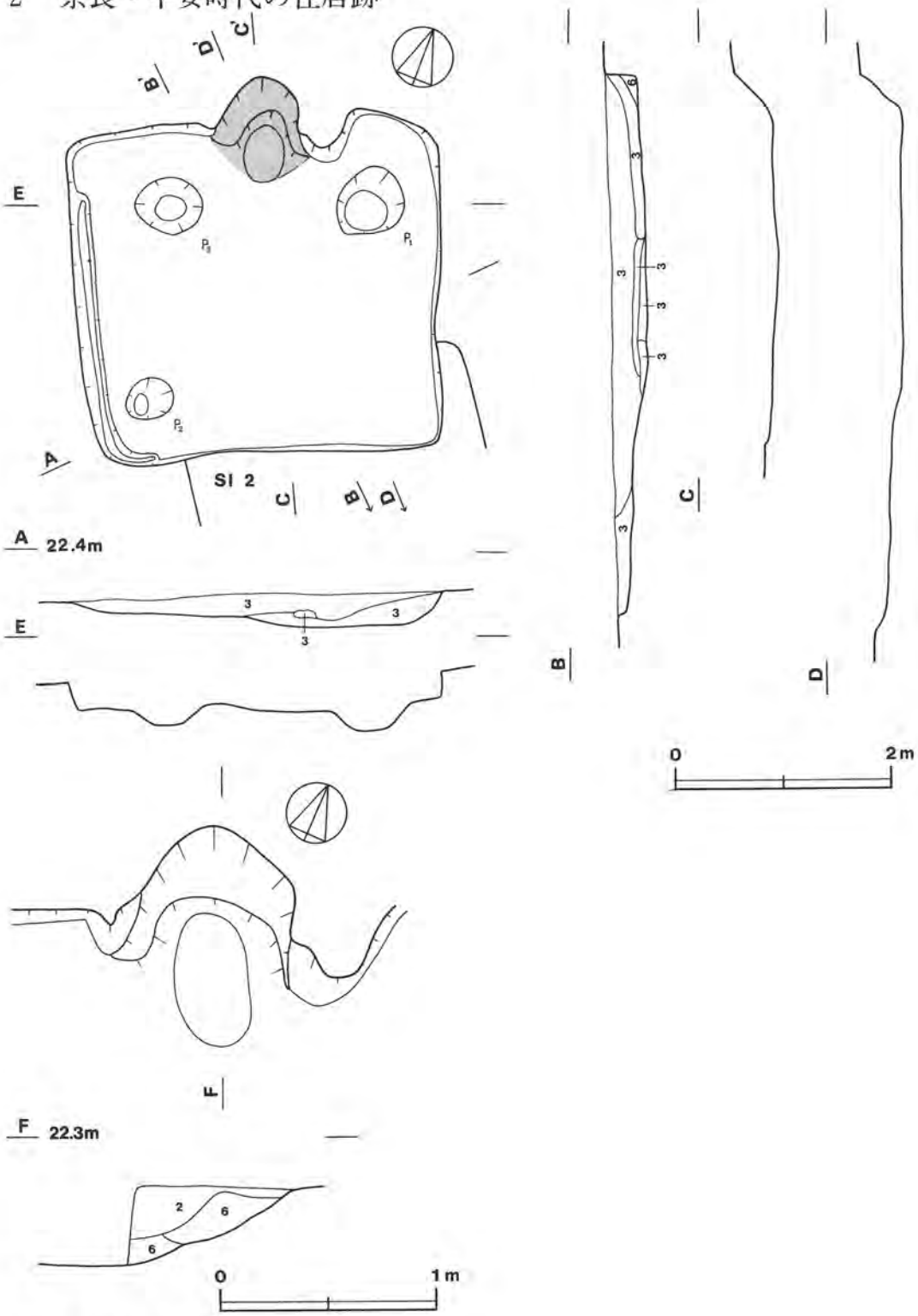
出土遺物観察表(第254図)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	支脚 土製品	全長 5.7 径 5.3 重量 137.3g	支脚の一部で，断面は隅丸方形を呈している。			



第255図　第16号住居跡実測図

2　奈良・平安時代の住居跡



第256図　第１号住居跡実測図

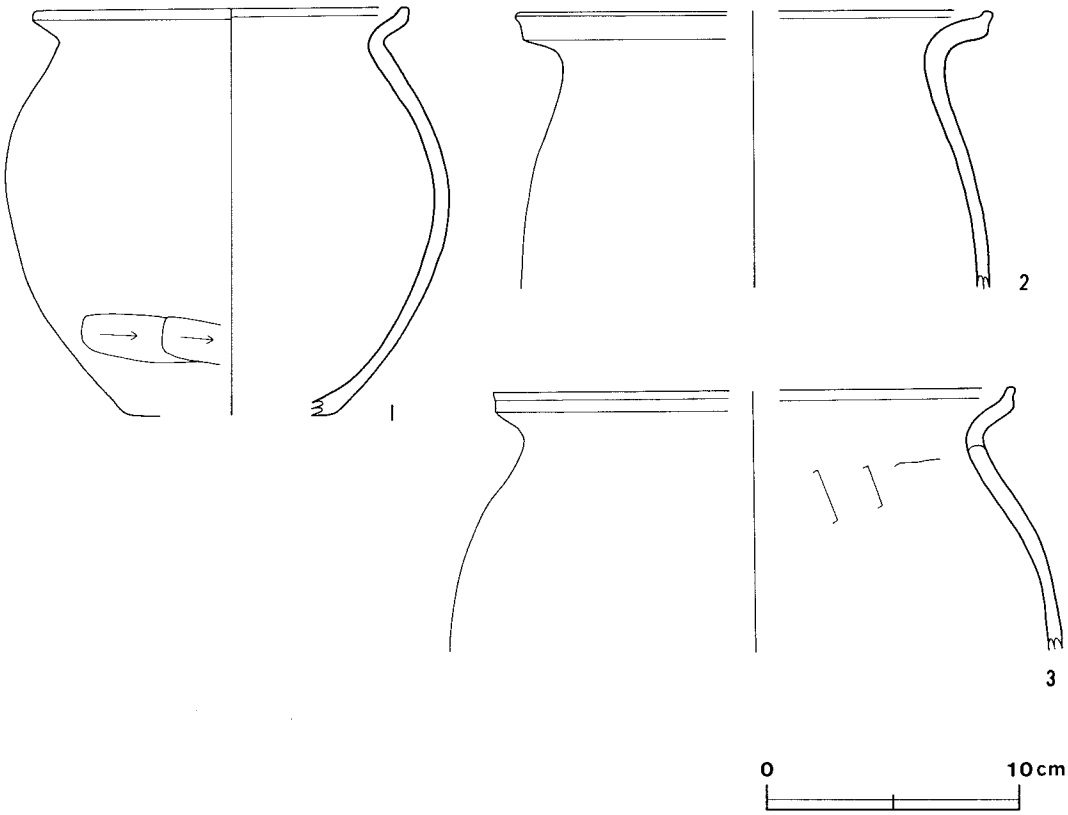
第１号住居跡(第256図)

本跡はG4b$_1$区を中心に確認された住居跡で，第２号住居跡と南側で重複している。床の状態や土層からみて，本跡の方が古いと思われる。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.39m，短軸3.10mで，主軸方向はN－20°－Wである。壁は重複している南壁及び東壁の南側を除き，垂直に立ち上がり，高さは35cmである。重複部分の壁は，床から２～４cmの高さまで検出できたが，上部は消失している。壁溝は西壁下のみで検出され，上幅８～13cm，下幅４～８cm，深さ３cmである。床は粘土が混入したロームで，平坦である。ピットは３か所検出され，径は42～63cm，深さは10～22cmである。ピットの検出位置からみて，３か所とも主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に山砂で構築されているが，袖部は残っておらず，火床部の掘り込みもない。煙道は壁外に35cm張り出している。

覆土は極暗褐色土だけがみられ，多量の黒色土が混入していた。

遺物は，土師器の甕３点(１，２，３)がカマド前面の覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片103点が出土している。



第257図　第１号住居跡出土遺物実測図

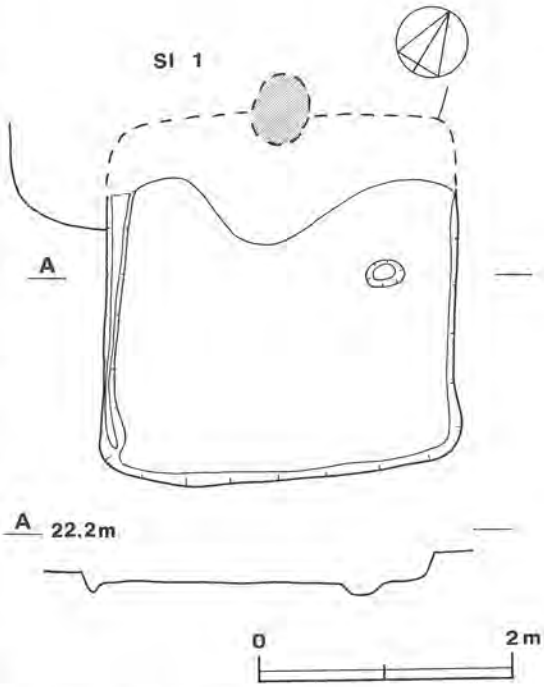
出土遺物観察表(第257図)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A 14.8 B 16.2 C (8.4)	胴部は内湾しながら立ち上がる。口頸部は短く「く」の字状に外反する。	胴部外面上～中位はナデ，下位は横方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	85%
2	甕 土師器	A (19.0) B (11.0)	胴部は内湾ぎみに内傾し，口頸部は屈曲した後外反する。口縁端部は外上方につまみ出されている。	器内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい褐色 普通	15%
3	甕 土師器	A (20.6) B (10.4)	胴部は内湾ぎみに内傾し，口頸部は「く」の字状に外反する。口縁端部は上方につまみ出されている。	器内・外面はナデ，口縁端部は横ナデ調整。	砂粒・スコリア・石英 明赤褐色 普通	30%

第2号住居跡(第258図)

本跡はG4c₂区を中心に確認され，第1号住居跡と北側で重複しているが，本跡の方が新しいものと思われる。

重複しているため，平面形は明確でははないが方形を呈していたものと思われ，規模は確認できた部分で一辺2.75m，主軸方向はN－36°－Wである。壁は東西及び南壁が検出されており，高さは8～20cmである。北壁は消失している。壁溝は西側だけに検出され，上幅10～18cm，下幅5～14cm，深さ8cmである。床は，粘土が混入したロームで，第1号住居跡との重複部分では貼り床が認められた。ピットは東壁下部に1か所検出され，径29cm，深さ16cmである。カマドは北壁中央部にあったと推定されるが，重複し遺存が悪いため形状は不明である。

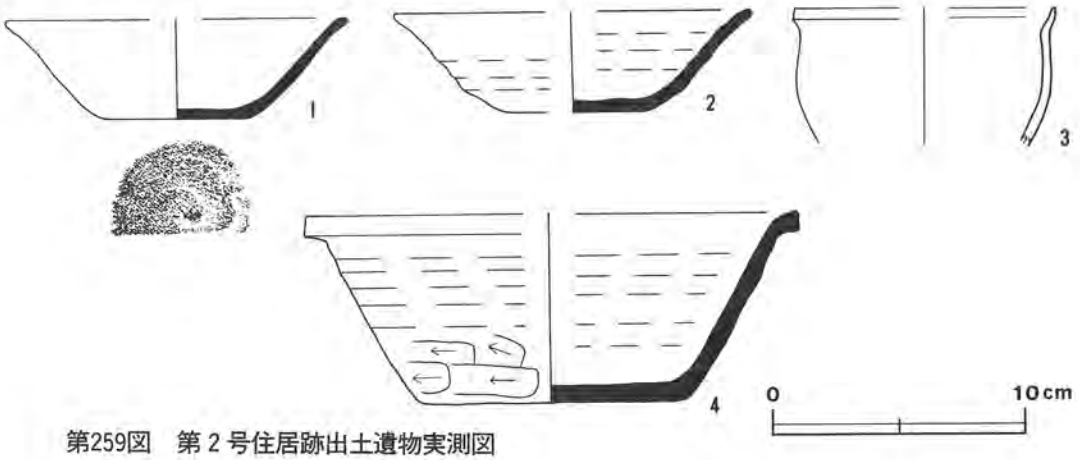


第258図　第2号住居跡実測図

覆土は2層に分けられる。1層は極暗褐色土で黒色土のブロックを多く含み，2層は暗褐色土で黒色土のブロックを多く含み，硬く締まっている。

遺物は，須恵器の坏2点(1，2)がカマド西側の床面から，土師器の甕(3)と須恵器の鉢(4)

がカマド内から出土している。他に，須恵器・陶器片27点が出土している。



第259図　第２号住居跡出土遺物実測図

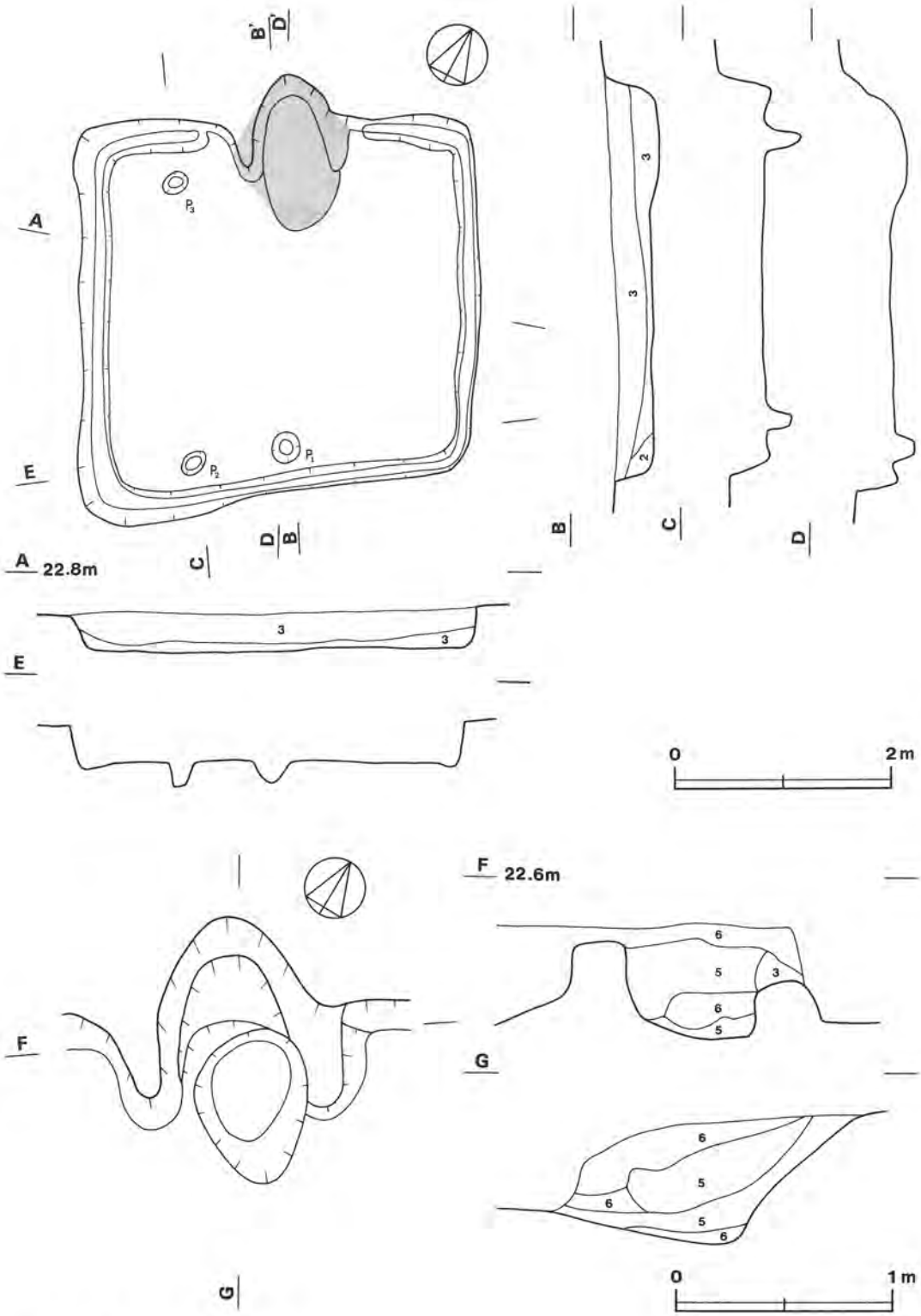
出土遺物観察表(第259図)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A (13.6) B 3.9 C (5.4)	底部は平底で，体部は直線的に立ち上がり，口縁部はかるく外反する。	全体に磨滅が多く調整痕は不明。	砂粒・長石・石英・雲母 明褐灰色 普通	25%
2	坏 須恵器	A (14.2) B 4.0 C (5.4)	底部は平底で，体部は外反ぎみに立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り。他の調整痕は磨滅が多く不明。水挽き成形。	砂粒・雲母・長石・石英・スコリア 灰黄褐色 普通	50%
3	甕 土師器	A (10.4) B (5.5)	胴部は内湾ぎみに立ち上がり，口頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は上方につまみ出されている。	胴部中～下位は横方向のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	20%
4	鉢 須恵器	A 20.0 B 7.5 C 10.5	底部は平底で，胴部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部は短く外反する。	底部は一定方向のヘラ削り，胴部下位は横方向のヘラ削り調整。水挽き成形。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	50%

第４号住居跡(第260図)

本跡はG4b$_7$区を中心に確認された住居跡である。

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.70m，短軸3.35mで，主軸方向はN－27°－Wである。壁はロームまじりの粘土で，外傾して立ち上がり，高さは35cmである。壁溝は全周しており，上幅11～24cm，下幅６～20cm，深さ４～６cmである。床は平坦で硬く締まり，ピットはカマド西側に１か所，

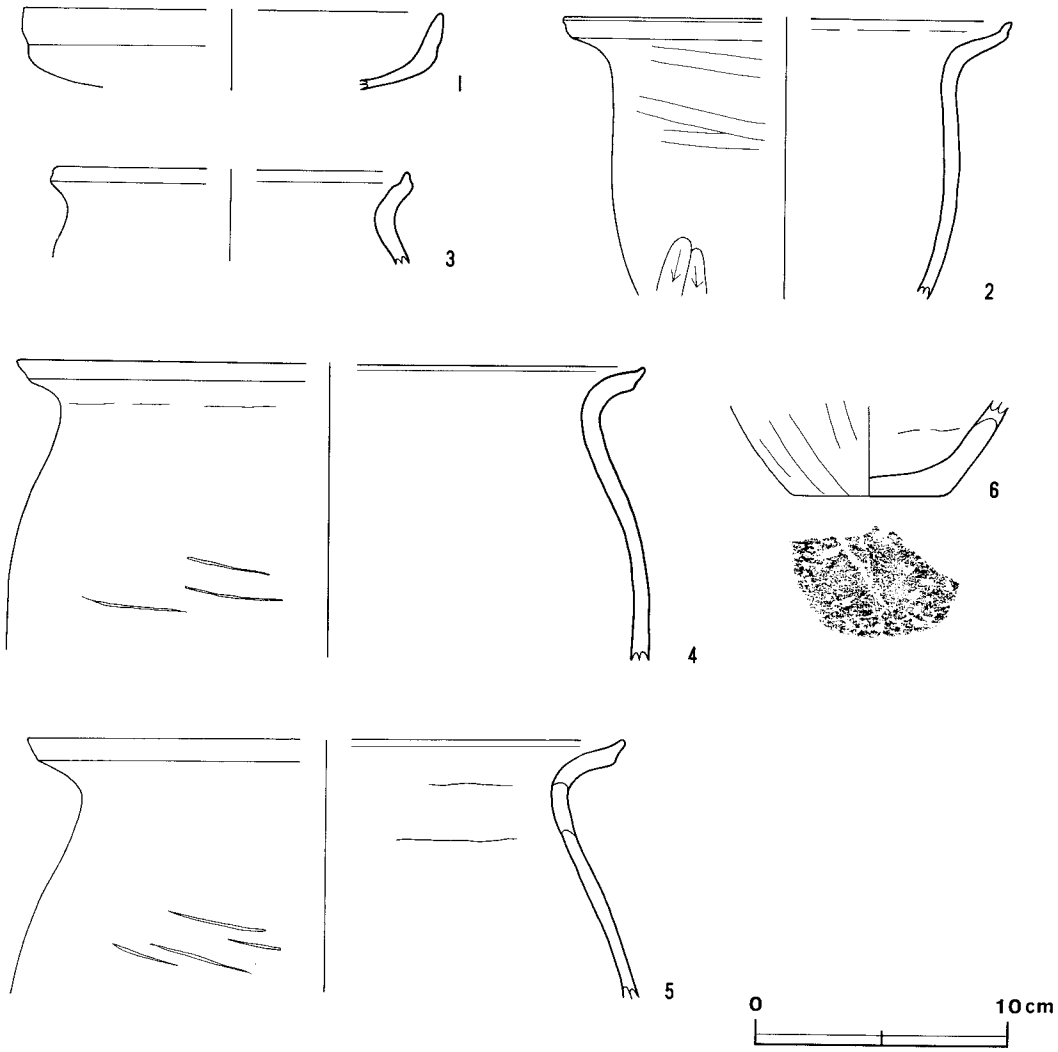


第260図　第４号住居跡実測図

南壁下に２か所検出されている。ピットの規模は，径26～30cm，深さ22～37cmである。カマドは北壁やや東寄りに粘土で構築されており，全長142cm，最大幅110cmである。両袖部がわずかに残り，火床部は長径75cmの楕円形に掘り込まれ，深さは15cmである。煙道の張り出しは40cmである。

覆土は２層に分けられ，１層は焼土粒子を中量含む極暗褐色土，２層は焼土粒子を中量，ローム粒子及び炭化物を少量含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の坏（１）・甕12点（２，３，４，５，６）が遺構中央部の覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片163点が出土している。



第261図　第４号住居跡出土遺物実測図

出土遺物観察表(第261図)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	盤状坏 土師器	A (16.6) B 3.1	底部は扁平な丸底で，口縁部との境にあまい稜を有する。口縁部は外傾して立ち上がる。	底部はヘラ削り調整。口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・スコリア・雲母 明赤褐色 普通	20%
2	甕 土師器	A (17.8) B (11.2)	胴部は内湾ぎみにほぼ垂直に立ち上がり，口頸部は「く」の字状に外反する。口縁端部は外上方につまみ出されている。	胴部外面上位はヘラナデ，同下位は縦方向のヘラ磨き，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母・長石 褐色 普通	20%
3	甕 土師器	A (14.0) B (3.6)	「く」の字状に屈曲する口頸部片である。口縁端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・石英・雲母・長石 にぶい橙色 普通	5%
4	甕 土師器	A (24.4) B (11.7)	胴部は内湾しながら内傾し，口頸部は短く外反する。口縁端部は外上方につまみ出されている。	胴部内・外面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母 橙色 普通	10%
5	甕 土師器	A (24.0) B (10.0)	胴部は内湾しながら内傾し，口頸部は短く外反する。口縁端部は外上方につまみ出されている。	磨滅が多く調整痕不明。	長石・石英・雲母・スコリア 橙色 普通	15%
6	甕 土師器	B (3.6) C (6.0)	底部片である。底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。底部の形状は隅丸方形を呈する。	器内・外面ヘラナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	10%

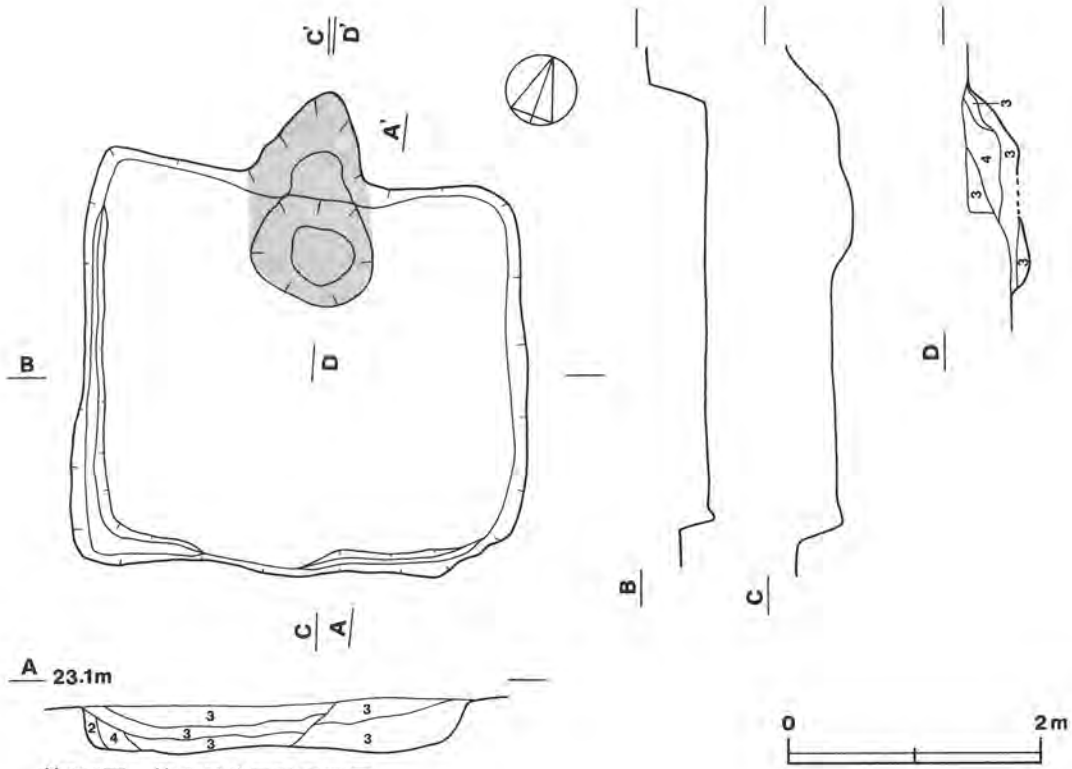
第5号住居跡(第262図)

本跡はF$4g_2$区を中心に確認された住居跡である。

平面形は東西に長い長方形を呈し，規模は長軸3.50m，短軸3.09mで，主軸方向はN—16°—Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは30cmである。壁溝は南壁から西壁にかけて検出され，上幅10～15cm，下幅4～10cm，深さ2～6cmである。床は硬く締まり平坦である。しかし，出入口部と考えられる南壁中央部付近の床は，周囲と比較して4cm前後低くなっている。ピットは検出されていない。カマドは北壁中央部に山砂で構築され，全長169cm，最大幅90cmである。袖部は消失しており，火床部は長径98cmの楕円形に掘り込まれ，深さは20cmである。煙道の張り出しは70cmである。

覆土は，3層に分けられる。1層はローム粒子を多量に含む暗褐色土，2層はローム粒子多量，焼土ブロック中量を含む極暗褐色土，3層は2層と同じ含有物のみられる暗褐色土である。各層とも極めて硬く締まっている。

遺物は，土師器の坏3点(1，2)・甕5点(5，9)・蓋2点(3，4)・鉢が覆土中～下層から，

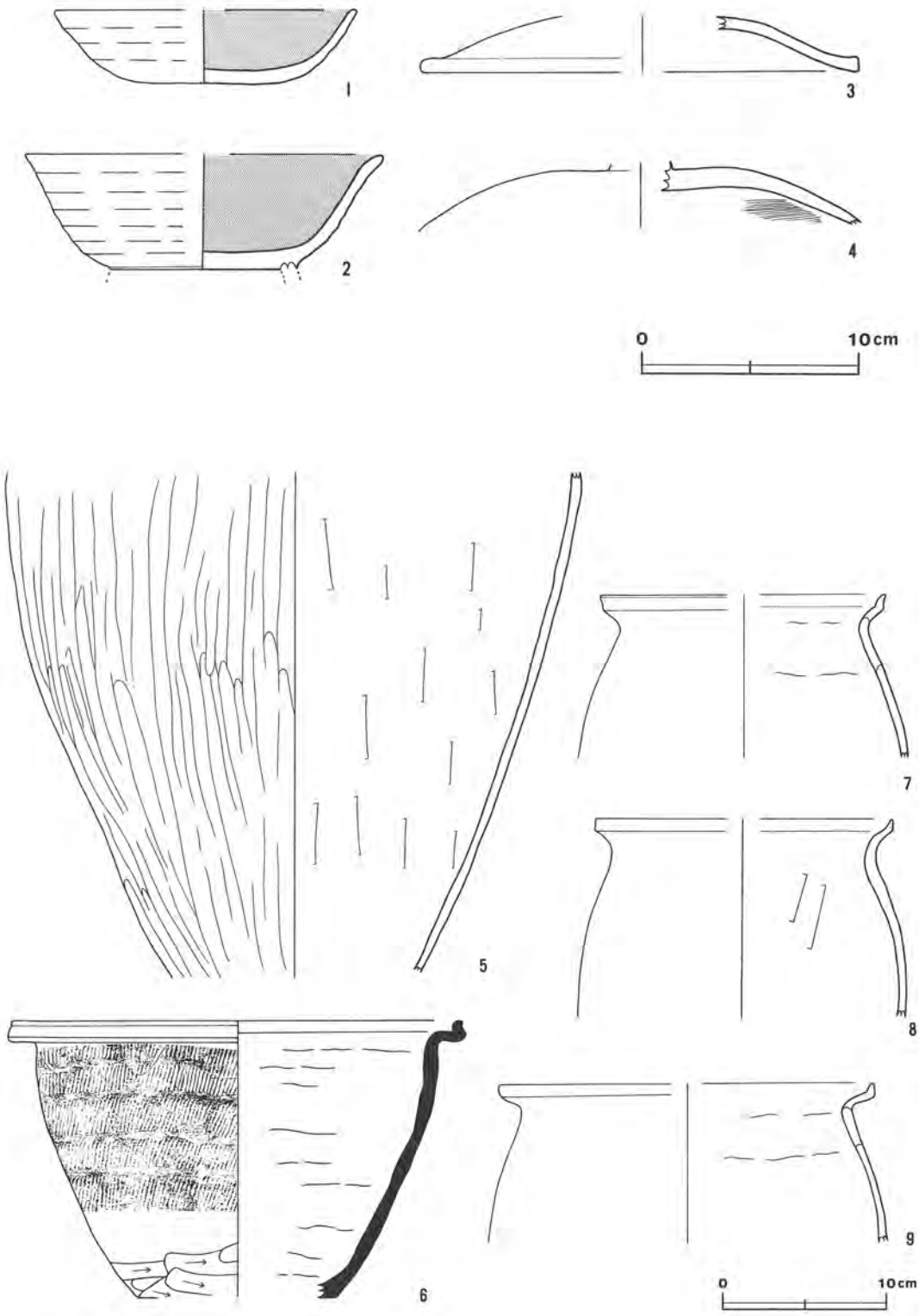


第262図　第５号住居跡実測図

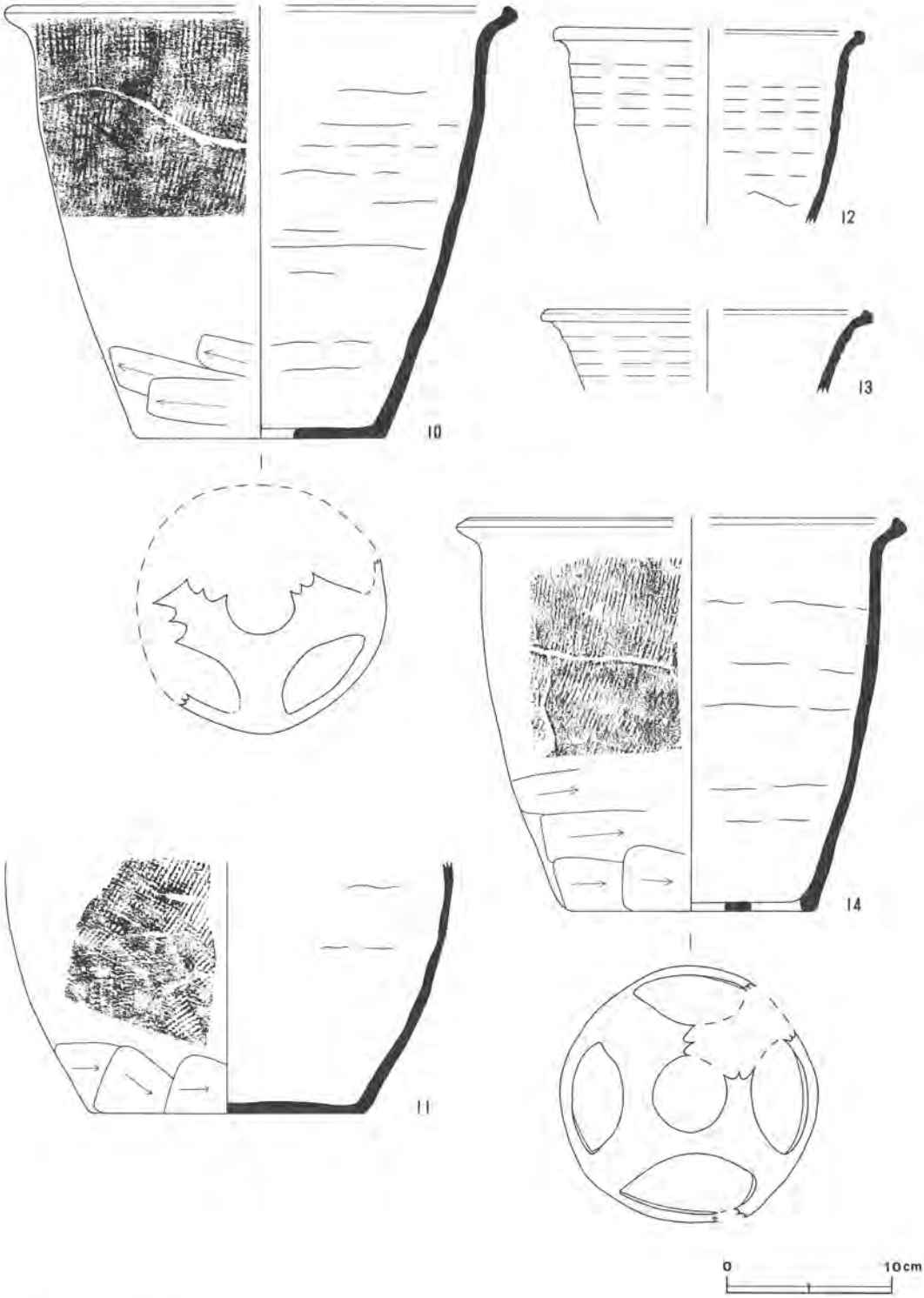
土師器の甕４点（７，８）及び須恵器の甕２点(11，16)・甑２点(10，14)がカマド内から，鉢５点（６，12，13，15)が床面中央部から南東コーナー部にかけて，それぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片253点が出土している。

出土遺物観察表(第263・264・265図)

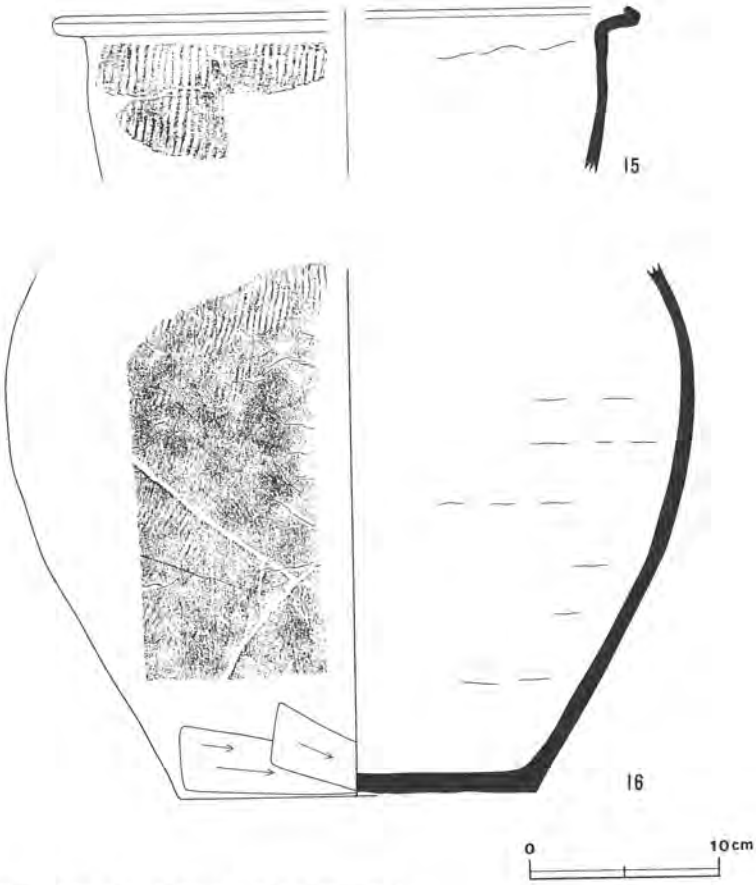
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 土師器	A (13.8) B 3.3 C 5.7	底部は平底で，体部との境は明瞭でない。体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	底部は一定方向のヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・雲母 橙色 普通	70% 内面黒色処理
2	高台付坏 土師器	A (15.4) B (5.3) D (8.5)	底部は平底で，体部との境に高台のとれた痕跡が残る。体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	器内面はヘラ磨き調整。 水挽き成形。	長石・雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	80% 内面黒色処理
3	蓋 土師器	A (20.1) B (2.5)	天井部は丸く，口縁部は外反して下がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。	雲母・長石・砂粒 橙色 普通	20%
4	蓋 土師器	B (3.0)	天井部は丸く，口縁部は外傾して下がる。	天井部は回転ヘラ削り，器内面はヘラ磨き調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母・スコリア・砂粒 橙色 普通	20%



第263図　第５号住居跡出土遺物実測図（１）



第264図　第５号住居跡出土遺物実測図（２）



第265図　第５号住居跡出土遺物実測図（３）

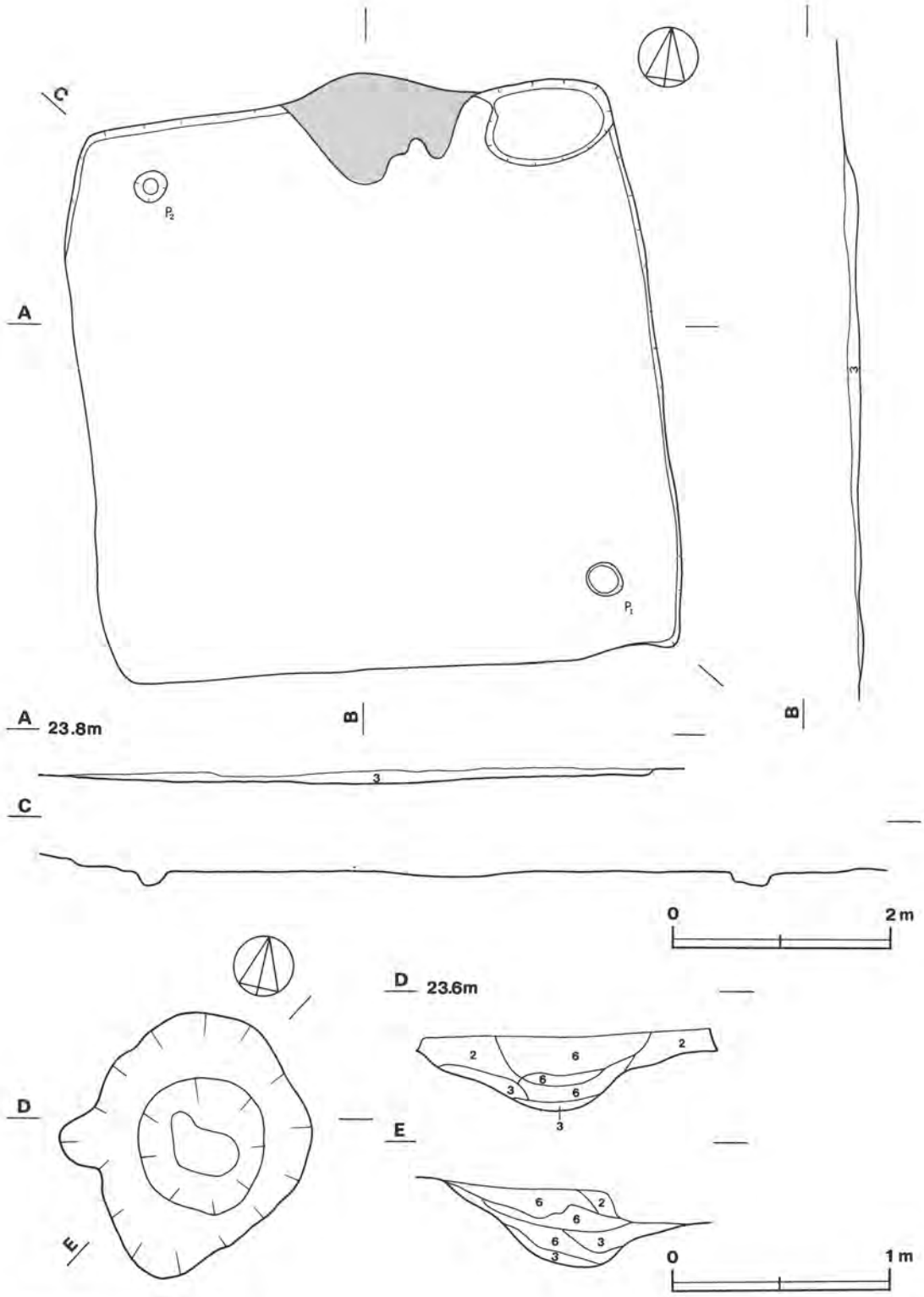
5	甕 土師器	B（31.2）	胴部片で，やや内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	外面は縦方向のヘラ磨き，内面はナデ調整。内面にはヘラの圧痕が残る。	雲母・長石・石英 橙色 普通	60%
6	鉢 須恵器	A　27.5 B　17.0 C（12.2）	胴部はかるく内湾しながら外傾して立ち上がり，口頸部は直角に屈曲する。口縁端部は外上方につまみ出されている。	外面は平行叩き目，内面と口縁部外面は横ナデ調整。内面には輪積痕が残る。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	50%
7	甕 土師器	A（17.0） B（10.0）	胴部は内傾して立ち上がり，口頸部は短く「く」の字状に屈曲する。	口縁部内・外面は横ナデ調整。他は調整痕不明。	長石・雲母・石英・スコリア にぶい橙色 普通	20%
8	甕 土師器	A（18.0） B（12.3）	胴部は内湾ぎみに垂直に立ち上がり，口頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は外上方につまみ出されている。	口縁部内・外面は横ナデ，他はヘラナデ調整。	長石・石英・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	30%

9	甕 土師器	A (23.0) B (9.8)	胴部は内湾しながら内傾し，口頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面は横ナデ，他はナデ調整。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	30%
10	甑 須恵器	A (30.0) B 27.5 C (15.0)	底部は平底で5孔を有する。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はかるく外反する。	胴部外面は縦～斜位の叩き目，同内面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内面には輪積痕が残る。	砂粒 灰色 普通	50%
11	甕 須恵器	B (15.5) C 16.6	底部は平底で，胴部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。	胴部外面は斜位の叩き目，同内面はナデ，同下端は横位のヘラ削り調整。器内面には輪積痕が残る。	長石・石英・雲母 灰黄色 普通	30%
12	鉢 須恵器	A (18.8) B (11.7)	胴部は外傾して立ち上がり，口頸部は外反する。口縁端部は丸い。	内・外面に水挽き痕が残る。	雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	20%
13	鉢 須恵器	A (19.8) B (4.9)	胴部は外傾して立ち上がり，口頸部はかるく外反する。口縁端部は外上方にわずかにつまみ出されている。	外面に水挽き痕が残る。	石英・雲母 橙色 普通	10%
14	甑 須恵器	A (26.0) B 23.6 C 15.0	底部は平底で5孔を有する。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は外反する。口縁端部は上方につまみ出されている。	胴部外面上～中位は斜位の叩き目，同下端は縦位のヘラ削り，口縁部内・外面は横ナデ調整。器内面には輪積痕が残る。	長石・石英・雲母・スコリア・砂粒 にぶい橙色 普通	70%
15	鉢 須恵器	A (30.6) B (8.4)	胴部は外傾して立ち上がり，口頸部は直角に屈曲する。口縁端部は内側に曲げられている。	口縁部内・外面は横ナデ，器外面は平行叩き目，器内面はナデ調整。	砂粒・長石 灰白色 普通	5%
16	甕 須恵器	B (27.9) C 19.0	底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がり，上位で胴部最大径に達し，頸部に向けて内傾する。	胴部外面は斜位の叩き目，同内面はナデ，同下端は横位のヘラ削り調整。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 普通	50%

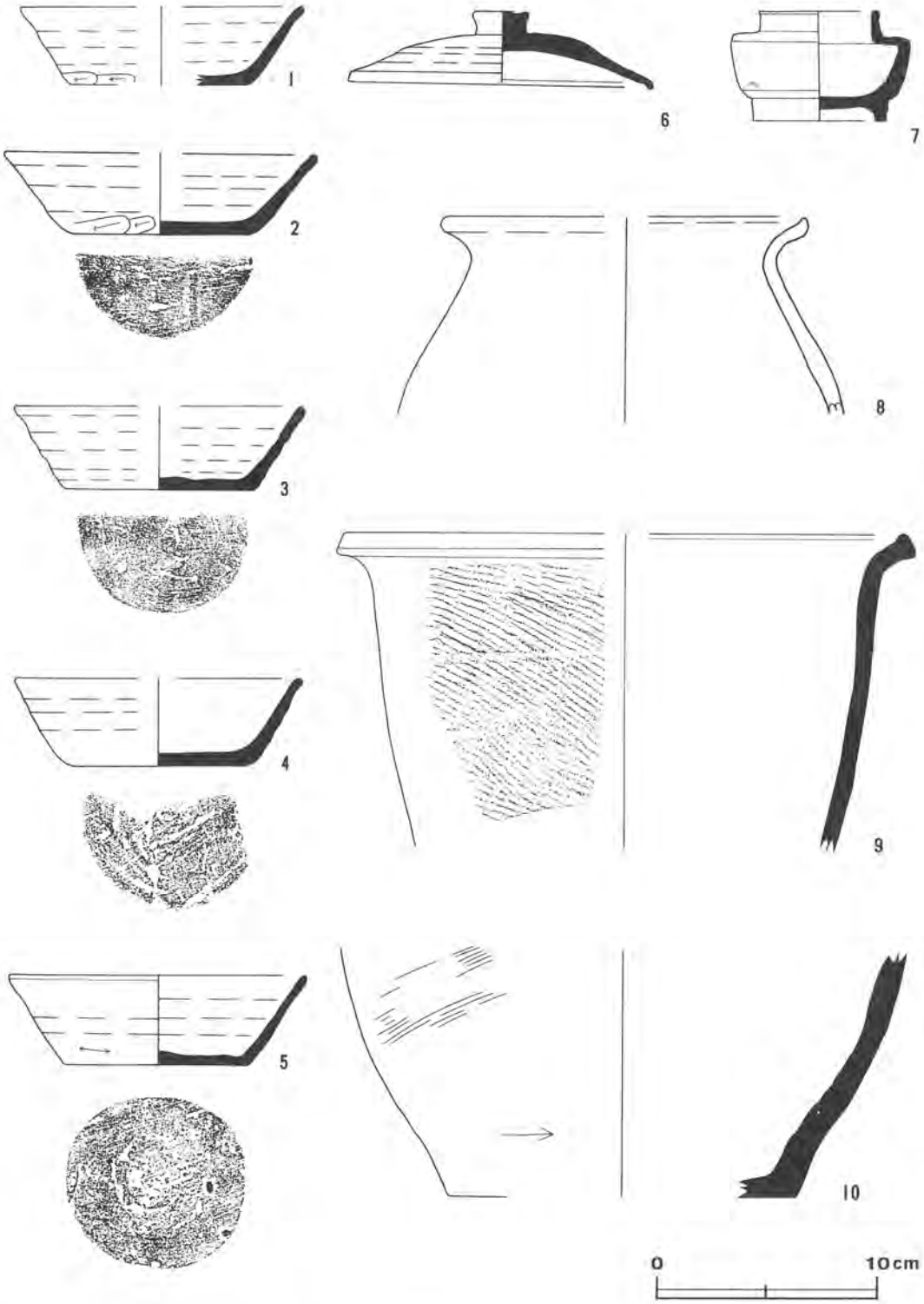
第6号住居跡(第266図)

本跡は$F4f_5$区を中心に確認された住居跡である。

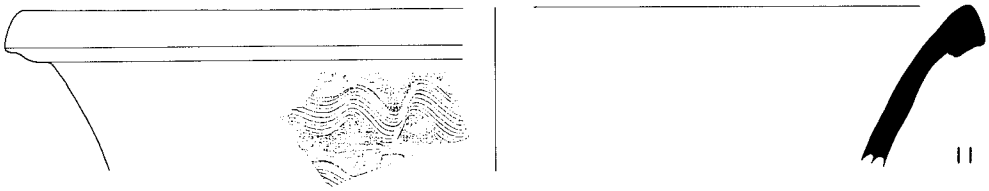
平面形は方形を呈し，規模は長軸5.4m，短軸5.2mで，主軸方向はN—15°—Wである。壁は北壁と東壁だけ検出でき，高さは10cmである。西壁と南壁は消失している。壁溝はなく，床は平坦で中央部は極めて硬く締まっている。ピットは南東コーナー部と北西コーナー部の2か所で検出され，その位置から主柱穴の一部と思われる。ピットの径は32～35cm，深さは12～14cmである。カマドは北壁中央部に山砂で構築されているが，残存状況が悪く，火床部だけが検出された。火床部は径60cmの円形に掘り込まれ，深さは20cmである。北東コーナー部に，貯蔵穴が検出された。



第266図　第 6 号住居跡実測図



第267図　第６号住居跡出土遺物実測図（１）



第268図　第６号住居跡出土遺物実測図（２）

平面形は不整長方形を呈し，長軸118cm，短軸80cm，深さ20cmである。貯蔵穴の覆土は褐色土が主で，焼土ブロックが多量に混入している。

覆土は暗褐色土１層のみで，ローム粒子を中量含み硬く締まっている。

遺物は，土師器の甕２点（８），須恵器の甕２点(10，11)・鉢２点（９）がカマド内から，土師器の甕，須恵器の坏５点（１，２）・甕がカマド周辺の床面から，須恵器の坏３点（３，４，５）・蓋４点（６）・小型広口壺（７）が北西コーナー部近くの床面から，それぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片188点が出土している。

出土遺物観察表（第267・268図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A (13.0) B 3.6 C (8.0)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	体部下端はヘラ削り，底部は一定方向のヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母 褐灰色 普通	15%
2	坏 須恵器	A (14.2) B 3.8 C 8.6	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・石英・長石 黄灰色 普通	50%
3	坏 須恵器	A (13.2) B 4.8 C 8.6	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り，体部下端は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	砂粒 褐灰色 普通	50%
4	坏 須恵器	A (13.2) B 4.0 C 8.0	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部及び体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 灰褐色 普通	50%
5	坏 須恵器	A 13.4 B 4.1 C 8.4	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，体部下端は横位のヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	100%

6	蓋 須恵器	A 13.7 B 3.3	天井部はやや高く，丸みをもつ。口縁部は外傾して下がり，端部は短く垂下する。つまみは円柱状を呈する。	天井部は回転ヘラ削り調整。水挽き成形。	長石・石英 灰色 良好	100%
7	広口壺 須恵器	A 5.3 B 5.0 C 5.9	底部は平底で，高さ0.6cmの高台がつく。胴部は外傾して立ち上がり，肩部で水平に内傾する。口縁部は短く，直立する。	底部は回転ヘラ削り，胴部内・外面はナデ，口縁部及び高台の内・外面は横ナデ調整。	砂粒 灰色 良好	100%
8	甕 土師器	A (16.8) B (9.0)	胴部は内傾して立ち上がり，「く」の字状に屈曲する口頸部に至る。口縁端部は上方につまみ出されている。	磨滅がひどく，調整痕不明。	長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	20%
9	鉢 須恵器	A (25.4) B (14.0)	胴部は外傾して立ち上がり，口頸部は短く外傾する。口縁端部は上方につまみ出されている。	胴部外面は斜位の叩き目，同内面は横位のヘラナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 普通	10%
10	甕 須恵器	B (11.2) C (15.8)	底～胴部片である。底部は平底で，胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面中位は斜位の叩き目，同下位は横位のヘラ削り，同内面はナデ調整。	砂粒・長石 青灰色 普通	5%
11	甕 須恵器	A (37.4) B (6.2)	口縁部片で，外反して立ち上がり，端部は外側に折り返されている。波状櫛描文が横位に施されている。	口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・長石 灰色 普通	5%

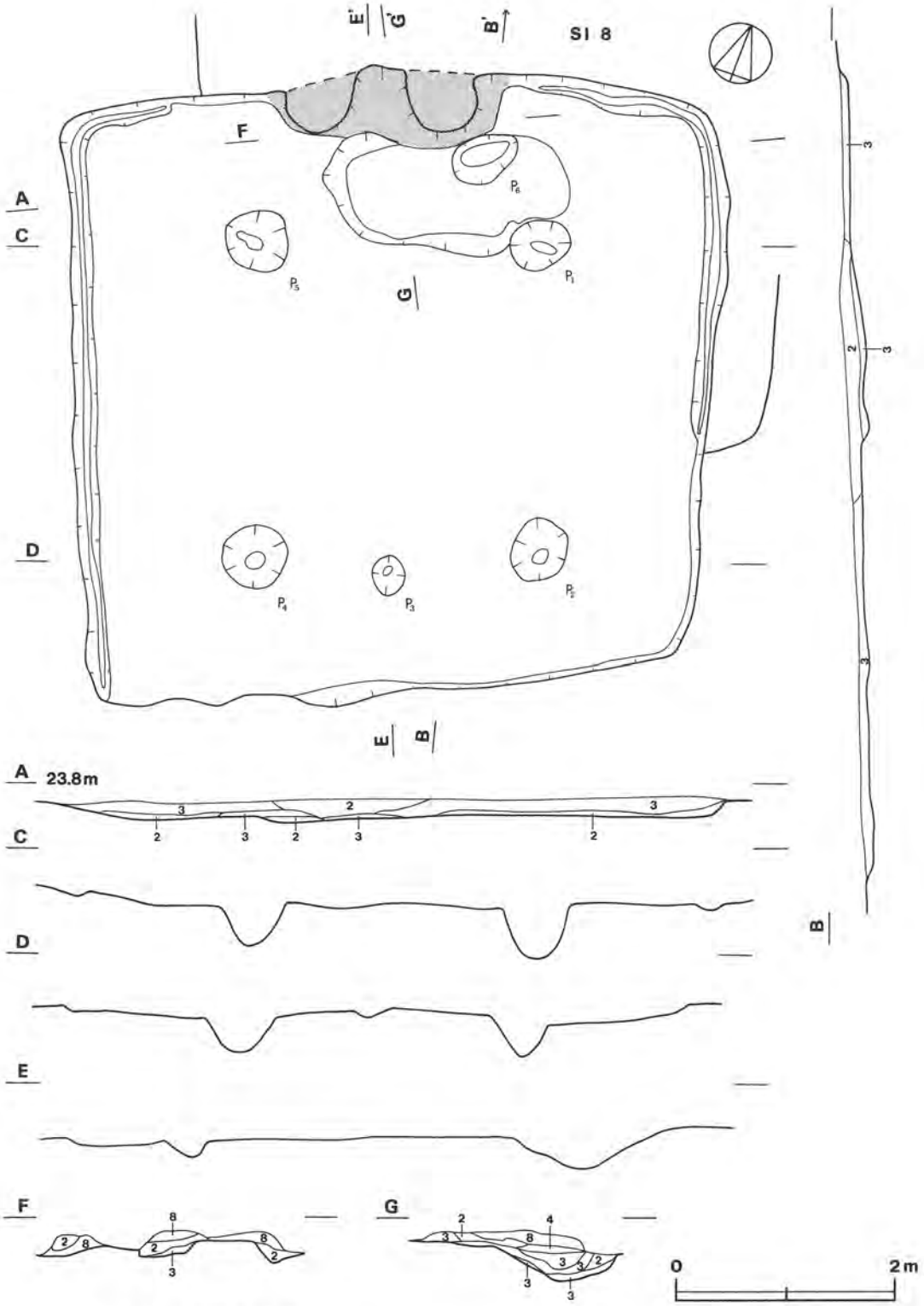
第7号住居跡（第269図）

本跡はF4a$_9$区を中心に確認された住居跡で，北側で第8号住居跡と重複している。土層からみて，本跡の方が新しいものと思われる。

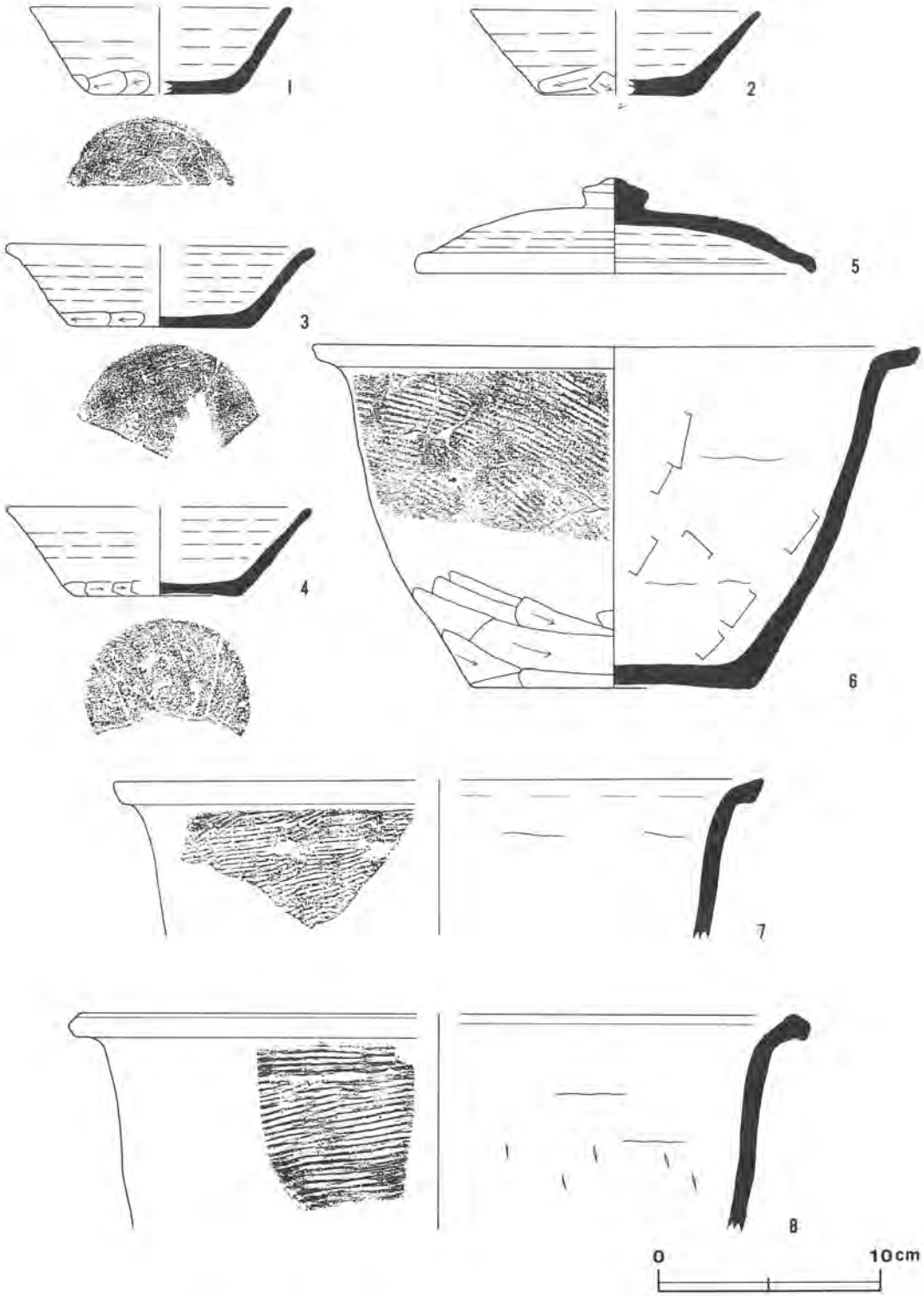
平面形は方形を呈し，規模は長軸5.92m，短軸5.55mで，主軸方向はN—29°—Wである。壁は大部分が消失しており，わずかに北東及び北西コーナー部で検出できたにとどまる。壁高は7cmである。壁溝は西壁側と東壁側で検出され，上幅15cm，下幅5～8cm，深さ4～16cmである。床は平坦で，ピットで囲まれた内側は硬く締まり，周辺部は軟らかい。ピットは6か所検出され，その配置から，P_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と考えられる。主柱穴は径60～62cm，深さ42～54cmで，ほとんど同規模である。P_3は出入口に関するピットと想定され，P_6は木根跡の可能性がある。カマドは北壁中央部に山砂で構築され，全長165cm，最大幅205cmである。カマド付近は重複している第8号住居跡の中央部にあたっていて，硬い床面が残っており，その床面上に袖部が構築されていた。火床部と推定される掘り込みはカマド前面に認められるが，長軸2.3mの不整長方形を呈しており，カマドの最大幅を超えてしまうことから，本来の火床部ではないと考えられる。

覆土は1層で，焼土粒子やローム粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物は，須恵器の鉢(6)がP_3の覆土から，土師器の甕と須恵器の坏4点(1，2，3)・蓋(5)・



第269図　第７号住居跡実測図



第270図　第７号住居跡出土遺物実測図

鉢3点（7，8）がカマド周辺の床面から，須恵器の坏2点（4）・鉢・甕が覆土から，それぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片345点が出土している。

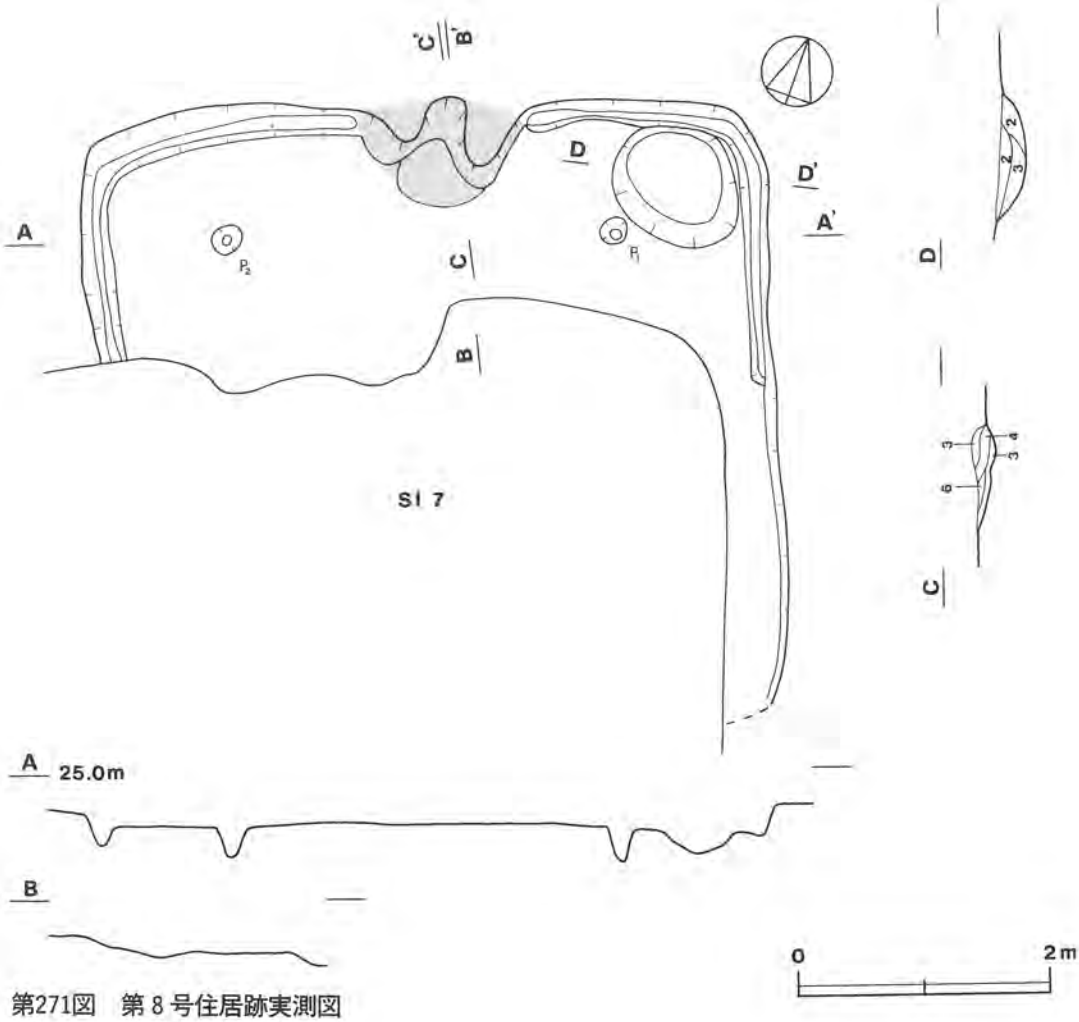
出土遺物観察表（第270図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A (12.0) B 4.0 C (6.4)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母 褐灰色 普通	30%
2	坏 須恵器	A (13.0) B 3.9 C (6.8)	底部は平底で，体部は器壁を減少しながら外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・石英・雲母 褐灰色 普通	25%
3	坏 須恵器	A (14.0) B 3.8 C (8.4)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	石英・長石・雲母 褐灰色 普通	30%
4	坏 須恵器	A (14.0) B 4.1 C (7.6)	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ切り後ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。	長石・石英・雲母 褐灰色 普通	50%
5	蓋 須恵器	A 18.0 B 4.3	天井部は丸く，高い。口縁部は内湾ぎみに下がり，端部は垂下する。高さ1.6cmのつまみがつく。	天井部は回転ヘラ削り，つまみはナデ調整。 水挽き成形。	長石・石英・砂粒 灰色 良好	85%
6	鉢 須恵器	A 27.6 B 15.6 C 14.0	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外傾して立ち上がる。口頸部は「く」の字状に外傾する。	胴部外面上～中位は斜位の叩き目，下位はヘラ削り，同内面はヘラナデ調整。器内・外面に輪積痕が残る。	雲母・長石・石英 褐灰色 普通	80%
7	鉢 須恵器	A (29.8) B (7.2)	胴部は外傾して立ち上がり，口頸部は「く」の字状に反傾する。	胴部外面は斜位の叩き目調整。	長石・雲母・石英 暗灰色 普通	15%
8	鉢 須恵器	A (32.0) B (9.9)	胴部は外傾して立ち上がり，口頸部はかるく外反する。	胴部外面は横位の叩き目，同内面はナデ，口縁部内・外面は横ナデ調整。	砂粒・雲母 灰色 普通	20%

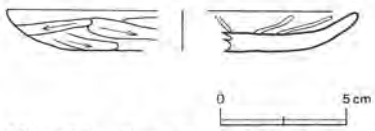
第8号住居跡（第271図）

本跡はE4j$_9$区を中心に確認された住居跡で，南側で第7号住居跡と重複している。本跡の方が古く，3分の2が切られている。

残存部からみて，平面形は方形を呈していたと思われる。規模は東西の長さが計測でき，5.45mである。主軸方向はN—26°—Wである。壁は東壁と北壁，西壁の一部が検出され，高さは10～20cmである。壁溝は検出された壁に沿って周回しているが，東壁南側では認められない。壁溝の規



第271図　第８号住居跡実測図



第272図　第８号住居跡出土遺物実測図

模は上幅９～17cm，下幅５～10cm，深さ４～16cmである。床は全体に硬く締まっている。ピットは，北東及び北西のコーナー部近くにそれぞれ検出され，径25cm，深さ23～28cmである。カマドは北壁中央部に山砂で構築され，全長90cm，最大幅125cmである。袖部は両側とも残っており，その基部はロームであった。このことから，カマドの位置が最初から決まっており，袖部にあたるロームを残して掘り込んでいったことが推定できる。火床部の掘り込みはなく，煙道は壁外に50cm張り出している。北東コーナー部に貯蔵穴が検出され，平面形は長径110cmの楕円形で，深さは22cmである。

本跡は重複部が多いが，覆土は自然堆積で，ローム粒子を含む暗褐色土である。

遺物は，土師器の皿が北東コーナー部の覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片60点が出土している。

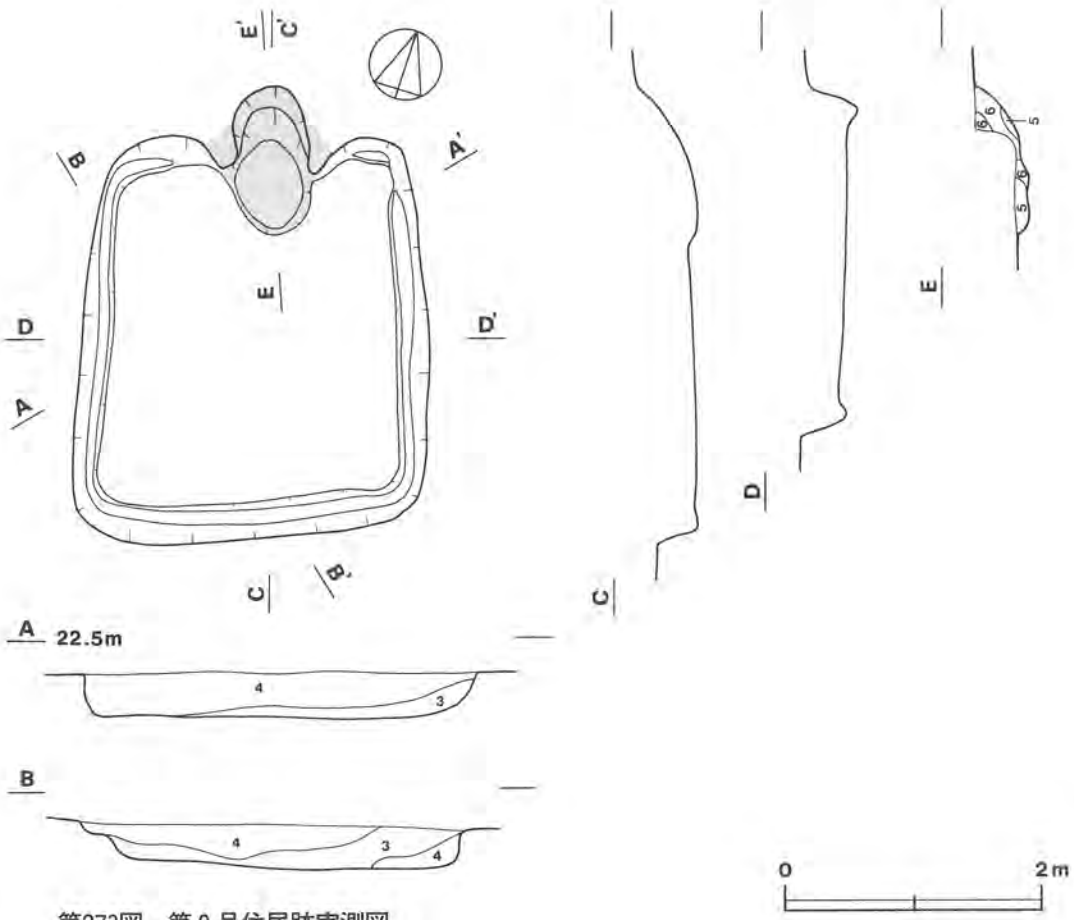
出土遺物観察表（第272図）

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
	皿 土師器	A (14.0) B　1.6	底部は平底で，体部は内湾ぎみに外上方に開く。	底～体部はヘラ削り，器内面には放射状のヘラ磨きが3本認められる。	雲母・スコリア 橙色 普通	30%

第9号住居跡（第273図）

本跡はG4c9区を中心に確認された住居跡である。

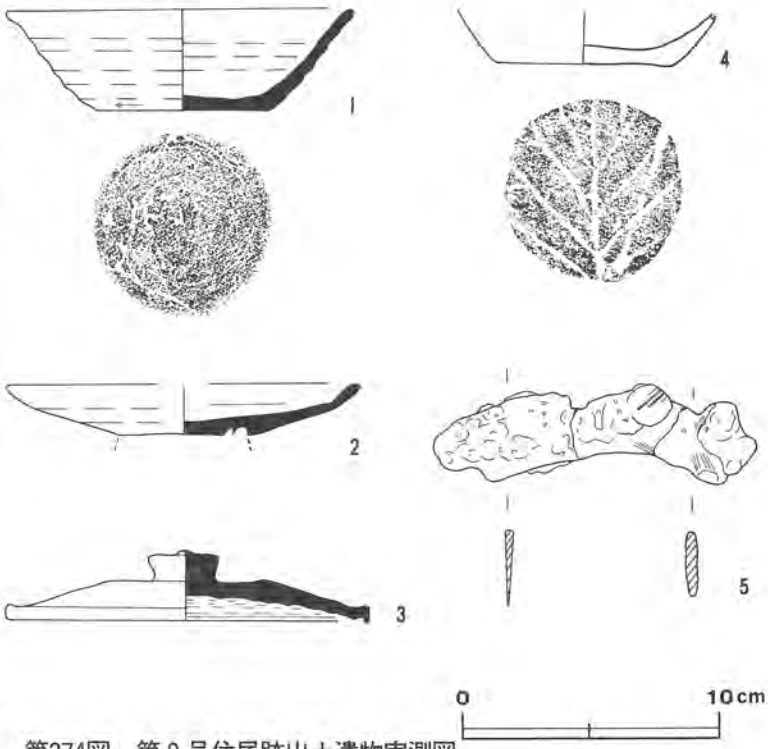
平面形は南北に長い長方形を呈し，規模は長軸3.25m，短軸2.60mで，主軸方向はN—18°—Wである。壁は外傾して立ち上がり，高さは35cmである。壁溝は全周しており，上幅10～17cm，下



第273図　第9号住居跡実測図

幅4～10cm，深さ4～6cmである。床は平坦で，極めて硬く締まっている。ピットは検出されていない。カマドは北壁中央部に構築されているが，袖部は残っていない。火床部は長径75cmの楕円形に掘り込まれ，深さは7cmである。煙道の張り出しは45cmである。なお，壁・床とも粘土質の褐色土である。

覆土は2層に大別され，1層は焼土粒子・ローム粒子を中量含む黒褐色土，2層はローム粒子を少量含む極暗褐色土で，両層とも硬く締まっている。



第274図　第9号住居跡出土遺物実測図

遺物は，須恵器の坏(1)・皿(2)・蓋(3)がカマド前面の覆土から，鎌（5）が南壁中央部近くの覆土から，それぞれ出土している。他に，土師器・須恵器片186点が出土している。

出土遺物観察表（第274図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	坏 須恵器	A 13.4 B 4.0 C 6.6	底部は平底で，体部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部は回転ヘラ切り後周辺部のみ回転ヘラ削り，体部下端はヘラ削り調整。 水挽き成形。	長石・雲母・石英 赤色 普通	90%
2	高台付皿 須恵器	A (13.9) B (2.0) C (5.0)	底部は平底で，体部との境に高台のとれた痕跡がある。体部は直線的に外傾して立ち上がり，口縁部との境で逆「く」の字状に屈曲する。口縁部は外傾する。	底部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・スコリア にぶい橙色 普通	35%
3	蓋 須恵器	A 14.2 B 2.8	天井部は平坦で，円柱状のつまみがつく。口縁部は直線的に下がり，端部で屈曲した後短く垂下する。	天井部は回転ヘラ削り調整。 水挽き成形。	雲母・長石・石英 褐灰色 普通	70%

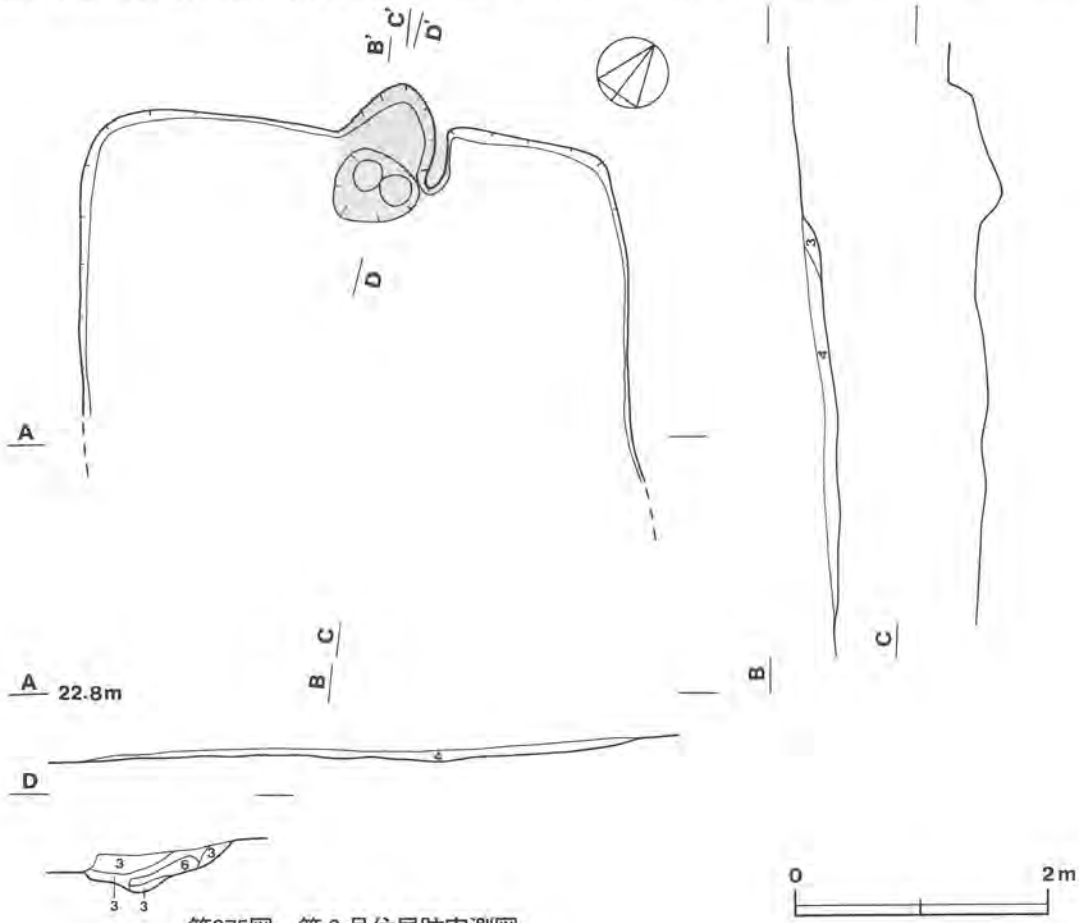
4	甕 土師器	B（2.1） C　6.1	底部片で，平底である。胴部は外傾して立ち上がる。	底部全面に木葉痕が残る。胴部下位は，横位のヘラ削り調整。	長石・石英・雲母 橙色 普通	10%
5	鏃 鉄製品	全長　12.6 巾　　3.0 重量 46.0g	刃部先端が欠損している。			80%

3　時期不明の住居跡

第3号住居跡（第275図）

本跡はG3f₈区を中心に確認された住居跡で，この付近の地山が南方に傾斜しているため，遺構の南側3分の1は壁・床とも消失して不明である。

平面形は明確でないが，方形を呈していたと思われる。規模は計測できたところで一辺4.30mで，主軸方向はN－33°－Wである。壁は，北壁及び東・西壁の北側が検出されているが，壁高が1～3cmしかないため詳細は不明である。床は南方にわずかに傾斜し，小さな凹凸が目立つ。ピットは



第275図　第3号住居跡実測図

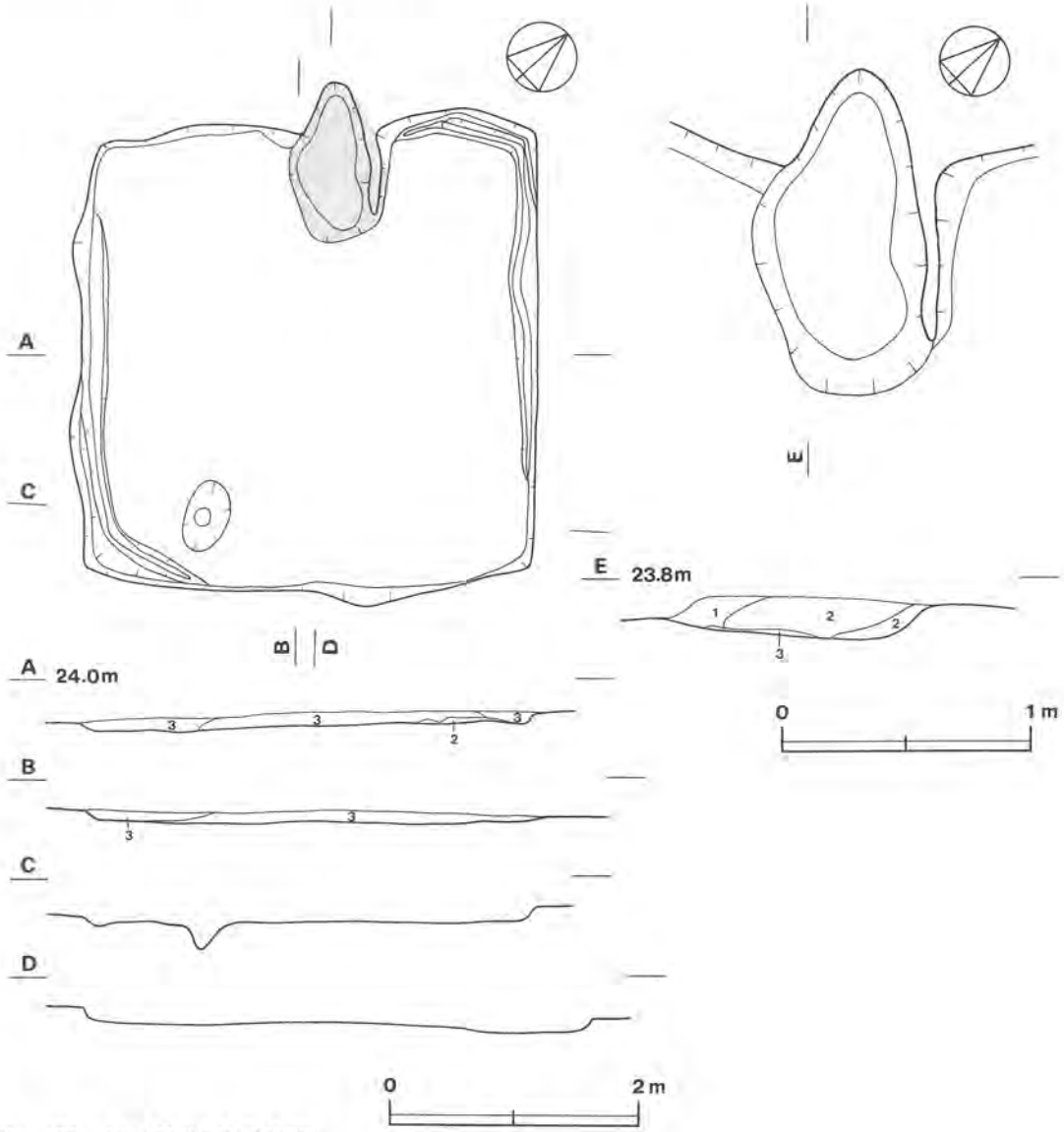
検出されていない。カマドは北壁のやや東寄りに山砂で構築され，全長115cm，最大幅90cmである。袖部は東側がわずかに残存し，火床部の掘り込みは長径70cm，短径60cmの楕円形で，深さは18cmである。煙道の張り出しは49cmである。

覆土は1層だけで，黒色土を多量に含む黒褐色土が堆積している。

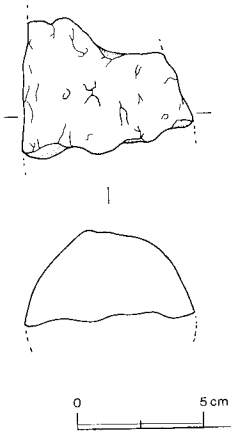
遺物は全て小破片で，土師器・須恵器片78点が覆土や床面から出土している。

第11号住居跡（第276図）

本跡はG5a₀区を中心に確認された住居跡である。



第276図　第11号住居跡実測図



第277図　第11号住居跡
出土遺物実測図

平面形は方形を呈し，規模は長軸3.85m，短軸3.70mで，主軸方向はN—42°—Wである。極めて浅い住居跡のため壁の状況は明確でないが，検出できた部分では外傾して立ち上がり，高さは10cmである。壁溝は北東コーナー部から東壁にかけてと，南西コーナー部から西壁にかけての2か所で確認でき，上幅10～17cm，下幅4～12cm，深さ4cmである。床は平坦で，極めて硬く締まっている。ピットは1か所だけで，南西コーナー部に検出された。カマドは北壁中央部のやや東寄りに山砂で構築され，袖部がわずかに残存している。火床部の掘り込みはなく，煙道は壁外に40cm張り出している。底面は赤く焼け，硬く締まっている。カマド前面を中心に炭化材が散在しており，火災に遭遇したことが推定できる。

覆土は暗褐色土1層のみで，ローム粒子と焼土粒子を少量含んでいる。遺物は，支脚2点がカマド前面の覆土から出土している。他に，土師器・須恵器片12点が出土している。

出土遺物観察表（第277図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
	支脚 土製品	全長 5.5 径 6.9 重量 86.6g	支脚の基部あたりと思われる。			

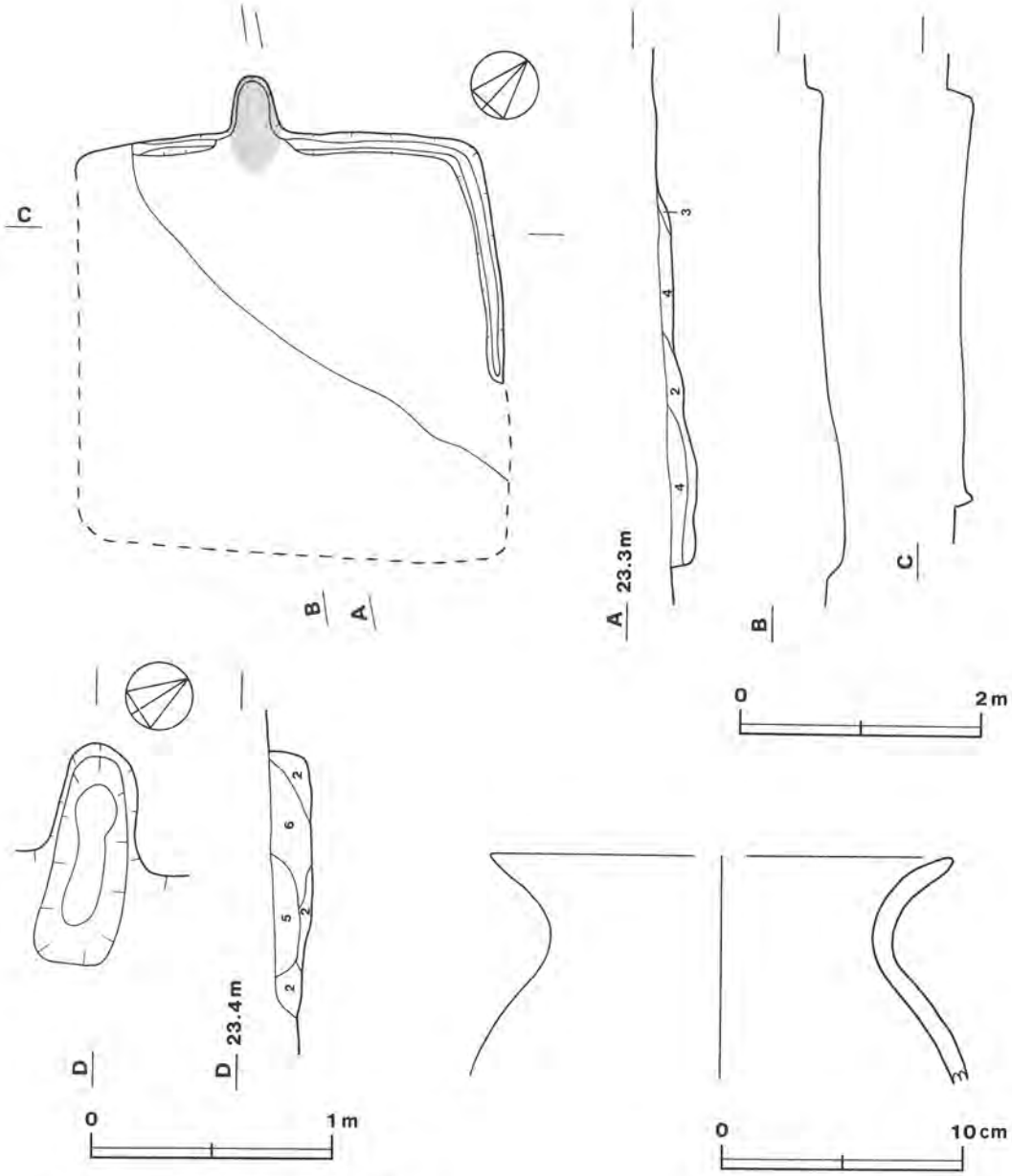
第13号住居跡（第278図）

本跡はG6g₂区を中心に確認された住居跡で，南側3分の2は消失している。

平面形は方形と推定され，規模は不明である。主軸方向はN—42°—Wである。壁は垂直に立ち上がり，高さは7cmである。壁溝は全周していたものと思われ，上幅10cm，下幅5cm，深さ4cmである。床は南側に傾斜しており，ピットは検出されていない。カマドは北壁に構築されていたと思われるが，痕跡のみであり詳細は不明である。壁と床はロームではなく，砂質粘土から成っており，硬く締まっている。

覆土は2層で，1層は黒褐色土，2層は褐色土でともに粘土ブロックを含んでいる。

遺物は極めて少量で，土師器の甕が1点だけカマド内より出土している。



第278図　第13号住居跡・出土遺物実測図

出土遺物観察表（第278図）

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
	甕 土師器	A (19.2) B (9.2)	口頸部片である。胴部は内傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	磨滅しており調整痕不明。	雲母・長石・石英 橙色 普通	10%

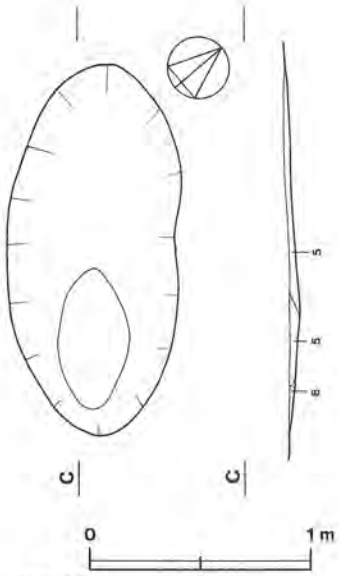
第17号住居跡（第280図）

本跡はF6j₂区を中心に確認された住居跡で，床の上面は削平され，ピットや壁溝の下部が検出できただけである。

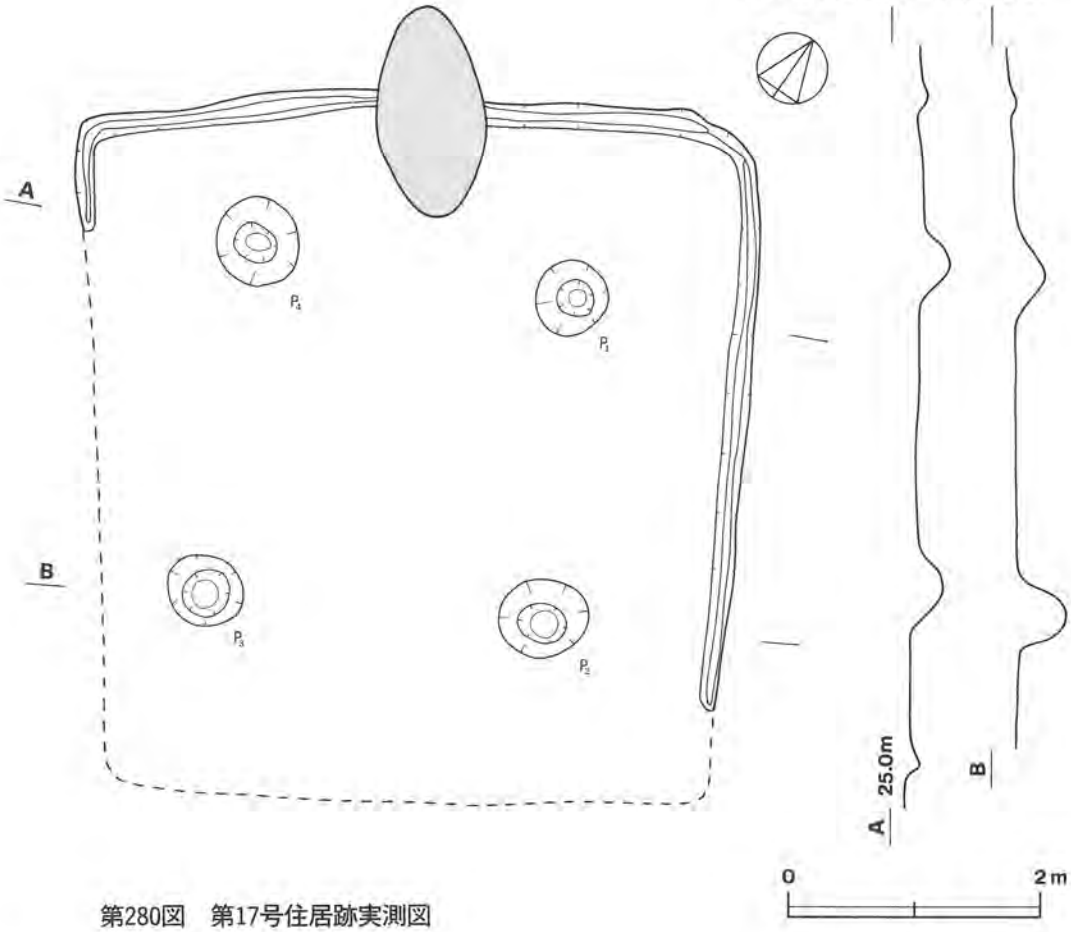
平面形は方形を呈していたものと推定され，規模は不明である。主軸方向はN—36°—Wである。壁溝は北及び東側で検出され，上幅17cm前後，下幅8cm前後，深さ6cmである。床は削平されており不明である。ピットは4か所検出され，径56～70cm，深さ26～38cmである。カマドは，北壁中央部にその痕跡だけが認められた。

覆土の状況については，観察できなかった。

遺物は出土していない。



第279図
第17号住居跡カマド実測図



第280図　第17号住居跡実測図

第２節　掘立柱建物跡

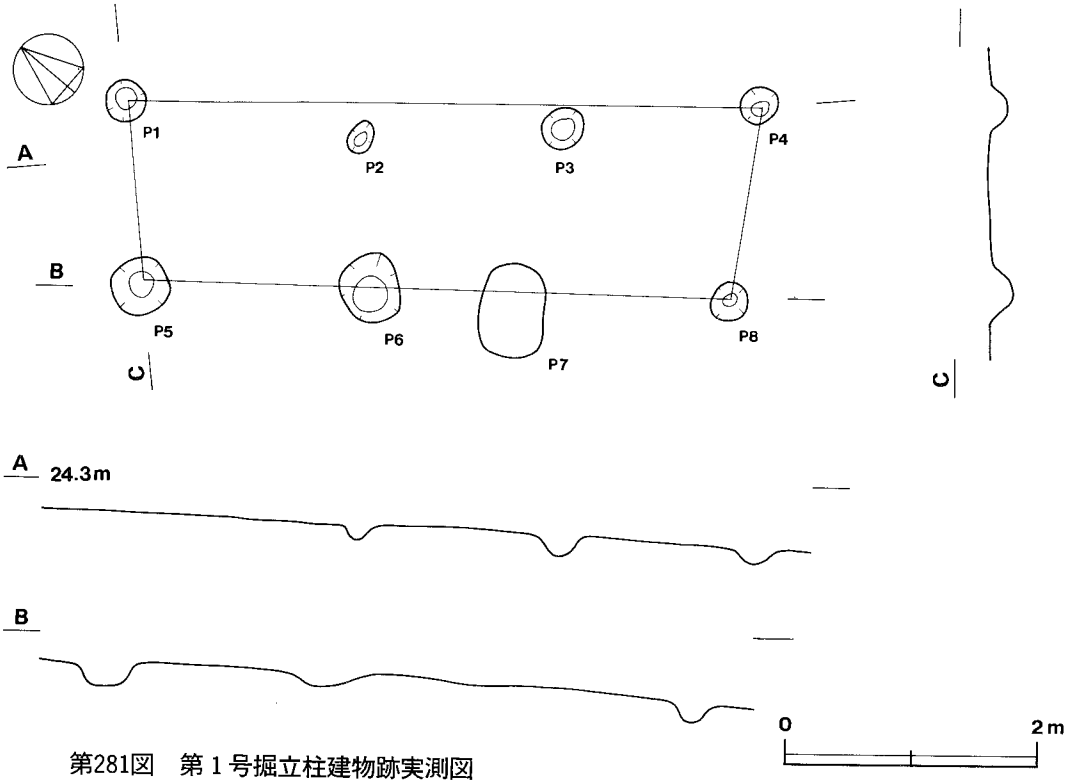
当遺跡では，２棟の掘立柱建物跡が検出されている。２棟とも極めて小規模な建物である。

第１号掘立柱建物跡（第281図）

本跡はF4d_0区を中心に確認され，南北３間（5.00m），東西１間（1.50m）の建物である。本跡の棟通りは後述する第２号掘立柱建物跡とほぼ直交し，N—35°—Wである。

柱間寸法は，桁行が1.60～1.90m，梁行が1.30～1.50mである。柱掘方は大部分が円形で，径22～54cm，深さ12～19cmである。P_7は長軸75cmの長方形を呈しているが，掘り込みはなく痕跡だけが検出された。本跡の位置する地形からみて，上部は削平されていることが推定され，本来は柱掘方の規模もやや大きかったと思われる。

遺物は出土していない。



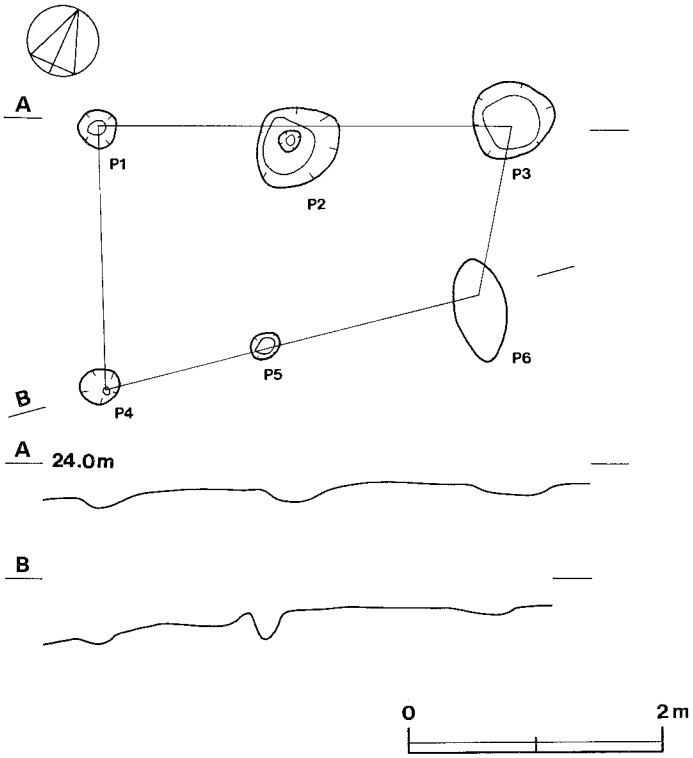
第281図　第１号掘立柱建物跡実測図

第２号掘立柱建物跡（第282図）

本跡はＦ４d_9区を中心に確認され，東西２間（3.25m），南北１間（2.0m）の建物である。棟通りはＮ―63°―Ｅである。

柱間寸法は，桁行が 1.35～1.70m，梁行が1.65～2.05mである。柱掘方は不整円形が主で，径24～75cm，深さ４～23cmである。P_6は痕跡のみがかろうじて検出できたに過ぎない。本跡も第１号掘立柱建物跡と同様に上部が削平されていると思われ，柱掘方の基底部が調査できたにとどまっている。

遺物は出土していない。



第282図　第２号掘立柱建物跡実測図

第3節　まとめ

当遺跡では1～2節で報告したように，住居跡16軒，掘立柱建物跡2棟が検出されている。なお今回の報告はII区の一部分で検出された遺構についてであり，II区全体の調査成果については後日報告書を刊行する予定である。よってここでは簡単に概略を記し，まとめとしたい。

(1)　竪穴住居跡と出土遺物について

前述の16軒の住居跡のうち，時期が判明したのは12軒である。古墳時代中期と考えられるもの1軒（10号），同後期3軒（12・15・16号），奈良時代1軒（8号），平安時代7軒（1・2・4・5・6・7・9号）である。各住居跡は，遺跡の南側から延びる低地（谷津）を囲むように検出されている。その配置からは，時期毎の明確な特徴はみられないが，奈良・平安時代の住居跡は遺跡の南側と西側に集中する傾向が窺える。

古墳時代前期の住居跡は比較的大型で，長軸6mの規模である。残存状況は遺構・遺物とも良好である。ピットや貯蔵穴，炉跡も明確で，形状のわかる遺物も多く出土している。出土遺物は，坏，高坏，甕，鉢，小型壺である。坏は丸底で，外面はヘラ削り調整である。底部と口縁部の境は明確でなく，稜もみられない。高坏は5点出土しており，坏部は全て直線的に開き，体部下端に稜をもつ器形である。甕は胴部が丸く，この時期によくみられるものである。

古墳時代後期の住居跡は3軒とも大型で，長軸が6mを超えている。カマドは北壁中央部にあり，ピットは主柱穴4か所，出入口に関連するピット1か所がそれぞれ検出されている。主軸方向をみると，大きく西側に傾いており，I区の同時期の住居跡と似た傾向をみせている。遺物は土師器が主で，坏，高坏，甕が出土し，他に須恵器の提瓶，瑠も出土している。坏は全て丸底で，口縁部と底部の境に稜をもつものともたないものの2種が認められる。甕はやや長胴化し，口縁部は単純口縁である。提瓶は肩部の突起をもたず，胴部背後の平坦面には木葉痕が残っている。

奈良時代の住居跡は，重複していて詳細は明らかでない。遺物は極めて少量で，図示できたのは土師器の皿1点だけである。

平安時代の住居跡は全て9世紀代と考えられ，さらに前半と後半の2期に分けられる。前半の住居跡として第5～7号住居跡が検出され，後半の住居跡としては第1・2・4・9号住居跡が検出されている。一般的に奈良時代以降になると住居跡の規模が小型化する傾向がみられ，当遺跡でも第2号住居跡などは長軸でも3mに満たず，2.75mしかない。柱穴をみると1か所も検出されない例が出てくる。カマドは北壁中央部に設置され，コーナー部に貯蔵穴を有する住居跡もある。遺物は土師器の坏，甕が多く，須恵器では坏，甕，鉢，甑，盤等が出土している。土師器の

坏は水挽き成形のものが多く，内面を黒色処理したいわゆる「内黒土器」が増加する。土師器・須恵器とも甕が多く出土している。

(2) 掘立柱建物跡について

II－1区で検出された建物跡は2棟だけで，規模も小規模なものである。2節で述べたように，建物跡が検出された地点は後世の撹乱を受けており，ローム層上面がかなり削平されていることが想定される。従って，旧地形が残っていれば，この他にも建物跡が検出された可能性がある。

2棟の建物跡は棟通りがほぼ直交し，建物間の距離は約2.5mである。出土遺物は皆無で，時期を決定することはできず，また，性格も不明である。

住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁	床	カマド	時期	備考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
1	G4b$_1$	N—20°—W	方　形	3.39×3.10	35	垂直	平坦	N	平安	SI—2と重複 9.0m²
2	G4c$_2$	N—36°—W	(方形)	2.75×(2.60)	8～20	外傾	〃	N	〃	SI—1より新しい
3	G3f$_8$	N—33°—W	(方形)	4.30	1～3	—	傾斜	N	—	
4	G4b$_7$	N—27°—W	方　形	3.70×3.35	35	外傾	平坦	N	平安	9.7m²
5	F4g$_2$	N—16°—W	長方形	3.50×3.10	30	垂直	〃	N	〃	9.1m²
6	F4f$_5$	N—15°—W	方　形	5.40×5.20	10	〃	〃	N	〃	27.4m²
7	F4a$_9$	N—29°—W	〃	5.92×5.55	7	—	〃	N	〃	SI—8と重複 29.9m²
8	E4j$_9$	N—26°—W	(方形)	5.45	10～20	垂直	〃	N	奈良	SI—7より古い
9	G4c$_9$	N—18°—W	長方形	3.25×2.60	35	外傾	〃	N	平安	5.9m²
10	F4i$_7$	N—85°—W	方　形	6.00×5.50	40	〃	〃	—	和泉	炉 26.0m²
11	G5a$_6$	N—42°—W	〃	3.85×3.70	10	〃	〃	N	—	11.7m²
12	G5b$_9$	—	(方形)	3.45	15	〃	〃	—	鬼高	
13	G6g$_2$	N—42°—W	(〃)	—	7	垂直	傾斜	N	—	
15	F5d$_4$	N—50°—W	方　形	6.55×6.10	20	外傾	平坦	N	鬼高	35.6m²
16	F6f$_1$	N—45°—W	〃	6.35×5.98	0～15	—	傾斜	N	鬼高	32.7m²
17	F6j$_2$	N—36°—W	(方形)	—	0	—	—	N	—	

終章　むすび

研究学園都市桜柴崎土地区画整理事業地内における埋蔵文化財包蔵地（柴崎遺跡）の発掘調査は，3か年計画で現在も進められている。柴崎遺跡は，Ⅰ～Ⅲ区の3地区に分かれており，本報告書は初年度に発掘調査を実施した，Ⅰ区とⅡ区の一部についての調査結果をまとめたものである。この両地区からは，これまで述べてきたように，古墳時代～奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代の遺構として検出されたのは，31軒の住居跡である。時期的に最も古い遺構は，Ⅱ区で検出された第10号住居跡で，内部に炉を有しており古墳時代中期と考えられる。この時期の住居跡は一軒だけで，他は全て古墳時代後期の住居跡である。各時期の住居跡ともその分布状況をみると，特定の地点に集中する傾向は見られず，Ⅰ・Ⅱ区とも，遺跡全域から検出されている。出土遺物は，殆んどが土師器で，器種としては坏と甕が最も多い。他に，高坏，甑なども少量出土している。

奈良・平安時代の遺構は，62軒の住居跡と，掘立柱建物跡3棟，井戸8基である。住居跡は古墳時代よりも全体に小型になり，柱穴は不規則な配置で，カマドは古墳時代以来北壁中央部に構築されている。しかし，この時期に至ってその原則がくずれをみせ始め，平安時代の終り頃にはカマドのない住居跡も出現している。このカマドのない住居跡は20軒以上検出され，当遺跡を特徴づける遺構であるが，類例も少なく，性格等を明確にできないのが残念である。出土遺物は土師器が主体であるが，奈良時代後半以降になると須恵器の割合が増加してくる。器種は古墳時代と大きな差異はみられず坏と甕が主で他に甑，皿，高坏等が出土している。墨書土器は5点確認され，判読できる文字は「□万」と「十」である。

今回報告した柴崎遺跡は現在も発掘調査を継続中であり，初年度と同時期の遺構・遺物が確認されつつある。その調査成果によっては，さらに広い視野で検討を加えることが可能になるのではないだろうか。

最後に，本報告書を作成する上で，関係各位の御指導，御協力をいただいたことに対し，心から感謝の意を表したい。

写 真 図 版

柴崎遺跡Ⅰ区

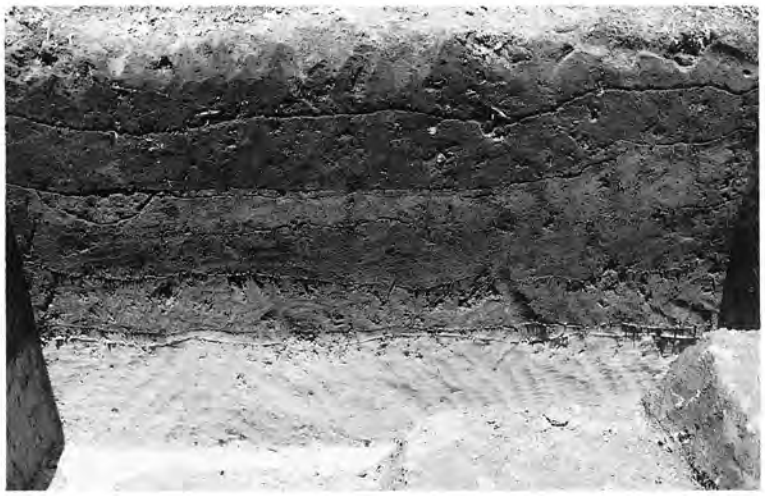
柴崎遺跡 I ・ II 区全景

発掘前全景
（SW→）

遺構確認状況
（E→）

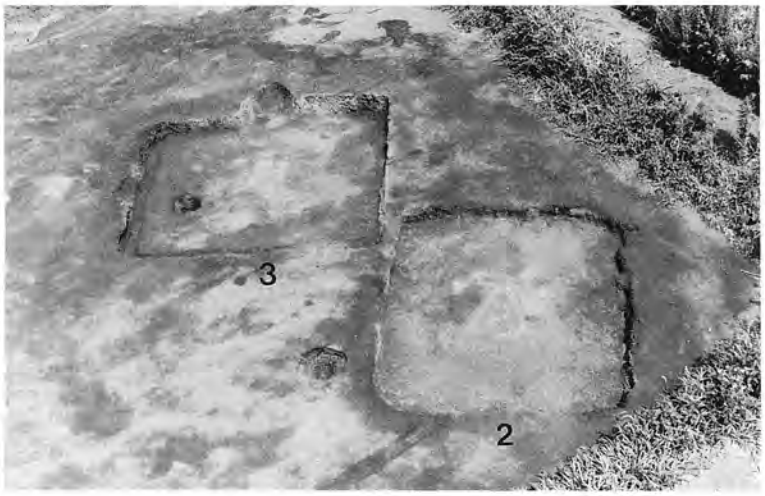
遺構確認状況
（W→）

PL2

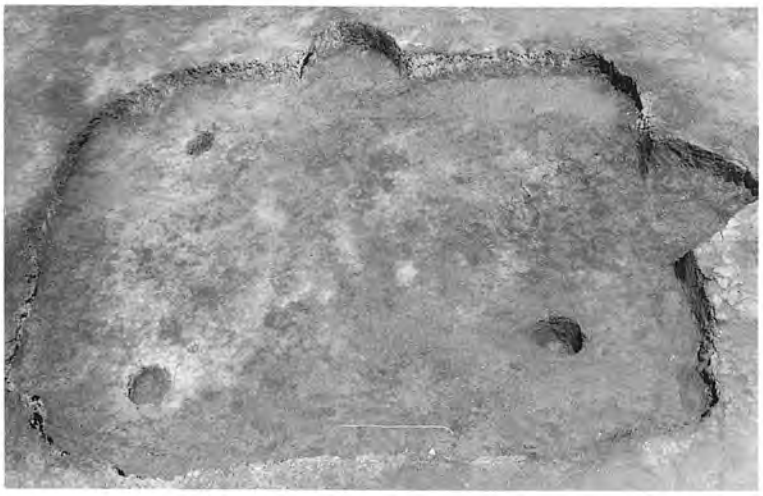


テストピット
土 層 断 面

第 1 号住居跡

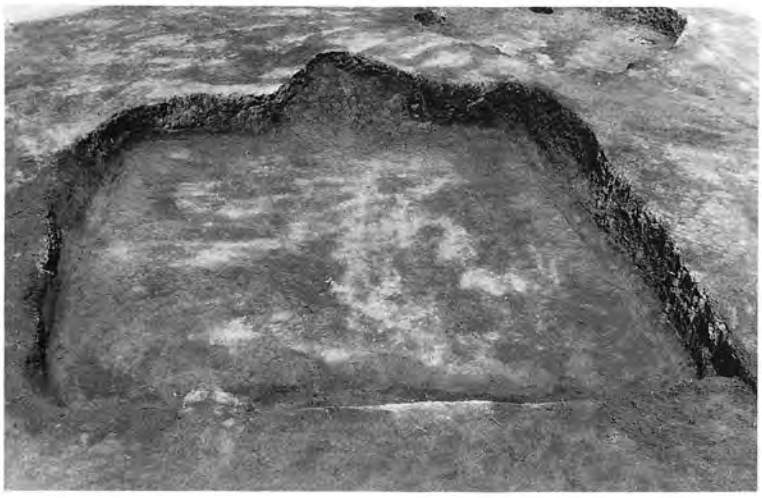


第 2 ・ 3 号住居跡

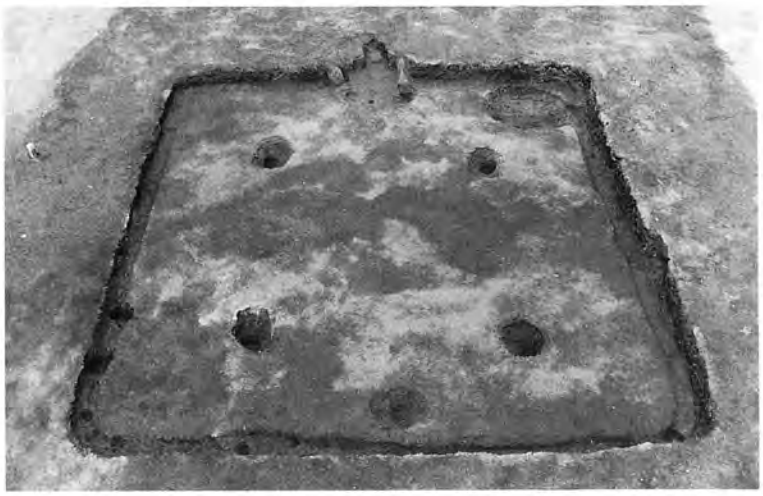


第 4 号住居跡

第 4 号住居跡
遺物出土状況



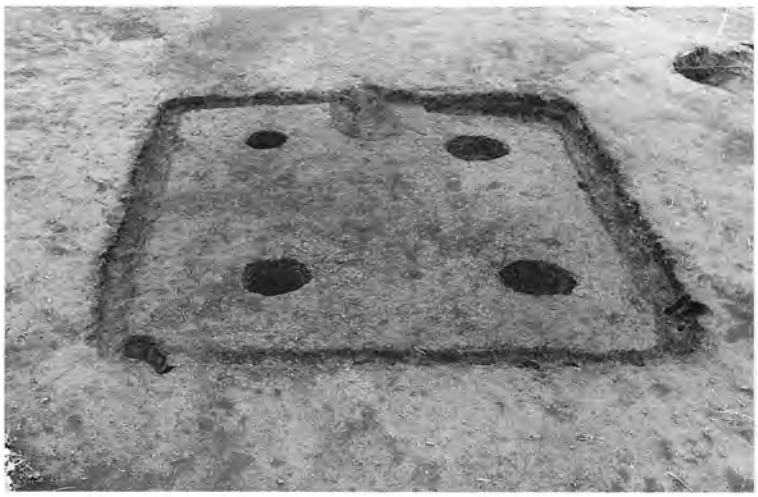
第 5 号住居跡



第 6 号住居跡

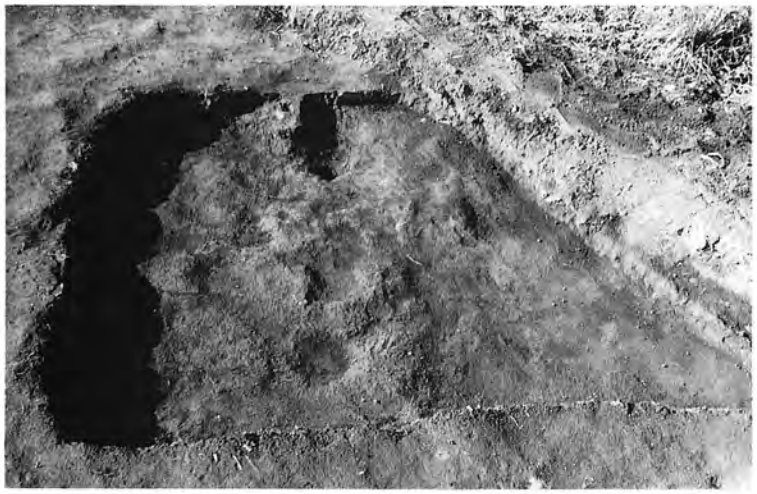
第 6 号住居跡
遺物出土状況(カマド)

第 7 号住居跡
第 1 号 土 坑

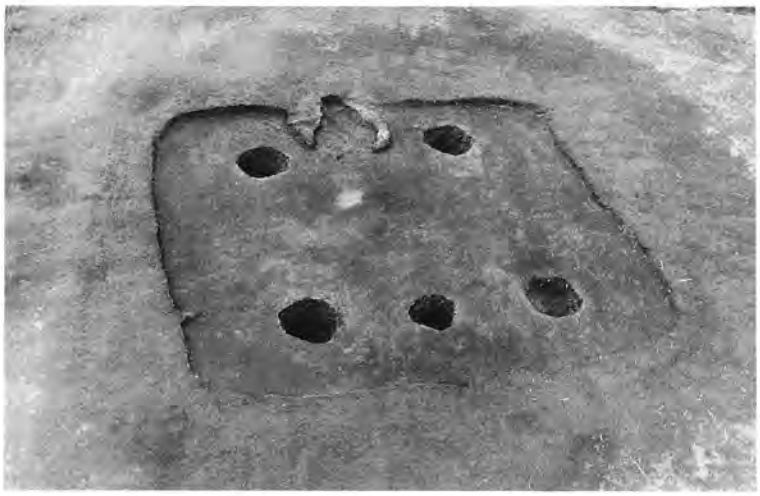


第 8 号住居跡

第 9 号住居跡
遺物出土状況



第12号住居跡

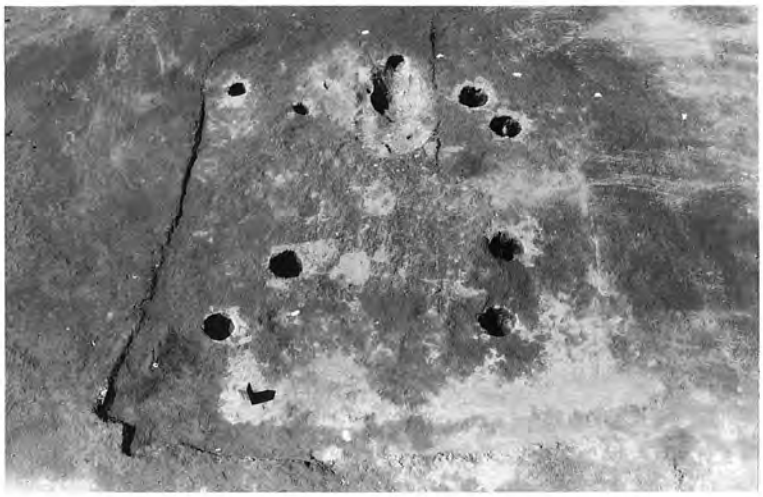


第13号住居跡

第13号住居跡
カ　マ　ド

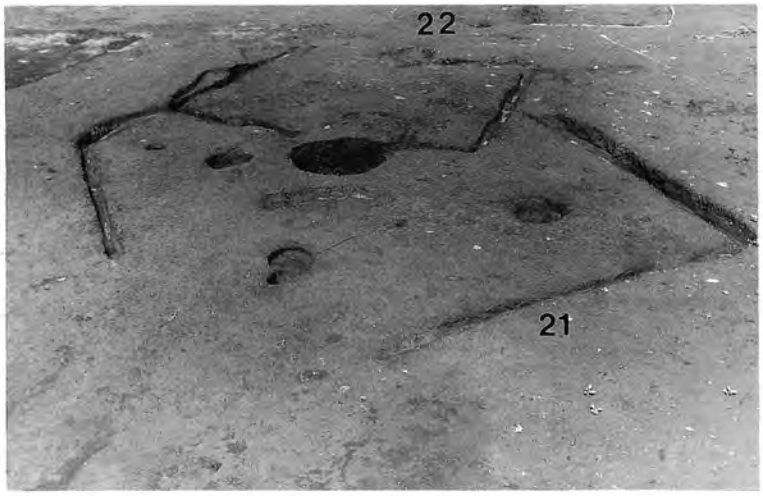
第14号住居跡

第18号住居跡



第19号住居跡

第20号住居跡
第 2 号井戸



第21・22号住居跡

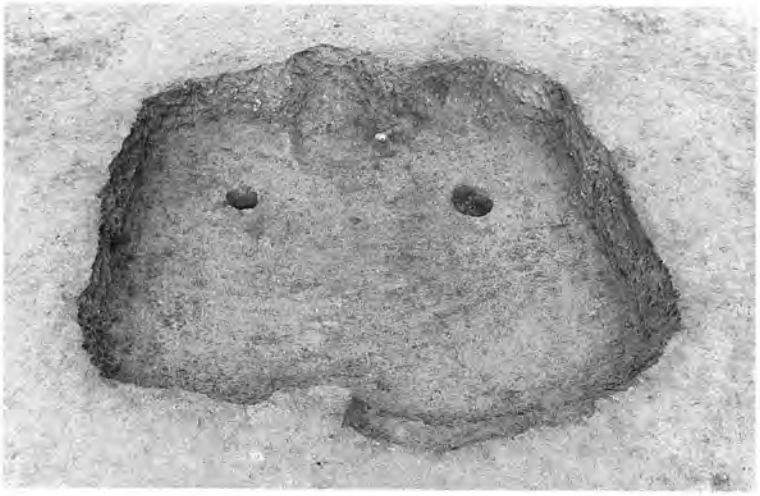
第21号住居跡
遺物出土状況

第22号住居跡
第 3 号井戸

第22号住居跡
遺物出土状況

第23号住居跡

第24号住居跡の
貼り床状況

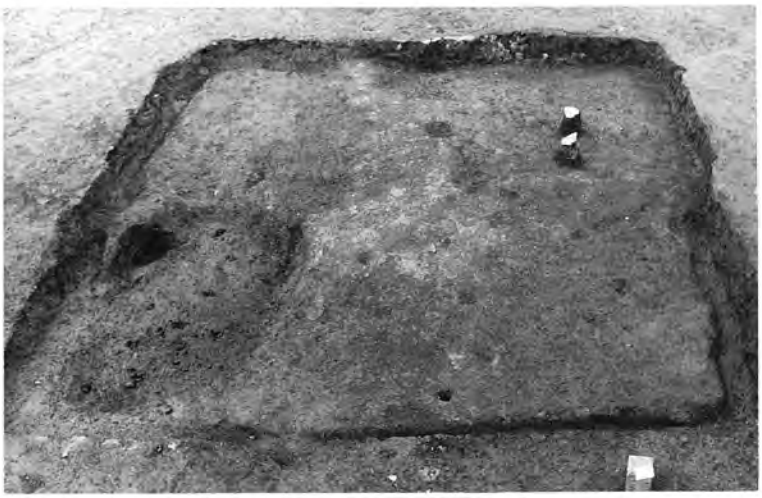


第25号住居跡

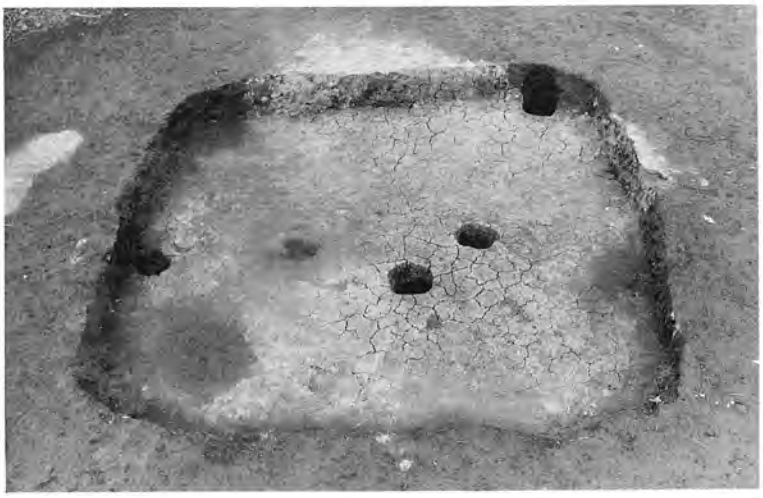
第26号住居跡
第 4 号 土 坑

第27号住居跡

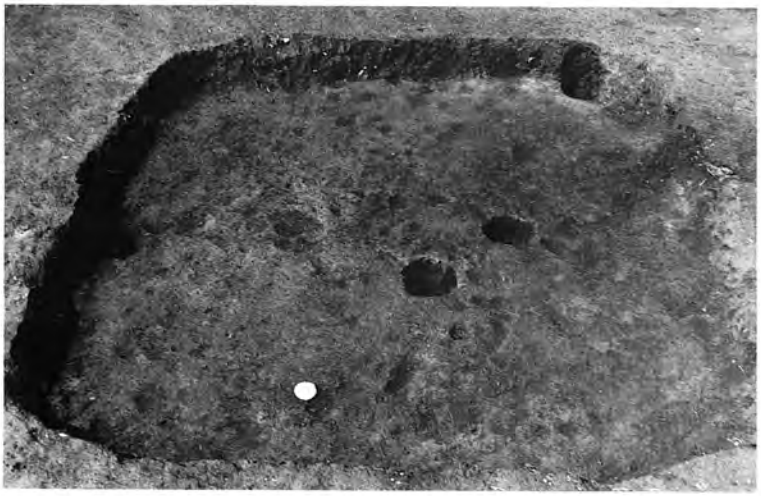
第28号住居跡



第28号住居跡
遺物出土状況



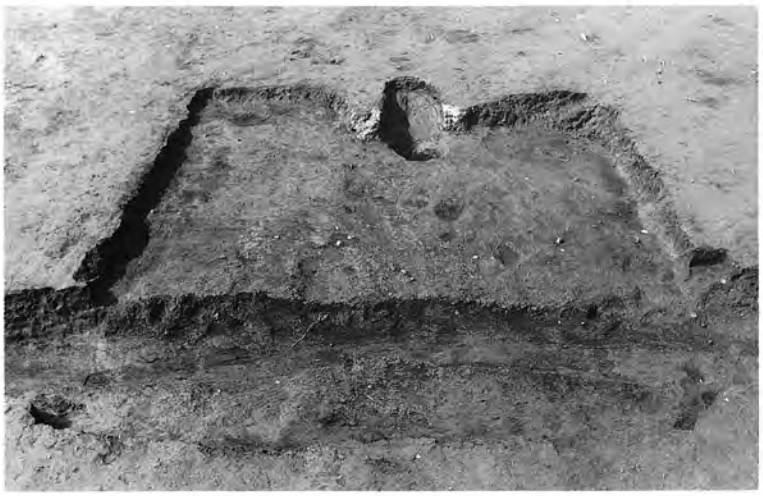
第29号住居跡



第29号住居跡

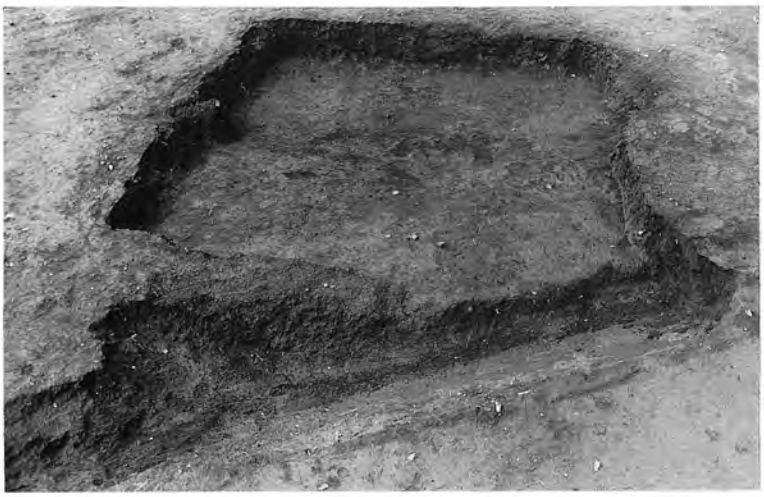
第30号住居跡

第33号住居跡



第35号住居跡

第35号住居跡
遺物出土状況

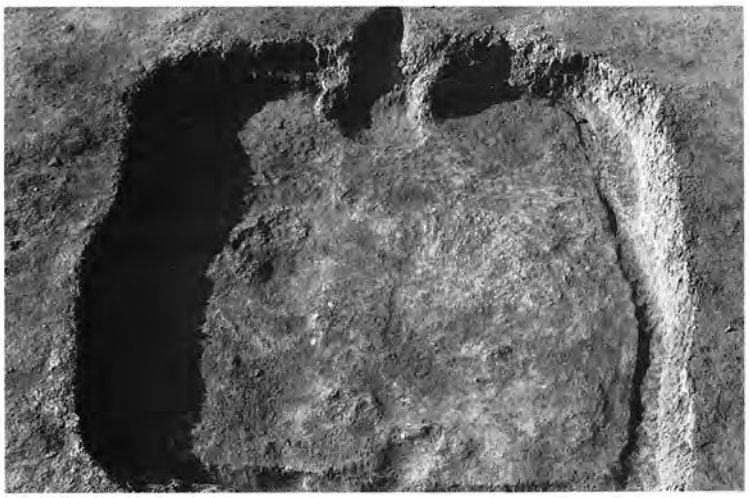


第36号住居跡

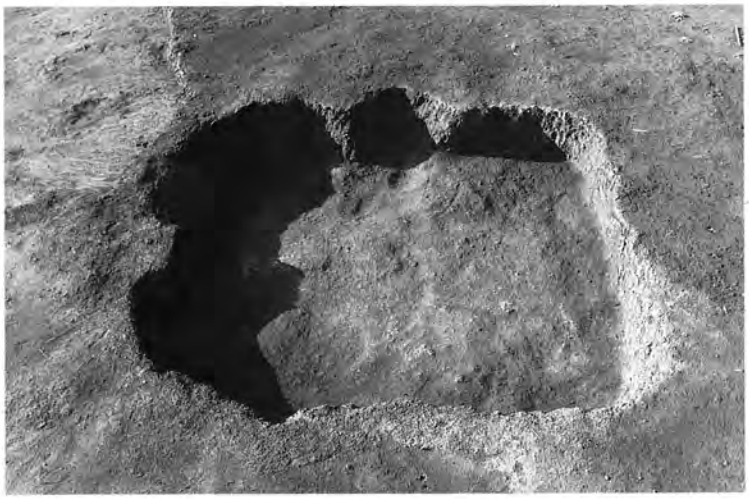
第37号住居跡

第40号住居跡

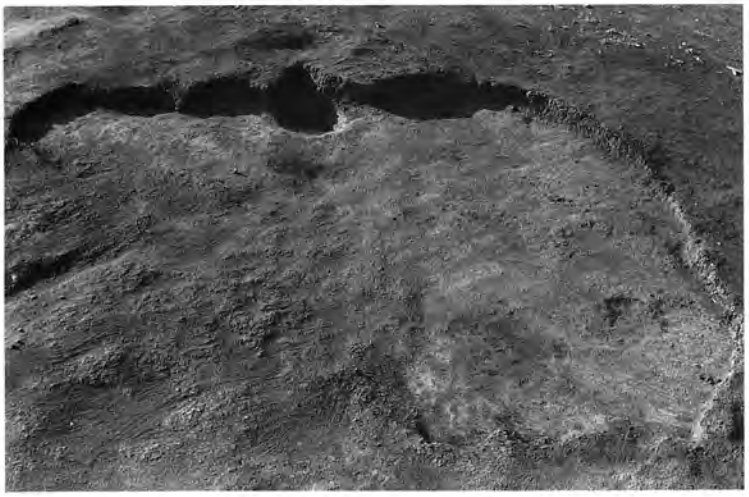
第41号住居跡



第42号住居跡



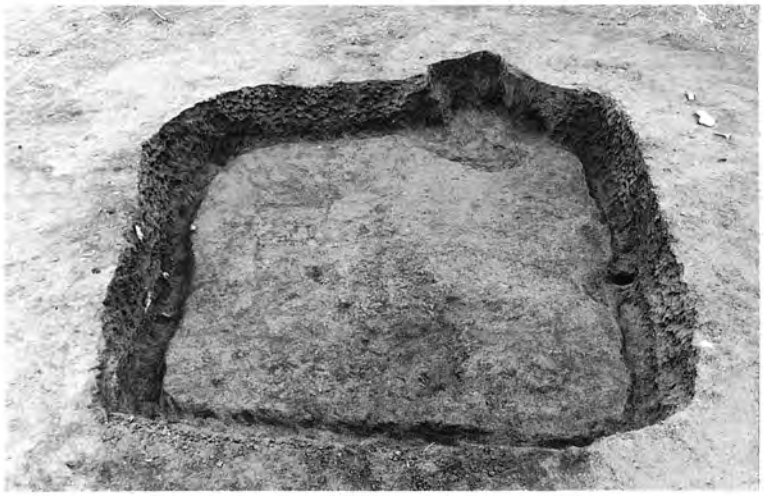
第43号住居跡



第44号住居跡

第45・49号住居跡

第46号住居跡

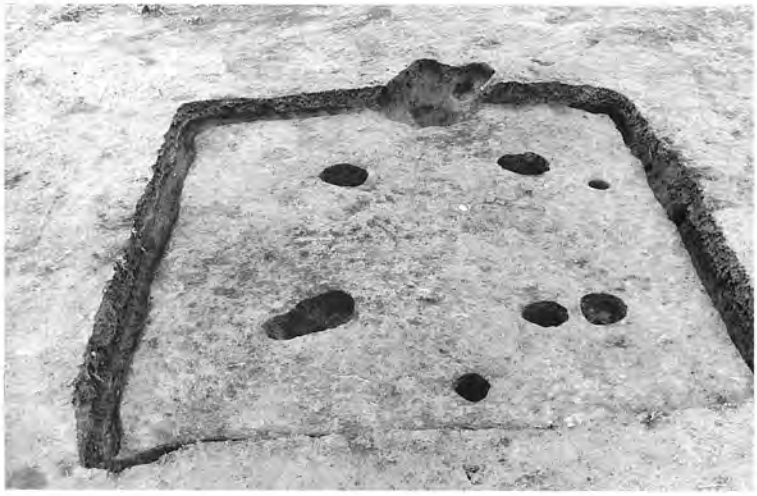


第47号住居跡

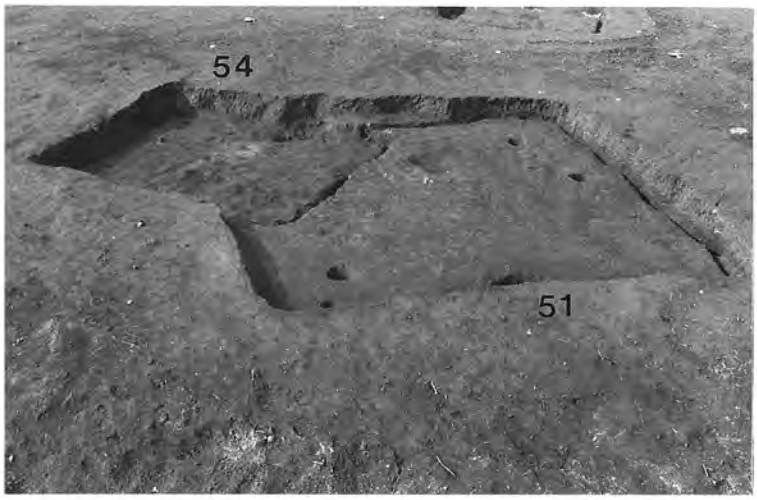
第47号住居跡
遺物出土状況
カ　マ　ド

第48号住居跡

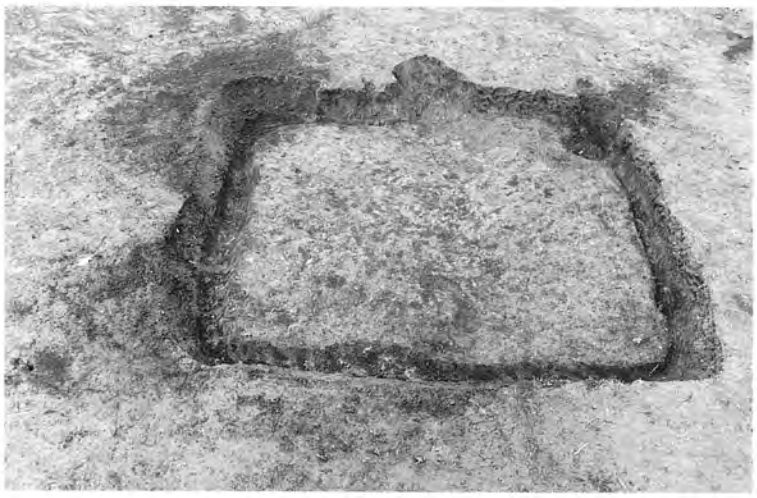
第49号住居跡



第50号住居跡

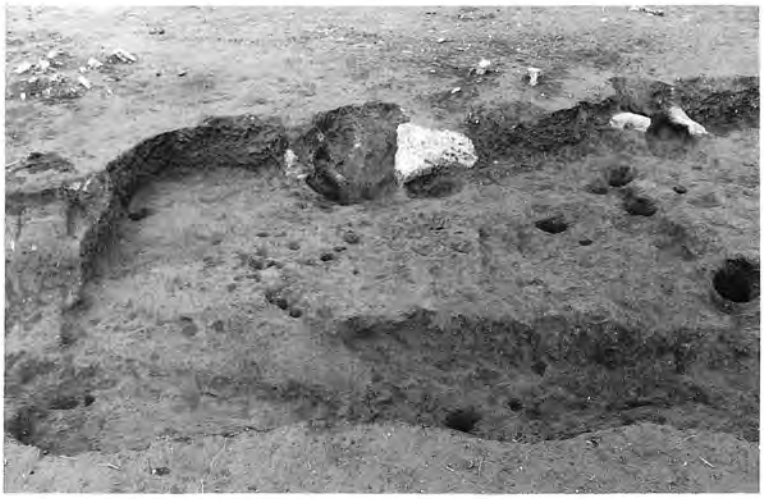


第51・54号住居跡



第52号住居跡

第53号住居跡



第55号住居跡

第56号住居跡

第57号住居跡

第57号住居跡
カ　マ　ド

第58号住居跡

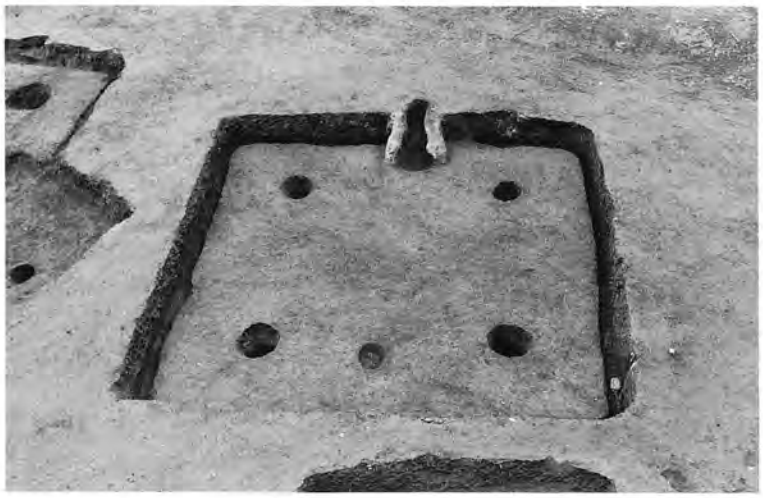
第58号住居跡
カ　マ　ド

第59号住居跡

第60号住居跡

第60号住居跡

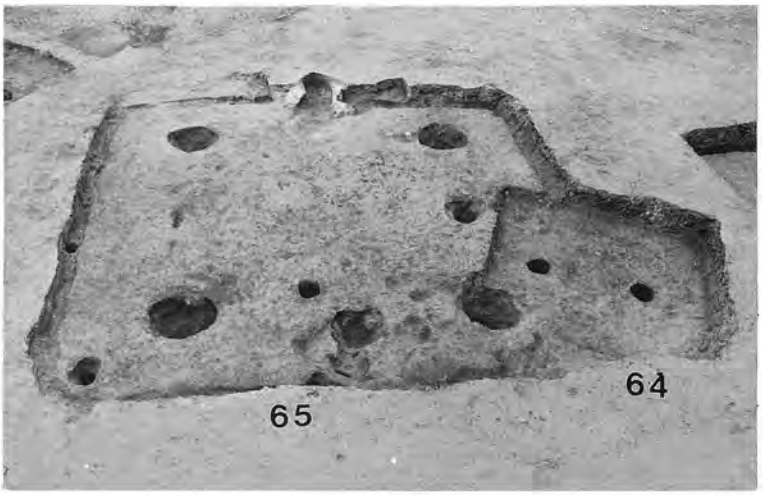
第62号住居跡



第63号住居跡

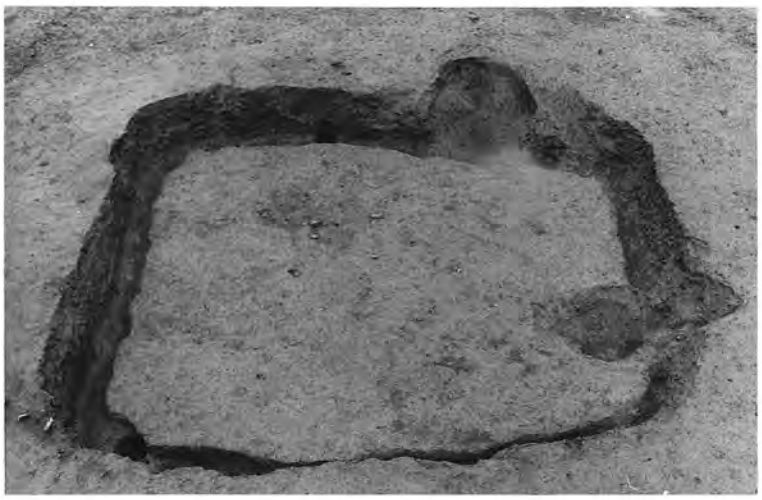
第63号住居跡
遺物出土状況

第63号住居跡
カ　マ　ド



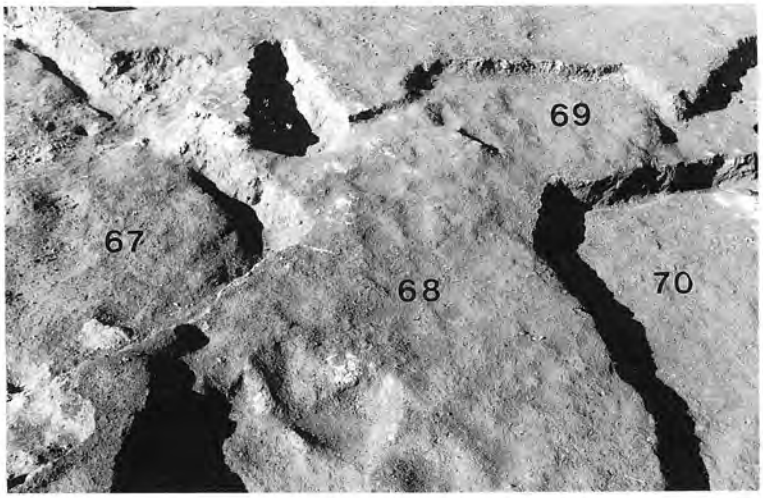
第64・65号住居跡

第65号住居跡
カ　マ　ド

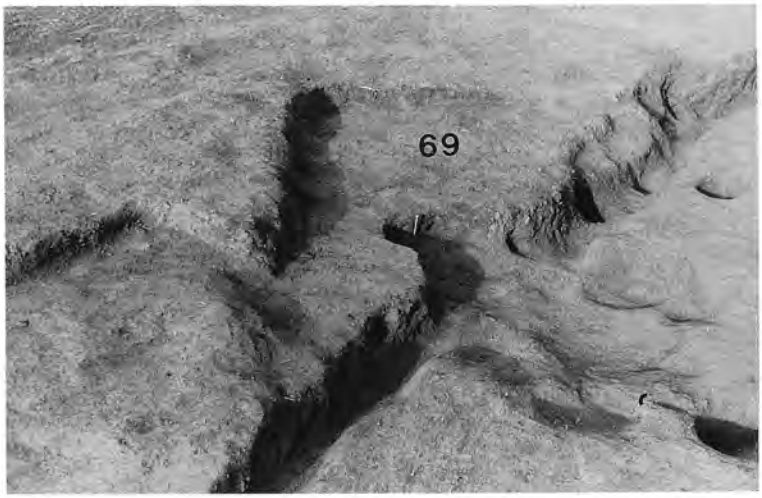


第66号住居跡

第67号住居跡



第68号住居跡



第69号住居跡

第70号住居跡

第71号住居跡

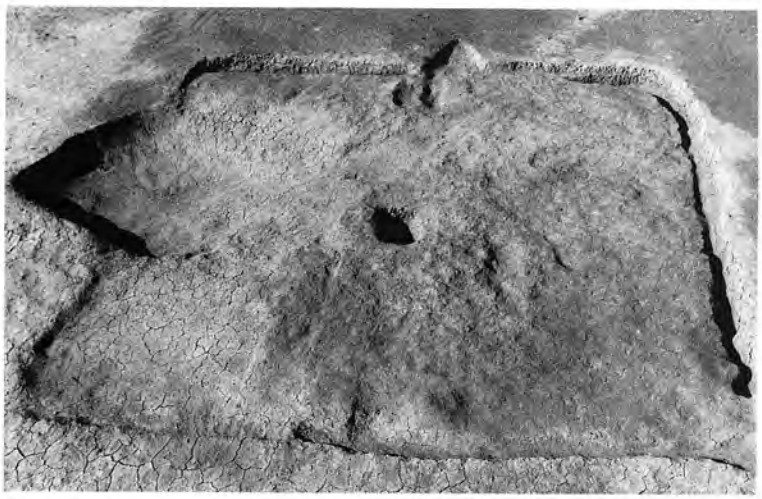
第72号住居跡

第72号住居跡
遺物出土状況

第73号住居跡

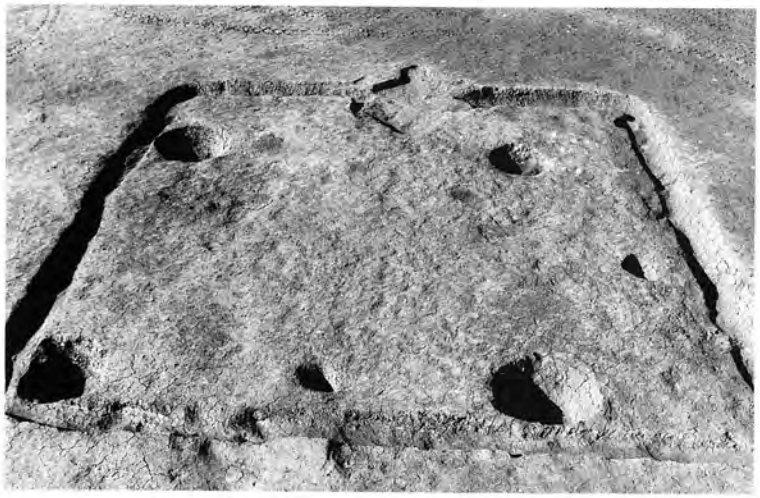
第74号住居跡

第74号住居跡
カ　マ　ド



第75号住居跡

第75号住居跡
遺物出土状況



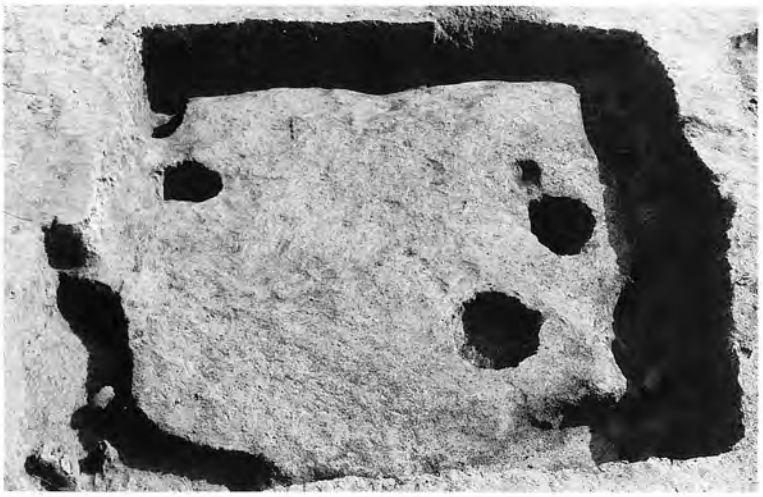
第76号住居跡

第77号住居跡

第78号住居跡

第78号住居跡
遺物出土状況

第79号住居跡

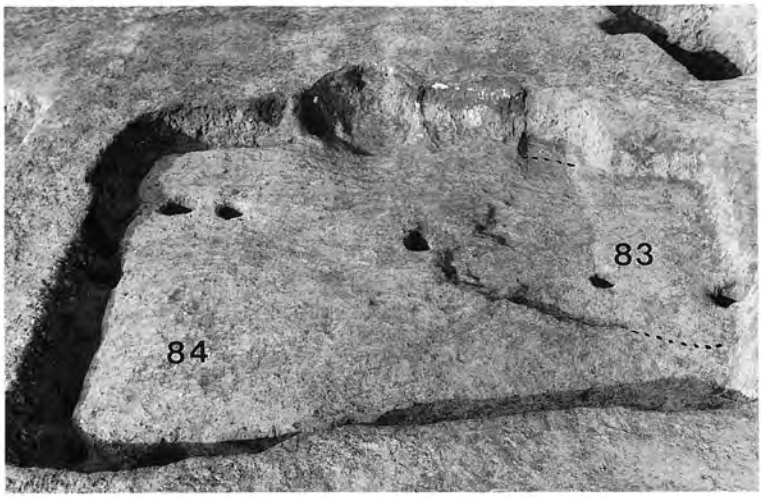


第79号住居跡
遺物出土状況

第80号住居跡

第81号住居跡

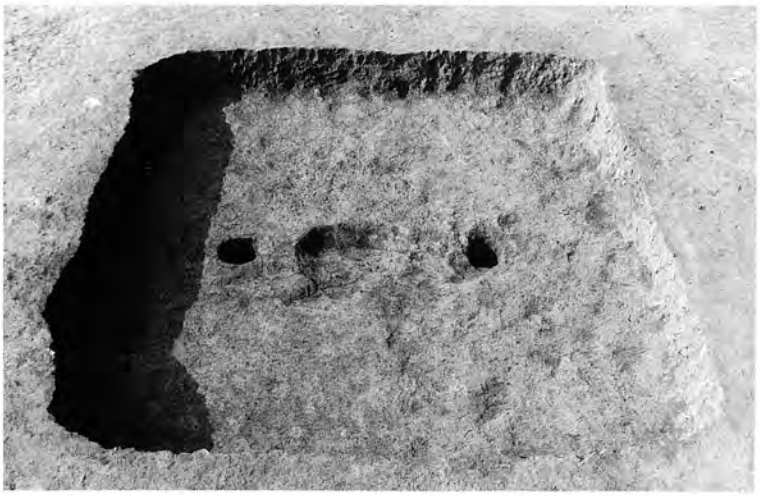
第82号住居跡



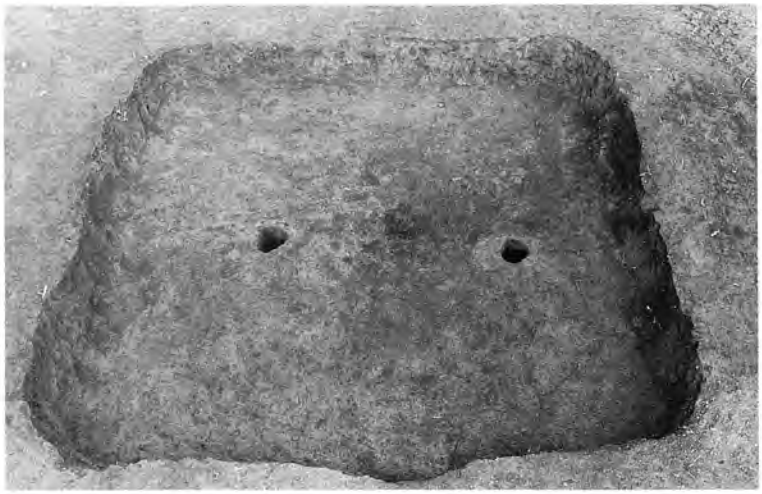
第83・84号住居跡

第85号住居跡

第86号住居跡



第87号住居跡



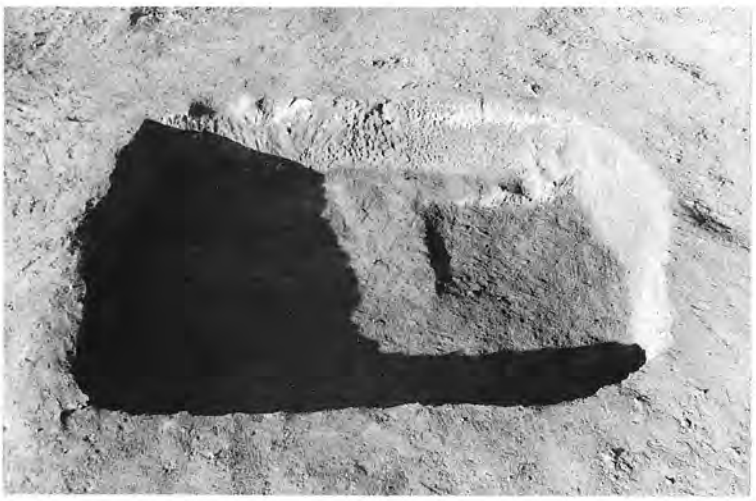
第88号住居跡

第89号住居跡

第91号住居跡

第92号住居跡

第92号住居跡
遺物出土状況

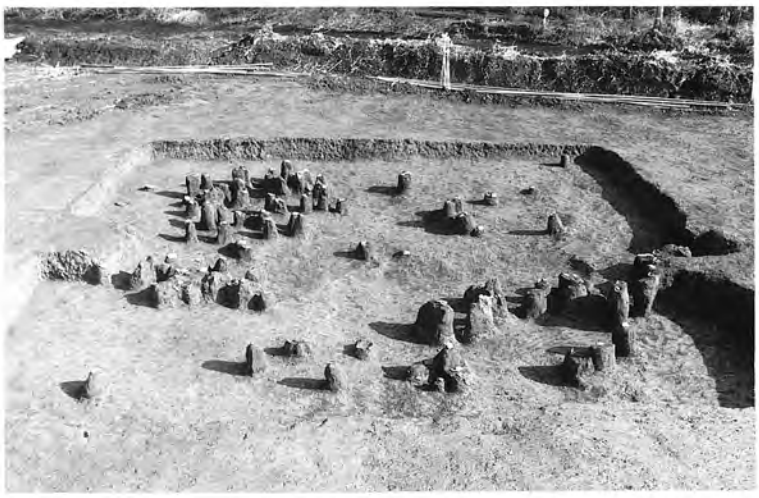


第93号住居跡

第94号住居跡

第95号住居跡

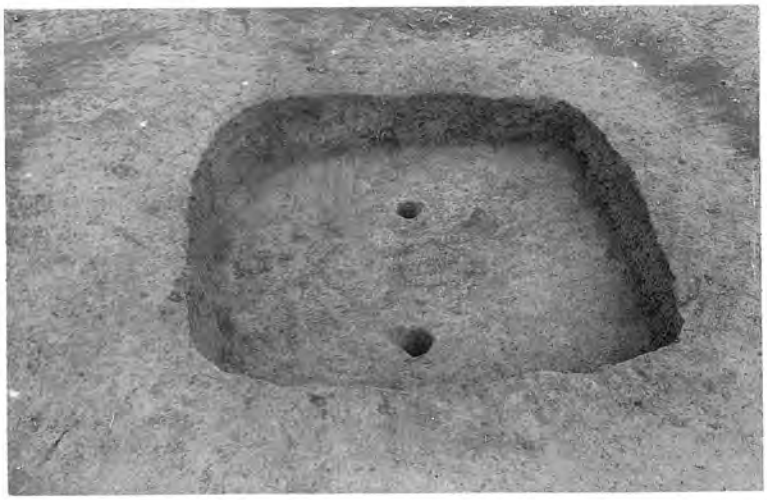
第96号住居跡



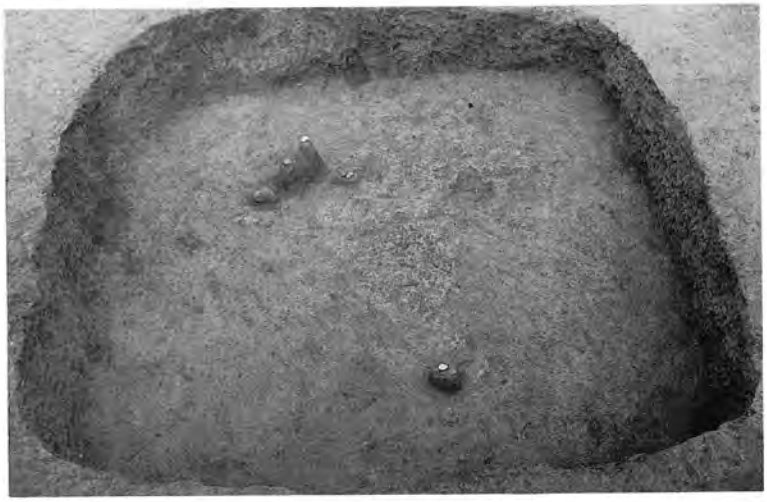
第96号住居跡
遺物出土状況

第97号住居跡

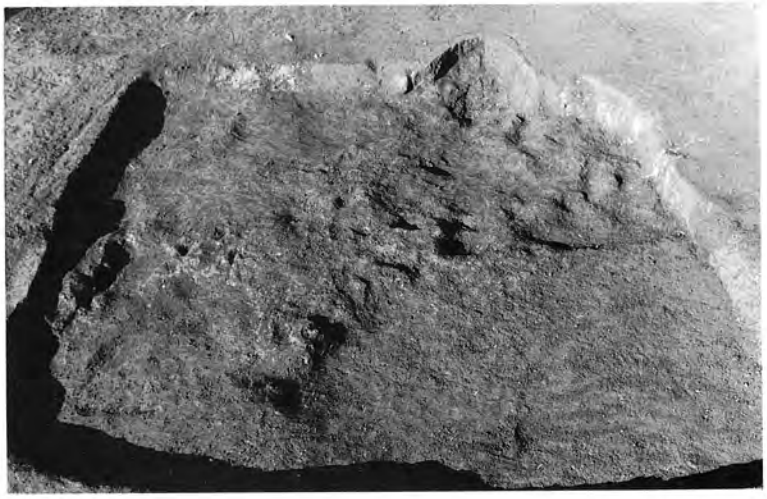
第97号住居跡
遺物出土状況



第98号住居跡



第98号住居跡
遺物出土状況



第99号住居跡

第100号住居跡

第101号住居跡

第103号住居跡

第105号住居跡

第106号住居跡

第107号住居跡

第108号住居跡

第 2 号 土 坑

第 3 号 土 坑
(第 8 号井戸)

第 4 号 土 坑

第 5 号 土 坑

第 6 号 土 坑
(第 1 号地下式坑)

第 7 号 土 坑
(第 2 号地下式坑)

第 8 号 土 坑
(第 3 号地下式坑)

第 9 号 土 坑
(第 4 号地下式坑)

第 10 号 土 坑

第 10 号 土 坑
遺物出土状況

第 1 号 溝
(S→)

第 1 号 溝
土 層 断 面

第 2 号 溝
(W→)

第 2 号 溝
(W→)

第 3 号 溝
(W→)

第 4 号 溝
(W→)

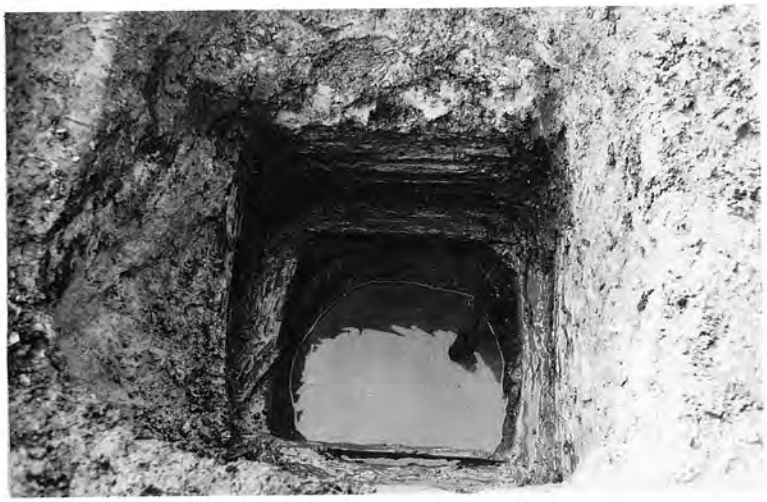
第 5 号 溝
(W→)

第 8 号 溝
(W→)

第 8 号 溝
(SW→)

第 9 号 溝
(W→)

第 1 号 井 戸



第 1 号 井 戸

第 2 号井戸

第 3 号井戸

第 4 号井戸

第 5 号 井 戸

第 6 号 井 戸

第 7 号 井 戸

第1号掘立柱
建　物　跡

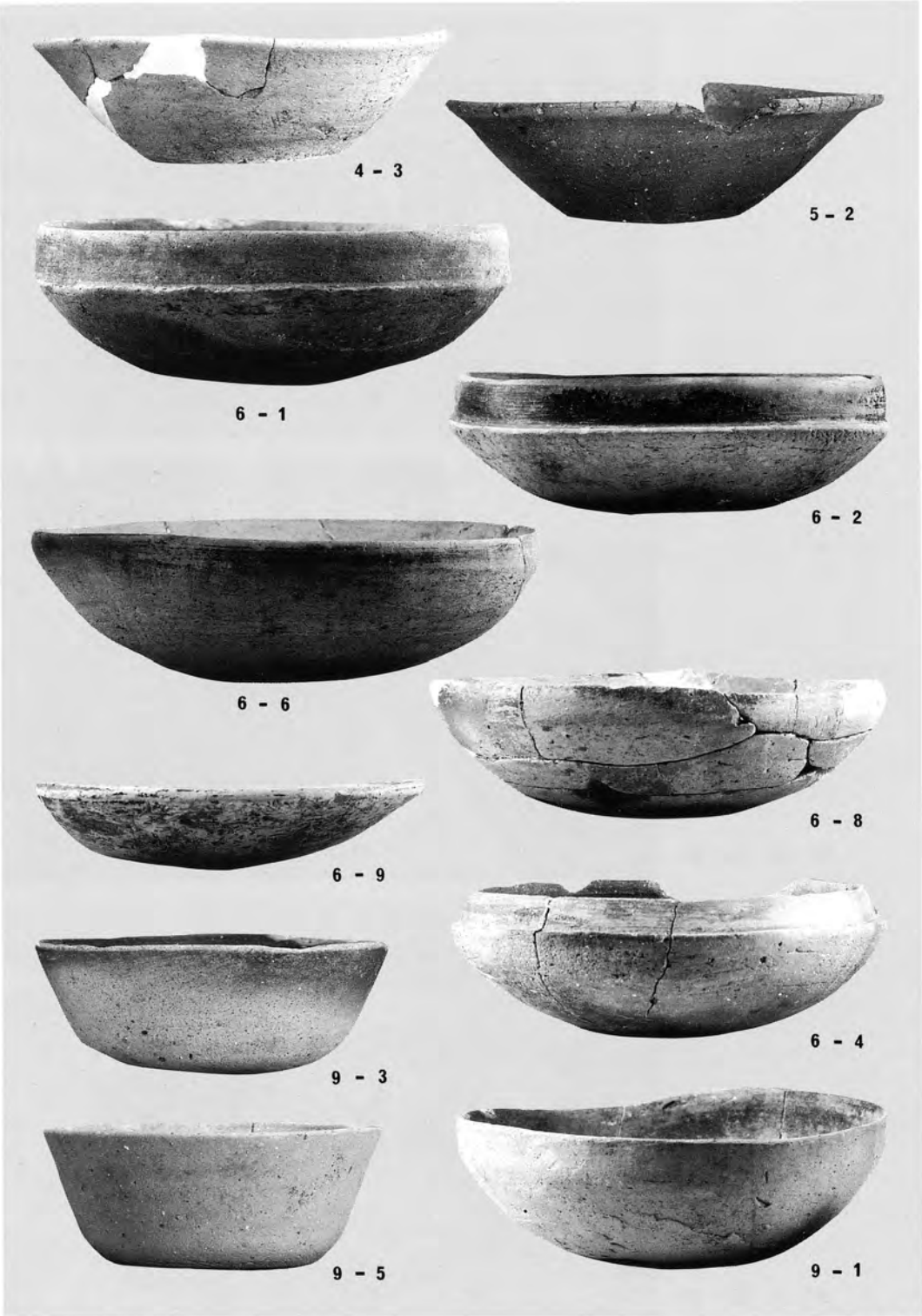
第1号掘立柱
建物跡遺物
出土状況

作業風景

作業風景

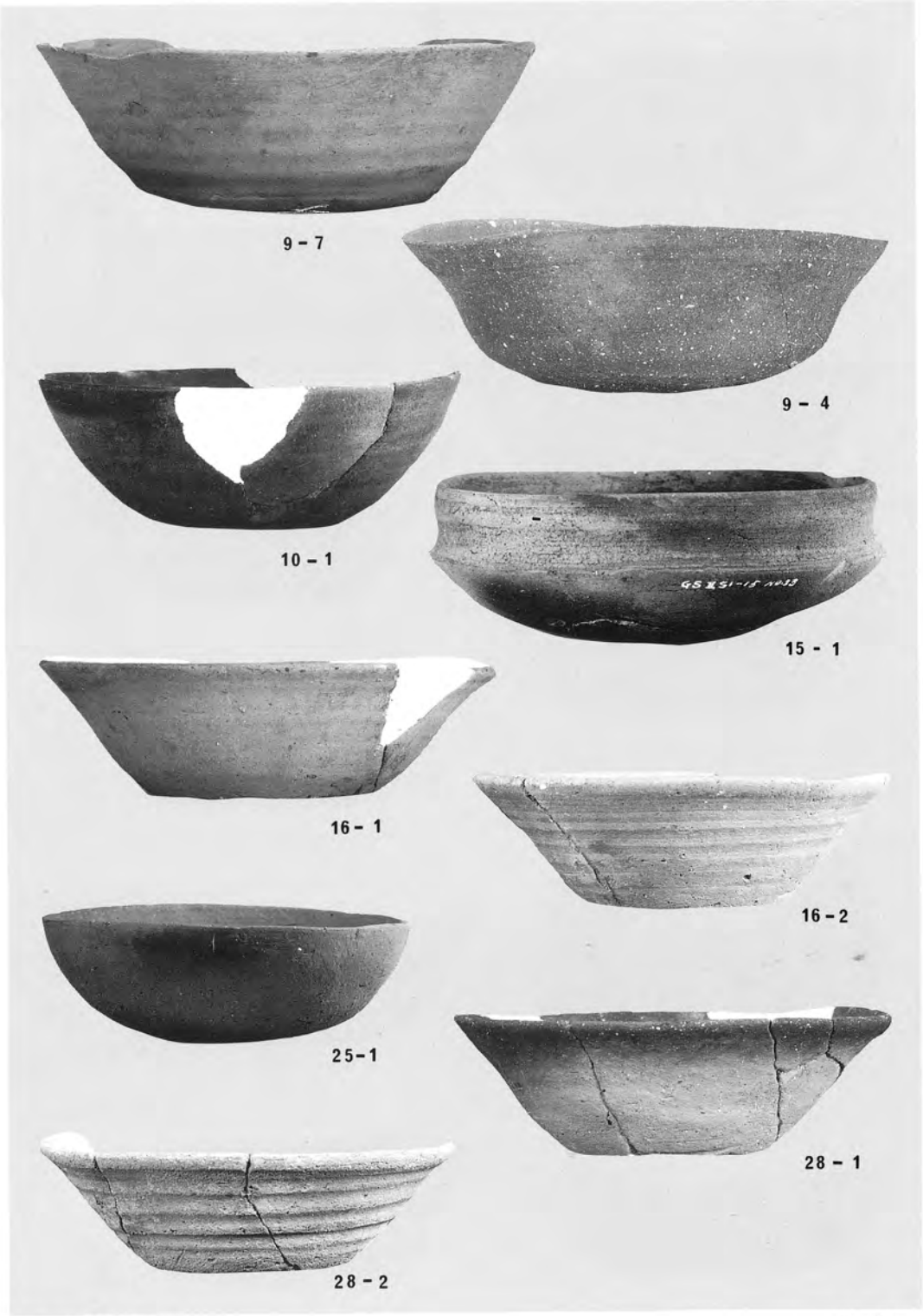
作業風景

休息風景



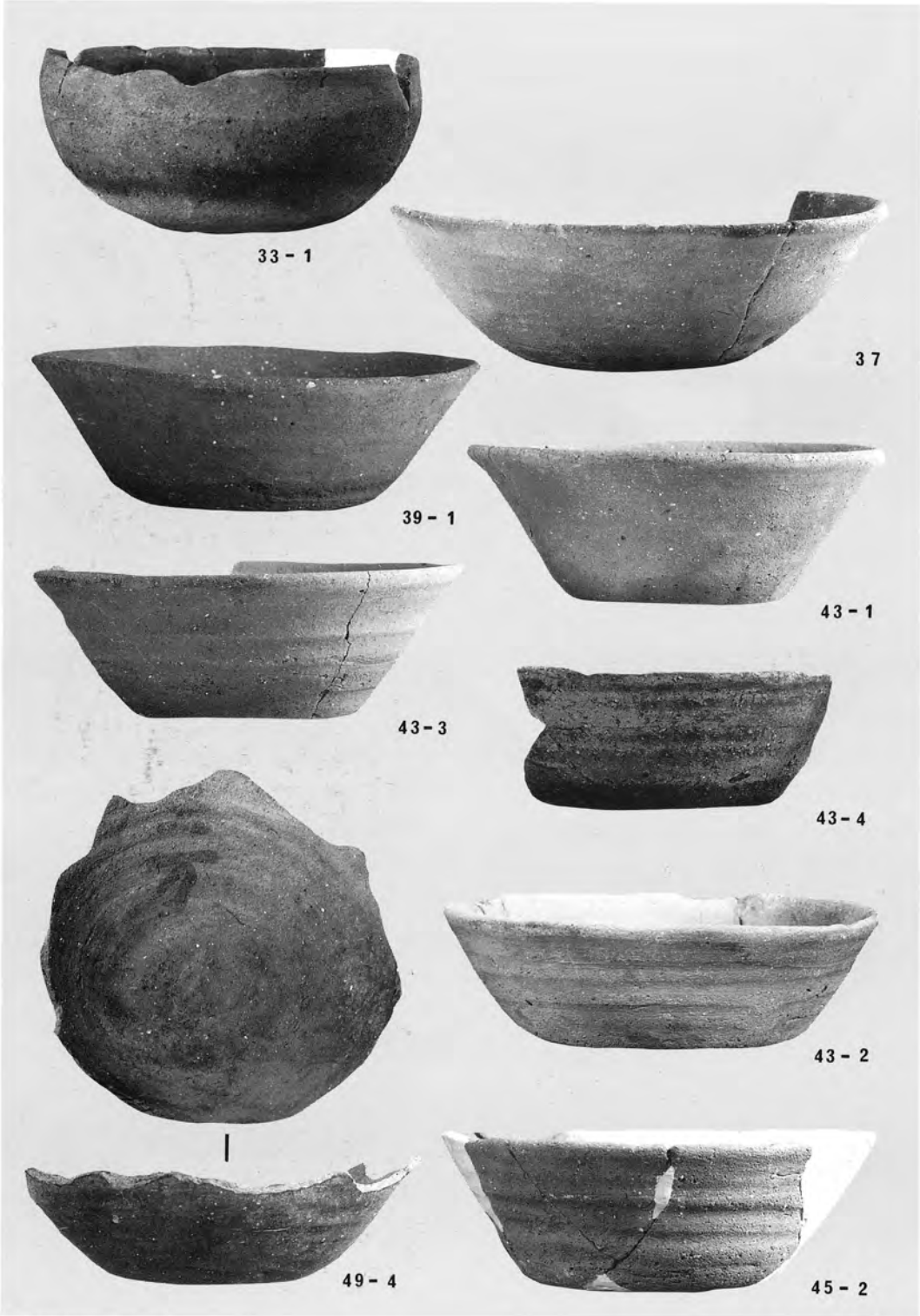
出土遺物(1)

S=1/2

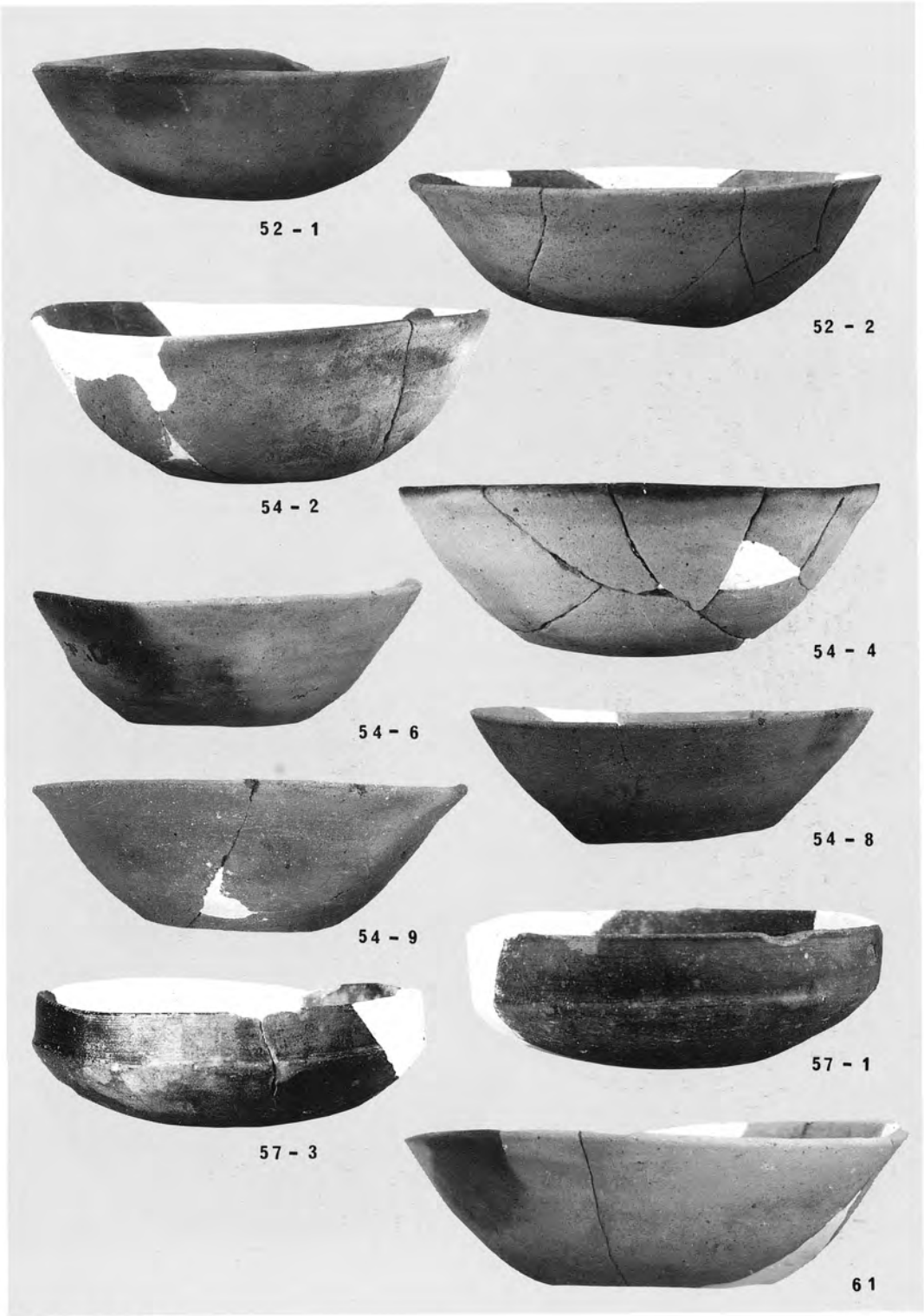


出 土 遺 物 (2)

S = 1/2

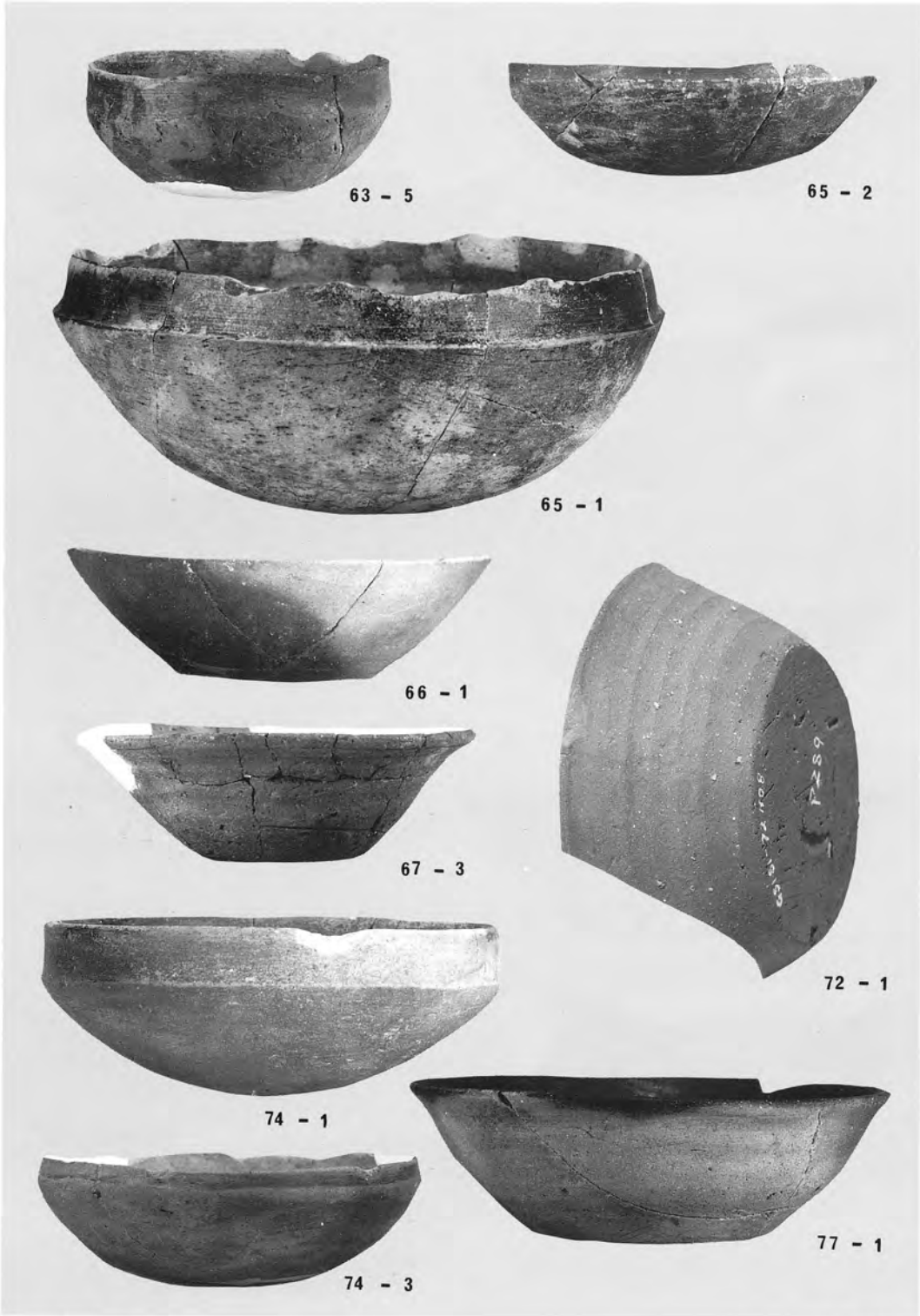


出土遺物(3)　　S＝1/2

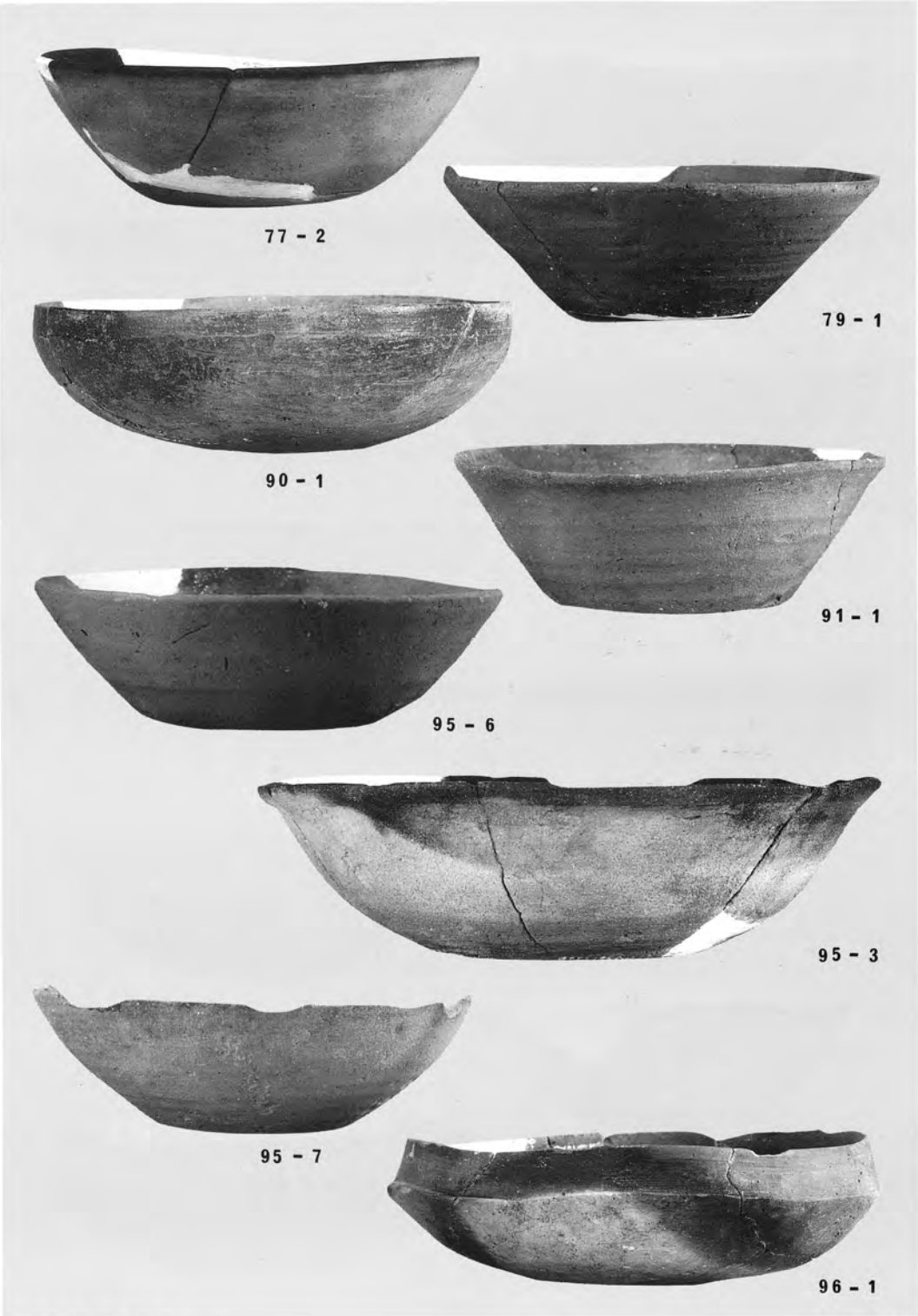


出土遺物(4)

S=1/2

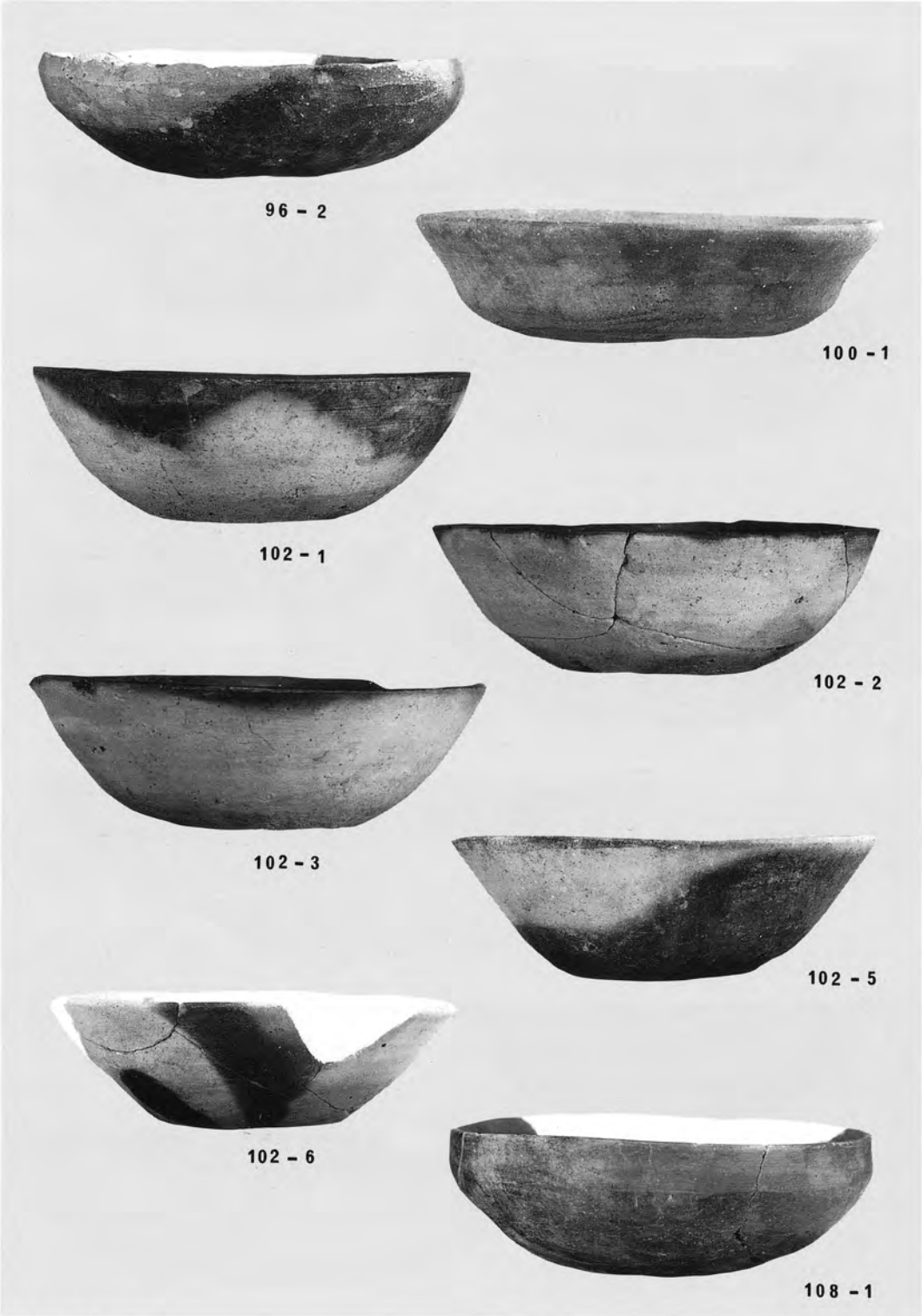


出土遺物(5)　　S=1/2

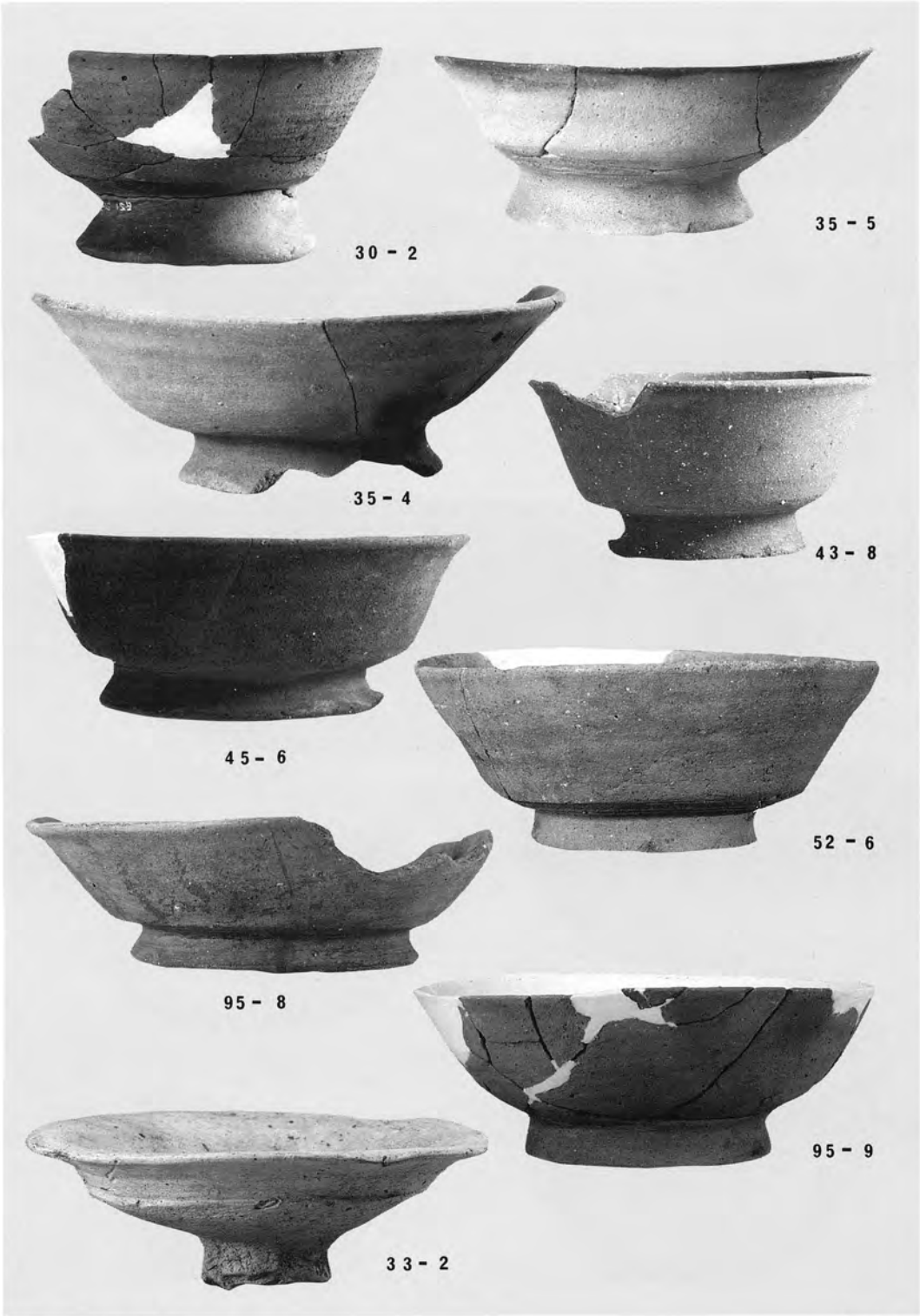


出土遺物(6)

S=1/2



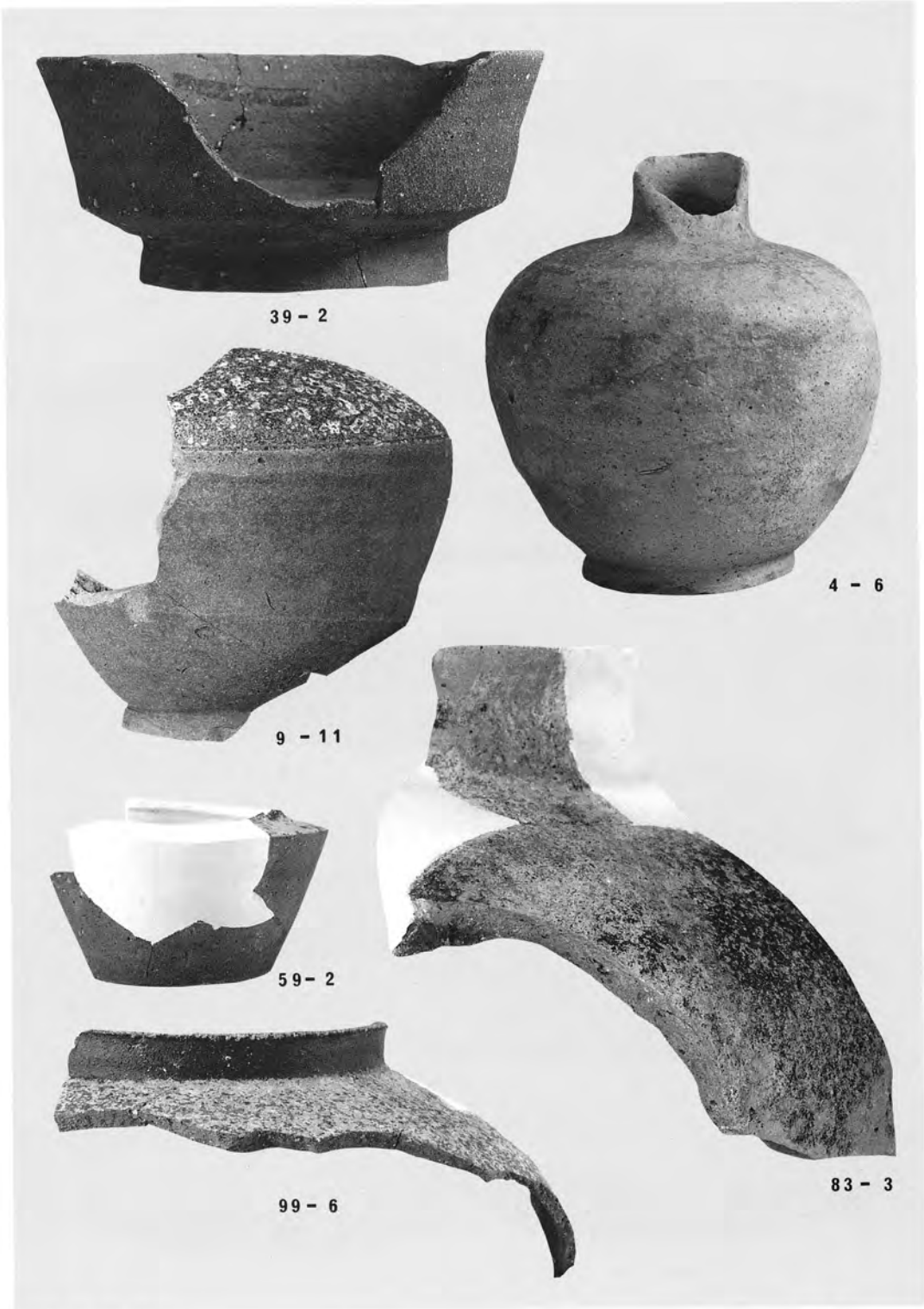
出土遺物(7)　　S＝1/2



出土遺物(8)

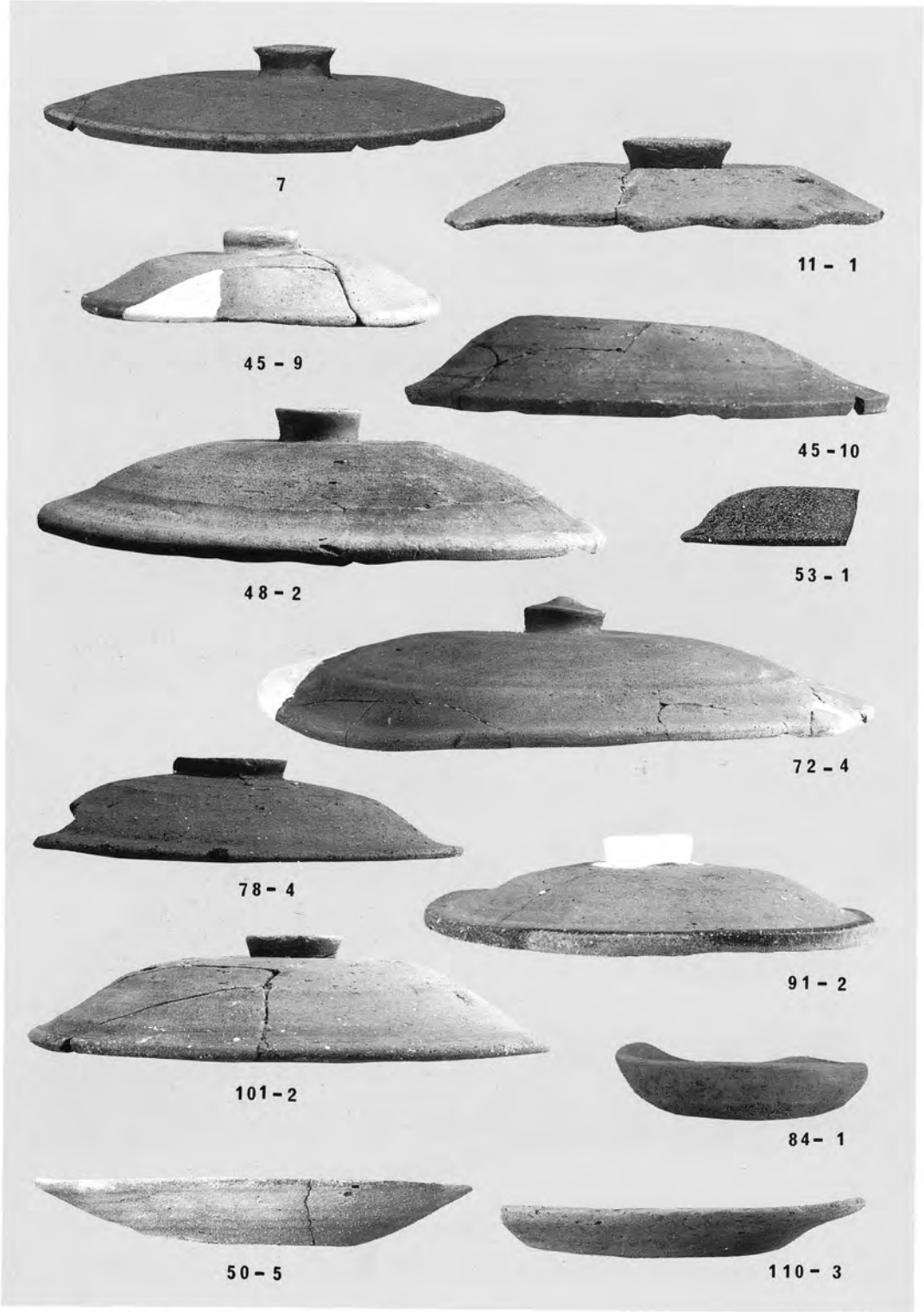
S=1/2

出土遺物(9)　　S=1/2

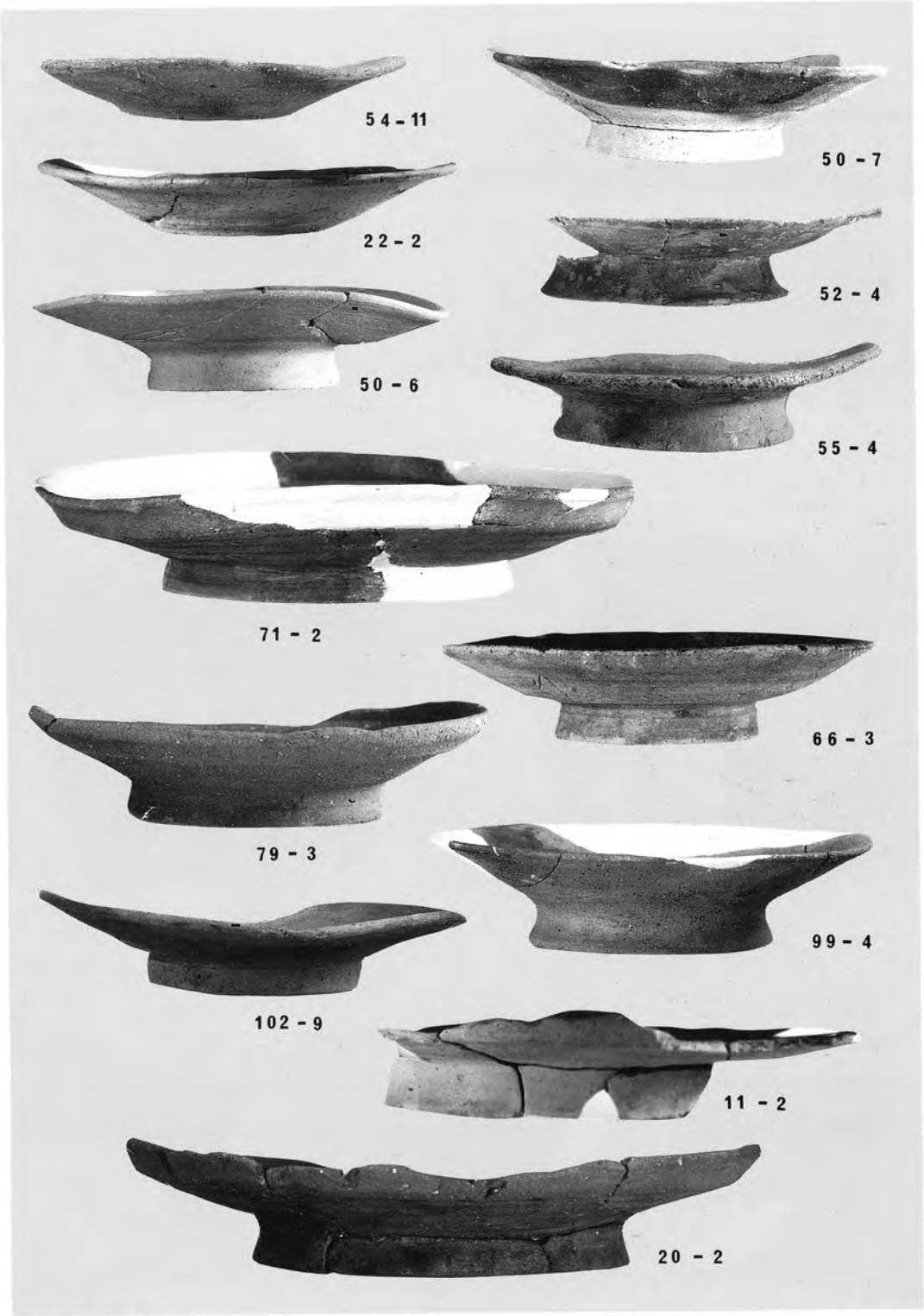


出土遺物(10)

S＝1/2
(4－6 1/3)

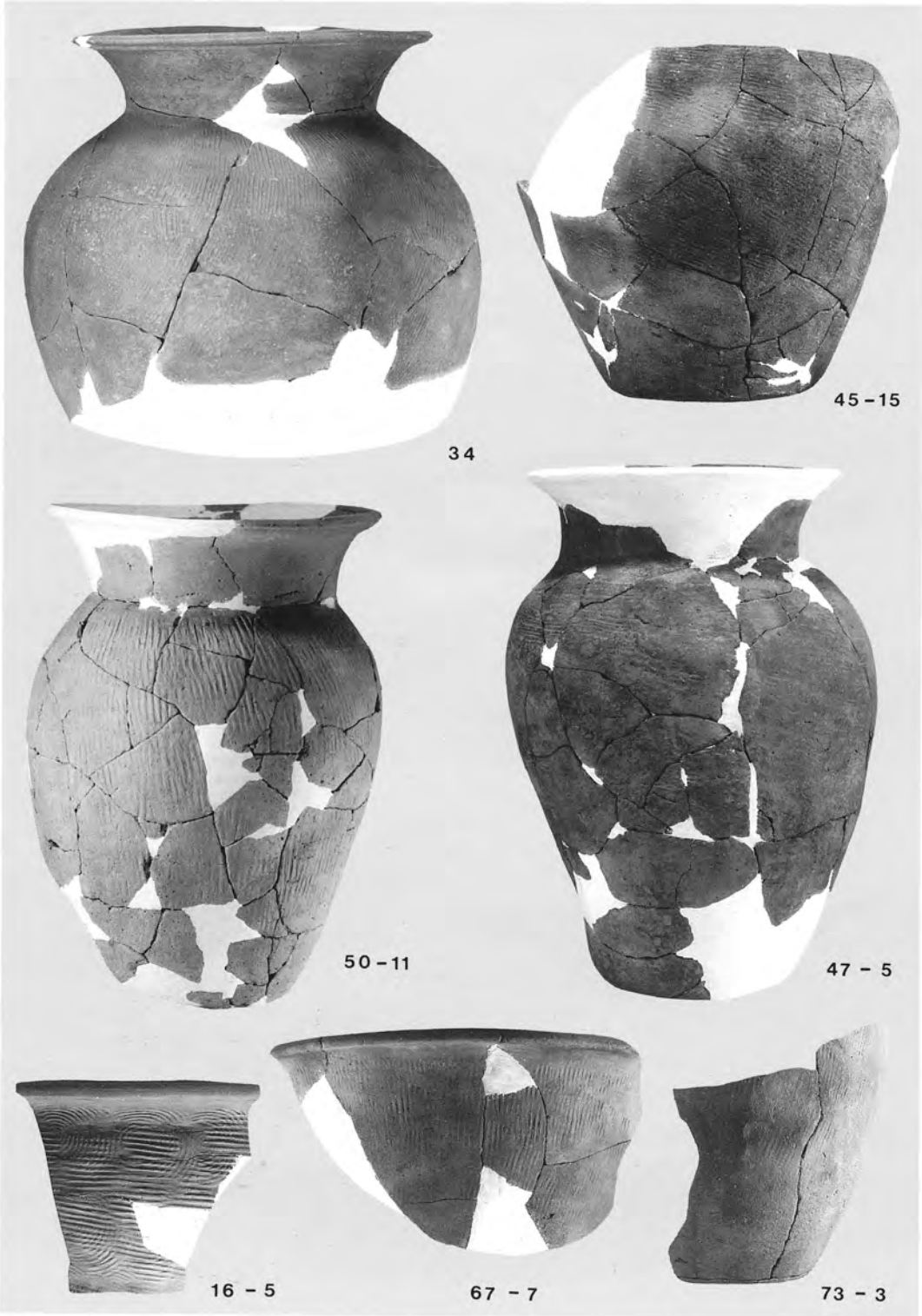


出土遺物(11)　　S＝1/2



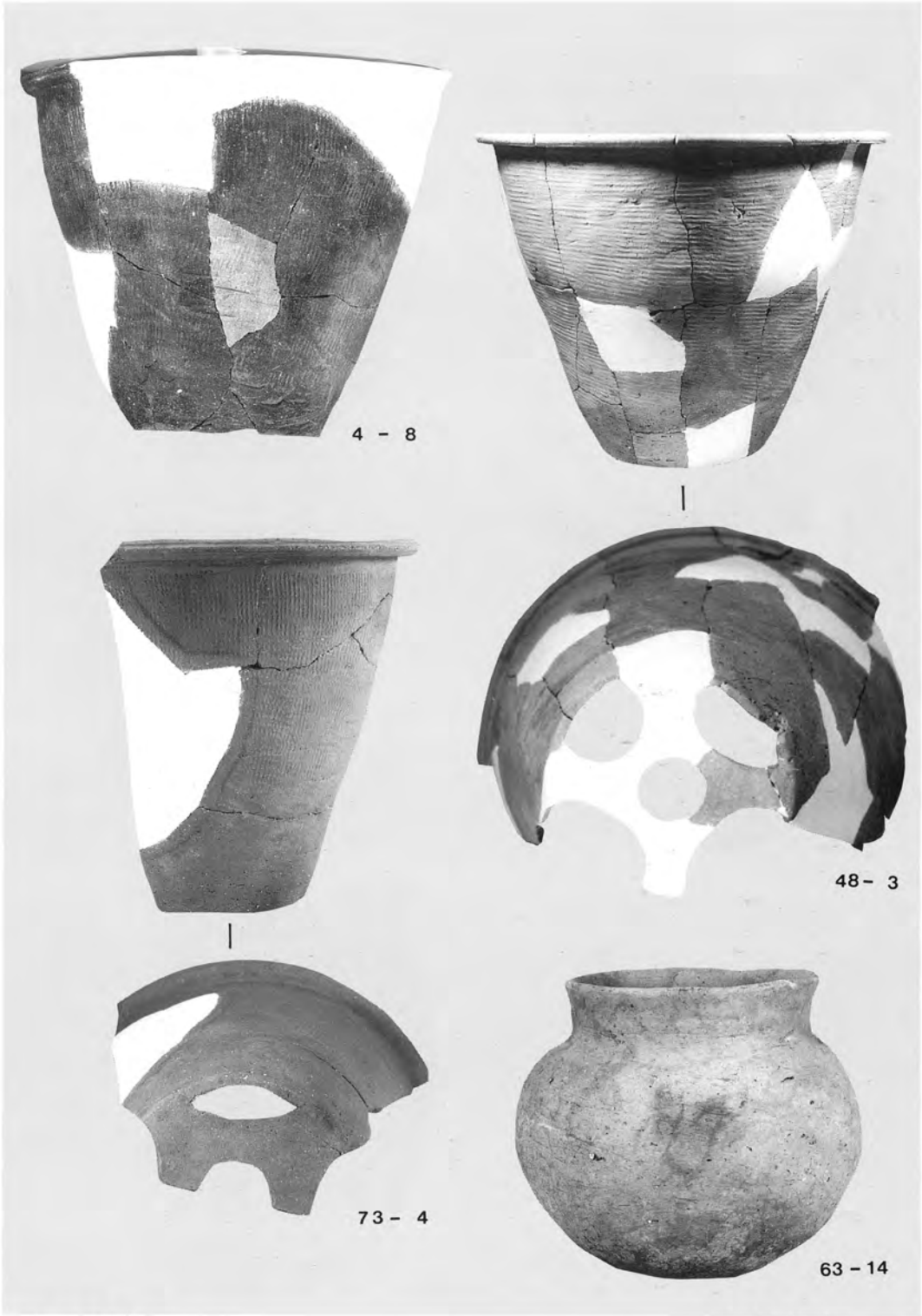
出土遺物(12)

S=1/2



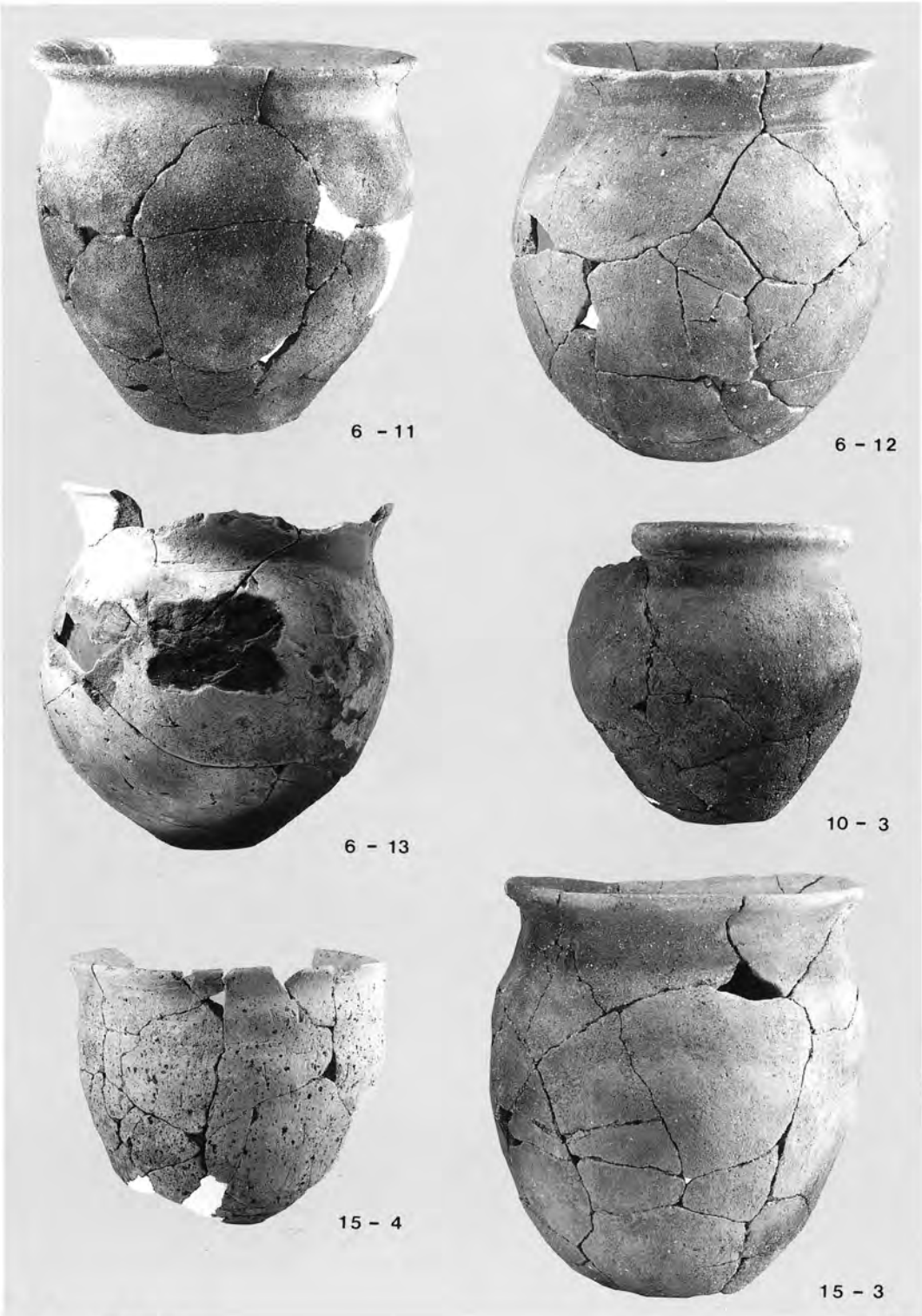
出土遺物(13)

S=1/4.5



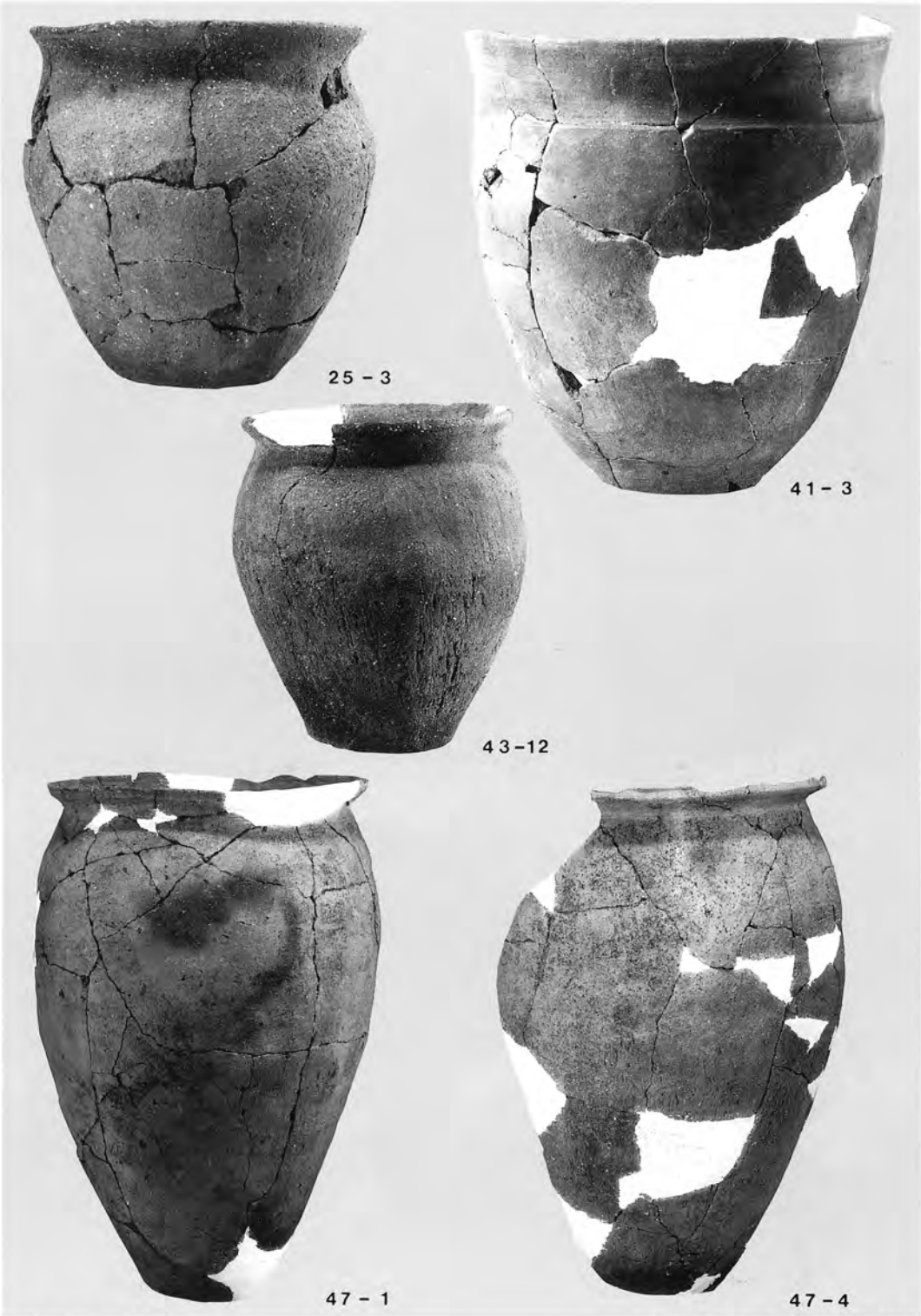
出土遺物(14)

S＝1/3 63−14
S＝1/4.5 4−8, 73−4
S＝1/6 48−3



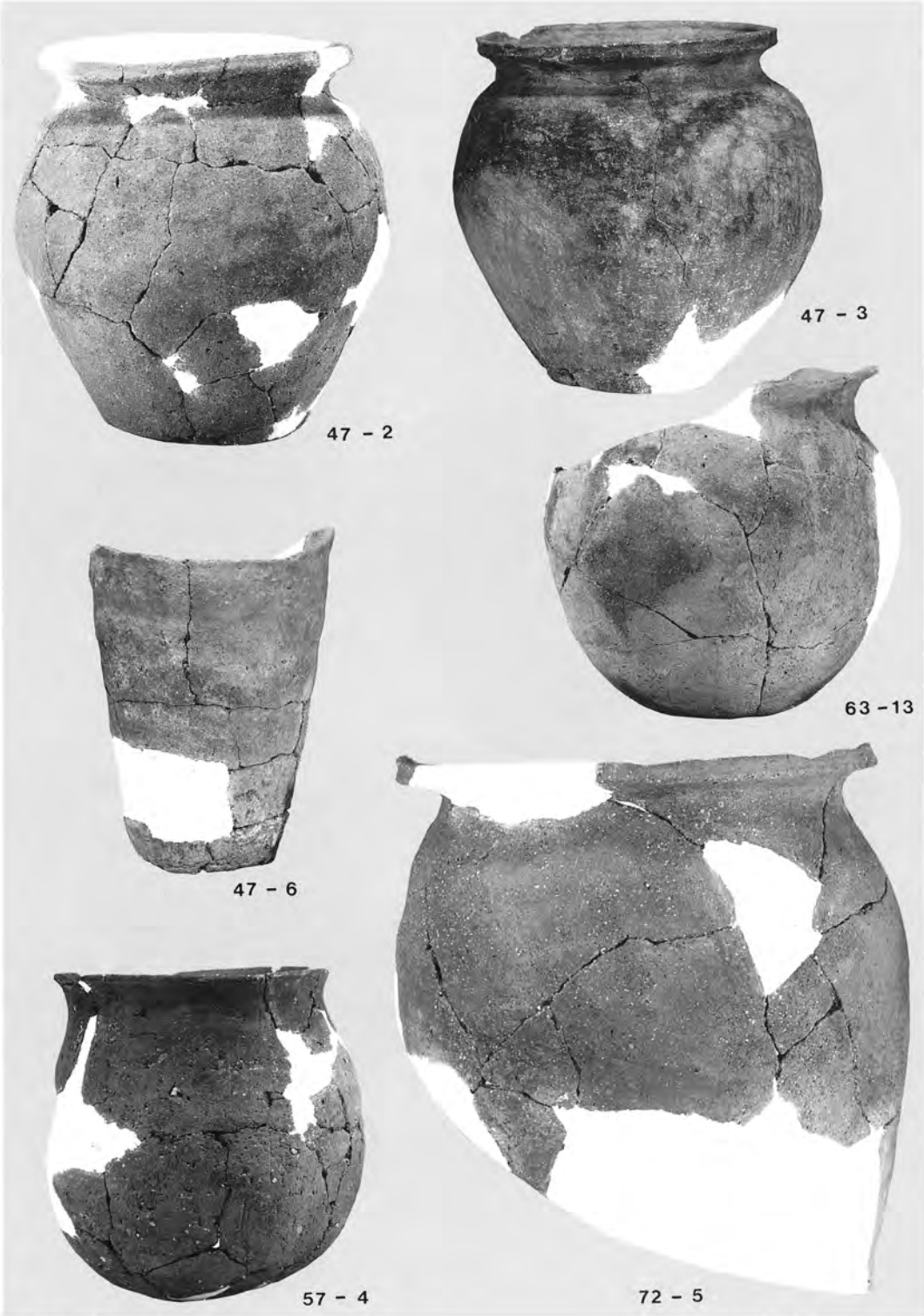
出土遺物(15)

S＝1/3



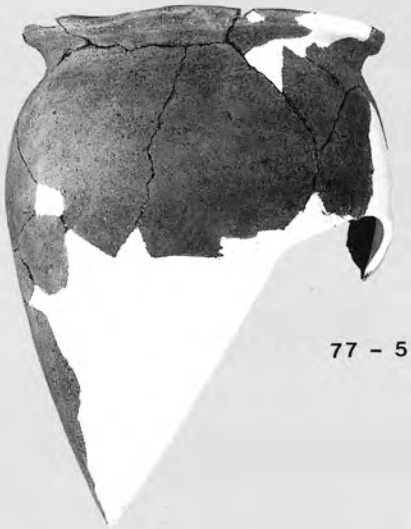
出土遺物(16)

S＝1/3 25－3, 41－3, 43－12
S＝1/4.5 47－1・4



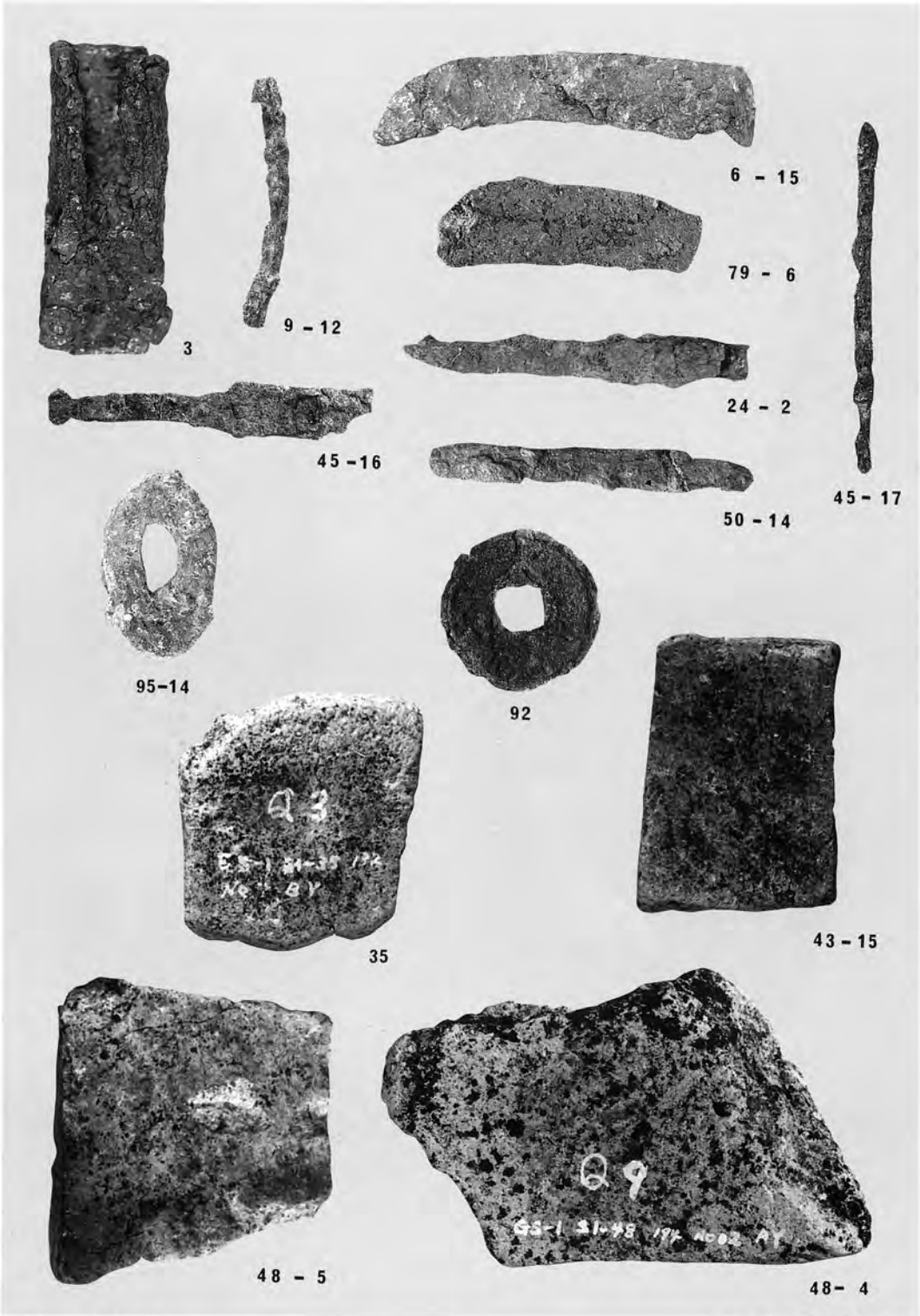
出土遺物(17)

S=1/3
(47−6 1/4.5)



出土遺物⑱

S=1/4.5
(84−2 1/3)



出土遺物(19)

S＝1/1 92, 35, 44－15
48－5・4
(他は1/2)

66 - 8

102 - 11

4 - 9

5 - 6

表採

10 - 6

53 - 2

出土遺物(20)

S=1/1

54-13

96-11

9-13

63-22

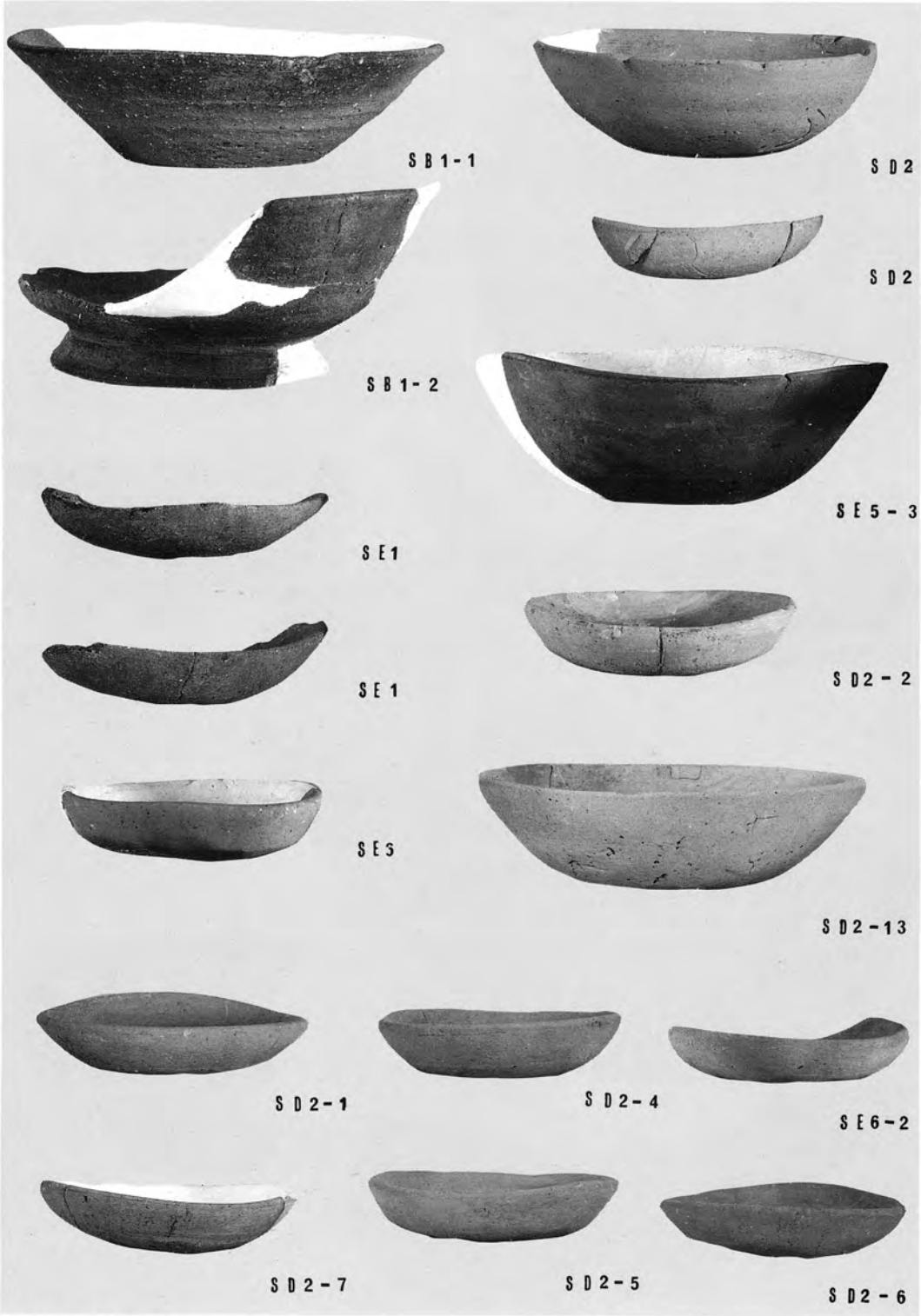
38-4

出土遺物(21)

S=1/1 54−13, 96−11
S=1/2 9−13, 63−22, 38−4

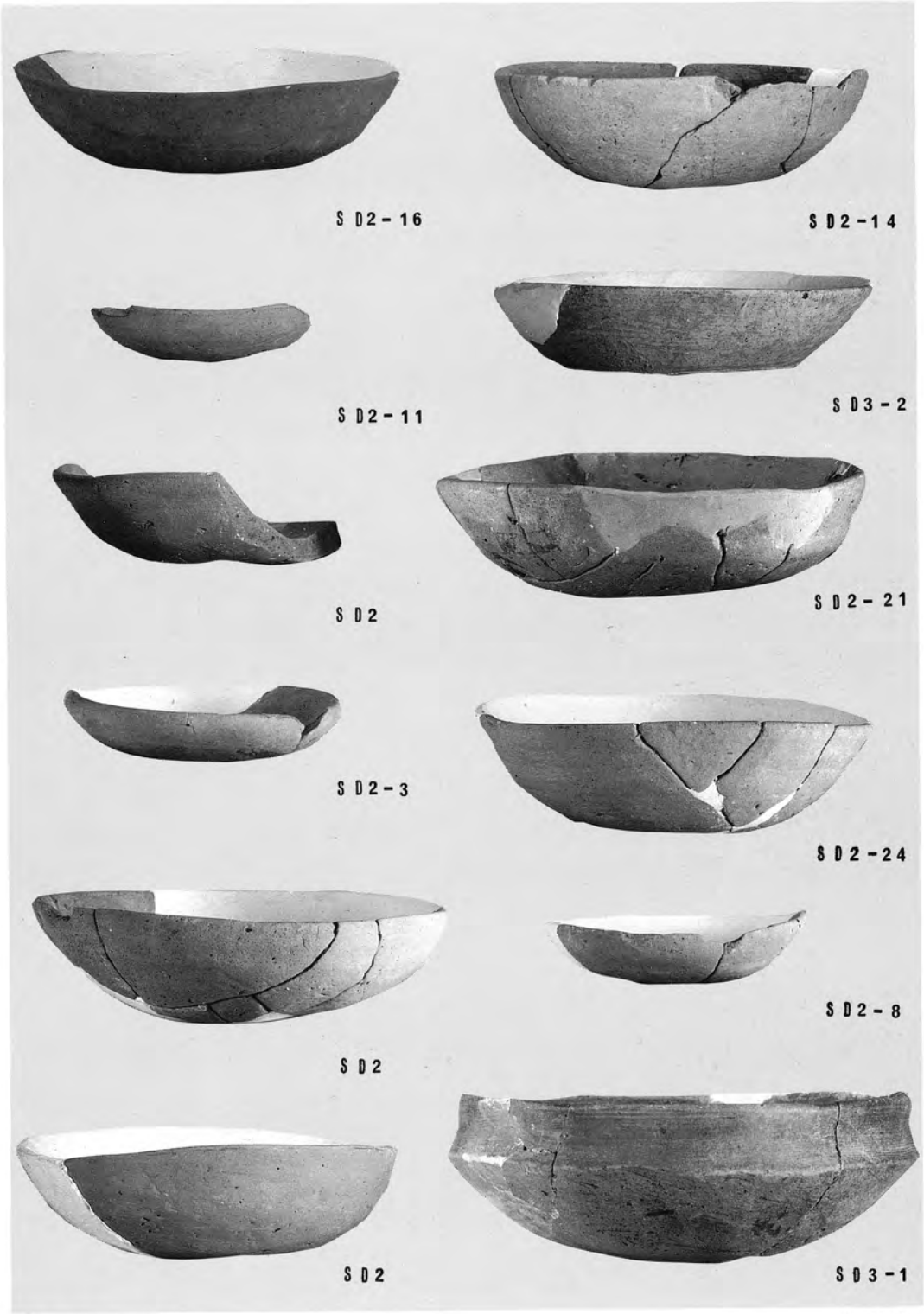
出土遺物(22)

S=1/2 SB1−3, SEI−2, SE6−8
SD6−2, SE6−9
S=1/3 SK10, SE5−1, SE5−2


SB1-1
SD2
SD2
SB1-2
SE5-3
SE1
SD2-2
SE1
SE5
SD2-13
SD2-1
SD2-4
SE6-2
SD2-7
SD2-5
SD2-6

出土遺物(23)

S=1/2

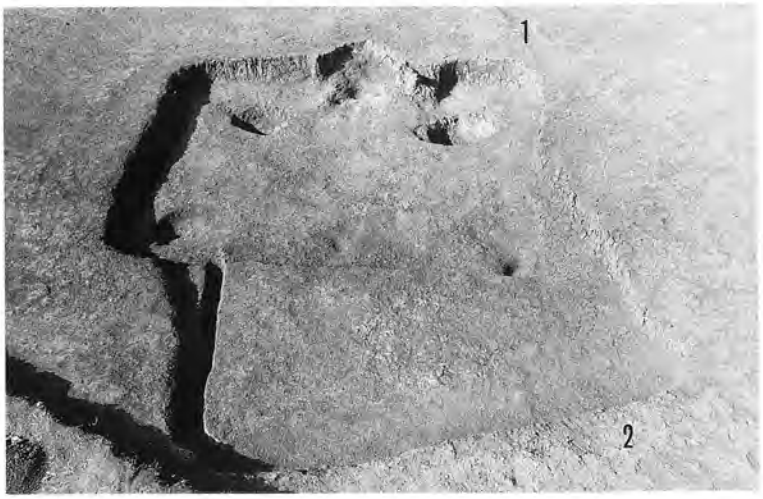

SD2-16
SD2-14
SD2-11
SD3-2
SD2
SD2-21
SD2-3
SD2-24
SD2-8
SD2
SD2
SD3-1

出土遺物(24)

S=1/2

柴崎遺跡II区

第 1 号住居跡



第 1 ・ 2 号住居跡

第 2 号住居跡

PL2

第 3 号住居跡

第 4 号住居跡

第 5 号住居跡

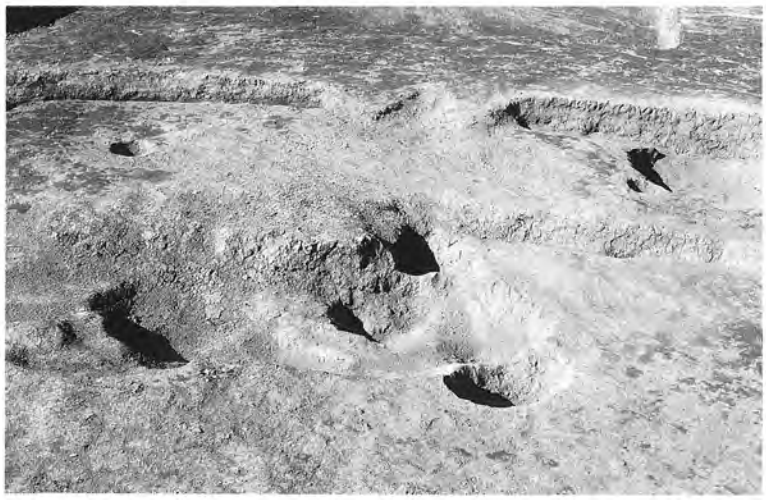
第 5 号住居跡
遺物出土状況

第 5 号住居跡
遺物出土状況
（カマド）

第 6 号住居跡

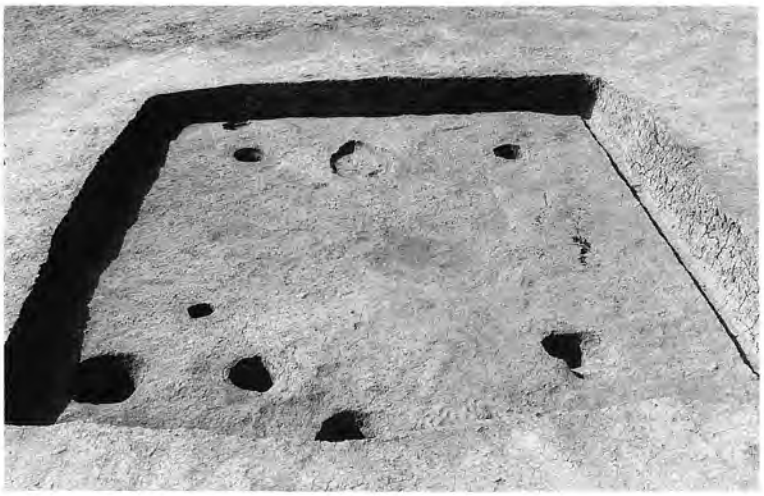
第 7 号住居跡

第 8 号住居跡

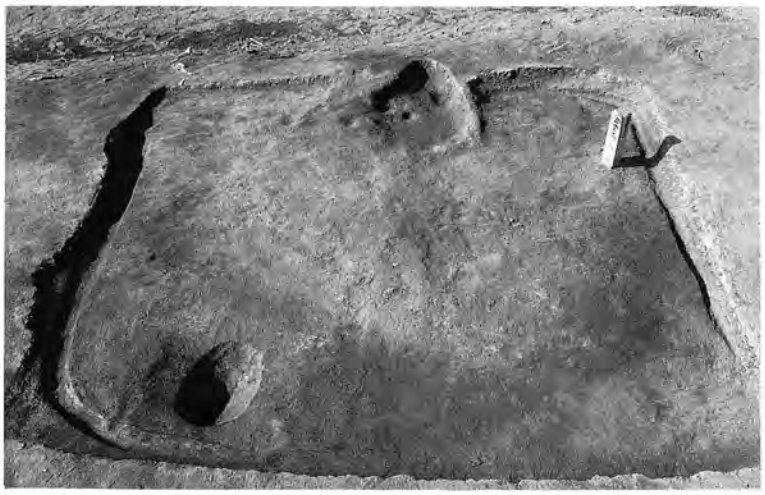


第 8 号住居跡

第 9 号住居跡



第10号住居跡



第11号住居跡

第12号住居跡

第12号住居跡
遺物出土状況

第13号住居跡

第14号住居跡

第15号住居跡

第15号住居跡
遺物出土状況

第15号住居跡
遺物出土状況

第15号住居跡
遺物出土状況

第16号住居跡

第17号住居跡

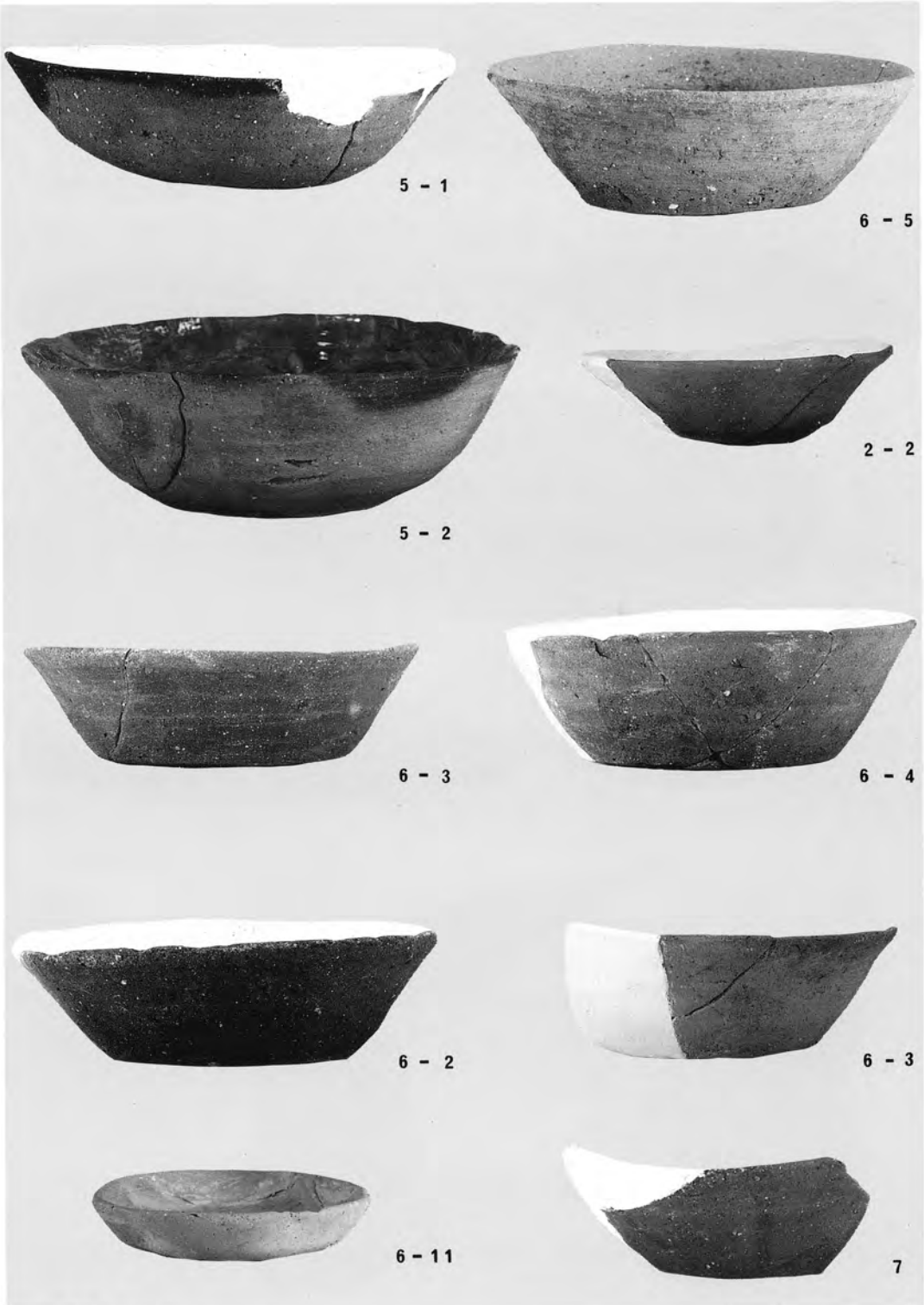
第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡

PL10

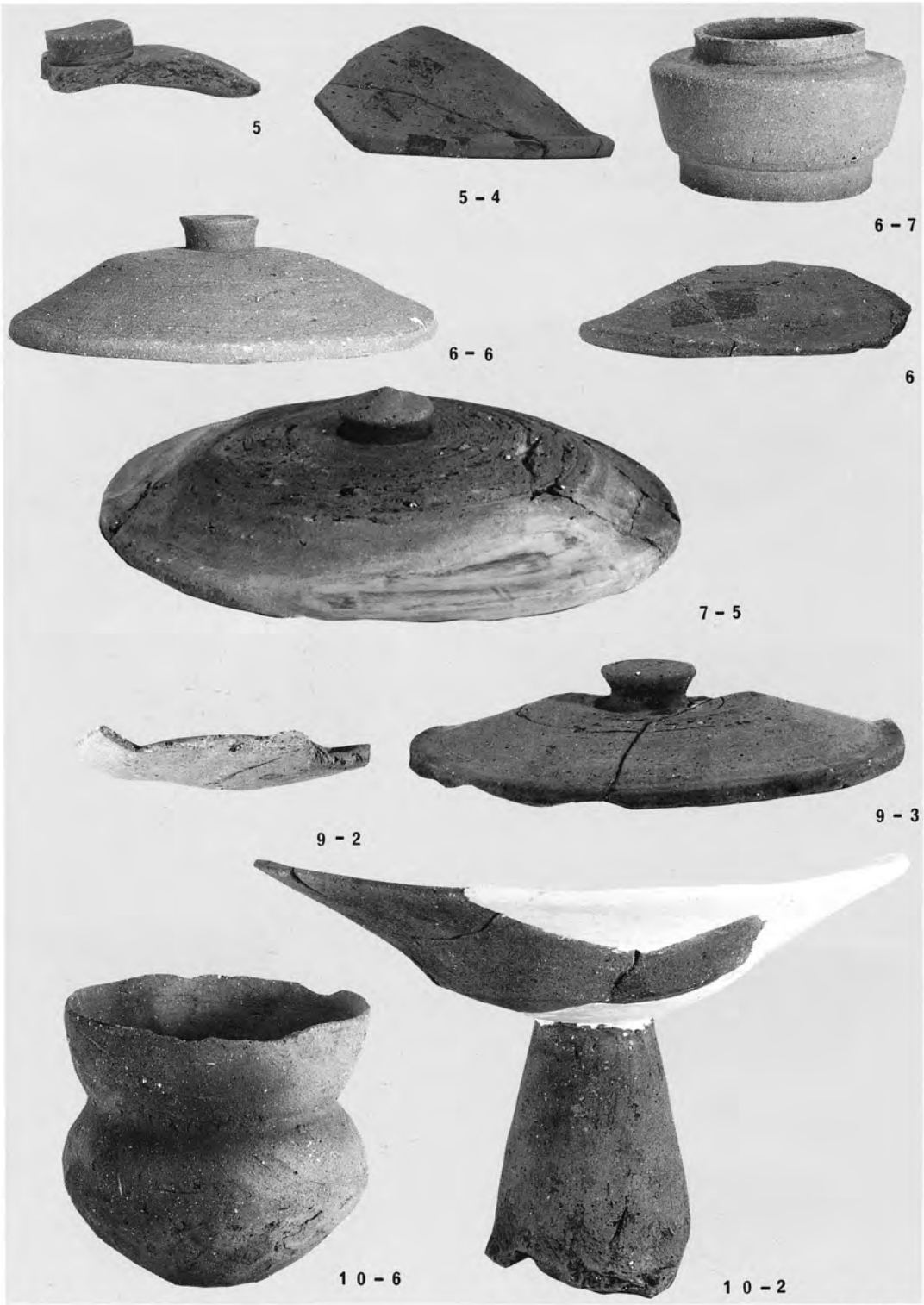
作業風景

作業風景



出 土 遺 物 (1)

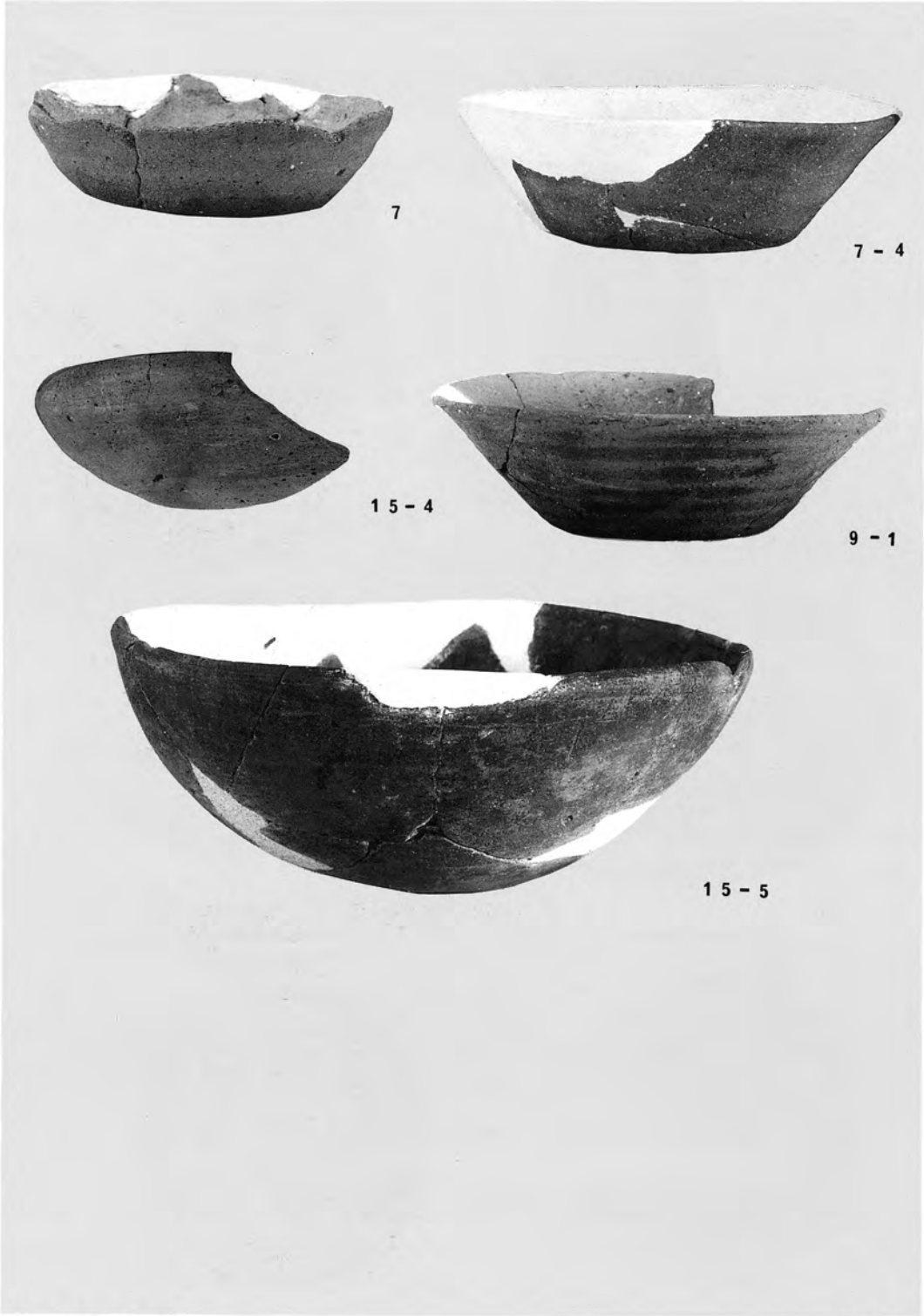
S＝1/2
(2−2 1/3)



出土遺物(2)　　S=1/2

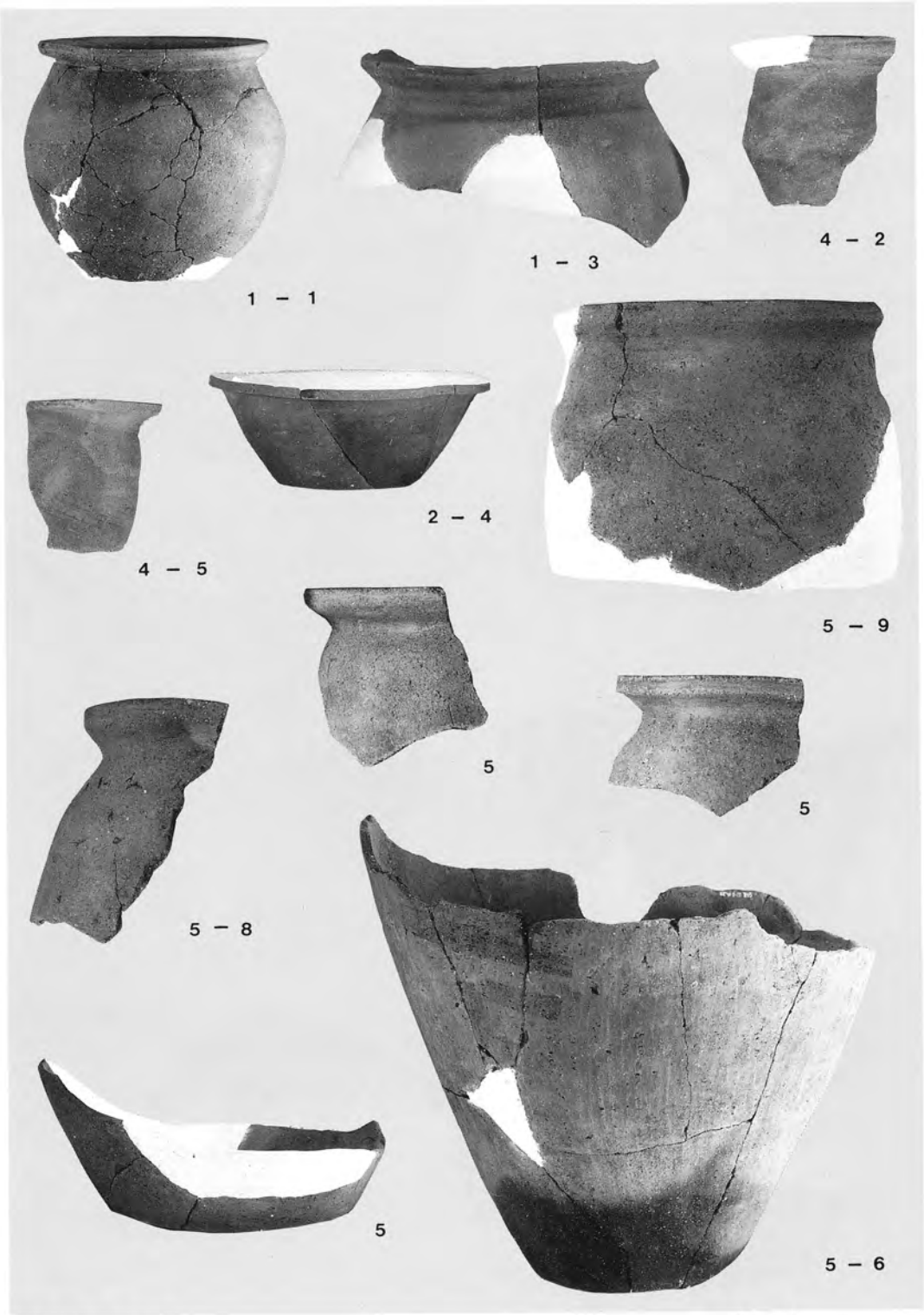
出土遺物(3)

S=1/2
(15−8 1/3)



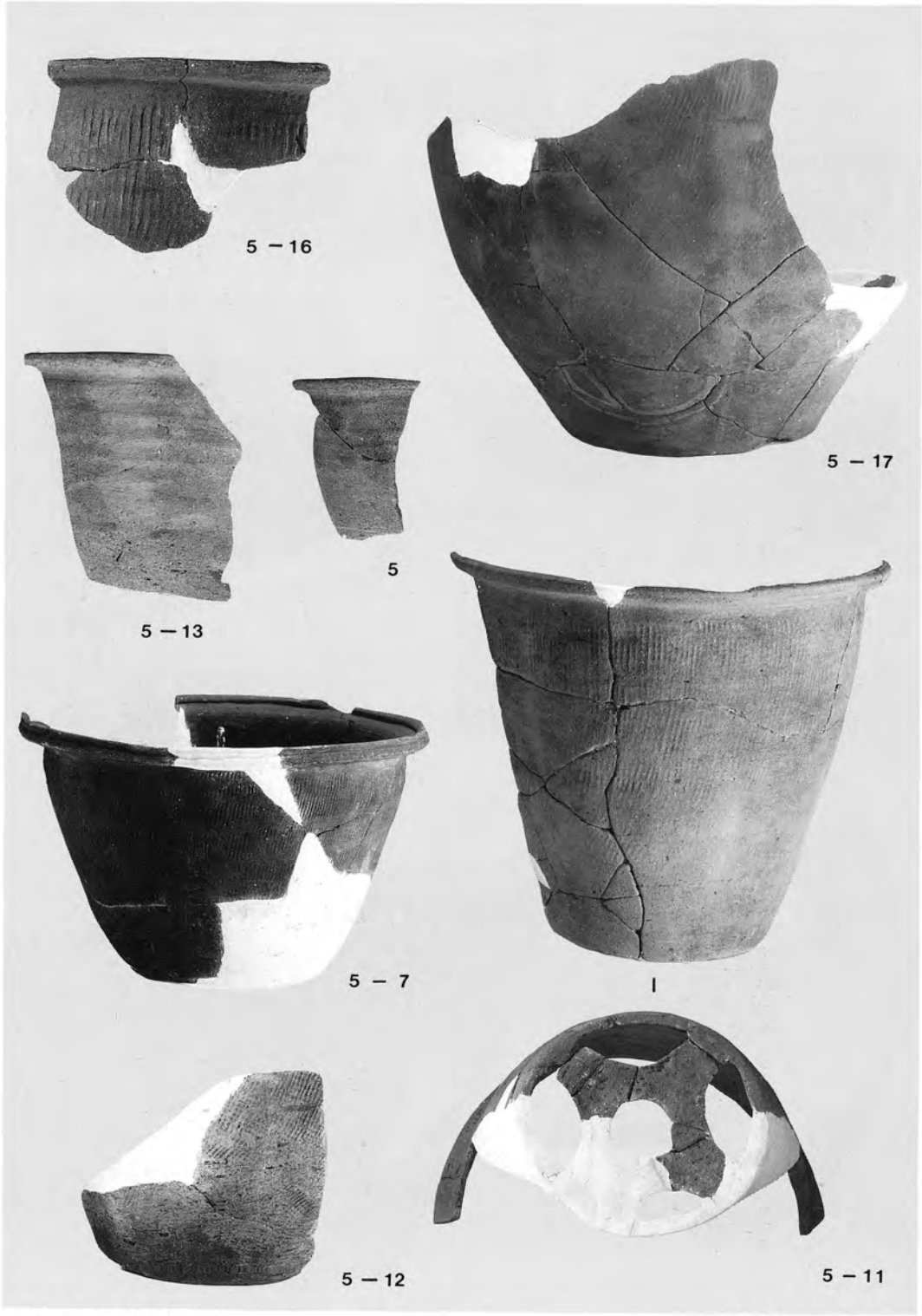
出土遺物(4)

S=1/2



出土遺物(5)

S=1/3
(5, 5−8・9 1/2)

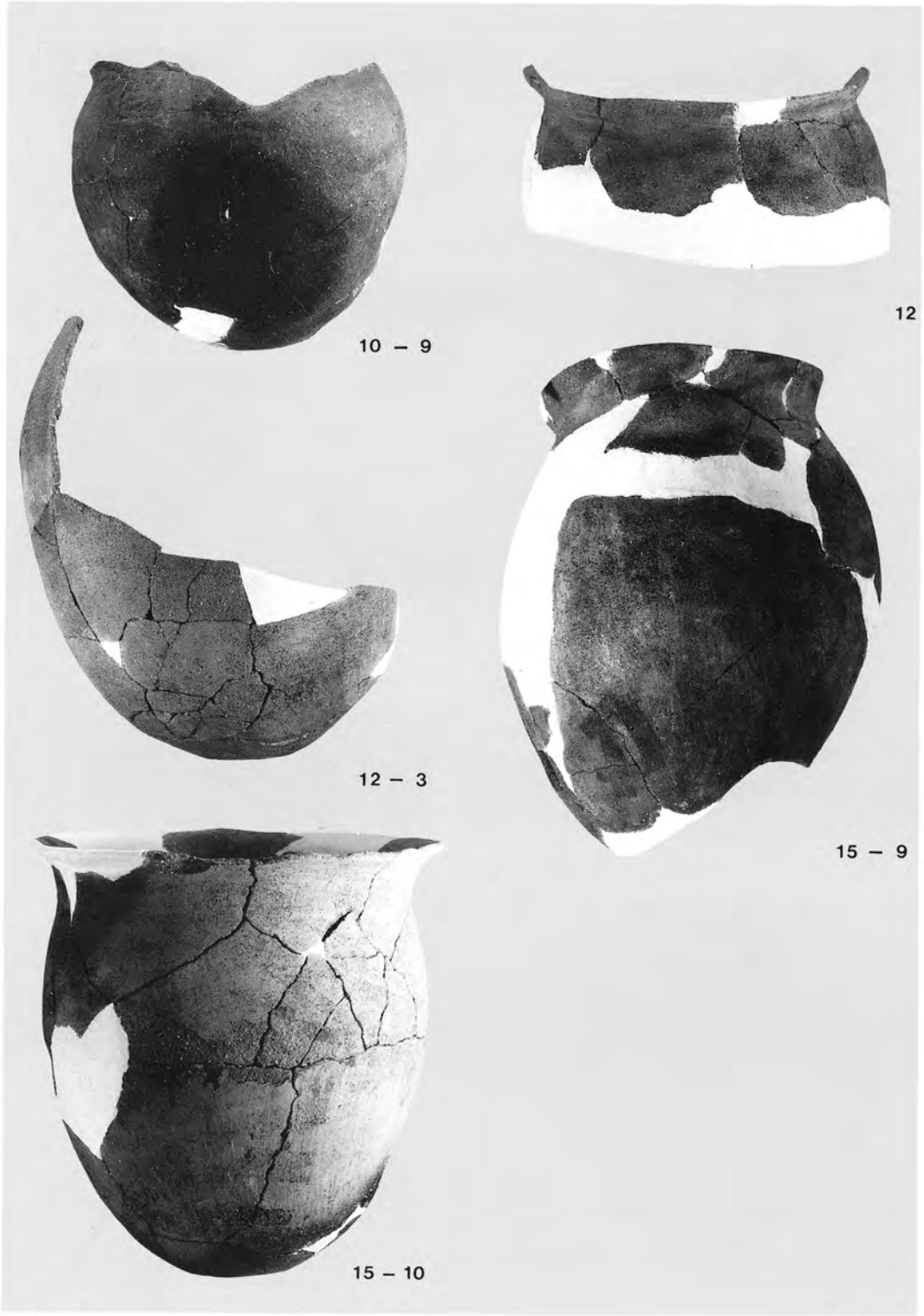


出土遺物(6)

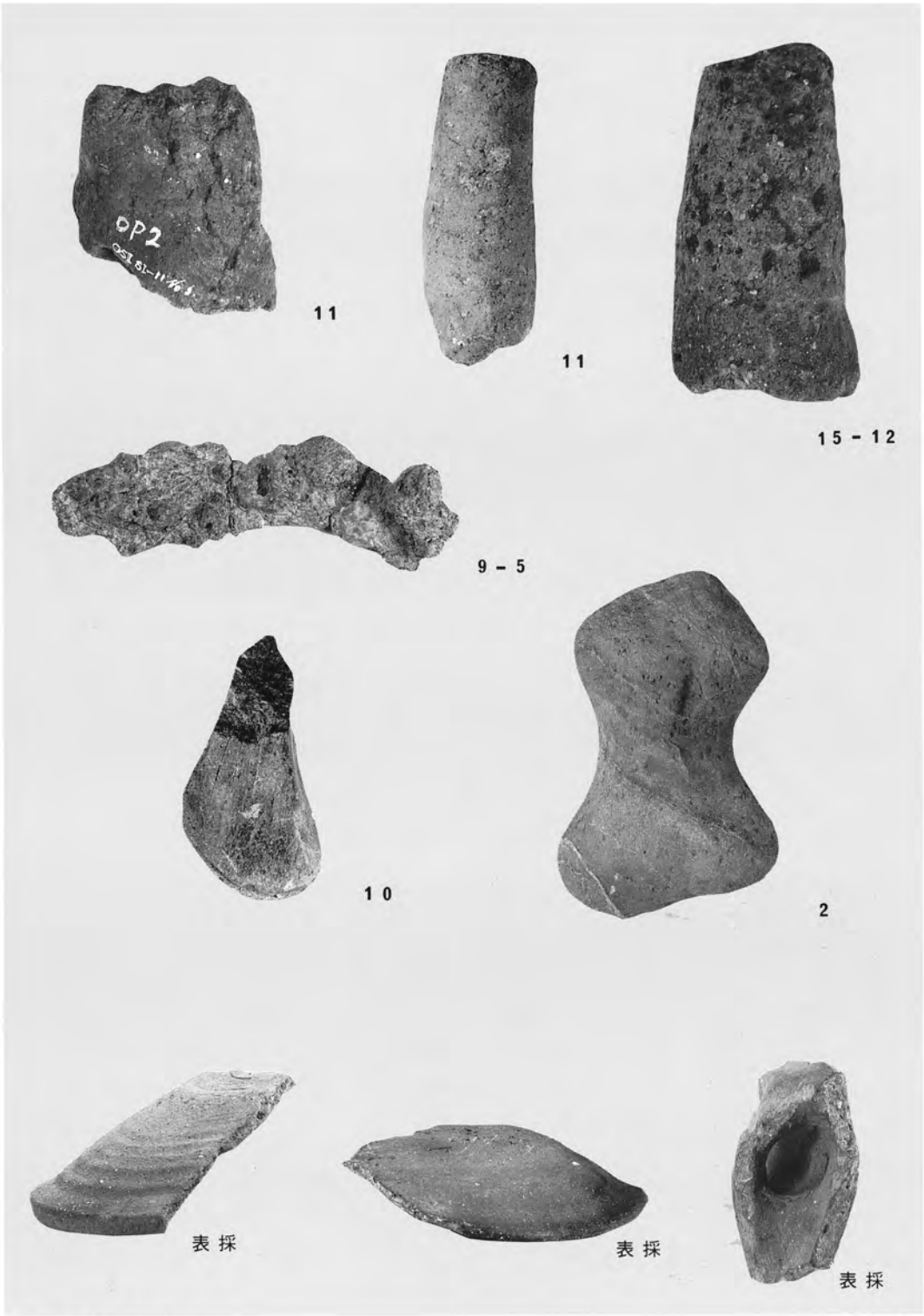
S＝1/3
(5−13・16 1/2)

出 土 遺 物 (7)

S＝1/2 6−11, 6, 7−7, 7
S＝1/3 5−15, 6−9, 7−6, 10−10, 10−8



出土遺物(8)　　S=1/3



出 土 遺 物 (9)

S＝1/2

茨城県教育財団文化財調査報告第54集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整
理事業地内埋蔵文化財調査報告書(I)

柴崎遺跡 I・II-1区

平成元年９月25日　印刷
平成元年９月30日　発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町３丁目４番57号　TEL 0292-25-6587

印刷　富士オフセット印刷株式会社
水戸市根本３丁目1534－２　TEL 0292-31-4241